

Lv. 100 チンポ

早見 彼方

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

織斑一夏はある日、最強のチンポを手に入れた。

目次

暴走の始まり	1
汚れた姉	12
抑制	19
淫らに乱れる幼馴染	28
異変	35
英国淑女との和平交渉	47
性戦の狼煙	55
姉と訓練	66
奇襲	72
券売機	80
身体検査	87
揉み比べ	94
パイズリ授業	102
種付け授業	109
処女食い	116
正気な操り人形	123
天国か地獄か	132
天国編	
幸せな敗北	139
地獄編	
抵抗	147
嵐の前の静けさ	153
残酷な現実	158

無情	170
闇	177
四面楚歌	183
レイプ	190
泥沼	198
天才科学者vsLv.1000チンポ	210
捕食者	219
兎の悪戯	232
敗北	238
兎狩り	246
希望の光	256
絶望の光	262
終わらない地獄	273
四人娘との朝	283
予期せぬ再会	289
人妻の口で	295
完食	302
日常に潜む悪意	310
プールより女体	324
地獄編I F：誤認識バトル前編	334
女教師のWパイズリ	340
地獄編I F：誤認識バトル後編	347
クロスオーバー①	366
仏日英	375
芽吹き	381

覚醒	475
成長	469
謎	464
甘い教育	455
クロスオーバー④前編	450
クロスオーバー③後編	444
クロスオーバー③前編	439
母たち	432
雌豚	426
新しい母	421
母との交わり	416
少年	411
転機	404
クロスオーバー②後編	397
クロスオーバー②前編	390

暴走の始まり

午前五時。四月上旬ということもあって、外はまだ薄暗い。

アイエス
IS 学園一年一組、織斑おりむらいちか一夏。昨日、学園に入学して学生寮生活を始めた彼は、二日目の朝にしてルームメイトの少女に欲望の魔の手を伸ばしてしまった。

「ごめんっ、箒ほうき！ 本当にごめんっ……！」

一夏は普段の温厚そうな顔に激しい焦りと動揺を浮かべ、謝罪をしながら全裸で腰を振る。一夏の両手は一夏に背を向けた少女の両腕を強く握り締め、陰毛の生えた股間は少女の柔らかく大きな尻に何度も押しつけられる。

一夏が腰を前後に動かすと、先ほどまで処女だった少女の膣内から凶悪な代物が入り出す。今までの人生で一夏が見たこともないような、極太で血管の浮き出た肉の棒。もはや棒というよりかは槍であり、カリ首は高く反り返っている。肉棒の左右にある睾丸はでっぷりと肥えており、大量の精子を生産することに特化しているように見えた。

一夏はその肉棒で少女、篠しのの之の箒のほうきの女体を使っている。一夏自身にもよくわからなかった。体に違和感を覚えて朝早くに目を覚ましたところ、男性器が変貌を遂げていて、それを自覚した途端に強烈な性欲に襲われた。どうにか耐えようとしたがまるで無駄な足掻きであり、幼馴染という理由からか、何故か昨日からルームメイトとなった箒ほうきに襲い掛かったのだ。

昨日六年振りに再会を果たした幼馴染に対して最悪の行動を取ってしまった一夏だが、どういうわけか箒ほうきの様子もおかしい。一夏に襲われた瞬間こそ、「な、何事だっ!？」と驚きの声を上げていたが、一夏の肉棒を見た瞬間に箒ほうきの綺麗な顔立ちは蕩けた。今では長く艶やかな黒髪を揺らし、寝間着の浴衣を乱し、揉み心地の良さそうな大きな胸を震わせている。その胸は箒ほうきの両腕を放した一夏の両手によって驚掴みにされ、変形した。

「あんっ……！」

一夏の両手の指が胸に沈み、力強く握られたことで箒が声を上げた。嬉しそうだ。頬には赤みが差し、綺麗ながらも眉間に皺の酔った普段の表情は完全に解れ、一夏の女として屈している。

「はっ、あっ、い、一夏っ、もつと、私の体を使ってくれっ……！」
「ほ、箒……!？」

嘘偽りのない歓喜に震えた声。それを出した幼馴染の声を聞いて、一夏は衝撃を味わった。多少堅物ではあるが、大和撫子としてどこに出しても恥ずかしくない和風美少女に成長した箒。六年という空白の期間はあるが、それなりに長い時間一夏は箒のを見てきた。いくら一夏が親しい相手だからといって、犯されてここまで一夏を受け入れるのは完全に異常だった。

しかし、異常の原因がわからない。環境が変わったとはいえ、眠りに就くまでに変わったことは特段何もなかったはずだ。

変わったことと言えば、一夏が見ていた夢だろうか。慣れない寮での初めての睡眠だったせいか、妙な夢だった。それは一人の男が事故で命を落とし、神様という存在に会って転生特典なる物を三つ貰って転生をするという夢。その転生特典の一つに、『Lv. 100チンポ』という頭の悪い代物があった。

だが、それはあくまで夢だ。関係ないだろう。

では、どうして朝になって肉棒が成長したのか。成長期？ 突然変異？

考えてもわからない。もしかすると、一夏の現状にも関係しているかもしれない。

一夏がいるこのIS学園は、『インフィニット・ストラトス』という現代において世界最強の兵器について学ぶ教育施設だ。その兵器は女性にしか使うことができず、例外は一夏ただ一人だけ。それが何か関係があるのかもわからない。

本当にわからなかった。それに、今は何かを真面目に考えていられる余裕もなかった。

「箒……箒っ……!」

犯したい。箒という美少女の狭くキツキツの膣内に肉棒を押し通

して擦り合わせ、気持ちよくなりたいたい。箒を道具のように扱って、大量の精液を肉壺に押し込みたい。満足するまで何度も、全て避妊なしの膣内射精を行いたい。

自らの肉体、主に下半身から生じるドス黒い欲望に、一夏は段々と囚われていった。

一夏の表情に笑みが浮かぶ。それは、箒という美しい少女を犯すことへの喜び。犬の交尾のような格好で箒を犯し、母性に満ち溢れた胸を道具のように無遠慮に握り締める。柔らかく、体温と心臓の鼓動が伝わってくる胸を手の平いっぱい感じ、一夏の興奮度合いがさらに増していく。

「うっ、あっ、はっ……!」

気がつけば、一夏は夢中になって腰を振っていた。箒の背後から覆い被さり、胸を操縦桿に見立てて握る。一突き一突きすることに大きく尻を持ち上げ、一回の突きで箒の膣口から子宮口までの道を肉棒が制圧する。

子宮口に龟头が押しつけられると、毎回箒はうめき声をあげた。

「あ、へっ、あ、あうっ……!」

だらしない表情。力が入らなくなり、尻を突き出すような体勢で上体だけをベッドの上に倒す。恋人のセックスではなく、完全に発情した野生動物の交尾だ。誰も二人を止めることはできない。

一夏の股間と箒の尻が激しく触れ合い、パンツ、パンツ、と乾いた音が立て続けに響く。音には箒の膣内を掻き回すぐちゅぐちゅという音も混ざる。学生達が過ごす寮内ではおよそ聞くことのできない音だろう。寮の壁が防音に優れていなければ、今頃両隣の部屋で寝ている生徒から苦情が来ているに違いない。

「箒、気持ちいいッ、あっ、やばっ……!」

「あっ、すっごっ、ひっ、あ、はっ……!」

数十回目の腰振りで一夏の全身が震え、変化が現れる。それまでも激しい腰振りだったが苛烈さを増し、今ではズパンツ、ズパンツと肌の強い接触音が室内に響きわたり、それを生み出す一夏の肉棒は、我が物顔で箒の膣内を苛め抜いていた。

一夏はそろそろ限界を迎えようとしていた。肉棒が膨らみ、下腹部から熱い何かがこみ上げようとしている。それを理性で抑えようとするも強い欲望の前では意味もなく、体が準備を整えてしまった。

射精準備完了。

それを自覚したとき、一夏はもう手遅れだと悟った。

今の自分にはこの欲望に抗えるだけの精神力はない。今の一夏の脳内に浮かんでいるのは、一夏の精液を受け止める筈の姿しかなかった。現在、もつとも身近にいて魅力的な性欲のはけ口。この女を使って性欲処理をすべきだと、一夏の心が方針を決定してしまう。理性はそれに屈し、黒い欲望が体外へと表出する。

ニヤリ、という一夏を知る者ならば信じがたい邪悪な笑みを浮かべた一夏。

その直後、亀頭が膣内から抜けきらない程度に大きく腰を引いた。

そして、筈の胸をまた強く握り直し、体勢を整えた一夏は。

「孕めッ……!!」

一気に腰を前に突き出し、強すぎる突きを筈の膣内とその最奥にある子宮に放った。

「かはっ……!?!」

体内から子宮へと攻撃を受けた筈は、焦点の合わない目付きになって背を軽く仰け反らせた。開いた口からは息が漏れ、唾液に濡れた舌が口から伸びる。それなのに、表情はどこか笑っているように見えた。

子宮口と亀頭の完全密着。それが成された直後、射精は始まった。

ぶびゆるるるっ、どびゅびゅぶっ、びゆるるる、どびゅーっ、ぶびゅっ、どびゅっ。

濃すぎる白濁の精液が筈の子宮に入り込む。子宮内は瞬く間に白一色に染まり、さらに濃度が上がっていく。一夏の精液を味わっていない部分などなくなってしまい、一夏の欲望を受け止め、一夏の子どもを孕むための袋に変えられてしまう。太い肉竿で膣内を支配し、子宮口は亀頭によって塞がれている。逃げ場はない。

「うあっ、おおっ、うっ……!」

尋常ではない快樂に一夏は翻弄される。

「一夏の、精液、あ、ははっ……」

箒が笑う。達したように体を小刻み震わせ、シーツを涎で汚す。両手は弱々しくシーツを握っている。力が入らないようだ。一夏の攻めによってか弱い少女となり、今では逞しい一夏の精液を受け止め続ける肉袋に成り下がっていた。

長い長い射精。その間に放った精液は全て箒の子宮に置いてきた。

その事実を、射精によって弱まった欲望から顔を覗かせた一夏の理性が、認識した。

「お、俺は、何を……」

一夏は青ざめた表情で、力なく後ろに倒れてベッドに尻餅をついた。ぬぶんつ、と勢いよく箒の膣内から肉棒が抜けた。尻を突き上げた箒の膣内からは一夏が出しに出した濃厚精液ミルクがどろどろと噴き出し、シーツの上に落ちる。

高校生には卑猥すぎる光景。それを見たことで、また欲望が増幅する。

「駄目だ……!」

一夏は頭を両手で抱え、唇を噛み締める。痛みで誤魔化そうとする。

だが、その抵抗を邪魔する者が一人、一夏の前に現れた。

「一夏……。今日から私は、お前とお前の陰茎、いやチンポの性奴隷だ」

「なっ……!?!」

殆どはだけていた浴衣を脱ぎ、一夏の方を向き直った箒は、土下座をした。全裸姿の綺麗な土下座だ。それを目にして一夏は狼狽し、危険な空気を察して後ろ手でベッドの隅へと後退しようとする。

その挙動は、上げられた箒の顔を見た瞬間に停止した。

「一夏。私を使ってくれ。一夏のチンポで、私の人生を食い潰してくれ」

欲望に濡れた女の表情。正面に映る一夏へと確かな愛情を向けている。

恋人ではなく、体だけの関係。そんなふしだらな関係を自ら許容できる女ではなかったはずだ。それが、たったの一回の性行為でこの有り様。人格すらも従えてしまうほどの快楽を味わったのだろう。

それを成したのは、一夏の股間でまだそびえ立つ極太の肉棒。

やがて、一夏の傍へ近づくと、一夏は表情を驚愕に染め、身動きが取れずにいた。

「ガチガチのチンポだな。逞しくて素敵だぞ」

「や、やめてくれ、箒」

肉棒に頬擦りする箒。ぷにぷにの頬が硬い肉棒に擦れる心地よさが一夏を襲う。一夏は拒む態度を見せるが、本気ではない。本気ならば箒を引き剥がすことは容易いはずだ。それをしないのは望んでいるからだ。

「こんな素晴らしい物を、私一人で占有するわけにはいかない。一夏、もっと沢山の女を味わいたくはないか？ クラスメイト全員。いや、学校中の女の胎に、お前の子どもを育てさせたくはないか？ お前の優秀な遺伝子で、女を支配するんだ」

国王から褒美を下賜される平民のように、一夏の睾丸を下から両手で掬った箒。

「金玉の精液を、女たちの子宮に放つんだ。きつと気持ちいいぞ。好き勝手に女の体を使って、無責任な種付け。興奮しないか？ するだろう？ 一夏はきつと、それが許された人間なんだ。私にはわかる」
箒は一夏へと顔を近づけ、一夏の唇を正面から堂々と奪う。

「んっ……」

唇が柔らかい。次いで、温かく動き回る舌が口内に侵入する。どうすればよいのかと困惑する一夏の口内を丁寧に味わう箒は、何度も一夏の舌と舌同士の手を交わした後、唇を離れた。

唾液の糸が二人の唇の間に伸びて、重力に負けて弛んでから下に落ちた。

「私の処女も、ファーストキスも一夏の物だ。一夏になら、何でもあげられる」

うっとり頬を赤く染め、箒は笑う。笑いながら、また指を突いて

土下座をした。

「だから、私を一夏の性奴隷にしてくれ」

誇りなどありはしない。情けなく頭を垂れ、主人と認めたと一夏に忠誠を誓う女。

昨日までの箒はもう存在しない。いるのは、一夏の精液を子宮に抱えながら全裸で土下座をする長い黒髪の美少女。女としては上質で、一夏の精液を沢山搾り取ってくれるだろう存在。

変わってしまった幼馴染を前にして、一夏はごくりと息を呑んだ。やがて、一夏の口から漏れたのは、「わかった……」という弱々しい声だった。

顔を上げた箒は、まるで初恋が実った純粹無垢な少女のような微笑みを浮かべた。

「それでは、忠誠の証だ……」

箒は一夏の亀頭に向かって、何度も口づけを放った。それを、体を震わせながら見ていた一夏は、箒の頭を撫でる。綺麗な黒髪は手の平で楽しめるほどにさらさらとしている。シャンプーのいい香りが漂い、一夏の心を解す。

それでも、一夏の表情は強張り続けていた。

とんでもないことをしてしまった。自覚しておきながら逆らえない欲望。

入学二日目の朝時点で、一夏の人生は大きな進路変更を余儀なくされた。女を墮とすことに特化した肉棒と孕ませることに特化した睾丸。これを股間に備えたまま、果たして女の園たるIS学園で平穏な生活を送れるのだろうか。

一夏は恐怖した。しかし、心のどこかで期待感も抱いていた。

一夏も男の子なのだ。可愛い女や綺麗な女を自由に扱えて嬉しいとも思う。それが清く正しい関係ならばここまで抵抗感を抱かないだろう。だが、恐らく待ち受けているのは欲望によってのみ成り立つ関係。人の本心や愛情はそこに含まれているのだろうか。それは正しいことなのだろうか。

間違っているとはつきり断言しつつも、一夏は受け入れてしまっ

た。

「一夏、頂くぞ?。」

一夏の見ている前で、箒が一夏の反り返った肉棒を啜える。亀頭にぬるりとした感触が伝わり、箒の温かな口内に包まれる。体がその感覚に反応して背が軽く反ってしまう。ノーハンドで巨大な肉棒を啜え、一夏に眼差しを向け続ける箒。

じゅぷじゅぷつ、と、箒の口が音を立てながら一夏の肉棒を口内で擦っていく。

自分に忠実な女を前に、一夏はまた我慢ができなくなってきた。箒の長い髪を両手で乱暴に掴み、箒の頭を上下に揺らす。恋人の関係ではない。主人と性奴隷の関係だ。だから、優しさなど必要ない。

「こんなことして、いいのか……?。」

一夏は弱々しい少年の顔で小さく呟きながら、箒に肉棒を奉仕させる。

一夏の肉棒を頬張って、上下に頭を動かす箒。一夏の両手によって黒髪が握られたことで、ツインテールのように見える。その新鮮な髪型の箒に口だけで肉棒を可愛がられ、興奮は上昇。唾液の滑りでフェラの動きも滑らかになったこともあり、一夏は箒に肉棒の根元までしゃぶらせようと頭を股間に押しつけた。

「ぐ、むっ!。」

どうにか根元まで押し込むことができ、一夏の陰毛の茂みに箒の口元が埋まる。

「う、ぐっ……!。お、えっ……!。」

目尻に涙を溜めて苦しそうに瞳を揺らし、目を見開く箒。肉棒で窒息死しそうな幼馴染。黒い感情がかま首をもたげる。ゾワゾワとした感覚が腰の後ろから股間にかけて走ったときには、強烈な快楽に屈して一夏はまた射精していた。

びゅーっ、びゅるるるっ、どびゅっ、ごぶっ、どくっ、どびゅっ、びゅくっ、びゅる。

「んー!。」

精液受け止め係の箒。先ほどよりも大きく瞠目し、ごくっ、ごくっ

と喉を鳴らす。

箒が精液を飲んでいゝる。一夏を見つめながら、嫌がる素振りもなく胃に収めていく。

「ぐくっ、ぐきゅっ、んっ、んくっ、ぐくっ……」

飲まなければならぬ。その使命を担っているかのように、箒は出される精液を飲み続けた。精液の一滴すらも口から零さないようにと、一生懸命だった。その性奴隷に対して一夏は、ただ茫然としていた。

こんなに気持ちいいことがあつただなんて、知らなかつた。

今まで女性関係のなかつた一夏にとって初めての性行為と、その後のフェラチオ。この快感を学生時代に味わつてしまうことの恐怖と、味わえていない同年代に対する優越感を抱く。

そして、性奴隷である箒への征服欲が満たされていく。こんな綺麗な少女にフェラチオをさせて精液を飲ませることのできる高校生は、果たして全国にどれほどの数がいるのだろうか。

俺は選ばれたのではないか？

一夏の心に考えが過ぎるが、一夏は慌てて首を左右に振つた。

今の自分の行動を正当化しては駄目だ。これはいけないことなんだ。たとえ抗うことはできなくても、行いを正しいものと認識しては駄目だ。一度認識したが最後、どこまでも堕ちていく。そんな気がしてならなかつた。

俺の心は、完全には屈しない。

箒の体を味わつておいて何をと思われるかもしれないが、そこだけは譲れない一夏だった。

射精の勢いが弱まり、完全に射精が終わると箒はゆっくりと口を肉棒から離し始めた。口に精液が溜まっているのか、ゆっくりと竿を唇で擦るようにして頭を上を持ち上げる。

そして、箒の口が亀頭の周りを擦りながら、ちゅぽんつと亀頭を解放した。

「あ……」

口を軽く膨らませた箒。開かれた口に溜まる精液。それを見せつ

けられた後、箒によって呑みくだされていく。卑猥な光景だ。一夏の確固たる決意はそれだけで大きく揺らぎ始める。

だが、それでも決定打ではない。一夏は往生際が悪く心の抵抗を示す。

箒はアイスクャンディーを舐めるように肉棒の裏筋に舌を這わせ、辜丸を握る。

「ごめん、箒……」

そんな箒へ謝罪する一夏。自分が情けなくて、表情は悔しさいっぱいに広がっていた。

「どうして謝る。一夏？」

箒は舐めるのを止めて、肉棒を手で優しく扱く。扱きながら口を耳に寄せた。

「お前は何をしてもいいんだ。それで咎められるのならば、それはこの世界が悪い」

耳元で、吐息を多く含んだ声で囁かれる。耳を犯されるような快感に一夏の目が少しだけ蕩ける。肉棒を扱かれる気持ちよさもあつて、また心が乱される。それでも抵抗しようとする一夏の本心を、箒は知っているのかいないのか、箒は耳を廻り続ける。

「金玉に溜まった精液を、もつと出していいんだぞ。次は何がしたい？ また子宮に注ぎたいか？ それとも、口か？ 手か？ 別の女でもいいぞ？ お前の素晴らしさを早く他の女にも知ってもらいたいんだ。私の、愛する男の素晴らしさを、な」

囁かれ、扱かれ、ビクビクと震える肉棒。

その後も囁き手コキは続き、一夏は微睡にも似た快樂の中で射精した。箒の手やベッドを汚す精液。出しても出しても濃さや量は変わらない。味も美味なようで、箒は手に付いたぶるぶるの精液を「いただきます」と言ってから味わっていた。

朝からこれでは本当にまずい。もはや、自分一人ではどうにもならない。

そうなったとき、一夏が頼れるのは今のところ一人だけ。一夏の九歳年上の姉であり、IS学園一年一組の担任でもある織斑千冬だ。情

けないことだが彼女に自分の体の異常と罪を話し、何か対策はないかを聞いてみよう。本当は姉にこんなことを聞きたくはないが、気軽に相談に乗ってくれるような同性の同世代はいても、年上はいない。それなら、姉に頼むしかない。

一夏は後の予定を決め、箒に深く謝罪してから部屋のシャワー室に駆け込んだ。内側から鍵を閉め、シャワーの水音で声を誤魔化しながら自慰を始める。想像するネタは自然と箒になった。箒と繋がった時の感覚、射精の快感、箒のフェラ顔。先ほど見た刺激的な光景は自慰ネタに相応しく、一夏は何度も射精に導かれた。

無駄撃ちとなった精液が水に流され、排水されていく。

時間をかけて五発。尋常ではない量の精液が解き放たれた。

それでも、一夏の肉棒は元気だった。肉棒はズツシリとまだ重い。

「なんで……」

いったいこの体はどうしてしまったんだ。一夏は強化された肉棒へと視線を落とし、小さくため息を吐いた。

汚れた姉

一夏には、千冬という九歳離れた姉がいる。千冬は姉ではあったが、両親のいない一夏にとっては親のような存在でもあった。一夏が悪さをすれば厳しく叱りつけ、一夏に身の危険が迫れば身を挺して守ってくれた。その代わりに千冬は私生活ではだらしないうところがあり、その点は一夏が補った。千冬に恩返しをしようと、家事の全てを引き受け、妻のように千冬を支えたのだ。

そうして二人は家族として一緒の時間を過ごしてきた。

二人の関係に家族の愛はあつただろうが、男女としての愛はなかったはずだった。

昨日までは。

「ずぢゆるるっ、ぶちゅっ、ぢゆるっ、ぐちゅっ、ぬちゅっ、ぢゆるるっ」

「う、ああっ……」

一夏は呻いた。一夏の肉棒を啜えた女のバキュームフェラによって、体を震わせる。その場でよろめきそうになるが、尻を女の両手で抱きしめられているため、足場はその場に固定されていた。

教職員寮。海を埋め立てた広大な土地に広がるIS学園の敷地内にある建物。外観は高級ホテルもかくやというほどの立派な佇まい。木々に囲まれていて、自然を感じながら穏やかに日々を送ることができるだろう雰囲気。段々と明るくなり始めた空に覆われたその寮内はまだ静かだ。

その寮の一室に、窓に背を向ける形で一夏は立っていた。目の前には、姉である千冬。

「ぐぶうっ、ぢゅぶっ、ずぢゅぢゅっ、ぐちゅぶっ、ぢゅぶぶっ、ぐちゅっ、ぐぶっ」

一夏はその千冬に、凶悪な外見の肉棒を愛されていた。

「ああっ……」

一夏は着ていたラフな私服のズボンを下ろされたまま、ベッドに腰かける千冬の口淫で肉棒を襲われ続ける。千冬は解いた長い黒髪を

揺らし、涼しげに整った顔を緩ませ、弟の肉棒を啞え込みながらその弟の顔を見上げている。

そこには、本人の心境を凶らずとも容易に察することのできる愛情があった。

「千冬、姉っ……くうっ……」

一夏は増幅した凄まじい快樂の波状攻撃に耐え切れず、達してしまつた。

びゅーっ、びゅーっ、びゆるっ、ぶびゅっ、どぷっ、どびゅっ、どくっ。

「んっ……。ごきゅっ、ごくっ、ごくごくっ、ごくっ、ごくっ……」

待つていましてと言わんばかりに、一夏が放つた精液を飲み込む千冬。とても美味しそうだ。それを一夏は体を震わせながら見下ろしていた。普段の凜々しい雰囲気はどこにいったのか、男へと媚びる牝の表情。クールビューティーという表現が似つかわしい人物とは程遠く、高級娼婦のように淫靡な色香を漂わせている。

「ぶはっ……。一夏、美味かつたぞ……」

千冬は愛し終えた一夏の肉棒を口から解放し、まだ勃起した肉棒と睾丸を顔の上に乗せている。そして、その肉棒越しに一夏を見続けた。その眼差しには、自分を魅了し、たやすく女に墮としてしまった男に対する畏敬の念が込められているようだった。

一夏は後悔した。十数分前の自分の愚行を責めた。

なぜ、朝起きて肉棒が変貌を遂げたという異常事態を、千冬へ相談してしまつたのか。ルームメイトの箒からの誘惑を振り切つて学生寮の部屋を飛び出し、教職員寮の千冬の部屋へと向かつてしまつたのか。

『朝から何のようだ。馬鹿者』

という部屋のインターホン越しの不機嫌そうな声を聞いたときに、引き返せばよかつた。

『助けてくれ、千冬姉……』

しかし、後から悔いることになつたとしても、そのときは仕方がなかつた。一夏にとって一番頼りになる存在は千冬以外にいなかった。

女性に下半身の相談をするのは、と躊躇う気持ちも湧かないほどに一夏の心は追い詰められていたのだ。

一夏の声を聞き、施錠の開いた扉。一夏は寮の部屋に置いてきた箒が追ってきていないことを確認してから部屋の扉を開け、千冬と同じ空間に足を踏み入れた。

『待て、一夏。これは、何の匂いだ？ 香水？ 違うな、これは……』

一夏を出迎え、首を傾げた千冬を見た時に気がつけばよかった。しかし、それも後の祭りだ。一夏はジャージという色気のない恰好をした千冬に連れられて部屋の奥へと行き、ベッドにあぐらを掻いて座り込んだ千冬の前に立たされた。

『それなりの事情があるようだが、いったい何事だ？』

一夏の表情から事の深刻さを悟った様子の千冬。その理知的で美しい顔を見て一夏はほっと安堵の息を吐きつつ、事情の説明をした。今日の朝から起きた出来事を、何の脚色もせず、詳細に。

最初は、「何を言っているんだ、この愚か者は」といった呆れた様子で見ている千冬。

だが、その表情は徐々に変化していった。酒を摂取した時のように赤く、ぼうつとし始めたのだ。目線は一夏の両手で隠すように押さえられた股間へと向けられ、時折喉が唾を呑みくだして音を立てていた。

『……千冬、姉？』

一夏は様子のおかしくなった千冬を見て、まさかと思った。

精神力の塊のような千冬。一夏の知る限り千冬ほど強靱な心を持った女性はおらず、千冬ならば大丈夫だと高を括っていた。だが、一夏の見通しは甘すぎた。自分の身に起きた異常は想像を絶するものであり、千冬という英傑であっても対処のしようがないものだということを。

『ち、千冬姉っ!?! そ、そんなっ……!』

一夏は、千冬に捕らえられた。ズボンを脱がされ、股間に顔を埋められ、臭いを嗅がれた。肉棒へと何度も顔を擦りつけられ、容易く勃起した肉棒を千冬の口で迎えられ、唾液に満ちた口内で舌と粘膜の歓

迎を受けた。

その後、千冬のバキュームフェラが始まり、精液の一気飲みに至ったわけだった。

一夏は事の経緯を信じたくなかった。自分はまだ夢を見ているのだと思いたかった。

だが、夢ではない。異常な快感が、一夏の意識を覚醒させ続けている。

「ちゅぽっ、ちゅぷっ、ちゅぽんっ！」

千冬は、一夏の憧れである姉は、一夏のずっしりとした睾丸を口の中に啜えて遊んでいた。肉棒が汚い物だと微塵も思っていない様子で、手や顔で肉棒を愛しそうに触りながら睾丸に愛を注ぎ続けている。

「一夏。お前の一物がこれほど逞しいとは思わなかった」

千冬は鼻先を肉棒に当てて、すーっ、と息を吸った。そして、甘いため息を一つ。

「ああっ、何ていい匂いなんだ……」

恍惚の表情を浮かべる千冬。一夏はそれを見て、完全に絶望の淵に立たされた。

千冬が堕ちた。あの、千冬がこんなにも簡単に。自分が汚してしまった。後悔の念は一夏の胸中をぐるぐると渦巻き続け、濃度を高めていく。決して消えてなくならず、一夏の良心をじわじわと攻め立てる。

もう何もかも遅すぎた。

眩暈にも似た恐怖を感じる中、一夏は千冬によってベッドへ引つ張られた。精神的な負担によって抵抗する気力もなく、一夏の上に千冬が覆い被さる。これから恋人と愛し合うように期待と欲情に染まった顔で見下ろされ、千冬がジャージを脱いでいく。

露わになった黒い下着。モデルのように均整の取れた肉体が一夏の視線を釘付けにする。経験の浅い男が見れば即勃起間違いないの肉体。相手が姉とはいえ、経験で言えばまだ素人の一夏は興奮を覚えてしまった。

黒いブラジャーとショーツだけを纏った官能的な女体。胸の柔らかそうな膨らみ、腰の括れ。絶妙な肉づきが肉欲をそそる。いつか、一夏の知らない男に愛されるのだろうと、一夏が密かにもやもやとした感情を抱いていた肉体が目の前にある。

「一夏。私は、お前が欲しい……」

その肉体の持ち主は、一夏を求めた。

「お前はどうか？ 私を受け入れてくれるか？」

一夏は選択権を委ねられた。

その選択で状況が変わったのかはわからない。選択することができず、ただ魅力的な姉の姿を見て息を荒らげることしかできなかった一夏。無回答を肯定と見なしたのか、一夏の股間に移動して尻を向けた千冬。ショーツをずらし、露わになった千冬の陰裂が一夏の肉棒を飲み込んでいった。

そして、結合した。それが、無回答の結果だった。

ズンツ、と黒く扇情的な下着に覆われた楕円形の尻が一夏の股間に乗った。

軽い重みと肌の温もり。肉棒を根元から先端まで余さずギチギチと締めつけ、温かい熱で支配した膣内。愛液とも先走り液とも違う温い感触が肉棒を伝い、赤い血が一夏の下腹部に垂れ落ちた。

一度にいろいろな刺激に襲われ、一夏は何もできなかった。

気持ちいい。ただ、それだけを思いながら目の前の光景を見つめていた。

千冬の尻が股間で揺れる。千冬は前傾姿勢となっているようで、一夏からは千冬の尻しか見えなかった。弟の肉棒を膣で美味しそうに味わい、上下に運動を続ける淫靡な尻。箒のときとは違い、一方的に搾取される感覚が新鮮で、一夏は容易く果てた。

どびゅーっ、ぶびゅーっ、びゆるるっ、どくっ、どびゅっ、びゅぶぶぶっ。

姉の子宮に大量射精。罪悪感に襲われながら、背徳感を味わった。止まらない。たっぷりと出してしまった。千冬の子宮は弟ザーメンで真っ白になっていた。それを想像し、一夏はさらに射精した。

たんっ、たんっ、と小気味いい音を立てて千冬の尻は元気に踊る。いつの間にか、千冬の尻に一夏の手が置かれていた。殆ど無意識だった。柔らかくも弾力のある尻の感触を楽しんでしまっている。そして気がつくとき、千冬の尻を覆う黒いショーツはぼろぼろになって乱れていて、尻にほんのりと赤い手の平の跡があつた。ジーンと手の平に痒みを伴う痛みを感じたことから、自分が千冬の尻を叩いたのだと知った。

自分がどンドン、ケダモノになっていくようだった。

千冬とセックスしていた位置が変わり、一夏はマジックペンを手にしていた。自分が、千冬の部屋にある机の引き出しを漁って取ってきたのだ。まるで他人事のようなだが、今の一夏には自分の行動が客観的に映っていた。欲望に突き動かされた体とほんの少しの良心をまだしぶとく庇い続ける心が、互いを否定し、別々に切り離していた。

正の字が一つ書かれた千冬の尻。今もなお、揺れている。

パンツ、パンツ、パンツ。乾いた大きな音が響く。

ぶびゆるるるっ、びゆるるるっ、どびゅーっ、びゅーっ、どぷっ、ぶびゅっ、どくっ。

気持ちいい。また千冬の膣奥で精を放ってしまった。一夏は快楽に溺れながら後悔する。一夏の精液を溜めた子宮を、一夏は想像した。その想像通り、姉弟の遺伝子は姉の子宮の中で結びつこうとしていた。卵に向かって蛇行しながら泳いでいたおたまじやくしの一つが噛みつき、ぶちゅっつと繋がった。

それに気がつかない姉弟は絡み合う。

千冬の尻に、正の字が黒い文字で二つ刻まれた。

ごびゅっ、どびゆるるっ、ぶびゅびゅぶっ、ごびゅっ、ごぼぼっ、どくっ、ぶびゅっ。

射精。マジックペンで横の線が引かれる。『精液便所』という文字が一夏の手で書かれ、卵子に結合した精子の絵が併せて描かれた。『射精し放題』、『一夏専用性欲処理淫乱スター I S』、『受精中』、次々と文字が追記されていく。

どぶらっ、どびゅっ、どくっ、どぶらっ、びゅぶらっ、びゅく、びゆるるっ、

どびゅつ。

「あつ、くうつ、一夏の、子種……！」

「はつ、あつ、うぐつ、んつ、はあつ……！」

一夏は、いつの間にか千冬の長い髪を引つ張り、バックで突いていた。止まらない。体が勝手に動いてしまう。もう、何が正しいのか、とか考える余裕もなかった。睾丸が精子を製造し続け、すぐに千冬の膣内へと供給していく。気が狂いそうな快楽を前に、一夏はセックスをするための機械のような気分になっていた。

室内は情事の臭いに満ちていた。姉弟は絡み続ける。

一夏が正気を取り戻した時には、千冬は精液まみれのベッドでうつ伏せになっていた。全身に淫らな絵や文字が刻まれ、大胆に開かれた股の付け根はどこが淫裂かわからないほどに精液で濡れ、新しい精液をシーツの上にとろとろと吐き出し続けている。

淫らに笑う千冬。自分が汚してしまった姉。ベッドの縁に座ってその姿を見た一夏は、ふらりと背中から倒れてベッドの下に転げ落ちた。

抑制

妖しい紫色が広がる空間に、一夏は立っていた。格好は裸だ。相変わらず股間の一物は怪物だ。見ただけで相手を威圧する太い肉の棒。丸々と膨らんだ睾丸。精液に濡れていない今の姿が珍しいと感じられてしまうほどに、強い精力を感じられた。一夏の手には掛ければ妊娠しにくい女だろうと容易く一夏の子を孕むだろう。

しかし、今の一夏は不思議と性欲を感じなかった。

「どこだ、ここ……」

一夏は足を踏み出し、近くを探る。だが、その空間は延々と広がっているだけだった。

「いったい何が起きたんだ。これは夢か？ いったい、どこまでが夢だ？」

一夏が困惑し始めたのと、背後から声を掛けられたのは同時だった。

「いらっしやい」

「うわっ」

突然の声に驚き、一夏は振り向きながらその場から距離を取った。数メートル先には少女が立っていた。十二、三歳の年頃。黒々とした髪。それが背中まで覆う体はとても華奢で、白いワンピースに覆われていた。まるで人ならざる存在が作り上げたかのように顔は整っていて、柔らかい微笑みがとても愛らしい。

笑みを解いた彼女の眼は、意識が引きずり込まれそうになる魅力に満ちた紫色だった。

「よく来たね。織斑一夏」

「どちら、様ですか？」

一夏には目の前の少女のような知り合いはいない。人目でも見れば覚えているはずだ。それなのに、相手は自分の名前を知っている。テレビで知ったのだろうか。『インフィニット・ストラトス』、通称『IS』を動かせる唯一の男として、一夏は世界的にも有名だ。マスコミだけでなく、知らない人から声を掛けられることも多かった。

「私？ 私は神様」

「か、神？」

「うん。そう」

「へえ、そっか……」

少女の言葉に、一夏は体を感じていた強張りを解いた。俗に言う中二病という奴なのだろうか。一夏にはあまりそう言った思春期特有の経験はなく、中学時代に同級生がその病に罹ったときも生暖かい眼差しを向けていた。老人が、幼い子供を見てほっこりとしている感覚と同じだ。

この少女も同じ。と、思えたのは、その瞬間だけだった。

少女は何の挙動も見せず、瞬きの間に一夏の眼前に移動した。

「うわあっ!?!」

反射的に後方へと飛び退ってしまいそうな一夏だったが、少女の行動がそれを制した。

少女が一夏のボール大の睾丸を掴んだからだ。

「逃げると潰す。騒いでも潰す」

「ひ……」

一夏は寸でのところで声を押し殺し、その場に止まることに成功した。危なかった。少女の手から感じた力と少女の声色は本物で、危うく一夏ちゃんになってしまふところだった。変貌したとはいえ、今まで一緒に生きてきた相棒をこれほど情けなく失うつもりはなかった。身を強張らせ、立ち止まる一夏。

それに対して、少女は手に持った睾丸を弄ぶように弄り、観察していた。

「よく使われているね。製作者冥利に尽きるよ」

「製作者？」

「そう。これは私が作った『L v. 100チンポ』。全ての女を従える代物」

少女が言ったL v. 100チンポという言葉に、一夏は心当たりがあった。

一人の大きな欲望を抱えた男がいた。その男は世界中の美女や美

少女を手に入れるという夢を抱いていたが、志半ばで朽ち果てた。男はその欲望とともにそのまま無に帰すかと思われたが、死後に紫色の部屋で目覚め、神様と名乗ると出会った。

その神様の姿が眼前の少女だったことを、今思い出したのだ。

しかし、それらは夢の出来事だったはずだ。

「私がとある男に与えた、三つの転生特典のうちの一つ」

だが、どうにもこの出来事は夢のように思えない。妙に現実的だった。睾丸を撫でる少女の手の柔らかい感触が心地よく、ムクムクと肉棒が勃起していく。世の男が五体投地で完全敗北を認める立派な生殖器官の逞しい主張だった。

まずい、と思う一夏だったが、今までと何か違うことに気がついた。

一夏の肉棒から見えない何かが溢れ出ていた。人によっては、気だの念だのと思える何かは湯気のように一夏の肉棒ならびに全身から立ち昇り、周囲に拡散していた。

「な、なんだ……」

恐怖を覚えて冷静さを欠く一夏。そこへ、少女の声が掛けられる。

「それは、Lv. 100チンポの特性『フェロモン』。嗅いだ女を虜にする匂いを放つだけでなく、本人の欲望すらも増幅させる。これに完全に抗うことは不可能。どれだけの強者や聖人であって、いつかは堕ちる」

「どうしてそんなものを作ったんだっ！」

一夏はここにきてようやく、製作者への文句の言葉を口にすることができた。

この肉棒のせいで、一人の幼馴染と姉が犠牲になった。もう元の関係に戻ることはできないだろう。これからも一夏を求め続け、一夏の子供を産んでも変わることはなさそうだった。

「暇潰し」

一夏の怒りはなんのその、直球すぎる着飾らない返答に一夏は次の言葉が出てこなかった。

「他の二つの転生特典と違って、Lv. 100チンポには複数の能力が詰まっている。単独で転生特典三つに相当する。しかし、転生特典

の上限は最大で三つ。超過した分は不必要と判断された物から削る必要があった」

少女の語った経緯は、とある男の末路だった。

「そして、削られたのは男という人間そのものだった。一番不要な物と認識された。その結果、転生特典だけが残り、行き場を失ったそれらは一人の少年に宿った。本来、男が略奪を望んでいた肉体の所有者だった」

「それって……」

「そう。織斑一夏」

事の経緯を聞いて、一夏はいつの間にか冷や汗を掻いていた。

知らない場所で知らない男が人智を超えた代物を得て、一夏の肉体を奪おうとしていたのだ。その男の目的は世界中の美女や美少女を手に入れるということらしいから、一夏の肉体を奪った暁には幼馴染の箒と姉の千冬にも当然その魔の手は伸びたことだろう。

他の男に奪われるくらいならば、自分で奪ってよかった。

一夏は否定したが、心のどこかでそう思ってしまった。もう二人は一夏から離れられない。一夏の女だ。あの美貌も胸も尻も、膣も子宮も一夏が好きに汚せる。一夏は二人を好きにできるのだ。

駄目だ。また、俺は……。暗い感情が沸々と湧き上がり、一夏は抑えようとする。それと同時に肉棒を中心として全身から滲み出る何かの勢いは強くなり、周囲の空間を満たした。一夏の興奮具合で匂いの強さは変わるらしい。範囲も途轍もなかった。先の少女の言葉が本当ならば、この範囲にいる女が匂いを嗅ぐとたちまち一夏の虜になってしまうだろう。

このフェロモンを抑える術はあるのだろうか。

「ある」

一夏は口に出していなかったはずだが、少女が睾丸を揉みながら答えた。

「もう何度かL.V. 100チンポを使用したことで、少しは慣れたはず。フェロモンを自覚できたのは成長した証。人の身に余る代物でも、一時的に制御することは可能。完全な制御は成長したところで不

可能だから諦めて」

そう言った後、少女は鞆丸から手を離して一夏から距離を取った。また瞬間移動のような距離の操り方だ。驚きの事実が積み重なって、もはやこの程度では驚かなくなっていた一夏だった。

「フェロモンの範囲や濃度は操ることができる。試してみて」

「試すって」

「意識を集中して想像するだけでいい。体から生じるフェロモンが変化していく様を」

助言を受けた一夏は言われるがまま意識を集中させた。そして、目を瞑って想像する。一夏が前に読んだ漫画で似たような訓練があった。体から生じるエネルギーを消したり体の一部へ極端に移動させたりと、参考になる描写があった。

漫画を読んでいた経験が活きたのか、一夏はフェロモンの操作に成功した。

「や、やった……」

まだ若干残ってはいるが、フェロモンの濃度や範囲は一夏の体表近くに留まっていた。これで女の様子にどう変化が起こるかはわからないが、垂れ流し状態よりかは余程マシだろう。

「おめでとう」

「ああ……」

賛辞の言葉を投げかけられ、一夏は目を開けた。

「あ、あれ？」

周囲を見回す。だが、いたはずの少女はいつの間にか消え去っていた。

どこにいったのだろうか。キョロキョロと辺りを見回す一夏。

『フェロモンの操作はある程度可能。だけど、完全に操ることはできない。定期的に暴走する。暴走した時は手近な女で発散すればいい。沢山出せば、また少しの間は自由に暮らせる』

そこへ少女の声が入ってきた。その声は一夏の意識に深く浸透し、頭を中からかき乱すような嫌悪感を与えた。一夏は頭を押さえ、ふらつく体をどうにもできずに地に尻餅をついた。

少女の楽しそうな声が、続いた。

『あの愚物以上に、君には期待している。だから、簡単に壊れては駄目。もう少し足掻いてみせてほしい』

そして、押し殺したような小さな笑い声。神と呼ぶには、あまりにも邪悪すぎた。

それを聞きながら、一夏の意識は暗い闇の底へと引きずり込まれていった。

「一夏」

誰かの声が聞こえた。馴染みのある、落ち着いた声だ。その声の主
に手を引つ張られるように、一夏の意識もどこかへと浮上していく。
鈍っていた感覚は元に戻り、一夏を残酷な現実へと引き戻した。

「そろそろ起きろ、一夏」

胸を揺らし、弟の上で腰を振る千冬の姿だった。気絶した様子から
再起して、一夏を再び襲ったようだ。一夏の両手を恋人繋ぎで握つ
て、極太の肉棒を膣壁でガシガシと扱き続けている。もう何度出した
のだろうか。千冬の子宮は一夏専用の精液タンクになっているはず
だ。それでも行為をやめないのは、一夏のフェロモンのせいだろう。

さっきのは、夢じゃない。一夏はそう実感できた。

一夏は妖しげな空間で学んだことを実践してみた。

フェロモンの制御。部屋中に広がっていたそれを体表に押し止め
るまで狭くし、濃度も薄くしていく。その効果は靨面で、一夏が感じ
ていた欲望の色が少し薄まった。一夏の上で淫乱ダンスを繰り広げ
ていた千冬の動きが遅くなり、やがて止まった。

「……一夏。今、いったい何をした？」

千冬は多少の冷静さを取り戻し、戸惑った様子で一夏に問う。

しかし、一夏は答えない。体の上の千冬を持ち上げて、膣内から肉
棒を引き抜く。

「あつ……」

という艶のある千冬の声。直後、肉棒という栓が抜けた膣内から精
液が大量に溢れ出た。それらはシーツをさらに白く汚し、濃厚な臭い
を放っている。

「ごめん、千冬姉」

一夏はすぐに、ベッドの端で土下座をした。初めての全裸土下座だ。

「謝って済むことではないけど、ごめん。本当に、ごめんなさい」

謝罪をする一夏。

それを見せられた千冬は少し困った様子でため息を吐いた。

「別にお前が悪いわけじゃない。襲ったのは私の方だ。頭を上げろ」

「で、でも……」

「いいからさっさとしろ」

千冬に催促され、一夏は頭を上げる。そこには、胸と陰部を両手で隠して割座をする千冬がいた。全身は精液や淫語で汚れ、一夏の欲望がまたカマ首をもたげそうになる。それを必死に抑え込んだ。今の状態ではどうにか理性も働くようだ。

「一夏。私とお前が繋がったのは事実だ」

「うん……」

「もしかしたら、お前の子を孕むかもしれない」

「……うん。責任は取る。千冬姉と箒の二人を、大切にする」

「学生の身で簡単に言うな」

千冬は一夏が懸命に紡いだ言葉を聞いてまたため息を吐いた。体を起こしてベッドから降りるとシャワー室へと向かった。

「千冬姉？」

一夏は、そんな千冬の綺麗な後姿へと声を掛けた。

「……しばらくの間、お前達の面倒は私が見る」

千冬はそう言っただけで脱衣所へ続く扉の取っ手に手を掛けた。

「お前が私達を養えるようになったとき、また返事を聞かせろ。今はもう寮に戻れ。シーツも洗わなくていい。私がつかりと処理しておくから、むしろ下手に触ってくれるなよっ。」

それだけ言うと、千冬は扉を開き、脱衣所へと姿を消した。

残された一夏は、ティッシュで体の汚れを簡単に拭いた後、服を着て部屋を後にした。

「……失礼しました」

相談事が終わった帰りを装って、教職員寮を後にする。道中ですれ違った教師が足を止めて不思議そうに一夏の背中を見守っていたが、襲われることはなかった。フェロモンの制御は上手く行えているらしかった。ただ、神の言う通りならばこれは一時的な状態なのだろう。

暴走は必ずやって来る。そのときどう対処すべきかも考えなくてはならない。

学生寮に着くと、一夏は駆け足で自分の部屋へと向かい、部屋へと足を踏み入れた。

「箒、ごめんっ！ 絶対に責任は取るからっ！」

着いて早々、一夏は部屋の床で土下座をした。突然の来訪とその行動に、部屋にいた箒はぎよつとした様子で一夏を見た。だが、すぐにその表情は和らぐと、頭を下げる一夏の前に着替えたばかりのIS学園指定の白い制服姿で歩み寄った。どうやらシャワーを浴びて、汚れた衣服やシーツの清掃なども行っていたようだった。

「一夏、謝らないでくれ」

箒は一夏の前でしゃがみ、一夏の頭を撫でる。

「箒？」

一夏はその感触に頭を上げ、箒の顔を見た。

「お前は嫌かもしれないが、私はもうお前の物だ。だから、謝るな」

「いや、それは……」

「責任を取ってくれるのだろうか？」

「も、勿論……！ 絶対に、幸せにしてみせるっ！」

強く言い放つ一夏に向かって、箒は嬉しそうに微笑んだ。

「それなら、それでいい。私達の間には、気遣いは無用だ」

「あっ……」

箒は一夏の頭を抱き寄せ、制服を押し上げる豊かな胸に一夏を抱いた。その柔らかい膨らみに一夏はドキリと胸を高鳴らせ、母性的な包容力に目を細める。母がいれば、こんな感じだったのだろうかかと一夏に思わせるほどだった。

「……一夏のチンポは、この世界を支配するためのものだ。それには

私一人では母胎が足りない。一夏の素晴らしさを他の女達にも知ってもらい、一夏の優秀な遺伝子で孕んでもらう。そのためには、もつと一夏には自分に正直になってもらわないとな」

「えっ。箒、何か言ったか？」

小さな声で箒が何かを口にしたが、一夏には聞こえていなかった。

「いや、何も言っていないぞ」

「そうか？」

一夏は再び目を閉じて、箒の胸に顔を預ける。ひと時の静寂を、二人は過ごした。

「……ふふっ。楽しみだな、一夏」

淫らに乱れる幼馴染

学生寮内にある一年生用の食堂。IS学園指定の白い制服を着た一夏は、極度の緊張状態にあった。原因は、自身の股間から発せられるフェロモン。制御方法を知り得た上に、シャワーを浴びて念入りに体の匂いを洗い落としたりつもりだが、果たして上手くいくのだろうか。不安で仕方がなかった。

上手くいかなければ、食堂内は筆舌しがたい光景に様変わりするだろう。女子生徒全員が柔肌を晒し、迫ってくる光景を幻視した。

しかし、そんな一夏の不安は杞憂に終わった。

「おはよう、織斑」

「あ、お、おはよう……」

「あつ、織斑君だ。おはよー」

「おはよう……」

食堂に入ると、昨日知り合ったばかりの同級生達から声を掛けられる。その様子は何ら違和感はない。同じ学年の女子生徒達が一夏を遠巻きに見てひそひそと何かを話し、黄色い歓声を上げている。悪い心地はしないが、どこか落ち着かない。今朝に起こった出来事が異常とは言え、元々一夏は昨日から一般的な男が経験しないような異常に見舞われているのだ。

ISを使用できるのは、一夏という例外を除いて女だけ。そうなれば当然生徒も職員も全て女だ。それに何故か皆、容姿の偏差値が異様に高い。一夏は女の花園に放り込まれた異物。これから卒業するまでに他の男子生徒が現われでもしない限り、一夏は一人きりだ。

それに、自身が所有するLv.100チンポとも戦わなくてはならない。旅に出たばかりでいきなり呪われた最強武器を手にしたしまった勇者の気分だった。

「はあ……」

「一夏、あちらの席が空いているぞ？」

「あ、ああ……」

そう言つて一夏に声を掛けたのは、朝食を乗せたお盆を持って横に

並び立つ箒だった。後頭部で結ってポニーテールにした黒髪を揺らし、姿勢よく歩く姿は周囲の目を惹いている。日本の大和撫子ここにあり、と思わせる美しい容姿に、同性の女子生徒達からもどこか羨望を込めた眼差しが向けられているようだった。

その箒が一夏と一緒に行動し、同じテーブルに座った。生徒達の間では動揺が走っているようだった。

「……ねえ、あの子って、織斑君とどういう関係?」

「何か、心の距離が近いっていうか、ただの関係じゃなさそう?」

「もしかして、織斑君の彼女……!?!」

ざわざわと沸き立つ周囲をできるだけ気にしないように、一夏は食事をはじめた。

「い、いただきます……」

「いただきます」

落ち着かない一夏に対して、箒は至って冷静だ。表情は自然体で柔らかなく、昨日六年振りに再会した入学初日のような硬さはなかった。研ぎ澄まされた刀のような危うい空気を放っていたのが嘘のようだ。箒を変えたのはやはり、今日の出来事なのだろう。

そう考えると、一夏は余計に食が進まなかった。メニューは箒と同じ和食で、一夏の好物。白米や鮭、味噌汁などの定番が並んでいて美味しくないはずがないのだが、味を感じている余裕もなかった。

二人の夫婦のような気が置けない関係に、周りの生徒は悔しそうな様子だ。

「は、入れない……!」

「隣いいかな、って言いづらいよ……!」

周りを他所に、一夏と箒は二人きりの空間で朝食を進める。

「なあ、箒……」

「ん? どうした、一夏」

「俺の匂い、本当に大丈夫なんだよな?」

「ああ、今は落ち着いているぞ。ただ、完全に匂わないというわけではない」

「え、嘘っ」

「隣に行けばわかる。とても素晴らしい匂いだ。思わず抱き着きたくなるほどに」

箒が顔を赤くし、危ない表情を浮かべる。色気に満ちた女の顔だ。一夏の興奮が少しばかり煽られそうになるが、慌てて朝食を口に掻き込んで誤魔化した。食欲という欲求で性欲を霧散させようとした。

だが、箒の追撃は入った。

「まあ、あまり気にしすぎるな。溜まったら、私を使うといい」
箒は小さな声で続けていった。

「お前の金玉ザーメンは、私の精液袋でいつでも受け止めてやろう。それとも、口がいいか？ お前のチンポを根元まで啜えて股間に顔を埋めて、ごくごくくと濃厚精液を飲みほしてやろう」

箒は赤い舌を少しだけ出して、笑った。それを見て、また一夏の心臓が鼓動する。

「箒、やめて、くれ……」

抑えていたフェロモンが、興奮の煽りを受けて滲み出そうになるのを一夏は感じた。

「ふふっ……。すまない。だが、私は一向に構わないからな」

箒は味噌汁を呑む。今言った卑猥な言葉が嘘のように晴れやかな様子だった。

一夏は食事の手を止め、周囲にバレないように股間を手で抑えた。

駄目だ、鎮まれ、今は駄目だって！ 一夏は湧き上がろうとするフェロモンを必死に抑えながら朝食一つに苦戦していた。そのときに見た箒の表情が、何かを悪くみする悪戯っ子のような笑みを浮かべていたような気がしたが、真意を確かめる余裕もなかった。

だが、真意はすぐに明らかになった。

「ぐぶうっ、ぢゅぶぶっ、ぢゆるるるっ、ぐぢゅっ、じゅぶじゅぶっ」
「ほ、箒……」

IS学園の校舎内。寮での食事を終えて、他の生徒よりも一足早く校舎に向かった一夏は、箒に連れられて校舎内に数少ない男子トイレに連れ込まれていた。一夏以外に男子トイレを使用する可能性がある者は用務員の初老の男くらいなものだが、念のためにと個室トイレ

に入っていた。

箒によつて一夏は蓋を閉めた便器に座らされ、あれよあれよという間にズボンを下ろされた。そしてぱくりと肉棒を咥えられてしまい、肉棒への箒の唾液清掃が始まった。

「んーっ、ぢゅぶっ、ぐびゅっ、ぢゅぶぶっ、ぬちゅっ、ぐちゅっ、ぢゅぢゅっ」

「あっ、うっ……いー」

一夏は何もすることができなかつた。性欲が溜まったのを箒に見抜かれて、性欲を発散させなければ教室でまずいことになると言われ、箒に翻弄されている。箒の切れ長の美しい眼差しで見上げられ、ただただ肉棒を可愛がられている。

「くっ……いー」

本当は、箒にこんなことをさせたくない。一夏はそう思つても、箒を頼らざるを得なかつた。朝の被害者のうち、生徒である箒は教師である千冬以上に一夏と身近にいておかしくはない関係。他の生徒を被害者にしないためにも、自分を受け止めてくれる箒に性欲処理を手伝ってもらうのが効率的だつた。

自慰で満足できればいいのに……いー！

一夏のL v. 100チンポは我が儘で、一夏の自慰では満足してくれない。魅力的な女を求め続けている。今も箒の口内に包まれて、嬉しそうにビクビクと震え、先走り液という涎をだらだらと垂れ流している。

「ぢゅぶぶぶぶぶっ、ぢゅーっ、ぢゅーっ、ぢゅるーっ」

「うわあっ!？」

一夏の反応を見て楽しそうにニヤニヤと笑う箒。あの綺麗な箒が、古風な和風美人の箒がすっかりと淫らに変貌し、一夏を快樂の奈落へと引きずり込もうとしてくる。

まずい。一夏がそう悟ると、箒の口が肉棒から離れた。

「ぶはっ、ぬちゅうっ、れろっ、くちゅっ、くちゅっ」

肉棒の棹をシコシコと扱き、丸い亀頭に沿つて円を描くように舌を動かし、撫でまわす。今しがた体験した激しいフェラとは打つて変

わかって優しくねっとりとし、翻るその動きに一夏は限界を覚えた。

「うぐっ……！」

びゅるるるっ、びゅーっ、どびゅっ、びゅっ、びゅるるっ、ぶびっ、びゅくっ。

「あっ、あー……」

口を大きく開いて舌を伸ばし、一夏の射精を受け止める筈。勢いが強かったために口だけに留まらず、筈の嬉しそうに微笑む顔も白濁に汚す。幼馴染の顔を汚い欲望に染める行為に一夏はにやけてしまい、そんな背徳感を一瞬だけ覚えたが、はっと我に返って表情を引き締めた。

一夏製作の精液パックをつける筈。開いた口から伸びた舌の器には精液の塊。ふるふるすると震えるそれはゼリーのよう。筈が口を閉じて喉を鳴らし、再び舌をペろりと見せつけると、精液はなくなっていた。

「私は、一夏専用の性欲処理道具だ」

うっとりとしながら筈の言葉に、一夏は慌てて否定した。

「違うっ……！」

「きつと私の体はな、一夏の金玉で大切に育てられた精液を受け止め、子を孕むために作られたんだ。一夏、知っているか？ 女の体にある卵子の数には限りがあつて、男の精子と違って増やせないんだ。私は限りある卵子をお前に全て捧げるぞ？ 一夏の精子でぶちゅっとなり子を犯されて、私の胎で子を育む。そして、私の栄養を分け与えて育てて、産み落とすんだ。何度も、何度もな。想像するだけで凄く幸せだ……」

筈は精液に濡れた顔のまま、一夏の尿道口に残った精液を舌先で穿る。

変わってしまった筈。変えてしまった一夏。一夏は罪悪感に胸を痛めながらも筈の顔から目を離せなかった。ここまで言っただけで自分を慕ってくれる女性。美しい幼馴染。男である一夏が喜ばないわけもなく、承認欲求が満たされる。

そして、征服欲も勝手に満たされていく。

一夏は箒の言葉に否定の声を上げることができず、箒のお掃除フェラを受けながら心の中で謝った。ごめん、箒。俺がもつと強ければこんなことにはならなかったのに。思っても口に出せない今の自分が嫌で、一夏は余計に深く落ち込んだ。

「あはあつ、ふふつ、ちゅぷつ、ちゅつ、ちゅううつ、れるつ、ぐちゅつ」
箒による求愛のキスが、一夏の尿道口に何度も放たれた。

さすがにこれ以上性欲処理に費やしている時間はない。授業も間もなく始まろうとしている。一夏は深呼吸してどうにか冷静さを取り戻そうと努め、箒を求めて勃起する肉棒を無理矢理下着とズボンの中に押し込めた。

「ああつ……。残念だな」

言葉とは裏腹に、愉快げな箒。立ち上がったって顔の精液を指で拭い、指先を舌で舐めている。箒を見ていたら危ないと理解した一夏は、箒を気にせずに身支度を整える。

「箒、ごめん。ありがとう。もう、大丈夫だ……」

「そうか。また溜まったら、沢山搾りとってやるからな」

箒は舌なめずりをして一夏の股間から立ち上がった。その色気ある仕草から顔を赤らめて目を背け、一夏も便器から腰を上げて立つと、慌てて個室トイレから出た。

精液まみれの顔を洗おうとしない箒になんとか顔を洗わせてから、二人は男子トイレの扉を開いた。扉から顔を覗かせて外を警戒し、誰もいないことを確認してから一夏と箒は廊下へと出た。まだ時間的な余裕はあるが一夏は速足だ。ゆっくりと箒と肩を並べて歩いていると、また邪な考えが浮かんでしまうかもしれないと思ったからだ。
なるべく、箒の言動には気をつけないと。

一夏は自分のせいで変わってしまった箒を、自分で警戒することになるとは思わなかった。本当に最低だ。そう思っても何もできない弱い自分が憎かった。これからも箒の誘惑を受けて肉棒を差し出してしまっだろう。それはもう抗える気がしなかった。だが、だからと言って暴走にまで至るつもりはない。

箒は大切な女性。千冬もそうだ。乱暴に、一方的に欲望をぶつける

ことはしたくはない。大切だから、それ相応の優しさや愛情を注ぎたい。それが箒と千冬に対してのせめてもの罪滅ぼしだと、自分に言い聞かせて納得させた。

異変

箒と共に教室へと向かった一夏。大体の生徒は席に着いているが、数人は席を立って他の生徒と雑談中だ。箒以外に雑談をする相手のいない一夏は大人しく席に座ることにした。席は教卓のすぐ目の前の席だ。箒の席は一夏の二つ左隣の窓際に位置している。

「それではな、一夏」

一夏へと軽く告げ、箒は自席に座る。一夏は先の出来事のせいで箒に対して自然に対応することができず、その後姿を目で見送ることしかできなかった。

しかし、席に座って一夏を見た箒と目が合ってしまった、一夏は目を逸らした。

こんなことでこれからやっていけるのだろうか。もはや難易度はベリーハードだ。しかもクリア条件はまるでわからない。Lv. 100チンポを完全に制御することか？ しかし、神と名乗る少女は股間の代物に完全には抗えないと言っていた。それが真実だとすると、これからの学校生活で暴走しそうになったら全て箒や千冬に性欲処理してもらう必要があるのだが、それは現実的なのだろうか。

たとえば、授業中に暴走しそうになったら、その度にトイレに駆け込むのか？ 箒と一緒に？ 無理だ。

「どうしてこんなことに……」

全て、自分の体を奪って良からぬことを企てた愚かな男のせいだ。温厚な一夏はらしくもなく他人を心の中で強く糾弾し、机に出した参考書を読むふりをして片手で抱えた頭を悩ませた。

横目に映る窓の外に広がる空は、一夏の心境とは逆に晴れ上がっていた。

「諸君、おはよう。授業を始める。早く席に着け」

と、教室の前の扉が開き、二人の女が姿を現す。よく通る声を教室に響かせ、その一言で生徒全員を着席させた一年一組の担任、千冬。首の後ろでまとめた黒髪を揺らし、教壇の前に立つ。黒いレディーススーツに身を包んだ姿が魅力的で、千冬専用に仕立てたかのようだ。

箒以上に意志の強い顔は美麗で、生徒から人気が出るのも頷けた。

「皆さん、おはようございます」

後に続いて入って来たのは、副担任の山田真耶やまだまや。ショートヘアの髪型で眼鏡をかけた童顔。もしも制服を着ていたならば、生徒にしか見えなかっただろう。小柄な体格をした真耶は、非常に豊富な胸を有している。胸元がゆったりとした服を着ているために谷間はしっかりと見えていて、視線はそちらへと引き寄せられてしまう。

「やっぱり大きい……」

「何故、我が身は貧乳であるのか……」

同級生の呟くような声が聞こえた後、授業が始まった。

だが、ここでも問題が生じている。最初の授業は高等学校の一般的な科目ではなく、ISに関する座学授業だった。元々一夏はIS学園に入る予定はなく、ISに関する知識は乏しい。本当は別の高校への入学試験を受けるはずだった。それが、誤ってIS学園の試験会場に入って近くにあったISに触れ、あまつさえ起動に成功させてしまったことをきっかけにIS学園へ強制入学させられたのだ。IS学園への入学を目指すために何年も前から勉学に励んでいた生徒達とは違い、下地が足りない。入学初日の授業でも一夏は思っていたが、やはり基礎的な知識が抜けているために、専門用語を並べられても理解が追いつかないのだった。

勉強も頑張らないと。

やることは山積みだった。必死に追いすがろうと、授業を進める真耶の声と教科書の内容を頭に入れていく。この時の一夏は一時的にでも自身の体のことを忘れ、授業に取り組むことができた。

本日最初の授業が終わり、休み時間に入ってなお一夏は教科書に目を通していた。

「国家代表IS操縦者。ISの実戦データの収集を主な目的として、代表として国から専用機を与えられた者。……これは昨日学んだばかりだ。候補生、っていうのもいるんだよな。それがうちのクラスで言うと」

「ちよっと、よろしいかしらっ？」

「…………え」

一夏は掛けられた声に反応して、横を見た。

視界に入ったのは、長い金色の髪の毛先を軽くロールさせた少女。色白の肌と澄んだ青色の瞳。大人びた色香と高貴な雰囲気を漂わせる彼女の名前は、セシリア・オルコット。たった今復習したばかりの、国家代表IS操縦者の候補生に該当する人物だ。ただし、日本ではなくイギリスの代表候補生。

セシリアを見て、一夏は少し困惑した。

というのも、一夏は昨日セシリアに喧嘩を売られたのだ。一年一組のクラス代表を決めることになった際に、他の生徒から推薦された一夏のクラス代表就任を唯一セシリアだけが拒んだ。自分こそがクラスの長に相応しいと主張し、一夏へと敵対してきたのだ。

一夏とあまり関係がよろしいとは言えないセシリアが改めて何の用なのか。それは他の生徒達も思っているようで、セシリアと一夏に視線が集まっていた。妙な静けさが教室内を包み込む。

また喧嘩を売られないといいな、と一夏が多少面倒臭そうに思っている、セシリアが一夏へと無遠慮に顔を近づけた。そして、何かを嗅ぐような仕草を見せ、不思議そうに小首を傾げている。その様子は、高慢な態度さえ改めれば魅力的な美少女だった。

一夏の肉棒がピクリと反応を示すほどに。

「あなた、いい匂いがしますわね？　もしかして、香水をつけているのかしら？」

「へ、香水…………？」

香水をつけたことなんて一度もない。そう答えようとして、一夏は口を噤んだ。

フェロモンだ。千冬も箒も、一夏から漂う匂いを察知していた。しかし、今は一応フェロモンを抑えることに成功している。余程近くに寄られなければ気づくはずがないと思っただけに、一夏は極度の不安を覚えた。

目を閉じて、すんすん、鼻を鳴らすセシリア。

「なんと表現すればよいのでしょうか。とても、いい匂いですわ…………」

目を開いたセシリアは、青い瞳を少し潤ませていた。ただ事ではない様子。たとえるならば、危ない薬を使ったばかりでテンションの高い中毒者、一步手前の状態だった。一夏の机に手を突いて、顔を近づけてくる。

これはまずい。一夏はどうしようかと悩んでいると、セシリアが食い下がってきた。

「いったいどちらのブランドの香水ですか？ 教えていただけませんか？」

「いや、違つ、香水じゃなくて、その」

異様に迫つて来るセシリアとの距離をどうにか離そうと、一夏は椅子ごと距離を取ろうとする。

「香水でないのならなんですか？ シャンプー？ ボディソープ？」
「えつと、ち、近いって」

もはや吐息が頬に当たる距離まで近づいたとき、休み時間の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。同時に扉が開き、廊下から教室へと千冬が足を踏み入れる。セシリアを除く生徒全員が千冬のエントリーに気がつき、未着席の者は慌てて席に着いた。

セシリアだけが座らない中、歩み寄つて来る千冬を見て一夏は表情を青ざめさせた。

「先ほどから何を見て——」

一向に答えずに一夏へと食つて掛かるセシリアは、一夏の視線の先を辿つた。

「おい」

そこには黒髪の修羅がいた。

「教室で盛るな、餓鬼ども」

手に持った黒い出席簿が掲げられたかと思えば、残像を残して振り下ろされた。千冬を見ていた一夏ですら目で追うことのできなかつた速度。その速度から放たれた一撃はどれほどの威力を發揮するのだろうか。

直後、パンツと高い音が教室内に響く。それを食らったセシリアは頭を両手で押さえ、言葉にならない悶絶の声を漏らして床にしゃがみ

込む。

「……あと少して一夏に忠実な母胎が増えたのだが。この力の扱い方は難しいな……」

一年一組の絶対君主である千冬に対して誰もが恐怖を抱く中、誰にも聞こえない小さな呟きが窓際からこぼれた。

次の授業が始まり、再び知識の習熟に励む一夏。今は一般的な授業。IS学園は入学希望者数が多いため倍率が高く、在籍する生徒はエリートの中のエリートだ。必然的に普通の授業もレベルが高く、ISの座学でなくとも一夏はついていけない時があった。

だが、そんな余裕がないときでも、一夏の脳内にはふと別の考えが過ぎった。

そう言えば、どうしてオルコットさんは近づいてきたんだろうか。

一夏は授業に耳を傾け、ノートに内容を書き込みながら疑問を抱く。昨日、面と向かって喧嘩を売ったセシリア。しかもただの喧嘩ではなく、決闘を申し込まれてもいる。今朝の騒動で頭から吹き飛んでいたが、一夏は思い出した。

来週の月曜日、一夏はセシリアとISで勝負をすることになっている。それに勝利した者がクラス代表の座を勝ち取ることができるのだが、正直今となつては一夏はどうでもいいと思っていた。ゲームでたとえるならば、ただのサブイベントに近い感覚だった。

喧嘩を売られたのは癪だけど、それよりももっと大変なことがあるんだよ……！

主に自分の股間との戦い。それに比べれば、ISの勝負などどうでもよかった。クラス代表は言ってしまうえばクラスの雑用を熟す役職であるし、時間的な拘束を受ける。勝ってクラス代表になっても利点は少ないだろう。本気で取り組んで勝ちを狙うほどでもない。

一夏は決闘のことは一時的に忘れ、自分の股間への対策を悶々と考え続けた。

「大変なのはわかってはいるが、今は授業に集中しろ」

「は……」

別の考え事をしていることを千冬に悟られ、出席簿で凄まじく優し

く頭を叩かれた。

時折千冬に窘められながらも授業を受ける一夏。あつという間に午前の授業が終わり、昼食の時間。一夏は校内にある学食へと向かうと箸を見た。

箸は既に席を立ち、一夏の方へと近づいてきていた。

「箸。その、学食に行かないか……？」

箸とはいろいろあったが、それで行動を共にしないということにはならない。責任を取ると箸に言った身であるため、たとえ箸とどれだけ気まずい関係になろうとも、箸を突き放すことはしない。

これからも、きっとそうだろう。

「ああ、行くこうか。一夏」

快く了承した箸を連れて、一夏は教室を出た。

学生食堂は込み合っていた。そこへ、学園内で唯一の男子生徒である一夏の登場。ミーハーな女子達が色めき立ち、一夏の話題一色に染まる。

「あの子でしょ。織斑君」

「テレビで見るよりイケメン！」

「千冬様の弟君なのよね」

「いいなあ」

聞こえない程度の声もあれば、はつきりと耳に入る声もある。一夏は苦笑しながらも食券を買い、箸と配膳の列に並ぶ。

「やっぱり落ち着かない……」

「こればかりは慣れるしかないと思うぞ？」

「そう、なんだよなあ……」

昨日と今日で随分とため息が増えたと感じる一夏だった。悩みの一つでも解消されれば心に余裕ができるのだが、望んだところで状況は変わらない。

未来は自分で切り開くしかないのだ。

「よしっ……」

気合いを入れ、一夏はこれから臨むことにした。

しかし、心機一転した心持ちはまたしても箸に崩されることになっ

た。

「一夏、口を開ける。……一夏？」

「……いやいや」

一夏は首を横に振った。

一夏と同じテーブルに座った箒が、おかずを掴んだ箸先を一夏の口許に向けてくる。おかしい。箒は一夏と同じ和食のメニューを頼んだのだ。食べさせ合う理由もない。それに、箒の座っている場所もおかしかった。

「箒、向こうに座つてくれないか……？」

一夏は箸の元へと視線を辿らせる。

すぐ横に、箸を持った箒がいた。楽しそうだ。可愛い笑顔に一夏の股間が熱くなる。

「あと、ズボンから手を離してくれ……」

そしてその股間と言うと、テーブルに隠れる形で伸びた箒の手に握られている。学食内には他に生徒がいるというのに、その大胆な行動に一夏は気が気でなかった。

「何あれ、完全に彼女じゃない！」

「ブラックコーヒーが甘く感じる……！」

「本国の情報と違う……」

周りの生徒達も動揺しているようだ。今まで女子生徒しかいなかった学園内に現れた初めての男子生徒が、黒髪の和風美少女とイチャイチャしていれば仕方ないことだろう。

もつとも、一夏自身も望んでやっていることではないのだが、端からはそうは見えていないのだろう。

「あーん」

「箒……」

「食べなければ、股間から手を離してやらないぞっ！」

「わかったよ、食べるから……」

抵抗を示しても意味はない、と一夏は箒の箸を口に啣えた。温かい熱を内包した魚の白身を受け取り、白身の塊が解れるとともに軽い塩気のある深い味が口内に広がる。白米が欲しくなる味だった。

よく噛んで味わっていると、箸の箸がまたやって来た。今度は白米を掴んでいた。まだまだ続くらしい。ズボンの股間は箸に優しく握られたままだった。

長い長い食事。時間的にはそうでもなかったが、体感的には一夏は長く感じた。箸によって頻繁に箸を向けられて、促されるままに食事を受け取った。

「ぐ馳走さまでした」

「い、ぐ馳走さま……」

長く苦しい戦いだった。股間は無事に箸の手から解放された。途中でズボンのチャックを下ろされそうになったがどうにかそれだけは死守し、事なきを得た。

食事を終え、一夏はお盆を食器受け取り口へと片付ける。その際の動きにも疲労が感じられた。一方で箸は上機嫌だった。学食にいた生徒達の多くはどこか真顔で、「恋人が欲しい……」と呟いていた。

休憩時間にも関わらず、休めた気がしない。そうは思っても次は授業。真面目に取り組まなくてはならず、一夏は午後の授業に必死に食らいついた。

放課後。全ての授業を受け終えた一夏は、青い顔をして机に突っ伏していた。考えすぎて頭を痛めている。その姿を見た同級生達からは温かい視線を向けられている。当然のことながら、一夏とは違って皆余裕があるようだ。

「頭がパンクしそうだ……」

専門用語のオンパレードにお手上げ状態だった。だが、学びを放棄するという選択はないため、わからなくなれば辞書を使ってすぐに調べる。そういった行動を逐一挟んでいるから、授業の流れについていけなくなってしまう。

寮に帰ってから勉強をしないと、まずいかも。

せめてよく使われる専門用語の意味ぐらいは把握しておきたい。そうと決まれば、一夏は早く寮に帰ろうと教科書を通学鞆の中にしまし始めた。

「先ほどから、随分とお困りのようですね」

するとそこへ、誰かが一夏へ声を掛けた。

「へ？」

声から何となく察しはついてはいたが、実際にその姿を見ると一夏は素っ頓狂な声を上げてしまう。何故なら、そこにいたのはセシリアだったからだ。決闘を申し込んだ自覚があるのかやけに接触回数が多い。

それに、これはどういうことだろうか。傷一つない白い頬が紅潮し、一夏を見る目に熱が帯びているようだった。形のいい桃色の唇は柔らかい微笑みを形作っていて、敵対の色は見受けられない。

恋する乙女。その印象を受けた瞬間、一夏は鞆を手にして席から慌てて離れた。

「まさか……！」

一夏の中で警戒レベルが一気に上昇する。念のため教室内を見回し、他に異常が起きていないことを確認する。セシリアを除けば他の生徒達に異変はない。席を立って一夏へと向かってくる箒も普通だ。

「どうした？ 一夏」

顔を近づけ、他の誰かに聞こえない程度の声で話しかけてくる箒。

「箒。このオルコットさんの様子がおかしいんだ……」

「そうか？ 確かに顔が赤いが、元々こうではなかったか？」

箒の声が一夏の耳に入る。何故だろうか。箒の声が異常に脳へと浸透する。声に意識の全てが引き寄せられ、他に何かを考えている余裕もなくなった。まるで母の胸に抱かれた子供のように不安などの感情がたちまち解消していく。

「……え？ あれ……？」

言われてみれば、一夏はそんな気がした。

「そうだ。オルコットは元々こんな感じだ。なあ、オルコット。そうだよな？」

箒がセシリアへと話しかけると、セシリアは一夏達へと近づいて頷いた。

「そうですね。今さら何をおっしゃいますの？」

「今さらって、別にそんな、関係が深いわけじゃ……」

箒とセシリア。二人を前にしていた一夏は、徐々に沸き上がった眠気に体を揺らした。机に手を突いてよろめきそうになった体を支えるも力が入らない。水中にいるかのように、箒に掛けられた声が遠くに聞こえる。

何が、起きているんだ……？

いよいよ眠気に耐え切れなくなった一夏が最後に見たのは、箒の微笑みだった。

意識が闇の中に引きずり込まれる。足掻いても意味はない。深い底へと落ちていく。それに連れて周囲の暗闇が少しだけ明るくなり、妖しい紫色が澱む空間へと至った。ゆつくりと床に背を触れて、落下が止まる。

ここは、もしかして。

「いらっしやい」

聞き覚えのある声。体を起こして視線を正面に向けると、白いワンピースを着た黒髪の清楚な少女が立っていた。

「神、様……？」

神を自称する少女。一夏を悩ませるLv. 100チンポの生み出した者。

またここにやって来たのだとわかり、一夏は体を起こして周囲を見渡す。

「また、夢の中なのか……？」

「正確には、ここは心の中。私は君の心に遊びに来ているだけ」

「俺の心……？」

紫色だけが支配する空間。壁や天井のないどこまでも同じ風景が続く場所が俺の世界？ 一夏は困惑し、自分の心が理解できなくなつた。いったいどういった精神状態であればこのような風景になるのか。

「君に伝えることがあつてきた」

「……なんですか？」

疑問点が多いが、とりあえず一夏は少女へと面と向かつて話すことにした。

「君には転生特典を三つ与えたと言った。一つは、単独で転生特典三つに相当するLv. 100チンポ。残りの二つも君の中に宿っていたわけだけど、実はもう君の中にはその二つはない」
「え……」

「二つの転生特典が、君の体を媒介にして別の者に譲渡されてしまった。その原因を作ったのが、Lv. 100チンポのもう一つの特徴である『譲渡』。他者へと欲望や力を譲渡する力によって、転生特典は君の体から抜け出た」

少女の言葉に、一夏は声が出なかった。

一夏が翻弄されている転生特典が、別の者に渡った。それを伝えられて、一夏は恐怖を覚えた。Lv. 100チンポに並ぶかもしれない恐ろしい特典が、一夏のせいで第三者に与えられたのだ。おそらく校内の生徒もしくは教師だろう。

自分以外にも苦しんでいる人がいる。

そう思うと、一夏は居ても立っても居られなくなった。

「あのっ、転生特典を消してもらおうことは」

「できない」

「どうしてっ!?!」

「それをすれば君の心は死ぬ。転生特典を新たに得た者も同様に。もう魂に定着しているから、無理に引き剥がせば心が壊れて廃人になる。それでも良ければ剥がそう。どうする? 死ぬ?」

少女に言われて、一夏は言葉に詰まった。そう言われて、はいと答えられるわけがない。わかっていて問いを投げかけてくる少女の性格は最悪だった。そもそもこの気の狂った転生特典を作った元凶にまともな考えが通じるとは思えなかった。

一夏は歯噛みした。結局のところ、この少女は自分が足掻く様を見て楽しむのが目的なのだ。仮に一夏を自由にできる術があったとして、それを素直に教えてくれるわけがない。

「……その二つの転生特典について教えてもらってもいいですか? それと、誰に渡ったのかも」

一夏が今できるのは情報を集めること。そして、それについて対策

を講じることだ。

だが、それをさせてくれるかどうかも、結局は少女次第だった。「それも含めて、君がどう場当たり的に対処するのか、楽しみにしている」

「そん、な……」

絶望する一夏。それを見て小さく笑む少女。その姿が少しずつ透けていった。一夏が手を伸ばしかけたときにはその姿は完全に透過し、笑い声の反響だけを残して紫色の空間に一夏だけが取り残された。

あの少女は本当に神なのか。邪悪すぎる存在に対して、一夏の中で疑問が募った。

英国淑女との和平交渉

一夏は自身を取り巻く状況に困惑していた。

学生寮の食堂。食堂が開く時間となってからそこにやって来た一夏は、席に座って夕食を進めていた。この点は特に問題はない。だが、一夏の左右を挟むように座る二人の女子生徒に問題があった。

「一夏、食べないのか？」

一夏の右側に座る女子生徒、箒。一夏の幼馴染であり学校内で一番親しい生徒であるため、隣にいるのは至って自然だ。ただ、多少距離感が近すぎるとは感じていた。恋人でもここまでの密着具合はないだろう。本当はテーブル席の向こう側に座ってほしいと思わなくもないが、口には出さない。

どういうわけか、箒の行動を指摘する気になれなかったのだ。拒もうとすると、その考えが脳内で霧散し、口から出そうとする前には完全に消失している。まるで、見えざる何かに思考を支配されているような感覚だった。

「どうされましたの、一夏さん」

左隣にいる女子生徒、セシリア・オルコット。一夏はそのセシリアに対して強い違和感を覚えている。セシリアとはIS学園に入学した昨日から知り合った関係なのだが、一緒に食事をし、尚且つ名前と呼ばれるほど親しい間柄ではなかったはずだ。むしろ、軽く敵対していたはずで、セシリアの表情から窺える、恋する乙女のような感情に身に覚えがなかった。

違和感があるのに、いざ口に出そうとするとやはり言葉が規制される。

「いや、何でもない……」

一夏は首を左右に軽く振り、食事を再開した。

何かがおかしい、と感じている。ただ、何かがおかしいのか、その違和感の原因や正体を一夏は掴めていなかった。雲を掴もうとするかのように、真相を探ろうと伸ばした一夏の手を何かがするりと回避し、どこかへと行方を眩ませてしまう。

一夏はふと、周囲に視線を巡らせてみた。

学食が開いたばかりの時間とは言え、放課後の部活動から戻って来た生徒達がいるため、それなりの人で賑わっていた。食堂の一面に一夏がいれば誰でも確認できるように、大きな遮蔽物は存在しない。

それなのに、誰も一夏達を気にしている様子はない。朝食時も昼食時も、一夏は否応なく生徒達の好奇の視線に晒されてきたというのに、今では一夏は普通の生徒として認識されているかのようだった。

この違和感何なのだろうか。一夏は食事をしながら悶々と考え続けた。

「セシリア。後で私達の部屋に来るといい。いい体験をさせてやろう」

「ええ。ぜひとも、お邪魔させていただきませすわ。箒さん」

一夏を間に挟み、箒とセシリアが楽しげに会話をしている。昨日まで周囲と壁を作っていた箒が嘘のような光景だった。名前で呼び合い、すっかりと意気投合している。箒に友達ができて嬉しいと思う反面、やはりここでも違和感があった。

「一夏も、構わないか？」

箒は一夏へと顔を向け、瞳を真っ直ぐ見据えてくる。

その瞳には、抗いがたい力を感じた。箒から視線を逸らすことができず、じつと見つめ続ける。そうしていると、先ほどまでであった違和感が段々と薄れ、むしろ何故違和感を覚えていたのかと思えてしまうほどに心が落ち着く。

「あ、ああ……」

一夏には断る理由もないため、頷いた。

「ありがとう、一夏……」

そう言つて、舌なめずりをした箒の姿に、一夏は目を離すことができなかつた。

夕食を終え、一夏は寮の自室へと戻った。後で部屋に向かうと言っていたセシリアと一旦別れ、箒に言われるがまま準備を整える。歯を磨き、シャワーを済ませ、裸のままベッドに座る。

衣服は着ない。これから寝るのだから、衣服は必要ないのだ。

「……必要ない、よな？」

一瞬自分が抱いていた日常生活の常識に疑問が生じたが、箒の姿を見ると疑問はすぐに解消された。相変わらず美しく、蠱惑的に微笑む箒を見てみると、一夏の股間は素直に反応してしまう。その女を味わせろ。そう訴えてくるかのように、湧き上がった欲望が全身に広がり、脳を支配し始めていた。

「一夏、元気だな。だが、まだ待つてくれ。一夏の供物がそろそろ来るからな」

制服姿のまま一夏の横に座った箒は、一夏の肩にしなだれかかった。甘い香りが一夏の鼻腔を擽る。早く交わりたい。一夏がそう思っている、体は暴走することはなかった。一夏は、主人の言いつけを守り、目の前の極上の餌を前に待機する空腹の犬のような気分だった。

「精神状態は良好。今の状況を嫌がってはいないようだな、一夏」

箒が何かを呟いたそのとき、扉がノックされた。

「一夏さん。箒さん。セシリアですわ」

「ああ、入っていいぞ」

箒の応じる声とともに、部屋の扉が開いた。

入って来たのは、ネグリジエ姿のセシリアだった。上品な青色のそれは太股の辺りまで丈を伸ばし、セシリアの体を覆い隠している。生地が薄いために体のラインが浮き彫りになっていて、内側に包まれた肉体美は外からでも一目両全だった。

セシリアは部屋の鍵を閉め、ゆっくりと一夏達の下へと歩いてきた。

「うふふ……」

一夏の前に立ったセシリア。一夏と同じくシャワーを済ませたように、色白の肌は赤みが差している。金色の髪が揺れ、一夏の鼻に心地よい甘さを含んだ香りが入り込み、肉棒が反応してしまう。

既に準備は完了している。この場には飢えた男と、その男を愛する女がいる。

「それでは、始めようか」

箒の言葉を皮切りに、それは始まった。

「ちゅっ、ぐちゅっ、ちゅるっ、くちゅっ、くちゅっ、ぷはっ、んんっ、ちゅっ」

一夏はベッドの端に全裸で座ったまま、膝に跨らせて座らせたセシリアと口づけを交わしていた。唇だけでなく、舌を使つての大人のキスだ。もはや二人の間に軋轢は存在せず、日本の紳士とイギリスの淑女として和平を結んでいる。

「んっ、くちゅっ、ぐちゅ、ぬちゅっ」

伸ばされた舌と舌が絡み合い、触り合い、唾液を交換する。その二人の様子を、横から観察する箒。先ほどから一夏の肉棒へと手を伸ばしており、優しく指を這わせ、扱くなどして快感の向上に尽力していた。

やがて、舌が離れ、二人は見つめ合う。一夏の両手はセシリアの尻に伸びて、ネグリジエの上からその大きく形のいい尻を揉みしだく。若く張りがあり、弾力のあるいい揉み心地。それを感じて、一夏の肉棒が箒の手に包まれたままビクビクと震えた。

「二夏。セシリアに欲情しているんだな。いいぞ。セシリアは死ぬまで一夏の所有物だ。だから、何をしてもいいんだ。セシリアは一夏の専用孕ませ奴隷だ。好きなだけ子種を注いで、好きなだけ子どもを産ませてやれ。セシリアはお前の要求に何でも応えてくれるからな」

「俺の、物……」

一夏は箒の言葉を受けながら、朦朧とした意識の中でセシリアを見つめた。

綺麗な金髪。澄んだ青い瞳。透き通るような色白い肌。箒と負けず劣らず、男の欲情を煽る官能的な肉体。イギリス出身で高貴な色香を漂わすセシリアは、その髪の毛一本に至るまで一夏の所有物だ。

犯したい。汚したい。孕ませたい。

「好きにしても、いいのか……?」

一夏の理性は湧き上がる欲望に耐え切れず、呑まれつつあった。

「はい。どうぞ、お好きに。私は、私セシリア・オルコットの全てを一夏さんに捧げますわ。家柄も財産も誇りも、体も全部。一夏さんに喜

んでもらうためならば、何でも差し上げます。そして、ご命令とあれば何でもいたしますわ。それこそ、犯罪に手を染めることも厭わない所存です」

セシリアは一夏にそう告げると、続けて言った。

「ですからまずは、イギリス淑女の処女膜などいかが？」

セシリアの提案に、一夏は頷きで返した。

セシリアは所有物。好きに使っていい。迷う必要はない。

「一夏さん、どうぞ」

セシリアが枕に後頭部を預けてベッドに寝そべり、大胆に股を開く。セシリアの両手は淫裂へと伸びていて、男に汚されたことのない陰部が曝け出される。一夏の視線は必然的に引き寄せられ、気がつく。一夏はセシリアの股の間に座り、桃色の粘膜が広がる恥部をまじまじと見つめながら息を呑んだ。

「これも、俺の物？」

本当に、いいのだろうか。人というのは、簡単に他人へと従属できるもののだろうか。今のセシリアを見ると、心がざわつく。果たして、今自分が置かれているこの日常は、果たして本物の日常なのだろうか。

わずかに残っていた一夏の理性。それは、幼馴染によって潰された。

「そうだぞ、一夏。全部、お前の物だ。今は私とセシリアだけだが、いずれは世界各国の女でお前のハーレムを作ってやろう。私の力でお前の精神状態はお見通しだからな。好みの女はすぐにわかる。私が相手を説得しよう。お前はただ、私の言うことに従ってればいい。そうすれば、いずれこの世界がお前の色に染まる。お前をアダムとして、お前に忠誠を誓う大勢のイブで構成された世界。それ以外の人間は等しく無価値。ああ、何て素晴らしい世界なんだ。一夏もそうは思わないか？ 思うよな？」

一夏の背中に抱き着き、豊かな胸を押し当ててくる箒が、耳元で囁く。

箒の声が脳内に浸透する。残っていた理性が何かに掌握され、潰さ

れた。

「そう、だな。そうだよな……」

一夏は理解した。一夏が生まれた理由はこの世界を統べるため。この世界が生まれた理由は一夏という人間に支配されるため。他の人間が存在する理由は、一夏に使われるためだ。

「よしよし、良い子だ。それと、一夏に『精神掌握』を使ってしまったすまない。だが、我慢してくれ。これも全て、一夏のためを思っていることなんだ。一夏に貰ったこの力、一夏のためだけに使うからな。全てが終わったら、力を解除する。それまでは、楽しく淫らな学園生活を楽しんでくれ」

もはやその言葉を、一夏の耳は曖昧にしか捉えていなかった。

一夏は腰を前に動かし、肉棒をセシリアの陰部に突きつける。

狙う先は膣口。そこに龟头を押し当てると、ゆっくりと広げながら龟头が進行する。

ぐぐつと抵抗があったが、か弱い抵抗だ。一夏の肉棒の力を使えば、踏破は容易い。

「ん、あつ……」

一夏が肉棒を押し込み続けると、セシリアから声が漏れた。それは、股間に響く甘さを含んだ声。一夏の欲望が促進し、一夏の表情に黒い笑みが浮かぶ。

「セシリアは俺の物だ。乱暴にしても、いいよな?」

一夏はそう呟くと、相手のことを考えない力任せの突きを放った。

ズブブツ、ブチツ、ズブンツ……!

「ひいつ、ああつ……!?!」

乱暴すぎる一突きで膣口付近から子宮口まで一直線。それまで存在しなかった肉棒が平然と膣内に割り込み、制圧している。凹凸はしっかりと噛み合い、二人は一つに繋がった。後は、より深く仲を深めるために性交渉を続けるだけだ。

背中から箒が離れるのを感じた一夏は、枷から外された猛獣のようにセシリアに襲い掛かった。上から覆い被さり、セシリアの唇を奪いながら尻を上下に揺らすように動かす。

「はっ、んっ、ぢゅぶぶっ、ぐぢゅっ、くちゅっ、れろっ、ぢゅぶぶっ」
一夏は笑っていた。笑いながらセシリアの唇を下品に味わい、乱暴なプレスをお見舞いする。セシリアの膣内は一夏の肉棒によって激しく掻き回され、まさしく道具のように扱われている。

それでも、セシリアの表情に陰りは見えない。

「んふふっ、んちゅっ、ちゅぷっ、くちゅっ、ぢゅるっ、ぢゅるるっ、ちゅっ」

一夏の口を歓迎し、一夏の体を両手と両脚で抱きしめる。

一つとなつた一夏とセシリア。ベッドの上で激しく上下し、肉棒が高速でセシリアの膣内を出入りしている。結合部からはセシリアの処女膜が裂けたことで出た破瓜の血が溢れ、シーツを赤く汚す。

「ふふっ、はははっ……」

恋人以上に濃密な交わりを見せる二人を前に、箒は笑っていた。

「ようやく力の使い方にも慣れてきた。後は、経験値を貯めるだけだな」

そう言つて箒はベッドから立ち上がると、二人を置いて部屋から出て行った。

「あんっ、あぁっ、あんっ、あんっ……!」

箒の退出に気がつかず、一夏はセシリアを求め続ける。セシリアの膣内はすっかりと一夏の肉棒の形、味、臭いを刻みつけられていた。口も同じだ。もうセシリアは一夏以外の男では満足できないだろう。隅々まで廻られ、快楽を刻まれた。

「んっ、んふっ、んふふっ……!」

一夏のL.V. 100チンポに突かれ続けて虜にならない者はいない。目に見えないだけで、セシリアには首輪が嵌められ、その首輪から伸びた鎖は一夏の手に握られているだろう。もうセシリアは一夏の便利な母胎だ。一夏の性欲を処理し、一夏の遺伝子を持った子を産む未来が待っている。

一夏の腰遣いが速まり、セシリアの口を塞ぐ一夏の口が大きく口角を吊り上げた。

その直後、一夏が腰を震わせ、下腹部からこみ上げた欲望の塊を解

き放った。

ぶびゅぶぶぶつ、びゆるるるつ、どびゅびゆるるるつ、びゅーつ、どびゅびゅつ！

膣内に深々と突き刺さった肉棒が、睾丸とともに収縮しながら精液を吐き出す。吐き出し先は勿論セシリアの子宮だ。粘り気の強い精液が子宮全体を支配していく。尋常ではない量だ。瞬く間に子宮は白濁一色に統一され、精液の強烈な臭いで満たされた。

「んんっ、んんーっ!？」

子宮に精液を詰め込まれたセシリアは、体をビクビクと痙攣させていた。気持ちよさそうな顔で、強く一夏の体を抱き締める。一夏が垂れ流す唾液を口で受け止め続け、喉に伝わらせて胃に流す。

一夏は最高の気分だった。凄まじい快感に脳が喜んでいる。この感覚をもっと沢山経験したい。強烈な快感を感じている間も先の快楽を見据え、睾丸が精子を大量生産する。Lv. 100チンポに掛かれば、何回でも射精は可能だ。まだまだ沢山気持ちよくなれる。膣内だけでなく、セシリアの体の隅々まで汚し尽くすことができる。

もつと、もつと犯したい……！

一夏は射精をしながら早速腰を振り、二発目の準備に入る。もはや相手のことなど頭になく、自分が気持ちよくなることを最優先に考えていた。それでも、玩具のような扱われるセシリアには不満の色はなく、一夏という逞しい雄に屈服していた。

「これが、一夏さんのおチンポ……。こんなに、素晴らしいものだなんて……！」

心ここにあらずといった様子で陶醉するセシリア。一夏はその淫らで美しいセシリアに肉欲を刺激させられ、肉棒を硬くした。硬くなった肉棒は次の射精を控え、精液で汚れた膣内を何度も擦り、白く泡立たせた。

性戦の狼煙

もう何回出しただろうか。一夏は思いながら、真夜中にベッドの上で繋がっているセシリアの膣内に射精をした。四つん這いになって尻だけを突き上げるセシリアの長い金髪を引つ張り、膣奥に押し込んだ肉棒から欲望の塊を撒き散らす。

「うっ、おっ……はははっ！」

一夏は涎を口の端から垂らし、狂ったような笑みを浮かべて射精を楽しむ。

本当に気持ちがいい。相手のことを一切考えない種付けセックス。普通に生きていけば現実では味わうことはできないだろう。一夏は自分が置かれた境遇に感謝し、孕ませ奴隷であるセシリアの尻へと、感謝の平手打ちを放った。

「あ、ひっ……」

だらしない顔を枕に埋めるセシリアが小さな声を漏らして震える。しかし、もはや尻を突き上げていることが精いっぱいな様子でそれ以上の反応を示すことはない。セシリアと繋がってから今に至るまで一夏はセシリアを使い続けたのだ。

一夏は試しに膣内から肉棒を取り出してみた。すると、膣内からはすぐにごぷつと精液が逆流してきた。濃度と量のどちらも一級品の日本産精液がイギリス淑女の膣内から次々と溢れてくる。この様子では、一夏の日本人の遺伝子はセシリアの中で根を張っているかもしれない。

肉棒をセシリアの尻に擦りつけ、精液を拭き取る。

そうしながら次は何をしようかと考えていると、一夏の体に変化が起きた。

「……あ」

股間のL.V. 100チップを起点として正体不明の何かが生じた。それは徐々に一夏の全身を侵し、あつという間に全身を覆った。一夏が不安がる中で、その何かは一夏の精神を鎮静化させた。昂っていた欲望を鎮め、狂っていた人格を元へと戻す。

『Lv. 100チンポの特性『リフレッシュ』。その身に生じたバッドステータスを解消する効果がある。自身にとって不利なバッドステータスであればあるほど発動時間は速まる。今回受けたのは洗脳で、肉体的危機に至る状況でもなかったから、発動はかなり遅くなつたみたい。洗脳セックスは楽しめた?』

聞き覚えのある少女の声を耳にして、一夏はやがて絶望を覚えた。正気を取り戻した一夏が目にしたのは、精液塗れになった金髪美女の姿。着ていたネグリジエはズタズタに引き裂かれていて、白い肌にはキスマークが大量に残っている。そして、膣口から延々と溢れ出てくる白濁の粘液。

まんまと洗脳に掛かった自分が、セシリアを犯したのだと一夏は理解した。操られていても行為中の記憶は鮮明に覚えている。セシリアの体の魅力は脳内にしつかりと刻みつけられ、もう忘れることはできないだろう。一夏の自慰ネタにセシリアの項目が増えた。あとから、ゲームの回想のように思い出すことが可能だった。

「俺は、何てことを……」

千冬と箒以外に被害を出さないように努めていたというのに、呆気なく失敗に終わった。その失敗の原因となったのが箒だ。箒が使ったであろう、特殊な力のせいだった。

確か、箒は『精神掌握』と言っていただろうか。操られている時の記憶から、一夏は箒に与えられてしまった力の名称を把握する。効果はその名前の通りなのだとしたら、洗脳することも他人の精神状態を調べることも可能なのだろうか。

一夏はベッドの端に座り込み、片手で頭を覆う。

「俺のせいだ……」

一夏が最初に暴走した時、犯してしまったのが箒だった。あの時に力が譲渡されたのだろう。精神掌握の力を得た箒はその力の本質を理解し、一夏のためにはと思つて一夏やセシリアに洗脳を施した。

その結果がこれだ。二人きりで濃密な種付け。取り返しはもうつかないだろう。

「ごめん、オルコットさん!」

一夏は、ベッドに倒れ伏して放心状態のセシリアに謝罪した。謝つて、せめてもの償いとして今はセシリアの体についた汚れを拭うことにした。部屋にあったウエットティッシュを手にとって、精液を取り除く。勿論、膣内の精液も対象だ。

「…………ごめん」

膣内に中指を押し込み、自身が出した精液を掻き出す。凄まじい量だ。一人の女性にこれだけの子種を注いだことに一夏は自分で驚愕し、子どもを身ごもったセシリアの姿を一瞬だけ想像した。セシリアの美しい体に宿る、一夏の子ども。一夏は息を呑み、しかしすぐに邪な感情を振り払った。

セシリアの体がある程度綺麗にし終えた一夏は、汚れていないシートをセシリアの体に掛けた。この行為は気休めだと理解してはいるが謝罪をせずにはいられず、一夏はまた頭を下げてから着替えを始めた。

セシリアには悪いが、今は優先して対応しなくてはならないことがある。一夏は寝間着用の半ズボンとTシャツを着ると、部屋を出た。向かう先は、箒の下だ。人の身に過ぎた力を得た箒が部屋を出てからも数時間も経っている。悪い予感がした。一夏に対して狂った忠誠を誓う箒が力を使うことを躊躇うはずがない。

まずい。一夏は足を速め、生徒が寝静まった寮内をひた走った。非常口への誘導用の標識が緑色に光る暗い廊下を進み、時折足を止めて音を探る。大きな音が聞こえればそこで何かが起こっているのだとわかるのだが、生憎音は聞こえなかった。ここにはいないか、それとも静かに事を成しているのか。

箒がどこにいるのかはわからなかった。だが、何もせずじっとしていることもできない。一夏は手当たり次第に箒を探そうと、階段へと足を運んだ。

と、その時、曲がり角から現れた一人の女性とばったり鉢合わせた。

「うわっ。ち、千冬姉！」

「…………織斑。こんな時間に何をしている」

千冬だった。ジャージに身を包み、手に持った懐中電灯で周囲を照

らしている。

「どうして、千冬姉がここに……？」

「見回りだ。私は一年の寮監だからな。これが終わったら寝るつもりだったが……」

千冬は一夏の慌てた様子を見て、何かがあったのだと悟ったのだろう。

「今度は何があった」

真剣な様子で尋ねてきた千冬に対して、一夏は一瞬戸惑った。やはり、姉に自分が経験した恥ずべき行為を話すのには抵抗があった。だが、もはや今更だとも思い、一夏は事の顛末を全て話したのだ。

神と名乗る少女によって、自身に『Lv. 100チンポ』とその他に二つの力が与えられたこと。それが暴走し、箒を犯し、千冬と交わってしまったこと。そしてその際に箒へと力の一つ『精神掌握』が渡ってしまった、力を使った箒に洗脳され、セシリアの体を汚してしまったこと。力を使った箒は行方を眩ませ、それを今追っていること。

全てを聞き終えた千冬は、「なるほどな」と言ってからため息を吐いた。

「嘘ではないのはわかった。だが、それが全て真実だと思うと、頭が痛い……」

「えっと、千冬姉……？」

「悪い。独り言だ。……それよりも、今は篠ノ之を止めるぞ」

「あ、ああ。でも、どこにいるのかわからないんだ……」

「安心しろ。私に手がある」

千冬はそう言って周囲の廊下を見回した。当然、周りには箒はいない。一夏は意識を集中させて周囲を警戒する千冬を見て、首を傾げた。今まで見たことがないような挙動だ。音を探るわけでもなく、まるで別の何かに頼って箒を探しているかのようだった。

もしかなくとも、一夏のもう一つの力が渡ったのは、千冬なのだろうか。だが、今までの経緯を話したときに千冬は何も言わなかった。一夏の味方である千冬が力を得ていれば、そのタイミングで打ち

明けてくれるはずだった。

それならば、いったい誰に残りの力が渡ったというのだろうか。

「千冬姉」

素直に聞いてみようと考え、一夏は千冬に声を掛けた。

だが、「静かに」と告げた千冬によつて一夏の口は手の平で覆われた。

そして、沈黙状態にさせられたまま数秒が経過。

「篠ノ之の気配がする」

「えっ……？　ど、どこに……」

千冬の手を口から離し、一夏は周りを見渡した。しかし、誰もいない。

「向こうだ。ついてこい」

そう言つて歩き出す千冬。その足取りに迷いはなく、決して適当なことを言っているのではないとわかった。千冬はいつだって真面目で、意味のない嘘をつくような人間ではない。それを知っているからこそ、一夏は安心して後を追うことができた。

だけど、やはり今の千冬に一夏は思うところもあった。

物音が聞こえるわけでもなく、目に見えない場所にいる人の気配など探れるわけがない。確かに身体能力が常人のそれよりもずば抜けている千冬だが、それを成すことができるのは人の枠組みを超えた者だけだろう。

千冬には力が宿っている。それなら、何故一夏にそのことを伝ええないのか。

この時、一夏は千冬を疑わなかった。きっと何か事情があるのだろう。箒と同じように一夏の餌食に遭った千冬は、被害を受ける前と変わらない様子だ。Lv. 100チンポであろうと、千冬を精神を犯しきれなかったのだ。今も千冬が一夏のためを思つて行動してくれることに間違いはない。

千冬は本当の意味で、一夏が現状頼ることのできる頼もしい味方だった。

千冬という存在に勇気を与えられ、一夏は少しだけ前向きな思考を

手に入れられた。

一夏は千冬の後が続いて廊下を進み、階段を降りて学生寮を出る。まさか寮を出るとは一夏も思ってもいなかった。人がいる場所に箒がいると思っていたからだ。しかし、千冬の足は人のいる学生寮や教職員寮から離れていく。

並木道を横断するように抜け、ひたすら真っ直ぐ向かう。

この先には海が広がっている。真夜中のこんな場所に人などいないはずだ。

一夏のその想いとは裏腹に、白い制服を着た少女の後ろ姿が映った。綺麗な黒髪。ポニーテールに結んだ長い髪が風に揺れる。遠い夜空に浮かぶ月を見上げ、海へと続く道を隔てた柵を前にして佇んでいる。

「篠ノ之」

一夏が声を掛ける間もなく、千冬がその少女、箒に向かって話しかけた。

後ろを振り向く箒。驚いた様子もなく、柵に手を置いて穏やかな笑みを二人に向けた。

「こんな時間に無断で外へ出るな」

「すみません。織斑先生」

「今回は処分を下さないが、次は罰を受けてもらうぞ」

「はい。すみませんでした」

箒は頭を下げた後、顔を上げる。箒は楽しげだった。いったいここで何をしていたのか。ただ、海を見ていただけとは到底思えない。箒の思惑を図りかねた一夏だったが、今は他に聞くべきことがある。一夏は箒に歩み寄り、箒の両肩を掴んだ。

「箒。聞きたいことがある」

「ああ。何でも聞いてくれ、一夏。私で答えられることなら何でも答えよう」

一夏を正面にしても箒の態度は変わらない。自分が行った何かを期待し、笑みを零しているようにも見える。考えすぎだろうか。一夏は変わってしまった箒を見て、不安な気持ちで胸がいっぱいだった。

「箒には今、力が宿っている。それは『精神掌握』っていう力だ。それに間違いは？」

「一夏の言うとおりで。私には、一夏から貰った力がある。とても素晴らしい力だ。人の心を操ることも、やろうと思えば把握することもできる。今の一夏は、とても心がざわついているな。欲望は、落ち着いているようだ」

信じたくはなかった。それでも、箒の口から告げられては信じざるを得なかった。

「ごめん、箒。それは全部、俺のせいだ……」

一夏は、千冬にしたように箒にも事の経緯について説明した。信じてももらえないかと知れないが、箒にも伝えておかなくてはならない。一夏の暴走によって被害を最も受けたのは箒なのだから。

「本当に、ごめん……」

「謝るな、一夏。この力を得ることができて、私は後悔していない。この力があれば、理想郷を作れるだろう。一夏以外の人間がお前に従う理想だ。見目麗しい女は皆、お前の遺伝子を後世に残し続けるための母胎となるんだ」

箒は言いながら一夏の頬に手を伸ばし、撫でる。

「一夏、待っていてくれ。お前は自分の欲望に従ってくれていればいい。母胎も金銭も居場所も全部私が用意する。お前のために、世界中の人間をゼーんぶ操ってやるからな。ふふっ、あははっ！ とても、とても楽しいなっ！ あはははははははっ！」

一夏を見つめる箒の瞳は昏く、ぞつとする冷たさを秘めていた。その瞳のまま笑う箒は狂気に満ちていた。

それでも、一夏は箒から目を背けることはしない。肩に置いた手を離すことはしない。

「違う。それは、俺の理想じゃない」

「そうだな。優しい一夏はそう言うよな。それじゃあ、想像してみてくれ。お前好みの女達が皆、胎でお前の子を孕んだ姿を。皆、腹を痛め、栄養を分け与えてお前の子を育てるんだ。全ては、お前を悦ばせるために。お前は女に子どもを産ませ、また乱暴に種を植え付けてや

るんだ。女の体が壊れれば、捨ててもいいだろう。女はいくらでも補充が可能だ」

箒に言われるがまま一夏は想像してしまった。そして、その想像を実現したいと思う心の暗い部分も確かに存在する。

「今、想像して悦んだな。そうだ。一夏は心の奥底ではそうした理想を求めている」

「違う」

「一夏はそういう人間だ。それでいいんだ」

「違うっ……!」

一夏は堪らず息を荒らげ、箒に反論する。自分がそこまで下衆な人間ではないと思いたかった。欲望に支配されている時はともかく、理性に準じて生きている時にその考えを肯定するような人間にはなりたくなかった。

「箒、もう力を使わないでくれ……! 俺にはそんな理想は必要ない」

「駄目だ」

「なんでだよっ……!?!」

箒の肩を掴む一夏の手に入力が入る。その痛みすらも箒にとっては快感のようで、妖しい色香が表情に広がる。それは一夏の欲望を呼び覚ますきっかけとなりそうで、一夏は箒の肩から手を離し、慌てて後ろに後退した。

一夏から自由になった箒は、後ろへと下がった。

「この冷たい世界の中で、小学生時代にお前と過ごした記憶はいつも温かかった。その温もりに縋って、私はこの六年間生きてきた。そして、IS学園に入学して、一夏と交わって改めて思い知ったんだ。一夏の素晴らしさを。お前はきつと、この冷たい世界すらも温かく包み込んでくれる。私はそう信じているから、この世界に住む有象無象を支配してお前色に染め上げようと思った。これは世界のためでもある。一夏のためにもなると、今も思っている。だから」

一歩、また一歩と後退し、箒は柵の前で止まる。

「一夏。私を止めなければ、死ぬと命令してくれ。私は喜んで、海の藻屑と成り果てよう」

「な、んで、そうなるんだよ……」

「私は止まる気はない。仮に私が生きたまま軟禁されたとしても、力を遠隔で使い続けるだろう。だから、私を止めなければ私の命を絶て。そうしなければ、大勢の人間が犠牲となる。さあ、どうする？」

私の命も、一夏の自由だ」

できるわけがない。箒も被害者なのだ。だが、やらなければ数多くの者が犠牲になる。小を切り捨て、大を救うか。小を救うために大を犠牲にするか。一夏はどちらを優先すべきか、悩みに悩んだ。

どうすればいい。一夏はすぐには結論をつけられず、答えあぐねた。

「一夏」

そのとき、横で静観していた千冬から声が掛かる。

「千冬姉……」

「無理をするな」

「でも……」

そう言つて俯く一夏の肩に触れてから、千冬は箒へと顔を向けた。いったい何をしようというのだろうか。一夏は顔を上げ、二人のやり取りを見つめることしかできなかつた。

「箒。一つ確認してもいいか？」

「どうぞ」

千冬からの問いに、箒は余裕の表情で頷き返した。

「お前は、一夏の意志を完全に無視してまで理想とやらを實現させるつもりか？」

しかし、箒の表情は困惑へと変わった。

「いえ……。私にとつての理想は、一夏が自分の意志で世界を統治することです。ただ操られているだけの一夏では、完全な理想にはなりません。一夏にはゆつくりと時間をかけて堕ちてもらい、自身がこの世界の支配者に足る人間だと自覚してもらいます。そのためなら、何千、何万という人間を犠牲にすることも厭わないつもりです」

「そうか。ならば、提案がある」

「提案、ですか？」

「ああ。一夏と箒。お前達で勝負をしろ」

「勝負？ 千冬姉、何を言ってる……」

「勝負に使用する場所はIS学園の敷地内。この範囲であれば、各自が持つ力を自由に使って構わない。箒の勝利条件は、一夏を完全に墮とすこと。一夏の勝利条件は、Lv. 100チンポの制御に成功すること。負けた方は、勝った方の言い分に積極的に従うこと。いいな？」

「千冬姉！ それじゃあ、皆が犠牲になる！」

一夏が千冬に食って掛かる。IS学園の教師であるはずの千冬が、IS学園にいる者達を切り捨てたかのような発言をしたのだ。迷っていた一夏と違い、結論を出した千冬だが、その結論に納得ができない一夏だった。

一夏からの反論に、千冬は真剣な顔で一夏の顔を見据えた。

「今の箒が力を手にしてしまった以上、遅かれ早かれIS学園は箒の支配下に置かれる。もはや、他の者達を助けることはできないだろう。心苦しいのはわかる。だが、過程を考慮に入れていけるほど、お前達が得た力は生易しいものではない。今はよりよい結果だけを見据えて行動しろ。一夏。お前が勝負に勝って、箒に支配された者を救え」

一夏は言葉も出なかった。それしか方法がないのだと理解してしまったからだ。

一夏の沈黙を見て反論はないと判断した様子の千冬が、続けて箒へと問いかけた。

「箒はどうだ。この勝負、引き受けるか？ それともくだらない提案だと断って、今すぐ全てを支配するか？ お前には必ずしも提案に乗らなければならぬ理由などないだろう。一夏を拘束して快樂を味わわせ続けたほうが効率がいいだろうからな」

「いえ、受けて立ちますよ。こんな私でも、有象無象を操るのには後ろめたい気持ちもあります。勝負として力を使うことを許してもらえるのはありがたい。正々堂々と、力を使って一夏を手籠めしてみせます」

箒の答えに、千冬は納得したように頷いた。

「よし。それでは決まりだ。勝負は明日の朝から。I S学園の敷地内でならば自由に力を使ってもいい。ただし、人命を脅かす行為は絶対に避ける。以上だ」

一方は力を否定し、もう一方は力を肯定している。力に翻弄された若き二人の性戦が、ここI S学園で始まろうとしていた。

姉と訓練

飴を舐めるように、舌が龟头や裏筋をざらざらと撫でる。一夏の肉厚な雄の象徴は鋭敏に反応し、姉である千冬のふんわりとした双丘の間でビクンツと震える。そんな肉棒を鎮めようと千冬が乳房を押しつけるが、逆効果でしかなかった。

「お、おお……」

椅子に腰かけていた一夏は、手摺りに両手を置いたまま背筋を反らした。

ぶくうと尿道口から我慢汁が溢れ出る。それは即座に千冬の舌で拭い取られ、龟头全体に馴染ませるように広げていく。複数回に亘って我慢汁を塗りたいくらいれた龟头は今、照明の光を浴びて輝いて見えるようだった。

「こっやってじつくりと嬲られるのも、いいものだろう」

伸ばされた一夏の両足の間に膝を突き、パイズリフェラをお見舞いする千冬。衣服を全て脱ぎ捨てた一夏と同様に、千冬の身を覆う物は何もない。誰もが見惚れる抜群のスタイル。男ならば喜んで抱きたくなるような官能的な女体を晒し、一匹の雌として弟の相棒へと性奉仕をし続ける。

静かな時の中、室内には水音だけが響く。

既に日付は跨いでいる。当然だが、今日も授業がある。千冬は教師として、一夏は生徒として役割を果たさなくてはいけないのだが、二人は未だに眠りに就かず、一夏の精液を搾り出すという一つの目的に従事していた。

千冬という立会人の下、一夏と箒の間で性戦の取り決めを交わした。それがつい先ほどの出来事だ。本格的な闘争は本日の朝から始まるため、まだ時間の猶予はある。その間に少しでも英気を養っておくべきだと一夏は思っていたが、千冬は一夏にとある提案を挙げた。

今日一日は箒と距離を置いて、私の部屋でセックスの訓練をしないか、と。

一夏と箒はルームメイトだ。箒はともかく、いつ自分の性欲が暴走

するかわからない一夏にとって箒が傍にいるのは分が悪い。それならば、事情もわかっていて、既に肉体を許した間柄の千冬と行動するのが安全ではあるし、訓練をするというのも一夏は賛成だった。

千冬に説かれた一夏は了承し、こうして千冬の部屋にやって来ていた。

「なあ、千冬姉……」

「なんだ？」

「もうそろそろ、寝ないか……？」

「まだいいだろう」

「で、でも……」

「ぢゅーっ、ぢゆるるっ、ぶちゅっ、ぐぷっ、ぢゅぢゅ、ぢゅぶんっ」

千冬は両手で抱えた乳肉を肉棒に擦りつけ、亀頭を丹念にむしゃぶり尽くす。一夏の言葉を聞く気はないらしい。

「ぶぢゅっ、ぢゅぶっ、ぢゆるるっ、ぢゅぼっ、ぐぷっ、ぐぼおっ」

一夏の目を見つめたまま、千冬は生殖器に吸いつき続ける。立て続けに襲い来る快樂に一夏は喘ぎっぱなしだ。姉に下の世話をされる背徳感という名の栄養は凄まじく、肉棒はどんどん活発さを増す。バッキバキの勃起チンポが出来上がっていた。

「ちゅぶっ……。ふふっ、こんな状態では眠れないだろう？」

千冬は巨乳の部類ではあるが、一夏の最凶チンポを覆い尽くすことはできない。左右から肉竿に密着する乳房の間から赤黒い棒が姿を覗かせ、千冬の眼前に立ちはだかる。気のせいであれば、肉棒を瞳に映す千冬の表情が緩んでいた。

むにゅっ、ぬちゅっ、と一夏の我慢汁に濡れた乳房が肉棒を揉み解す。

「っ……っ……」

「できるだけ我慢しろ。この立派な一物の扱い方を学べ」

「簡単に言うけど……」

「箒に勝つにはそれしかない」

千冬はパイズリの動作を速める。その一方で、千冬は舌の往復ビンタを亀頭に放つ。舌にはたっぷりと唾液がついており、ビンタの度に

亀頭を濡らす。亀頭と千冬の舌の間で唾液の糸が伸びては千切れ、伸びて千切れを繰り返す。

その光景を、屹立する肉棒越しに見てしまった一夏は、心臓が高鳴らせた。

これは本当に訓練なのか？

「ぴちやつ、ぢゆるっ、ちゅっ、んちゅっ、れろおっ、ちゅううっ」

一夏には千冬が楽しんでいるように見えた。

「ちゅぷっ、ぐぷうっ、ぐぽおっ、ぢゅぽっ、ぢゅぞぞーっ、ぢゅー、ぢゅーっ！」

「うっ……！」

追い打ちを掛けられ、一夏は呻く。興奮はもう抑えが利かない。下腹部の奥が熱くなり、快感が押し寄せる。圧倒的な物量に抗うことなどできるわけもなく、肉棒は射精を始めた。

どびゆるるっ、びゅびゅびゅーっ、ぶびゅっ、びゆるるるーっ、どびゅっ！

「んんっ……!?!」

亀頭をかぷりと啜え、千冬が尿道を吸引する。飛び出た精液は千冬の口に広がり、喉へと流れていった。半ば放心状態の一夏は、千冬が喉を鳴らして精液を飲み下す様を眺めていることしかできなかった。

「ごくっ、んぐっ、ごきゅっ、ごくっ、ごくっ……！」

「ち、千冬姉……！」

「ぢゆるるっ、んくっ、ぢゅぞぞっ、ごくっ、ごくんっ……！」

吸いつくされる。千冬は一夏の怪物チンポの射精量にも負けてはいなかった。

ゴシゴシと胸で撫でられながら、肉棒が落ち着きを取り戻してきた。

「ぷちゅっ」

千冬は亀頭を解放する。無事に精液を飲み干し、唇の精液を舐め取った。

「一夏の精液で胃が犯されそうだ」

言いながら、千冬はパイズリを再開させる。柔らかい摩擦が肉棒を

襲う。

「ま、まだやるのか？」

「訓練と言っただろ。一回きりじゃなくて、積み重ねないとな」

千冬は手を休めない。むにゅにゅっと乳房で挟み込んで、上下に扱きながら亀頭に口づけをする。千冬の求愛によって肉棒は即座にフル勃起。射精直前と変わらない姿を取り戻し、千冬に可愛がられる。

その後も一夏は、千冬によって文字通り扱かれ続けた。射精しては千冬に吸われる。できるだけ射精を我慢するように言われるものの、大した進歩もなく、一夏は大量の精液をぶちまけた。さすがの量に千冬は全てを飲み切れず、千冬の顔面や胸にも精液がぶっかけられていった。

「まだまだ濃いな……」

精液に濡れた顔に微笑を湛え、白濁色のゼリーのような精液が乗った乳房を動かし続ける。ぱちゅんっ、と精液でコーティングされた胸が一夏の股間に叩きつけられる卑猥な音が一定間隔で奏でられた。

出そうと思えば一夏は延々と射精できる。しかし、いくら精力が無尽蔵であっても精神的な疲労はどうすることもできない。千冬のねちっこい攻めは刺激が強く、一夏の意識はガリガリと削られていく。

「限界か？」

千冬の声が遠くに聞こえる。

一夏がしばらく返事をできずにいると、肩を担がれた。高校生の平均的な体格である一夏の体を容易く持ち上げた千冬が、ベッドへと一夏を運ぶ。

「後はこちらに任せろ」

もはや夢現状態の一夏を見下ろし、舌なめずりをした千冬が一夏の股間に跨る。

「寝ている間に、たっぷり訓練してやるからな？」

慣れた手つきで肉棒を膣口で啜え、ずぶぶつと呑み込んでいく。膣の奥まで誘い、一夏という雄と完全な結合を果たす。黒髪を揺り動かし、一夏の精液でどろどろの胸を上下に震わせながら一夏というステージの上で踊り始めた。

今の千冬は妖艶な踊り子。教師としての面影はどこにもない。その姿を見届けて、一夏は瞼を閉じた。

「おはよう、一夏」

目を覚ました一夏へと、千冬の口づけが放たれた。

窓から見える空は白み出している。もう朝が来たというのに、千冬は一夏の上で腰を振っていた。何回膣内射精を繰り返したのか。一夏の股間には大量の子種汁が乗っていた。精液を直接注入された千冬の膣内はこの比ではないだろう。

「おはよう……」

「ちよつと待て。すぐ射精させてやる」

「千冬姉、もしかして寝てないのか……?」

「さて、どうだったかな……」

出された精液の量。千冬の肌には汗が滲んでいて、長時間運動をした痕跡が確認できた。

ずっと一夏とセックスをしていたのなら、千冬に寝ている時間はなかったはずだ。しかし、どういうわけか顔色は健康的で、むしろツヤツヤとしている。十分な休息をとったように見えるのは何故なのだろう。

膣肉が肉棒に纏わりつき、ガシガシと扱く。パンツ、パンツ、パンツ！ と千冬が尻を一夏の股間に叩きつける。寝起きには厳しい快感の暴風を浴びせられ、一夏は意識の覚醒と同時に射精を迎えた。

どぶっ、ぶびゅっ、びゆるるっ、どくっ、びちやちやつ、どぶんっ！

「ふう……。今回はこの辺にしておこう」

千冬は伸ばした右手で一夏の下腹部を撫で、膣から零れた精液を手で拭う。

固まりかけた白濁液。それを舐め、千冬は口元を綻ばせる。

「汗と精液でベタベタだ。シャワーを浴びに行くぞ」

「あ、ああ……」

夢ではない。千冬はやはり、一夏とのセックスを楽しんでいるように見える。

千冬を信じていいのか。ここに来て、一夏の心に疑念が湧いた。

そして、遂に朝が来てしまった。いつ筭の魔の手が忍び寄ってきてもおかしくはない。こんな状況で頼りがいのある唯一の味方を疑うのは得策ではないが、一度抱いた疑心は簡単に払拭することなどできなかった。

千冬に手を引かれ、二人でシャワー室に向かう。

二人で入る必要はあるのか。寝起きのせいでろくに回らない頭では冷静な判断を下すことはできず、一夏は千冬と一緒にシャワー室に入った。

案の定というか、千冬は再び一夏を誘った。

「もう一回だけこの肉穴を使ってみないか？ お前が出した精液が溜まっついて、すごく温かいぞ？」

壁に手を突き、陰部を指で開きながら尻を左右に振った千冬。不敵な笑みで誘われ、膣からはごぷりと零れる精液を見せられて、一夏はごくりと生唾を飲んでから千冬の腰を掴んだ。勃起しっぱなしだった肉棒の先を精液の逆流が続く膣内へと挿入し、自ら腰を振る。

これは訓練だ。望んでやっているわけじゃない。

一夏は自分に言い聞かせ、千冬と一緒にシャワーを浴びながら立ちバツクを始める。

「ふふっ……」

千冬が零した笑い声は、シャワーの水音に掻き消されて一夏に届かなかった。

奇襲

一夜を姉と過ごし、存分に可愛がられた一夏。千冬の部屋を出て扉を背にした直後、どつと精神的な疲れが押し寄せてきた。その場で座り込みたい衝動に駆られたが、さすがにそんなことをするほど余裕がないわけではない。心はともかく、体は非常に活力に満ち溢れている。

あれだけ出したのに。

千冬の膣内にたつぷりと注ぎ入れ、溢れ出た精液が一夏の股間を濡らす様を思い出す。その上で千冬が楽しそうに腰を振る光景は今も鮮烈に脳に刻まれている。回想しながらの自慰が捗る程度には魅惑的な場面だった。

悪い考えを振り払うように頭を振り、一夏は足を前へと動かした。教職員寮を出て、すぐ近くにある学生寮に入る。今は早朝に近く、寮内を歩いている人影はなかった。その隙に、と一夏は素早い足取りで自室へと向かった。

箒による宣戦布告後、初めて迎えた朝。何が起こるのか、一夏は具体的なことを想像できなかった。ただ、何か良からぬことが起こるだろうと思っていた。その対象はおそらく、学園の敷地内にいる全ての人間に及ぶはず。

誰かと出会った瞬間に襲われるかもしれない。

「戻る前にトイレ……」

最悪を想定して行動した一夏だったが、生理現象には敵わない。部屋へと向かっていた進路を修正し、寮の端へと向かう。そこには寮内で唯一の男子トイレがある。元々女子トイレだった場所を学園側が一夏のためにと男子トイレに変えてくれた場所だ。変えたと言っても、トイレ前の壁に取り付けられているプレートの絵柄を男性マークに変えただけだ。中には小便器はなく、洗面台と個室トイレがズラリと並んでいる。

トイレに入って個室に入り、用を足す。もしかすると学校内で唯一落ち着ける場所かもしれない。いざという時があればここに逃げ込

めばいい。今までの人生で見てきたトイレの中で一番清潔感を保っているということもあり、一夏は安堵した。

誰にも邪魔されず自由な時間。

しかしそれは、用を済ませて洗面台へと向かい、手を洗っている途中で崩壊した。

「あ、織斑君だ！」

扉が開き、女子生徒が入ってきた。

え？ と一夏は鏡に映る侵入者の姿を見つめ、手を止めた。

ショートヘアの活発そうな少女。ショートパンツとシャツという飾らない部屋着姿だ。見覚えがあった。確か、同じクラスだったはずだ。

「な、なんでっ」

濡れた手を拭いている余裕もなく、一夏は後ろを振り向いて声を上げる。その矛先となった少女はというと、何故か不思議そうな顔をしていた。トイレに入って一夏の下へと近づく。

その少女の表情に楽しげな色が滲み始めたときには、一夏は洗面台の隅へと追いやられていた。異性の距離感というものを知らないのか、少女が一夏に対して過剰に接近してきたため、一夏は後ずさるしかなかった。

「おはよう、織斑」

「え、あ、おはよう、えっと」

平然と挨拶され、一夏はしどろもどろになりながらも声を返す。そんな一夏を見て何を思ったのか、少女は自身の顔を指差した。

「あ、私のことわからない？ 同じクラスの相川あいかわだよ？ 相川清香きよか。これからよろしくね。何か困ったことがあったら何でも言ってみて？ 私にできることがあれば、何でもしてあげるから」

気さくな性格。こういう場面でなければありがたかっただろう。

「相川さん……」

今まさに困った状況に陥っている一夏は、その原因である清香に尋ねることにした。

「どうして、男子トイレに……？」

「え？」

言われてもなお、清香に自覚意識はないようだった。寝ぼけているのか。それか、ここが男子トイレとなっていることを認識していないのか。どちらかであってくれればという一夏の望みは叶えられることはなかった。

「どうしてって、織斑君知らないの？」

「何を……？」

「今日から、トイレも大浴場も、更衣室も男女共用になったんだよ。」

一夏は濡れていることも気にせず、手で顔を覆った。

聖域は失われた。おまけに更衣室まで。浴場は元々女子しか使えず、一夏も使えるようにしてくれると副担任である山田真耶が言っていたが、こういうことではないだろう。一夏が専用で使用できる時間を設けてくれるはずだった。

「やられた……」

小さく呟く一夏の脳裏には、楽しそうに笑う箒の姿があった。見惚れてしまうような綺麗な笑顔のほずなのに、今はそれが恐ろしい。改めてこの状況の不味さを考え、一夏は血が冷たくなるような感覚を覚えた。

「おーい、織斑君？」

清香が思考に没頭する一夏の眼前で手を振る。しかし、追い詰められた一夏は目の前の変化に対して鈍感であり、清香に応答もできない。

それを好機と見なしたのか、清香がにやつと口の端を上げた。

「えいつ」

伸ばされた清香の右手が一夏の股間を掴む。寝間着用の半ズボンの上から柔らかい場所をがっしりと。衣服越しの肉棒マッサージを始め、「おつきいね……」と赤らめた顔で自分よりも背の高い一夏を見上げている。

「は……？」

一夏は遅れて反応する。

名前も覚えていなかった同級生に、トイレでチンポマッサージ。も

たれかかるように身を寄せられ、退路を塞がれている。「よしよし……」と子をあやす母のような慈しみで接しながら、雄を前にして発情する雌の匂いを放っている。

「これから織斑君にはお世話になるから、私もすっかりお世話してあげるね？」

熱い息を吐き、一夏の息子を手で揉み解していく清香。硬く、本来の大きさを取り戻しつつある肉棒とは別に、一夏の心中も極度の緊張状態に入っていた。

どうしていきなり。一夏の体から放たれる、雌を惑わすフェロモン。それは定期的に暴走する可能性も孕みつつも、抑えることに成功していたはずだ。気がつかないうちに漏れていたのか。いや、それはない。既に制御方法を心得ている一夏には、今もまだフェロモンが制御下にあることがわかっていた。

フェロモン以外の何かが原因だ。となれば、原因は明らかだった。「トイレもだけど、織斑君のおチンポもこれから共有だからね。勿論、篠ノ之さんみたいに選ばれた優秀な母胎が優先されるけど、私みたいに織斑君と接点がない子でも織斑君を癒してあげられるようになったんだよ」

清香が肉棒を手で覆い、むにゅむにゅと何度も掌握してくる。

「頑張った子、織斑君に気に入られた子は、なんと、織斑君専用の母胎として生きる権利が与えられるんだ。織斑君に使われて、種付けされて、子を産み続ける生活。考えるだけで、すごく幸せだよね」

ニマニマと笑いながら、清香は肉棒を弄る手を止めない。

一夏は逃れられなかった。やろうと思えば力任せにこの場から離れることはできるはずだ。それなのに、一度接触され、甘い言葉を囁かれてヤル気になった肉棒が去ることを許してくれない。下着の内側で、どくんつ、どくんつと期待に震えている。

「織斑君の子作り専用機になれるように、私頑張るからね？」

清香の右手が股間から一度離れ、一夏のズボンに指を引っ掛ける。ぺろりと唇を舌で舐める清香の仕草に魅了され、体内から熱が湧き上がる。駄目だ、と思っても熱の放出は止まらず、欲望に侵食されてい

く。

その間に、清香はズボンに掛けた指に力を入れ、引きずり降ろし始めた。

ズボンが膝まで下げられ、勝手に足元へ落下した。中に履いていた下着が現れ、大きくテントを張っている様も見られてしまった。動揺、畏怖、興奮。瞠目した清香の表情に様々な感情が走るのを確認した直後、清香の体から膝から崩れて落ちた。

「ああ……」

抑えきれない感情を声にして、清香は下着越しの肉棒に注視する。

「これが、織斑君の……」

誘われるように再び清香の両手が下着へと移動を始め、勿体ぶるところもせず下ろす。

ブルンツと跳ねるように現れたフル勃起中の肉棒にとって、眼前で膝を屈した雌一匹を魅了し尽くすには十分のようだった。トロン、と清香の目がどこか虚ろになる。正気を失い、肉棒しか見えていないといった様子で一点を捉えている。

一夏は目の前で呆気なくメス堕ちした同級生に対し、何もできなかった。

「うっ……」

「うーん、ああ、素敵い、こんなすごいものがあるなんてえ……」

清香が顔を近づけ、肉棒に頬擦りをする。温かい息を掛け、雄を濕える言葉を紡ぎ、尿道から溢れた我慢汁を恵みの雨であるかのように顔で受ける。その度に清香の表情が蕩け、幸福の感情が滲み出ていた。

「織斑君、お願い、なんでもする、何してもいいから……舐めさせて？」

雌の必死の懇願に、一夏ではなく、肉棒が首肯するように震えた。

「ありがとう、それじゃあ、いただきまーす」

ご馳走を頬張るかのように口を開き、清香が肉棒にしゃぶりついた。まだ何も言っていない、という一夏の主張は言葉にならず、唐突に始まったフェラチオにただ身を任せることしかできなかった。

「あむっ」

龟头を啜えられた。両手で肉竿を握っている。

「ぐぱぷっ」

と、喉奥へ肉棒が誘導されていく。美味しいと心の底から思っているのだろう。陶酔した様子で口腔に肉棒を誘い、唾液に濡れた舌と粘膜で歓迎する。

だが、全てを呑み込むことはできないようだった。口内で啜えられずに余った肉竿を両手でゴシゴシと扱きながら頭を前後に揺らす。

「ぢゅぷっ、ぐぷっ、ぢゅぽお、ぐぷっ、ぬぷんっ、ぢゅぼぼおっ、ぐぷっ！」

頭を動かし、髪を揺する。シャンプーの香りを一夏に届けながら、唾液でとろとろの口マンコで一夏をもてなす。粘膜が纏わりつき、舌がカリ首の溝を擦る。特に裏筋に刺激を啜えられ、一夏は眉を歪めた。

気持ちいい。熱々で蕩けるような口に吸いつかれ、肉棒を自分の意思で取り出せない。一夏は必死に無駄な抵抗を続け、欲望に勝てずに辛苦の声を震わせながら、清香の頭に両手を乗せた。

「ぶぢゅっ、ぢゅぷうっ、ぐぷっ、ぢゅぼおっ、ぐぷっ、んぷっ、ぢゅるるるっ！」

立て続けに襲う奉仕。それを一夏の体が受け入れ、勝手に興奮を高めていく。

もう、駄目か。やはり制御が利かず、ここまで来たら一発出すしかない。

「ぢゅぽっ、ぐぢゅっ、ぢゅぞぞぞっ、ぐちゅっ、ぬちゅっ、ぢゅぼおっ！」

ごめん。一夏は清香へと謝罪し、膨らみだした興奮の抑制を諦めた。

無駄に抑圧されていたことで興奮がより一層高まった。ちょうどそのとき、清香の右手が一夏の陰囊へと移動し、ボールを握るように弄り始めたのがきっかけとなった。予想していなかった箇所への奉仕に不意を突かれ、肉棒が震える。

底から立ち昇る欲望。その気配を察知し、一夏が呻いた瞬間、放出

が始まった。

びゅるるるっ、ぶびゅるるーっ、どびゅーっ、どぶっ、どくんっ、ぶびゅるっ！

「んんんっー!？」

瞬間、清香の頬が膨らむ。精液が口内に広がり、清香は慌てて喉を鳴らす。突然の襲撃に目を白黒させ、一夏の遺伝子を取り込む。息苦しさのせいで目尻に涙を浮かべ、それでも精液をこぼすまいと懸命な雌の様子に、一夏の心臓が跳ねた。

こんなに一生懸命になつて自分を受け止めてくれる。

心が満たされる感覚を抱く一方で、それ以上の恐怖を覚えた。無関係な少女を容易く支配し、従順な雌の思考に変えてしまった筈。絶大な力もさることながら、力を振るう躊躇のなさが恐ろしい。

清香のような状態の生徒が山ほどのいる。一人に襲われただけでこれなのに、大勢に求められたときにはいったいどうなってしまうのか。今にも扉が開き、女子生徒が押し寄せてこないだろうかという不安を覚える。

主人が悩む中、肉棒は元気だった。清香という無垢な少女に精液を飲ませ、清香を内側から犯している。もう清香は手遅れだろう。一夏の精液を味わわされ、胃で消化を余儀なくされる。

そんなことをして、堕ちない雌はいない。

「あはあっ……」

注がれた精液を一滴吸い尽くした清香は、肉竿を扱いて残り汁を口で受け止める。一夏の陰毛が口に入っても構わず、むしろ嬉々としてそれすらも飲み下した。

一滴たりとも零してはいけない。そんな使命感に駆られる清香の手から肉棒の主導権を、射精後に冷静になった一夏が取り返した。「あ……」と言う清香を置いて、一夏はズボンと下着を慌てて上げながら転がるような勢いでトイレを出た。

「織斑君だー」

「もしかしてトイレから出てきたの？」

「えー、織斑君と一緒にトイレに入りたかったあ」

「タイミング悪かったね」

擦れ違う数人の女子生徒。あと一分ほど脱出が遅れていたら、数人に囲まれ、誘惑されていた。そんな状態になったとき、果たして自分は今みたいにか逃げることはできたのだろうか。

これは、思った以上の地獄だ。

戦いの狼煙が上がって間もなく、一夏は早速音を上げそうになった。

券売機

逃げるようにして廊下を駆け、一夏は寮の自室前へと戻ってきた。トイレから出てきた一夏を追う者はおらず、周囲の部屋から出てくる者もない。今のうちに、と一夏は扉を開いて部屋へと足を踏み入れた。

部屋の中では大量の女子生徒が一夏を待っていた。などという、恐ろしい可能性も一夏は視野に入れていたが、現実は違った。部屋には主である箒を含め、誰一人としていなかった。警戒するように足を進める一夏へと襲い掛かる者も現れない。

「箒……」

部屋の中を軽く見まわしてみたが、やはりいない。

トイレか？ それとも。

一夏を追い詰めるために裏で暗躍する幼馴染の姿を頭の中に浮かべたが、一夏の耳が扉を開く音を拾った。

シャワー室へ続く脱衣所の扉。それが開き、箒が姿を現した。

「一夏。戻ってきてくれたのだな」

バスタオル一枚を体に巻いた箒。髪はしつとりと濡れ、肌はほんのり赤みを帯びている。水も滴るなんとやら。恵まれた容貌と体型を併せ持つ黒髪美少女の姿に思わず体の一部が反応してしまうが、一夏は理性でねじ伏せた。

「もう帰ってこないと思っていたぞ。何せ、一夏からすれば私は敵も同然だからな」

「ここは、俺の部屋でもあるからな」

箒に向けて、一夏は気丈に答えた。それを受けて箒は表情を明るくし、一夏との距離をゆつくり詰める。少しだけ低い視線から顔を間近に近づけられ、澄んだ瞳で遠慮なく視線を向けられる。

後退しそうになるのを我慢し、一夏は言葉を続ける。

「それに、俺は箒のことを敵だなんて考えていない。箒は大切な幼馴染だ」

一夏は嘘偽りのない本心を箒へぶつける。

戦うことになったとはいえ、一夏たちの立場は変わらない。一夏にとつての箒は小学生時代からの幼馴染だ。六年越しの再会を果たし、今は同じ部屋のルームメイト。邪険に扱っていい存在ではない。

箒が一夏をじっと見つめる。一夏の鼻腔が箒の甘い香りにくすぐられる。

「大切な幼馴染、か……」

十数秒後、独り言ちた箒は一夏の前から離れた。窓際にある自身のベッドへと歩み寄り、用意していた下着を手取る。言われるまでもなく一夏は箒から視線を剥がし、着替えを始める箒に背を向けた。

「一夏も着替えたらどうだ？」

「あ、ああ……」

一夏は箒を見ないように背を向けたまま横移動をする。珍妙な行動をする一夏を見て、「肌を重ねたのだから、今さら気にする必要もないだろう？」と箒が笑うが、一夏は何も言わずに自分のベッドに近づいて着替え始めた。

箒よりも早く、一夏は制服に身を包み、ベッドの縁に腰かける。

ベッドの間にある仕切りの向こう側から衣擦れが聞こえる。少し前の一夏ならばともかく、今の一夏は今さらこの程度で狼狽えることもない。本来はゆっくりと登るはずの大人の階段を一足飛びで駆け上がってしまったのだから。

「もういいぞ」

箒の声に反応して一夏は振り返る。

仕切りから姿を現した、白い女子制服姿の箒。長い髪もしつかりと後頭部で結わえた姿は一昨日の入学式当日から変わらない。

だが、何か違和感を覚えた。

スカートの丈が短いような。

一夏の眼には、スカートの丈から伸びる太股の面積が増えているように感じた。学校指定ソックスに覆われた白く眩しい健康的な太股が一夏を誘惑する。触りたい。頬擦りしたい。チンポを擦りつけたい。一瞬のうちに爆発しそうになった感情を抑え、一夏は平静を装った。

「朝飯、食べに行こう」

「ああ」

勝負をしている間柄ではあるが、あくまでいつも通りに。

一夏は箒を連れ立って、食堂へと向かった。

早い時間ということもあって、食堂内はそれほど混んでいなかった。

受け取り口前に並ぶ五人ほどの生徒の後続に着くと、名も知らない女子生徒たちの視線が一夏に集中する。何人かに挨拶され、一夏も返事をする。昨日と比べると、やはり何も変わらない。

朝の出来事があって身構えていたが、警戒しすぎたようだ。

一夏は肩の力を抜き、今日のメニュー表を眺める。横では箒もメニューを見ていた。

朝から疲れていて朝食は軽めにしたいが、胃袋は逆に空腹を訴えている。

世界で唯一ＩＳについて学べるこの学校には、世界中から優秀な少女たちが集められているため、食についても多様化が図られている。世界各国の馴染みある料理から聞いたこともない料理まで揃っている。

未知なる料理に挑戦するのはまた今後にして、今は無難に焼き魚定食でいいか。

一夏が考えているうちに列は進み、あと一人になった。

目の前にいる少女は、一夏と同じ日本人のようだ。迷いなく和食のメニューを選び、受付越しに厨房にいる女性職員に注文を伝えた。

「お次の方、どうぞ」

職員に呼ばれ、一夏も注文を伝えようと口を開きかける。

「一夏、駄目だぞ」

だが、箒の声に呼び止められ、一夏は慌てて口を噤んだ。

危なかった。もう少しで、一夏の口から直接注文してしまうところだった。

この食堂では、今日から注文の仕方が変わった。女子生徒はこれまで通り口頭で注文できるのだが、一夏だけは『券売機』を使わないと

いけなくなつたのだ。どうして俺だけ。これが女尊男卑か、という想いはあるが、それが規則なのだから仕方がない。

「ありがとう、箒」

一夏は箒に礼を述べた後、券売機を探す。

どこにあるんだ、と一夏は入口近くに視線をさ迷わせる。しかし、それらしき機械が置かれているわけでもない。あれ、と思つてみると、「一夏、券売機はこちだ」という横から聞こえてきた箒の声に気を引かれた。

見ると、いつの間にか箒が券売機の準備をしていた。

受け取り口に両手を突き、尻を突き出す『券売機』。先ほど和食を頼んでいた少女だ。

どうやら、この少女が一夏の券売機になつてくれるようだ。箒の手でスカートを捲り上げられ、下着を膝まで下ろされている。尻だけでなく、女性器の割れ目もしっかりと確認できる。

「さあ、一夏。早く使つてあげてくれ」

「わかつた」

朝早いとはいえ、もたもたしていると朝食の時間がなくなつてしまう。一夏は少女の背後に歩み寄ると、ズボンのチャックを下げて下着の中から一物を取り出した。

男子トイレで精液を搾り出されて然程時間が経っていないというのに、肉棒は活力に溢れていた。少女の白い尻を見てむくむくと大きくなつていき、凶悪な姿を取り戻していく。

「あつ……」

少女の細い腰を両手で掴むと、少女が初めて声を上げた。

どことなく上品な雰囲気をした、姫カットの黒髪の少女。育ちのいいお嬢様、といった言葉が似合う。受け取り口の縁を掴み、少し不安げながらも頬を上気させて背後の一夏へと顔を向けていた。

「どうぞ、穴の中に男性器を挿入してください……」

券売機である少女の案内に従い、一夏は腰を前に動かした。

まだ使われたことのなさそうな穴。閉じた割れ目を亀頭で開き、穴を探る。すぐに吸いつくような熱を感じ、穴が見つかった。ちゃんと

挿入できるか角度を確かめ、一夏は位置を微調整し、挿入を始めた。ずぷつ、と亀頭が呑み込まれていく。強く抱き締め、熱で蝕む膣穴。気が緩んでしまいそうになったとき、「一気に奥まで挿入してやれ」という箒の言葉に誘導され、一夏は強烈な一撃を放った。

「ん、あぁっ!？」

少女の腹に肉棒の形が浮かび上がるほどの、無慈悲な一撃。少女の足ががくがくと震え、その体を支える両手に力が入っていた。それを見て箒がくすくすと笑う中、少女と深く繋がった一夏は息を軽く吐いた。

券売機の穴を満たし、これで終わり。というわけではない。

他の女子生徒が無料で食堂を使えるのに対し、一夏は精液という名の代金を支払わなくてはならない。精液を子宮というタンクに注ぎ入れ、ようやく朝食を頼むことができる仕組みに変わってしまった。

誰から連絡を受けたんだっけ？ っていうか、これって本当に券売機っていいのか？ 券はどこから出てくるんだ？

いつの間にか知っていた不可思議な情報に首を傾げつつ、一夏は腰振り始めた。

券売機に、機械に遠慮はいらない。一夏は手加減という言葉を忘れたように、獣に似たセックスを始める。少女の背中に覆い被さって両手を伸ばし、少女の乳房を握りながらガツガツと膣内を肉棒で甦る。「んっ、あぁっ、はぁっ、んっ……」

食堂に響く嬌声。先に朝食にありついていた生徒も、一夏たちの後に列に並んだ生徒たちも一夏たちの視線を向ける。各々の表情にはこの状況を訝しんでいる様子はないものの、激しい交尾に顔を赤らめている。中には、制服の上から胸や陰部を弄る者も少なからずいた。肉棒が素早く出入りする膣から、赤い体液が垂れ出していた。少女の処女膜を破ったためだ。しかし、それを行った一夏に罪悪感はない。この少女は券売機であり、それを使うのが規則だ。

「もっと乱暴に。そうだ。いいぞ、一夏……」

耳元で囁く箒の指示に従い、一夏は動きを加速させた。

ぐちゅっ、ぢゅぶんっ、ぱちゅっ、ぱんっ、ぱんっ、ぐちゅっ、ど

ぢゅっ！

弾ける水音が、箒の囁き声とともに一夏の気分を煽る。

券売機というのも悪くない。一夏はぼうっとした顔のまま、少女の胸を両手で弄り回し続け、股間を少女の尻に何度も叩きつける。

いつしか、一夏と券売機である少女の周りには、食堂にやってきた女子生徒が集まっていた。携帯のカメラで一夏たちを撮影する者、堂々と自慰を始める者。女同士でありながら口づけを交わし、熱を共有する者。

一夏の腰振りが速まるだけで場が盛り上がる。

異常が支配する日常で、異常と認識しながらもほくそ笑む少女が一人。

「そろそろいいぞ、一夏」

微笑みながら告げた箒の声に合わせ、子宮に龟头を食い込ませた一夏は。

「出せ」

そのまま射精を始めた。

どぶんっ、どびゅ、びゆるるーっ、ごぶっ、どぶーっ、びゆるるっ、どぶんっ！

「あっ、はあっ、くうっ……！」

体を震わせ、熱を抱いた声を上げる少女。厨房の女性職員はその少女と正面から視線を合わせ、顔を赤らめていた。生徒と同様に整った容貌の若い職員は目の前の光景に中てられてか、結婚指輪を嵌めた左手の指でズボンの上から陰部を擦っていた。

少女の中に溜まっていく精液。一夏は射精の快感と達成感を抱き、少女の乳房を相変わらず玩具のように揉みくちやにしながら、職員へと注文を伝えた。

「焼き魚定食、一つ……。うっ……！」

「は、はい、承りました……！」

ようやく注文し終え、一夏は少女の穴から肉棒を取り出す。

「あんっ……！」

ブルンツと飛び出す巨根。ごぼり、と膣からごぼれる破瓜の血と精

液が混ざった体液。券売機としての役目を果たした少女はその場に崩れるように膝を突き、びゆるつ、びゆるるつと一夏の精液を床に噴き出していた。

「気持ちよかっただろう、一夏」

シャッター音が鳴り響く中、箒に肉棒を扱かれ始めた一夏。

Lv. 100チンポの特性である『リフレツシュ』によつて一夏が正気を取り戻したのは、テーブルの席に着き、箒のお掃除フェラを受けながら味噌汁を啜ったときだった。

遅れて異常を理解した一夏は、味噌汁を吹き出した。

身体検査

味噌汁を嘔き出しながらも、どうにか済ませた朝食後。食堂のテーブル席に座ったまま小休止中。ともに食事を終えた箒が何食わぬ顔でお茶を啜っているすぐ隣で、一夏は文字通り頭を抱えていた。

一夏を悩ませるのは箒との力の差についてだ。女を攻略するとう意味では確かに一夏のLv. 100チンポは最強なのだろうが、用途は非常に限定的。例えるならば、防御を捨てた近接戦特化の兵器だ。自ら攻める意思が一夏にない以上、宝の持ち腐れだった。

それに対し、箒が有している『精神掌握』は汎用性に富んでいる。箒自身は力を使うことに躊躇いはなく、その力を十全に活かしていると見えるだろう。遠くにおいても力の影響は及ぶため、一夏が仮に箒から距離を取ったところで意味はない。

「大丈夫か？」

空になった湯？みを置き、箒が一夏に話しかけてきた。

ついさつきまで一夏を操り、性行為を衆人環視に晒し、掃除と称して肉棒を咥えていた少女とは思えない。何事もなかったかのように穏やかな表情を見ていると、先ほどの出来事は本当に現実だったのかと疑ってしまう。

だが、本当のことだ。一夏はまた一人少女を手に掛けてしまった。

一夏は食堂入口近くの受け取り口へと視線を向ける。そこで一夏は少女と交わったわけだが、その痕跡は既がない。一夏に券売機として使用された少女は複数の女子生徒によってどこかへと運ばれ、床を濡らしていた精液は若い女性職員によって丁寧に拭い取られたようだ。

後の祭りだ。これ以上考えていても仕方がない。気持ちを切り替えていかなくはならない。

次こそは、箒の好きにはさせない。ようにしたい。

一夏は頭を抱えていた両手で自身の頬を叩き、気合を入れる。この反省を活かし、次に繋げる。すぐには勝てなくても、それを積み重ねれば光明は見えてくるに違いない。その可能性を信じるしかなかった

た。

「箒。教室に行こう」

「ああ」

一夏は席を立ち、箒と共に教室へと向かう。その姿を、食堂にいた少女たちの視線が追う。ある者は信仰対象である神を目の当たりにしたかのように。またある者は恋する乙女のように。一夏に向けられる視線の性質は様々だが、全て好意的なものだ。受け入れてしまえば、一夏を取り巻く状況は地獄から天国へと変わるはずだ。

それでも一夏は受け入れない。修羅の道を突き進む。

自室に戻って登校の準備を整え、一夏と箒は寮を出た。

寮から校舎までの短い道程で、何かが起こる気配はなさそうだった。寮からぞろぞろと後をつけてくる女子生徒の集団もただついてきているだけのようだ。警戒すべきは箒ただ一人なのだが、一夏の警戒など鼻で笑うかのようにすり抜けてくるのだから恐ろしい。

頼みの綱はやはり特性の『リフレッシュ』。それが迅速に発動することを願うばかりだ。

意味もなく力み、油断なく警戒する一夏はそのまま何事もなく校舎にたどり着いた。昇降口で靴を脱ぎ、上靴に履き替える。様々な国籍の少女たちがいるIS学園だが、この辺の規則は日本を基準にしている。

他にも様々な規則があるのだが、その中には男である一夏にのみ適用されるものも存在する。ここが元女子校であるが故に、男だという理由だけで何らかの制限がもたらされるのも仕方ない。一夏はその点を割り切つて考えていた。

階段を上り、一年生の教室が並ぶ階へ行き、一年一組の教室を目指す。

教室前。女子生徒が普通に扉を潜る中、一夏は足を止めた。

そして、おもむろに服を脱ぎ始めた。

IS学園において、男子生徒は教室に入る際に全裸にならなくてはいけない。その規則に従い、制服は勿論、中に着ていた下着も脱ぐ。教室の前で肌を晒し始めた一夏、特にその巨大な肉棒を目にして、周

りにいた女子生徒が色めき立つ。

何だ？ と一夏が周囲の反応に首を傾げる中、箒はにこにここと笑っていた。

機嫌のいい箒。何かまた良からぬことを考えているのだろうか。下着も脱ぎ捨て、裸一貫になった一夏は念のために廊下を見回すが、特におかしな点は見受けられない。まだ、箒による洗脳は行われていないと思いたいが、それを確かめる術もない。

嬉しそうに携帯で撮影してくる女子生徒を他所に、一夏は教室へと足を踏み入れた。

まだ登校時間に余裕があるというのに、教室内にはクラスメイトが勢揃いしていた。それどころか、他の組の生徒までいる。一夏が前の扉から教室に入ると、教室後方に用意されていた三脚付きの超高性能ビデオカメラ三台と、複数の生徒たちが持つビデオカメラが一斉に光を放った。

「織斑君、こっち向いて」

「いいよ、もう少し股間を突き出してみようか」

「少ししゃがんでみて。そうそう、いいよー！」

「右手でペニス握って、シコシコしてくれる？ ああ、最高！ そのままね！」

さながらグラビア撮影。一夏は教壇に上がってカメラと正対し、適度に引き締まった裸体を披露した。言われた通りにポーズを取り、肉竿を右手で握って扱き始める。徐々に勃起し、反り立ち始める肉棒の様子が写真に収められていく。

「ああ、織斑君超格好いい。抱いてほしいなあ」

「犯したい犯したい犯したい」

「エロすぎでしょ。今夜のオカズ決定！」

クラスメイトたちは一夏を注視し、にやつく表情を抑えられずにいた。

自分の席に座って股を開き、自慰をする者。撮影の邪魔にならない程度に一夏に接近し、頭の前からつま先まで視姦する者たち。不躰な視線に晒される一夏本人はというと、妙に高揚している生徒たちを不

思議に思いながらも、指示通りにチンポ扱きを行うばかりだった。

一夏の衣服や鞄を持った箒が教室後方で、セシリアともう一人見知らぬ女子生徒と話をしているのが見えた。新聞部と書かれている腕章をつけ、眼鏡をかけた少女だ。何かの話が勝手に進行しているが、耳を澄ませている余裕は一夏にはなかった。

一夏は身体検査を受けている最中だ。この場にいる者たちが目で見るだけでなく、写真にしてIS学園のホームページからログインできる学園関係者専用の画面に投稿。全生徒と教師が空いている時間に確認し、一夏の健全性を確認することになっている。

専用画面には一夏の隠し撮り写真の他に、動画もあるようだ。

一夏とセシリアのセックス動画だ。一夏がセシリアと出会って性交に励み、その場を離れるまでの一部始終が隠し撮りの視点で閲覧できる。それだけでなく、今朝一夏が食堂で行ったセックス動画も投稿されている。後日、IS学園の精鋭たちによって専用画面は改良され、コメント投稿機能も実装される予定のようだ。

誰かから聞いたわけでもないそれらの情報が、一夏の脳内に流れてきていた。

そして、それを常識だと認識させられる。

「次、誰か二人くらい織斑君のチンポ扱いてあげて？」

「はいはいはい！」

「やる！ 私がやる！」

「私だって！」

「ちよつと！ 抜け駆けしないですよ！」

「ここら喧嘩しないの。えつと、その二人でいいや」

我先にと手を挙げ、権利を争う中、撮影をしていた生徒が場を諫めて担当者を決める。選ばれた女子生徒二人は手放して喜んだ後、撮影を取り仕切っているらしい新聞部の指示に従って行動を始めた。

「よろしくね、織斑君」

黒いロングヘアの少女、やたけ夜竹さゆか。

「よろしく」

長い髪をおさげにした少女、たにもと谷本癒子。

「よ、よろしく」

一夏の両隣の床に膝を突き、一夏に代わって肉棒を握る。左に位置するさゆかが左手で一夏の亀頭と肉棒の中腹を担当し、右側を陣取る癒子は根元の部分だ。二人で協力する形で手を動かし始めた。

「えっと、こんな感じかな?」

「どう? 織斑君」

やり方を探るように肉棒を扱っていく二人の少女の手。経験がないためか拙い技術であるものの、教室や廊下に詰めかけた生徒に見られながら味わう手コキは一夏の興奮を煽る。尿道から溢れた我慢汁が二人の手によって広げられ、ぬちゅぬちゅと音を立てる。

「すごい……」

「硬くて、熱くて、いい匂い……」

我慢汁から立ち昇る雄の臭いが教室に充満し、廊下にも広がる。それまで黄色い声を上げていた少女たちが口を閉ざし、頬を赤く染めた。放心状態に見えるが瞳には性欲に滾っていて、獲物を前にした獣のようだった。

発情した様子で黙したまま一夏の顔をじっと見上げ、忙しく手を動かすさゆかと癒子。さすがは倍率の高いIS学園に合格した才女らしく、その手コキは見る見るうちに熟練度を増していく。

ぐつちゅつ、ぬちゅつ、ぐちゅつ、ぬちゅつ、くちゅつ!

激しく、それでいて丁寧に。撮影者が手を止めたおかげで静かになった教室に水音が響き、誰もが一夏の股間から目を離せないでいる中、一夏は這い上がって来た熱い精の塊を盛大に吐き出した。

ぶびゅびゅびゅーっ、びゅるるーっ、びゅーっ、ぶびゅーっ、どびゅーっ!

噴水のような勢いで精液が放たれた瞬間、再び場が湧いた。シャッター音や大勢の歓声。射精一つでいったい何を、と一夏は思いながらも射精の快感に身を委ねる。今も手コキは止まず、射精の勢いも衰えない。

「こんなに出て。ああ、すごい……」

「おチンポ格好いい……」

すっかり一夏に惚れたようで、さゆかと癒子はうつとりとした様子のまま肉棒に顔を寄せた。ちゅっ、と左右から唇で吸いつくようにして撫でていく。金玉を指先で転がすように揉みながら、肉竿に唇を押しつけて射精を促す。手で扱かれるよりも卑猥さが増し、射精が強まる。

「どうかな？」

「気持ちいい？」

チンポにキスを捧げつつ、二人が上目遣いに問うてくる。

確かに気持ちいい。でも、何かがおかしいような。

食堂のときと似たような違和感を抱き、一夏の脳内が現実を異常と認識し始める。

そうして再び一夏が目を醒ますと思われたそのときだった。

「一夏」

箒の声が耳に届き、一夏の違和感が霧散した。

なんだ、今の。と、一夏は首を傾げたが、大したことではないだろうと結論づける。

一夏はただ教室で全裸になり、その姿と射精を女子生徒に見せただけだ。何ら問題のあることではなく、むしろこれ以上ないくらい健全だ。それに対して疑問を抱くというのもおかしい話だろう。

そう思い込む一夏の下へ、箒がセシリアを伴って近づいてきた。

「身体検査は終わったな。そろそろホームルームだ」

「あ、ああ……」

楽しそうな箒に、一夏の緊張が張り詰める。何かされるかもしれないが、授業を受けないわけにはいかない。箒も授業中に大胆な行動に出ると思えないが、絶対という言葉はない。

「あら、一夏さんの精液がこんなに。皆さん、勿体ないので舐め取ってしまいましょう」

セシリアの呼び掛けに、大勢の女子生徒が集まった。床に平伏し、顔を近づける。舌を伸ばして床の精液を舐め取り始める卑しい雌たち。誰一人として嫌そうな顔はしておらず、ご馳走を口にしたかのような幸福を噛み締めている。

「さあ、席に着け」

同級生たちを見つめていた一夏だったが、箒に促され、席に座るところにした。身を纏う衣服はないまま、朝のホームルームが始まるのを待つ。椅子に直接触れる尻が妙に冷たく感じて、一夏はもじもじと落ち着きなく身じろぎしていた。

揉み比べ

ホームルームまであと三分。一年一組の生徒たちは厳しい担任である千冬に叱られぬよう、席に着いて待っていた。廊下に詰めかけていた生徒たちも各々の教室に戻り、先ほどまでの賑やかさは鳴りを潜めている。微かに聞こえるのは同級生の小さな話し声と、膾口を指で穿る湿った音だけ。

手持ち無沙汰な一夏は音に耳を傾け、右手で肉棒を扱っていた。男としては生殖器の鍛錬は欠かせない。今後の人生で数え切れないほどの女と繋がり、子宮に子種を植えつけるのだ。男としての役目を立派に果たすため、毎日コツコツとした努力が肝要だ。

日本男児としての心構えを強く持ち、一夏が鍛錬を続けていると、廊下からコツコツと足音が聞こえてきた。徐々に近づいてくるその足音が教室の前で止まり、前の扉が開かれた。

最初に入ってきたのは千冬だ。黒いレディーススーツを今日もキツチリと着こなしている。一夏に跨って淫らに尻を振る千冬の姿を思い出し、スーツ姿の千冬と交わるのもいいかもしれないと思いがら手の動きを速めた。

教室に足を踏み入れる千冬と目が合った。やはりか、と言わんばかりの諦めたような表情を千冬は浮かべる。一夏は引つ掛かりを覚えしたが、そのときには千冬は一夏から視線を外し、教壇へと上がった。「少し待て」

千冬は教壇の端の方で立ち止まると、生徒たちに向けて言った。副担任の山田真耶がまだ来ていないためだ。千冬は一年一組の主担任ではあるが、任せられる部分は真耶に任せている。真耶は会議か何かで遅れていて、千冬の言う通りすぐに教室に来るのだろうか。

手コキに励む一夏の耳が新たな足音を拾った。

「遅れてすみません！」

大きな声とともに、真耶が開いた扉から入室する。

昨日までは私服だった真耶だったが、掛けている眼鏡以外の装いが

違う。

真耶は黒いISスーツを着ていた。このスーツは、人体に装着して扱うIS運用時に着用するもの。水着のように体にピッタリと密着するようになっていて、女体の形がこれでもかと浮き彫りになる。

一夏は手コキを止め、真耶の体を視姦することに集中した。

千冬よりも小柄でありながら千冬よりも豊かな乳房を持つ真耶。胸の谷間が見える私服姿もよかったが、全体の形や大きさを確認できる今日のほうが卑猥だ。ボールのように綺麗な曲線を形成する胸元を見て、一夏は手の動きを再開した。

そのとき、千冬が不満げに一夏に目を向けたのだが、一夏は気がついていない。

はあ、はあと一夏が声を漏らす中、真耶が壇上に上がった。

真耶の胸と尻を中心に目で追っていた一夏は、あることに気がついた。

真耶の右手に透明なボトルが握られていた。中には液体が入っているようだ。水のようには見えない。教卓に置かれた瞬間、中身は全然揺れていなかったから。半固形かもしくは粘度の高い液体のどちらかだ。

そして、もう一つ。

真耶が着ているISスーツの谷間の部分に一つ、そして谷間の直下に位置する下乳部分にももう一つ小さな丸い穴が開いていた。どこかに引っ掛けて自然に穴が開いたのではない。穴の形があまりにも綺麗すぎるし、穴が二つもあることから、意図的に開けられたものだと推察できる。穴からはスーツにみっちり詰まった肌色の乳肉が窺えた。

何のための穴か。一夏は考えてみたが、すぐにはわからなかった。

「皆さん、おはようございます。それではホームルームを始めますね」真耶の一声で、ホームルームが始まった。

ホームルームでは出欠確認の他に連絡事項の伝達も行われる。

「予定通り、来週の月曜日にクラス代表を決める模擬戦を行います。アリーナの予約も取っております。織斑君、オルコットさんのお二人

は準備をしておいてください」

真耶に今言われるまで、一夏は件の内容を忘れていた。いろいろあつて。ありすぎて、頭から吹き飛んでいた。

二日前の入学式当日。学級委員に相当するクラス代表を決めていたときのこと。数名のクラスメイトが一夏を代表に推薦した際、我こそが代表に相応しいと名乗りを上げたセシリアに因縁をつけられた。一夏だけでなく日本人を悪し様に言うセシリアに怒りを抱き、一夏が売り言葉に買い言葉で反論してしまった。

火がついた二人は千冬の仲介によってISによる模擬戦で代表を決めることになった。

なったのだが、一夏にとってもはやどうでもいいことに思えてきた。

現状、セシリアとの諍いなど完全に忘れ去るほどの非日常に見舞われている。今はまだ平和だが、箒がいつ次の手を打ってくるかわからない。クラス代表などの厄介事はできれば避けておきたい。

それに、対戦相手であるセシリアは入学式当日の関係が嘘のように一夏に惚れ込んでおり、模擬戦とはいえ一夏と対立することを望んではいないだろう。

一夏は肉棒を扱きながら後方を振り向いた。

うつとりとした様子で一夏を見ていたセシリアと即座に目が合い、軽く手を振られた。やはり敵対の意思は感じられない。

「あの」

一夏は肉棒に弄っていないほうの手を挙げ、質問した。

「はい、どうしました？ 織斑君」

「クラス代表を、オルコットさんに……」

譲りたい。そう続けようとした一夏だったが、声を止めた。

一夏の思考が何かに塗り替えられようとしている。まさか、と思つて箒の席へと見ようとしたときには一夏の思考は完全に塗り潰されていた。

「いえ、なんでもありません」

再び前を向いた一夏の言葉に、真耶はほっと胸を撫で下ろした。

「そうですか。何かあれば言ってくださいね?」

真耶はわざわざ教壇から下り、一夏の傍へと近づく。そうすると、肉棒を掴む一夏の右手を両手で軽く握って引つ張ると、自身の胸へと手を押しつけさせた。むにゅつと一夏の指がISスーツに詰まった乳肉に沈む。

「うわ……」

肉棒をビクツと震わせ、一夏はチンポ臭い手で真耶の乳を掴む。乳牛かよ。何食べたならこんなに育つんだこのいやらしい牝牛教師が。と濃厚な一夏にしては妙に感情が激しく波打ち、チンポを苛々させた。

「織斑君のためだったら、何でもしてあげますからね?」

「何でも?」

「はい、何でもいいですよ……」

前屈みになって顔を近づけた真耶の声と息が、一夏の頬に当たる。こそばゆくも心地いい刺激に、一夏の手に力が入った。ぐぐぐつと真耶の乳肉を掴み、手の平いっぱい感触を楽しむ。

「あああつ……」

敏感な胸を乱暴に扱われて震える真耶の声は肉棒にいい栄養を与えてくれた。

「山田先生」

「あ……」

一夏に迫っていた真耶だったが、いつの間にか背後に立っていた千冬の冷たい声に驚いて後ろを振り向く。直後、千冬が振り下ろした出席簿の一撃を額に食らい、スパンツという軽快な音とともにその場にしゃがみ込んで「うううつ……」と悶絶した。音はすごいが、威力は抑え気味のように見えた。

真耶の柔らかい胸から強制的に離され、寂しく空を握る一夏の右手。

だが、直後に新しいクッションを与えられた。

千冬が真耶と同様に一夏の手を握り、手の平を自身の乳房に宛がった。ISスーツよりも生地が厚いレディーススーツとはいえ、千冬ほ

どの大ききさとなれば感触と大ききさを楽しむのに十分だった。

「一夏。惑わされるな。箒の思う壺だぞ?」

むにゆっ、むにゆうつと胸に何度も押しつけられながら千冬に囁かれるが、一夏にはその意味が理解できなかった。

これはただの挨拶であつて、箒の策略とは違う気がする。気さくに声を掛けてきた人に挨拶をするように、女の乳房を揉むのは普通のことではないのか。頑固な一夏は常識を疑うまでいかず、空いている手でも千冬の胸を驚掴む。

むにゆっ、ぎゅむっ、ぐぐぐっ。

手を縦横無尽に動かし、引つ張り、五指で掌握する。

「んっ……。認識改変は融通の利かない一夏に抜群のようだな……」

一夏に胸を預けながら千冬が箒へと視線を送る。

箒はにこやかに微笑み、千冬と視線を受け止めた。

「姉にそっくりだ……。やはり姉妹か……」

千冬が呟く一方、そろそろ生乳を堪能しようとした一夏がジャケツトのボタンを外そうとしたとき、千冬の体が突然離れた。「あっ……」と伸ばされた一夏の右手がまたしても空振り、今度は代わりを与えられることがなかった。

「山田先生、続きを」

「あつ、はいっ!」

慌てて立ち上がった真耶が教卓の前に戻り、ホームルームが再開した。一夏は残りの連絡事項を聞きながら真耶と千冬の胸を堪能した手で肉棒弄りを再開する。教壇に立つ二人の女教師をおかずにした自慰は捗り、そろそろ射精に、というところでホームルームが終わった。

このあと五分の休憩時間を挟み、一限目の授業に入る。

今日は水曜日。最初の授業は保健体育だ。

「織斑君」

授業に使う教材の準備をしていた一夏は、真耶に声を掛けられた。

「はい?」

「次の授業は私と織斑君の一对一の形式で行いますので、移動をお願い

「いできますか？」

「移動って、どこへです？」

「教室の後ろです」

真耶が指を差した先を一夏は見た。

教室後方。生徒一人一人に用意された収納ロッカーが並ぶ壁と、最後尾の席に座る生徒に挟まれた間辺りだろうか。

「椅子だけ持っていってくださいね」

「わかりました」

指示を受け、一夏は席を立った。

「一夏」

「え？ はい」

椅子を持って移動を始めようとした一夏に千冬が近づく。一夏は椅子を置いて両手を空けると、千冬の胸を揉もうとして伸ばした両手が軽く払われた。挨拶をしようと思ったただけなのに、と困惑する一夏に向けて千冬が告げる。

「これだけは言っておく」

「はい」

「真耶のほうが私よりも胸は大きい」

「はあ……」

「柔らかさも上だろう」

「そんな感じでした」

「だが、弾力は私のほうが上だ」

千冬に言われ、一夏は両手をわきわきとさせながら二人の胸の揉み応えを思い出した。衣服とISスーツという違いを考慮に入れ、大きさと形、柔らかさ、弾力などの観点で双方を比較する。

大きさと柔らかさには真耶のほうに軍配が上がった。

形と弾力では、千冬が上回っていた。

違いはあれども、いずれも素晴らしい。ぜひ二つを同時に味わってみたい。

「以上だ」

そう思う一夏から、唐突に話を切り上げた千冬が離れていく。

いきなりどうしたんだろう。何か対抗心を燃やしていたような。それにしても、千冬姉は山田先生のことを普段下の名前で呼んでいるのか、と一夏が様々な感想を抱く中、授業の開始時間が迫っていた。「あれ?」

一夏は椅子を早く運んでおこうと思ったが、当の椅子がなくなっていた。

「ない。どこにいった?」

「一夏さーん」

周りを見回す一夏は、声に吊られて教室後方を見た。

そこにはロッカーを背にする形で一夏の椅子が置かれていた。その傍らには手を振るセシリアと、真耶の姿があった。どうやら椅子を運んでくれたらしい。

一夏は後方へと早歩きで移動する。走ろうとすると、肉棒が揺れて走りにくくなるからだ。裸もいいが、股間だけを固定できる何かを身に着けたい。

「えっと、ありがとう。オルコットさん」

「セシリアと呼んでください、一夏さん。昨夜も名前と呼んでくださいましたよね?」

セシリアが一夏の手を優しく包み込むと、教師二人を見習って一夏に胸を揉ませる。その揉み心地は千冬と真耶のいずれとも異なり、また良かった。やはりおっぱいというものは皆違って皆良いものなのだという認識を抱く。

「わかった。やっぱりセシリアの胸も気持ちいいな」

「うふふ。どうぞ好きなだけ触ってくださいまし。私の胸は一夏さん専用ですよ?」

「それじゃあ、遠慮なく」

「あんっ……」

乳を持ち上げるようにガツと下から攻め、膨らみを掴む。日本人とは食文化も育った環境も違うためか、胸の感触も日本人とそれとはまた違う。

一度、世界各国のおっぱいと交流を図りたい。一夏は思った。

英国産おっぱいを一夏が楽しむ中、遠くの席で一夏たちの様子を窺っていた筈が相槌を打っていた。会話というよりは一夏の思考を読み取っているようだったが、筈に背を向けている一夏はそれを認識できずに胸を揉み続ける。

ふわふわで、いい匂いがする。セシリアとベッドで繋がったときも、この匂いがした。安心できて、抱き着きながらの種付け射精が捲る匂い。また、セシリアの匂いを嗅ぎながら徹底的に英国淑女を日本男児の子種で屈服させたい。

一夏は妄想を膨らませ、遠くで筈が悪巧みをしていた。

「水を差すようで悪いんですけど、織斑君、そろそろいいですか？ セシリアさんも」

「はい」

真耶に言われ、一夏は素直にセシリアを解放した。

「むう。もっと揉んでほしかったのですけれど、仕方ありませんわね。それでは一夏さん。また後程」

「ああ」

一旦別れを告げて擦れ違う間際、セシリアは一夏の尻を揉んでから席に戻った。

授業開始のチャイムが鳴り響き、席を一時的に離れていた他の生徒たちも自席に戻る。教壇に立っていた千冬が教卓に近づくのを見て一夏も席に座ると、一夏の視界を遮るようにして真耶が目の前に立ちはだかった。

「さあ、織斑君。授業を始めましょうか」

他人を安心させるにこにことした笑顔を浮かべ、真耶の手が一夏へと伸びた。

パイズリ授業

「起立」

日直の声が教室に響き、席に座っていた生徒たちが立ち上がる。一夏も席を立とうとしたが、真耶に両肩を掴まれて身動きが取れない。千冬が一夏以外の生徒との授業を進め、真耶が一夏に付きつきりで対応する形らしい。

「織斑君。まずはキスのお勉強から始めましょうか」

一言告げた真耶が一夏に顔を近づけた直後、一夏の口を唇で塞いだ。

「んっ……」

ぷるぷるとした感触の唇が密着し、真耶の吐息が一夏の口内に入る。他人の熱を感じて肩がびくりと震えるが、真耶の手が宥めるように動いて硬直が解ける。大丈夫、大丈夫。母にあやされるように体を擦られ、粘膜の接触が濃密になっていく。

「んっ、ぶちゅっ、くちゅっ、れろおっ、くちゅっ、ぐちゅっ、ちゅぱあっ」

真耶の舌が一夏の中に入ってきた。にゆるにゆると侵攻し、一夏の舌に触れる。舌の先をこつんとぶつけ合い、舌を絡めた。二人は目を閉じることなく至近距離で見つめ合い、吐息を掛け合い、唾液を塗り合った。

「ぴちゅっ、くちゅっ、ぬちいっ、ぬちゅあっ、くぷっ、ちゆるっ！」
心も体も蕩け合う。真耶の体から漂う匂いを嗅ぎ、股間を大きくした。女はどうして誰も彼もいい匂いがするのか。一夏はいろいろと考えてみたが、男を誘い、欲情させ、犯してもらうことで子孫を残すためののかもしれないという結論に至る。

一夏が持論を展開する中、真耶の舌が口内の奥を攻めてくる。一夏の隅々まで徹底して味わうつもりらしい。舌先で歯茎をなぞられる感触に浸りながら、一夏は真耶に主導権を握らせた。

「んっ、ちゅっ、あー……」

満足した様子の真耶が口を離し、最後に大量の唾液を流し込んだ。

一夏は親鳥から餌を貰う雛のように口を開け、唾液を全て受け入れた。元々溜まっていた二人分の唾液に混ざって、唾液の比率が真耶に大きく傾いた。

「はい、ゆっくりぐっくんしてみてください」

ほんのりと頬を赤らめた真耶に言われ、一夏は真耶の唾液を喉に流し始めた。

温められた唾液が一夏の体内に取り込まれる。それを見ていた真耶の表情が興奮に染まり、息遣いが荒くなる。

「少しずつ。はい、そうですよ。味わってください」

再び顔を寄せた真耶が間近で一夏を見つめながら、一夏は最後の一滴まで唾液を飲み干した。

「飲み終わりました、んっ」

一夏が言い終わる前に、真耶が一夏の唇を奪う。良く出来ました、と褒めるように一夏の舌に舌を擦らせて唾液を塗りたくってくる。せっかく飲んだのに、と一夏は思ったが、これも必要なことなのだろう。教師の言動を容認し、一夏は真耶と舌で戯れた。

「ふ、はあっ……」

ようやく解放されたときには、真耶の唾液が口内にたっぷりと残された。眼鏡越しに期待でキラキラと輝いてみえる綺麗な瞳に見守られ、新しい唾液を胃へと送る。この調子で続けると、胃袋が真耶の唾液でいっぱいになってしまうかもしれない。

さすがにそこまでする気はなかったようで、真耶が自身の口元をペロりと舐めると、一夏から一旦離れて背を向けた。

「ふう……」

長い接吻が終わり、乱れていた呼吸を整える。

教室では千冬による授業が進行している。黒板に投影された資料を指示棒で示し、補足説明する千冬の凛とした声が聞こえた。生徒は至って真面目に授業を受けているのだが、どこかから聞こえてきたバイブの振動音が少し気になった。

「お待たせしました」

真耶が一夏の正面に立ちはだかった。右手にはボトルが握られて

いる。

「それ、なんですか？」

真耶が教室に来るときに持ってきていた透明なボトル。中に入っている水とは違う何かを見て、一夏は首を傾げた。飲み物ではなさそうだ。であるならば、いったい何に使うものなのか。

「ローションですよ」

蓋を開け、真耶は手の平で作った器へとボトルの口を傾けた。粘度の高い液体がどろどろと流れ出て、手の平に広がっていく。それを見て、確かにローションだと一夏は認識した。

しかし、真耶はなぜローションを持ってきたのか。そもそもなぜ持っているのか。ローションの使い道に詳しくない一夏には疑問だった。

「どうして先生がこんなものを？」

「これは私物です。いつも自慰をするときに使っているんですよ。おっぱいやクリトリスに塗って、触っているだけでも気持ちいいんです。今日はこれを使って、織斑君のおちんちんを可愛がってあげますね？」

真耶はそう言って、床に膝を突いて座った。フル勃起した一夏の肉棒へと身を寄せ、ローションをかけ始めた。唾液とはまるで違うぬるぬるとした液体。少しひんやりとした感触を受けて一夏の体がビクリと震えた。

亀頭からゆっくりと竿を伝ったローションが根元に行き着く。一夏の陰毛を濡らし、股間が一通りローションに覆われると真耶は手を止めた。照明の光を浴びてテカテカと光る肉棒が魅力的に見えたのか、少し呆けていた。

「先生？」

「あ、すみません。こうして生で見るのは初めてだったので」

恥ずかしそうに言う真耶の言葉に、一夏は少し驚いた。

真耶は非常に魅力的な異性だ。年は五歳以上離れているものの、年齢差をあまり感じさせない。あり得ないが、もしも初めて会ったときに真耶が女子制服を着ていたならば、一夏は真耶のことを女子生徒だ

と勘違いしていただろう。

童顔で巨乳で、眼鏡をかけた小柄な教師。属性てんこ盛りだが、学生時代にとくに異性と肉体関係を築いていてもおかしくはなさそうだったが、奥手だったのか、もしくは異性とは縁遠い環境で育ったのかもしれない。

「準備しますね？」

ボトルを掴む真耶の手が向かった先は、自身の胸元だった。

なぜ真耶が身に着けているISスーツには丸い穴が開いているのか。その理由が明らかになった。

真耶はローションをスーツの中に投入する。肌にピッタリと密着するスーツと丸みを帯びた乳房の間に液体が浸透していく。真耶が片手で胸を揉み解すと浸透速度が加速し、ローションがスーツ内に溜まっていく。

やがて乳房全体に行き渡った頃、下乳を支えるスーツの中心に空いていたもう一つの穴からローションが垂れてきた。それはほっそりとした腹をスーツの外側から伝い落ちていく。

「これくらいでしょうか」

独り言ちた真耶はボトルを床に置くと、乳房を両手で抱え持った。

これから何が行われるのか、一夏は理解していた。

「では、始めますね。ローションたっぷりのパイズリご奉仕、心ゆくまで堪能して気持ち良さを学習してください」

床に突いた膝を起点に体を持ち上げ、真耶のデカ乳がそそり立つ肉棒の真上へ移動する。一夏が少し身構えている前で胸の位置が徐々に下がり、今もローションをとろとろと排出している下乳のスーツの穴へと亀頭が呑み込まれていた。

「う、あ……」

ローションでぬるぬるぐちよぐちよの乳肉。一夏にとって未知の体験だった。柔らかい二つの塊に左右からむぎゅ、むにゅっと挟まれる。迫り来る肉の壁だ。その心地いい圧力を受けながら肉棒が姿を隠していく。

そして、ローション投入口だった穴からローション塗れの亀頭が顔

を覗かせた。

「織斑君のおちんちん、食べちゃいましたあ」

生徒の生殖器を胸マンコで食らって嬉しそうな女教師は、一夏の股間に重たい乳房を置いた。ぱちゅんつと小気味いい音を鳴らして挿入が完了した。

「織斑君のおちんちんはとても大きいので、全部は食べきれませんでしたね」

真耶の胸は大抵の男性器ならば容易く抱擁できる大きさだが、一夏の物には敵わない。密度の高いパイズリを受けて喜びに震える龟头や肉竿の上部がしっかりと姿を現し、真耶の顔を下から見上げている。

震える肉棒に期待に満ちた眼差しを向ける一夏。

その期待に応えるように、真耶が動き始めた。

むにゅつ、ぎゅむつ、むにゅつ、むちいつ、ぐちゅつ、ぐちゅんつ、ぱちゅつ！

「うっ、あつ……」

ローションに濡れた乳肉に扱かれ、一夏は思わず声を出した。

千冬のパイズリもすごかったが、ローションパイズリはその上を行っていた。一瞬にして虜にされ、口を引き結ぶことも敵わない。半開きになった口から声がとめどなく漏れていってしまう。

そんな一夏を上目遣いで見上げ、真耶は微笑みを絶やすことなく乳房を上下に動かす。肉体関係がないのは本当のようで、その動きはお世辞にも上手いとは言えない。だが、それもわずかな時間だけだ。

IS学園にいるのは生徒も教師も才女ばかり。高い学習能力と観察眼を発揮して一夏の反応を見ていた真耶が行動を最適化し、戦いの中で成長していく。瞬く間にも目に見えて動きが冴え渡っていき、一夏を翻弄し始める。

ぐぼおつ、ぢゅぶつ、ぱちゅんつ、ぐちよおつ、ぬぷつ、むにゅつ、ぐぶんつ！

「っ、おっ、うあつ……」

一夏のチンポは雄として最上だが、主の精神はまだ幼い。未経験の

刺激を浴びて動転している。真耶の動きを制することができれば余裕も保てるが、授業中の教師の邪魔をするわけにもいかない。

「おっ、おっ、あっ……」

椅子に背をもたれて壊れたように喘ぐ一夏と、肉棒をパイズリご奉仕する真耶の構図が出来上がった。肉がぶつかり合い、卑猥な水音が鳴り響く。生徒の何人かは耐え切れず後方の一夏たちに熱の籠った視線を向けていたが、千冬に窘められて泣く泣く授業へと戻る。

生徒を叱った千冬も、弟を可愛がる同僚の姿に複雑そうな様子だった。ごくりと唾を呑み、生徒の視線に晒されない教卓に隠れて太股を擦り合わせている。下着が薄っすらと湿っているように見えたのは気のせいだろうか。

箒が一人ほくそ笑むのに誰も気づかず、真耶のパイズリ授業は続く。

「織斑君、気持ちいいですかっ、いいですよ、遠慮せずに声を出してくださいっ」

真耶は暴走していた。初めてのパイズリ。しかも、相手は教え子である少年だ。雄の頂点に君臨するチンポを有した年下を攻め立て、優位に立っている事実を高揚しているのだろう。教師が見せてはいけない発情した牝の顔で一夏を眺め、攻める。

「頑張れ、織斑君、頑張れっ、おっぱいに負けちゃだめですよっ」

ぐちゅんっ、たぷんっ、ぱちゅっ、ぶちゅっ、むにゅっ、むぎゅ、ぎゅうううっ！

パイズリが苛烈さを増す。すっかりパイズリというものを習得したようだ。動きに緩急をつけ、左右で胸の動かし方を変える。パイズリのたびに肉の壁から現れる亀頭に息を吹きかけ、一夏の喘ぎ様を見て頬を緩める。

真耶に可愛がられ、応援され、一夏は限界を迎えようとしていた。ローション一つでこれほど快感が跳ね上がる。セックスの奥深さを知り、それを教えてくれた教師にお礼をしようと肉棒が膨らんだ。

下腹が熱を持ち、伴った快感が弾け、一夏は精を放った。

びゅるるるっ、びゅるるるっ、どびゅーっ、びゅびゅーっ、ぶびゅーっ、

びゆるるっ！

「あはっ、あつ、これが、織斑君の精液、ふふっ、あーっ……」

嘔き出てきた精液を眼鏡と顔に浴びた真耶は、乳房を一夏の股間に落ち着かせ、乳房から顔を出した肉棒の前で口を開いた。今まさに射精中であり、真耶の口内や伸ばした舌が器となって大量の精液を受け止める。

お口の中に好きなだけ精液を出してくださいね？

そんな心の声が聞こえてくる真耶の蕩け顔を見ながら、一夏は女教師の口を精液の捨て場所として使った。嗅ぐだけで女を墮とす濃い精臭を伴い、真耶の口内が白濁に染まっていく。それに連れて真耶の表情がより一層だらしなくなる。

これほどの卑猥な女が教師であっていいのか。正常な認識の第三者が見ればそう思えるほど真耶は淫らに、喜んで教え子の精液を口に集める。こぼさないように口を近づけ、一夏に気持ちよくなってもらおうと乳圧を強める。

どびゅーっ、ぶびゅーっ、びゆるっ、びゅびゅびゅーっ、どくっ、どくっ！

一夏は射精を続け、徐々に冷静さを取り戻していく。

だが、『正気』には戻らない。夢から醒めようとするたび、外部からの干渉によつて心地いい夢が延々と続く。そして、この状況が正しいものであるという認識も拭うことはできず、真耶の口に最後の一滴まで精液を吐き出した。

真耶の口に溜まった大量の精液。それがゆっくりと真耶によつて飲み干されていく光景を、一夏は目の前で見せられた。そして、肉棒がすぐに真耶の胸の中で元気になっていく。

「二回目、始めてもいいですか？」

裏筋に垂れた精液を舌で拭った真耶に聞かれ、一夏は頷いた。

一回目は大敗を喫したが、次はそうはいかない。一夏は真面目に真耶の授業に向き合っている。模範的な生徒だ。その姿を見て笑う者は誰もいないだろうと思われる中、箒とセシリアだけが一夏を軽く一瞥し、口角を吊り上げていた。

種付け授業

「おっ、おっ、おおっ、うっ、くっ、ああっ！」

一夏が喘ぐ。精液がべったりとついた真耶の爆乳に挟まれてぬぷぬぷと扱かれ、肉棒が勇ましく膨らむ。その変貌は裏筋をせつせと舐めていた真耶を魅了し、蕩けきった表情へと変える。それを見ていた一夏は教師のいやらしい顔にまた欲情し、抑えきれぬ猛りを濃厚ザーメンとして吐き出した。

びゆるるっ、どびゅーっ、ぶびゅーっ！

「ああんっ、またこんなに。素敵ですよ、織斑君。好きなだけ顔にかけてくださいね？」

真耶はにつこりと微笑み、口や顔で受け止める。女教師の裏のない言葉に気をよくし、真耶に精液をぶちまけていく。教師にこんなことを、と思う正常な認識もない中、一夏は真耶に促されるまま射精を続ける。

もう何回射精しただろうか。真耶の髪や顔は精液でどろどろだ。洗うのが大変だろうと思うが、真耶の顔は幸せそのもの。まるで信仰対象である神の愛を受けた信徒のように、恍惚とし、選ばれた自分の幸福を噛み締めているようだった。

ついでにいえば、真耶は一夏の精液も噛み締めていた。口を動かして精液で軽くうがいし、それでも形を残すぷりぷりザーメン塊を歯で噛み潰している。一噛みするたびに広がる味に舌鼓を打ち、飲み込んでから精液臭く熱い吐息を漏らしている。

「本当に美味しくて、頭がおかしくなってしまうそうですね……」

どこか虚ろな表情で告げる真耶。豊満な胸の中でビクンと肉棒が跳ねた。

「そろそろ次のステップに進みましょうか」

これ以上先があるのか。一夏は乱れていた呼吸を整え、真耶を見た。肉棒が柔らかい胸から解放され、床にローションやら精液やらが混ざった液体がぼたぼたと落ちるのも気にせず、真耶は立ち上がった。

「見えますか？ 織斑君」

その言葉に釣られ、真耶の下半身を見た一夏は、新たな事実気がついた。

自分の下半身に伸びた真耶の両手が、陰部を覆うI Sスーツの生地を左右に引つ張る。すると、スーツに入っていた切れ込みから隠すべき箇所が表出する。まだ使われたことのなさそうな陰部。スーツと一緒に陰唇も口を開き、曇りのないピンクの粘膜が一夏にお披露目されていた。

「ここに小さな穴がありますよね？ あ、上の尿道ではなく、その下ですよ？」

「はい」

「ここが私のおマンコです。今からこの穴に、織斑君のおちんちんを挿入してもらいます。織斑君はこの世界で唯一選ばれた雄です。今後もたくさん女性の性を食らって、たくさん種付けして孕ませていくことになると思います。今日はその練習です。先生の未貫通処女おマンコを練習穴にして、種付けに慣れていきましょうね？」

一夏は領き、肉棒をビンと立てる。真耶には連続で射精に導かれてしまったが、まだまだ余裕がある。それに対し、真耶は疲労を感じているようだ。呼吸も軽く乱れていた。このままいけば、一夏は間違いなく逆転して優位に立てるだろう。

頑張るぞ。意気込む一夏の前で、真耶が背を向けた。突き出された真耶のデカ尻。こんなエロい尻をして今まで未経験だったのか。世の男は不甲斐ない。代わりに自分が奪ってやろうと、一夏は肉棒をビクつかせた。

真耶の尻が上からゆっくりと降りてくる。その直下には上を向く肉棒。互いの距離を徐々に狭まり、真耶が片手で開いた膣の穴にぱくつと亀頭が咥えられる。まるで吸いつかれていたみたいだ。蕩けるような膣肉の熱を感じた直後、真耶の尻が下へと押し込まれた。

ずぶ、ズブズブツ、ズププツ！ ブチュンツ！

「ああん！」

真耶が鳴き、真耶の中に呑み込まれた肉棒。たった今まで一夏の股

間で存在感を放っていた肉棒は姿を消し、代わりに真耶の尻が一夏の股間に押しつけられている。ぎゅっ、ぎゅうううっ、と締めつけられながら膣内で肉棒がマッサージされている。

熱々ぬるぬるの膣内。千冬とはまた違って包容力のあるそれは一夏を快感へと誘う。急速な結合によって遅れてやってきた快感に脳を犯され、跳ねるように背を反らした一夏は小さく息を吐いた。

「先生の中、温かいです」

「っ、あ、ふふっ、よ、良かったです。織斑君のおちんちんを、今度こそ全部食べられましたあ。あっ、で、も、こんなに大きいなんて、あんなっ、先生の中あ、織斑君でいっぱいになってますよお？」

余裕を失い、無理矢理表情に笑みを浮かべている真耶。中で一夏のデカマラチンポが軽く擦れるだけでイキ顔を晒しそうになっている。少し曲げた膝に両手を置いて体を支えているが、いつその支えが崩れるか見物だった。

一夏はスーツに覆われた形のいい尻に手を置く。安産型のいい尻だ。真耶は小柄だが、この尻と胸の発育の良さは子作りに適している。性教育に申し分のない体型をしており、存分に学ぶことができそうだ。

膣から垂れ、太股を伝った破瓜の血を見た一夏は、真耶に尋ねた。

「山田先生、動けますか？」

「は、はい、今動きますねえ？」

ぼうっとしていた真耶に確認すると、真耶は気がついたように尻を動かした。持ち上がる真耶の尻。膣壁に一夏の肉棒、特にカリ首が引っ掛かるのがわかる。その接触が気持ちよくて微かに声を上げる一夏の前で、真耶は賑やかだった。

「あっ、はあっ……い！」

上に動く尻。

「んんっ……い！」

下へと移動し、元の場所に落ち着く尻。

酷く緩慢な動作だ。これもまたいいが、もっと強い刺激を期待していただだけに、一夏は興ざめしてしまう。この程度か。心のどこに宿っ

ていたのだろう、一夏の黒い部分が表に顔を出し始めた。

気がついたときには真耶の尻を強く握りしめ、勝手に動かし始めた。

「お、織斑君?!」

狼狽する真耶。だが、一夏の手は止まらない。一夏自身に経験はないが、ラブドールを使うような感覚だろうか。自動では動かないそれを自らの手で動かし、肉棒と膣肉の接触する快感を楽しむ。

ぱちゅっ、ぬちゅっ、ぐちゅっ、ズプンッ、パンッ!

「おおっ、はあっ、ああっ、や、お、織斑く、あんっ、ああっ!」

最初はぎこちなさがあったものの、一夏の手腕はみるみるうちに高まっていく。処女喪失し立ての女教師の尻を掴んで上下に揺さぶり、マンコでガシガシとチンポを扱いてもらう。

いい使い心地だ。動揺に震える真耶の声もスパイスとなっている。

ぐぶっ、ぐちゅっ、ぢゅぶんっ、ぶぢゅんっ、ぐぶっ、ぬぽおっ!

「あっ、あっ、んあっ、あうっ、あんっ、はあっ、す、すごいっ!」

真耶の調子も段々とよくなってきたみたいだ。

一夏は試しにそつと手を離すと、前時代的な手動チンポ扱き穴は、自動チンポ扱き穴に変わった。曲げた両膝に手を置き、真耶が下半身を縦に振り降ろし、引き上げる動きを繰り返している。

目まぐるしい速度で肉棒が真耶の中を出入りする。一夏はその光景を見ながら真耶の尻を撫でた。触り心地抜群。スーツの上からでもむっちり吸いつくような感触に欲望を高める。

ズプンッ、ずぽおっ、パンッ、ぬぶんっ、ずぽっ、ぱちゅっ、ぐちゅっ、パンッ!

いい音を奏でる教師と教え子の共同作業。やがて最初の成果が訪れようとしていた。

「おおっ……」

ぶびゅびゅっ、どびゆるるっ、どぶっ、どぶぶぶんっ、ぽおっ、びゆるる!

「あ、ああああっ!」

真耶の尻が股間に叩きつけられるタイミングに合わせ、一夏は射精

した。子宮口に密着した亀頭が子宮の底にビームのような勢いのある白濁液を放った。見事に子宮の底に当たったそれは中をぐるぐると掻き回るように広がり、胎を織斑遺伝子で満たしていく。

「あ、ひっ、あ、熱っ、精子、織斑君の赤ちゃんが、私の中でえ……！」
真耶が震える。体勢を崩すことを危惧していた一夏だったが、杞憂に終わった。真耶のマンコは一夏のチンポをガツチリと掴み、降りてきた子宮の口が亀頭に吸いついてちゅーちゅーと精液を嚙っている。孕む気満々の卑しい女教師だ。お望みとばかりに肉棒は二発、三発と断続的に子種汁を噴きだす。

みっちり隙間なく子宮に詰め込まれたザーメン。ゼリーのような塊が多く、子宮の壁にへばりついている。子宮口を亀頭で蓋しているが、仮に蓋が外れたとしても精液はすぐに出てこないだろう。

一夏の子種を子宮に抱えた真耶は絶頂していた。パイズリ攻めの際の優位はもう真耶にはない。所詮、雌はこの程度だろう。一夏の黒い心が雌を見下し、やはり雄こそが雌よりも優れているのだと再認識すると、真耶の尻を引っ叩いた。

「あうっ!？」

「先生、動いてください」

「え、ま、まだ射精したばかりい!？」

「先生、早く」

真耶の中で肉棒が隆起する。射精直後とは思えない復帰の速さ。下から突き上げ、子宮口をボコボコに殴る亀頭に、真耶が声を上げた。一夏とほぼ同時に達していた真耶はまだ準備が整っていないが、一夏には関係ない。

「動け」

「は、はいっ!」

休んでいた奴隷が主に叱咤されて労働を始める。そんな凶を思い起こさせるように、真耶は膣抜きを再開した。教師として、教え子の明るい未来のための手本となる。そういう使命感が真耶の中にあつたのかもしれないが、今の一夏にとっては違う。

「もつと速く」

高速で揺れる尻と、揉み解される肉棒。その快感に酔い知れ、一夏は黒い笑みを浮かべていた。椅子にもたれかかり、教師をオナホ同然としか考えていない様子。それを見ていた教室内の女子生徒全員と千冬は、少しの間口を開くことなく熱い視線を一夏に集中させていた。

「あああんっ！」

どびゅっ、どぶんっ、ぶびゅっ、びゆるるっ、びゅーっ！

「あ、ああっ……！」

びゅーっ、どびゅーっ、どぶっ、どくん、どくんっ！

「ひ、うっ、も、もう駄目え、もう詰め込まないでえ……！」

どぶんっ、どぶんっ、ごぼっ！

休みなく、煮え滾る子種が真耶の中に集う。さすがに全てを収めることはできず、一部は膣外に漏れてしまった。しかし、内側からゼリーザーメンによって押し上げられた子宮の最大収容量は少しずつ上昇し、受け入れられる量も増えていた。増えた先から新鮮な精液を詰め込まれていて実感はないが、ぽっこりと膨らみつつある真耶の胎がそれを証明していた。

まだ入るはずだ。女の子宮は精液を詰め込み、子を孕むための袋なのだから。

「うっ……！」

席を立ち、追加の精液を放った一夏。真耶の体を羽交い締めにした一夏は股間を奥へとねじり込む。真耶は拘束されて逃げられず、精液袋となった子宮に亀頭の突きを受け、激しい嬌声を上げた。

「あひいつ!? ああんっ!? お、奥におちんちんが、おおっ!? んんっ、あっ、ああっ！ おマンコ壊れちゃう！ 壊れちゃいますうううう！」

その声は一年一組の全員の本能を揺さぶる。

いつしか授業の進行は完全に止まった。弟の暴力的なセックスに支配される同僚を見て、千冬は固唾を飲んで見つめていた。千冬がそんな状態であるために、席を立つ女子生徒たちを止める者はなく、やがて集団で一夏を取り囲んだ。

「織斑君、すごい……」

「こつち向いて、ねえ……」

「イクツ……！ 二人のセックス見ながらイっちゃう……！」

「精液美味しいよお。んっ、ぴちやっ、ぢゆるるっ……！」

「わ、私にもわけてくださいましっ！ んっ……あぁっ、舌の上で蕩けて。一夏さんの精子がぎっしり詰まってとても味わい深いですわぁ……！」

「織斑君のアナル、頂きまーす。ぐちゅっ、ぶちゅ、ぶちゅるる……！」

視姦、自慰のみならず、床に落ちた精液や一夏の体を舐める者も出てきた。それに構うことなく一夏は腰を前後に振り、下から挟り込むようなチンポ突きを真耶にお見舞いする。羽交い締めはいつしか力任せな拘束へと変わっていた。

「えへ、えへへえ……」

終わりのない暴力的な快感の連続に理性が吹き飛んだ様子。真耶。

まだ暴れ足りない一夏。

箒は楽しそうにそれを見守りながら、自分の胸と秘所を弄って慰めていた。

処女食い

一夏は立ったままの真耶を力任せに拘束し、背後から膣へ肉棒を突き上げる。何度も、何度も。周囲を同級生の少女に囲まれ、欲望を孕む視線を浴びせられながら、女教師に暴力的な種付けを敢行する。

一夏に蹂躪されていた真耶は完全に沈黙していた。頭は項垂れ、全身の力が抜けている。自分では動かず、何の反応も示さない。まるで性玩具だ。一夏は反応の少ない女教師に怒りのチンポ突きをお見舞いするが、真耶の目は閉じたままだった。

もういいか。最後に一発、子宮に精液を注いだ一夏は、真耶の体を解放した。支えを失い、前に倒れていく真耶。それを女子生徒数人が受け止めた後、床に仰向けにさせると、それは始まった。

「山田先生？ おーい」

「駄目だ、完全に寝ちゃってる」

「織斑君の精液をわけてもらおうと思ったのですけど」

「まあ、仕方ないから、勝手に味わわせてもらおう？」

「だね。山田先生、スーツ脱ぎ脱ぎしましょうね？」

真耶の下に集ったクラス半数の生徒。その目的は競争率の高い一夏の精液を味わうことのようなのだ。人形を扱うように真耶の両手を持ち上げ、ISスーツを脱がせていく。ただでさえ密着性の高いスーツは精液に濡れることでますます肌に密着していたが、悪戦苦闘しながらも生徒たちは教師を丸裸にすることに成功した。

裸で床に横になり、股を大きく開かされた真耶。

膣からごぼりと精液の塊が溢れ出た直後、生徒たちは真耶に襲い掛かった。

「織斑君と間接チュー。ぐちゅっ、くちゅっ、ぢゅるっ、ぷちゅっ、くちゅ、くちゅ」

真耶の唇を塞ぎ、口内に舌を這わせる生徒。

「先生って本当に胸大きいよね。羨ましいなー。れろお、ちゅるっ、ごくんっ」

と言いながら、柔らかい胸に舌を這わせ、付着した精液を舐め取る

生徒。喉を鳴らして精液を飲んだ瞬間、頬が蕩けるとでもいいような恍惚とした顔をしていた。

「あー、こんなに出生してもらったのに垂れ流しちゃうなんて。駄目だよ、真耶先生」

真耶の太股を掴んで左右に押し開き、眼前に捉えた膣へと顔を近づけた生徒。「ぶぢゆるるるるっ！」とひと際大きな音を立てて膣外に流れ出た一夏謹製の孕ませ子種汁を一気飲みし、これまた幸福感に満ちた顔をする。

「ああ、織斑君の精液ってなんでこんなに美味しいんだろ」

「当たり前でしょ。だって織斑君だもん」

「うふふ、さすが織斑君。一生ついていきます」

「ねえ、もつと場所詰めて。あたしも織斑君の精液を舐めたい」

「ちよつとちよつと！ 狭いって！」

順番待ちをしていた生徒が我慢ならず詰めかけ、真耶の包囲網が狭まる。一夏成分を少しでも堪能しようと、我先にと真耶の胸と膣を重点的にしゃぶりつく。精液という形あるものではなく、一夏と接触した場所であれば遠慮なく舌を這わせていく。唇は勿論、体の隅々に至るまでが対象範囲だった。

物理的に生徒に舐められている真耶を茫然と見守っていた一夏は、背後にいた生徒によつて尻の穴を舐められる感覚で我に返る。いけない。ぼうつとしていた。先生以外に相手はたくさんいるのに。一夏の前には期待するようにつめてくるセシリアを含めた生徒たち。一夏と視線が合ったセシリアは艶やかな微笑みを広げた。

「一夏さん、山田先生の次はどなたをお召し上がりになりますか？」

「箒さんですか？ 私ですか？」

それとも、と続けてセシリアが手の平を差し向けた先には整然と横並びになる生徒たち。そこに、たった今まで一夏のアナルを舐めていたお淑やかそうな大人びた少女が慌てて合流する。真耶の下にいる生徒たちとは打って変わって統率が取れていた。セシリアというまとめ役がこちらにはいるからだろうか。

落ち着きつつも、欲望を隠すことをしない美少女たち。待ちながら

自慰をしている者も多い。放っておいても自分で達することはしうだが、それでは勿体ない。やはり女は直接食ってあげるべきだ。

「壁に両手を突いてマンコを突き出せ」

一夏の命令に「かしこまりました、一夏さん」と喜んでセシリアが承諾する。

「はい、皆さん。迅速に準備してくださいまし」

「はい」

セシリアに従い、十数名の生徒たちが一斉に移動を開始する。教室の後方、収納ロッカーが並ぶ壁の前に立ち、各々身に着けていた下着を足首まで下ろしていく。中には既に下着を身に着けていない生徒もいて、スカートを捲り上げて先じて壁に手を突き、尻を突き出す。

一分とかわからず、魅力的な尻が、否、魅力的なマンコが横にズラリと並ぶ。圧巻の一言だ。一夏の挿入を待つて正面を向き、誰一人後ろを向いていない。ただ一夏に使ってもらおう。その目的に遵守した優れたチンポ穴たちと言える。

「うふふ、準備できましたわ。一夏さん」

「ああ」

セシリアというまとめ役が一人いるだけでこうも違う。無法地帯と化した真耶を中心とした生徒たちの楽しそうな声に背を向け、一夏は右端にいたマンコの前へと移動した。社交的そうで、男遊びをしていそうな少女のマンコだ。

むっちりとした尻。それを鷲掴む。触り心地がいい。太すぎず、細すぎない男を惑わす尻。IS学園の女子は本当にレベルが高い。一人一人が普通の学校へ行けば男子の注目を浴びるような美少女ばかり。体型も均整が取れていて、容姿で入学の合否を決定したのではないかと度々邪推したくなる一夏だった。

一夏は尻を掴みながら距離を近づけた。膣口に肉棒が食い込む。さして、お味は。舌なめずりし、口角を吊り上げた一夏は、一息でチンポを挿入した。

ブチツ、と処女膜を引き裂き、あつという間に最奥へとたどり着いた。亀頭がズンツと鈍い一撃を子宮に放つ。「お……」と一夏と繋

がった生徒が震えながら声を漏らし、膣肉で肉棒を引き締めてくる。彼のいなそうな少女だったが、結果は処女だった。初物マンコはやはり食い応えがあつていい。処女を散らし、相手にとって自分が初めての男となつた征服感。男として喜びを噛み締めつつ、早速中を踏み荒らしてやろうと一夏が腰を前後に振る。

周りの生徒たちの視線が否応もなく集まる。すぐ左横でマンコの準備を整えていた生徒は顔を赤くし、交尾の様子から目を離せないようだった。

「あんっ、あっ、ふ、深っ、おおっ……!?!」

明るい茶色に染まるポニーテールの髪が揺れている。「掴んでください」とでも言うように伸ばされたそれを一夏は右手で掴むと、腰を揺らしながら引つ張つた。「ひう……!?!」と生徒の顔が上を向いて声を上げた。

やっぱり女は玩具みたいだ。一夏は再認識し、生徒を弄んだ。

ポニーテールを引つ張り、膣内をチンポで穿り回し、左手で尻を揉む。

素晴らしかった。女と呼ばれる生物はどうしてこうも気持ちいいのだろう。柔らかいし、いい匂いもする。美少女だから見ているだけで目の保養にもなる。あれか？ 男に犯されるためにこんな体に成長したのだろうか。

だったら、なおさら使つてやらないとな。

「おお、おおっ、あっ、い、イク、イっちゃうっ、そ、そんなに突かれたらあっ!?!」

生徒の体が痙攣し、甘い声を漏らす。その声は一夏の耳にも届いて股間に栄養を与えた。むくむくと膨らむ肉棒。狭い穴をさらに満たし、みっちりと膣内を満たすと、精液を迸らせた。

ぶびゆるるっ、びゆるるっ、どびゅーっ、びゅーっ、ぶびゅーっ、どぷんっ!

「あ、これ、やっぱあ……!?!」

気持ちよくて堪らない。そんな想いが多分に含まれた言葉を口に、まだ未侵略だった子宮に一夏の精を浴びる。中に溜まったどろど

ろの精液は所有権を主張するように臭いでマーキングしていく。

子種を胎に抱いた生徒は荒い呼吸を繰り返している。一方で一夏は余裕だ。まだ出し足りず、このまま何発でも出せる。だが、まだ食べたいマンコは横に並んでいる。

一夏が左に視線を向けると、大人しそうな雰囲気少女が恥ずかしそうに視線を正面に戻した。横顔を見つめているとさらに顔を俯けてしまう。その様子が一夏の嗜虐心を叫んだ。

一夏はマンコから肉棒を取り出した。ぬぽおと精液に濡れた龟头が外に出て、中に出された精液が逆流を始める。しかし、膣内射精された生徒は精液を惜しむ様子もなく、動じなかった。セシリアによる統率の行き届いたマンコたちだった。

「一夏さん、どんどん召し上がってください。ん、あつ……」

セシリアは机に腰かけて膣を穿り回している箒と同様に、長いスカートに潜り込ませた両手を使って自慰をしている。一夏のセックスはいいオカズになるようだ。足元の床にはぼたぼたと水滴が垂れて落ちていた。

セシリアに言われるまでもなく、一夏は行動に移していた。

「あつ、やあつ、んんっ、は、うっ……!!」

窓際で静かに本を読んでいそうな大人しそうな少女。小さな体に覆い被さる体勢になって壁に手を突き、腰の動きだけで膣を犯し抜く。「もつと鳴け」と耳元に向かって呟くと、少女は「はいっ……!!」と頷いて喘ぎ出す。

破瓜の血を流し、それでも痛みを感じさせない蕩けた顔でよがる少女。大人しい雰囲気少女が見せるギャップに中てられ、肉棒が新しい種を吐き出した。どびゅびゅびゅーっとゼリーののような濃いザーメンが子宮を汚し、中を占拠する。

やりたい放題だった。一夏の願いは全て叶う。

「尻を振って誘ってみろ」

そう願えば、待機中のマンコたちが尻を振って一夏を誘う。

そこからは順番など関係なかった。よりよく一夏の男心をくすぐったものから順番に繋がった。どいつもこいつも処女ばかり。恋

人がいてもおかしくない容姿をしているのに、全員が一夏のチンポに処女膜を食い破られ、その証である破瓜の血を教室の床に滴らせている。

世の男は不甲斐ない。食べ頃なうちに俺が食ってやらないと。

歪んだ使命感に背を押され、一夏は一人、また一人とセックス経験人数を増やしていった。そのうち、授業終了を告げるチャイムが鳴り響いた。だが、一夏の腰振りは止まらない。時には激しく、時には優しく。相手に合わせて攻め方を変え、肉棒に新しい女の味を覚えていく。

結局、一夏はこの短時間で経験人数を一気に増やした。壁に両手を突いたままの少女たちが足を広く横に開いて立ち、膣から精液を垂らしている。ごぶっ、ごぽおっ、どろおと床に白濁の水だまりを作っている。

それに至るまでの過程を一部始終見ていた箒と千冬は、共に自慰に励んでいた。授業が終わり、一年一組の前には他クラスの生徒たちがわらわらと集い始めているにも関わらず、箒は恥ずかしくもなく股を開いて自慰をしている。千冬は人目を気にしてはいるようだが、教卓と体の間に滑り込ませた手は陰部を激しく擦っている。

「ご利用ありがとうございます！」

綺麗に揃った生徒たちの声。それを聞き、一夏は食ったばかりの少女たちを満足げに眺めていた。一夏の腕に抱き着くように身を寄せてくるセシリアの綺麗な手に扱かれ、ビクビクと跳ね動く肉棒はまだ活力を失っていない。

セシリアが一夏の耳に口を近づけ、桃色の唇を動かした。

「次は何をお望みですか？ 何でも叶えて差し上げますわよ」

セシリアの発言に嘘はない。セシリアにできないことはあっても、後ろで楽しそうに自慰をしている箒に不可能なことはないだろう。一夏の願い事は全て叶えてもらえる。一夏はただ願えばいい。

そうだ。願えばいい。俺の望みを。

俺はいったい何を望んでいる？ 次は何をしたい？

自問自答し、一夏が心の中に潜り込んだときだった。

『そろそろ目を覚ましたら？』

嘲笑うような、少女の楽しげな声が頭の中に響いた。

正気な操り人形

「ああああああっ!？」

一夏は正気を取り戻した。瞬間、正常な理性に襲い掛かったのは自責の念。箒によって認識を改変され、いい様に操られた自分の行いが次々と脳裏を過る。まだ新鮮な記憶は一度覚えた快感を呼び起こすのに十分で、一夏の脳を犯す。

「俺は……! 俺は……!」

その場で崩れ落ちるように膝を突いて頭を抱える一夏。「あら？」と直前まで一夏の肉棒を扱っていたセシリアが不思議そうな顔をして一夏を見下ろす。異変に気がついたようだが、もう片方の手はスカートの中に潜り込んだまま秘所をくちゅくちゅと弄っている。

次第に、周囲の生徒も一夏の様子に気がついたようだ。

「どうしたの?」

「なんか織斑君が」

「お腹痛いのか?」

「大変! すぐに保健室に連れて行かないと!」

生徒たちが一夏を取り囲み、心配そうに話し合う。一夏に処女を散らされ、子種を与えられた者も、まだ処女を奪われていない者も、一夏の行いを責めることはない。箒の洗脳は強力だ。箒が解除しなければ解けることはない。そんな彼女たちを、正気を失っていたとはいえ、乱暴に犯してしまった。

気持ちいい。楽しい。辛い。苦しい。

最初に味わった確かな快感と、遅れて襲い掛かる後悔の感情が混ざり合っておかしくなる。頭を抱える両手に力が入る。万力のように締めつけ、痛みを与えても目は覚めやしない。これは現実。悪夢のよきな現実だ。

「どうしたんだ?」

新たに手にかけてしまった生徒のことを考えていると、一夏の耳が声を拾った。

顔を上げ、見上げた先には箒がいた。女子生徒の群れが開けた道を

悠々と歩き、実に心地よさそうな顔で一夏を見ている。一夏と生徒の交わりをオカズに、随分と自慰を満喫したようだ。

「洗脳が解けたのか。では、また操ってやろう」

そう言っつて、箒は精神掌握の力を行使した。予備動作は見えない。発動できる有効範囲は一夏にはわからないが、少なくとも視認できる範囲にいれば如何なる状況でも洗脳を振り解く術はないのだろう。

箒を気絶させれば。一瞬だけ思ったが、手が動かない。箒も被害者だ。手を上げることはできない。だが、少しでも抵抗してみせようと、一夏は目を固く閉ざして歯を食いしばった。気合で乗り切れるとは思っておらず、無駄な抵抗だとわかっている。

「ん？ なんだ？」

しかし、今回は何かが違うたようだ。

「おかしい……。干渉できない……。う？」

まだ正常な認識を保っているように感じた一夏は目を開き、箒を見る。なんだ？ と首を傾げる一夏の前で、箒は動揺していた。どうやら力がうまく発揮できないようだ。明らかに余裕をなくした表情だ。力が使えないのか？ それとも、箒の中から力が出ていった？

「な、何故だ！ 私に与えられた力のはずだ！」

理由はわからないが、逃げるなら今しかない。今は休憩時間。教室の出入り口を塞ぐようにして他クラスの女子生徒が集っている。あの中を掻き分け、外へ出る。服を着ている余裕はなく、全裸での疾走となるが、贅沢は言っていられない。

いけるぞ！

一夏が決心し、立ち上がった直後だった。

「わ、私の力だ……。私に従え……。！」

箒が突然右手を一夏に向かって突き出し、声を張り上げたときだった。

「っ……!?!」

一夏の体が動きを止めた。手足を動かさそうと命令を下すも、全く受理されない。意識と肉体が切り離されたような状態。そんな！ と思っつて何度も抗っつてみせるが、体は全く言うことを聞いてくれなかつ

た。

それを見て、箒は手を突き出したままほつと安堵していた。

「は、はは、なんだ、ちゃんと効くではないか」

箒が徐々に余裕を取り戻していく一方で、一夏は苦虫を噛み潰したように表情を歪める。結局発動できるのか!? と驚く。逃走を実行に移す間もなく再び囚われの身。自分が情けなく思えてきて、落胆の息を吐いた。

「あれ……?」

「んん……?」

一夏と箒が別の異変に気がついたのは同時だった。

今、体は箒に操られているのは確かだ。それなのに、体の一部だけ自由が利く。頭も動かせるし、声も出せる。そして何より、この状況をまずいと認識できている自分がある。箒に認識を操られていれば、全裸で女子に囲まれた状況はむしろ喜ぶはずだ。

数秒の思考と沈黙。箒と見つめ合い、他の女子生徒に見守られる中、結論が出た。

体の、それも一部だけが箒の制御下に置かれてしまった。

「はは……」

箒が笑う。

「あはははっ……!」

それをきっかけに、腹を抱えながらの哄笑へと変わった。一夏は笑う箒を前にして言葉を失った。理性を失うよりも、下手に理性を抱えている状態のほうがまずい。体は操られてしまっているのに、それを見ていることしかできないのだから。

楽しげに笑っていた箒がやがて、笑い声を収めて一夏をにやにやと見つめた。

「セシリア」

「はい、箒さん。皆さん、机と椅子を全部教室の端に移動してください」

「はーん」

箒の命令を受けたセシリアが生徒全員に指示を出す。まるで下の

者に命令を出す中間管理職だ。指示を出して教室中心に広い空き空間を作り、気絶中の真耶を運ばせる。音を立てて場が整っていく中、一夏は何もできなかった。

どうすればいい。無駄とわかっていても抵抗をやめず、一夏は視線をさ迷わせた。

そのとき、一夏はこの場で唯一の味方の存在を目にした。

「千冬姉！」

声を投げた先、教卓に寄り掛かって座っている千冬の姿があった。俯いているために表情は窺えない。一夏は千冬に助けを求めようと声を上げかけたが、寸前で思いとどまった。

千冬が何をしている最中なのかを理解してしまった。

スーツを脱ぎ、白いシャツのボタンを外し、右手で露わになった乳房を揉んでいる。左手は下腹へと伸びており、スーツのスカートの中に潜り込んでいた。生徒たちが立てる音で聞こえないが、近くにいれば艶のある声と湿った音が聞こえることだろう。

一瞬、隠れてみえない千冬の口元が緩んでいるように思えてしまい、一夏は目を逸らした。千冬にも頼れない。完全にこの空気の中でられて発情している。箒を止めてくれる余力はない。

いや、そもそも千冬は一夏寄りではあるが、立場としては中立だ。これは一夏と箒の勝負。千冬の手を借りることはできない。

何か、何かないのか。一夏は打開策を模索した。

たとえば、今は抑えているフェロモンを上手く活用できないだろうか。リフレッシュを自分の意思で発動させることはできないか。いろいろと試そうとは思うが、土壇場で使いこなすには経験値が足りなさすぎる。

時間がない。

「準備できましたわ」

セシリアが箒へ報告に戻ってきた。見ると、教室の端に綺麗に椅子と机が寄せられていた。中央に空間ができ、一夏は微笑む生徒たちに囲まれ、箒とセシリアと相対しながら肉棒を勃起させていた。

「一夏、始めるぞ」

場所も、自身の股間も、準備を済ませてしまった状況で、箒がゆつくりと口を開いた。

「織斑君、見える?」

一夏が見下ろす目の前でその少女、相川清香は四つん這いになっていた。スカートを捲り上げ、白いショーツに包まれた尻を向けている。それを左右に揺らし、可愛く笑顔を振り撒いて一夏を誘っている。

誘いに乗るように、一夏の体が清香へと近づいた。その背後で膝を突いて座り、ショーツ越しに尻を掴む。スポーツで鍛えられているのか、柔らかくも張りがある。その感触を指で感じつつ、一夏は目を瞑っていた。

「一夏、ちゃんと相手を見ないと駄目だろう」

「そうですね。これから処女を奪うのですから」

「い、嫌だ……!」

屈んで一夏の耳元に顔を近づけた箒とセシリアに囁かれ、一夏はそれを拒絶する。

反抗できないのなら、もう目を閉じているしかない。しかしこれは、自分の罪から目を背けているわけではない。ただ、相手の痴態を見てしまわぬようにという配慮であったが、すぐにそれは頓挫した。

『目を開けて相手をよく見て? これから犯す相手を』

箒でもセシリアでもない少女の声が脳内に響いた。神を自称する少女だ。この状況を作り出した本当の元凶は一夏をとことんまで弄ぶつもりらしい。一夏は怒りを抱いたが、今はそれを発散することもできない。

「一部だが、頭も操ることに成功したぞ。ふふ、これでは精神掌握ではなく肉体掌握だな。なぜか意識は未だに操れないが、まあいい。一夏。真っ直ぐ前を向いて、相川のことを見るんだ」

命令には逆らえない。箒に支配された目が瞼を開き、清香の姿を瞳に映し出す。

一夏の前で、清香は自発的にショーツを脱ぎ始めていた。足元まで下着を下ろし、生尻を一夏に見せつける。当然、隠れるべき女陰も一

夏の瞳に映る。

「さあ、次だ。一夏」

一夏の手が移動し、指先が清香の陰裂に掛かった。縦筋を描いていた膨らみを横に開くと、中からピンク色の秘所が現れた。自慰をしていたためか、それなりに濡れている小さな膣穴も確認し、その穴の中には男の侵略を許したことの無い膜があった。

「見えるか？ 今から一夏が破る処女膜だ」

「駄目だ、そんなこと……」

「一夏さんのおチンポで、奥まで支配してあげてください」

「やめてくれ……!」

一夏は声を上げ、表情を歪めることしかできない。体は勝手に動いていく。腰を近づけ、勃起チンポが膣に狙いをつける。そうしてから膣穴に亀頭を食い込ませて生殖器同士の口づけを済ませ、いよいよ本格的に繋がる挙動を示した。

「一夏、一気に行ってください」

「相手のことなど考えてなくても大丈夫ですわ」

「そうだよ、織斑君。女の子は皆、織斑君の所有物なんだから。滅茶苦茶にしていいんだよ?」

箒、セシリア、そして清香が続ける。

誰も拒む者はいない。むしろ、誰もが一夏を求めている。

一夏の肉棒が硬さを増す。膣を犯す気満々のそれが膣口にさらに深く食い込んだ。

『犯せ』

そして、背を押されるような少女の強制力のある声に促され、一夏は腰を突き出した。

「ああああっ!?!」

たったの一突き。どんなに経験豊富な女であろうと墮とせるだろうLv. 100チンポが未経験の清香の中を貫く。大切なはずの処女膜を本当に呆気なくブチ破られ、大事な子宮に突きによる暴行を振るわれる。

清香は声を上げることできずに言葉を失っていた。体を小刻み

に痙攣させ、押し寄せる感覚に耐えている。処女を引き裂かれた痛みは勿論、初物でも絶頂を迎えさせるチンポと繋がった快感と幸福が清香を襲っているはずだ。

膣内で愛液が急激に生み出されていく中、一夏の腰は早速動き出した。

「あんっ、あつ、あぁっ！」

「やめっ、あつ、くっ！ あぁっ!？」

四つん這いになる清香のショートヘアを右手で引っ張り、左手で腰を掴みながら一夏が前後に体を動かす。たった今処女を食い散らかし、少量の血が流れ出る膣を太い肉棒で掻き回していた。ズボン、ズボンと膣奥まで肉棒が埋まるたびに清香は嬌声を上げ、犯している一夏も興奮交じりの悲鳴を上げていた。

「織斑一夏君の生セックスシーンはこちらです。ちゃんと並んでくださいねー！ あ、駄目ですよ、お客さん。今回は一年一組だけです。お触り禁止。でも、撮影は大丈夫なので、いくらでもどうぞー！」

シャッター音が聞こえた。一夏を包囲する一年一組の生徒の隙間から一夏を撮影しようと体を乗り出す他クラスの生徒たちだ。パシャ、パシャと音が絶えない。写真だけでなく、動画もしっかりと撮られている。

それを目端に捉えながら、一夏は正面を見続ける。自分が犯してしまっている清香。健康的に肉のついた丸みのある尻に股間を押しつけられ、狭い膣肉を押し退けて奥へ生殖器を押し込まれ、一夏に髪を引っ張られて上を向きながら震える美少女の小柄な体。

「あつ、ひっ、っ、ううっ、あんっ、あ、あぁっ……!？」

「くうっ、あぁっ!？」

清香にぎゅうぎゅうと膣肉で締めつけられ、肉棒を中心に快感が波打つ。

気持ちいいと感じてしまう。処女を奪った達成感が心を惑わす。それらを全て否定し、苦しみながら一夏は耐える。耐えても意味はない。この状況になってからでは遅い。わかっていても耐え続けた。

それも、もう限界に近づきつつあった。

「さあ、一夏。もつと激しく犯してやってくれ」

「一夏さん、もつと気持ちよくなってくださいまし」

傍らの箒とセシリアに見守られながら、一夏は腰遣いを激しくした。清香の髪を握りしめ、処女喪失し立ての膣穴を穿つ。手加減がでない。ドスツ、ドスツと鈍い膣を放ち、「ひいっ!？」と清香を鳴かせる。

その声を聞き、ゾクゾクと背筋が震えた。

もつと犯そうと体が暴走し、一方的な蹂躪が展開された。苦しみながらも笑う清香の髪を掴んだまま、子宮を龟头で殴る。殴る。何度も殴る。清香の腰に触れていた手を移動し、清香の首を掴んだ。首を絞めると清香は「かふっ……!？」と息を漏らし、膣を収縮させた。

圧迫感が強まる。それは一夏の肉棒にはとても心地よいもので、肉棒が喜びに震えた。

駄目だ。と一夏が観念して間もなくだった。肉棒が射精を始めた。びゆるっ、びゆるるっ、ぶびゅーっ、びゅびゅびゅーっ、どびゅーっ、どぶうっ!

「あああああっ!？」

一夏と清香が同時に叫ぶ。絶望と歓喜。声に秘めた二人の想いは違えども、重なり合った声は場を盛り上げた。凄まじい勢いで子宮に叩きつけられた精液は、膣道を逆流して結合部から溢れ出てくる。溢れ出る以上の大量の精液は子宮に叩きつけられ、漏れることなく子宮の壁にこびりついて離れない。

「おおーっ!？」

射精し、快感と悔恨に打ち震える一夏に向けられた周りの生徒たちの声。いくつもの携帯電話のカメラにその姿を収められ、一夏の犯行がデータとして保存されていく。決して消えることはなく、これから何度も閲覧されていく大切な記録となっていく。

その記録はまだまだ増えていくようだ。

「次だ。休みなど必要ないよな?」

清香の膣を白濁一色に染めてすぐ、一夏は立て続けに行方を迫られ

た。

天国か地獄か

「んっ！ ああっ！ いいよお、織斑君」

「あんっ！ やば、出しすぎ。あつ、こんなに出されたら、さすがに妊娠しちゃうかも、んんっ……!?!」

「織斑君、んあつ、織斑君のデカチンポにい、おマンコ穿られてイッチャうよお！」

肉体を操られた一夏は次々に一年一組の生徒を食っていった。初物を奪い、不慣れな女子高生マンコを肉棒で使い込む。常人とは比較にならないデカマラを受けて最初は動揺していた少女たちも、依存性の高すぎるチンポによって雌に堕ち、一夏の女として可愛らしい嬌声を上げた。

元気な少女たちに対し、一夏は疲弊していた。肉体面は変わらず活かに漲っているが、精神状態が危うい。自由の利く表情は沈鬱としており、口数も少ない。瞳は虚ろだ。

それでも体を制御しようという意思は働くが、肉体は言うことを聞かずに勝手に動く。騎乗位で。立ちバックで。種付けプレスで。様々な体位で同級生と繋がり、遺伝子情報を内包した精液を子宮に撒き散らしてしまった。

絶望する一方で、一夏は確かな快楽を覚えていた。当然だ。操られてはいるが、感覚は正常。優れた容姿の少女たちとまぐわうことができ、喜べないほど枯れた人生を送ってはいない。

気持ちいいと思いはするものの、せめてこれが双方同意の上で、将来を誓い合った者同士の行いであって欲しかった。それならば一夏も素直に快楽を享受したはずだ。

だが、残念ながらそうではないのだ。決して受け入れていい状況ではない。

最後まで、抗わないと。

『そう。惨めに抗って?』

神と思われる少女の声が脳内に反響する。相変わらず楽しげだ。一夏がもがく様を娯楽代わりに鑑賞している。人間のことなど玩具

としか思っていない残酷性。これが神であるものか。一夏は少女への怒りを募らせ、少女の存在を再認識した。

これは邪神だ。人に仇なす存在。決して相容れることはない。

『呼び方はなんでもいい。それに意味はない』

一夏の思考を読んだ邪神が答える。

『ただ、私に見せて欲しい。君の物語を。君の行く末を』

「おりむー、次は私とエッチしよ〜?」

邪神の発言の直後、別の少女の声が割り込んできた。逃げ場のない種付けプレスで一人の少女に膣内射精をし終えた一夏は、体を起こして声の主を見つけた。そこには、にこやかに笑う小柄な少女がいた。何かのキャラクターと思いき髪飾りで短いツーサイドアップにした髪型のおかげで、幼い雰囲気には拍車を掛けている。

布のほとけほんね仏本音。いつものほほんとしていて、彼女の周囲だけ時間がゆっ

くりと流れているように感じる。普段袖が余った制服を着ている彼女だが、今日の格好はいつもとはまるで違う。

「ほらー、おりむーの大好きな処女おマンコだよ〜」

ゆったりとした口調で、癒されるような柔らかい笑顔で告げる本音は今、制服や下着から解放された生まれたままの姿だ。一夏を見下ろしながら自身の秘所に両手を伸ばし、おマンコをくぱあ、くぱあと開いては閉じる動作を繰り返している。そのたびに未侵略の綺麗な花園が現れ、一夏を誘う。

「この中におりむーのおチンポを入れてみようよ〜」

再び本音が縦筋のような陰裂を開き、一夏に膣穴を見せる。一夏の中にある雄の本能がくすぐられる。本音は身長も低く、幼い顔をしているが、その体は非常に起伏に富んでいた。女として男を誘い、元気な子を産むに相応しい豊かな胸と尻を併せ持っている。本音の恵まれた体を見たことがない観衆の一部がどよめいていた。

本音を前にして、一夏は肉棒を握って立ち上がった。シコシコと振るきながら本音との距離を詰める。二十センチ以上も小さい本音の眼前に立ち、勃起したチンポを見せつけ、そして本音の体を視姦した。

「やめろ……」

自分に向かつて言い放つも、一夏の体はそれを無視して本音の裸体を舐め回すように見る。肉棒を扱いて栄養を与え、フル勃起して反り返った状態にする。準備完了。一夏は本音に近寄ると、その体を正面から持ち上げた。

「おお〜」

本音は声を上げ、両手でしつかりと一夏の首に抱き着く。何をするのかわかっていいるのか、そうでないのか。呑気な様子の本音の両足を掴んだ一夏は、股の中心に向けて怒張した肉棒を突きつけた。

そしてそのまま、肉棒と膣の距離を近づけると、互いを食い込ませた。

「あ〜」

膣穴に肉棒が入っていく。強い締めつけに襲われるが、肉棒は少しずつ前進した。接触する面積が増えていくに連れて熱が広がる。ゆっくりと一つになる感覚を受けて一夏は歯を食いしばる。

やはり、抵抗は無意味だった。力を入れようと考えるも、体に影響はない。

一夏の反抗空しく、亀頭が膣内にある何かに進行を阻まれ、それを食い破った。ブチイツと破き、出来た道を進む。その代償に、二人の結合部からは破られた処女膜から生じた血がぽたぽたと垂れた。

血を垂らしながらも繋がっていく二人は、一夏から迫った口づけによって上の口でも繋がった。本音がうっとり優しい笑顔を見せる中、一夏だけは辛そうな顔をし、舌で本音の口内を撫で回す。

表情と行動が合っていない。まだ逆らう意思を残した一夏を見た箒たちは楽しげだった。いつまで持つか。一夏が屈服する未来を心待ちにしつつ、その過程を楽しんでいる箒は邪神と変わらないように思えた。

「んんっ、あ〜、むちゅっ、ちゅぷっ、くちゅっ、ぴちやつ、おりむー好きいく、ちゅっ……」

本音も一夏を求めて舌を動かしていた、二人の舌が絡み合う中、膣内では肉棒が奥まで行き着こうとしていた。溶けてしまっようなほどの熱に満ちた膣は一夏を完全に欲情させ、奥へと誘う。誘われるが

まま膣奥に辿り着くと、子宮口に亀頭をピツタリと触れ合わせた。

完全に繋がって、二人は肌を密着させた。

一度でも深く繋がってしまったえば、あとはやることは決まっていた。一夏は腰を引き、抱え持った本音の膣内から肉棒を取り出す。亀頭が膣口から抜けないよう注意し、ギリギリのところまで止まってから今度は腰を前に出す。

最初は緩やかだった動きが徐々に速度を増し、一分と経たずにそれは苛烈なものに変わった。一夏の力強い腰遣いからなる駆弁フアツク。誘った側である本音は体を自由に動かせず、一夏にただ使われていた。

「んっ、あ、ふっ、ちゅっ、ちゅるるっ……」

それでいいと思っっているような、快楽にふやけた顔をしていた。唾液を啜り、一夏と舌同士で戯れて、また溜まった唾液を喉へと流し込む。その間に膣では凶悪チンポによるガン突きが行われ、穴を一夏専用に変えていく。

一夏の本意ではない。早く何とかしなければならぬ。でも、どうにもならなかった。

腰の動きが加速する。ラストスパートだ。本音と舌を擦りつけ、唾液を交わらせるその下で、膣内を高速で出入りする肉棒。パンツパンツ、と肌と肌が接触する乾いた音を響かせ、最後にひと際大きな音を立てた瞬間、肉棒が震えた。

どびゅびゅーっ、ぶびゅるる、びゅるっ、びゅるるっ、どびゅっ、ごぶっ！

子宮口を覗き込む亀頭が次々に精液を噴き出し、子宮を汚した。初めての感覚に驚いているらしい本音は目を見開き、「ああっ……出てるよ……おりむーの赤ちゃんの素……」と言いながら一夏にしがみつく手を強めた。一夏も力を入れ、熱烈な抱擁で応えた。

精液の提供は恙なく行われた。本音の胎にたっぷりと溜まり、逆流も許されない。繋がったままの余韻を感じ合う二人がベロチューを止めたのは数分後のことで、その頃には一夏の肉棒は膣内で次の準備を控えていた。

一夏が本音の体を解放した。床に降り立った本音は後方へとよろめき、その背後にいた女子生徒に支えられる。ガクガクと膝を震わせながら、肉棒の抜けた膣からは新鮮で濃密な精液をごぼりと垂らしていた。

「お、おりむー、気持ちよかつたよ〜……」

疲れた顔で満足感のある笑みを綻ばせた本音。自分の種を膣から垂れ流す雌を見て欲情を隠しきれずにいると、一夏の前に今度は別の雌が集ってきた。

「一夏君。次は私たちに種付けして？ 髪を引つ張って、お尻引つ叩いて、子宮をぼこぼこにしてからどぴゅーって大量射精するの。ね？

気持ちよさそうだよね。あ、お腹も思い切り殴ってもいいよ？」

「織斑の一物でアタシにわからせてくれない？ 子供を産むことしか能がない雌は、逞しくて超優秀な遺伝子を持つ雄様には敵わないんだってこと。アタシ馬鹿だからさ、体に直接教えてよ」

「教えていただけたら、これからの人生全部、織斑君に捧げます。命令されればなんでもします。素晴らしい子種様さえ頂ければ、この身が壊れるまで子を生み続けて見せますよ？」

正気を失った少女たちを、一夏の体は受け入れてしまった。

求められた端から、一夏は少女たちを食った。一人一人の処女をブチ破り、尻を前後に揺らし、肉棒を奥まで押し込んで子宮に精液を詰め込む。その作業を繰り返して、時折求められるまま暴力を振るってしまい、誰もが一夏に感謝を述べる。自分が正しいことをしたかのような気分になってしまいそうで、一夏はその気分を振り払うのに必死だった。

そうして交わり続け、最後の一人への種付けを終えた。足で頭を踏みつけてほしいと要望を受け、目の前で土下座をする種付け済の少女の後頭部を片足で踏みつける。

そうしていると、午前の授業終了を告げるチャイムが鳴った。

「おめでどう、一夏。一年一組完全制覇だ。ふふ、やってしまったな。

全員処女を奪われ、子宮に子種を浴びた。言い逃れはできないぞ？」

これは一夏がやったんだ。誇っていいぞ？」

箒の言葉とともに、教室内が割れんばかりの拍手の音で満たされる。一夏に犯された者も、そうでない別のクラスの者も、何も疑いもせずに喜びを示す。

「おめでとうー!」

「おめでとう、織斑君!」

「あとで動画をホームページにあげるからね?」

「いいなー。私も抱かれたーい」

「織斑君こっち見てー!」

それがあまりにも異常で、恐ろしかった。

味方は誰もいない。唯一頼れる存在であるはずの千冬は生徒たちに隠れて見えなかったが、自慰に励んでいることは何となく想像ができた。

千冬でさえこの有り様だ。負けても仕方ないのではないかと一夏は思ってしまった。負けて全てを受け入れれば、この状況が天国に変わるはずだ。

『どちらを選ぶ?』

邪神の声とともに、一夏の脳内に二つの提案が浮かんだ。

『敗北を認める』

『敗北を認めない』

一夏は困惑した。

前者を選べば地獄は天国に変わる。一夏やIS学園にいる生徒や教師は勿論、世界中が箒の管理下に置かれてしまうかもしれない。箒によって選ばれた唯一の支配者として世界に君臨し、一夏の下に世界各国の美女や美少女が集う様は容易に想像できる。

後者を選べば地獄が続く。心と体を操られ、まだまだ大勢いる生徒たちと交わらされる。勿論、教師も相手に含まれる。IS学園の全員と繋がりながらも抗い、この状況を打開する方法を考え出さないといけない。その方法があるかもわからないまま。

一夏が黙って考えていると、こちらに近づいてくる者を認識した。生徒たちの間から現れたその人物は、一夏の前で膝を突いて座ると、口を大きく開けてL v. 100チンポを頬張った。

「んっ、んちゅ、ちゅう、ああ、一夏あ、すまない。んんっ、もうこれ以上、我慢ができない、ちゅっ、ちゅっ、ぐっぷう、ぢゅぷう、ぐぼぐぼぐぼっ……！！ 一夏、私にも種をわけてくれっ、何でもするから、ぐっぽお、ぢゅぽお！」

千冬だった。乱れたスーツ姿で、一夏の尻に抱きつきながら頭を前後に激しく動かす。頬を窄めて根本まで肉棒を咥え、艶やかに笑いなから高速フェラチオを敢行した。

千冬も堕ちてしまったようなものだ。いよいよ味方はいない。

戦いをやめるか。それとも続けるか。

尻を振りながら一夏に種乞い搾精ディープフェラを行う千冬。予想以上の出来事に喜ぶ筈とそれに付き従うセシリア。昼休みに入っても一向に減らない教室や廊下に押し寄せる女子生徒たち。それらを見ながら一夏は選択した。

その瞬間、一夏の意識は不自然に途切れた。

完全に意識を失う直前で、邪神の笑い声を確かに聞いた。

天国編

幸せな敗北

一夏は敗北を認めた。

Lv. 100チンポの力に抗い続けるのは難しい。ましてや、魅力的な女ばかりが集まっているIS学園で生活を送っていては、耐えられる可能性など方に一つもない。我慢するだけ無駄であり、ただ苦しみを長引かせるだけだ。

もしかすると、余計に事態が悪化するかもしれない。

降伏したくとも、それを許されない状況に陥るかもしれない。

そうやって、今よりも苦しい想いをするくらいならば、いつそのこと。

思考の末に、一夏は全てを諦めた。

『それも選択の一つ』

邪神の声が聞こえた後、自分の思考が晴れ渡ったように感じた。

「ぐちゅっ、れろおっ、ちゅうっ、じゅぷっ、じゅぽっ、ぐぷっ、ぢゅぷっ！」

意識が覚め、視界が開ける。湿った音と共に股間を撫でる舌の感触と、生じる快感に惹かれて一夏は下半身に視線を注ぐ。

四方をカーテンに囲われた場所にある、おそらくは保健室のベッド。そこで裸のまま仰向けになっていた一夏の股間に、箒が顔を寄せられている。日本人らしい綺麗な黒髪と可憐ながらも美しい容貌を有する少女。大切な幼馴染がベッドに全裸でうつ伏せになって、肉棒に口淫を行っている。

「ぐぷっ、ぢゅぷっ、ん、目が覚めたか、一夏。気分はどうだ？」

口に啜えていた亀頭を解放し、箒が尋ねてくる。その顔にはとても幸せそうな笑みが広がっていた。何かを期待するような眼差し。伸ばした舌先で亀頭を撫で、尿道口を穿るように動き、肉棒を喜ばせてくれる。

喜んだのは、肉棒だけではない。

「最高」

一夏は一言告げ、口端を吊り上げた。寧猛な笑みだ。普段の自分を律しようとしている一夏が見せたことのない欲望に染まっている。また、L v. 100チンポに踊らされて暴走するときに見せるものほど理性を失ってはいない。

L v. 100チンポを自分のものだど認めた者の笑顔だった。

「ああ、一夏。堕ちてくれたんだな」

そんな一夏を見て、箒に驚いた様子はない。一夏が堕ちることを確信していたのだろうか。それとも、精神掌握によって一夏の脳内を覗き見たのか。いずれにせよ、今の状況は一夏だけでなく箒も望んでいるものだった。

自分の独りよがりではないと改めて認識し、一夏は安堵する。

「ありがとう、箒。俺のために頑張ってくれて」

一夏は身を起こして手を伸ばし、ポニーテールに結われた箒の髪を撫でる。さらさらとした触り心地。漂うシャンプーの甘い匂い。そのどれもが一夏に満足感を与える。そして、優越感が心中に広がった。

箒は俺のものだ。箒だけじゃない。他の女たちも全部、俺の好きにできる。こんな美少女たちとやりまくれるんだ。こんなことに幸せなことは他にないだろう。

一夏は自分の立場を正確に把握し、胸を弾ませた。

「動きが止まっているぞ。舐めてくれ」

「喜んで」

一夏の命令を受け、箒は亀頭を咥えた。くぶぷつと竿も口内に収めていき、根元近くまでいくと頭を前後に振ってしゃぶり始める。窄めた頬の内側が肉棒に抱きつき、血管が浮かび上がってデコボコとした肉の表面をなぞる。

「ずぶっ、くぶぷっ、くぼっ、ぢゅぽっ、ぢゆるっ、ずぶっ、ぢゅぶっ、くぶぷっ！」

両手を使わないディープフェラ。温かく柔らかい口内に包み込まれる感覚は、一夏に安心感を与えた。一夏は身体から余分な力を抜く

と、再びベッドに背を預けた。何もせずとも快樂が送り込まれてくる。

「気持ちいいな。最初からこうしていれば良かった」

あれこれ悩んでいたときの苦しみが嘘のようだった。今はただ純粹な快樂しか存在せず、寛ぎながら箒のフェラを楽しむことができる。

「箒、千冬姉たちはいないのか？」

身に余る快樂を得てなお、さらに欲望を深めるのが人間という生き物だ。一夏は余った両手で抱ける女を求めようとしていたが、この場所には箒以外に誰もいない。

「ぐぷっ、ちゅぽおっ、すまない、たまには一人で一夏を味わいたいと思つて人払いをしてしまった。ちゅぷっ、ぬろお、れろおっ、必要ならば、今すぐ呼び出すがどうする？　ぢゆるるるっ」

「そっか。確かに、箒と二人きりの時間があまり取れてなかったな」
一夏を墮とした一番の功労者が箒だ。褒美を与えておくべきだろう。

「呼ばなくていい。俺も、箒を一对一で味わい尽くしたい。こんなに可愛い幼馴染がいたのに、手を出さないなんてもつたないからな。まずは、箒の隅々まで可愛がつて、俺の女だつていう証を刻みつけてやるよ」

一夏の言葉は、箒の胸に響いたようだ。箒は目尻を下げ、潤んだ瞳から生じた涙を流す。

そして、感涙しながら肉棒をじゅぷじゅぷと音を立ててしゃぶる。勢いを増して攻め立ててくるフェラ。一夏はニヤニヤと笑い、その刺激を楽しんだ。余計な思考を捨てたことで、快樂はより強く一夏を襲う。

すぐに、そのときがやってきた。

忙しなく動き、肉棒を愛し続ける箒。出入りする肉棒がぷっくりと膨らみ、下腹から欲望を汲み上げる。ぞくぞくつと背筋に興奮が駆け抜け、一夏が「出るっ」と言つて腰を突き上げた瞬間、溜め込んでいた鬱憤が暴発した。

ぶびゆるるるっ、どびゆるるっ、びゅーっ、びゅーっ、どぶっ、どくっ、ぶびゅっ！

「う、ぷっ！ うぐっ！ ごくっごくっごくっ！」

浮いてしまった一夏の腰をベッドに押し戻し、箒が肉棒を啜えたまま喉を鳴らす。出されたものを無駄にせず、に全て飲み干すつもりなのだろう。立て続けに嚙下の音が響いて、一夏の陰囊に溜まった精子が箒の胃へと流れていく。

一夏は緩めた口元を震わせ、並々ならぬ快楽に浸った。女に精液を飲ませていると、征服欲が満たされていく。女の内側を自分の欲望でいっぱいさせ、それを消化させて血肉にさせる。箒が自分の色に染まっていくようで、一夏は嬉しかった。

一夏が精を次々に吐き出す。箒がそれを受け取った。

長らく続いたそれも、終わりを迎える。精液を飲みきって、少しづつ肉棒を口から取り出していく。唾液で濡れた肉竿が現れ、龟头が覗き、ちゅぽんつと小気味いい音を立てて箒が龟头を解放した。

「んっ、ごくっ、はあっ、はあっ……！」

精液を飲み干し、箒は乱れた呼吸を整えている。熱く精液臭い息が、龟头に吹きかかる。一夏はそれを受けて、肉棒をビクビクと反応させた。箒はやつとの想いで精飲したのかもしれないが、今のは欲望のほんの一部分にすぎない。

一夏は力が漲るのを感じた。

まだ足りない。フェラは所詮、前戯だ。大事なものは本番だ。

「箒」

「あ、うっ」

一夏は腰を横に振り動かし、箒の頬にチンポピンタを放った。何往復も、箒の頬に硬く熱く、しなやかなチンポが叩きつけられる。わざわざ言葉にして命じるまでもない。一夏が頭の中で願ひさえすれば、箒は何でもわかってくれるだろう。

「ちゅっ」

暴走するチンポに向けて、箒が尿道口にキスを放つ。

そして、おもむろに腰を上げて立ち上がると、一夏の体に跨った。

「わかつているとも。さあ、一夏。私の中に帰ってこい」

箒は片手の指で陰裂を掻き分け、秘所を表に出す。ピンク色の粘膜と、その中心近くで口を開く穴。一夏が初めて食った穴で、童貞を卒業した場所でもある。一夏にとっては聖地であり、肉棒もその場所への帰還を、竿を長くして心待ちにしている。

箒が腰を沈める。直下でそびえ立つ肉棒との距離が縮まり、膣口が亀頭を捉えた。

ぬちゅっ、と膣穴と亀頭が接触し、馴染ませるように数秒待つてから、膣穴が亀頭を呑みこんでいく。穴が亀頭の形で広がって、抱き締めながら奥へ奥へと誘う。ギチギチと絞めつけつつも、その挿入はスムーズだった。

これまでに一夏を受け入れたことで、膣穴は一夏専用の形となっている。Lv. 100チンポを収容にするに相応しい名器だ。仮にこの穴が他の肉棒を受け入れたとしても、箒は満足できず、その男はあつという間に射精へと導かれてしまうだろう。

「ん、お、おおっ……！」

肉棒が膣の奥に入っていくに連れて、一夏が声を上げる。品性を欠如し、瞳にはぎらつくような欲望の光が宿っていた。自ら両手を伸ばして箒の太腿を掴み、絶妙な肉付きを手の平で感じ取りながらただ笑う。

「はははっ……！」

笑う一夏を箒が陶醉した様子で眺め、肉棒の全てを膣内に入れた。凹凸が埋まったことで一夏は安堵の息を吐く。が、当然これで終わつたわけではない。箒は後頭部に自身の両手を当てると、綺麗な脇を見せながら腰を振り動かした。

チンポコキスクワットが始まった。

「あつ、うっ、あんっ、あつ、はあつ、んんっ、あんっ……！」

ギリギリまで腰を上げて肉棒を取り出し、すぐに腰を沈めて肉棒を食らう。黒髪美少女がたわなに実った果実のような胸をぶるんぶるんつと弾ませ、分厚い肉棒を味わう様は見応えがあった。

もつと速く。

一夏が心の中で指示を出し、精神掌握でそれを読み取った箒が速度を上げる。

もっと！

欲望はしつかりと箒に届き、加速を促した。

ずぶんっ、ぐちゅっ、どちゅっ、ぶぢゅっ、ずぷぷっ、パンッ、パンッ、ずっずんっ！

世の男のどれほどが、この苛烈なピストンに耐えられるのだろうか。一夏の欲望に染まって恍惚としている箒の顔は艶やかな色香を振りまいている。舌なめずりをし、一夏に対する愛情と忠誠を眼差しに滲え、ただ主の命令のままに動く女。

「おっ、あつ、お、おおっ、あつ、ああつ、ああんっ、んんうっ!?」

箒主導の体位だが、当の本人はよがり狂っている。一夏が求めている以上、速度を緩めることはできないと考えているのだろう。一夏のために。自分の余裕を保つことなど考えることなく、奉仕に励む。

一緒に高みに昇っていく二人。

もはや誰にも止められないし、止める者もいるはずがない。

この学園にも、この世界にも。

二人の目的は合致した。

この世界を支配し、一夏のハーレムを作る。永遠に快楽を貪り続ける一夏と一夏を慕う者たちだけの楽園。一夏はそれを脳内で思い描き、精神掌握を使う箒へと願望を共有する。

箒は声もなく相好を崩し、ズプンッと肉棒を根元まで思いきり押し込んだ。箒が腰を上げようとしますが、それはできない。肉棒が膨らみ、エラが広がって内側から膣を固定していた。むくむくと肥大化するそれによって膣内が押し広げられ、箒が鳴いた。

仰け反って巨胸を張る箒。それを見ながら、一夏はこみ上げてきた熱をぶち上げる。

「孕めえ!!」

高らかに叫び、一夏は膣奥で精液を放射した。鳥肌が立つほどの強い快感を身に受けて、子宮を白濁に染める。

びゅるるっ、ぶびゅびゅっ、びゅー、どびゅーっ、どびゅっ、どくっ、

ぶびゅっ！

大量の精液が子宮を制圧するのに数秒も掛からない。十秒経過した頃には筈の胎が膨らむ。濃い精液が筈の内側を埋め尽くし、精子が泳ぎ回っている。これまでと違い、一夏は女の妊娠を心から強く望んでいる。一夏の願いをしつかりと汲み取った億を超える精子たちが、競い合いではなく協力して卵子を目指す。

過酷な道中も、徒党を組めば怖くはない。最後に一匹だけが卵子に食いつければいい。押し寄せていく精子たち。もはや、彼らの侵攻を止めることはできず、受精は避けられないだろう。

しかし、そんなことを一夏が把握できるはずもない。
性交はなおも続く。

「ひっ、ははっ、あはははっ！」

一夏は笑いを抑えられなかった。フェラだけでも気持ちよかったのに、本番では頭がおかしくなってしまうのではと思えるだけの幸福と快感が押し寄せてきた。これがセックスの悦び。一夏が自分の意思で行った、初めての本気セックスの味だ。

こんな生活を、セックスを、これからずっと体験できるなんて。

一夏は幸福を噛み締める。

表情を緩めながら、筈を犯す。

これまで抑制してきた感情を解放し、筈に叩きつける。騎乗位から種付けプレスへと移行し、押しえつけて種付けを行う。耳元で「孕め」と呪詛のように呟けば、筈が歓喜に震えて一夏の耳元で甘く囁いた。

「愛しているぞ、一夏。ずっと一緒だ」

「ああ、勿論だ。筈、お前は俺の女だ。一生手放さないからな」

互いの想いを伝え合い、二人は口づけを交わす。何度も、舌を絡ませて唾液を交換し合う。

二人は幸せだった。

やがて、この幸福は世界中を巻き込む。

一方的な幸福の押しつけは、争いを生むこともあるだろう。

だが、それすらも凌駕し、世界は一夏に支配される幸福で満たされるはずだ。

そんな未来の情景を、一夏はただ願うだけでいい。

「一夏の世界を作ろう」

v. 100 チンポを膣奥まで挿入した。一夏はL

地獄編 抵抗

淀んだ紫色に塗り潰された空間。いつぞやに一夏の意識が訪れた邪神の住処と思しき場所だ。認識してすぐに周囲を警戒した一夏だったが、当の邪神の姿はどこにもなかった。

代わりに、不思議なものがその場所に存在した。

白い扉と黒い扉。紫色の靄によって形成された壁面に埋め込まれたそれは、一夏の手で扉を開かれるのを待っているようだった。

如何にも怪しい扉を前に一夏は立ち往生した。あの扉を潜ればどうなるかわからない。ここは静観するのが吉と思えた。意識だけの状態であるが故なのか、またしても全裸という頼りない格好のまま、しばらく考え事をしながら時間を潰す。

唯一の味方である千冬が堕ちた。一年一組を攻略していく一夏を見て少しずつ精神を犯され、屈服してしまったようだ。誰よりも気高く美しく、あらゆる面で優れた憧れの存在の失墜に絶望を抱いた。

もう無理だ。一人で箒に叶うはずがない。

諦めてしまおうか。

なんてことを思っていた一夏はおもむろに腰を上げ、扉へと向かった。抱いた絶望感に引つ張られるようにして進んだ先には白い扉。絶望など忘れ、永遠に快樂を貪る天国が向こう側に広がっているように思えた。

一夏は取っ手を掴み、扉を開こうとした。

『駄目！』

少女の声がして、一夏は反射的に取っ手から手を離した。

今の声は誰だ？ 邪神のものとは違う。邪神以外に誰かがいるのか？ きよろきよろと辺りを見回してみても誰の姿もなく、身構えていると再び声が聞こえてきた。

『白い扉を選ばないで。あの先にあなたにとっての本当の救いはない。あなたがまだ幼馴染を助けたいと思うのなら、決して選んではい

けないよ』

「じゃあ、どうすればいいんだ……」

正体もわからない相手の発言に、一夏は悔しさを抱いて俯き、両手を強く握りしめた。救いがないことはわかっている。でも、どうすることもできない。少女の言葉を鵜呑みにするのであれば、黒い扉が一夏のいた世界の続きに繋がっているのだろう。

一夏にはわかっていた。黒い扉の向こう側にあるのは地獄。勝てる見込みもないのにたった一人で箒たちと戦い、犯され、やがて壊れていく自分の未来が容易に想像できる。そんな自分を苦しめるだけの行為に意味なんてあるのだろうか。

いつの間にか一夏は涙を流していた。

『可哀想に。ごめんね、私が不甲斐ないばかりに』

そんな一夏を憐れみ、少女は自身を恥じ入っていた。その反応が意外で、一夏は涙を拭い払うと、自分から謎の存在に向かって話し掛けた。

「あなたは誰なんですか……?」

『私は女神だよ。本当の女神。邪神に立場を奪われて、今は封印されているの。こうして声を君に届けられるようになるまで随分時間が掛かっちゃった。ごめんね』

女神と名乗る少女。謝罪の言葉には誠意が感じられる。あの邪神とはまるで違う。邪神が一夏を騙すために遊んでいる可能性もあったが、一夏にはこの女神が邪神とは別の存在に思えた。

信じていいのだろうか。いや、信じたところで何が変わると思えない。女神自身が邪神に敗れて封印されているのなら、一夏が助けを求めても何もできないだろう。

『織斑一夏君。まだ諦めるには早いよ』

そう思っていたのだが、どうやら状況は違うようだ。

「どういうことですか……?」

『私が封印から解放されれば、君たちを助けてあげられる。今度は邪神には負けないよ。仮に振り返りにされたとしても、君たちだけは守ると私が保証する』

助かる？ この状況から助かる未来がある？

俄には信じがたい。が、今は信じてみるのも有りかもしれない。可能性が少しでもあるなら、足掻いてみようと思った。結局のところ、一夏自身これが結末というのは納得がいていなかった。

『私の封印が解けるのを待っていてほしい。それまでまた一人で戦ってもらうことになってしまふけど、どうか耐えてほしい』
「わかりました……」

一夏は頷いた。そうだ。ここで終わるわけにはいかない。それでは箒たちが可哀想だ。箒たちは何も悪くない。正気を失っている彼女たちを放置して、辛いからと諦めるなんて情けない。男失格だ。

やってやる。まだ俺にできることはあるはずだ。

「俺は戻ります」

『うん、行ってらっしゃい。私はここから応援しているよ』

女神の後押しを受け、一夏は扉へと向かう。

今度は黒い扉だ。取っ手を掴み、息を呑む。まだ戻れる。天国にはいつでもいける。この扉というのは一夏の意識内で生まれた選択肢をわかりやすい形で再現したにすぎない。地獄へ進むか天国に昇るかは、一夏の思考一つで簡単に変わる。

一夏は決心し、扉を開いた。開けた道は暗闇。濃密な黒い靄が全身を飲み込もうとしてくる。それにも負けずに抗い、足を前へと動かした。

『君なら必ず』

女神の声を背に受け、一夏は現実へと戻った。

短いスカート丈から覗く白いショーツ。下着を纏った大きく綺麗な尻が上下運動を繰り返し、ずらした下着から見える陰部で一夏の肉棒を食らっていた。パンツ、パンツと音を鳴らして一夏の股間に尻が振り下ろされ、ぐぼぐぼと膣穴が慌ただしくしゃぶりつく中、一夏は絶頂とともに目を覚ました。

びゅるるっ、びゅるるっ、どびゅっ、どくっ、どぱんっ、どぽお、どくっ、どくんっ！

「あ……」

快楽に揉まれた意識が覚醒し、視界が広がった。

周囲をカーテンに覆われている。おそらくは保健室だろう。置かれたベッドで横になっていた一夏に、三人の女が群がっている。一人は一夏に背を向け、突き出した尻で騎乗位ピストンをしていた筈。どびゅーっと放たれた精液を子宮に浴び、「ああ……」と恍惚の笑みを滲ませている。

残りの二人はすぐ傍にいた。

「目が覚めたか、一夏」

「心配しましたよ、織斑君」

千冬と真耶だ。眠っていた一夏をずっと見守っていたらしい二人は、裸になって一夏の胸に自分たちの重たい胸を乗せている。その乳房を見ると、『教師失格』と黒いマジックペンで文字が書かれていた。それは、見ただけで千冬たちが完全に堕ちたことがわかる卑猥な証明だった。

「どうした、一夏」

穏やかに微笑む千冬。この状況でなければ心臓が高鳴っていたに違いないが、今はそんな気分ではない。一夏は抗うと決めた。目覚めてこうなっている可能性も考慮に入れていたことで、心に襲い来る衝撃は最小限に抑えられた。

精神を落ち着けようと深く息を吸い込む。一夏の胸部が膨らみ、そこに乗っていた二人の乳房が持ち上がった。

そして、息をゆっくりと吐き、一夏はこの場にいる三人、特に筈に向かつて言い放った。

「まだ、諦めてない。俺は皆を、筈を救う」

自分の想いを口にし、一夏は改めて筈に宣戦布告した。それに対し、子宮で一夏の精液をぐくぐくと啜っていた筈はゆっくりと一夏のほうを振り向いた後、余裕を感じさせる笑顔で応えた。

「諦めが悪いな、一夏。だが、そういうところも含めて愛している」

「ああ、格好いいぞ。さすがは私の弟だ」

「惚れ惚れしてしまいますね。織斑君はやっぱり、理想の男性です」

千冬と真耶が顔を近づけ、口から舌を出す。一夏の口元へと向か

い、固く閉ざそうとした唇を押し退けて中に入ってこようとする。だが、歯を噛み締めている一夏の防御は完璧だ。唇を舐められるが、それ以上の侵入は許さない。

不満そうに頬を膨らませる真耶と、どうしたものかと観察してくる千冬。

二人が取った次の行動は全く同じだった。

「ひ、い……!?!」

耳へと顔を寄せ、穴の中に舌をねじ込まれた。

「ぐちゅっ、ぐぷっ、ぬちゅっ、ぐぽおっ、ぬちゅっ、ぢゆるっ」

「ぐっぽおっ、ぐっぽおっ、ぬぷっ、ぬちゅっ、ぬちゅちゅっ」

耳の穴を濡れた舌で密閉され、中を穿られている。片耳ではなく両耳。それも、箒に肉棒をガツチリと掴まれている状態で。敏感な耳をこれでもかと舌が撫で回る感触に震え、興奮を覚え、箒の膣内で肉棒がビクビクと震える。

「あ、が、う、くうっ……!?!」

固く閉ざされていた口が開き、一夏は声を漏らす。頬を真っ赤に染めて喘ぐ年下の少年は二人には大層魅力的に映っていたようで、意地悪を楽しむ悪女のような表情で一夏を苛め続けた。

「チンポが震えているな。もう一度だけ搾り取って、昼食に向かうでしょう」

箒は正面を向き、ガシガシと肉棒を抜く腰遣いを再開した。一夏は無理矢理口を閉じて漏れそうになった苦悶の声を抑える。しかし、「ふーっ!」と同時に両耳を襲った女教師たちの息で震え上がり、口はまただらしなく開いた。

「可愛いぞ、一夏。ほら、授乳させてやろう」

「はーい、おっぱいの時間ですよー」

二人は一夏の耳から顔を離し、自身の胸を持ち上げた。それを押しつけた先は、一夏の顔だ。

「う、ぷ、んんっ……!?!」

二人の胸が一夏の顔を覆う。目元も口元も柔らかい乳肉プレスをお見舞いされている。息を吸うたびに甘くいい匂いが一夏の肺を

満たし、雄の本能をくすぐられた肉棒が成長し、箒のキツキツJKマ
ンコがそれを根元から搾り上げる。

一夏は耐えた。こみ上げる欲求をねじ伏せる。

絶対に負けない。絶対に。

苦渋を滲ませながら決意を秘めたその顔は、教師失格と書かれた二
つの胸で完全に覆いつくされた。

嵐の前の静けさ

女教師の胸と女子高校生の膺から解放された一夏は、食堂へと向かっていった。千冬と真耶は職員室へと戻ったが、傍らには箒がいる。だが、箒は特に一夏に密着してくることもなく、適切な距離感を守っていた。少し不思議だったが、そういうときもあるかと思つて深くは考えなかった。

それよりも、気を付けておくことがある。冷静な態度で周囲に注意を払う。今朝の券売機事件のような目には遭いたくない。意思をしっかりと持ち直すか、これでどうにかできるものではないとわかっている。だが、無意味でも何かをしていたかった。

でないと、何かを期待してズボンの内側で勃起する肉棒の欲望に呑まれそうだった。

「一夏、さつきから挙動不審だぞ？ どうした？」

箒は不思議そうに一夏を見つめてくる。妙な感じだった。一夏が何を警戒しているのか本当にわかっていない様子。そんなわけはないのだが、邪気のない眼差しに困惑する。昔の箒と接しているような気分だった。

「何でも、ない……」

言いながら、股間を疼かせる。さつきまで肉棒をガシガシと膺コキして精液をどびゅどびゅと吐き出させた張本人がすぐ傍にいる。その温もりと甘い雌の匂いを嗅いでしまい、ズボンに張られたテントが大きくなつていく。

一年一組攻略という経験値を得たことで、肉棒がより欲望に素直になつた気がする。それに合わせて異性を見た際の一夏の心境にも影響を与えていた。あの子が可愛い。向こうの子は胸が大きい。あの太股に触りたい。などと、食堂へと向かう女子生徒を見て素直な感想が心に浮かんでしまう。思春期の男子高校生としては正常な域ではあつたが、元々それなりに理性的であつた一夏からは考えられない。

すつかり精神が毒されてしまったようだ。

追い詰められてばかりだな、と一夏は内心でため息を吐く。

そうこうしているうちに、一夏は箒とともに食堂に足を踏み入れた。注文を待つ列の最後尾に並ぶ。「織斑君だ！」と一夏に気がついた生徒が声を上げ、嫌でも女子生徒の視線に晒される。何を噂しているのか。楽しそうな笑い声が聞こえたかと思えば、「今日も格好いいなあ」や「本当に素敵ね」などと一夏の容姿を褒める声を耳が拾った。どのような状況でも、褒められて悪い気はしない。増長する股間をさり気なく手で抑えていると、少しずつ列が進む。今のところはまだ何も起きていない、はず。箒は相変わらず素知らぬふりをして逆に怪しいが、今のところ肉体的接触はない。

箒は何を考えている？

一夏は疑念を腹に抱えたまま、結局何事もなく日替わり定食を注文した。同じく注文を終えた箒を連れ、空いている席を探す。

「一夏さん」

声が聞こえ、声の方向へ目を向けるとセシリアが手を振っていた。テーブル席を確保して待っていてくれたらしい。お言葉に甘えて席に座り、「いただきます」と手を合わせて昼食を取り始めた。

しかし、いつまでも一夏の心は晴れず、ろくに食事を味わうこともできなかった。

おかしい。何もしてこないということはあるのか？ 何の利点がある。

期待外れとばかりに肉棒が暴れる。大人しくしてろ、と一夏は押さえつけた。

セシリアと箒と会話を交え、食事が進んだ。会話の内容も平和的だった。卑猥な言葉が飛び交うわけでもなく、二人から邪な視線を向けられることもない。まるで、これまでのことがなかったかのような学園生活の一場面だった。

「どうなっているんだ……」

強まる違和感に一夏がぼつりと声を漏らしたときだった。

『織斑一夏君』

頭の中に声が響いた。

『聞こえるかな？』

それは、女神の声だった。

「聞こえます……」

箒とセシリアが話し合っている横で、一夏が食事を取る振りをしながら呟く。

『声は小さなくていいよ。思うだけで伝わるから』

『こうですか？』

『うん、いい感じ。君、今の状況がどうなっているかわかるかな？』

それを聞いて、一夏は得心がいった。女神が何かをしたのだ、と。

『周りが妙に平和で、箒も大人しくて。全部夢だったみたいな』

『うん、そうだね。でも、夢じゃないよ。あれは実際に起きたことだ』
夢じゃなかった。当たり前か。あんな現実的な夢があるわけもない。

それでは、どうなっているのか。そんな一夏の疑問に、女神は答えた。

『簡単に言うと、君の意識を除く世界全体を再構築してみたんだ』

『再構築……？』

『うん。本来はこうなるべきだった、という私の想像に従って、世界丸ごと作り直したんだ。誤った過去の改竄も、歪められた認識の正常化も含めてね。ただ、これはあくまで一時的なものだ。今回はちよっかいを出せたけど、これでも封印されている身だからね。だいたい四か月後くらいかな？ それまでには元に戻ってしまう。観測している邪神にはもうバレているから、多少前倒しになるかもね』

もしかしたら、もう封印が解けたのかと思っただが、そういうわけではないらしい。少しだけ落ち込むが、十分すぎる援助だ。さすがは女神。世界の再構築という途轍もない行為を封印された身で行い、しかもその世界に住む一夏に認識すらさせないとは。頼れる存在だ。

地獄からの一時的な解放によって、一夏の気分は幾分か和らいだ。食事の手を止め、座っていた椅子にもたれかかる。肺の中の空気を全て吐き出す勢いで盛大に安堵の息を吐くと、箒たちが話を中断して不思議そうに一夏を見た。

「一夏？ 大丈夫か？」

「一夏さん？」

『今のうちに十分休息を取るといいよ。それじゃあ、私は邪神との戦いに戻るから』

それを最後に、女神との応答は途絶えた。一夏の返事を待つことなく。

一言ありがとうと言いたかった。そして、疑ったことを詫びたかった。邪神に与する者であれば、これほど長期的な施しを与えることはしないはずだ。邪神ならばきつと、一夏の苦しむ顔を見続けたいと思うに違いない。

信じてもいいかもしれない。

「具合でも悪いのですか？」

「全く。腑抜けたものだ。まだ入学して二日だというのに。……本当に無事か？」

「ああ、ごめん。なんでもない」

笑いながら一夏は思い知る。まだ二日しか経ってないのだと。もう何年もこんな状況下に置かれていたような感じがしてしまうほどに、密度の濃い時間を過ごした。

少しのゆとりを得たが、まだ戦いは終わってはいない。

一夏は緩めすぎた気を引き締めた。

月日は巡る。IS学園での生活は一夏にとって刺激の絶えないものとなった。一夏専用に用意されたISとの出会い。クラス代表者を賭けたセシリアとのIS勝負。第二の幼馴染の襲来。クラス代表者同士の対抗戦。一年一組への転入生。学年別トーナメント。臨海学校。言葉で並べ立てるのは簡単だが、約四か月の期間で起きた出来事とは思えない激動の日々だった。

そんな日常に忙殺され、一夏はいつしか思うようになった。

自分の見えないところで、女神が邪神を倒してくれたのではないか。世界の平穏が取り戻されたのではないか。都合が良すぎる考えだとは思うが、本格的な夏を迎えつつある鮮やかで透き通った青空を見ていると、そう思わずにはいられなかった。

もう無益な争いに苦しむ必要はない。戦いは終わったのかもしれない。

ない。

だが、一夏も本心ではわかっていた。女神に言われたことを忘れず、常に覚悟はしていた。

これは一時的な平穏。いずれ悪意がこの世界を覆い、戦いの火蓋が再び切られるのだと。

何かできることはないか、と一夏は思い、箒を始めとした仲間たちとの絆を高めてきた。特に箒とは六年間の空白を埋めるように接してきた。一夏の中でこれまで曖昧で自覚できなかったが、確かに存在していた箒への想いが実像を結びつつあった。二人の間にできたこの特別な感情は、醜い欲望にもきつと耐えてくれるはず。そう信じた。

このまま何事もなければ、二人は本当の恋人として、結ばれていたのかもしれない。

『余計な邪魔が入った。世界の修復完了。さあ、続きを始めよう』

そんなあったかもしれない未来を嘲笑うかのよう、歪んだ欲望が目覚めました。

残酷な現実

女神による世界の再構築。Lv. 100チンポをそもそも所有していなかったという想定に基づき、能力の無効化も行われていた。しかし、完全な無効化までは不可能だった。

「くっ……うっ……」

夏休みのある日。一夏は強い性欲を抑えきれなくなる前に、寮内に唯一ある男子トイレに籠って日課の自慰に励んでいた。欲望の矛先は自身の周囲にいる魅力的な美少女たちで、駄目だとわかっていても、彼女たちを犯す妄想が止められなかった。

一人目、ファンリンイン鳳鈴音。中国の代表候補生の一人。一夏とは小学生時代と中学生時代に同級生だった時期があり、よく一緒に行動していた。長いツインテールが小柄な体に似合う活発的な美少女。そんな鈴音のツインテールを手綱のように引っ張り、小柄な体を背後から犯し尽くす。鈴音が拒んでも勢いは止まらず、妄想の中の一夏は大量の精液を鈴音の子宮に放った。

同時に、現実の一夏が強い昂りに襲われた。小便をする体勢で便器に向けてシコシコと扱っていた肉棒が、妄想にも負けない白濁の子種を放出する。

「あ、ああ、いくっ、おおっ……」

一夏の表情が悦楽に染まる。知り合いの少女を自慰ネタに使用する罪悪感と背徳的な刺激。それが射精を強化し、便器の中が白濁に染まった。水を流すとごぼごぼと音を立てて精液が飲み込まれていく。

一回目が終了。引き続いて一夏は手の動きを止めず、別の少女を妄想に登場させる。

二人目。シャルロット・デュノア。フランスの代表候補生。当初は一夏に次ぐ第二の男性IS操縦者、シャルル・デュノアとしてIS学園に転入して来たのだが、その正体は金髪紫瞳の貴公子ではなく淑女だった。大人しい性格のシャルロットを押し倒し、ベッドで延々と種付けプレスをする、という妄想で肉棒を喜ばせる。

「孕めっ……孕めっ……」

欲望一色の言葉を口にし、一夏は二回目の射精を行った。妄想の中でシャルロットに妊娠不可避種付け射精を食らわせ、ベロチューを強要する光景を展開し、気持ちのいい絶頂に身を震わせる。

一夏は便器内の精液を水で流し、すぐに三回目に入射した。

三人目。ラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツの代表候補生。一時期ドイツに滞在していたらしい千冬の指導を受け、恩師として敬愛する千冬がいるIS学園に転入を果たした。一夏を千冬の弟だとは認めず、事あるごとに対立していたが、ラウラが一夏の強さを知ったことで和解する。以後、何かにつけて無防備な姿で接してくるラウラに不満をぶつけようと、駅弁ファックによる懲らしめセックスで妄想を抄らせ、一夏は声を上げながら射精に至った。

「いくつ……出すぞ……くっ……受け止める……！」
綺麗になったばかりの便器内は大量の精液に埋もれる。腰を小刻みに揺らし、顔中を歓喜の色に染め、快楽に狂いながら欲望を発散する。

三発。いつもならば一旦はこのくらいで落ち着くのだが、今日はまだ余裕があった。仕方ないと思い、一夏は箒やセシリア、千冬、真耶、一組の皆やIS学園の美少女たちをオカズとして自慰を再開した。

止まらなかった。出しても、出しても、まだ出せる。快感が持続する。頭がおかしくなりそうだ。この感覚は久しぶりであり、一夏は全身、特に肉棒から溢れ出る目に見えない気のようなものを認識し、一瞬にして肝を冷やした。

「ま、まさか……」

L.V. 100チンポの特性『フェロモン』。嗅いだ女を魅了し、狂わせる匂いを放つ。これに抗える存在はおらず、所有者である一夏にしても能力の定期的な暴発は抑えられないという恐ろしい能力だ。女神が行った世界の再構築に伴い、一時的にレベルダウンし、自慰で解消できる程度に落ち着いていたはずなのだが。

能力の復活が示すことを理解し、一夏は息を呑んだ。

「始まった……!?!」

直後、トイレの扉の外が慌ただしくなる。

「ねえ、織斑君どこにいったか知らない？」

「一夏君とエツチなことしたいよお……」

「織斑君織斑君織斑君織斑君織斑君織斑君織斑君織斑君」

「織斑君どこー！」

「おマンコ気持ちいい……。ああ、織斑のおチンポ嵌めさせて。ぬぼぬぼ出し入れて、精液たくさん注ぎ込んでえ……！」

暴動のような様相を呈していることは、声と慌ただしい足音だけでわかった。なんだこれは。威力が強すぎる。これまでの反動か、それともこれが本来の力なのか。肉棒から立ち昇るフェロモンはとつくにトイレ内を満たし、女子生徒が一夏の場所を正確に検知できない程度には寮内に効果範囲が広がっていると思っただろう。

範囲が広すぎる。一夏は動揺に瞳を震わせ、歯噛みした。

「まずい……。どうすれば……」

戦いはいずれ始まると理解していた。だが、こんなにも突然だとは。想定が甘すぎた。わかりやすい合図なんてものがこの戦いにあるわけがない。

少しの間考え、一夏は自分を落ち着かせる。

大丈夫だ。四か月前と今の自分は違う。

一夏は右手首に嵌めた白い腕輪に目を落とす。

一夏に与えられた専用 I S。立ちはだかった困難から一夏を救ってくれた身を守る鎧にして、最大の武器。手荒だが、これがあれば生身の生徒たちを振り切って逃げ出すことはできる。生身の生徒であれば、に限った話だが。

問題はその後だ。とにかく今は、一刻も早くトイレから出るべきだ。いずれ居場所を嗅ぎつけられれば、袋小路であるこの場所で追い詰められてしまう。どこか広い、フェロモンが薄まるほど遠い場所に逃げないと。

一夏は迅速に行動した。まだ興奮にいきりたつ肉棒を収め、トイレの扉の前に移動して身を屈める。扉をわずかに開いて外を確認すると、長く続く廊下には数人の女子生徒が徘徊していた。一夏という獲物を求めて歩き回る、夏休み期間中でラフな私服に身を包んだケダモ

ノ。それか、言い方は悪いがゾンビ映画のワンシーンを見ているようだった。

五、四、三、二、一。心の中でカウントダウンを始め、体の準備を整える。そして、カウントがゼロになった瞬間、一夏は扉を開いて廊下へと駆け出した。

「あ！ 織斑君発見！」

「織斑君！」

「皆、こっちだよ、こっち！」

すぐに目視された。立ち止まっていた女子生徒の横を駆け抜け、一夏は寮の出口を目指す。一部が騒いだことで寮内に残っていた生徒が一夏の下へと走り寄ってくるが、今が夏季休暇中であることが幸いした。

多くの生徒が帰省などで出払っている。学生寮にいるのはほんの一部でしかなく、男の一夏が全力を出せばおそらく逃げ切れるだろう。

「捕まえたつと！」

「うわっ！」

中には機敏に反応して一夏に飛びかかってくる者もいたが、どうにか躲してみせた。ほっと安堵する暇もなく、体勢を立て直した生徒が後からやって来た生徒と合流。迫りくる壁を連想させる少女の群れが一夏へと迫ってくる。

「一夏くーん！」

「待つて！ 逃げないで！」

「お腹の子を認知してー！」

一夏は距離を詰められる前に、視界に入っていた寮の外へと出た。容赦なく降り注ぐ夏の陽射し。長時間立っていれば大汗を掻き、日射病は免れない。青空に浮かぶ太陽が恨めしい夏の日。

寮の前で一夏は足を止めた。

「え……」

寮の出口を包囲するように、女子生徒が立ちほだかっている。夏休みで授業もなく、その恰好は非常に簡素だ。着飾っている者もいる

が、大半の生徒が下着同然の布地面積で、若々しい肌を際どい部分まで見せつけてくる。

それはいい。この女子だらけの学園での日常と言えた。

今、一夏の視線を釘付けにしているのは、特定の女子の腹部だった。手足は細く、太っているわけではない。それなのに、腹部だけが明らかに膨らんでいた。衣服で隠れているならまだしも、へそ丸出しの格好では丸わかりだ。

目に見える範囲だけで十人。それらは全員、一年一組の生徒だった。

「あ、パパが来ましたよ」

「あ、お腹蹴った。お父さんに会えて嬉しいのかな？」

「ああ。織斑君、見て。こんなに大きくなったんだよ？　織斑君のこど・も」

「一夏君の遺伝子はあ、無事にあたしの遺伝子と結合したみたあい。やったねー」

「これで織斑先生の義妹か。えへへ」

「いやいや、別に籍を入れるわけじゃないんだから、そうはならないでしょ」

「織斑君と篠ノ之さんに許可を貰わないと駄目ですよ」

「こんなに孕ませちゃうなんて。織斑君の精子最強！」

「織斑。この子を産んだら、また種付けしてくれよな？　何人でも産むから」

「私も、織斑様の子を産み続けます。ぜひ、名家出身の孕ませ穴をご利用ください」

腹を愛おしげに撫でる同級生たち。その姿を羨望し、一夏の肉棒を受け入れたいと願う生徒たちが膺を指でくちゅくちゅと掻き回す音が聞こえる。だが、そんな光景も音も気にならないほどに、一夏が受けた衝撃は強かった。

「そんな……。だって、昨日までは妊娠なんてしてなかったのに……」

一夏は何度も思い起こす。全員とまではいかないが、何人かは昨日も寮内で出会った。そのときはすつきりとした腹部で、もう少しちや

んと食べたほうがいいんじゃないか、へそがエロいな、などと感想を抱いていた。見間違いでも夢を見ていたわけでもない。

急に妊娠し、子が急成長を遂げるなど通常はあり得ない。

となれば、原因は一つ。

女神の世界再構築が邪神によって破られた。それによって、約四か月前の時点で一年一組の生徒たちに植えつけた子種が根を下ろし、花を咲かせ、四か月経過したという現実に戻ったのだとしたら、この状況が出来あがるのではないか。

あのと時の膾内射精まではなかったことにはならない。

犯してしまった罪は目の前に顕現している。

一夏は絶望した。高校一年生にして十児の父。いや、十人だけとは限らない。そう言えばさつき、追いかけてきた生徒が「認知して」と言っていた気がする。恐る恐る一夏が振り向いた先には、寮の出入口の前に立つ妊娠中のクラスメイト。

「ああ、織斑君に認知してもらったよ、今。見てもらえた。すごく幸せ」

恍惚とした微笑みを浮かべ、小さく膨らんだ腹を震わせる女子。

十一人。まだいる気がした。一夏の勘は告げていた。

「何の騒ぎだ。またあの五人が何かやらかしたか？」

「織斑先生、決めつけは良くないですよ？」

生徒の壁の向こう側。聞こえてくる声を聞き、一夏の心臓が大きく跳ねる

まさか。

「と言うが、大体があので五人が関わっていることが多いぞ、山田先生」
まさか。

悪い予想をしてしまう。この予想が的中していないことを願う。

だが、一夏の勘は鋭かった。股間でビクンと震える肉棒が一早く察知していた。

「ああ、なんだ」

涼しげに夏用のレディーススーツを着こなす、一夏自慢の姉。両親はおらず、小さい頃からその背中を見て一夏は育った。将来異性と結

ばれるのなら、こんな人と付き合いたい。言外には否定しても心の奥底ではそう思っていた。

一夏にとつて最初の理想の女性にして、大切な姉。

「愛しの旦那様ではないか。今日はどうした、こんなところで。青姦か？」

織斑千冬は、一夏の子を孕んでいた。一夏を見るなり頬を緩め、聞いたことのない呼び方で雄に媚びた甘い声を出す。その手が白いブラウスの上からたつぷりと主張する乳房を揉み、微かに膨らむ腹を撫でる。

「いいことだ。一夏のような超優秀超絶イケメン高スペック男子の子供は一人でも多くの残さなければな。世界の損失だ。この通り、遺伝子の受け皿兼赤子育成用の歩く肉オナホはたくさんある。好きなだけ交わるといい」

「はい。織斑君。いえ、私の愛する一夏君の子はどんどん増やすべきです」

千冬の隣に立つ教師、山田真耶もまた、千冬に見習って乳房を揉みしだきながら胎を撫でていた。生徒である一夏の子を宿している。

一夏に向ける眼差しは生徒に対するそれではなく、恋人に向けた愛情に満ちていた。

「あ、ああ……」

そんな視線を受けて、千冬を見て、一夏は声を絞り出す。

「こんな、こんなことって……」

固めていた覚悟が崩れそうになる。あれだけ交わったのだ。一人や二人、孕む者が現れてもおかしくない。それなのに、人数が増えただけで途端にこれだ。自分の中で何かが音を立てて崩壊していく。そんな幻聴を耳にした。

世界の終りのような状況。普通の人間ならばとつとつに諦めているはず。

それでも、一夏は諦めなかった。諦めるわけにはいかなかった。

女神がいる。一夏と世界のために頑張ってくれている女神がいる。

女神の封印が解ければ、この狂った世界と元凶の邪神から解放され

る。それでも妊娠した事実はなくならないとしても、それでいい。責任は取る。母と子の全員の面倒を見て、生まれた子供も立派に育ててみせる。

一夏が再び目に意思の炎を灯し、千冬たちを見た。

「一夏ー！」

その決意に水を差す少女の声。振り向くよりも前に、一夏の意識が吹き飛んだ。

寝返りを打とうとして、上手くいかないことに気がつく。手足は動く。だが、何かが股間に乗っていた。一夏が動こうとするたびにもぞもぞと反応し、温かく柔らかい感触が股間に生じた。

ゆつくりと目蓋を開く。すると、誰かが覗き込んでいることに気がついた。

「あ、一夏。良かったあ、やっと起きた。ごめんね、飛び蹴りしちゃって……。興奮が抑えきれなくて、あは、あははっ」

理性の光を失った瞳で一夏を見つめるのは、鈴音だった。一夏が先ほど、脳内妄想で乱暴に犯したツインテールの美少女。元気な笑顔が似合う彼女は一夏の幼馴染で、一夏とは小学五年生から中学二年まで一緒だったが、二年生の終わりごろに中国へと帰国した。その後、家庭環境に紆余曲折あったらしい彼女は、中国の代表候補生となって四月の下旬にIS学園に転入してきた。

そして、現在。飛び蹴りで意識を失ったらしい一夏の上に、鈴音が乗っている。

「鈴……」

眩き、起き上がろうとする一夏だったが、その前に強烈な熱が肉棒を襲った。

「一夏。一夏の、大きい、これがあたしの中に……」

遅れて一夏は理解する。ベッドで仰向けになった一夏は裸になっていて、その上に鈴音が跨っている。そして股を開き、一夏の分身を食らおうとしている。履いていたホットパンツを中の下着ごとずらして覗かせた、まだ幼さすら感じられる陰部の膣穴で。

「り、鈴……！」

一夏は暴れる。だが、一步遅かった。鈴音が腰を下ろし、亀頭を膣に咥えた。その瞬間、新しい穴を認識した肉棒が喜ぶ。体からフェロモンを噴出させ、直撃した鈴音の顔がより一層蕩けた。

「このまま、入れるわね……？」

酒に酔ったような雰囲気で、口元で緩やかに弧を描き、細見の体を沈めていく。奥へ入っていく。鈴音の笑みがだらしなくなっていくに連れ、肉棒から伝わってくる少女の膣肉の感触がより鮮明になる。

抵抗は無理だった。自分が出したフェロモンに犯され、発情状態の肉棒。本格的に逃げようとするよりも先に鈴音に手を伸びてしまい、細い腰を掴むと、一気に突き上げる。優しさの欠片もない生殖器の結合を果たした。

「ああんっ……！」

ブチュンツ、と処女膜が裂け、膣蜜を貯めた穴に太い肉棒が埋まる。まだ竿を余した上でその状態だ。無理に挿入しようという行為に出れば、間違いなく鈴音の容量を超えてしまう。

だが、一夏は突き入れた。

「っ、お、あ……！」

鈴音が一瞬だけ白目を剥く。何をされたのか理解できない様子のまま、腰を掴んだ一夏に使われる。千冬が言っていた通り、これでは本当にオナホだ。「おっ……！」と声を上げ、「ひいつ……！」と悲鳴を漏らす。揺れるツインテールを面白がるように、一夏は鈴音を使った。

それは一方的な蹂躪だった。今度は鈴音のツインテールを両手で引つ張り、一夏の股間でスクワットさせる。それも高速だ。どんどん回数を更新していき、ぬぼん、ぬぼんと肉棒が小さな雌穴から出たり入ったりを繰り返す。

そんな鈴音と自分を、一夏は他人事のように見つめていた。

理性が働かない。箒の洗脳状態にあるときとは違う。抵抗しようという意思は抱けるはずなのに、セックスがしたくて堪らない。目の前にある雌に遺伝子受精させたいという黒い欲望に突き動かされる。

「あ、かひゅっ、っ、お……！」

一夏は鈴音の首を両手で絞める。やめろ！ と心にいる理性的な一夏が叫ぶが、欲望一色に染まった表の一夏がそれを拒む。苦しむ鈴。もつといい顔を拝もうと、細い腹に拳を当て、軽く殴った。

「がふっ……いー！」

「はははっ……いー！」

くの字に体を曲げた鈴の反応が面白くて、一夏は殴った場所を拳でぐりぐりと擦った。そうしながら片手で細い首を絞めつける。呻き声も、見せる泣き顔も可愛い。それでも欲情しているらしく、瞳にハートが浮かんで見えるような鈴音の快樂狂いの笑顔を見て、一夏の欲望が加速する。

「おおっ……いっ!? ぐ、えっ……いー！ あひいっ……いっ!?」

突いて、引いて、突いて、引く。一夏は手動で鈴音を操ってチンポ扱きを行い、臨界に達しつつあった。出る、もう出る。こみ上げてくる精液の気配を感じ、ニヤニヤという笑いを収められなかった。

完全に形成逆転。一夏に使われることを受け入れ、大粒の涙をこぼしながらにこやかな笑顔を振り撒く鈴音。

ガシガシ、と狭くて浅い膣穴で巨根を受け入れ、根元まで収納されて下腹部が内側から肉棒の形で膨らむ。明らかな道具扱いであっても鈴音は幸せそうで、それを使う一夏も幸福だった。

幸せならばそれでいい。より濃密な幸福を得ようと、一夏は欲望を撒き散らした。

どびゅどびゅどぶゅっ、びゅるるるっ、どびゅっ、ごびゅっ、ごぶっ、どぶんっ！

首絞め騎乗位セックス。鈴音がだらんと両手を下げ中、一夏を通じて鈴音の胎に種が送り込まれる。次世代の一夏の子孫を作るため、小さな体にたっぷりミツチリと精液を送り込む。

鈴音の腹が膨らむ。妊婦のようだ。本当の妊婦にしてやろうという想いに駆られ、一夏が射精を続ける。気持ちいい。気持ち良すぎる。出すたびに全身を無茶苦茶に掻き回されるような快感を受けながら、一夏は徐々に正気を取り戻しつつあった。

フェロモンの暴走は定期的に発生する。だが、その期間は短い。一

回分のセックスで正気に戻るには十分で、それは一夏にとっては残酷な仕打ちとなった。

「あああああつ!？」

自分で鈴音を犯して、子宮をボツコボコに苛めて、精液を詰め込んだというのに。一夏は叫んだ。鈴音に種付け射精しながら、わずかに目覚めた理性で目の前の残酷な現実に悶絶する。

それでも体は正直で、鈴音から手を離せない。まだそこまでの理性はない。

一夏は見せつけられた。自分の能力で幼馴染を性玩具として扱う光景を。

そんな一夏を見て、笑い転げる悪しき神がいた。

一夏と鈴音が交わる寮部屋の外では、教え子の子を孕んだ教師失格の女二人が一夏の声を聞いて自慰活動に勤しんでいた。愛液を垂らすスカートの中に手を突っ込み、膣穴を指で穿り回し、むにゅむにゅと乳房を揉み解す。

「一夏あ……。ああ、なんていい声を出すんだ……。おお、イクうつ!？」

切ない声に続き、絶頂声を上げる千冬。一夏という獣に鈴音という餌を与えた雌は、敬愛する雄の喜ぶ声にマン汁を垂れ流す。弟の名を呼び、その存在を褒め称え、弟に授けてもらった子に聞こえるように膣穴を開く。

「あれがお前の父親、そして、私が付き従うとても大切な旦那様の声だ……。よく聞いておくんだぞ? 将来、お前も一夏のために人生を捧げるんだ……。一夏の命令は絶対……。一夏の命令は絶対、だ……。」
赤子の頃からの情操教育。生まれてくる女の子の子の教育に余念がない母の鏡だった。

「んっ、鳳さんの次は、誰にしますかあ……。?？」

自身のマン肉を指で弄る真耶が、寮の廊下に集まる女子生徒の集団に目を向ける。教師をお手本に自慰の手を止めることのないI S学園の才女たち。将来の一夏専用肉便器候補生。彼女たちは遥か天上の存在である一夏に種乞いをしようと、我先にと手を上げ、チンポ収

納穴のメンテナンスに励んだ。

無情

鈴音を犯した後も、一夏には休むことは許されなかった。

「んっ、ああ、織斑の、大きい……。彼氏やセフレのチンポと全然違う……」

相手は二年生。髪を金色に染め、少し軽そうな雰囲気をしている。セックスに慣れた様子の彼女は一夏の股間に腰掛け、使い込まれた膣穴で一夏の肉棒にむしゃぶりついている。綺麗な小麦色の美乳がたゆん、たゆんと元氣よく弾んでいる。

「うっ……あっ……い！」

一夏は呻きはするものの、暴れることはしない。先輩である彼女に大人しく犯されていた。逃げ出そうにも一夏の両腕は女教師二人に絡まれてほぼ拘束状態。おまけに両足は順番待ちをする生徒二人に押さえつけられながら、足の指や指の間、足裏を舌で丁寧な舐め回さされている。これだけの人数を相手に力任せで敵うほど一夏は膣力に優れていない。

「一夏、乳房の揉み応えはどうだ？ 私のほうが真耶より膣力がいいだろう？」

右手の平に押しつけられた弾力抜群の千冬の胸。

「お義姉さん。一夏君は私の胸のほうが大きくて好きみたいですよ？」

左手の平に押しつけられたふんわり大質量な真耶の胸。

特徴は違えども、それぞれの良さを持つている胸だった。しかし、所有者である女教師たちは一夏に自分の胸の良さを知ってもらおうと対抗し、一夏の両手を生乳に押しつけて驚摑みを強制している。指は胸に沈み続け、人肌の温もりと吸いつくような柔らかさを一夏に伝えてくる。

「誰がお義姉さんだ。まだ籍を入れたわけではないだろう」

「でも時間の問題ですよ。ね、一夏君。結婚できる年齢になったら、私をお嫁さんにしてくれますよね？」

「待て。一夏、それならば私が先だ。私を優先的に娶ってくれ。妊婦

腹で裸同然のドスケベウエディングドレスを着てやるぞ。あとはオプシオンに首輪と鎖だ。お前の手に鎖を握られたまま、お前とチンポの両方に永遠の忠誠と従属を誓うデープキスを何百回と捧げてやる。どうだ？」

「一夏君。私なら、それに加えて手錠もつけますよ？　いかがですか？」

「真似をするな、真耶。一夏、結婚指輪の代わりに結婚『首輪』でも私は構わないぞ」

「それなら私は——」

「ならば私は——」

「ちよつと先生方。今、あたしが織斑を可愛がってるんですけど……」
「ぐぷつ、ちゅぽつ、んっ、美味し、ぢゆるるっ、ちゅぱ、くちゅ」
「れるお、ちゅ、ぴちや、ちゅぷちゅぷ、ちゅうっ」

千冬と真耶が無駄な争いを繰り返す中、二年生の生徒が呆れた様子で呟く。その間も腰の動きは止まらない。終始一夏を攻め立て、愛液たっぷりの肉壺に規格外な大きさの肉棒を何度も受け入れている。その一方で、一夏の両足を夢中になって舐めしゃぶる一年生の生徒二人。既に足の隅々まで舌を這わせていたが、まだまだ攻めるのをやめるつもりはないらしい。

「っ……っ……」

複数の奉仕を受ける一夏はというと、絶え間なく襲う刺激に耐え忍びながらも別のことに意識が向いてしまっていた。

先ほどの出来事、幼馴染を強姦したときの光景が頭から離れてくれない。鈴音の細い首を絞めた感覚も、腹に拳を放った感覚も手に残っている。嫌だった。早く忘れたいと思うのに、繰り返す映像が再生され、何故か肉棒が悦ぶ。もつとぞんざいに雌を扱いたいという欲望が顔を覗かせてくる。

ごめん、鈴。謝罪を向ける鈴音はこの場にはいない。一夏に犯されて気絶し、自身の部屋へと運ばれた。この場にいるのは性教育を指導する女教師二人と、一夏の新しい肉便器である生徒三人。

残りの肉便器候補生たちは部屋の外に列を成して自慰に励んでい

る。中には巨根バイブで膣内を満たし、いつでも奥まで一夏に使ってもらえるよう準備を進めている者がいた。それが男性経験とは無縁に見えた清楚な一年生だったことで周囲が動揺し、対抗意識を燃やして周囲の自慰の熱に拍車をかけているようだった。

まだまだ相手はいる。いつまで犯されるのかは、一夏にもわからなかった。

フェロモンの暴走が一旦落ち着いた今、この場から離れようと一夏が思わないはずはなかった。少し前と違い、一夏は専用IS『白式』ひやくしきを所有している。普段は腕輪の形になって待機状態に入っているが、これを展開することで世界最強の兵器を自身でも駆ることができるのだ。

しかし、それを展開すれば、何が起こるかわからないことを一夏は知っていた。

『一夏、ISはなるべく使わないほうがいい』

鈴音を犯した直後で絶望する一夏に、千冬が耳打ちをしてきたのだ。他の誰かに聞かれないよう警戒している様子だった。そのときの千冬の声はまだ正気を保っていたときのもので、一夏は混乱しつつも言うとおりにしてしまった。

「ん、うっ、あっ、気持ちいい、本当に、織斑って、すごい……」

二年生の腰遣いが乱れる。どれだけセックスに関して熟練した技術を持っているようと、所詮それは一人の人間がまだ短い人生の中で培ったものだ。人を越えた存在に作られたものを受け止めていつまでも余裕を保ってはいられず、彼女は乱れていった。

「はあっ、あっ、やば、やばいって、んうっ!? ああ、ん、あ、ああんっ……!」

彼女の呼吸は乱れ、頬は上気し、体から汗が噴き出ている。動きが徐々に早くなつて肉棒が忙しなく女性器に見え隠れする様は卑猥で、一瞬だけ気を引かれてしまった一夏は視線を慌てて横に外した。

視線の先には千冬。一夏の右手を掴んで自身の胸に押さえつけてくる。そこから、とくん、とくんと胸の鼓動が聞こえてきた。場違いではあるが、親しい人の心臓の音に一夏は若干の安寧を取り戻す。

千冬が落ちていないと仮定した場合、千冬に何か策があるのかもしれない。それを信じるべきか。女神の封印が解けるまでは絶対に諦めるわけにはいかない一夏は、前向きに現実と向き合った。

「一夏」

千冬が声を潜め、耳元に囁きかけてきた。

そのとき一夏は、正常な千冬からの言葉を期待した。

「たっぷり出してやれ。中古マンコをお前の精液で清めるんだ。お前はこの世界の救世主だ。一夏以外の男と交わった哀れな肉便器に自分のしでかした罪を自覚させ、同時に救いを与えてやってくれ」

駄目だった。抱いた期待を霧散させ、一夏は言葉を拒絶する。演技なのか、そうではないのかの区別はつかないが、今の千冬は一夏を惑わす雌。一夏の耳元で荒い息を吹きかけ、鼓膜を震わせてくる。

「そろそろ出そうですか？ 一夏君」

もはや当たり前のように下の名前で一夏を呼び続ける真耶。先輩である千冬を見做って耳を攻めてくる。来るとわかっていても耳穴に放たれた吐息の甘い刺激に抗えず、一夏はさらなる勃起を禁じ得なかった。

「あつ！ あつ！ んんっ！ だ、だめ、これ、む、無理い、強すぎ、て、あ、あたし……！」

二年生が加速する。口を開いたまま、口内に溜まった唾液を垂らし、一夏の上で上下運動を繰り返す。自分の動きで尻を一夏の股間に叩きつけるたび、子宮に龟头が容易くめり込み、表情が悦楽に歪む。体から力は抜けても、その腰遣いに影響はまるでない。

「一夏」

一夏は惑わされる。

「一夏君」

甘やかされる

「織斑あ……！」

求められる。

一夏の男の部分が確かな幸福を得て、身震いし、吐精した。びゆるるるっ、びゆるるるっ、びゅーっ、どびゅーっ、どぶっ、こ

びゅっ、どぽお、どくっ！

子宮を粘ついた白濁に蹂躪され、二年生が背を反らして天井を仰ぐ。全身が痙攣し、達しているのがわかる。きゅっと膣の締めつけが肉棒を襲い、精液は余分に多く搾り取られてしまった。

「一夏君、気持ちいいですか？」

「一夏、遠慮はするなよ？　ここに詰め込めるだけ詰め込んでやれ」

千冬が二年生の下腹部を撫でる。今、一夏によって絶賛種付け中の子宮がある位置。中ではヤリマンビッチ娘を更生し、二度と他の男では満足できない一途な雌へと調教する儀式が夥しい量の精液によって行われている。

全ての女は一夏のために。その認識を快樂によって植えつける。

「織斑最高お……！」

ただのセックスでは味わえない幸福に酔いしれ、二年生は真つ当な雌に生まれ変わった。織斑を崇め、織斑を称え、織斑に全てを捧げる。織斑以外の男には尻を振ることなどあり得ない。そんな認識を当たり前のこととして抱いてしまったようだ。

「まだまだこれからだぞ、一夏」

一夏の意味を度外視した実技による性教育が続いた。

一人、また一人。列が進む。まだ若い少女が様々な嬌声を上げ、純潔の新品マンコを、または中古マンコを差し出す。その全てを一夏は使用し、子宮にこびりつく粘ついた子種を吐き出してしまった。

罪が重なる。どんどん責任が重たくなってくる。

L.V. 100チンポの受精率は高い。今日交わった中でも織斑の血を継ぐ子を授かる者も出てくるだろう。子が出来なくても一度交わった以上は責任を感じてしまう律義で融通の利かない一夏には、辛すぎる現実だった。

何人と交わったのか。疲労を感じない肉体よりも先に、精神的な疲労によって一夏は気絶した。だが、それは少しの間だけだったようだ。気がつくくと、ベッドの上の一夏は周囲を少女たちに囲まれていた。

少女たちは全員、陰裂を指で開き、一夏が使った膣口を見せつけて

きていた。

「織斑のチンポマジ最強。これ知っちゃったら他のチンポ食い漁る気なくなっちゃった。もう彼氏たちとは別れて、織斑一筋で生きることにしたから。あたしにしてほしいことがあつたら何でも言つてよね?」

「おつりむらくーん。見てみてー。織斑君が今日ハメたチンポ穴たちだよ? 織斑君が出してくれた精子は赤ちゃんの部屋で大切に保管してまーす。たぶん受精中であす。いえーい!」

「気持ちよかった……。叔父さんの調教よりもずっと……。もつとしたい……。私の新しいご主人様になって……」

「織斑君。本日は処女を奪っていただき、誠にありがとうございました。おかげさまで目を覚ますことができました。これからは一人の雌として、織斑君の素晴らしさを噛み締めながら毎日自慰を欠かさず行おうと思います。また、幼い頃から将来を約束し合っていた婚約者と高校卒業後に結婚する予定でしたが、関係は完全に断っておきます」

一夏を見下ろし、次々に感想を述べていく面々。数は二十人以上。それだけの数を相手にしたこと、明るかったはずの外はすっかり夜の闇に染まっている。これだけやっても肉体はまだ元気で、呑気に空腹を訴えてくる。

「一夏君、お疲れ様でした」

「素敵だったぞ」

真耶が肉棒を抜き、千冬が金玉を手の平全体で優しく揉む。労るように愛でられ、肉棒が調子に乗る。これまで立て続けに女を食らったのが嘘のように勃起し、その凶暴な姿を見た女たちに畏敬の念を抱かせたようだ。

生徒たちはうつとりと頬を緩め、示し合わせたわけでもなく、その場に両膝と両手を突いた。床に額を擦りつけ、土下座の体勢で余計な身動きを止める。

寮の部屋を埋め尽くす数の生徒が全裸で土下座を続ける。生徒を正しく導く存在である教師が一夏の生殖器を撫で回す。一夏はこの

状況を前に何もできない自身の無念さを絞り出すように息を吐き、千冬と真耶の微笑みから逃れるように目元を腕で隠した。

闇

種付け地獄から解放され、一夏は寮の食堂へ夕飯を食べに来ていた。腰掛けるテーブル席には誰もいない。食堂内に他の生徒たちは勿論いるのだが、一夏に気を遣うように過度な接触を避けているようだった。

統率が取れている。フェロモンの効果はとつくに切れているが、箒の洗脳によつて学園は支配下に置かれている。そうでなければ、今頃はまた一夏の周りに生徒たちが群がっていたに違いない。

箒の姿が見えないのが不気味だった。

「はぁ……」

食事を進め、時折深くため息をつく。多くの処女を奪い、子種を撒いてしまった事実に立ち直れていない。頭の中には先程の光景が繰り返され、一夏の良心をガリガリと削つていくのだ。

美味しいはずの食事も味を感じられず、一夏が悶々としていると、一夏に近づいてくる者がいた。あからさまに身構えて体を強張らせる一夏に動じることなく、二人の少女は自然体で一夏に接してきた。

「嫁よ。一人とは珍しいな」

銀色のロングヘアと左目を隠す黒い眼帯が特徴の、愛らしくも凛々しい顔立ちをした小柄な少女。ドイツ出身のラウラ・ボーデヴィツヒだ。ラウラの言う嫁とは一夏のことを指している。誰からの入れ知恵かまでは一夏も把握できていないが、日本では気に入った相手のことを『嫁』と呼称するという誤った知識をラウラは得ていた。

「一夏、同席していい?」

そして、柔和で中性的な顔をし、淡い金色の髪を首の後ろで束ねた少女。フランス出身で、ラウラと同じく代表候補生という立場にあるシャルロット・デュノアだ。

「あ、あぁ……」

料理を乗せたお盆を持つシャルロットに問われ、一夏は頷いてしまう。簡単に懐に入られすぎたと後悔の念が募るが、テーブルにお盆を置いて席についた二人の行動に不審な点は見出だせなかった。

演技だとは思うが、一夏は様子を見ることにした。

「ラウラ、お醬油取って」

「ああ」

「ありがとう」

「うむ」

夏季休暇らしく、爽やかで清廉な印象の私服を着たシャルロットと、軍服らしき服を着たラウラ。半袖ではあるとはいえ、カッチリとした堅苦しい印象は拭えない。れっきとした現役の軍人でもあり、規律を重んじるラウラらしいが、ラフな格好の多い現状の学園生活では少々浮いて見えてしまう。

しかし、これが一夏の求めていた日常だ。眼前の光景はどこまでも普通だった。

また、女神の平和な世界に戻ったのかと思える程に。

だが、もう騙されることはない。

「一夏？」

ラウラと会話を交えていたシャルロットが、ふと一夏へと視線を送った。いつもの穏やかな光を宿した紫色の瞳で一夏を捉える。そして、品のないことなど言ったこともないだろう綺麗な口で、こんなこと言った。

「種付けばかりして疲れちゃった？ 僕がおちんちんをマッサージしてあげようか？」

一夏の喉が詰まった。予想はしていたのだ。だが、実際に言われると驚きは隠せない。

「私も協力しよう。嫁の陰茎は大切に扱ってやらなくては」

「うん。食事が終わってから部屋でしょうか。それとも、大浴場でする？ せっかく男女共用なんだし」

便乗したラウラに相槌を打ち、シャルロットがにこにこ顔で一夏に問う。悪意などはなく、本当に一夏のためを思っていてくれているのだろう。マッサージの対象が肉棒ではなく肩や背中であれば至って普通の会話になっていたはずなのに。

一夏は何も答えず、黙々と食事を進める。

「あれ？ 一夏？ 聞こえてない？」

「無視は良くないな。こういうところから夫婦の関係が崩れていくのだと聞くぞ」

何も答えたくなかった。一夏にはそんな余裕がない。ただ言葉で煽ってくるだけであれば、無視しても問題ないはず。こんなこと、本当はしたくなかった。だが、シャルロットとラウラのためを思うと、距離を置くのが正しい選択だと思えた。

一夏は夕食を口に掻き込む。やっぱり、食事だけ持って部屋にすぐ戻れば良かったか。それとも、そもそも食堂に来なければ。いや、それでは体が持たない。ちゃんと食事はとらなければ、いざというときに動けない。

「一夏」

シャルロットがめげずに話しかけてくるが、一夏は何も答えない。

結局、夕食を終えてお茶を飲み終わるまで一夏は無視し続けた。心が痛む。しかし、下手に会話をして妙な展開になるよりはよほどマシだと思った。

思っていた。

しかしそれは、二人にとっては地雷だった。

「一夏に、無視されちゃった……。あはは……。そっか、そうなんだ……」

「これは想像以上に辛いな……」

「悲しすぎて、僕、死にたくなってきちゃったよ……」

「ああ、私もだ……」

「それじゃあ、ラウラ。一緒に死のうか」

「うむ。互いの命を潰し合おう」

「え……」

突然物騒な展開になって一夏が顔を上げたときには、二人は既に準備に入っていた。

瞬時に展開された、二人の専用ISの武装。シャルロットはオレンジ色に染まるシールドの裏側に装備したパイルバンカー、灰色の鱗殻をラウラの側頭部に。ラウラは黒い手腕部の装甲から伸びるプラス

マ手刀をシャルロットの首に近づける。

「一夏、ばいばい」

「幸せを願っているぞ」

二人が一夏に告げ、互いを見つめ合い――。

「や、やめろっ！」

一夏が慌てて大声を張り上げ、立ち上がった。

一夏による制止に従った二人は手を止め、ゆっくりと一夏へと視線を向ける。

絶望の闇を孕む暗い瞳。シャルロットの紫色の瞳と、ラウラの赤い瞳が一夏を映す。止めてどうするの？ 私たちは必要ないのだろうか？ そう訴えてくるような視線に晒され、一夏は居竦む。

「死のうか」

「もしも生まれ変わりのいうものがあれば、今度は一夏に認められる女になりたいものだ」

一夏が無言の問いに応えれずにいると、再び二人は動き出そうとした。

「だからやめろって！ 死ぬなんて簡単に言うな！ 命を奪うなんてことは、気軽にやっていいことじゃないんだ！ わかれよ！ は、早く武装を解除しろ！ 二人に死んでほしくないんだ！ 頼む！ お願いだから！」

激しく取り乱し、額をテーブルに打ちつける勢いで頭を下げる。額が痛むが、それどころではない。大切な仲間を失いたくない。それも、こんなことでだ。目を固く瞑り、強い想いが二人に伝わるように念じた。

一夏はその体勢を維持して頭を下げ続けると、鈍い音を立てていたプラズマの音が消えた。武装の重々しい音も聞こえない。代わりに、周囲の生徒が一斉に立ち上がり、一夏の下へ歩いてくるような音が聞こえた。

怖々と、一夏が頭を上げた。

食堂にいた生徒と職員問わず全ての人間が、一夏のテーブル席をぐるりと囲っていた。何も言わず、表情に感情も浮かべず、シャルロッ

トとラウラ同様に光を失った瞳で見つめ、笑い声を漏らし始めた。

「ふふっ……」

「っ、あはっ……!」

「あははっ……!」

一人一人の笑い声が重なって、大きく響いていく。やがて食堂中を満たす大哄笑へと変わった。異常だ。背筋が凍りつくような恐怖を感じ、一夏は怯えながら周りの生徒たちを見回した。

シャルロットとラウラも笑っている。

「そうだよ。命は奪っちゃいけないよね」

「ああ、命は作るものだ。私たちの胎で」

「僕たちの赤ちゃんの部屋で。一夏の赤ちゃんを。好きなだけ」

二人は下腹部を撫でる。それと共に、何かを期待するような顔で一夏を見た。

「これは一夏のためなんだよ?」

「これは嫁のためだ」

「一夏の一夏による一夏のための素晴らしい世界を」

「一夏とその正妻である箒が支配する世界を創るために」

シャルロットたちが言った直後、生徒たちが一夏に手を伸ばした。

「な、何を……!?!」

無言のまま伸びてくる無数の手。既に周囲は生徒の壁に囲まれ、逃げることもできない。一夏は白式を展開することも視野に入れたが、それをすればまた自殺行為に走られてしまいかねない。駄目だ、と自分の考えを捨てた。

だが、その選択を捨てた一夏に、無数の生徒を振り払う術はない。両腕に豊満な胸の生徒に抱き着かれ、乳房を押しつけられる。背中と前にも小柄な生徒が抱き着き、隙間を縫って伸びてきた手が一夏の服を掴む。逃げられない。乱れた熱い吐息を生徒に吹き掛けられ、股間が膨らむ。

「さあ、一夏。大浴場に行こうか」

「背中を流してやろう」

「勿論、股間もお尻も隅々どね」

「その代わりに、嫁の子種を頂こうか」

「大好きな一夏と子作り。ああ、待ちきれないよ。僕の、皆の一夏。一夏、一夏、一夏一夏一夏一夏一夏一夏一夏一夏一夏一夏……！ 元気な赤ちゃん、いっぱい、いっぱい作ろうね！」

生徒たちの、特にシャルロットの深い闇色の目を見て一夏は体の底から震え上がった。完全に抵抗を忘れ、立ち止まった一夏を生徒たちが引っ張っていく。食堂から団体でぞろぞろと出ていく彼女たちが向かうのは大浴場。

暴走した女子生徒と広い大浴場。そこにたった一人の男である一夏。

最悪の組み合わせに、一夏は強い目眩に襲われた。

四面楚歌

地獄の入浴。そう考えていた一夏の認識は少し甘かった。

地獄は、脱衣所の時点で始まっていただけだから。

「うわあ、織斑君の胸板って結構逞しいね！」

「背中も広くて、抱き着きがいがあるっすよ」

「ふふ、もうこんなに大きくなってきた。元気いっぱいね、一夏君」

「精子の袋、大きくて柔らかい」

「ここで織斑君の遺伝子がいっぱい作られてるんだよね？」

脱衣所に入っただけに一夏は身包みを剥がされ、女子に揉みくちやにされていた。胸板を触られ、背中に抱き着かれて胸を押しつけられ、肉棒と金玉を握られる。名前も正確に覚えていない美少女たちに大事な場所を触れられ、気が気ではなかった。

そんな一夏をシャルロットとラウラが着替えながら見守っている。至って自然体ではあるのだが、一夏が不審な動きを見せた途端に表情が様子が変わるから恐ろしい。時間を稼ごうという思惑があつたとはいえ、ただトイレに行きたいと言っただけで、自決を仄めかされるのだ。

「くっ……」

耐える以外に選択肢はない。

「皆も早く着替えてね？」

「はーん」

とシャルロットの指示に元気よく返事をし、女子生徒の群れが一夏から一旦離れる。

その影響で視界が開け、一夏は真正面から二人の美少女の裸体を見てしまう。

金髪と銀髪の美少女の一糸纏わぬ色白い体。大人しい外見にしては発育の良いシャルロットと、小柄で華奢なラウラ。スタイルは大きく違うが、どちらも女性的な柔らかい曲線を有し、一夏の気分を否応もなく煽る。二人の裸を見たのはこれで初めてではないが、それでも目を奪われるような美しさだ。

一夏はすぐに二人から視線を外すが、もう遅い。IS学園に入学して以来、一夏の脳は性的な方向に急成長を遂げている。一度見た女体は正確に記憶に刻まれ、ふと油断すれば妄想の中で女を犯してしまう。

そして、興奮状態であることを勃起という形で周囲に知らしめてしまおう。

「どうしたの、一夏」

「肌を晒すのは初めてではないだろう」

二人が身を寄せてくる。普段ならば全力で足掻くところだが、この二人に対して抵抗は愚策だ。これまでは自殺未遂で終わっているが、本当に自殺され、大切な二人の命が絶たれることを想像するだけで胸に鈍い痛みが走った。

一夏はシャルロットに言われるまま、二人の体を眺める。

足先から頭の天辺まで。ここまで自発的に女体を見たのは初めてかもしれない。柔らかそうで、無駄な毛のない肌は触ってみたいと思えた。シャルロットの豊かな胸も、ラウラの慎ましい胸も、思い切り握ってやりたい。股を開かせて、今すぐ肉棒で二人の大切な処女を乱暴に散らしてやりたい。

一夏の黒い欲望が顔を滲ませ、肉棒が硬直して上を向き始める。

「僕たちを見て、こんなに興奮してくれるんだ」

「嬉しいぞ、一夏」

二人の手が肉棒に触れる。撫でるような手つきに肉棒が悦び、脳を刺激する。こうして裸を眺めて肉棒に触られているだけでも危険だ。放っておけば、また暴走してしまいそうになる。それを避けるため、一夏は極力無心を心掛けた。

心頭滅却すれば火もまた涼し。限度はあるだろうが、今は精神論に縋る他はなかった。

「体が冷えないうちに、温まろう?」

シャルロットの進言によって、一夏は遂に閉鎖的な空間へと足を踏み入れた。

泳げるほど広い浴槽。張られた湯からは湯気が立ち昇り、大浴場と

呼ばれるだけはある広い空間に熱気が広がる。一方で、壁の一面はディスプレイとなっていて、静かな夜の森林地帯の映像が映し出されていた。一人で湯に浸かることができれば、さぞリラックスできたに違いない。

だが今は、一夏以外にも女子生徒がぱつと数えるだけで三十人はいた。食堂にいたときよりも数が減っているのは、下手に人数を増やして一夏にストレスを与え過ぎないというシャルロットの配慮だろうか。確かに、そういった配慮がなければ学園中に噂が広まり、大浴場は女子生徒でギチギチの満員御礼状態となってしまうていただろう。だからと言って、この一対三十という構図が一夏にストレスを与えていないわけではない。これでも十分に多すぎるのだから。

椅子に座らされた一夏は、正面の壁に貼りつけられた鏡越しに、信じがたい光景を見た。

一クラス分の美少女が、こぞつてスポンジを手に行っているのだ。スポンジは泡だらけで、今から何をされるのか明白だった。先頭に立つシャルロットとラウラも例に漏れず泡だくさんのスポンジを手にし、一夏へと近づいた。

「隅々まで洗ってあげるね」

「各員、配置に着け」

ラウラによって周囲に広がる女子たち。包囲され、ただ待つしかない一夏は肩を縮こませた。絶対に、屈してなるものか。意志を強く持つとうとした一夏だったが、「かかれ」というラウラの号令によって始まった攻めは想像を超えていた。

「一番乗り！」

「いつ……!?!」

もはやタツクルに等しい勢いで背中に抱き着いてきたのは、それはもう胸の大きな美少女だった。金髪ロングヘアと、切れ長の青い双眸の持ち主。外国人のようだ。圧倒的質量の乳房がむにいつと背中を圧迫し、体温を伝えてくる。おまけに、胸に直接泡を塗りたくっているようで、ぬるぬるとした感触が一夏の背中に広がっていた。

「はぁーい、一夏！抱き心地抜群ね！アメリカに持って帰りたい

くらいだわ！」

「独り占めはどうかと思いますが」

「むがつ!？」

背中に意識を集中していると、いつの間にか正面に回り込んできた別の美少女に顔の向きを強制的に変えられた。視界を埋め尽くす巨乳。それが顔面に接触して動揺しながらも、一夏は顔を上げて相手を確認した。

新雪が如き真っ白な髪少女。全体的に色素が薄いように感じるせいか、頬が熱気の中であらわれていても冷たい印象を見る者に抱かせる。そして、眼の内側にある銀色の瞳は涼しげに一夏を捉えていた。「うっ……!？」

一夏が顔を上げてじつと見つめていると、銀髪の少女によって胸の谷間に抱かれた。息はできるが、呼吸をするたびに少女の甘い香りで肺が満たされる。魅力的な雌の匂いを嗅いで、股間では肉棒が意気揚々とその身を屹立たせていた。

「ちよつと、ロシア! 一夏は私のよ!」

「人のことを国名で呼ばないでください。あと、この子は私のものです」

背中にアメリカ美少女が、顔にロシア美少女が密着し、一夏の所有権を争っている。これが冷戦か。一步も譲らず、一夏のことを思っつか派手な攻勢に出ることはせず、じつと睨み合いが続く。

そんな中、新しく争いに加わる者があった。

「馬鹿な……。国力と胸の大きさは比例するとも言うのか……」

何かに絶望したらしいラウラと、
「いやあ、先輩たちの胸、本当に大きいね。僕もこれくらい大きければな」

苦笑いしつつ、大国の二大巨頭に羨望の眼差しを向けるシャルロットだった。

前をロシア、後ろをアメリカ。そして、右半身をドイツ、左半身をフランスの美少女に囲まれる。漏れなく体に泡を塗っており、その体で一夏に抱き着いてくるため、泡だらけの女体によって四方からプレ

スされている状態だ。

一夏の体が異国の金銀美少女たちに独占され、遅れてきた少女たちが困惑する。

「ど、どうする？　これ」

「あたしの貧相な体では如何ともしがたい……」

「篠ノ之さんとか、大和撫子な巨乳美少女を呼んでくる？」

「いや、ラウラちゃんみたいな小さい子もいるから大丈夫」

「それと、日本女子は技術力でカバーよ！」

妙な結束を見せる日本勢が隙間を縫って一夏に手を掛ける。一夏の尻を、太股を、脇腹を、そして股間へと果敢に攻め込んだ。あまりの入れ食いにしばし様子見をしていた他の少女たちも、一夏の肌に少しでも触れようと一夏に近づく。

「うっ、くっ、ひっ!!?　そ、そこはっ……!」

肉棒や金玉を泡のついた手で包まれたかと思えば、尻の穴へと指が這いまわる。敏感な場所を同時に襲撃され、反射的に一夏の尻が椅子から持ち上がってしまう。それ幸いにと、一夏が尻を椅子に落ち着ける前に伸びてきた手が一夏の尻を掴み、揉み解してくる。

くすぐつたいという感覚以上に、一夏は脳が蕩けるような至福を与えられていた。

どこを見ても美少女。仮にこの場の誰か一人を選んで生涯を共にせよ、と言われたとしても幸せな未来が待っているだろう。それほどまでに美しく、器量がよく、世の男共が涎を垂らして求めるような美少女たちに群がられ、体の隅々まで洗われている。

「もう少し胸が大きい方が……」

「ラウラ、気にしすぎだよ」

右腕にラウラの胸が、左腕にシャルロットの胸が当たり、ごしごしと擦りつけられる。大きさは確かに異なるが、それぞれの良さがある。小さいから駄目ということではない。一夏の肉棒がそれぞれの胸の膨らみと、コリコリとした乳首の接触によって過敏に反応しているのがその証拠だ。

「なぜか大人しくなったみたいね！」

「貴女が強く抱き締めるせいです。私の可愛い子を苛めないでください」

「ロシアが胸で押し潰しているせいでしょ！」

「国名で呼ぶなど、去年から言っていますよね？」

「じゃあ、アンナ！」

「名前で呼ばないでください」

「理不尽！」

言い争いが発生している最中も、一夏の全身に手が這い回る。この短時間で既に、一夏の体は足の指先から首まで白い泡に染まっている。耳たぶまでくりくりと指で摘ままれ、ついだとばかりに「大好きだよ」と誰かに耳元で囁かれる。

駄目になつてしまひそうだった。このまま溺れて、女体の海に沈みたくなってしまう。

「おちんちん、爆発寸前だね」

「体ばかりで疎かになっているが、ここを一番念入りに洗わなくては」「カリ首の溝の部分、指で優しくなぞつてあげる」

「意外と竿と玉の接着面も汚れそうだな。どうだ、嫁よ」

尋ねられても、一夏は何も答えられない。胸のクツションに顔面は埋もれ、背中で何往復も巨乳を擦り付けられている。それとは別に尻の穴も重点的に攻略され、腰どころか全身に力が入らない。

「気持ちいいね、一夏」

「早く素直になったほうがもつと心地いいぞ？」

「箒の言うとおりにしよう？」

「この世界も、一夏が欲望に従うことを望んでいる」

ウイスパーボイスで囁かれ、一夏は蕩けた顔で震えた。同時に、シャルロットとラウラのダブル手コキによつてますます肉欲を煽られ、先走り液がだらだらと垂れ流れた。泡と混ざつたそれを肉棒全体に広げられ、執拗に扱かれていると、我慢の限界が訪れた。

ぶびゅっ、どびゅっ、びゆるっ、びゆるるっ、どびゅっ、ぶぶっ、どぶっ！

「たくさん出せて偉いね」

「お前は本当に優秀な雄だ」

二人の囁き声で褒められながら、ぬちゆぬちゆと音を立てる手コキで肉棒の射精を促進させられる。このまま堕ちてしまえば、さぞ幸せな時間が送れるに違いない。一夏の心を墮落させるような誘惑が、眼前に餌のように垂れさがっている。

が、一夏は抗い続ける。女神が邪神の封印を破り、一夏たちに救いをもたらすその日まで。

レイプ

射精が収まり、体の泡をお湯で洗い流されてなお、一夏は肉棒をシャルロットとラウラの手中に握られていた。精を吐き出して小さくなっていたのはほんの数秒のことで、献身的な手コキによつて肉棒はもう長く太く膨らんでいた。

「いい出しっぷりねー」

「これこそ雄を統べるに相応しい存在です」

一回分とは思えない射精量を見てアメリカとロシアの少女が褒め称える。ロシアの巨乳に顔を圧迫されたままの一夏の頭をアメリカの手が撫でる中、ロシアの少女が涼しい眼差しをシャルロットに向けた。

「次はどうされますか？ シャルロット・デユノア。この場での指揮権は貴女にあります」

尋ねられたシャルロットは、肉棒から手を離して考え始めた。精液が多量に絡む指先を眺めて嬉しそうに目を細めた後、あつと声を上げて表情を和らげた。名案を思いついたらしいが、一夏にとっては望む展開にはならないだろう。

「一夏」

シャルロットに肩を叩かれ、ようやく一夏は胸から顔を解放された。ほんの少し息苦しかった環境から脱し、酸素を求めて息を吸った。そうしてから一夏がシャルロットへと視線を向けると、自身の予感が当たったことに気がつく。

「一夏、選んで？ 僕が自殺するのを見届けるか、僕を本気でレイプするか」

片腕に展開したISの武装、パイルバンカーを当然の如く自身の頭に突きつけるシャルロット。表情は邪気のない笑顔に染まっていた。一夏を苦しめるとは思っていない。本当にこの行動が一夏のためになると認識している顔だった。

「一夏はどっちを選んでくれるのかな？ あ、ちゃんと言葉にして言っただろ？」

死ぬなどあれほど懇願したというのに。一夏の想い空しく、効率的に一夏を操ることにシャルロットは味を占めてしまった。そのシャルロットに対抗する妙案を見出せず、一夏は苦虫を噛み潰したような顔をし、言いたくもない言葉を吐いた。

「シャルを、レイプする……」

「よく言えたね。皆、拍手」

シャルロットに促された全員が喜びながら拍手を始める。褒められるべきことではないというのに、賞賛を受けて頭がおかしくなりそうだった。何が正しくて、何が間違っているのか。答えがわかっているはずの一夏とは違い、正しい選択をしたと思っっているらしい肉棒が誇らしそうに上を向いていた。

「それじゃあ、始めようか」

一夏は周りの少女たちに腕を引かれて立ち上がり、正面に立ったシャルロットと向き合う。そんな二人を少女たちは遠巻きに取り囲む。手を出すつもりはないらしい。あくまで二人のやり取りを静観する構えを取っている。

しばし見合ったまま動かない二人だったが、シャルロットが先手を打った。

「動かないと始まらないよ。仕方ないから、最初は指示を出してあげる」

「あ……」

シャルロットは一夏の右手を握ると、自身の首に誘導した。一夏の手がシャルロットの首を掴む形になる。上から手を重ねられ、力を入れられる。すると、一夏の手が細い首に食い込む生々しい感覚が伝わってきた。

「ん、あ……!」

シャルロットの苦しむ声。しかし、嬉しそうでもあった。顔が緩んでいる。

「も、っと……」

逆らうこともできずに一夏は力を込める。操られているわけでもなく、自分の意思でシャルロットの首を絞める。命に関わる行為に及

ぶだけでこうも心に負荷がかかるとは思わず、一夏が精神がさらに削れた。

先ほどから口数が少ないのは、一夏が心を自ら閉ざそうとしているからだ。この状況を乗り切るには自分を捨てる他ない。決して、自分がこういったプレイを望んでいるわけではないのだと言いつけ、一夏は動いた。

「あつ……」

シャルロットを突き飛ばし、床に倒す。怪我しないかと心配してしまつたが、一夏は心を鬼にして考えを改めた。濡れた床に座り込むシャルロットを完全に仰向けにさせようと押し倒し、両足を掴んだ。

「い、一夏!?! な、なんで……! や、やめてよ……!」

シャルロットが驚愕に目を見開いた。一瞬、正気に戻つたのかと思つてしまうほどに、シャルロットの演技力は高かつた。一夏は狼狽し、手を止めてしまつたが、すぐに気を取り直し、掴んだ両足を左右に開く。

シャルロットの股間が自然と目に入る。洗脳され、穢れてしまった脳とは違い、無垢さを保つたままの秘所。綺麗な陰唇の間に見える縦筋の向こう、隠れた膣穴を想い、一夏は喉を鳴らしてしまつた。

「一夏……? 本当に……?」

その声を聞き流し、一夏は床に膝を突いてシャルロットの股間に肉棒を突きつける。相変わらずの太さを誇る肉棒だが、自発的にレイプを行うという心境に影響してか、いつもよりも分厚く感じる。

手に握るズツシリと重い肉竿。根元に備えた二つの玉袋の中でどくん、どくと新しい命の源が生産されていく。これから肉棒で穴を穿ち、奥で解き放つのだ。孕んでしまうかもしれない、という可能性を一夏はできるだけ考えないようにした。

「ね、ねえ、一夏……。聞こえてるんだよね……。嘘だよね……」

うるさい。惑わそうとしてくるシャルロットに苛立ちを募らせ、逃げられないように太股を掴んだ。青ざめた顔で一夏を見つめてくるシャルロットの体は、恐怖に震えていた。やけに現実的な感覚を抱いてしまい、一夏は自棄になつた。

股間を前に動かす。陰裂を亀頭で搔き分け、先端で綺麗な秘所を撫でる。セックスの仕方はもう体が覚えている。どこにどう入れるのか、目視で確認せずとも一夏は手探りでいとも簡単に膣穴を見つけると、挿入を始めた。

「っ、ああああっ!?!」

一夏の挿入は荒かった。早く済ませてしまおうと思ったが故なのだが、それは本当にレイプをする際の一方的な蹂躪と大差はなかった。異物を追い出そうとする膣壁の圧迫を、圧倒的な質量でねじ伏せる。

「くうっ……」

締めつけの強さに苦悶する一夏だったが、ここまで来て後には引けない。このまま奥まで。初めて主人の正常で前向きな意見を受けた肉棒が狭い穴を喜んで突き進み、途中にあつた処女膜をもブチ破った。

「痛い……。痛いよ……。」

やめろ。一夏は歯を食い縛り、シャルロットの悲痛な叫びを聞き流し、動いた。

全力の突き。それは奥までの膣道を瞬きの間に征服し、子宮に放たれた。

言葉にならないシャルロットの声。聞くだけで一夏が良心に苛まれる。

やめろ。一夏は思い、これ以上は聞き流すことなどできないと悟った。

「んっ!?!」

一夏はシャルロットに覆い被さると、唇を塞いだ。舌を小さな口の中にねじ込ませ、犯し尽くす。こうも中に入られて舌に絡みつくような口づけを行われては、シャルロットも抵抗の声を上げられないだろう。

一夏は余裕を取り戻しつつも、早くこんなことを終わらせようと腰を振り始めた。

一夏が自分の意思で行うセックス。それは酷く乱暴で、雄の力強さ

を感じさせるものだった。無駄に力が入って強張った尻が上下に動くたびに、膣穴からバッキバキに勃起した肉厚チンポが出入りしているのだ。それを眺めていた少女たちの表情は恍惚とした色に変わる。周りの少女たちが自慰を始めていることに気がつくこともなく、一夏は続ける。

「くちゅっ、れろっ、ぢゆるっ、ぶぢゅっ、ぐっちゅっ、ぬちゅっ、くちゅっ、ぴちゅっ……！」

シャルロットの口内を舌で蹂躪する。不謹慎だが、一夏の舌はこの状況に悦んでいた。温かい口内で唾液と舌を絡ませ合うベロチューは一夏の脳にいい刺激をもたらす。こんな場面でなければずっとしていたい。そう思えるくらいには心地いいキスで、肉棒も増長する。焦る一夏の意を汲み取って、肉棒が膣穴を掻き回す。それはもう女をオナホールとしか思っていないような暴力的な高速ピストンだった。一夏にはシャルロットの身を案じるほどの余力はなく、せつせと動いた。

ズプンッ！ ぬぽおっ！ ぐちゅっ！ ぱちゅっ！ パンツ、パンツ！ ぱちゅん！

少女たちは圧倒される。自慰の手は止まり、視線は一夏に釘付けだった。

躍動する一夏の尻。忙しく女の大事な場所を穿る肉棒。その一夏に押し掛かれ、口づけを強要されているシャルロットは身動き一つ取れなかった。一夏の背を叩いて密かに反抗していたシャルロットの手も、次第に大人しくなっていた。

パンツ！ パンツ！ ぬぷうっ！ ずぽおっ！ ズブツ！ ぐちゅっ！ ズブブツ！

浴室を支配するのは最凶チンポが美少女マンコを食い漁る音だけだった。呼吸も忘れて少女たちが見守る中心で一夏は雄の頂点に相応しい才能を見せる。こんなセックスをお見舞いされて、屈服しない雌などいない。雄がこれを見たとしても、自分との格の違いを目の当たりにして裸足で逃げだすだろう。

暴走する肉棒が何十往復と目まぐるしく動く中、一夏の玉袋が収縮

した。大量に生産された精子が準備を始めている。それに伴って下腹に熱が生じ、一夏の承認を経て精子がせり上がってくる。

直後、一夏はこれまで見せた中で最大級の攻撃を行った。

亀頭が子宮口を勢いよく塞ぎ、ドスンツ、と鈍い衝撃を伴った。シャルロットの華奢な体が跳ねるが、一夏の完全な寝技によって制圧された。雌が雄に敵うわけがない。元々、雄というのは雌よりもあらゆる面で優れた生物だ。ISの台頭によって勘違いした女たちによつて女尊男卑というまやかしが作り上げられてしまったが、本来あるべき正しい形は男尊女卑だ。

一夏はそれを知らしめてしまった。周りの少女と、今交わっているシャルロットに。

シャルロットの膣が締まる。ぎゅうぎゅうと肉棒を根元から絞り込む。

それを受けた肉棒が、調子に乗るなど怒るように膨張し、雌の調教を始めた。

ドクンツ！ ドクンツ！ 肉棒の脈動に伴い、先ほど作られた精子が移動を始める。精子は精液によつて大切に包まれ、マン圧にも負けずに奥までの道を確認した肉棒の中を通っていく。

そして、尿道からびゆるるると放たれた精液がシャルロットの子宮に飛び散った。子宮の壁を白濁に塗り潰し、中で溜まり、精液で埋め尽くすまでに時間は然程必要としなかった。器の許容量を超える量が放たれてなお射精は止まらず、亀頭によつて出口を塞がれた精液が子宮を内側から広げ始めた。

シャルロット・デュノアという雌一匹に与えられるには酷な精液が送り込まれた。それによつてシャルロットの下腹はぼっこりと膨れ、一夏の遺伝子を大量に抱えた。

そんなシャルロットの中では遺伝子情報を抱えた精子が暴れていた。凶悪に牙を向き、常人の数倍もの速度で泳ぎ回っている。それらは数億、いや、常人とは比較にならない数十億の軍勢を作ると、卵管へと向かっていく。

仮の話ではあるが、この道中で一夏以外の精子が存在した場合、即

座に追いつかれ、その数と一匹一匹が有する攻撃力によって簡単に食
い殺されるだろう。後には一夏以外の遺伝子は絶対に残らない。

これが雄の頂点。織斑一夏が有するLv. 100チンポの性能だ。
平均的な時間を大きく上回り、Lv. 100精子数十億匹がシャル
ロットの卵子に殺到する。ここまで来れば、過酷な道中を進んだ仲間
でさえも敵同士だ。精子たちは互いに食い殺し合い、数を減らしてい
く。最後の一匹になるまでそれは繰り返され、今回は争いが激化して
運悪く共倒れということにはならなかった。

同胞を食らい、凶悪さを増した一匹の精子が卵子の周りを嬉しそう
に巡回した後、食らいついた。卵子にしっかりと結合し、受精が完了
した。デュノア家の遺伝子と織斑家の遺伝子が混ざり合い、新しい命
を作り始める。

それを、一夏は知らない。ぐりぐりと子宮口に亀頭を擦りつけた
後、尻を持ち上げる。

ぢゅぽんつと膣穴から小気味いい音を立てて亀頭が抜け、ごぽおと
精液が溢れ出る。処女膜を破った血と混ざってピンク色に染まった
それが床に広がっていく。一夏に解放されたシャルロットは痙攣し
ながら茫然としていたが、その口角がやがてゆっくりと吊り上がっ
た。

一夏はそれに気がつかない。

「二夏。次は私の番だ」

立ち上がって呼吸を整える一夏に、ラウラが近づいた。

心を殺した一夏が無感情に振り向くと、ラウラは右手で敬礼をし、
左手の指で下向きのピースをするようにマンコを開いた。ピンク色
に染まる秘所が表に出て、その中でチンポ挿入口がヒクヒクと反応を
示していた。

「教官。私に、雌の脆弱さと雄の強靭さを教えてください」

頼んでいるようだが、一夏に選択権はない。

やらなければ、ラウラはまた自殺を凶ろうとする。

やらないといけない。決して、自分で望んでいるわけではない。

俺は悪くない。

一夏は何度も心の中で呟き、生意気な雌に立場を理解させようと、手を伸ばした。

泥沼

一夏の右手がラウラの銀髪に触れる。大浴場に広がる熱気を受けて多少湿ってはいるが、それでも指通りがいい。掬い上げる手はやがてラウラの顔に近づき、小さな頬を手の平で覆った。

しっとりとして吸いつく。無駄な毛などはなく、滑らかな手触りに夢中になりかける。が、そんな場合ではない。これからラウラも犯さなくてはならない。膣口から一夏の子種汁を逆流させ、仰向けになっているシャルロットと同じように。時間を稼いでも意味はない。

一夏は良心を心の隅に押しやった後、ラウラの左目を覆う黒い眼帯に指を掛けた。

「ん……」

とラウラが小さな反応を示す中、一夏は眼帯を外し、ラウラの腕に巻き付けて結んだ。

普段隠されている金色の瞳が現れる。右目に宿る深みのある赤い瞳とは色の違う、輝くような金。ISとの適合性向上を図る処置を受けた際、不適合によって瞳の色が片方だけ変わってしまったのだが、一夏には詳しい事情はわからない。これが実験の失敗による産物で、後天的なものだとしても、一夏はその瞳も綺麗だと感じていた。その瞳が純粹さを宿し、一夏を見据えている。未だに敬礼をしながら空いた手で陰裂を広げて見せているが、自身の行為に疑う素振りも見せない。箒が掛けた洗脳は強力で、どうあっても解けることはない。

犯せ。

心の中で邪悪な感情が声を上げる。

早くしないとラウラが自殺してしまうぞ？

一夏を悪の道に誘導する。だが、この場においては正しい選択だった。ラウラを死なせず、誰も犯さずに済む道はない。いい加減物分かりの悪い自分に現実を知らしめようと、念押しとばかりに邪悪な心が叫んだ。

犯せ！

一夏には暴力の仕方などわからない。だから、シャルロットに教わった行為を模倣する。

「う、ぐつ……」

一夏は両手でラウラの細い首を掴み、力を入れる。ぐぐつと指が食い込み、ラウラが苦悶を表情に滲ませる。しかし、一夏は良心を眠らせたまま、ラウラを苦しめる。これでいいのか。暴力を振るう必要はあるのか。何もわからない。シャルロットの教えに従ってラウラの首に指を食い込ませ、両手を持ち上げた。

ラウラの引き締まった小さな体が浮く。両足が床の上でぶらぶらと揺れ、両手もだらりと下がっている。必死に酸素を求め、苦しむか弱い存在。軍人として優秀なラウラ相手では寝技などに持ち込まれれば一夏に勝ち目などはないが、純粋な腕力では男に分がある。

「か、は……」

男として、女の生殺与奪を握る。女は所詮、純粋な能力でいえば男よりも劣っている。女が男に使われるのは当然であり、男尊女卑こそがもつとも人間の世に適したものだ。だというのに、この世界は間違った歴史を歩んでしまった。

正さないと。

普段は思ってもみない衝動が突き上げ、それに従って一夏はラウラをさらに持ち上げた。

「さすが男性」

「いいなー。一夏君に苦しめられるとか、あり得ないくらいのご褒美なんだけど」

「やっぱり女は男に支配されるべきね！」

「それについては私も同意見です。女は分不相応に調子に乗りすぎていますので」

一夏を囲む女子生徒から掛けられる声はどれも好意的だった。

何が良くて、何が悪いのか。どんどんわからなくなってくる。

「あ、が……！」

ラウラの苦しみが強まったところで、一夏はラウラの首から手を放した。ラウラの両足が床に着き、そのまま崩れるように膝を屈した。

一夏の前で咳き込みながら項垂れるラウラ。それを見て、一夏は下腹にぞくりとした不思議な感覚を抱いた。

暴力に慣れ始め、感じたそれは嗜虐心。愛らしい存在を虐げ、自分の一挙手一投足でころころと反応を変え様を見て心が浮き立つ。こんなのは駄目だ。いけない感情だ。否定しても、心を改めて無にしようとするも、意味はない。

一夏の手は歓喜に震えていた。

一夏の股間にも熱が集まり、肉棒は血に滾っていた。勇ましく上を向き、血管を浮かばせた竿が小刻みに震える。肉棒を起点に欲望が膨らむ。そのまま理性ごと奪ってくれればまだ良かっただろう。だが、一夏は正気を保ったままだった。

誰かの仕業か。そうではないのか。一夏は理解できないまま、正気半分暴走半分の状態でラウラの長い髪を掴んだ。

「立て……」

威圧的な声音を発し、ラウラの髪を引っ張って無理矢理上に向かせる。ラウラは強制的に頭上を見上げさせられ、眼前に突き出された肉棒を見て頬を緩める。「ああ……」と吐息交じりの声を出し、命じられたままに男の生殖器で視界を満たす作業に没頭する。

「な、舐めろ……」

ラウラの反応があまりにも純粹で、一夏は声を上擦らせてしまった。

「了解しました、教官」

ラウラは忠実に命令に従う。一夏を教官と見立てるプレイは続行中のようなのだ。

ラウラの鼻先が肉棒に近づき、鼻を鳴らす。深く息を吸い、男性器の臭いで肺を満たしている。心地よさそうに二回深呼吸を行い、そして、伸ばされた赤い舌が肉竿の根っこの部分に接した。

「ん、えー……」

竿に通った分厚い芯を舌で辿る。ゆっくりと焦らすように裏筋に到着する。

「ちゅっ……」

そして、ラウラは尿道口に吸いついた。恋人とキスをするように目を閉じて。開いたかと思えば、髪を掴んだままの一夏を見上げ、舌を左右に動かして亀頭に叩きつける。べちゃ、ぬちゃっ、ぴちゃん。舌についた唾液が亀頭にぶつかつた際に音を立て、湿った音を聞いた肉棒がビクリと動いた。

「ぐぷっ……」

震える肉棒を宥めようとしたのか、ラウラは亀頭を口先に啜えた。ぶるぶるとした唇で甘噛みしてくる。十数回と繰り返し、満足したのか、啜える範囲を広げていく。温かい口内に亀頭が迎え入れられ、カリ首までラウラの中に隠れた。

「ぐぽおっ、ぢゅぽおっ、ぬぷっ、ぐぷっ、ぢゅぷぷっ……！」

一夏の見ている前で、激しすぎないスローフェラ。速度はない代わりに、肉棒の表面を隅々まで舐め回されていく。先ほど肉棒も含めて体全体を洗われてしまったのだが、もし恥垢などの汚れが残っていたとしても、全て拭い落されていただろう。

「ぬぷ、ぬぽおっ……！」

それくらい、ねつとりとしたフェラ。しかし、まだ浸食は止まらない。ラウラは亀頭から勢力圏を伸ばし、竿も口内に収めていく。小さな口のいったいどこへ仕舞われているのか。さすがに根元までとはいかなくとも、肉棒はラウラの口内に抱きしめられる。

「ぐぷんっ、ぢゅぶんっ、ぶぢゅっ、ぢゅるっ、ぐちゅぶっ、ぢゅるっ！」

「お、う……」

ラウラの髪を手綱代わりに掴み、肉棒を口マンコで圧迫される。口内が狭く、頬も窄めているために隙間なくしゃぶりつかれる。腰ごと肉棒を引っ張られるようで、一夏は腰の位置を固定するように多少力を入れる。

どっしりと構えた一夏から伸びる立派な肉棒を、ラウラは夢中になって舐め尽くす。ラウラの唾液が絡み、定期的に口内から姿を出す肉棒は乾く暇もなかった。すぐに狭く、心地いい場所へと誘われ、愛情と唾液たっぷりのフェラを浴びせられる。

このまま果ててしまってもいい。
だが、と一夏は思った。

これではレイプではない。レイプというのは男側の独りよがりではなくてはいけない。女の同意を得る前に勝手に行動し、欲望を発散する。この瞬間、女は愛する存在ではなく、ただ醜い欲をぶつける対象にすぎないのだ。

ごめん。一夏は謝罪を入れ、ラウラの頭を掴んだ。

謝罪の言葉に対し、一夏が取った行動は酷く乱暴だった。

「んぷうっ!？」

イラマチオ。それも、微塵の容赦も感じさせない。一夏は両手でラウラの後頭部を覆い、内側に押しつける。引くことも、これ以上前に移動することもできない。喉奥まで使ってどうにか肉棒を根本まで押し入れ、ラウラの口元を陰毛の茂みに隠す。

「ふーっ……いーっ……ふーっ……いーっ……」

ラウラの鼻息が股間をくすぐり、一夏は自覚した。今、己の分身がラウラと一つになっている。ラウラを苦しめる形になっているが、心地いいことには変わりはない。オナホルルのほうがまだ優しい使われ方をするのではないか。一夏の両手が動き、ぐりぐりとラウラの顔を股間に押しつけている。

なんて酷いことを。

でも、なぜだ。こんなことをしているのに、心が躍る。

喜んじやだめだ。人として間違っているのに。

一夏の想いとは正反対に、一夏の口角が緩む。

底から生じた醜い情熱。熱を帯び、幸福を伴って、表に出てこようとする。

わからない。何が悪いのか、何も。

一夏の混乱を押し退け、今はただこの瞬間を楽しもうという考えが湧き上がる。

「ご、めん……」

息苦しさで涙目になりながらも一夏を見上げるラウラに告げ、一夏は解放した。

びゅびゅびゅびゅつ、どびゅーっ、ぶびゅるるっ、びゅるっ、どぶっ、どぶっ！

「うぐっ!? ぐっ!? んんっ!?」

苦しむラウラを他所に、一夏にとって至福の時間が訪れた。力んでいた肩から力を落とす、全身から無駄な力を抜くように息を吐きながら精液をぶちまける。注ぐ先は勿論、ラウラの喉奥だ。口に溜まる気配も見せず、直接喉に向けられた精液が飲み込まれていく。

「ぐくんっ、ぐくんっ、ぐくぐくっ、んっ、ぐっつきゅ、ぐく……!」

ラウラの喉が鳴り続け、胃に精液を送っている。飲み量に対してたまに供給過多になっていたが、どうにか嘔下し、一滴もこぼさずに精液の移動が行われた。一夏の金玉で作られた精子は無駄になることはなく、ラウラの栄養として腹に蓄積していった。

気持ちがよかった。それは嘘偽りのない一夏の想いだった。

そして、罪悪感も強い。射精を経て冷静になるたびに心が蝕まれるようだが、誰も助けてはくれない。一夏は従うしかない。自分で望んでいるわけではないのだと言い聞かせ、ラウラの口から取り出した肉棒の牙を研ぎ澄ませる。

「ぎ、教官、次はどうすれば……」

そして、呼吸を乱しながらも一夏からの指示を待つ従順な兵士。

何をしても怒られない。逆らわない。便利な肉オナホだ。

そんなラウラを見て、一夏は肉棒を苛立たせ、次なる行動に出た。

「教官……!?!」

ラウラを正面から抱きしめ、抱え持つ。咄嗟の行動にも関わらず両手足で抱擁し返してきたラウラの尻を持ち、位置を微調整する。一夏の視線の先には自身の股間があり、肉棒はラウラの陰部に擦りつけられていた。

妄想の中でラウラを犯したことのある体位だ。腰を引き、龟头を陰部に食い込ませた。

膣口を捕捉してしまえば、挿入自体は慣れたもの。腰を前に押し出し、狭い穴を開拓していく。やはり抵抗感が強く、思うように龟头は入らない。それでも、力任せに対応すると徐々に龟头が沈んでいく。

「あ、い、一夏が、私の中に……」

教官と呼ぶ余裕がなくなった代わりに、ラウラは穴で肉棒を受け止めながら喜びを見せる。ずぶぶつと亀頭が膣と一つになったときには破瓜が起き、破れた膜から血が生じる。それをいち早く察知した女子生徒たちが色めき立つ。

「また一人、一夏様の肉穴が誕生したわ」

「おめでとうー!」

「私も早く、織斑君のチンポケースになりたい」

「あたしは孕み袋にしてもらいたいなー。子供産んだらすぐに種付けしてもらおうの」

「贅沢すぎるでしょ、それ。篠ノ之さんくらいじゃないと無理だよ」

「私たちも代表候補生だから、チャンスはあるのかしら!」

「種付けやり捨て用の女でも十分幸せだと思いますが。でも、できれば……」

気が狂う。間違っているのに、一夏の行動は正当化される。たとえば本心ではなくても、肉棒は増長する。膣内で我慢汁をどぶどぶと吐き出し、滑りをよくして奥へと進む。破ったばかりの膜を蹂躪し、分厚い竿がラウラを犯した。

瞬間、ラウラの背が跳ねる。

「遂に、嫁と二つに……。ん、くう、男女の交わりが、これほどのものとは……!」

顔を彩るのは驚愕と悦楽。幸せそうな顔を見てみると、ただの和姦にしかな思えない。しかし、ラウラは雌の脆弱さと雄の強靱さを教えてほしいと言った。それに従わないと。ラウラに言われたから仕方がない。そうしないと、ラウラも自殺しかねないのだから。

仕方なくレイプするのだ。

一夏は自分が笑っていることも知らずに、跳ねるように腰を揺する。しっかりと抱きかかえられたラウラの体も合わせて揺れ動き、膣穴に肉棒を出し入れされる。そのたびにラウラは喘ぎちらし、己を抱く遅しい男である一夏を見つめていた。

「はあ……。んんっ……。一夏、愛しているぞ……」

ラウラが愛を囁く。やめてほしい。こんな状況で愛しているなどと言われたくはない。

「好きなだけ、使ってほしい……。あぁっ……！　そ、そうだ、もっと激しく……！」

今の俺を認めないでくれ。一夏はラウラを黙らせようと、腰を躍動させた。

浴室で跳ね動き、生殖器を擦り合わせる二人。よく見える位置に行こうと女子生徒が移動し、観察しているが、一夏に構っている余力はない。ラウラという小さいながらも温かく、麗しい少女の魅力に唆され、勃起の収まらない肉棒を絶頂へと導く。

「その調子だ……。んっ……！　こ、これならばたっぷりと出るだろう……。遠慮はしないでほしい……。体は小さいが、子作り可能だ……」

余計なことを言うな。体が反応してしまう。

拒絶する想いを抱く中、一夏は口角を上げる。いい加減、自分が浮かべる表情に気が付いているのだろう。それを見て見ぬ振りをしている。自分は与えられた役割を担う演者にすぎないのだと言いつけている。

そうしないと心の均衡を保てない。一夏の体が快樂漬けの日々によつて堕ちかけてしまっているなどと、どうあつても信じたくはない。信じたが最後、これまでの自分に戻ってこれなくなりそうで、ひたすら目を背ける。

一夏は暴れる。子作り可能と宣言した雌を抱え、温もりを体の内外で感じ、視線を重ねて男性器と女性器を混じり合わせた。処女を奪った征服感之余韻として残り、肉棒をさらに大きくさせていった。

「いっ……！？」

内で膨らむ男の象徴。狭い穴をメリメリとこじ開けられ、ラウラが鳴いた。瞳は動揺に震え、体が強張る。おそらくは意図せずに膣内が引き締められ、圧迫を強める。奥まで挿入した状態で受けたことで逃げ場はなく、一夏も声を出す。

「ははっ……！」

笑い声。一人の雌を支配する行為の直前で、雄が欲望を剥き出しにする。

どくん、と肉棒が脈動する。陰囊から精子を汲み上げ、竿へと送る。世の健全な男の十数人分に匹敵する密度と量。それが勢いを乗せて、尿道口から放たれた瞬間、一夏の体は排泄時に似た身震いを引き起こした。

どぼおっ、どびゅっ、どぶんっ、どぶっ、びゅるっ、びゅるるっ、どくっ、どぶっ！

大質量の精液による重たい一撃。それが間隔を空けてラウラの子宮を襲う。

ラウラに言葉はなかった。いや、声を出してはいたが、言葉と呼べるものではなかった。歓声とも悲鳴ともつかない高い声。ただそれは、ラウラの緩みつばなしの顔を見ていれば、喜びに分類されるものだとわかる。

雌は喜んでいた。一夏というこの世界最強の雄の資質を持つ子種を受け、子宮が亀頭にむしゃぶりついていた。出されたものをそのままごくごくと飲み干し、これまで使われてこなかった胎で赤子の素を抱え持つ。

普通の人間らしい出生ではなく、試験管で調整、育てられた戦うための道具。そんな酷な人生を歩んできた雌だが、ようやく、人並みの女らしい幸せを得られた。いや、相手が一夏であるから、人並みではない。この世界でまだ一握りしか存在しない、選ばれた女としての至上の幸福を噛み締めているのだろう。

「一夏、一夏……」

詰め放題とでも言うように、粘ついた精液が子宮をまもなく支配した。子宮の壁にへばりつき、離れない。精液同士が子宮内で領土を争い、精子が泳いでいる。そして、誰がラウラの卵子を射止めるのかと争いに発展し、共倒れになるか、最後の一匹になるまで戦い続けるのだろう。

当然、一夏本人に精子同士の争いなど知覚できるわけもなく、新しい種を次から次へと送り込む。満足しきった頃にはラウラの腹は大

きく膨らみ、人の身に過ぎた幸福を短時間で浴びたことでラウラは気絶していた。

一夏は膣から肉棒を引き抜いた後、ぐったりとしたラウラを床に寝かせた。いくら粘着性に富んでいるとはいえ、大量に出された精液は栓の抜けた膣口からすぐに吹き出てきた。まるで常人の射精のような勢いで溢れ、床を白濁に濡らす。

シャルロットとラウラ。仲のいい二人が横並びになって、仲良く開いた両足の間に精液の水たまりを作っている。

それを見た一夏が罪悪感に悩まされる。またそんなパターンかと思いきや、今度は様子が違った。まだ相手はいる。諦めた表情でシャルロットとラウラを見た後、その矛先は女子生徒に向けられた。

どうせ、この場にいる全員が自殺をちらつかせ、脅してくるに違いない。

一夏の予想は正しく、次の相手を探す一夏へと女子が詰め寄ってくる。

「次は誰を使いたい？ あ、逃げちゃ駄目だよ？ 逃げたら悲しくなってしまうに死んじやうからね」

「誰でもいいよー」

「もつと楽しんで、全員食い散らかしちやおうよ」

「まずは私とやりましょう！」

「待ってください。とりあえず、将来有望な代表候補生から先に」

言い争いを始める女子の一団。人数が一クラス分だけに姦しい。この場においての指揮権を持つシャルロットはまだ再起していないため、制御する者がいない。誰もかれも我こそがと主張し、話し合いが平行線を辿るのを前に、一夏が行動を起こした。

「あ……んんっ……!?!」

話しているロシアの少女、先輩である彼女の体を乱暴に引つ張り、乱暴に唇を重ねる。いきなり舌を伸ばして口内に這わせ、唾液を塗りたくる。驚く彼女の体を引いて母性的な肉体を強く抱き、手中に収める。

それを見せつけられた周りは硬直していた。

これまで積極的ではなかった一夏自らの熱烈なスキンシップ。それはこの中で一番冷静と思えるロシアの少女すらも驚愕させ、舌遣いだけで魅了するほどだった。

「あ、あ……。そんな……。すごい……！」

キスが終わって力なくへたり込む少女の前で、一夏は肉棒を突き出す。

まるで、数日間溜めてきたのではないかと錯覚させる怒張具合だった。先ほど出した精子の分もあつという間に補充が終わり、いつでも種付けが可能。これで膣内を穿られ、奥の奥で射精されれば高確率で妊娠する。

一夏はわかっていながら、止まらない。

俺は悪くない。俺は悪くない。俺は悪くない。

何度も自分に言い聞かせ、良心を宥め、この状況で最善の行動を取った。

一夏は、手当たり次第に少女を犯した。シャルロットたちにそうしたように、男の強さを見せるつける乱暴なレイプ。髪を引っ張り、腹を拳でぐりぐりと虐め、首を圧迫し、ガツガツと膣穴を奥まで犯し抜く。

それを見て少女たちも同調し、一夏の気分を煽るために演技をする。

ある者は泣き崩れた。またある者は逃げ惑い、怯える。当然、大浴場から逃げることをしないが、それでも一人の少年がレイプという行為に現実味を感じるには十分で、足りなかった経験値が満たされていく。

もはや声もなく、余計な感情も漏らさず、一夏はただ少女たちを犯すことに徹した。

立ちバツクで。種付けプレスで。背面駆弁で。思いつく限りの体位で、荒々しく交わる。

一人、二人、三人。精液を子宮に目いっぱい注がれ、床に倒れて膣から子種を垂らす少女たちの数が増えていく。人数が増えるたびに目に入る惨状は酷くなっていくが、一夏はそれでも止まらなかった。

もはや、自分の欲を満たすために犯しているのではないか。

傍目からはそう思えるほどに、一夏は立派な性犯罪者に見えた。

「やめて！・織斑君！・中は、中だけは……！・ねえ、や、やだ、いやああああ！」

逃げようとする少女の髪を掴み、無理矢理背後から犯し、少女の制止の声も振り切って濃厚な子種を提供する。びゆるるつと注がれた精子が子宮に広がり、中を汚す。いやいやと首を振る少女の腰を掴み、追撃を放つように腰を前に出した。

一夏の新しい子供がまた生まれるかもしれない。

既に、死屍累々と倒れ伏した少女たちの子宮では受精が始まっていく者もいた。

犬猿の仲であったアメリカとロシアの少女も共通の男に屈した喜びを分かち合うように寄り添いながら、一夏の遺伝子に卵子を犯されていた。つぶんと卵子に精子が結合し、これから着床に向けた準備を体が勝手に整えていくのだろう。

罪が重ねられていく。一夏が自発的な性行為に慣れていく。

「堕ちるのも時間の問題かな……。上手くいったよ、箒……」

シャルロットの満足げな呟きは女子の悲鳴で掻き消され、一夏の耳には届かなかった。

天才科学者 V S L V. 100 チンポ

少女が一人、大浴場から脱衣所に向かって駆け出した。たった今、種付けを終えた一夏は繋がっていた少女の膣から肉棒を取り出すと、逃げた少女を走って追いかける。この少女も演技にしては随分と逼真だ。必死の表情で、走りながら脱衣所へ続く扉に手を伸ばす。

「は、放してっ……っ！」

だが、あと一歩のところまで、一夏は少女を捕まえることに成功した。体に回した手で掴みやすい乳肉を握り、首に手を回す。

危なかった。脱衣所に出ていこうとする者が現れるとは思わず、肝を冷やした。あのまま逃げられていけば、仲間を呼ばれていたかもしれない。一夏はほつと息を吐き、少女の口を手で塞ぐ。

「んーっ!? んーっ!?」

捕まっつてなお少女は暴れた。大浴場の扉に手を伸ばし、届かないとわかれば自分に抱き着く一夏を押し退けようとする。足を蹴られ、体を叩かれ、侮蔑に満ちた眼差しを向けられる。瞳に宿る感情は本物のように思えて、一夏はほんの少し動揺した。

だが、どうせこれも演技だ。

一夏は余計な感情を捨て、少女を凌辱した。

あまりに暴れるため、腹に拳を放つ。重たい一撃が少女の柔らかかな腹部に叩きつけられ、「がはっ……っ!?!」と少女が苦悶を漏らしながらくの字に体を曲げる。立っていることもできずに膝を突いた少女の腰を片手で掴み、もう片方の手で後頭部を掴んで濡れた床に顔を押しつける。

「あっ、いつ!? や、やあっ……っ!?! ひ、酷い……っ!?! こんな……っ!?!」

少女が泣き始める中、一夏は新しいマンコを食い漁った。腰を躍動させ、未だに勃起の収まる気配のない肉棒で少女の中を蹂躪する。処女であったらしく、血を流す膣内に肉棒の形を覚え込ませ、奥まで穿り返す。

もうこの作業に慣れてしまった。

襲いくる快感に身震いしながら、一夏は一方的な情事を続けた。次

第に甘く蕩けだした少女の声を背景に、興奮を高めていく。いい感じにギチギチと絡んでくる膣内の使い心地に目を細め、堪らず腰遣いを加速させる。

程なくして、一夏は射精を迎えた。

「お、おおっ……」

もはや少女に声はなかった。瞳から大粒の涙を流し、緩みきった笑顔を見せ、開いた口から舌と唾液を垂らしている。ついさっきまで一夏から逃げ回っていた者とは思えない。やはり、演技だったのだろうか。それにしても演技力が高く、将来女優にでもなれそうな才能を持ち合わせていた。

翻弄されてしまったが、これで終わりだ。

一夏が大浴場を見渡すと、三十人の女子生徒がやり捨てられている。皆、格好は様々だが、膣からはまだ新鮮な精液を垂らしている。一夏の精液の濃密さを考えると、子宮にはまだ大量の精液が留まっているはず。

一人も妊娠しないというのは考えられない。今この瞬間にも、少女の子宮に精液を注ぎ込む一夏は、深くため息を吐いた。

正気を保っていないながら、何も抵抗できなかった。少女たちのやり方は悪質になっていた。大切な仲間の命を人質に取られ、無視できるほど一夏は残忍ではない。これからも同じやり方でセックスを強要されそうだ。

「どうすれば……」

射精を済ませ、犯したての少女の膣から肉棒を取り出す。ごぼつと早速逆流してきた白濁の精液を見ると、この三十人のうち、いつたい何人が妊娠してしまうのだろうか。考えるだけで眩暈がした。

「う……」

さすがにやりすぎた。自分で自分を追い詰めていった精神が限界に近づきつつある。

もう、いいだろう。一夏はこの状況を生み出したシャルロットとラウラに目を向けるが、まだ横になったままだ。次なる行動を起こしてくる様子はない。相手が戦線に復帰してしまう前に、この場から避難

するべきだと思った。

大浴場の扉に手を掛け、開く直前、一夏は改めて浴室の光景を目にする。

凶悪なレイプ魔が学園に押し入り、手当たり次第に少女たちを犯したかのようだ。実際にこんな目に遭えばトラウマものだろう。演技でよかったと思う。

「演技、だよな……」

胸に引つかかるものを覚えつつ、一夏は自分を納得させた。

一夏は大浴場を後にし、脱衣所の籠の中にしまわれていた下着と服を着る。そのまま迅速に廊下へと続く扉の前に移動すると、少し開いた扉から廊下の様子を確認する。

誰もいない。シャルロットの人払いによって、今も近づかないように配慮がなされているのだろうか。廊下の外にびつしりと少女たちが待機している様子を思い浮かべてしまったが、嫌な想像を振り払って一夏は脱出を始めた。

できるだけ足音を立てず、かつ素早い移動を心掛ける。危うく寮内を歩いていた少女と鉢合わせしそうになったが、物陰に隠れてどうかやり過ごした。

その甲斐あつてか、一夏は誰にも見つかることなく、自室の部屋に戻ってきた。

部屋の扉を静かに開き、中に身を滑り込ませる。閉ざして素早く施錠した扉を背にし、肩の力を抜く。ようやく人心地できそうだと思う中、こみ上げてくるのは後悔の念だった。

とんでもないことをしてしまった。何度後悔しても、し足りない。だというのに、何故だ。

一夏の心は昂つてもいた。心臓が普段よりも少し速く鼓動を繰り返し、全身に血を送っている。その血を目いっぱい受け取っている肉棒は勿論、全身は心地いい倦怠感を覚えていた。一仕事終えた後のような、爽やかな気分すら感じられる。

「俺、どうなっちゃったんだろう……」

明らかに精神的な変化が起こっていた。一夏にとっては悪い方向

に。

このまま学園生活を送っていて、果たして一夏に明るい未来はあるのか。

「駄目だ……」

考えれば考えるほど、精神が蝕まれそうだ。

たまには何も考えない日を設けないと。あんなことがあつた直後なら、なおさらだ。

一夏は扉の前から離れ、今日はもう眠ってしまおうと思った。シャワーを浴び直したい気持ちはあるが、精神的な余裕がない。既に足は勝手にベッドへと向かい、ベッドを前にすると前から倒れ込んだ。

ふかふかのベッドと肌触りのいいシーツ。一夏を癒し、眠りに誘う。

目蓋が重く、どんどん閉じていく。体がベッドから離れられない。そういえば、灯りを消すのを忘れた。

思った直後、部屋の灯りが消え、暗闇が訪れた。

なんで、勝手に消えたのだろう。不思議に思う思考すらも解け、睡魔が一夏の意識を奪っていく。遠くから少女たちの笑い声が聞こえた気がした。誰かが部屋にいるのか、幻聴なのか、それすらも判断できない。

もう、眠い。

一夏は体を丸めてシーツを掻き抱き、深い眠りに沈んでいった。

その日、一夏は夢を見た。

暗闇の中、ベッドで仰向けになる一夏を二人の少女が覗き込んでいる。

ベッドの左側に立って一夏を見下ろすのは、ショートヘアの毛先が外向きに跳ねた少女。目尻はツンと吊り上がって形のいい目と、どこか不敵な笑みに満ちた端正な顔。暗くてよく見えないが、手に持つ扇子には『夜這い』という文字が書かれているようだった。

それと、ベッドで右側に立って一夏をぼんやりと見つめるのは眼鏡をかけた少女。先の少女とどこかに似通った顔立ちをしている。セミロングの髪には癖があり、毛先が内側に跳ねている。おそらくは先

の少女の妹だろうか。姉よりも余裕に満ち溢れた雰囲気はなく、ほんの少し垂れた目と小柄な体格のせいかな、大人しそうな小動物染みた印象を受ける。

初めて見る少女たちだった。

「初めまして、一夏君。私の名前は更識楯無^{さらしきたてなし}。この学園の二年生で、生徒会長よ。実は楯無っていうのは本名ではないんだけど、ややこしいから今はいいわ。それと、こっちは妹の簪^{かんざし}ちゃん！ 可愛い子だから、仲良くしてあげてね？」

「その……よろ、しく……」

本当に姉妹だったようだ。明るい姉の楯無と、無口な妹の簪。

対照的な雰囲気の二人だが、その身に着込んだ服はよく似ていた。

バニー服とでも言えはいいのだろうか。つるりとしたエナメル質の黒い生地が胸の大切な部分をギリギリ隠し、脚の付け根の部分まで覆っている。バニー服から伸びる太腿にはストッキングを着用しており、若く、ちょうどいい肉を備えた生足の魅力が底上げされていた。よく見ると、臀部には丸く白い尻尾が付いており、頭にはウサ耳が――。

あれ？ と一夏は思った。

どうして自分は呑気に観察をしているのだろう。それに、これは本当に夢なのか？

何かがおかしい。だが、何故だろうか、これが夢だと思えなかった。

『そうだ。これは夢だぞ、一夏』

箒の声が聞こえた。今となつてはこの学園で一番信用できない存在となつてしまった箒の言葉だというのに、一夏の心は納得していた。夢なら仕方がない。この状況で体がピクリとも動かないのも、夢だからだろう。

一夏は夢を素直に受け入れ、観察を再開した。

二人がつけているウサ耳に見覚えがあった。

それは、箒の姉である篠^{しの}之^の束^{のたばね}、この世界にISを生み出した天才科学者が好んで着用している機械仕掛けのウサ耳と酷似している。

以前、学校行事の臨海学校で訪れた先で束と出会い、束が身に着けていたのをこの目で見たから間違いはない。

この二人と束に接点があるとも考えられない。束は自分が認めた人間にしか懐かず、言葉もろくに交わさない。実妹の箒や親友の千冬、その弟の一夏以外の人間関係があるようには思えない。

そもそもこの二人は一夏とは面識がない。

夢だから、いろいろとありなのだろう。

いろいろな要素が組み合わさった奇妙な夢は、一夏の前で良からぬ展開に進みつつある。

「それじゃあ、早速で悪いけど、一夏君」

「搾精……するから……」

恐る恐る、簪が両手を持ち上げる。

その手に握られていたのは、茎のない人参を模した何かと、液体が入った瓶だった。

簪は瓶のキャップを親指で弾くように開くと、細長い注ぎ口を人参のヘタの部分に開いた口に差し込んだ。そして、瓶の底を上に向け、中に入っていた粘々とした液体をトプトプと人参の中に流し込んでいく。

もう一夏にもわかっていた。人参の形をしたふざけた物体はオナホールで、現在進行形で投入しているのはローション。たつぷりと中に詰め込み、あとはその口で獲物に食らいつくのみとなった。

簪はローションの瓶を床に置き、オナホールを一夏の股間に近づけていく。

その股間では、楯無が一夏のズボンと下着を膝まで引きずり下ろし、露出した肉棒を手で扱っていた。眠っていたそれは女の心地いい手で愛でられ、覚醒を始める。みるみるうちに大きさを取り戻し、龟头が上を向いてそり立つ。

そこへ、簪が挿むオナホールが近づき、ローションを垂らす口が龟头を啜え始めた。

ズプツ、ぐぷつ、ずぶぷつ！

人参型オナホールに肉棒を捕食されていくと、一夏の全身が震え

た。それでも、全身を自由に動かすことはできず、声も出せない。これも夢のせいなのか。身じろぎするだけの一夏を押さえつけるように、楯無が一夏の左胸に自身の胸を預け乗せた。

「ふふ……」

上から下に沈み、むにゅんつと形を歪める楯無の胸。バニー服の頼りない胸元からこぼれ出てしまいそうな豊かな膨らみが色の白い谷間を見せつけ、一夏の肌に体温と柔らかさをこれでもかど伝えてくる。

その間にも簪は手を動かして、オナホールで肉棒の根本まで包み込んだ。

ズツプンツ！ 水音を立て、肉棒とオナホールが重なった。まるで一夏の股間から人参が生えているかのような状態。簪はしつかりと奥まで馴染ませようと、ぐりぐりとオナホールを押しこんでいく。

「どう……？ 気持ちいい？ 篠ノ之束博士特製の人参オナホール……」

束さんが、これを……？

「さすがよね。オナホールまで作ってしまうなんて」
嫌な予感がする。

そして、その予感が正しいものだと、すぐに理解させられた。

「一夏君、ここ見えるかしら？」

簪が握るオナホールを楯無も掴み、人差し指で人参の細長い先端を示す。

一夏は言われて気が付いた。人参オナホールの先端は透明な管と繋がれていて、部屋の奥へと伸びていく。管を辿っていった先には、壁際に置かれた巨大なカプセルが鎮座している。人の胴体よりも大きなそれが、五つ以上もあった。

何を――。

声が出せないながらも、一夏が疑問を口にしようとした直後、始まった。

ウイン、ウイン、ウイン、ヴヴヴヴヴヴ！

機械の駆動音を響かせ、オナホールの中で何かが蠢く。びっしりと

中に生えた人工的な膣壁一本一本がそれぞれ独自の挙動を見せ、L・V・100チンプを攻め始める。内部に仕込まれた子宮口に似たものが開き、むちゅうううつと亀頭に吸いつく。

一夏は、快樂の波に吞まれた。休むことなく続き、一夏を苛めていく。

体が動かせる状態であれば、一夏はベッドの上でのたうち回っていただろう。それもできないために、一夏は搾精とやらに身もだえすることしかできない。

そして、まずは一回目とばかりに、肉棒が絶頂に至り、精液を吐き出す。

びゅぶぶつ、どびゆるるつ、どびゆつ、どびゆーつ、びゆるつ、びゆくつ、どぶつ！

出した精液はすぐに、ぢゆるると吸われ、管を通じていく。向かう先はカプセルの中。勢いよく底に叩きつけられ、嵩を増していく。一般人ではあり得ない量が一度の射精で提供され、一夏の遺伝子を大切に保管する。

「いっぱい……出してね……」

「一夏君の精液は全部、有効活用してあげるから」

簪と楯無は片手で搾精中のオナホールを握り、一夏の顔を覗き込む。簪も姉を見習って一夏の胸に己の胸を置く。姉と比べて慎ましながらも、女の膨らみを感じられる。姉妹のバニー服の胸元がぱらりと捲れ、乳首まで見えているが、気にもしていない。

「これが終わったなら、どつちが先に一夏君と繋がる？」

「どつちでも、いいよ……」

「それじゃあ、先に簪ちゃんね。私は後から一夏君を頂いちゃいましょう。一夏君、先輩としてお姉さんが年上の魅力を教えてあげるわね。授業料は一夏君のお嫁さんになって永遠に忠誠を誓う権利、つていうのは駄目かしら？ うん、いいみたいね」

勝手に決めていく楯無。

一夏は何も返答できない。夢だと思っ込んでいるのに、醒めることができずに延々と続く射精地獄。カプセルが順調に一夏専用の精液

タンクに変わっていき、射精が落ち着けばすぐにオナホールが暴走し、次の射精を促す。

こんな拷問のような機械を作った人間も人間なら、それを受けても平気な顔で吐精するチンポもチンポだった。常人離れた天才が作った機械と、人智を超えた邪神が作った生殖器。どちらが勝つのか試されているようで、巻き込まれた側としては、他所でやってくれという気分になった。

捕食者

射精に次ぐ射精。声すら出せない一夏は被捕食者であり、一方的に精液を奪われていった。既に一夏の体積を超えた量が絞り取られるというあり得ない状況にあるのに、L.V. 100チンポは相も変わらず活力を維持し、どくつ、どくつと濃すぎる精液を吐き出している。用意された五つのカプセルは次々に満タンになっていき、残りは一つ。その一つにも、たつた今放たれた搾りたて新鮮ザーメンがどろりと流入し、中身は白濁一色に染まる。世の女が欲してやまない織斑遺伝子のカプセル詰めが完了した。

そして、人參オナホールは機能を停止し、搾精は終わった。少量であつても女を狂わせ、高確率で孕ませてしまう精子。これをいったい何に使うのか。考えて不安を抱かないといえれば嘘にはなるが、今の一夏には冷静な思考は望めない。短時間にここまで射精をしたのは初めてで、その身には濃い倦怠感と充足感が広がっていた。気持ち、よかった。

これが偽らざる一夏の本音だった。出しても、出しても、どんどん搾られた。このまま無限に続くのではないかと思つて恐怖はしたが、それを超える快楽を与えられた。喜んだ体が勝手に震え、生成された大量の唾液が口からこぼれ出た。

「あら？　唾液がこぼれて……。ちゆるっ、むちゅっ、ちゅっ、くちゅっ、あ、むっ……」

「舐めてあげないと……。んっ、れろおっ、ちゅっ、ちゅうっ、ちゅぶ……」

漏れたそばから唾液は更識姉妹の口づけで拭い取られ、後には何も残らない。

「あー……」

乾いた一夏の口内に、楯無と簪が同時に唾液を流し込んできた。口から伸ばした舌から、とろり、とろりと二人分の唾液が垂れる。一夏に抗う術はなく、口に潤いは広がり、唾液の提供者である二人の舌が口内を掻き回す。

ぐちゅつ、ぬちゅつ、ぐちや。鍋の中身を掻き回す要領で更識姉妹の特製唾液ブレンドが口内を支配し、一夏は二人が見ている前で唾液を飲んでいく。喉を鳴らすと、二人の表情が喜悦で彩られた。

「飲んで？」

「体の中に取り込んで……？」

二人に言われるまでもなく、一夏は唾液を飲んでしまった。再び口内が乾こうとするが、またしても二人の舌が侵入してくる。歯茎をなぞり、頬の内側を擦り、歯の表面を舌先で辿る。何が楽しいのか、更識姉妹のダブルペロチューは長引いた。

ある程度満足感を得て、二人の口が離れる。

「ん、一夏君ってどこも美味しいのね……。本当にすごいわね。あなたを独占して、私専用のご主人様にしたくなっちゃう。要求を全て叶えて、一生貢いで、笑い掛けてもらえるだけでできっと幸せすぎて悶えてしまうわ」

舌なめずりをし、嫣然と微笑む楯無。

「駄目だよ、お姉ちゃん……」

簪は分を弁えない姉を嗜めてはいるが、手を一夏のシャツの中に潜り込ませ、人差し指で左の乳首を弄ってくる。くにゅつ、くりゅつと乳首を可愛がられ、一夏はくすぐったく感じながらも微弱な心地よさを覚えた。

「わかっているわよ、簪ちゃん。箒ちゃんの手駒である私たちにその権利はないってことぐらい」

でも、と楯無は続け、体を起こす。捲れていたバニー服の胸元に手を掛け、勢いよく胸を露出させる。弾みでぷるんつと上下に揺れた乳房は形が整っていて、大きさも魅力的。一夏の目が乳房とその頂でほんのりとピンクに色づく綺麗な乳輪に目を奪われるのは仕方がないことだった。

「ここで一夏君の好感度を上げておけば、一夏君の女として寵愛を頂けるかもしれないわ。一夏君を一日独占する権利とかも、いずれはもらえちゃうかも。簪ちゃんもしたいでしょ？一夏君へのご奉仕プレイ。徹底的に一夏君を甘やかすの」

「それは……したい、けど……」

姉の提案に揺らぐ妹。

「このチャンスを逃す手はないわ。更識姉妹の実力、見せてあげましょう?」

楯無はまたしてもどこから取り出した扇子を片手で開く。明るい将来を夢想して微笑む口元を隠した扇子には、達筆な字で『誨淫かいいん導欲どうよく』と書かれている。一夏には難しい言葉だったが、意味合いは字面で何となく理解できた。

本当にこのまま一夏の相手をするつもりらしい。

姉の甘言に誘導されて簪が一夏の肉棒から人參オナホールを外す。出した精液は一滴たりとも無駄にせず吸われてしまったため、肉棒はさほど汚れていない。しかし、新しい刺激を期待したことで我慢汁を吐き出し始めた。

「すごい……。あんなに出したのに……」

簪と同じ感想を一夏も抱いた。簪が怖々と肉棒に手を伸ばし、小さくて少し冷たい手の平が肉棒を掴むと、性欲が湧き上がる。あの怪物染みた機械による連続射精など大した苦にもなっていないかったようだ。

それどころか、出しすぎてタガが緩んでしまった感じがする。

簪が手で肉棒を扱きながら眼鏡越しに肉棒を見つめる。近くに寄りすぎて眼鏡が当たってしまう。「ご、ごめん……」と言いながらも間近での肉棒観察を怠らない。小さくて細い鼻先を龟头に近づけ、臭いを嗅ぎ、ぶるりと体を震わせた。

尿道の奥に残った精液の残り香に当てられたのだろうか。垂れた目が深い笑みに染まる。

「いい、臭い……。アソコがじんじんするわ……」

花畑から摘んだ花の香りを楽しむように、簪がこの世界で最も凶悪な男性器を目前に深呼吸を繰り返す。徐々に、簪の顔が危ない色気を湛える。アルコールを摂取して酔っていくかのように、目が据わり始めた。

「好きっ……。この匂い……。ああ……。一夏、大好きい……」

楯無は微笑ましそう妹を眺めていたが、遅れて動き出す。

「はい、一夏君。まずは手のマッサージをしましょうね？」

反射的な挙動以外では自発的に体を動かさない一夏の左手を、楯無が優しく握る。

その手が導かれていった先には楯無の胸。下乳を隠す程度しか役に立っていないバニー服の生地を纏った胸に、一夏の五指が触れた。むにゆううつ、と温かい膨らみが手の平の進行を妨げた。ぐいっと押し込まれてさらに胸に指が埋まる。

伝わってくる体温がはつきりと感じ取れる。果実を根本からもぎ取ろうとするような形で、一夏の手が乳袋を弄ぶ。一夏の意志ではない。胸を掴む一夏の手を上から包みこむ楯無の両手によって、掌握を余儀なくされている。

「ああん、そんなに強く掴まれちゃったら、お姉さん困っちゃう」

全く困った様子を見せず、楯無のおっぱいクッションの良さを五指に教え込まれる。張りも、むっちりと吸いつく質感も、極上と言っている。体の自由が利けば、耐えきれずに胸を揉みくちやにしてしまっていただろう。

「でも、好きにしていよいよ。私のおっぱいに触れる男性は、これまでもこれからも一夏君ただ一人。一夏君がもしも私の体をご所望なら、毎日この胸で甘えていいのよ？ ミルクは出ないから疑似的な授乳プレイとか、パイズリもし放題。何十発もパイズリだけで射精して、一夏君の精液やら陰毛やらがべったりとこびりついた私のおっぱい、見てみたくな、あ、い？」

こんな誘いを受けて断る男はきつと、同性愛者か不能かのどちらかに違いない。破壊力が強すぎる。実際に商品に触っている一夏だから効果はひとしおだ。声も出せない状況で良かったとつくづく思う一夏だった。

「更識姉妹はセットで販売中です。人権も、尊厳も、財産も全部奪って、個人用のメイドにしませんか？ 今ならなんと中出しザーメンミルク一発注入でご購入いただけます！ 抱き放題、孕ませ放題、出産から子育てまでも全てこちらで受け持ちます。いかがですか？」

挿入するように言われた内容によって、男心をくすぐられる。一夏の男の部分が増長し、簪が目を疑っていた。ビキツ、ビキイツと肉の表面に血管が浮かぶ。明らかにチンポがイライラとしているのがわかる。

怒りの矛先である楯無のみならず、頬擦りをしていた簪も威圧した。

その結果、大人しい簪が積極的な行動を取り始めた。

「もう、無理……」

立ち上がった簪が一夏の股間に跨り、腰を沈めながら下腹に手を伸ばす。秘所を隠すバニー服の生地指を掛け、横にずらすと下にはつりとした恥丘。幼い印象の通りに性器も幼いが、女として男に食ってもらえるだけの状態ではあるようだ。

片手の指で陰裂をこじ開け、マンコを広げ見せる。それは小さい穴で、直下で槍のように身構えている肉棒とのサイズ差が激しい。一夏と交われば、蝕まれるような快楽が簪の中を這いまわるだろう。

ぽたり、と肉棒に垂れたのは簪の愛液だった。涎を垂らし、一夏を食おうとしている。

もはや止められる状態ではないようだ。

「はあっ……はあっ……いー」

まだ挿入してすらいなのに、簪の緩んだ口から漏れる息が荒い。簪の膣穴が肉棒を捉える。一夏はそこから目が離せない。女という生き物は、どうして体格に関係なくエロいのだろうか。楯無ほどの抜群のプロポーションを誇らずとも、簪は十分に魅力的な女だった。体から漂ってくる雌のフェロモン。蜜をこぼすピンク色の女性器。開いた穴にピタリと亀頭が触れ、肉の穴で呑みこまれていく。初めて使われるのだろうか。誰かの初体験を奪うことに対する期待感を浴びながら、一夏は簪の中に誘われた。

「あ、あ、ああっ……いー」

容易くブチブチと処女膜を食い破り、亀頭が穴に埋まり、愛液と我慢汁を交わらせながら全貌を隠していく。鈴音やラウラもそうだが、小柄な女に巨棒が嵌っていく光景は女体の神秘だ。いや、子供を産む

穴なのだから入るのは当然だが、改めてすごいと感じる。

女性が持つ穴を蹂躪し、奥への道を突き進む。

「ああああっ……!?!」

簪がひときわ大きい声を張り上げ、竿の大半が埋まった。ようやく一夏に手を伸ばせる距離感になって、一夏の体に触れながら腰を下へ押し込み、小振りな尻が遂に一夏の股間へと着地することに成功した。

「ん、一夏が全部、入ってきた……。太くて、硬くて、お、奥まで届いてえ……」

簪が身震いしている。挿入したばかりで押すも引くもできない。結合部から血が垂れ出ているのを見ると、処女であることは間違いない。しかし、痛いから動けないわけではないようだ。表情は至福の色を湛えている。

「簪ちゃん、処女卒業おめでとう。一夏君も、ありがとう。生まれてきてくれて、素敵なおチンポを手に入れてくれて。なお、更識姉妹購入の代金は、簪ちゃんの赤ちゃんの部屋にどうぞ。受付担当の卵子に精子をどびゅーつとご提供ください」

楯無が一夏の左手を胸で温めつつ、一夏と肉棒を煽る。一夏はともかく、肉棒の煽り耐性ははつきりと言って皆無だ。楯無の言葉で今もビクビクツツと怒張し、収まったばかりの簪の内側を広げている。

「あ、な、なに、これ、い、ひいつ?! ああ、あつ!」

肉棒が膨張するだけならば、まだよかった。しかし、それだけでは終わらない。

一夏の腰が勝手に動き出した。股間に座らせた簪を持ち上げて、上下に揺れる。余裕を保っていた楯無もさすがにそれには驚き、「ん……? え……?」と綺麗に二度見してその様子を認識し、一夏の顔へと畏敬の念を送ってきた。

「簪ちゃんの力で身動きを封じていたはずなのに……」

楯無は冷や汗を掻き、狼狽していた。その表情がさらに驚きと喜びに染まったのは、一夏の左手が楯無の胸を掴んだからだ。ぐにっ、ぐにいつと肉を揉み、弾力を何度も堪能する。それは、一夏自身の意志

でもあった。

これは夢だから、何をしてもいい。

「あああつ……い！」

胸を力強く掴み、楯無の泣き声を聞く。

「あつ！… えつ！… おおつ!?!」

腰を上げ下げして、簪の喘ぎ声を聞く。

どちらもいい声だ。女の泣いた声は本当に股間に響く。一夏は女のくせに生意気にも夜這いを仕掛けてきた二人を懲らしめようと、肉体の本領を発揮する。簪の子宮をサンドバッグに見立て、チンポのストレートを放つ。ジャブの必要はない。ただひたすら、渾身の一撃を放って簪を快楽に沈める。

「やつ、あ、あ、へっ、お、うぐつ、あ、はあ、あんつ、や、ん……い！」
「すごいわ、一夏君、いいわよ、遠慮なく掴んでっ、んっ!! 玩具みたいに使って……い！」

言われたからには仕方がない。一夏は二人を物のように扱うことにした。

「つ、お、おつ、おえ、あ、か、は……」

簪の首を右手で掴み、体を上げ下げする。何も腰を揺らすこともない。オナホールを動かすように、簪を動かせばいい。本当はオナホール自体に動いてほしいところだが、こちらのほうが強い刺激が味わえて好きだった。

「ああつ！… やあんつ！… あつ、はあ!?!」

楯無の両胸を交互に苛める。果物を下から掴み取るようにするのもいいが、牛の乳を搾るようにするのもいい。平手で引っぱたくのもいいし、乳首を摘んで引っ張るのもいい。胸はどう扱ってもいい。素晴らしい母性の塊だ。この胸も自分の手垢で隅々まで所有権を刻みつけたい。

使って、使って、また使う。女の扱いを覚えていく。現実では抵抗があっても、夢ならいい。一夏は獰猛に笑いながら、暴力的なセックスに手を染める。

一夏の口から声が漏れる。嗜虐的行為に興奮し、抱えた熱を体外へ

出す。だが、それでも抑えられない。だんだんと熱は下腹に募り、そこから股間で大きく増大した。

「はははっ……いー！」

もういいか。我慢しなくても。一夏ははつきりとわかるように笑ってみせ、簪を股間に叩きつける。ぐちゅんつと子宮口に龟头がねじ込まれたのと同時に、快楽と精液が底から吹き出した。

どびゆるるっ、ごぶんっ、とぶんっ、びゆるるっ、ぶびゅ、どくっ、どくっ。

「あ、あああつ……いー！」

簪の中に粘ついたザーメンを放っていく。精液の熱を感じて子宮の状態を把握したのだろう。簪が自身の細い下腹を見下ろし、恍惚とした表情を浮かべた。どちゅっ、と子宮口に龟头の追撃を一夏が放ったことで、全身を震わせた。

「いつ!? あ、い、いくっ!?!」

精子を提供されながら絶頂。脳を強烈な快楽で汚染されているのが丸わかりだ。大人しい少女の顔に大人の女の色香を滲ませる。これがセックスなのだ、隣にいるまだ処女の姉に知らしめるには十分で、楯無が一夏の腕を抱くように縋りついてきた。

「ねえ、一夏君……」

楯無の期待が籠った眼差しが一夏を捉えた。

「お願い、お姉さんにも、セックスの気持ちよさを教えて……? 一夏君の女にして……?」

一足先に大人になった妹と、大人の階段を上ろうとする姉。どちらも自分から一夏を求めてきた。それならば別に構わないではないか。一夏はまだ若干捨てきれずに残っていた良心を振り払い、この夢の間だけは正直に楽しもうと思った。

少女の身には過剰な精液を受け、簪は気を失っていた。膣から肉棒を取り出すと、栓を失ったことでごぼりと精液が垂れる。濃すぎる白濁液を漏らす簪をベッドに寝かせ、次の相手を務めてくれる姉に肉棒の矛先を向ける。

「ほら、ごぼりよ……ごぼりよ……」

見ると、ベッドに四つん這いになって微笑みながら尻を振る楯無がいた。バニーガールの格好で魅力を底上げされた楯無の破壊力は凄まじく、ごくりと生唾を呑みながら背後に移動する。膝を突いて楯無の腰を左手で掴み、右手で肉棒の位置を正す。

その間に楯無が陰部を覆う布地を横にずらし、膣穴を披露する。ピンク色の美味そうな穴。指で開かれたことで穴の存在がはつきりとし、狙いを定めるのは容易だった。精液に濡れた肉棒が楯無の陰部に矛先を定め、進行を始める。

狭い穴に適していないように見える、巨大な一物。竿の部分よりも横幅の広い亀頭が穴に接触し、潜り込んでいく。メリメリと穴を広げ、侵入を防ごうとしていた処女膜を食い破った異物に、楯無は「ん、くっ……！」と声を震わせた。

一夏も肉棒を締めつける圧迫感と与えられる心地いい刺激に震えつつ、楯無の腰を両手で掴んで腰を前に押し込んだ。「ああんっ!」と激しく鳴く楯無の中に肉棒が埋まっていき、少しずつ二人の体は一体化した。

そして、最後の一押しで迫る膣壁を押し退けて、肉棒は最奥にまで開通した。

「全部、入った……。ひっ……。!? 入れただけで、こんなに……。? んんっ……。!」

後ろに顔を向けた楯無が、一夏と根本まで繋がった己の下半身を見遣って動揺していた。挿入前に見せた笑みは既に砕け、怯えの色を見せていた。このまま一夏に身を任せるとどうなるのだろうかと思っただろうか。

だが、案ずる必要はない。一夏に抱かれた女が辿る道はただ一つ。「んうあっ!」

破瓜の血を垂らすマンコには酷な一夏の高速腰振りが、手始めとばかりに一往復行われた。膣口から奥まで肉棒で掻き筆られ、子宮口に鈍い亀頭ノックを受け、楯無はそれだけで全身を仰け反らせた。

未知の快感。体の中心を内側から雄に侵される興奮は如何ほどのものか。

一夏にはわからないが、楯無の反応から大体は察せられる。後方を振り向く余裕は消滅し、前方を向いたまま荒い呼吸を行っている。ストッキングに包まれた尻と密着する股間に振動が伝わってくる。

自分より先輩で、年上としての落ち着きを見せていた楯無。それが、一度繋つただけでこうなった。一夏の知る限り、最強の女と思われていた千冬ですら堕ちたのだ。一夏と交わって無事でいられる者はいないのではないか。

自分ならば、箒の言う理想の世界を実現できる。好きな女を好きなだけ抱いても誰にも咎められないだろう。箒や皆が協力してくれる。一夏の願いを叶え、危険や不安を遠ざけて、快樂と幸福だけを贅沢に堪能できる。

現実では拒絶する理想も、倫理観が曖昧になったこの夢の中では容易に抱けてしまった。不思議な感覚だ。心が素直で、思うこと全てを叶えてみたいと思えてくる。

『その調子だ、一夏』

箒の声が脳内に響き渡る。優しく、耳心地のいい声。夢の中で意識が蕩けるといふ不思議な感覚を抱く。実は現実なのではないかと疑ってしまうほどに生々しい感覚だが、一夏はそれを否定した。

『これは夢なんだ』

「夢……」

『一夏がどれだけ自分本位な行動をしようと、何も問題はない。ここで起きたことは現実には反映されない。だから、現実ではできないことをしよう。女を思う存分食らって、子種を植え付けて、侍らせる。どこを見ても美少女や美女がいる生活を考えてみる。美しい顔、犯しがいのある女体、甘い香り。一夏を称賛する声』

一夏は想像した。箒や千冬を始めとした、美しい女に囲まれる生活を。常に相手から求められ、褒め称えられ、滾る肉欲をこれでもかと発散する。承認欲求も、征服欲も、あらゆる欲が過剰なほどに満たされる性活を。

一夏はにやつきを抑えられず、楯無の膣内で肉棒をさらに勃起させた。

「あぁっ!?!」

膨張した肉棒によつていい声を聞かせてくれた雌を、一夏は犯し始めた。

「あつ、んあつ、おつ、んつ、あぁんっ!」

相手のペースを気にする必要はない。主導権は常に雄が握るべきなのだ。雄の上に雌が立とうなどというのはあつてはならない。一夏は全ての頂点であり、他の生物は全て一夏にひれ伏すのが定めなのだ。

「俺が、支配する……」

『いいぞ、一夏。その思考を反復してくれ。脳に刻みつけて、その思考に慣れる。お前は支配者だ。そのためのチンポも、力もある。一夏は優しすぎるんだ。その優しさは今はいらない。いらぬものは、捨ててしまえ』

箒の音が何度も響く。

一夏は言われた通り、自分の股間に従った欲塗れの理想を妄想した。

何回も、何十回も。

夢から覚めたところで、現実の自分に影響は及ぶことはない。

それを信じて、支配者となった自分を心の中で形作り、実戦に移った。

実戦相手は更識楯無。相手は雌だ。微塵の容赦はいらない。

「っはあ!?!」

犯す。楯無が逃げないように腰を掴み、自身の腰をただ前後に動かす。犬の交尾のようだと一夏は自分でも思ったが、やめられなかった。これが交尾としては正しい形なのかもしれない。呼吸を乱し、肉体を躍動させ、雌を犯す。

人間は何でも飾りたがる。欲望を悪とみなして、見えないように綺麗に着飾っても本質は何も変わらないというのに。ただ悪いことだと決めつけて目を逸らす者よりも、こうして獣に立ち返って本能に突き動かされるほうが人間らしい。

一夏は体を前に倒し、楯無に覆い被さった。もっと密着したい。こ

のドスケベな女をわからせたい。一夏を誘惑することの意味を。一夏好みの肉体に生まれた女がたどり着く未来を。この女の心と体に刻みつけ、子宮を支配する。

「い、一夏、くん……？ん、あつ……!?!」

背中から楯無に抱き着いて、右手で大きな胸に掴みかかる。左手を細い腰に回し、密着具合を上げる。柔らかい。うなじに鼻先を押し当て、鼻で深く息を吸う。いい匂いだ。これが今から手に入れる女の匂い。しっかりと記憶して、これからは匂いだけで誰なのかを当てられるようにしたい。

「ひいつ、あ、ああつ……!?!」

楯無の頬を舐め上げ、滑らかな感触を舌で味わう。それが終わると、耳穴に舌をねじ入れた。ぐちゅぐちゅと掻き回しながら、腰は終始動かし続ける。パンツ、パンツ！強く打ち付けた腰が尻とぶつかる音が鳴る。

気持ちいい。これをずっと味わっていたい。

『一夏が求めるのならば、それは現実になる』

「お、おおつ、あ、あつ、ああつ……!?!」

楯無の鳴き声が大きくなった。膣がきゅつと締まる。肉棒を強く抱擁され、ぞくぞくと背筋を快感が走る。口角は吊り上がったまま戻らず、楯無の耳を舌と唾液を犯し尽くし、できる限りの速度で腰を振った。

見る者がいれば、圧倒されただろう。女は股間を濡らし、男は自信を喪失する。一夏の激しすぎる獣セックスは生物の本能に訴えかけ、その優秀さを突き付ける。一夏こそ雄の頂点。一夏に抱かれることこそが雌の最大の幸福。

「ああつ!?! あつ！ あんつ!?! ああつ！ あああああつ!?!」

「うつ、あつ!?!」

一夏は楯無を押し潰し、子宮口にチンポに重たい一撃を放った後で、射精を開始した。

びゅるるるっ、どびゅるるるっ、びゅるるるっ、びゅるるるっ、びゅーっ、どびゅーっ！

逃げ場のない種付け射精。熱い精液が放たれた勢いに乗って子宮をぐるぐると泳ぐ。五秒も立たずに中は白濁のプールと化し、十秒後には密度は数倍にまで跳ね上がる。子種汁が何重にも重なって、精子の大群が狭い場所を暴れまわる。

「あ、は、ははっ、はははははっ！」

一夏は哄笑した。また一人、自身の遺伝子を女に分け与えた。美しい母体があればあるだけ嬉しい。たとえこれが夢でも、雄の本能には逆らえない。雌を圧倒し、内側を征服した至福に酔いしれてしまう。『これでまた二人。いい経験をしたな、一夏。だが、まだ餌はあるぞ？』

箒の声に反応して、一夏が体を起こす。

現在繋がっている楯無だが、放心状態にあつた。雄の圧倒的強さに驚愕し、強すぎる快感に溺れている。意識を手放すのも時間の問題だ。このまま楯無の妊娠が確定するまで犯しても良かったが、できれば相手の新鮮な反応を見たい。

『校舎の屋上に来てくれ。姉さんとともに待っているぞ？』

一夏は身を起こし、楯無の膺から肉棒を引いた。肉棒に付着した精液を楯無の髪で拭い、ベッドを下りた。手早く服を着直してからちらりとベッドを振り向くと、そこには仲良く一夏の精液を垂らして気を失っている姉妹がいた。

この二人のように、他の女も。

こぼれそうになった涎を手の甲で拭った一夏は、部屋を出た。

兎の悪戯

一夏は静寂と暗闇に満ちた夜の校舎を一人歩いていた。今は夏季休暇中で、さらに時刻は午後十時を回っていた。生徒はおろか教師もいるはずがなく、足音を響かせて階段を一段一段上っていく。

「あ……くっ……い！」

屋上まであと少しというところで、一夏は股間に異変を覚えて動きを止めた。肉棒が熱い。先ほどからじわじわと生じていた熱が、無視できないほどにまで高まった。苦痛は一切なく、非常に心地がいい。だが、逆にそれが一夏の不安を駆り立てた。

Lv・100チンポに何かが起ころうとしている。ただでさえ人の手に余るものだというのに、これ以上の変化が起こるなど堪ったものではない。

理由はなんだ。大勢の女を食らったことか？

一夏は巡らせようとした思案を放棄することにした。ここは夢の中で現実に起こっている出来事ではない。きっと、Lv・100チンポに対して一夏が抱く恐怖が、夢の中にまで影響を与えているに違いない。

これ以上の進化なんて、あるものか。

嫌な予想を振り払い、一夏は止めていた足を前に動かして屋上前まで到着した。

扉を開き、屋上に出る。屋上の出入りが制限された普通の学校とは違い、IS学園では開放されている。夏休み前の平日ではここで箒たちと昼食などを取ったものだ。女神の世界再構築によって得た一時的な平穏の日々が遠い昔のように思えてしまう。

石畳で舗装された道を歩き、花々が咲き誇る花壇や整えられた芝生の横を通り抜ける。

既に一夏の視界では、二人の人影を捉えており、その二人もまた一夏の接近に気がついていていた。余所見をする暇もなく、屋上の端にて一夏を正面から待ち受ける者たちの前に歩み寄り、ある程度の距離感を確保して立ち止まった。

「箒……。それと、束さ——」

「やつほー、いっくん。臨海学校ぶりだね！　そんなに経ってないけど、元気だった？　うんうん、元気そうだね。聞いたよ。手当たり次第に交尾しまくって、自分の子供を仕込んでいるんでしょ？　立派に成長したね！」

一夏の呼び掛けに食い気味に応じ、束がまくし立てた。

篠ノ之束。ISの産みの親である天才科学者にして、箒の姉。不思議の国のアリスを連想される青と白のワンピースに身を包み、ロングストレートの髪が伸びる頭部には更識姉妹がつけていた機械仕掛けのウサ耳のオリジナルを装着している。どこから見ても奇妙なコスプレだが、柔和な笑顔の似合う端麗な容姿と開かれた胸の谷間から覗く母性の象徴によって、美女という枠組みからは決して逸してはいない。

この人が、餌なのだろうか。いきなり種馬のように言われて戸惑いつつも、一夏は唾を抑えられなかった。この天才にまともに触れられたであろう男はおそらくはおらず、その体を汚せることへの興奮が高まっていく。

一夏は束を見つつ、箒にも目を配る。満面の笑みを浮かべる姉よりも控えめではあるが、箒も面白いものを見るような目で一夏を見つめていた。まるで、自分の思い通りに動く道化を見て満足感に浸っているかのような。そんな、舐めるような視線だった。

そんな中、一夏は箒の姿に着目する。

箒は束とは違って、清楚な私服姿だった。白いサマーセーターと青いフレアスカート。

違うのは服装だけでなく、性格もそうだ。破天荒な姉と真面目な妹。あまり似ていない姉妹だと一夏は昔から思っていたが、ここに来て二人はやはり姉妹なのだと思いつく。先天的と後天的という違いはあれども、共に人の理解を超えた力を有してしまった二人。自分の思うことをなそうとし、目的達成までの過程を楽しもうとする二人はよく似ている。

「よく来てくれた、一夏。では、そろそろ目を覚ましてもらおうか」

箒が口を開き、右手を掲げた。

何を、と一夏が思うよりも先に、一夏の見ている前で箒は指を鳴らした。

途端に、頭にかかっていた靄のようなものが消え、思考が晴れる。それは夢から現実へと目覚める感覚に似ているような。否、比喩ではなかった。一夏の脳が理解する。眼前の光景と先ほどの更識姉妹との交わり、それらが全て夢ではなく現実であったと、シームレスに思考が移行し、一夏は思わず口元を手で覆った。

「あ、ああつ……」

漏れる声を抑えようとしたが、無理だった。一夏は体を支える力を失い、石畳の上に膝を突く。嫌な汗が全身から吹き出し、瞳は動揺に揺れていた。

やられた。今度は夢を見せるという形で良いように操られ、更識姉妹を食った。いや、認識や肉体の操作はされたが、完全には操られていたわけではない。後半は一夏の意志で姉妹を犯していた。夢ならば大丈夫と思いこんで。

夢じゃなかった。

「どうだった？ 一夏。自分の意志で女を犯して、気持ちよかつただろう。それが本当のセックスだ」

箒が言う。楽しそうに。暗い空と遠くに見える月を背に、囁う。

「だが、まだ満たされてはいないはずだ。そこで、こちらで催しものを用意した。姉さん」

「はいはいー！」

待つていましたと言わんばかりに、束が正面に右手を伸ばした。

何もなかったはずの束の前に、複数の透明なディスプレイとコンソールが浮かんでいた。以前、臨海学校のとときにISの調整をする際に使用したものと同じだが、今回は高速タイプを披露することはなかった。

もう準備はできている。

束は振り下ろした人差し指でコンソールの実行キーを叩き、何かを実行した。

直後、静けさを突き破るように、機械の駆動音が辺り一帯から響いてきた。

音の発信源は、空より舞い降りてきた機体。その数は四機。夜に紛れるような漆黒に濡れた外装と、装甲の細部を彩る紫色の輝き。機械の両翼を大きく広げたそれは竜のようにも、蝙蝠のようにも見える。

その装甲の中心に、四人の少女がいた。装甲以外、全裸だ。

装甲を纏う、というよりは、装甲に拘束されていた。両手足を装甲に空いた穴に埋め込まれ、触手のように伸びた黒いコードが首や腰、太腿に巻き付いている。頭にはバイザーの付いたヘルメット状の機械が嵌められている。両胸は機械の黒く細長い手によって鷲掴みにされ、揉みくちやにされている。膣内では一夏のLv.100チンポに匹敵するほどの分厚い機械チンポが上下に高速稼働して暴れているようだった。

ヘルメット状の機械で何を見せられて、何を聞かされているのか。開いた口から舌をだらんと伸ばし、喘ぎ声と涎を垂らして裸身を晒す少女たちの目元は隠れているが、一夏にとって特に身近な者たちだとすぐにわかった。

「ひいひいひいっ!?!」

「あつ、やつ、んんっ!?!」

「ああああああつ!?!」

「くっ……!?! いっ……!?! お、おおおっ……!?!」

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ。囚われた少女たちは、自分の意志で機械に身を委ねているようには見えない。機械の生体ユニットのように扱われて、凄まじいほどの快樂攻めに遭っている。

「な、何してるんだよ!?! 箒!?!」

ただ事ではないと理解し、一夏は慌てて立ち上がって箒に詰め寄ろうとした。

しかし、それを遮る者がいた。

「はい、それじゃあ、楽しいパーティーを始めよう、いっくん」

「束さん……!?!」

妹を庇うように立ちはだかった束。それを見て、束も操られている

のだと一夏は思った。

思ったのだが、何かが違うと即座に判断する。操られた者とそうでない者を外見で見分けられるほど一夏は洞察力に優れておらず、これはあくまで勘だった。しかし、一度思うと、束は操られていないのだという確信が強まっていく。

「束さんは、操られて、いないんですか……?」

「あ、わかっちゃった? そう! なんと、私は操られていないのだ! しつかりバッチリ自分の意志で行動してまーす! 妙なところで鋭いね、いつくんは。女の子の気持ちとかは全然汲み取れないみたいだけど」

操られていない。だったら、どうしてこんなことを。

一夏はその思考を口に出していない。しかし、束は一夏の疑問に答えるように続けた。

「箒ちゃんが、いつか世界を征服したら半分くれるって言うから」

「は……?」

「だから協力しているんだよね。いやー、これまで滞っていた宇宙開発も、ようやく漕ぎ出せそうで何よりだよ。天才な束さんとはいえ、広大な宇宙を一人で開拓するにはさすがに時間が掛かりすぎるからね。大量生産できるけど柔軟性に欠ける機械人形でも、余計な提案をしてくる高度なAIでもなくて、それなりに柔軟な思考と絶対的な忠誠心を持つ手駒が山ほど増えるってなったら、さすがに協力しないわけにはいかないよね? ってことで箒ちゃんに協力しているんだけど、軽くだつたらいつくんたちで遊んでもいいって言うから、こうして私主催のパーティーにいつくんを招いてみたわけなのだよ!」

理解できない。したくもない。こんなに身勝手なことを、素面で実行する人がいるなんて。

束の言葉は耳に入っても、頭に浸透しない。一夏の思考が延々と終わらなかつた。

「そういうわけで、楽しんでね。女の子を囚えて犯して暴走するIS『ジャバウオック』。囚われているのは、いつくんを異性として好いているのに、当の本人にゼーんぜん気づいてもらえない哀れな少女た

ち。放っておくと、ジャバウオックに飲まず食わずで死ぬまで犯されるから、早く倒して解放してあげてね？」

東の両手が一夏の肩を突き飛ばし、一夏はよろめくように後退した。東に向けていた恐怖の感情を今は拭い、上空の少女たちに目を向けた。身動きの自由を奪われ、死ぬまで快樂漬けに遭う最悪な宴の催し物に仕立て上げられた被害者たち。過剰な刺激によって脳と肉体を犯され、悲鳴にも等しい声を上げている。

皆を早く助けないと。

自分に好意を寄せているらしい少女たちだから、ではない。目の前で理不尽な目に遭っている仲間を助けられなくて、何が男だ。一夏は自身を鼓舞し、奮い立った想いに突き動かされるようにして白い腕輪を嵌めた右手を掲げた。

「白式！」

自身が保有する専用ISの名を呼び、一夏は武装を展開した。

想定外の事態が一夏の身を襲ったのは、直後のことだった。

敗北

IS 起動と同時に、一夏が身に付けていた衣服が全て消失し、全裸になった。それだけでも十分予想外ではあったが、大きな問題は別にあった。

「これ、は……」

男性用貞操帯のように、尻と腰に巻き付いた鉄の拘束具。普通の貞操帯であれば、装着した者が射精できない構造となっているはずだ。しかし今、一夏の肉棒に纏わりついているものは鉄の器具ではない。

人参の形をしたオナホール。更識姉妹が使用した物と同一の悪魔の玩具だった。すぐに稼働を始めるかと思ったそれだが、今はまだ動いていない。動く前に外したいところではあるものの、肉棒をしつかりと包み、拘束具と繋がっていて自分の手ではビクともしない。

また搾取されるのか。戦慄する一夏を他所に、ISの装甲が展開されていく。腕や胴、足。そして白い翼のような形状をした四機のウイングスラスターが背中に備わる。それと、オナホールとチューブで繋がった透明なタンクが五本、腰から下がるようにぶら下がっていた。当たり前のように出現したタンクもまた、一夏のISにはあつてはいけないものだった。

一夏のIS、白式第二形態『雪羅』^{せつら}。装甲や武装の大部分は一夏の認識の通りだが、明らかな改造が加わっている。いつの間にこんな改造を。まさか、眠っているときに細工したのか？ 一夏は責めるように束へと視線を振り向けるが、束はただ嬉しそうに微笑んでいた。

「もたもたしてると、逃げちやうよ？」

束が指で指し示す先を一夏が確認するより先に、仲間たちを捕らえた四機のIS、ジャバウオックがスラスターの光を発して空へと直進していく。間もなく学園敷地内から海上へと飛び出る少女たち見て、一夏は急いで地上から飛び立つ準備に入った。

「皆……」

束を問い詰めるのは仲間を無事に解放してからにする。

余計な思考を打ち切って、一夏は夜の空へと飛翔した。

一夏が仲間たちに追いつくのにはさほど時間は掛からなかった。白式の推進力がジャバウオックのそれを上回っているためだろう。女を捕まえて犯す最低な機能が搭載されたジャバウオックはおそらく戦闘用ではないはずだ。

一夏から逃れるように右往左往と動きながら、ジャバウオックは少女たちの胸や膣内を弄び続けている。ガシユ、ガシユと膣内に機械チンポが出し入れされる駆動音が喧しく音を立て、体の内側を蹂躪された少女たちが悲鳴を漏らす。

「わ、わたくしが、この程度の凌辱で、んっ!? あ、ひいつ!? あ、あ、ああああっ!」

「助け、助けてっ……! あんっ……! んっ……! やめて、一夏を殺さないで……!」

「そんなに乱暴にしたら、僕のオマンコ、壊れちゃ、ああっ!? んあああっ!」

「これで、何人目だ……。ん、おっ……!?! 集団で囲んで、いつまで私をも、弄ぶ気、だ……」

風を切って逃げ回るジャバウオックから少女たちの声がずっと聞こえてきている。

やはり、被せられたヘルメット型の機器によって少女たちは良からぬ光景を見せられているようだ。しかも、それは映像などという生易しいものでもなさそうだ。実際に自分が体験しているかのように仮想的な空間と五感を強制接続され、犯されているのだと考えられる。どういう状況なのか、何が少女たちを犯しているのかまでは詳細に知ることはできないが、どうせろくな目に遭ってはいない。

一夏は刀剣型の武装、雪片ゆきひらにがた式型を出現させ、右手で握った。

「皆ー、聞こえるかー!」

一夏が大声を張り上げるが、少女たちに変化はない。現実世界での刺激は全て断たれ、仮想世界に囚われていると判断して相違ないだろう。完全に操られ、少女たちの手ではやはりジャバウオックを止めることはできない。

束に言われた通り、壊すしかない。

一夏はジャバウオックとの距離を詰めようと、推進速度を上げていく。

そのとき、白式がけたたましい警告音を発した。

「今度はなんだ……!?!」

次から次へと思わぬ事態が巻き起こる。一夏の眼前に『警告』という文字が浮かんだディスプレイが無数に表示され、白式の色度度が急激に低下を始める。ジャバウオックとの距離が見る見る離れていく。

「動けっ！ 動けよっ！」

前に進もうとしても、挙動に制限が掛けられているのか、速度は落ちるばかり。

『警告。これ以上の稼働には、生命エネルギーが必要となります。補充しますか?』

原因不明の状況に陥って混乱する一夏の耳が、女の淡々とした声を拾った。問いかける内容ではあったが、理解不能な内容に一夏は言葉を返すことができない。

『報告。マスター束の承認を受け、搾取を強制的に実行します。なお、搭乗者織斑一夏から所有者の権限を剥奪し、一般ユーザーの権限を付与。以後、管理権限をマスター束に統一します』

どことなく千冬に似た声をした声が白式から響き、一夏のオナホールが稼働を始める。

「ぐっ、あ、が……」

始まってしまった。低い振動音を立て、前後に動くオナホールが龟头から根本まで余さずに搾り上げる。まるで生身と勘違いしてしまうほどの、品質のいいオナホールの疑似マンコが肉棒をゴシゴシと扱き、一夏に快楽を与える。

「っ、ああああっ……!?!」

一夏の気のせいではなければ、更識姉妹のときに使用されたオナホールよりも具合が良かった。膣に生えた無数の襞ひだが肉棒を擦り、オナホールの最奥が龟头に吸いつき、精液を吸収し尽くそうとする。

決して油断はしていなかった。むしろ、一夏は身構えていたはずだった。

「おっ……！」

一夏は簡単に射精へと導かれた。

びゅるるっ、びゅるるっ、ごっぷっ、どっぷっ、どびゅるるっ、びゅーっ、びゅーっ！

川に流されるように空を漂いながら、ビクンツと体を震わせて精液を放つ。オナホールにガッツリと捕食されたまま放出した精液がチューブを通ってタンクへと吸い込まれ、見る見るうちにタンクの嵩を増やしていった。

「あ、あ、そ、んな……」

同じオナホールのはずだが、前回とまるで違う。それはつまり、前回の搾取はまだ手を抜いていたということだ。束が作った悪魔の性玩具が真価を発揮すれば、ここまでの威力になるのだと理解させられた。

『報告。生命エネルギーを感知。白式の制限を解除します』

まだ射精が続く状況で、白式が動き出す。生命エネルギー、精液が補充されたことで一夏の想いを汲み取って行動に移したようだ。随分と距離を離されてしまったが、煽るように遠くの空で旋回していたジャバウオックにはすぐに追いつくだろう。

一夏は、束によって滅茶苦茶にされた白式の仕様を知って歯噛みした。

白式自体のエネルギーとは別に、精液を与えなければ行動に制限が掛けられてしまう。その点を考慮に入れないといけない。そうでないでジャバウオックを壊す前にまた機能不全に陥ってしまい、その間にも過酷な責め苦を受けて少女たちの心身は消耗していく。

馬鹿げたゲームだ。考える者の気持ちが無理解できない。

束を理解しようなどと、もう考えない方がいいだろう。あれは天災だ。制御するのではなく、立ち向かって抗うしかない。

一夏は深く息を吐き、気分を静め、正面を睨み据えた。

「負けるものかあっ！」

大きく吠えた一夏は、ジャバウオックに立ち向かっていった。

しかし、いくら心を強く持ち直そうと、どうにもならないことがある

る。

一夏はISを使えるただ一人の男で、飲み込みも速いほうではあるが、操縦が特別上手いわけではない。量産型とはいえ、束が作ったIS四機を同時に相手取るには経験が足らなすぎた。

拘束した少女のポテンシャルを勝手に引き出しているかのようには、少女たちの動きの癖を再現したジャバウオックが、一夏を容易く迎撃した。

「っ、このおっ……!」

蝶のように舞って一夏の振るう雪片式型を華麗に躲し、装甲に包まれたセシリアの拳が一夏に叩き込まれる。操縦者を守るシールドエネルギーによって痛みは軽減されているが、それでも衝撃はある。軽く吹き飛ばされて空中で体勢を立て直したときには、両側からシャルロットとラウラが肉薄し、一夏の腕を掴んだ。

「んああっ!? ああああっ!?」

「ひいいいっ!? んおおおおっ!?」

二人の喘ぎ声が耳を襲う。一夏は二人を振り解こうとするが、簡単にはいかない。そんな一夏を嘲笑うように、一夏に鈴音が近づき、一夏の眼前に股間を寄せた。

「おっ! おっ! いくっ!? イクイクイグうううう!?」

両足を開き、股の中心に機械チンポがずっぽりと押し込まれる。鈴音がビクビクと震え上がるのに合わせ、チンポからは膣内へと白濁液が放出されているのがわかった。子宮に入りきらず、結合部から漏れてくる白濁液が一夏の目に映った。

色濃く、強い雄の臭いを漂わせるそれは、間違いなく一夏の精液だった。事前に搾取されたときの精液がここで使用されているのだろう。鈴音たちを孕ませようと、子宮に精液を注入し続けている。よく見れば、ジャバウオックの背面には精液がたっぷり詰まったタンクが装備されていた。そこから汲み上げた精液を少女たちに与えているのだろう。

どこまで人を弄ぶつもりなんだ。

一夏は瞬間的に膨らんだ怒りに任せ、両腕の拘束を振り払った。

「おおおおおっ！」

正面の鈴音に掴みかかろうと、勢いよく襲いかかる。だが、それすらも躲されてしまう。避けながら鈴音の足が一夏の腹に食い込む。その衝撃で手から雪片式型がこぼれ、暗い海に落ちて行った。

武器が手から離れてからは、四機は本格的に一夏に襲った。一夏の無駄なエネルギー消費を加速させようと、わざと攻撃をさせる。不良数人に絡まれるいじめられっ子のような構図だ。たまに一夏に抱きついて喘ぎ声を聞かせ、殴る蹴るの暴行を繰り返す。

統率の取れた動きをするジャバウオックに攻撃を全く与えられず、一夏は無駄な攻撃によるエネルギー消費の代償を支払うことになった。

『警告。生命エネルギー残量低下に伴い、搾取を始めます』

タンクに収まっていたはずの精液がごっそりと減っていた。一夏は気がついていなかったが、タンクは一定周期で光を放ち、中に溜まった精液をどこへ転送しているようだった。

一夏の精液がタンクから姿を消し、代わりに少女たちのタンクに新鮮な精液が補充される。どこから送られてきた精液なのかは言うまでもない。

どぷんっ、ごぷっ、びゆる、びゆるるっ！

セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラの膣内に機械チンポがズブッと挿入され、子宮口に当てた亀頭から一夏の精液を接射する。

一夏の精液注がれた少女たちの胎は丸々と膨らみ、さながら妊婦のようだ。これが精液ではなく、実際の子供に置き換わる日も近いだろう。これだけ子種を撒き散らされたのだから、もう妊娠しているもおかしくはない。

妊娠は避けられないとしても、早く助けないと。

俺が助けないと。

一夏は焦る。焦って挙動に精彩を欠き、ますます劣勢に陥る。攻撃し、避けられ、それでもなお諦めずに攻撃した。

射精をして白式のエネルギーを充填し、再度ジャバウオックに挑むものの惨敗する。もはや一夏は少女たちに精液を提供するだけの道

具と化していた。

『あれあれー？ 威勢よく飛び出していったのに、一方的にやられちゃったの？ とつても無様だね、いっくん。うん、とても情けなくていっくんらしいよ』

何度目かわからない射精の後、息を荒らげる一夏の眼前にはディスプレイが表示されていた。そこには東の姿が映し出されている。いっくも通りの笑顔に、少しだけ別の感情が混ざっているように見えた。『あーあ、結局こんな残念な結果なんだね。ガツカリだなあ。Lv.100チンポだっけ？ 大それた名前だから、もう少し東さんの予想を超える面白い展開になると思ったのに。この程度かあ。神様って、案外大したことないんだね。それとも、宿主のいっくんがクソ雑魚だからいけないのかな？』

愉しげに言う東。何も言い返せない。

シールドエネルギーはもう殆ど残っていない。一夏の周りを取り囲む少女たちの一撃でも受ければ白式は形だけの鎧と化し、一夏は無力な人間に戻ってしまう。そうなれば、ISによる近接攻撃でも実体に致命傷を受けてしまう。

ここまで追い詰められては、もう敗北を認めるしかなかった。

『でも、少しでも面白かったから、その金髪たちは殺処分しないで置いてあげる。その代わり、一生IS実験用の生体ユニットにするけど、いいよね？ まあ、負け犬には反論する権利はないから、素直に受け止めてね？ いっくんが弱すぎたせいで、大切な仲間を守れませんでしたって。ふっ、ふふっ、あはははっ！』

腹を抱え、文字通り校舎の屋上で笑い転げる東。

今日会うまでは、東のことを変わった人だとは思いつつも、敵だと認識したことはなかった。しかし、今はもう違う。一夏は心の中で煮えるような激しい怒りを抱えていた。

ISでは確かに敗北した。だが、Lv.100チンポが東に負けたわけではない。まだチンポは勃起している。性欲も満ち溢れ、一人の女を墮とすには十分だった。

それが世界最高の頭脳だろうと、最強の武力を持つ女だろうと、例

外ではない。

『腹が立った。神を侮った罰を受けてもらおう』

少女の声が聞こえた気がした。

一夏の意識が遠ざかる。夢の中にいるかのような感覚だ。

だが、これは夢ではない。

一夏の体が勝手に動き出す。向かう先はIS学園の屋上だ。

一夏の目的を察知したのか、ジャバウオックたちが一斉に襲いかかるが、振るわれた拳は一夏に当たる前にピタリと止まった。まるで、一夏を傷つけることを体が拒絶しているかのように。攻撃の手を完全に止めたISたちが、一夏の脇を通り過ぎて学園へと静かに帰還を始める。少女たちへの攻めも止まり、機械のチンポは膺から取り出されていった。

一夏はこの状況に、不思議と疑問が湧かなかった。今はただこの激情に身を任せ、自身を虚仮にした生意気な兎に身の程をわからせる。そして、雄を見下したことの愚かさを、雌として生まれた体へと徹底的に刻みつける。

一夏は誰の妨げも受けず、来た道を引き返す。

そして、未だ異変に気がついていない、驕り高ぶった兎の下へと突貫した。

兎狩り

血が滾る一方で、思考は霞む。

臆気になった一夏の意識に介入する者が現れた。邪神だ。一夏の理性を保ったまま、肉体を操っている。抵抗しようと思えば容易に邪神を振り払える感じはしたが、一夏は何もせず、邪神の思惑に自分の思考を重ねた。

初めての同調を果たした二人の意思を宿す一夏の肉体が、学園へと迫る。自身に牙を向いていた白式は道中で制御下に置かれ、精液を搾り尽くそうとしていたオナホールが肉棒から離れた。ISスーツが展開されて一夏の裸身を包み込む。

白式が普段の姿をある程度取り戻した頃には、一夏は学園の上空にまで戻っていた。

「んん?」

一頻り笑い終えた束が変化を認識したようだ。転げまわっていた体を勢いよく起こし、自身の顔の前に展開されたディスプレイを眺め、首を傾げている。と、上からの視線に気がついて、束が一夏を仰ぎ見た。

「やつほー、いっくん。お射精気持ちよかった?」

変わらない笑顔で尋ねてくる束。その手は慌ただしくコンソールを操作していた。

一夏は何も答えず、屋上の端で静かに佇む箒を一瞥した。箒も箒で動じた様子もなく、穏やかに事の成り行きを見守っている。一夏や束が互いに何をしようと、一切手出しをしないという姿勢を貫くつもりらしい。

何を考えているのか不気味ではあるが、好都合だった。

表向きの態度とは正反対に、束の両手は何かの対処に追われている。自分の支配下にあったはずのジャバウオックならびに白式を再び従えようとしているのだろうが、軽やかな指遣いによる効果はいっまで経っても現れない。

一夏は屋上に降り立つと、束に詰め寄った。

あと少し、段々と表情に焦りが伺えるようになった束へ手を伸ばすと、その手は回避された。一旦制御権を奪いとるのを諦めたようで、ディスプレイとコンソールをしまった束が後退する。屋上の柵をも軽く乗り越え、当然のように空へと浮上する。

「私のISに、何したの？ いっくん」

感情を殺し、普段よりも低音を利かせた声。

束の背中に、ISと思われる装甲が展開された。装甲の色は黒。ジャバウオックよりも深く、夜の闇色に同化して見えるそれは、悪魔を連想される形状の翼となつて束の背後に大きく展開された。

明確な敵対行為。一夏が無言のまましていると、束の表情が一変した。

笑顔には違いない。が、そこに宿る冷たさは相手を竦ませるほどだ。微笑みを象る目の内で瞳は感情を消し、異質なものを品定めするように一夏の姿を映す。

「まあいっか。答えないんだったら、いっくんの小さい脳に直接聞いてみることにするよ」

徐々に大きく広がった禍々しい悪魔の翼は、もはや翼とは呼べなかった。鳶が空を這いまわるように翼の先端が伸び、象つたのは生命の樹。その中心を背にして立つ束からは一切の油断もなく、束と同じ空中に駒を進めた一夏を見据えた。

「行け」

束の指示に従い、無数の樹の先端が急速に伸びてきた。一夏を拘束しようという腹積もりか、一夏を囲むように襲い来る。

普通ならば、全方位から迫る攻撃を目にして回避行動を取るべきなのだろうが、邪神に肉体操作の一部を委ねている一夏には余裕があった。敵にすると最悪だが、味方であればこれ以上に心強い者はいない。

きっと、ただの拘束以上の効果がある攻撃だったのだろう。ISの産みの親である束の手にかかれば、捕らえた獲物を守るISを除去することも容易そうだ。

だが、当たらなければ意味はない。

一夏は泰然自若とし、指一つ触れることなく東の攻撃を消し去った。

「は……う？」

塵も残さない崩壊が樹の先端から始まり、根元まで瞬時に伝わった。何をしたのか理解できないように、珍しく戸惑いを見せた東。歯を食い縛って徐々に怒りを滲ませ、攻め手を探るようあらゆる攻撃が繰り出された。

「死ね！ この化け物！」

強烈な音波攻撃も。

「死ね、死ね、死ね！」

マイクロ波による攻撃も、意に介さない。

「何で……？」

一夏以外の存在、たとえそれが世界最強と名高い千冬であっても、ただでは済まないはずの猛攻が一夏を呑みこむ。直後に全身が粉々になっておかしくはない過剰な破壊の只中に置かれても、一夏に傷一つない。東の中でさすがに怒りよりも困惑が勝ったようだ。

東は一夏をその場に留めることもできなかつた。

そろそろ反撃に出ようかと一夏が考えると、邪神の支援得た体が、東に詰め寄った。

「たつた一歩進んだ先は、東のすぐ目の前だつた。」

「っ！？ がっ！？」

驚いて声を上げようとする東の腹に右拳を食い込ませ、一夏は宙を飛びまわった。

腹パン強制曲技飛行。最新鋭の戦闘機が玩具のように速く感じる世界で、人間離れた軌道を描き、夜空の風をぶち抜く。普通の人間はとつくに壊れてもおかしくはないが、ISに保護された東の体は頑丈だ。それでも全ての衝撃を消すことはできない。

苦しみもがく東の腹に拳を突き立てたまま、一夏は最後に八の字を描いて空を泳ぐと、学園へと直進した。校舎が全壊しないようにと速度を十分に殺したが、東の着地による衝撃は屋上の一部を破損させ、叩きつけられた本人にもダメージを与えた。

声もなく、悶絶する束。しかし、一夏の拳は束の腹に当てられたままで、ろくに身動きが取れていない。針で留められた標本の虫のように暴れ、拳をどうにか引き離そうとしてくるものの、一夏がぐりぐりと刺激を与えるだけで悲鳴を上げた。

「あ、や、い、いっくん、痛い、やだ、やめて……」

痛みに喘ぐ天才。見下していた相手に縋りつく様を眺め、一夏は少しばかり溜飲を下げる。だが、満足したわけではない。今やり返したのは邪神が受けた屈辱の分だ。まだ一夏が馬鹿にされた分の仕返しは済んでいない。

一夏がIS武装を解除し、束の両足を開いてその間に膝を突くと、束が息を呑んだ。

「なに、するつもり……?」

一夏は沈黙を貫き、束の頬に手を伸ばした。ここからは暴力ではなく快楽を。そう思って優しく頬を撫でたのだが、束は恐怖に震えた。未知の力を宿した一夏を恐れ、その一挙手一投足に震え上がる。奔放で傲慢で、程度の低い人間を動物未満だと思っていそうな彼女が見せる恐怖は甘美で、つい一夏も苛めたくなくなってしまった。

一夏は覆い被さって束に顔を近づけると、初手から舌をねじ入れた。

「んんっ……!? あ、ちゅっ、ぐちゅっ、ぬちゅっ、ぐちい、んぷっ!」

舌を口内に押し込み、じたばたと暴れさせ、困惑する束の舌に絡みつく。溜めた唾液を全て束の中に流し入れ、それを隅々まで広げる作業に入る。一夏の気分を損なわない程度に抵抗していた束だったが、一夏による長く密度の濃い接吻によつて大人しくなっていく。

「はあ、はあ、あ、ん……」

執拗に舐め回された束の舌には一夏の唾液が絡みついていた。口内にも唾液が目いっぱい溜まっている。一夏は追加の唾液を束の口に向かって垂らした後、束の口元を掴み、無理矢理顎を閉じさせた。

「飲め」

薄い冷笑を湛え、一夏が命令する。逆らえばどうなるか。一夏が訴えるように見つめていると、束は瞳を震わせながらごくりと喉を鳴ら

した。一夏の唾液がどろりと喉を通過し、束の中に取り込まれていく。

数度の嚙下の後、一夏は束の口を開かせて中を確認した。

「ん、あ……」

唾液はなくなっていた。間違いなく、一夏の成分が束の中に吸収された。

Lv. 100 チンポの影響で、一夏の肉体自体に変化が生じており、唾液も変質していた。唾液を取り込んだ女を強制的に発情させる媚薬の性質を持っている。精液ほどではないが、女を狂わせるには十分な効果を発揮する。

それと、既に取得していたLv. 100 チンポの特性であるフェロモンを自分の意思で体から垂れ流すと、内外から束を蝕み始めた。ものの数秒で、束に変化が現れた。頬は赤く紅潮し、瞳は潤む。しかし、その変化を自覚した束には恐怖でしかないようで、これから何をされるのかと怯えている。

化け物を見るような眼差しだった。それを束というこの世界のイレギュラー的存在に向けられることになるとは思わず、一夏は内心で苦笑した。これだけでも反撃した甲斐は十分にあったのだが、激情を委ねた邪神はそれでは許してくれなかった。

『犯せ』

邪神の声が頭に響くと、一夏は束の胸に手を伸ばした。不思議の国のアリスの服装をモチーフにしておきながら胸の谷間を覗かせたふざけた服を力づくで破く。ブラジャーはなく、破れた衣服からは大質量の乳袋がこぼれ出た。

箒といい束といい、篠ノ之の遺伝子を持った女は皆、いい体をしている。確か、箒の母親も非常に男好きのする肉体をしていた記憶があった。きつと、この一族は男に抱かれるために生まれてきたに違いない。

であれば、抱いてやらないと勿体ない。

「っ……」

一夏は束の胸を掴み、引つ張るように揉む。指が埋もれるほどに乳

肉が柔らかく、弾力もいい。手の平に心地いい体温が伝わってきて、揉めば揉むほど嵌ってしまう。自分の手の動きで形を歪める様は圧巻で、箒の巨乳と同時に味わえば素晴らしい景色が見られる。

そう言えば、と一夏は箒を振り返った。

箒は一夏たちを見守るだけで、やはり何もしてこない。束が過剰な攻撃を一夏に浴びせたときですら一夏の無事を確信していたようで、ここに至るまでの過程の何もかもが見透かされているように思えた。

まさか、そんなわけがあるわけもないか。

とりあえず今は、仲間や一夏を玩具のように扱ったこの生意気な兎に制裁を加えよう。

一夏は先ほど展開したばかりのISスーツを収納し、元の全裸へと装いを改める。押さえつけられていた肉棒が頭を持ち上げ、束の股間の傍で震えた。それは束の目にしっかりと映っているようで、自分が虚仮にした一物を見て呆けていた。

「おい」

年上に対する敬意はもはやなく、一夏は強い言葉を浴びせる。しかし、呼吸を乱し始めて茫然とした束は返事をしなかった。夢見心地の気分なのか、蕩けた表情で目線だけを一夏に送っている。

繋がれば目を覚めますか。

束が無抵抗なのをいいことに、一夏は束のスカートを捲り上げた。男に触れられたことのないだろう柔らかくすべすべとした太腿を撫で回し、手を肌に残せる。スカートの奥に隠れていた黒い下着に行き着くと、下着の上から陰部に指を当てた。

軽く擦るように指を数往復させただけで、下着は湿り気を帯びていた。束の自慰の経験回数など知る由もないが、仮に自慰の経験が少なくとも、一夏の唾液とフェロモンによって体は雌に変わってしまう。男の一物を目にし、男に触れられ、即座に愛液を垂れ流すような体へと調教が進んでいるようだ。

下着をずらし、いよいよ中身とご対面。

白く緩やかな膨らみの間に縦筋があり、指で開けば踏み荒らされた形跡のない陰部が綺麗な粘膜を晒す。この不遜な兎が男と肉体関係

を築くことなどあり得ないとは思っていたが、果たして処女であったようだ。

篠ノ之の遺伝子が勿体ない。しかし、体を綺麗に保ってくれて良かったとも思う。

俺が味わい尽くしてやる。

一夏は腰を前に出し、陰部に竿を擦りつけた。生殖器同士がまず熱を伝え合う。束もしっかりと感じただろう。さつきよりはマシではあるが、まだ強制発情に伴う発熱によって意識が曖昧な状態に陥っているようだ。

一夏は腰を何度か前後に振って、自分と束の性器に挿入の準備をさせる。肉棒が我慢汁を垂らす中、膣は愛液を急速に生産していく。愛撫は必要ない。あとは繋がるだけで新たな雌を食らう快感が待っている。

腰を引き、亀頭を膣穴に宛がう。早く入れて、とねだるように膣穴からは愛液の流出が止まらない。膣口に亀頭のディープキスをお見舞いするだけで水音が賑やかに響き、一夏の耳を楽しませてくれた。中に入れば、もっと楽しめる。

一夏は軽く前傾姿勢になって束の腰を両手で掴み、下半身を前に動かした。

強く抵抗する狭い穴。一夏の肉棒が太すぎるのもあるが、随分と身持ちの固い女性器だ。貞淑だった筈を思わせる穴を従えようと、一夏は力を込める。それによって穴に亀頭が埋没し、その姿を隠している。

少しずつ、少しずつ。愛液によって潤滑になりつつあるが、やはり初物は硬い。

「あ、あ、い、いっくんが、んっ……」

苦しそうに声を上げる束を見て、一夏は思った。これはお仕置きであって、愛するセックスとは違う。何を相手のことを考えて悠長に犯そうとしているのか。一夏の中にいる邪神が吐いたため息が、一夏の口からも漏れる。

『ぶち犯せ』

再びの邪神の命令。

一夏は制限を掛けていた力を解放すると、一夏の肉棒が放てる最強の突きを放った。

「い——!?!」

たったの一瞬で膣の入口から子宮までの道を、肉棒が開拓した。ズンツ、と亀頭が子宮口に食い込み、衝撃を伴った。それを内側に受けた束はあまりの勢いに全身を仰け反らせ、意識を失って膝をガクガクと震わせていた。

味わうことなく、破られた処女膜から血が垂れて、外へと漏れる。痛々しいが、それでも容赦は必要ない。

この女に身の程を弁えさせる。本当の雌の在り方を、身を以て体験させるのだ。

一夏は束の腰から胸へと手を移動し、柔らかい二つの膨らみを支えにして、腰を振った。

「あ、や、んっ、あ、こ、壊れちゃ、だ、駄目……!」

乱暴な突きで奥まで開拓された膣穴はまだ調教が進んでいない。一夏の自分勝手な腰振りによって膣壁を引っ掻き回され、亀頭で子宮をボコボコに殴られ、束は一夏に手加減してもらおうと首を横に振った。

一夏は聞く耳を持たなかった。大浴場で女子をレイプしたときよりも苛烈で、猥染みた欲望に支配された顔を見せていた。緩んだ口から涎を垂らし、束の胸を玩具のように揉み潰し、時折胸に顔を埋めて乳房に歯を立てる。

束には酷い目に遭わされた。当然、そんな束に与える慈悲などない。

「お、あ、あ、あ、し、ぬ、死んじゃ、うっ……!?!」

束の胸を手垢で汚し終え、次に一夏の両手が移動したのは束の首だった。細い首を両手でガツチリと掴み、押し掛かりながら抽送を繰り返す。首を絞めるといい感じに膣穴もきゅっと締まるものだから、一夏のいい玩具になっていた。

「か、は、あ、ほ、ほんと、に、し……!」

ギリギリ殺さないように手を抜き、しかし、苦しみは与える。膣内から一夏の肉棒の形が薄っすらと伺えるくらいに無理矢理なチンポ突きを飽きることなく何度も浴びせ、天才科学者の束の命を弄びながら行う遊びは面白かった。

一夏は嗤う。それは邪神の笑顔か、それとも一夏自身のものか。

深くシンクロしている状態のため、区別はつかないが、それを見せられている束には関係ない。目の前にいるのは一夏だ。自分を犯し、殺しかけているのは年下の少年で、雄と雌の優劣が束の脳に叩き込まれる。

「ごめん、な、さ——」

言いながらその言葉は途絶えた。束の意識が再び遠のいたようだ。しかし、膣肉は肉棒に強く絡みついてくる。膣圧を受け、奥まではめ込まれた肉棒の動きが固定される。もういいかと一夏は無理に動かすのをやめて、束と限界まで繋がったまま、体を前に倒して束の口を味わい尽くす。

意識を失いつつある束の舌に舌を絡ませ、一夏は肉棒を膨らませ、精を撒き散らした。

どびゆるるっ、びゆるるっ、びゅーっ、びゅーっ、どぶっ、どぶっ、どぶっ。

尿道口から排出された精液が束の子宮に侵入する。注がれば高確率で子を孕む、一夏の粘ついた子作りザーメンが子宮を支配するまで十秒も必要としなかった。中にへばりつき、精子の軍勢が暴れまわっている。

射精の気持ちよさでブルリと体を震わせ、一夏は息を吐いた。その息は絶賛ティープキス中の束の口内に入り込む。束はされるがままだ。口の中に唾液を塗りたくられ、子宮に一夏の子供たちを詰め込まれていた。

腹の立つ女とはいえ、大人しくなれば魅力的な女だ。一夏は束に抱き着いたまま、何度も腰を振った。束が目を覚ましても、また気絶しても気にしなかった。一夏はただ新しく手に入れた母体に織斑の血を提供するだけだ。

仕留めた獲物を満足するまで食い漁る野犬のように、一夏は口と腰を延々と動かして好きなきに射精を迎えた。目を覚ますたびに、自分を犯す圧倒的な強者である雄を見て、束は何と思っただろう。諦めたような。それでいて、快楽を覚えたての女が見せる微かな微笑みを浮かべていた。

希望の光

十三回。それは、一夏によって行われた束への種付けの回数だ。

その間、一夏は束の母性たっぷりの胸に顔を埋め、深呼吸をしながら涎を垂らして笑っていた。犯した女のいい匂いを嗅ぎ、股間を膨らませて絶えない腰振りを敢行。束が他の女に比べれば手強かっただけに、一方的なマーキング行為は得も言われぬ快感を一夏に与えた。

しかし、さすがにそろそろ終わりにしよう。

「お……」

最後まで搾り取ることを止めない膣穴の狭さに呻きつつ、一夏は自分専用となった肉穴からチンポを取り出した。尻を持ち上げ、性器同士が結合が解かれる。直後、栓が抜けて白濁液がごぼりと逆流してきた。

一夏の子供が詰め込まれた特製孕ませ汁。その一部だ。

注がれた大部分は、未だに膣内に残留している。精液同士が癒着し合い、協力し合って束の内側に留まっている。子宮では特に濃い白濁液が今もお蠢いていた。

既に、先行していた精子の一匹が卵子に食いついているというのに。

束の中で子を成す神聖な儀式が始まっていた。

一夏は体を起こし、立ち上がって束を見下ろした。

声はない。しかし、息はある。一夏の唾液で汚された束の胸は呼吸で上下に揺れ動いている。わずかな身じろぎによって膣穴から余分な精液がどろりと溢れ出る。一夏によって犯され、これ以上ない幸せを表情に浮かべる兎を見て、一夏は笑った。

「く、くく、はは、あはははっ……い」

腹を抱え、嘲笑の声を夜の空に響かせる。

それを聞く者は、放心状態の束を除けばたった二人だけだった。

動じず、一夏と束のやり取りを見守っていた筈。

「見届けに来たぞ、一夏」

それと、ちようどよく校舎内から屋上へと現れた千冬。

どちらも一夏の敵だ。

一頻り笑うと、一夏は二人へ交互に視線を送った。

『犯せ』

邪神の声が頭の中に広がる。それに従って、次はどちらを犯そうか悩む。

結論はすぐに出た。まだ孕ませていないほう、箒をまずは犯すべきだ。千冬には、精液で汚れた肉棒を舐めて綺麗にする役割を与えよう。

そうと決まれば、早速一夏は行動に出た。箒へと歩み寄る。可愛く着飾った若く美しい黒髪美少女。どこを見ても美味しそうで、目に映すだけで股間に活力が漲る。これまでの交わりでは運悪く妊娠しなかったようだが、今回は許さない。

「孕ませて、やる……！」

美人姉妹を揃って同じ日に受精させる。それはとても愉快なことだ。

これで全てが終わり、始まる。箒を孕ませ、完全に自分の物とした上で、学園にいる残りの女たちも次々に孕ませる。その後は学園の外だ。見目麗しい女たちを掻き集め、より厳選されたハーレムを構築。女が人妻であっても構わない。一夏の欲を満たす母体としての役割を果たせる者であれば、世界を敵に回してもそれを手に入れ、墮とす。

『犯せ』

呪詛のように紡がれる邪神の声。

動かす足に力が入り、伸ばした手があと少しで箒の柔らかい胸に届くかというところで。

「え……？」

一夏は支える足に力を失い、膝を突いた。あと少しで一夏に胸を鷲掴みにされるのを期待していた箒も、これには驚きを見せた。何もかもが計画通り。そんな雰囲気は払拭され、不安を覚えたのか一夏に駆け寄ってきた。

「一夏、どうしたんだ？ 『進化』にはまだ早いはずだが」

箒が気になることを言っている。進化とは、なんのことだ。

一夏の知らない情報を握っていたらしい箒。だが、今はその内容に気を巡らせているほどの余裕はない。体の中で何かが暴れているようなのだ。不快な感じはしない。逆に、邪神によって妨げられていた正常な思考が戻ってくるようで。

意識が唐突に、クリアになった。

「う、あ……」

正気を取り戻して今しがたの出来事を思い返してしまい、一夏は束を犯したという事実打ちのめされる。確かに仲間を玩具扱いされて憤りはしたが、犯す必要はなかったというのに。それも含めて邪神に良い様に操られてしまったのだと正しく理解し、後悔が募る。

『織斑一夏君。ごめんね、待たせてしまつて』

また頭の中で声がした。

邪神よりも人間らしい感情を宿し、一夏の身を案ずる唯一の味方。女神だ。

『私の封印はもうすぐで解ける。そうなれば、君もこの地獄から抜け出せるよ』

『本、当に……？』

「一夏……？」

膝を突いて動かなくなった一夏を、箒は不安そうに呼び掛けた。

「どうかしたか……？」

と、そこへ千冬が歩み寄る。自身の大きくなった腹に手を当てながら、腹に宿る子の父親である一夏を見つめる。一夏はガクリと項垂れたままだが、意識は現実にある。今は、もしかすると訪れるかもしれない希望を確かめようと、女神と心の中で交信していた。

『ああ、本当だ』

『やつと、やつと……！』

搾り出すように想いを吐露し、一夏は歓喜に沸く。これで全てが元に戻る。箒を殺すなどという最悪な展開にもならず、全員が救われる。一夏が夢見て、けれども絶望的に思えたハッピーエンドがもうすぐ目の前まで来ているのだ。

短いようで、長かった。こんな苦しみから早く脱したい。

『でもね、まだ君にはやってもらいたいことが一つだけあるんだ』

『お、俺にできることがあるば……！　だから、早く、早く俺たちを助けてください！』

女神の言葉に一夏は即応した。どうにかしてくれるのであれば、一つくらいどうということはない。必ず達成してみせる。

『わかったよ。君たちは絶対に私が助ける。だから、君には彼女を――』

女神によつて、一夏に与えられた最後の使命。それは、一夏を戸惑わせるものであった。そんな、と多少の拒絶を覚えるが、しかしそれをしなくてはならないのだという。女神だけでなく、一夏の協力を得られなければ、現状を打破することはできない。

もう、これで最後だ。

一夏は自分に言い聞かせ、奮起した。

『頼んだよ。私は私で、邪神と決着をつけに行くから』

遠ざかっていく何かの気配。少し不安を覚えるが、大丈夫だ。

何せ、これから行うべきこととは、これまで一夏が散々やってきたことなのだから。

「箒……」

女神との会話を終え、一夏は再び両足で立った。俯いていた顔を上げ、箒を真つ直ぐ見据える。力強く開かれた目には、強い意志を湛えた瞳があった。全てを覚悟した漢の目。それは箒というまだ若い少女を圧倒し、後退りさせるには十分だった。

「な、なんだ……」

一夏に襲われたことをきっかけに、身に余る力を与えられた箒と千冬。

二人を襲わなければ、こんな大惨事にはならなかったが、過去は変えられない。しかし、これからは変えられる。もう二人には力を使つてほしくない。その力があるべき場所へと戻し、元あった場所に帰すのだ。

二人に力を与えたときと同じように、二人を犯すことで、力を返してもらおう。

「返してもらおうぞ」

一夏が箒に向かって手を伸ばす。

箒は何をされるのか理解したのだろうか。不敵に笑っていた顔に動揺を滲ませ、瞬時に距離を取る。何を考えているかはわからないものの、今の一夏には絶対に捕まってはいけないと危機感を抱いたようだ。

「織斑先——」

箒は、この学園で誰よりも頼りになる存在へと助けを求めようと、声を上げた。

だが、それは、とある存在によって防がれる。

「あっ……!?!」

「大人しくしている、箒」

今箒が呼び掛けた頼りになる味方、千冬その人だった。妊婦とは思えない速度で先回りし、箒の腕を引きながら目にも留まらぬ足払いを繰り返す。そのまま綺麗に倒れた箒の腕を軽く捻り、上半身に乘るように片膝を置いた。

箒の表情が動揺から驚愕へと変わる中、それを見ていた一夏も驚きに目を見開く。

「千冬姉、もしかして——」

全部、演技だったのか？

「一夏。お前が今からすることで、全員が救われるんだな？」

千冬は一夏の疑問を遮って、端的に述べる。暴れる箒を力づくで拘束し、一夏へと眼差しを向ける。その目は至って冷静で、操られているわけでも、一夏に魅了されているわけでもない。誰にも負けない、世界最強の女にして、頭の上がない最強の姉がそこにいた。

「やれ、一夏！ 私の立会いの下で、お前自身の手で決着をつけてみせろ！」

放たれた声。それに胸を打たれ、一夏は箒の下に詰め寄って、足を掴んだ。

「私としたことが、こんな！ くっ……!?!」

箒は暴れている。その抵抗に一夏は臆してしまうが、余計な感情を

即座に捨てる。姉と弟が協力して一人の少女を犯そうというのだ。構図としてはおかしいことこの上ないが、これは現実だ。

箒を犯し、力を奪う。

どうやって奪うのかはわからない。

だが、女神を信じるしかない。

一夏は箒の太股を片手で掴み、股を開かせる。もう片方の手で下着に触れる。白いショーツを手慣れた動作で横にずらし、本当ならばまじまじと見ていたい綺麗な陰裂にすぐさま指を引っ掛け、花園を開かせる。

こんな状況だというのに、透明な体液を垂らして濡れそぼった穴。純粹なピンク色に染まる陰部は物欲しそうにヒクヒクと反応を示している。

狭く、暗い膣穴の奥。ここを今から満たすのだ

この先にきつと、女神がもたらす光明がある。

一夏は千冬が見ている前で、L.V. 100チンポという凶悪すぎる諸刃の剣を箒の肉鞘に収めていった。

絶望の光

傘を広げるように大きくエラの張った亀頭が、箒の膣穴に埋まる。ぬちゅつ、と愛液と我慢汁が触れ合う音を立て、徐々に亀頭の先が隠れていく。こうして繋がるのは初めてではないというのに、箒の穴は非常に狭く、肉棒に密着してきた。

「う、ん……」

暴れていた箒も、千冬に制されている状況では逃げるのは無理だと思っただよう。不安げな感情は残しつつも、一夏を受け入れる。どんな思惑があろうと、一夏がセックスを楽しむという行為を邪魔するほど箒は身勝手ではないのだろう。

これ幸いと、一夏は熱い蜜壺の中に自身の分身を押し込ませる。膣肉が絡みつき、熱々に温めてくれる。芯まで蕩けそうな心地よさはまさに名器と呼べる代物だ。久しぶりに箒の中に帰ってきたという安心感が胸に広がる。

亀頭が埋まり、竿も姿を隠していく。穴に挿入された肉棒は順調に侵略を済ませ、子宮口に亀頭を食い込ませた。根元まで挿入を果たせば、その食い込みはさらに強くなり、力強い突き上げによって箒は震え上がった。

「う、あ、ああ……！」

箒は興奮を隠すことなく、体をビクつかせて感激した様子だった。箒は、これまで我慢していたのだろう。一夏に獲物を提供し、多くの女に一夏の素晴らしさを知ってもらおうとしていたがために、自分とのセックスの頻度を下げることになった。一番に一夏に犯されたからこそ、我慢という名の毒は箒を蝕んでいたに違いない。

だが、我慢したからこそ、再び繋がったときの喜びは大きい。

「い、一夏あ……！」

一夏に何らかの思惑があるのをわかっているはずなのだが、箒は完全に抵抗を止め、むしろ一夏の両腕に触れる。さすがに一夏も驚き、一瞬躊躇するが、腰を沈めて箒との距離を狭めた。両者の行動を見守っていた千冬がこれ以上の拘束は不要と判断し、箒から離れると、

一夏と箒は急接近した。

ここはベッドではなく校舎の屋上だが、二人には関係ない。体を重ね、互いの吐息が頬に当たる距離で見つめ合う。こんな状況でもなければ、ただ時と場所を弁えずに愛し合うカップルに見えただろう。

「一夏、一夏のチンポ……。私を犯すために、こんなにもガチガチに硬くして……」

理性の光を失い、黒々と深い闇が漂う箒の瞳。一夏だけを視界に留め、両手と両足で一夏の体に巻き付けて抱擁する。より深く一夏が入ってもらおうよう、自分の踵を一夏の腰に押しつけた。

「う、く……い！」

膣圧が強くなる。肉棒が取り込まれ、隅々まで気持ちいい。熱く蕩けた穴に浸かっているだけで頭がどうにかなってしまうそうだ。その上、箒という非常に質のいい雌の嬉しそうな顔を見ると、せつかく取り戻した理性がごっそりと奪われそうになる。

一夏は深く呼吸をし、理性を総動員して正気を保つと、腰を引き始めた。

「あああつ……い！」

膣壁にエラが引っ掛かり、引き抜くだけで箒に強い快樂をもたらした。それによって膣がぎゅっと引き締まり、一夏にも皺寄せが及ぶ。たった今束ねた理性の一部がまたしても発散されてしまい、快樂に身を委ねたくなる。

このセックスをどうにか凌げば、全てが解決するはず。あと少しだけ、持ち堪えてくれ。

一夏は自身を鼓舞し、腰を前後に動かす。

ゆっくり、膣内を味わうように肉棒を出し入れする。激しいプレスをお見舞いしたいという欲望に駆られたが、どうにか暴発はせず、一夏は比較的冷静なセックスを展開していく。相変わらず、眼前の箒が熱い息を吐きつけてくるが、それにも惑わされない。

肉棒の往復回数が二桁に昇り、今のところは順調だ。

だが、何故だろうか。一夏は何か不安を覚えていた。この不安の原因はわからない。ただの勘に過ぎない。

勘違いであってほしい。もう箒とセックスを始めてしまった。信じられるのは女神だけであり、それに従って動いている。自分にはもうこうする他はないのだと決心を強め、一夏は少しだけ腰の速度を上げた。

「はあつ、あつ、一夏つ、あつ、あんつ、んつ……!」

「箒……。ごめん……。これで、最後だから……」

「何を言う……。んんっ……。まだまだ、これからだ……。一夏には世界を知ってもらわないといけない……。ああつ……。学園の女以外にも、この世界にはまだまだ一夏の欲望を駆り立てる女が星の数ほどいるのだから、ん、くうっ……!」

世界征服。まるで子供の夢物語だが、箒の力をもってすれば十分に現実味を帯びている。何せ、対象に触れずともその思考を操ることができるのだ。どの程度の有効範囲なのかはわからないが、遠隔で人々を操る力は脅威だ。

そんな危ない能力を、一夏は箒に与えてしまった。

Lv. 100チンポの欲望に負けて箒を犯し、チンポの特性の一つである『譲渡』によって箒に『精神掌握』の力が渡された。そして、未だに詳細が不明なもう一つの能力も、十中八九千冬に贈られたはずだ。

そこで、一夏は今さらな疑問を抱いた。

一夏は腰を振りながら、箒の胸の谷間に顔を挟んで考える。

何故だ？ 邪神から受けた説明では確か、『譲渡』という特性は欲望や力を他者へ渡す力だと言っていた。欲望を譲渡するのはわかる。しかしLv. 100チンポは強大な力を有している関係で、他の能力と一緒に所有することは考慮に入れていないはず。だというのに、力を譲渡するという特性があることが不思議に思えた。

それに、だ。Lv. 100チンポの所有者となつた一夏の知らないうちに、自身の力が他者に送り込まれるなど、あまりにも妙だ。与えたいと思わなくても譲渡されてしまうというのでは、特性とは呼べないだろう。

何か見落としている気がする。

考える、考える。一夏は思考を巡らせる。

箒の胸をクッションにして甘え、ガツガツと腰を振る。ミツチリと締めつけてくる膣肉の抱擁を振り解き、一気に腰を沈めて子宮を叩く。その興奮に中てられて少し暴走してしまっていた自分の挙動を今一度制御しつつ、考えるのを止めない。

この騒動の元凶である名も知らぬ男。男は転生を行う前に、邪神によって転生特典を与えられた。転生特典の上限は最大三つで、Lv.100チンポ単一でも三つ分に相当する。その上で、『精神掌握』ともう一つの特典を欲張って所有しようとしただけでなく、男は一夏の体をも略奪しようと考えた。

どうして、一夏の体を奪おうと考えたのだろうか。それだけの転生特典があれば、わざわざ一夏の立場を奪わなくとも、世界を支配することはできたはずだ。むしろ、一夏に成り代わる利点が、一夏にはわからない。

ISを使えるという点を除けば、一夏は自分のことを普通の高校生だと思っている。男はISに乗りたかったのか？ たとえ世界征服ができたとしても、その肉体に適性がなければISを駆ることができないから、だから一夏を選んだのか？

考えはわかるが、それだけで乗っ取ろうとするのか、一夏に納得がいかなかった。

「一夏、何を考えて——んうっ!？」

一夏は胸から顔を上げ、箒の唇に自身の唇を重ねた。できるだけ隙間を作らないようにして塞ぎ、口内に舌を伸ばす。箒の舌に絡ませ、擦り合わせる気持ちよさを感じながら尻を振った。

また暴走している。どうにかしないと。

一夏は思い、力を抜いて一旦落ち着こうと思った。

思うだけで、体の言うことが利かないと、一夏は直後に思い知ることになった。

まずい。また、暴走が始まったようだ。思考を中断し、一夏は全力で理性を掻き集めようとしたのだが、まるで上手くいかない。興奮が留まることを知らず、目まぐるしい速さで箒の中に肉棒を抜き差しし

てしまう。

「ぐちゅっ、ぢゆるっ、ぶぢゆるるっ、ぐちいつ、ぬちゅっ、ぢゅぶっ！」

水音を響かせて激しい接吻を箒に浴びせる。最初、箒は驚きを見せていたが、徐々に適応して一夏を受け入れていた。傍観者であった千冬は何かがおかしいと感じたのだろう。「一夏？」と声を掛けるが、今の一夏に言葉を返す余裕がない。

今まで感じたことがないくらい、体が熱い。だというのに、辛いとは感じない。

脳を汚染しようとする興奮も、どこからか汲み取ってきたのではと思えるほどに増幅している。理性は残っているが、箒という美少女を食い漁れる幸福に感謝し、その若い肉を隅々まで味わうことに必死だった。

「ぶ、はあ……」

口を離し、箒とのキスの余韻を味わい、口元が緩む。口内に溜まった唾液の一部をぐくりと呑み、余った唾液の塊を箒の口内にどろりと落とす。箒はそれを舌で受け取ると、喉の奥に滑らせた。

自分に忠実な雌。可愛く、美しい。こんな幼馴染を持って幸運だったと感じ、口の端をニイツと上げて肉棒を膨張させる。もう引き抜くのも容易ではない。これまでの勃起とは違い、肉棒の形がほんの少し変わっていたからだ。

禍々しさは一緒だが、エラはより高く、竿は肉の厚みを増している。これまた少しだけ大きくなった金玉には良からぬ邪悪な雰囲気が漂っている。ドクンツ、ドクンツと鼓動に似た音を響かせ、何かの準備を始めていた。

その直後のことだった。

一夏と箒を背にする立ち位置に、一人の少女が忽然と姿を現した。十代前半に見える外見年齢。黒く長い髪と、対照的な白いワンピース。人形のように精巧な面立ちをしているが、その顔には凄絶とした狂喜が浮かんでいた。

少女の瞳は妖しい紫色に染まっていた。

それは、一夏が邪神と呼ぶ少女に相違なかった。

一夏はそれに気づいていなかった。暴れる体の内側でどうにか抵抗を試みるのに精一杯だった。箒も箒で一夏以外を認識していないようだ。乳房にしゃぶりついた一夏の頭を撫でて、慈愛に満ちた表情を浮かべている。

邪神の出現に動揺していた千冬は、一瞬遅れた後、一夏を見た。

「一夏！ 今すぐそこから離れろ！」

放たれた警告。それは一夏の耳にしっかりと届いていた。

だが、脳にまでは届いていなかった。

『聞こえるかな？ 織斑一夏君』

一夏の脳内に女神の声が響き、外部の声を遮断していた。

『聞こえます！』

緊急事態に置かれている中で、女神の声は救いだった。女神の声色はなんとなく明るく、状況が決して悪くないのだと理解する。

『邪神を追い詰めたよ。もう消滅も間近だろうね』

『や、やった……！』

一夏は無邪気に声を上げる。

やっと諸悪の根源が消えてくれるのだ。もう本当に終わりだ。嘘じゃない。

『あとは君だけだ』

まだ、自分にはすべきことがある。それが終わって始めて、完全に救われるのだ。緩んでしまった気持ちを引き締め、だけど、自分にこれ以上何ができるのかと戸惑いが生まれる。

『俺は、どうすればいいんですか!？』

『落ち着いて。君はそのまま篠ノ之箒さんを犯せばいいんだ。君の体は暴走しているけど、大丈夫だよ。私の力で、彼女の中にある力を君の中に流し込む。でも、それをするには彼女の抵抗をなくす必要があるんだ。強い快樂と幸福を与えてね』

『それは……』

言われたことの意味を正確に汲み取って、一夏は言い淀む。だが、そんな一夏の心境などお構いなしに体は箒を求めている。箒の両方

の乳首を同時に口に咥え、引つ張るように顔を持ち上げている。鼻の下を伸ばして欲望を滲ませ、チンポで子宮を突き刺す。

膣肉がいい具合に蠢いて、一夏の肉欲を煽った。

今の自分を冷静に客観視すれば、品性のない猿だ。

しかし、一夏はそんな自分を、どこか羨ましいとも感じていた。

こんな風に快樂だけを感じて生きていければ、どれだけ幸せなのかと。箒が理想とする世界は間もなく終わる。だとすると、この機会を逃せばもう一夏は傍若無人な行為は働けない。

『篠ノ之箒さんを犯して？　そして、子宮に精液を流し込むんだ。それで全てが終わる』

暴走を肯定する女神の声と、チンポに強く抱擁してくる箒の穴。欲望に従うだなんて、正しくはないと思っていたが、今この瞬間は別なのだろう。

やるんだ。俺の手で。最後のレイプを。

『さあ、君の手で終わりにしてくれ』

女神に背を押され、一夏は決心した。

暴れる体に反発するのではなく、自分の意思を混ぜる。箒の乳房を右手で掴み、もう片方の乳房に舌を這わせる。まだ小さかった頃は、箒がここまで綺麗になるとは思わなかった。六年越しに箒と再会したときは、一夏は密かに興奮していた。

鈍感だの、朴念仁だのと思われがちな性格をしている一夏だが、性欲は普通にある。箒と出会って制服越しにもわかる胸をチラ見もしたし、何故か美少女ばかりの女子生徒に目が行ってしまうのも無理はない。

ただ、隠していた。女子を邪な目で見るなんて、男らしくないと思っていた。

でも、本音では違った。

あの子、胸デカいな。脱いだらさらに凄そうだ。

スカートが短すぎないか？　いや、足が長いのか。うーん、綺麗な足だ。

この学園って可愛い子ばかりだ。うわ、今なんか笑い掛けられた

ぞ。

女子の一挙手一投足で気持ちさがソワソワとする。それはどこにもいる普通の男子高校生で、一夏も思春期の少年だということだ。自分の欲望を隠すことが他人よりも上手だっただけに、一夏は今まで女に興味がないと思われていることも多かった。

そんな一夏だったが、初めて今の自分を肯定し、自らの意思で箒を犯す。

気持ちいい、気持ちよすぎる。箒の膣に肉棒を擦りつけるだけで、口内に唾液が溢れてくる。美味いものを食うところなるのは食事だけに限らないようだ。その唾液を無駄にしないように、箒の乳肉を舐めて擦り付けた。

「あんっ！ んんっ！ あ、はあっ……！ ああっ！」

箒の喘ぎ声。それが一夏を応援する。

どうして箒はこんなにエロいのだろうか。こんな少女を放っておいたら、将来大勢の男に言い寄られそうだ。箒は意外と単純だから、騙されるかもしれない。このスタイル抜群の肉体と見惚れるほどの容貌が他の男の物になるだなんて、一夏は考えるだけで嫌な気分だった。

箒は渡さない。

この戦いが無事に終わったら、告白しようと思う。それで、箒は俺の物だということをはっきりさせてやるんだ。愛情を注いで、身も心も俺専用にする。毎日毎日愛を囁いて、イチヤイチャして、骨抜きにする。俺の下から離れていかないように。

「お、あ、おっ、おっ、う、あ、あああああっ!？」

欲望も、体の動きも、もう誰にも止められない。

明らかに異常を前にして、千冬が一夏を引き剥がそうとするが、邪神が行く手を阻む。人ならざる重圧が少女の体から発せられ、千冬は身動き一つ取れないようだ。足が震え、顔にはわずかな恐怖を浮かんでいた。

しかし、その両足の震えがずっと収まる。

自然なものではなく、邪神と同じく人智を超えた力によって制御を

したように見えた。

「一夏！」

千冬が邪神の横を素通りし、一夏の服を引っ張る。

だが、一夏の力は異常で、微動だにしなかった。箒と抱き合い、腰を高速で動かす。目まぐるしく肉棒が膣中に入りし、その肉竿が興奮に膨れてイライラしていた。血管がビキリと浮かび、ドスンツと怒りの突きを子宮にお見舞いする。

もう射精のときは近かった。

「一夏、やめろ！ このままでは——」

「もう無駄だよ？ 織斑一夏君も、篠ノ之箒さんも止められない」

掛けられた声に、千冬は顔を上げた。

目に映ったのは、一夏たちを挟んだ向かい側に立つ少女だった。

背中まで届く真つ白な髪と、華奢な身を包む黒いワンピース服。人工的に作られたような整い過ぎた顔はまだ幼い。満面の笑みによって細められた目の瞳は紫色で、意思の弱い人間ならば見るだけで支配されそうな妖しい魅力を有していた。

先に現れた邪神と瓜二つの容姿をしていた。

「もうじき、織斑一夏は人として終わる。全てが計画通り」

「そして、進化するんだよ。この世界の神として。私たちの玩具兼部下としてね？」

邪神に続いて、白い少女が言葉を紡ぐ。

互いの思考が読み取れているかのよう、交互に。

「Lv. 1000チンポは、効率よく神を生み出すために私が作った道具」

「お姉ちゃんのLv. 1000チンポに適合できる人間は滅多に見つからないけど、一度適合すれば宿主を逃さない。女を犯すように誘導し、犯したときに得る快楽を蓄え、それが一定値を超えると自動的に発動するようにできている」

Lv. 1000チンポを作った邪神と、それを姉と呼ぶ白い少女。

白い少女はおそらく、一夏を助けてくれるはずの女神なのだろう。最初から姉である邪神と組んでいて、ここに至る流れは二人の想定通

り。全てが仕組まれていたことだと一夏が理解するのは、もう少し後になる。

「ぐちゅっ、ぶちゅっ、ぢゆるるっ、ぢゅぞっ、ぐちゅっ、ぬちゅっ！」

一夏は再び箒にデーブキスを行い、ラストスパートに入る。獣の如く猛攻でチンポを出し入れし、気絶しかけている箒の体を押し潰す。それは女である千冬を黙らせるのに十分な交尾だった。

「無理だったか……。これもまた、一つの結末か……」

千冬は自身の腹を見つめ、撫でる。その口元に諦念の笑みが浮かぶ。

一夏は気がつかない。箒の口内を自分の唾液でぐちゃぐちゃにし、下品に笑って犯すばかり。箒の口元に広がる悪い笑みの理由にも気がつかず、箒をも利用したと思われる邪神と女神の存在も認識していない。

今の一夏にあるのは、箒に快楽を与えるという考え。

それで自分たちが、世界が救われると信じて、思考停止状態でチンポに全てを託す。

一夏の腰振りによって、一際強く箒の子宮にチンポが突撃した。直後、その動きを固めるようにして膈壁がこれ以上ないほどに寄ってくる。ガツチリと掴まれ、子宮口も亀頭に張りついて、離れない。

一夏は覚悟した。

最後のレイプ射精。辛く、けれども気持ちよかった日々の終焉。

その先にある平穏な日々を想像しながら、一夏は絶頂に至った。

「おおおおおおーっ!?!」

脳が焼き尽くされそうだ。想像もしていなかった快樂の波。それに呑みこまれながら、亀頭から精液が吹き出る。妖しい闇色のオーラを漂わせる白濁液が子宮に拡散し、中を席捲する。亀頭で出口を塞がれた状態でまるで小水のように注がれる精液が内側を押し広げ、箒の腹をどんどん膨らませていった。

一夏の種付けによって箒は完全に意識を手放す。

無防備な状態となるが、女神はただ微笑むばかりで何もしない。箒に『精神掌握』の力を送ったのも、そもそもが双子の神の策略だった

のだろう。

その双子が、一夏に向かって片手を突き出した。

「進化の時間」

「新しい神の誕生だよ」

その瞬間、一夏を囲むように光の柱が出現する。天を裂き、辺りの夜を昼間に変えるほどの光。その中心にいた一夏は、絶頂によって奪われそうになっていた意識を手放した。何かに引つ張られるような感覚と、体が浮くような心地よさを抱きながら。

地上と天を繋ぐ光の柱。

それに気がついた学園の女たちが、誘われる形で校舎へと向かい、光の柱を目にして次々に平伏した。初めて神を目の当たりにした信仰者のように、喜びに打ち震えながら大粒の涙を流していた。その中には、先ほど束の玩具となっていたセシリアたちの姿もあった。

少しして、一夏だけに留まっていた光の柱はその範囲を広げていった。

校舎を、校庭を、関連施設を、学園が建つ人工島の全土を覆い尽くし、そこに神の祝福を施す。

この世界の新たな神、織斑一夏によって統治される聖域がここに誕生した。

終わらない地獄

紫色の靄もやが渦巻く空間。精神世界と呼ばれているその場所に、二柱の女神が向かい合って談笑していた。人間にたとえれば十二歳ほどの外見をした可愛らしい少女だが、実年齢は定かではない。他の神々と共に無から自我が芽生えて以来、長きに亘って数多の世界を管理し、そこに住む生物の動向を見守っていた。

見守るとはいつても、その実態は暇潰しだ。管理をするために意識を割く必要はない。無限にも思える世界をほぼ無意識に管理できてしまうため、苦勞を抱いたことはない。だが、そのせいで時間を持て余してしまうという代償があった。

この女神も、他の神々と同様に暇だった。だから、遊ぶことにしたのだ。

管理している世界で玩具とする生物を見つけ、必死に足掻く様を眺めて愉悦に浸る。生物が抱く快樂も、苦痛も、全てが神にとって味わい深かった。女神二人は快樂も好みではあったが、特に悪感情を好む傾向があった。

女神が選んだ玩具、織斑一夏をできるだけ苦しめたのはそれが理由だ。

「結構楽しめた」

黒髪と白いワンピース。黒の女神は愉快げに口元を歪めた。

「面白かったね、お姉ちゃん」

白髪と黒いワンピース。白の女神も同様に頬を緩める。

二人は姉妹だ。黒の女神が姉で、白の女神は妹。だが、管理している世界は別々。織斑一夏という個体が生まれ育った世界を管理していたのは黒の女神のほうだ。一緒に楽しもうと無邪気に妹を誘い、妹も快諾した。

そして、遊びが始まった。

黒の女神が管理していた別の世界で性犯罪を繰り返し、捕まって寿命で死亡した一人の男がいた。老いた肉体を失った男の魂は『狭間の世界』にやって来た。そこは死して行き場を失った魂が流れ着く場所

であり、そこで今後の処遇が決定される。

人間の尺度で比較的善良な魂は、新たな肉体を得て転生を許される。

人間の尺度で比較的邪悪な魂は、新たな日の目を見ることなく処分する。

度重なる性犯罪によつて、男は邪悪な魂と判断された。黒の女神からすれば人間など大差ないのだが、そこは人間の視点で厳正に判断し、予定通りに消滅させるために転生の輪廻から外すことにしたのだ。

だが、このまま消すというのも面白味がなかった。

どうせ消すのなら、自分の遊びの前座として扱おうと思った。

黒の女神は男に告げた。犯罪者であるお前にも転生する権利はある。転生する際の特典も選ばせてやろう。持っていける転生特典は全部で三つ。しかし、そのうちのひとつと、転生先の肉体についてはこちらで無作為に決めさせてもらう、と。

男に文句はなかった。あらゆる転生特典を目の前にして、男の魂が震えていた。

『また、女を犯せる……！』

喜悦に満ちた魂の声を響かせ、男は品定めしていた。次の世界での有利不利を決める大事な選択。男は慎重に選んでいたが、ややあつて選択を終えた。

男が選んだ二つの転生特典は、『精神掌握』と『肉体改造』だった。

そして、黒の女神が選んだのは『Lv. 100チンポ』と、織斑一夏という転生先。

黒の女神はLv. 100チンポの若干誤魔化した性能と、織斑一夏という肉体について説明した。選ばれた肉体は既に生を受けているため、今回は転生ではなく正確には憑依となつてしまう点も含めて、話せる範囲で委細を共有した。

織斑一夏が辿るであろう、ほんの少し先の予測された未来も一緒に。

『美少女ばかり集まるって？ いいね。俺がそいつの体に乗っ取っ

て、有効活用してやるよ』

男の魂はより強く輝いた。生まれ変わるのではなく織斑一夏の体を奪うことになるが、男が選んだ肉体改造の転生特典があれば問題はない。

肉体改造はその言葉通り、自分を含めた他者の体を自由に改造する力だ。死とは無関係の不死身の体も、老いを知らぬ若々しい身体も容易く得られる。やろうと思えば、以前の自分と同じ容姿に変わることのできる力だ。

黒の女神が選んだLv. 100チンポと男が選んだ肉体改造の性能には多少被っている点はあったが、男に不満はなく、転生する間際まで笑っていた。

『全員、犯してやる』

そう告げた男は、直後に後悔することになっただろう。

黒の女神によって騙され、五つ分相当の転生特典を魂に背負った男は、特典によって押し潰された。肉体がある存在ならば複数の転生特典を所持することも可能だが、無防備な魂では抱え持てる力に限度はある。

押し潰される瞬間、黒の女神によって思考時間を過剰に増幅させられた男は、永遠にも思える時間の中で苦しみながら潰れていった。どうせ死ぬのなら、これまでの人生を振り返ってもらおうと、黒の女神は男の人生を映像とともに実況解説しながら他の神々全員に共有することにした。

人間でたとえれば、動画サイトにライブ配信するかのような感覚だ。視聴者である神々の大爆笑と楽しげなコメントが音声付きで男の中に強制的に流し込まれる。

「あははははははははっ!!」

黒の女神も、他の神々と同等の笑い声を上げ、男の最期を堪能した。男がこぼした最期の声は亡き母を求めるもので、それを聞いた瞬間の神々の沸き立ち具合は凄まじいもので、多くの者が抱腹絶倒していたようだった。

しかし、そんな楽しい時間もすぐに終わってしまう。所詮は、男な

ど余興だった。

別に男を利用しなくとも、織斑一夏の肉体に直接Lv. 100チンポを送っても良かった。ただ、どうせなら一緒に味わおうと思ったからだ。それに、ただ自分が転生特典を織斑一夏に送り込むよりも、第三者の男に責任の全てを押しつけたほうが流れとして適切だと認識していた。

これまで大勢の生物の一生を狂わせてきた黒の女神も、その楽しみ方に工夫を凝らすようになっていた。最初から、全てが黒の女神を思惑だと疑ってかかられるのも面白くないため、策を弄することにしたのだ。以前、黒幕が黒の女神だと即バレしたことがあり、そのときは開き直って初手から黒幕ムーブをかましつつも、失敗したと内心では思って反省していたのだ。

遊びとはいえ、手を抜くつもりはなかった。

愚物である男を前菜として、織斑一夏というメインディッシュを頂く。

Lv. 100チンポの新しい犠牲者。織斑一夏はどのように足掻いてくれるだろう。

やがて合流した白の女神と一緒に、黒の女神は小さな惑星を見守った。

そして、予定通りに転生特典だけが、織斑一夏に宿った。

そこから、織斑一夏を通じて二つの特典を身近にいた二人の女、篠ノ之箒と織斑千冬に移動させた。Lv. 100チンポの特性で力が『譲渡』されたのだと嘘をついた。譲渡された原因は我慢できずに女を犯してしまったお前にあるのだと、織斑一夏に罪悪感を抱かせて。「さあ、楽しもう」

「いろいろな可能性も含めてね」

たった一つの世界であっても、可能性の数だけ無限に世界は分かれる。

早々に諦めて『天国』の道を選んだ織斑一夏。

諦めずに『地獄』を歩み、耐え抜こうとした結果、さらなる『地獄』に嵌ってしまう織斑一夏。

同じ『地獄』の中でも、世界によつて異なる体験をする織斑一夏。黒の女神と白の女神の意識は今、二つ目の地獄を進む織斑一夏に着目していた。

「我々は神を得た」

マイクで拡声された箒の声が反響する大講堂。夏季休暇中にも関わらず、講堂内には全校生徒と教職員が欠員も出さずに集まっている。一週間前に事前に呼び掛けられたとはいえ、帰省中だった者たちまでも当然の如く出席している。

この場において、衣服を着ている者は一人もない。皆、生まれたままの姿となつて少しも乱れなく整列し、壇上の脇に立つてマイクを手にする箒を注視している。箒の言葉を少しも聞き漏らすまいと集中しているようだった。

この中で箒の言葉を聞いていないのは、一夏とその開かれた足元にいる女たちだけだろう。

壇上の中央。リクライニングチェアのように形を変えたIS『白式』に背を預けた一夏は、股間に集う女たちに目を向ける。

「ぐぽおっ、ぐぽっ、ぢゆるっ、ぢゆぶっ、ぐぷんっ、ぢゆ、ぢゆるるるっ！」

床に正座をし、一夏の肉棒を正面から啜えているのは束だ。特徴的な機械のウサ耳は頭にはなく、大きな乳房には『敗北者』という文字がマジックペンで書かれている。これは束によつて被害を受けたセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラの総意で、鈴音が代表して書いた文字だ。

本当は四人で束の裸身に罵倒だらけの寄せ書きを贈ろうかという話になったようだが、一夏の目に触れるということもあつてやめたらしい。これから仲間になる束のことを考え、これで手打ちとすることにしたようだ。

束は一夏の軍門に下つた。膝に両手を置き、口だけで肉棒に奉仕をする束の顔は幸福に満ち溢れていた。もう齒向かうことはない。これからは一夏の下で、一夏のためだけに天才と呼ばれた頭脳を使ってくれることだろう。

「ちゅ、ぴちや、むちゅうつ、くぷつ、じゅぷつ、れろ、ぢゅぷつ、ちゅぱっ！」

「あむつ、んんつ、ぢゆるるつ、くちゅ、くちゅ、あつ、んつ、ぶぢゆるつ、ぢゆる！」

束に対抗するように、千冬と真耶が左右から肉棒に口淫を施す。一夏の子供を胎に宿した二人によるフェラは並々ならぬ愛情に溢れている。束、千冬、真耶という年上美女によるトリプルフェラは一夏の興奮を高めていく。

「う、くっ……！」

脳を襲う快楽。表情が緩みきってしまいそうになったが、一夏は歯を食い縛った。

駄目だ、という想いが募る。だが、素直になりたいという想いもある。

しかし、どちらにも想いが傾けられない。一夏の心境は中途半端な状態で固定されてしまい、完全に抗うことも受け入れることもできない。明らかに不自然な状態なのだが、これが今の一夏の日常だった。

約一週間前。邪神に敗北した一夏は、以前の日常を取り戻せずにいた。

そればかりか、一夏は人間としての立場をも失っていた。

今の一夏は、神と呼ばれる存在だ。神にも階級があるのだが、その中では最低の部類。言うならば現地神といったところか。現時点ではIS学園の人工島だけを範囲とした狭い聖域内の神だが、この領域では一夏は不滅。自身を崇拜する信者たち、IS学園の女たちの信仰心があれば、死ぬこともできない。

Lv. 100チンポも完全に一夏に適応し、なくなることはない。

そして、人間から神になったことで、一夏の状態は中途半端な状態が正常な状態として固定された。わかりやすく言えば、一夏は快楽に堕ちることができなくなったのだ。女を抱くことに罪悪感を抱きつつも、快楽に負けて女を求めてしまう。仮に自身の境遇に苦しみ抜いて心が壊れかけても、Lv. 100チンポの特性である『リフレッシュ』のように元の状態に戻される。

一夏には、自分が置かれた状況が手に取るようにわかった。神になつた影響なのだろう。

邪神と女神。いや、二人の女神の計画によつて神にさせられた。どういった経緯で、何を目的としているのかも。世界の外にいる女神に見守られ、L v. 100チンポの呪縛に囚われたまま生きること余儀なくされた。

期間は永遠だ。何せ、一夏は死ねなくなったのだから。

ただ、L v. 100チンポから逃れる方法がないかと言われれば、一つだけある。

L v. 100チンポの創造主であり、生まれながらの最高神の一人でもある女神に認められるだけの神になればいい。せめて、この世界全体を統べるほどにはならないといけない。それをするには、信仰者を増やす必要がある。普通に宗教活動をしてはいつになるのかと思つてしまふが、一夏に関しては違う。

何せ、一夏には手つ取り早く信者を増やすための道具、L v. 100チンポがあるのだから。

やりたくない、と思う。だが、この欲望には逆らえないのだと理解もしている。どうせ、自分は我慢できなくなって女を犯してしまう。世界全体を統べるということは、世界中の女に手を出すことに他ならないのだから、それなら今から受け入れてしまえば。

「っ……い！」
などと思つていたら、また一夏の中で精神状況がクリアになつた。

負けるわけにはいかない。抗わないといけない、と無駄に抗おうとしてしまう。

頼れる女神も、仲間もいないというのに。

この苦しみは、永遠に続く。

『あはははははははははは！』

最高神である双子女神の声が脳に送られてきた。一夏はそれを遮断し、現実に向き直る。

「一夏様が世界を支配しようとするれば、愚かにも我らに仇なそうとす

る者が現れるだろう」

一夏がろくに話を聞いていない間にも、箒の演説は続いていた。身振り手振りを交え、聴衆に訴えている。裸であるという点を除けば様になっていくように見えた。

「しかし、我々には力がある。見ろ！ 我が学園の戦力を！」

箒が振り払うように片手を横に掲げると、一夏の背後で静かに立っていた女たちが一歩足を前に踏み出した。たった十数名の女。しかも裸という頼りない姿だが、そうとは感じられないほどの威圧的であった。

全員が専用ISを装備している。学園中から選ばれた優秀なIS操縦者たち。その中にはセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、楯無、簪の姿もある。皆、IS装甲を纏った美しい裸体を晒している。

皆、誇らしげな様子だった。元々専用ISを保持していて学園の戦力として数えられるのが明確だった者たちは勿論、これまで天才たちに埋もれ続けていた秀才たちは特に。何せ、神である一夏の巫女を務める箒によつて選ばれ、束謹製のISを与えられて一夏のために戦う役目を賜ったのだから。

「これだけの戦力があれば、世界をも相手にできるだろう。しかし、これで満足してはいない。現在、私の姉である篠ノ之束が新たなISを製作中だ。素質のある者にはそのISを与え、一夏様のために戦う役目を担ってもらおう」

箒の声が信者たちに浸透する。箒の声は一夏の声にも等しい。そう思っているようだが、一夏からすればいい迷惑だった。

やめさせたいとは思うが、一夏には止められない。

聖域を広げ、治めた土地にいるまだ見ぬ美女や美少女。それを奪い、犯し、種付けする。それを考えるだけで肉棒がビクリと震えた。それを見て目を細めて笑った束たちによつて舌と口を押しつけられ、背筋に快感が駆け上る。

全部、全部欲しい。もっと女を侍らせたい。

こんなこと、絶対に駄目だ。俺は誰も犯したくない。

背反する感情に挟まれ、どちらに傾倒することもなく、一夏は縛ら

れる。

地獄だ。一夏の良心がガリガリと削れていく中、そうとは知らずに美女三人がチンポに甘える。吐息を吹きかけられ、熱を伝えられ、可愛がられる心地よさを絶えず提供される。

「有象無象を蹴散らし、世界を一夏様の物にするのだ！」

『世界を一夏様の物に！』

箒の後に続いたのは、学園中の女の声だった。少しのズレもなく揃った声は異常なほどの響きを産み、圧倒的な迫力を生み出す。それを聞いて一夏は気が遠くなるのを感じたが、すぐに別の歓声によつて目が醒める。

「一夏様万歳！」

『一夏様万歳！ 一夏様万歳！ 一夏様万歳！ 一夏様万歳！ 一夏様万歳！』

一夏を盲目的に信じ、満面の笑顔で声を張り上げる裸の美女たちが、惑わされているとはいえ、大勢の魅力的な女に求められて肉棒が膨らむ。血管を浮かせて反り立った肉棒の底から熱い情熱がこみ上げ、精液を放出した。

「ふ、ああ……。いっくん、素敵……。私の全てを、いっくんに捧げるからね……。？」

「いいぞ、旦那様……。もっと、気持ちよくなってくれ……。ああ、本当に格好いい……」

「ふふ。私のお腹の中で、一夏君の娘が歓喜に震えていますよ……。？」
肉棒の裏筋を舐めながら、一夏の射精を顔で受け止める束。竿に接吻を繰り返す、両手で金玉を揉んでくれる千冬と真耶。脳が溶けて駄目になりそうな快感が続く、信者たちが見守る中で射精を続ける。

神の射精を目の当たりにして、一斉に平伏する信者たち。ISを纏っていた者たちも、千冬たちも、そして箒までもが後に続いた。一夏に向かつて土下座をし、額を床に擦りつけた。飛び出す精液が束の頭や背中にべちゃべちゃと着弾する中、一夏は呟いた。

「たすけて……」

思わず漏れた声に反応する人間はいなかった。

代わりに聞こえてきたのは、腹を抱えて苦しげな女神たちの笑い声だった。

四人娘との朝

一夏は夢を見ていた。

IS学園で仲間の少女たちと共に送る生活。事あるごとに騒動に巻き込まれて平和とは言い難いが、それでも充実していた。もつと穏やかな学園生活を望んでいたが、現実で起きている出来事に比べれば夢の世界は格段に良いだろう。

いいな。と一夏は呟き、これ以上は自分が辛くなるだけだと感じた。

意識的に夢を閉ざす。すると、意識がだんだんと引き上げられた。それに従って体の感覚が呼び覚まされ、目を覚ました瞬間には全身に柔らかい感触が伝わってくるのを感じ、またかと諦めにも似た感情を抱く。

目蓋を開いて視線だけで周囲を見渡せば、案の定の光景が広がっていた。

「一夏。おはよう。おチンポよりもお寝坊さんだね?」

一夏の股間に跨って肉棒を膣で咥え、腰をゆさゆさと動かすシャルロット。

「おはようございます、一夏さん。ああ、今日もとても素敵なご尊顔ですわ」

一夏の右側で横になって、耳に向かって囁くセシリア。

「おはよ。本当に一夏って、寝起きの顔も格好いいわね。欠点ないでしょ? このイケメン!」

一夏に添い寝をして左腕に抱きつき、にこにここと笑う鈴音。

「ふむ。私の嫁が起きたようだな。シャルロットの綺麗な尻で見えないが」

シャルロットが膣穴で食い漁る肉棒の根元、陰囊をうつ伏せの体勢で舐めているラウラ。

お馴染みの面々が揃っていた。箒や千冬たちは連日、外部から寄せ集めた資材を学園内に搬入している関係で指揮を執っており、傍にいないことも多い。今朝はこの四人が対応するようだ。衣服を脱いで

真っ裸になり、一夏とできるだけ肌を触れ合わせている。室温を調整して夏の暑さとは無縁とはいえ、これだけ人肌に囲まれれば少し暑いと感じる。

しかし、離れてくれとはいにくい状況だった。

「どうしたの、一夏。あたしのこと犯したくなっちゃった？」

鈴音が小さな胸を一夏の左腕に押しつけ、こりこりと乳首を擦りつけてくる。機嫌が良さそうで、しばらく一夏から離れてくれないだろう。

それは、鈴音に対抗して一夏の右腕を乳房で挟み込んだセシリアも同様だ。

「鈴さんの次は私にもお恵みを。今日も私の卵子が一夏さんの精子に犯されるのを待ち焦がれていますわ」

「だってさ、一夏。あたしとセシリア、好きなほうを選んで？ あたしも可愛いけど、セシリアはスタイルも良くて抱き心地抜群よ。朝の性欲処理にはピツタリ。ああ、あたしもセシリアみたいに超絶美人に生まれたかったなあ」

「うふふ、何をおっしゃいますか、鈴さん。鈴さんもとっても可愛らしくて羨ましいですわ。隣の芝生は青く見える、というのはこういうことでしょうね。鈴さんが抱き着いて可愛く笑い掛ければ、それだけで一夏さんのお射精を促進してくださるでしょう」

「はあ？ セシリアのほうが可愛いから」

「鈴さんのほうが可愛らしいに決まっています」

「セシリアよ！」

「鈴さんですわ！」

仲良く喧嘩とは、こういう状況を指すのだろうか。少し前は普通に口論をしていたはずだが、一夏の女としての立場を盤石なものとして固い結束で結ばれた二人は、今度は相手を褒め合うような争いを見せるようになった。

もともと、自分の意見を通そうとするのは、鈴音もセシリアも変わっていないが。

そんな二人へ、一夏の上で腰を振るシャルロットが口を挟んだ。

「まあまあ。二人とも可愛いってことで、手を打たない?」

「シャルロットは黙っていなさい! この僕っ娘隠れ巨乳フランス美少女!」

「そうですね! 属性が多すぎて羨ましい限りです!」

「えー……」

シャルロットも被害を受けて苦笑を浮かべつつ、尻を振り動かす。肉棒の根元までシャルロットの膣奥に埋まり、意図的な締め付けを浴びせられる。ガツチリと掴まれた状態で興奮が急上昇する中、黙って行われるラウラの奉仕が陰囊を温める。

「ぐぷっ、ちゅぷっ、ちゅぽんっ、ぬちゅっ、んんっ、ぢゆるっ、ぬぷっ!」

ラウラは小さな口で玉袋を啜えられるだけ啜えて、唾液と舌で熱を与える。黒い眼帯を外して金と赤の瞳で大きな陰囊を映し、それを愛することだけを考えている様子だ。ラウラの水音と熱い呼吸音はやがて周囲に影響を及ぼした。

「争うよりも、一夏のことを気持ちよくしないとね」

「はい。全ては一夏さんのために、ですわ」

「というわけで、耳いただきまーす。ぐちゅっ、ぢゅぷっ、ぐちいっ、ぐちゅっ。ぢゅぶっ!」

「左耳も舌で塞いで差し上げますわ。ぐぷっ、ぐぽっ、ぢゆるっ、ぐちゅぬちゅっ!」

温かい舌で両耳を塞がれ、周囲の音が遠ざかる。セシリアと鈴音の耳舐め音と吐息以外に何も聞こえず、鼓膜がダイレクトな刺激を受ける。「うああっ……!」と一夏は声を漏らして腰を浮かせた。

その腰は、シャルロットの尻餅によってベッドに戻される。

目の前でシャルロットが華やかな笑みを口元に結んでいた。純粹なものではなく、何か悪巧みをしていそうだ。普段は大人しいが時折腹黒い一面を見せるシャルロットは果たして、一夏を翻弄する行動に打って出た。

それは、品性をかなぐり捨てて肉欲を優先した杭打ちピストン。

「あんっ! あっ! んんっ! はあっ! あうっ! あんっ! あ

んっ！」

にやけた表情で一夏の乳首を両手の人差し指でこねくり回し、膣内でぐぼぐぼと音を立てながら肉棒を抜き差しする。前屈みになって尻だけを器用に動かして実行されるそれによって、増幅した快感が肉棒を嬲り始めた。

「一夏あつ、あつ、はあつ、んっ、あつ、うっ、んんっ、あんっ！」

喘ぎ散らすその声は大きく、ぐっぽりと穿り返すような耳舐めの最中でも聞こえた。それに対抗してセシリアと鈴音が舌の動きを加速させた。一夏の脳が強い興奮状態に切り替わる。

茫然としたままの一夏の下に集い、自分にできることを最大限務める少女たち。いくら一夏が神になったところで、それに耐えられずだけの強靱な精神を突然手に入れられるわけもなく、一夏の射精欲求が高まっていく。

「出してっ、粘々ギトギトのおチンポ汁っ、僕の卵子が全面降伏して一夏の精子を待つてるよ？ たっぷり注ぎ入れて孕ませてみようよっ。」

一夏の赤ちゃんを妊娠して身重になった僕の姿、見てみたいよね？」想像してしまう。シャルロットのみならず、まだ孕んでいない女たちが勢揃いして丸々と膨らんだ腹を抱えている様子を。皆、嬉しそうな顔をして一夏に感謝を告げ、そして子種を与えてくれた一夏に跪くのだ。

駄目だとわかっていても妄想は捗り、一夏は自分で自分の首を絞めることになった。

「うっ……」

一夏の呻きに合わせ、尿道から精液が迸る。

びゅるるるっ、どびゅるるっ、ぶびゅーっ、びゅくっ、どびゅっ、どぶんっ、どくっ！

「あ、ああああつ……!?!」

精液ゼリーで子宮の底を殴られ、シャルロットが仰け反った。後ろに倒れそうになるシャルロットをラウラが寸でのところで支え、元の騎乗位体勢に戻す。そればかりか、シャルロットの肩を押して腰を沈ませたことで、子宮に龟头がより深く食い込む。

子宮を満杯にした上で、無理矢理詰め込んで腹が膨らむ。シャルロットが求めていた疑似的なボテ腹が作られ、それを見たラウラたちの表情に欲望が走ったのを見た。シャルロットと同じように、早く自分も精液を提供してもらいたいのだろう。

「あたしも孕ませて？　あたしよりも何もかも優れた優秀な一夏の遺伝子で」

「私のオルコット家の遺伝子も、一夏さんと結びつくのを楽しみにしております」

「嫁よ。こんな私だが、普通の人間らしい出産をしてみたい。だから、孕ませてほしい」

各国の美少女から同時に種付けを懇願され、朝から刺激が強すぎる。射精の勢いが増して追加の精液をシャルロットに提供してしまう。蕩けて放心状態に陥っていたシャルロットは艶やかに笑い、精液で膨らむ腹を撫で擦る。

「今度こそ頑張って受精するね？　一夏」

男としては喜びしか感じないはずのその言葉でも、一夏は罪悪感を抱いてしまう。そういう状態で固定された以上、取り払うことはできない。また、喜びを感じていないわけではないため、悪いとは思っても強い誘惑には逆らえない。

シャルロットの後も、一夏は他の三人と繋がった。

場所を変えて順番に一夏に跨る美少女たち。口を開けば一夏や他の仲間を褒め称え、一夏の気分を害することなく射精に導く。雄がどれだけ優れた生物で、その雄の頂点であり神でもある一夏がどれだけ素晴らしい存在か。承認欲求を満たす言葉で鼓膜をたびたび揺らさせ、煽られながらどぶどぶと精を放出。

何も考えずにこの快樂に浸ることができればいいのに。

思った直後、一夏の精神は初期化され、再び罪悪感が脳を支配した。

「一夏、見て見て。あたしの精液ボテ腹。きつと受精中よ？」

「一夏さんの将来の子供たちで体の内側を満たされて、私はとても幸せですわ」

「子種汁の粘り気が強くて、子宮から全然垂れ流れてこないよ？　本

当にすごいね、一夏って」

「これが女の悦びか。この世界に生まれてきて、一夏と出会えて本当に良かった」

本物のボテ腹ではないが、一夏の眼前には腹を膨らませた美少女四人。

いつか千冬たちのように孕むだろう。もしかすると、発覚してないだけで今日までの間に妊娠しているのかもしれない。各々の次の生理予定日から一週間後くらいに妊娠検査薬を使えば、陽性の判定が出るかもしれない。

そのときに抱く雄としての幸福感とは別の罪悪感を考えると、今から憂鬱な一夏だった。

予期せぬ再会

「会ってほしい人がいるんだ」

箒の口からそんな言葉が飛び出してきたのは、八月も中盤に差し掛かった頃だった。

最近、IS学園では人の出入りが激しくなっていた。以前から何らかの資材の搬入が行われていたのは一夏も知っていたが、どうやら学園内に新たな施設を建築しようという計画が進められているらしい。

箒と千冬は何を考えているのか。こればかりは聞いても話しても聞えなかった。二人を監視しようと思つてさり気なく傍にいても、一夏は女子たちに纏わりつかれて連行され、エアコンの効いた部屋で貪り食われる。

悪い予感はあるが、何もできない。裸の女子たちに抱きつかれ耳元で褒め称えられ、幾つもの乳房に埋もれ、肉棒を膣穴で包まれて子種を搾り取られる。一人が終われば別の少女が心の底から嬉しそうに股間に跨つて、アンアンと喘いで一夏の上で腰を振る。

相も変わらず罪悪感と背徳感に心を揺さぶられていたとき、一夏の下に箒がやって来た。

そして、冒頭の言葉を投げかけてきた。

断るといふ選択もあったのだろう。だが、一夏は神妙な面持ちとなった箒の様子が気になった。たとえば、一夏の餌となる女を用意したという話ならば、箒はきつと愉快そうな顔で一夏に提案するはずだ。しかし、箒に普段の微笑みはなく、その評定は複雑な心境を示していた。

何だろうか。確かめておきたいという気分には駆られ、一夏は承諾した。

この選択は決して間違つてはいない。

だが、一夏はすぐに理解することになった。

間違いではないが、もう少しだけ身構えておくべきだったと。

セックスで汚れた体を浴室で洗つて——正確には女子たちの裸スポンジで隅々まで揉みくちやされて——着替えた後、一夏は箒に連れ

られてとある場所に向かった。

IS学園の地下五十メートルの場所にある、秘匿された施設。学園関係者の中でも存在を知っている者は限られており、さらにそこに入る権限を有する者はさらに限られる。生徒でありながら千冬と同等の最高権限を与えられている箒は当たり前のようにセキュリティの厳重な重々しい扉を開き、一夏を中に誘う。

どこか薄暗く、機械的な通路が続く。道中で無数に枝分かれしている道を見ていると、SF映画に出てくる秘密結社のアジトを連想させた。天井近くに一定間隔で設置された監視カメラに見られているような感じがして居心地の悪さを抱き始めていた一夏だったが、幾つもの扉を潜ってようやく目的地にたどり着いた。

「ここだ……。ここなのだが……」

これまた厳重なロックが掛かった鉄の扉。生身では破壊は無理だろうと容易に察することのできる扉の前で、箒が腕を組む。腕に持ち上げられるように震える衣服に包まれた大きな二つの乳房に一瞬だけ視線を惹かれてしまったが、一夏は慌てて箒の顔に視線を移した。

何か思うところがあるのか、箒は真剣なそうに唇を引き結んでいた。

「何か問題でもあるのか……？」

能力を得て今の立場を得た箒がこれほど苦心するとは。会ってほしい人というのは、いったいどういう人なのか。一夏は脳内で幾つか候補を挙げてみたが、どれも箒が見せている反応と直結するとは思えない。

ただ、心当たりがないと言えば、嘘になる。

しかし、さすがの箒でもそれをするだろうか。

何だかんだで、一夏は箒という幼馴染のことを信頼している。どれだけ迷惑を掛けられたとしても、一夏をこの地獄に叩き落した一人だとしても、大切な幼馴染なのだ。近頃は、大切な幼馴染から愛する幼馴染という立ち位置にシフトしつつあり、尚のこと愛情は深まっている。

「よっ……」

心境の整理を終えたららしい箒が、セキユリティを解除して扉を開いた。

重々しく開く扉。室内の様子を見て、目を見開く一夏。その際の硬直の隙を突かれた。箒に背を押され、一夏はたたたらを踏んで室内に踏み入ってしまう。

そして、一夏の背後で扉が閉まり始め、一夏が振り向いたときには手遅れだった。

「達者でな」

完全に扉が閉まる途中、箒の声だけがすり抜けて一夏の耳に入る。

「箒!? 本気か!」

本当にやりやがった! と思いながら、一夏は扉を叩く。通路まで振動は伝わっていないだろう。伝わっていたとしても、箒は応じてはくれないだろう。わかっているけど、一夏は無意味な行動を取った。

それは、決してこの場に來たのが自分の意思ではないと、先客にわかってもらうため。

「久しぶりね、一夏君」

自分を正当化する行動を取っていた一夏だったが、背後から穏やかで聞き心地のいい声を掛けられて、振り上げていた拳を止める。恐る恐る、後ろを振り向いて、声の持ち主の姿を視界に入れる。

長い黒髪を首の後ろで一括にした女が部屋の中心に佇んでいた。絹の極薄生地で仕立てられた純白の装束を身に着ける体は、柔らかそうな起伏を描いている。肉体だけでも意志薄弱な雄ならば容易に奮い立たせるものだというのに、視線を上げて顔を映してしまえば、もはや雄の大部分が魅了される。

二十代後半といっても差し支えないかもしれない。肌艶はよく、皺一つない若々しい顔は非常に整っているだけでなく、濃密な色香を漂わせている。軽く吊り上がった双眼の目尻が優しく垂れるのを見て、一夏は思わずドキリと胸を鳴らした。

「雅さん……」

たおやかな風貌をした女の名前は、篠ノ之雅。束と箒の母親だ。

左目の下にある泣き黒子の位置も、身に纏う母性溢れる雰囲気も同

じ。ただの他人の空似ではない。小学四年生の頃に箒が転校するまでは、両親のいない一夏と千冬は篠ノ之一家にたびたびお世話になっていた。何度も目にしてきた雅の姿は、幼い頃の記憶をそのまま取り出したかのように変わらない美貌を保っていた。束よりも箒に似た面立ちであり、箒と束の姉のようにも見えてしまう。

「うふふ、視線が熱いわ。あんなに可愛かった一夏君も、立派な殿方になったのね」

薬指に指輪を嵌めた左手を持ち上げ、雅はそつと自分の頬に手を当てた。形のいい目が細められ、瞳の奥で何かの熱が灯る。獲物を見定めるかのような眼差しにゾクリとした寒気を覚えつつ、一夏の股間には確かに熱が集いつつあった。

ズボンの股間にテントが張ってしまうのは、一夏には避けようともなかった。

「あらっ… まあ……」

雅の熱い視線が一夏の股間へ這ったのに気がつき、一夏は両手で股間を隠す。しかし、その程度で一夏のL.V. 100チンポの威圧感と存在感は隠し通せるものではない。ましてや、女子たちとベッドや浴室で戯れて、汗と汚れをシャワーで流してから然程時間は経っていない。雌を食らって調子づいた雄の臭いが気づかぬうちに漏れ、この場にいる女を惑わす。

閉ざされた扉。地下であるために窓はない。

何の装飾もなければ、ただの牢獄に思えるだろうそこは、和の様相を呈していた。

上がり框から部屋の奥まで、畳が敷き詰められている。部屋には掛け軸や生け花が飾られているだけでなく、壁や天井が全て和室のそれを映し出し、疑似的な和の空間を作り出している。映像のはずなのだが、閉ざされた障子戸から取り込まれる光が室内を優しく照らし出している。

このまま雅がお茶を点ててくれそうな雰囲気だが、その気配はない。

部屋の中心に敷かれた一組の布団。枕は二つ。

そして、着物ではなく、肌に纏わりつくほどの薄い白装束に身を包んだ雅。

雅は綺麗な所作で畳の上で正座をし、三つ指を突いて頭を下げた。「織斑一夏様。ようこそお越しくださいました」

気を取り直して告げられた言葉は、娘の幼馴染に向けるものではなかった。

「本日はこの私、篠ノ之雅が一夏様をおもてなしさせていただきます。娘二人を作った経験豊富な体を使い、隅々まで癒して差し上げます。どうぞ、お心を安らかに、気の済むまでお射精なさってくださいませ。一夏様が望まれるのであれば、子宮に子種を放っていただけでも構いませんわ。束と箒の弟か妹が出来てしまうかもしれないですが、お気になさらず。どうぞ、子作りと人妻を服従させる練習に私の体をお使いください」

顔を上げ、柔和な笑みを見せる雅。

その微笑みから滲み出ている高揚と、言葉に帯びる欲望。

人妻が夫以外の男に向けるべきではない感情を伝えられ、一夏は茫然とした。

股間から離れ、体の横に垂れ下がる一夏の両手。解放された股間の内側で肉棒がさらに膨らみ、カマ首をもたげる。我慢汁が滲んで下着とズボンのテントを薄つすらと濡らす中、一夏が背を向ける唯一の出入口である扉に、電子文字が浮かんだ。

『人妻と交尾しまくらないと出られない部屋』

ふざけた文字を挟むように、兎の絵文字が表れた。

一夏はそれに気がつかない。

しかし、自ら足を前に進めてしまう。理性ではどうしようできない強い欲望に促されるまま、靴を脱いで畳へと上がり、雅の前に立ってしまう。微かに呼吸を荒らげ、雅へと右手を伸ばす。その途中で思い留まって手を止めてしまうが、雅の左手が一夏の手を握り、指を絡ませてきた。

「始めましょう、一夏君。これまで何があったのか、お布団の上で聞かせて頂戴？」

今度は、幼馴染の母親としての言葉。
安心感と、鼓動を速める興奮に襲われた一夏は、雅に誘導されてその場に膝を突いた。

人妻の口で

近づくと、雅から仄かな香りが漂ってくるのがわかった。昔と同じ。安心感のあるそれは一夏の理性を溶かし、気がつけば自然と雅の体に抱きついていた。

「うふふ」

白装束に包まれた実の詰まった乳袋。恵まれた巨乳を持つ娘たちよりもさらに大きく、一夏は膝立ちの体勢でそこへ顔を埋めた。むにゆんつと顔を受け止めて柔軟に沈む乳房。一夏の後頭部に回された雅の左手によって、一夏の顔面は胸の谷間に挟まる形となった。

「やばい。鼻と口を胸に塞がれ、一夏はそう感じた。」

この状態で呼吸をすると、雅の香りが一夏の肺を出入りする。一回、また一回と回数を重ねていくに連れ、頭がぼうつとしてくる。早く顔を上げないと、とは思うものの、全身から力が抜けて離れることができない。

身体が無気力になる一方で、股間は熱く滾っていた。

「よしよし……」

雅の右手が一夏の背を撫でる。優しい声。慈愛に満ちた抱擁。顔を包み込む温かい胸。圧倒的な母性によって理性はどんどん刈り取られていき、代わりに欲望が一夏の中で存在感を強めていく。

昔、こんな風に抱き締められたことがあったような。遠い思い出に想いを馳せながら、一夏はズボンの中で肉棒をフル勃起させていると、雅の手によってゆつくりと胸から顔を離された。

「涎が垂れているわよ？」

これ以上ないほど惚けた顔で涎を垂らしていた一夏を見て、雅がくすりと小さく笑う。その笑顔は昔と何も変わらない美しさで、今の箒と似通った部分があった。いつかは箒も雅のような淑やかな美女へと成長するのだろうか。

そんなことを考えているうちに、一夏は雅の両手で頬を挟まれた。持ち上げられて、正面から雅の顔と向き合う形となる。

「いったい何をする気なのだろう。一夏が思った直後のことだった。」

雅が口を開き、舌を覗かせる。赤く、艶めかしい動きを見せるそれが、顔と共に近づいてくる。まさか、と思うよりも先に詰め寄った舌が一夏の頬に触れ、今しがた口の端から垂れたばかりの涎を掬い取るように舐める。

頬と口元に感じる舌の感触と熱。ぞくりと背を駆ける刺激に続けて、柔らかい感触が一夏の唇を襲う。

「ちゅ、うっ……」

雅が一夏の唇に、自身の唇を重ねていた。顔の角度を少しだけ傾け、深く繋がっている。伸ばしていた舌が今度は一夏の口内に押し入って、中でビチビチと暴れている。驚きで目を見張る一夏だったが、雅の表情は何も変わらない。

「くちゅっ、ちゅっ、んちゅっ、ちゅぶ、ぢゅぶっ、ぬぶうっ、くちゅっ、ちゅくっ！」

食われている。そんな印象を一夏が抱く程度には、一方的な蹂躪だった。抵抗する気力のない一夏の舌を絡め取り、熱く握手を交わした後は、ぬちゅぬちゅと水音を立てながら唾液を擦りつけられる。これが、二人の子を持つ母親の実力。

隅々まで、一夏の存在を確かめるように雅が口内を確かめている。確認が終わった場所は漏れなく雅の唾液に濡れていく。それを次々と繰り返し返していくうちに口いっぱいには雅と一夏の唾液が溜まっていった。

もうすぐ口の許容量を上回ってしまう。

再び口から唾液が垂れ出る前に、雅の舌が口内から出ていった。

「はい、ごっくんして」

もはや、雅の言葉に従うのが当たり前と感じていた一夏は、口を閉じて喉を鳴らした。ごくり、ごくりと唾液を嚥下していく。それを見ていた雅がわかりやすい興奮を表情に浮かべたのに気づきながら、最後まで唾液を飲みほした。

「お口の中、見せて……」

「ん、あ……」

口を大きく開けて、中を見せる。

あれほど溜まっていた唾液は見る影もない。全てが一夏の中に取り込まれたのだと一目でわかる光景は、雅にさらなる興奮を与えたようだ。

一夏が幼馴染の母親としてはいけないことをして興奮しているように、雅もまた娘の幼馴染と繋がることに背徳感を抱いているようだ。少し着崩れて白装束から谷間を覗かせる乳房は深い呼吸で上下に膨らみ、白い肌はほんのりと熱を帯びている。

「一夏君……」

体内に蟠る熱を発散するように、雅が吐息混じりの声を放つ。

「もつと、君の成長を感じさせてくれる？」

告げられた言葉の魔力に逆らえる状態ではなく、一夏はこくりと首を縦に揺らした。

「お布団に仰向けになつて」

雅に言われ、一夏は黙って従う。IS学園の女子たちを食らうときとは違う緊張感に包まれる。一夏の中に残された良心が警鐘を鳴らす、それ以上の仄暗い下心が脳を支配し、全身を操る。

「本当に、すごく大きい……」

ズボンにできた急傾斜の山。一夏の傍で正座をした雅がそれを見下ろし、白く細い指を山に這わせる。湿った先端から、ピンと張り詰めた布地を這う。直接接触れたわけではないのに、過剰な快樂が一夏に供給される。

直接接触されたら、いったいどうなってしまうのか。

一夏の心を読んだかのように、雅が唇を一舐めしてから告げた。

「もつとよく見せて頂戴ね？」

一夏の返事を聞くこともなく、雅はズボンに両手を掛けた。腰とズボンの間に指が入り込み、ズボンを引きずり下ろす。勃起した肉棒が途中で引つ掛かってしまうが、どうにか足元まで下ろすと、雅の視線は再び股間に注がれた。

「まあ……」

下半身は下着一枚。肉棒の存在感がより強く放たれ、傍の雌を翻弄する。

L v. 100 チンポによって、唾液に媚薬と同様の性質を持つようになった一夏。その一夏と交わったことで雅の内側に媚薬が取り込まれた。その上、女にとっては目にするだけで興奮を引き起こすL v. 100 チンポの存在を前にしている。

結果、こうなるのは必然だった。

「夫以外の、初めての陰茎……」

うつ伏せになった雅が、下着が形成する肉棒のテントに顔を押しつける。明らかに先ほどよりも余裕を失い、雌の顔を見せている。ビクツ、ビクツと下着の中で揺れる肉棒を見て相好を崩し、下着の上から舌を這わせる。

少しの間、そうしていた雅だったが、すぐに我慢の限界を超えたようだ。

「脱ぎ脱ぎしましょうね？」

またしても、一夏の返事を待つことはなかった。

ズボンと同様に脱がされていく下着。焦らすようにゆっくりと、肌が見えていくごとに雅の情欲が強まるのを感じた。生えた黒い陰毛を見て一夏の成長を実感し、太い幹を伸ばす赤黒い肉の槍を見て驚愕し、振り返った凶悪なエラを見て感嘆とした吐息を漏らす。

下着から完全に解放され、完全体を露わにした肉棒を見た雅が取った行動は――。

「あ、ああ……」

チンポへの頬擦りだった。

年齢を感じさせない大和撫子な美女の心は即座に服従を選び、一夏の求愛を敢行した。それが娘の幼馴染であろうと関係はない。この雄は世界の頂点に立つ者だと骨の髄まで理解し、雌としてできることをしたのだろう。

「雅、さん……」

一夏からすれば見慣れた光景とはいえ、相手が相手だ。一夏を小さい頃から知っている雅。雅にとって一夏はどれだけの月日が経とうと娘の幼馴染であり、仮に一夏が箒と結婚して義理の親子になったところで大人と子供の関係は変わらない。

決して逆転するはずのなかった関係に今、変化が訪れようとしていた。

「こんな……。夫の陰茎が、子供みたいに……。こんなにも、成長できるものなの……。？ ああ、頬が熱い……。芯が通っていて、とても硬い……。陰囊だって、こんなに大きくなるだなんて……。いつたいどれだけの子種がここで……」

眩きながら頬擦りを続けていた雅は、鼻先を亀頭に寄せた。そして、花の匂いを嗅ぐようにすうつと息を吸う。瞬間、雅の目がとろんと緩む。雅から送られてくる眼差しの熱が強くなるのを感じながら、一夏は雅と視線を合わせた。

「聞かせて？ 一夏君の身に何があったのか。お願い。お願いします、一夏様……」

問われ、雅の唇が亀頭に触れる。

尿道口に捧げられるヴェーゼ。天を向いて硬く張り詰めた肉棒の根元から、裏筋までの道程を雅の指が何往復も這い回る。空いている手では陰囊を恐る恐る弄り、徐々に慣れていつて揉み解しへと移行する。

「ちゅっ、ちゅっ、んちゅっ……」

何度も尿道口にキスを捧げられ、一夏は心臓の鼓動を速めながら口を開いた。

そして、一夏は語る。雅の知らない一夏の歴史。

今に比べれば平和だった小中学生時代。しかし、高校入試から一夏の人生に大きな変化が生じた。本来はIS学園とは別の高校を受験するために訪れた入試会場で、偶然ISと出会い、それに触れたことでISに適性があることが発覚。あれよあれよという間に女子しかないIS学園に入学させられてしまい、同級生兼ルームメイトとして、筈と再会した。

そして、入学式翌日。Lv. 100チンポを神から与えられたことによつて、悲劇が起きた。

一夏がこれまでの経緯を語っている間、雅は耳を澄ませながら奉仕を続けていた。口づけはいつしかフェラチオに変わり、一夏から視線

を一回も逸らすことなく亀頭を頬張り、竿を喉奥まで誘い込む。
「ぐぢゅっ、ぶぢゅっ、ぢゆるっ、ぐぷっ、ぐぼっ、ぢゅぼっ、ぬぷんっ、
ぐぷっ！」

頬を窄め、嬉しそうにバキュームフェラをする人妻に思い出話をする一夏。予想もしていなかった光景は一夏の情欲を普段よりも速く膨らませ、精子の製造を加速させる。雅の口内に柔らかく締めつけられ、口内と唾液の熱をじっとり伝えられ、吸引される。

「ずぞっ、ずぞぞぞぞっ、ぶぢゆるっ、ぢゆるっ、ぐぢゅっ、ぶぢゅっ、ぢゆるる！」

先ほど、夫以外の陰茎は初めてだと雅は言っていた。つまり、このフェラチオは夫である篠ノ之柳韻りゅういんとの子作りセックスの過程で身に着けた技術となる。

柳韻は一夏が通っていた篠ノ之道場の師範だ。同じく門下生だった箒と一緒に竹刀を振るい、一夏は柳韻から厳しくも優しい指導を受けた。親という存在を知らない一夏から見ても人格者であり、いい父親だと箒を羨ましく感じていた。

厳格な柳韻と品の良い雅が夜な夜な激しい行為に及ぶ様を想像する。

そして、柳韻のみを愛していたはずの雅が今、娘によって洗脳され、娘の幼馴染にフェラチオを仕掛けている。一夏を一夏様と呼び、忠誠を捧げ、チンポ舐めと金玉マッサージを行う光景は劇物だった。

体の中を巡る血液と、どろどろとした背徳感。人妻の理性を奪い、寝取ること得られる味わい深さ。初めての感覚に一夏は混乱し、呼吸が浅くなっていくのを感じながら、遂に臨界点に到達した。

「んぐうっ！」

何も言わず、雅の口内で射精。

頭をぶん殴られたかのような精神的な衝撃と、快感。雅の口内を粘ついた精液で制圧し、それを飲ませる。自分が行ったことだというのに、どこか他人事のように感じていた。

ぶびゆるっ、びゆるるっ、どびゅびゅっ、びゅーっ、びゅーっ、どくっ、どくっ！

「あ、うあつ……」

一夏はだらしなく開いた口から声を漏らし、布団に身を預ける。今はただ、何も考えずにこの快楽を楽しんでいたい。一夏の中で、他人の物を奪うという寝取り属性が新たに確立されていく。それを否定することもせず、チクリと胸の内側を何度も襲う罪悪の心と戦いながら、できるだけ脳みそを空っぽにして雅に精液を飲ませた。

完食

永遠のように感じた数十秒間。脱力しきった一夏の股間で、チンポが射精を終えた。結局、一度も視線を一夏から外すことのなかった雅は、見事に一夏の精を体内に取り入れた。竿を咥えたまま向けられる聖母の如く優しき瞳。自分が間違ったことをしているとは思えないくらいに澄みきっていた。

「ずぶっ、ぢゆるっ、ぐぢゆっ、ぢゆぞぞぞおっ！」

「ううっ!？」

雅がチンポに吸いつき、表面にこびり付いた精液を奪いながら竿を解放していく。

雅の小さな口内に収まっていた竿が徐々に姿を現す。唾液や体液に包まれていた竿の表面は、うっすらと唾液に濡れてテカテカと光っている。竿の後、「ぢゆぶんっ」と音を立てて亀頭が表に出ると、勢いよく前後に跳ね動く。

そのすぐ傍で、慎ましく口を開く雅。

中にはどろどろの精液。雅が飲みきらずに残していた精液が、出した本人である一夏に見せつけられると、唇を閉ざした雅の嚙下によって補食される。ペろりと平らげた後の報告も忘れることなく、雅は綺麗になった口内を一夏に確認させた。

「素晴らしい射精でした。さすがは一夏様。これだけの精液であれば、たとえ孕みにくい女であろうと一夏様の種を根付かせるのは容易でしょう。ですが、念には念を入れて、予定通り子作りの練習をしましょう」

雅が白装束の帯を緩め、胸元をはだけていく。ぴっちりと体に覆われていた白い布地から、色白の肌色が覗く。真っ先に一夏の目を奪ったのは、重力など感じさせないほどに形の整った乳袋。この親にしてこの子あり。娘二人よりも大きな胸が、ふるんと揺れて桜色の乳輪を露わにした。

この人は、本当に人妻なのだろうか。一夏が咄嗟にそう疑ってしまいうほどに綺麗な体をしていた。胸や尻の肉付きはよく、腰はほっそり

としている。子を孕み、育てるのに最適な女体をした、二人の娘の母。一夏はすぐに、股間を滾らせた。

雅が立ち上がり、一夏に跨って立つ。

「うふふ」

白装束を肩にかけたままの艶やかな黒髪美女が一夏を見下ろし、左手をそつと陰部へと伸ばす。陰裂へと指を掛け、中を開いて見せると、やはり子を二人も産んだとは思えない綺麗なピンク色の粘膜が表に出る。膣穴からだらしなく愛液を垂らし、口をくぱくぱと開いて物欲しそうにしている。

「あなた、ごめんなさい。でも、仕方ないわよね」

一人呟く雅。腰を下ろし、直立する肉棒へと距離を縮める。

「孤独だった筈に居場所をくれた子。自身の頭脳に翻弄されて孤立してしまった束を従えてくれた子。一夏君のおかげで、私も可愛い娘たちに再会することができた。これだけの恩を受けていながら、母である私が何もしないわけにはいかないもの。一夏君に全てを捧げないと」

膣穴が亀頭に密着する。雅がそのまま腰を左右に揺らし、膣口で龟头を撫でる。

「一生、いいえ、千冬ちゃんの『施術』のおかげで、私も老いとは無縁の体になれたのだから、永遠を一夏君に捧げることになる。たまに会って一夏君との性生活を詳しく話を聞かせるから、許して頂戴ね。愛しているわ、あなた」

この場にはいない夫への懺悔。後ろめたい感情が秘められている言葉とは正反対に、雅の表情に気後れしている様子はない。年下の少年を犯すことへの興奮を笑みに変え、下品な行動をする自分に酔っている。

この様子も、操られている故なのか。それとも、これが雅の本性的なのか。

「一度食べてみたかったのよね。娘くらいの年の、男の子を」

その言葉が本心なのかもわからない。

「跨ってお尻を振って、若い情欲を刈り取る。ああ、どんな気分なのか

しらね」

「独り言ちていた雅だったが、その言葉が一夏へと投げかけられる。楽しみましようね、一夏君」

問われた言葉に一夏が返事をする間もなく、雅はさらに腰を沈めた。龟头の先を啜っていた膣口が穴を広げながら龟头を受け入れていく。少しずつ味わうように接触面積を増やしていき、一夏の眼前から肉棒の姿が消えていく。

己の分身が雅の中に埋まっていくと、伴って強烈な熱に侵された。膣肉にガツチリと掴まれ、愛液で包まれる。ねつとりと絡みつく穴は自らの意思で獲物を食らう生き物のように蠢いており、一夏の意識が幸せに覆われた。

「ああつ、んっ、くっ、ああつ!?!」

一夏が何を言葉も発せずにいる一方で、雅は艶を帯びた声音を放つて一夏と繋がっていく。雅も雅で背徳感を煽られている様子だ。太く熱い肉棒を体の内側に挿入して、震えながら尻を下へ下へと押しつけていく。

「ひいつ、ああつ、んっ!!」

挿入前に見せた余裕は既に感じられなかった。まだ入れている途中だというのに体を小刻みに痙攣させ、表情を陶醉に染めた。

やがて、瞬きほどの間に、雅は一瞬の暴走を見せた。

浮いていた尻を、一夏の股間へ振り下ろしたのだ。言葉にすればただの着席に過ぎないわずかな動作だが、蕩けた意識の中で一夏が眺めていた雅は激しい動揺を見せ、直後、その官能的な女体を仰け反らせた。

「あああああつ!?!」

膣の奥まで他人棒を受け入れた人妻が、自分の想像を超える快樂に殴られた姿だった。どうか抗って理性的であろうとしていたようだが、それすらも容易に上回って、人妻を内側から調整する。

一夏の肉棒に対してだけ発情するように。

他の男では二度と充足感を得られないように。

一夏専用の女がまた新たに生まれつつあった。それは一夏にも止

めることはできない。この部屋に一夏たちを閉じ込めた箒や束たちも、それを望んでいる。セックスに最適な肉体を持つ篠ノ一族こそ、一夏に仕えるに相応しいと信じているようで、倫理も常識も投げ打って一夏のために行動している。

娘に嵌められた母はそうと知らず、最適化を終える。

そして、新しい一夏専用器が誕生する。

「一夏様あ……」

溢れる忠誠心を言葉に秘め、雅は一夏の名を呼ぶ。伸ばした両手で一夏の手を握り、指を絡める。雅の左手と握り合う右手に結婚指輪の硬い存在を感じながら、柔らかな滑らかな手の平としっかりと繋がる。

そんな状態で、雅は動き出す。

「ああっ、おっ、おっ、んんっ、あんっ、あっ、あんっ、あんっ！」

安産型の尻で、どちゅっ、どちゅっと低い水音を鳴らす騎乗位ピストン。太すぎず、細すぎない魅力的なデカ尻の肉が微かに波打ち、膣奥までチンポを迎え入れる。それが済めばすぐに尻を上げ、竿を膣外へと解放する。けれども、完全には自由にはならない。亀頭は終始、雅の膣内で愛液漬けにされている。抜けるか抜けないかのギリギリを見極めて行われる腰振りには、明らかに経験者の挙動だった。

一夏の脳内では再び、柳韻と愛し合う雅の姿が映し出される。

あつたかもしれない、いや絶対にあつたに違いないと確信できる夫婦間での熱い夜の日々を妄想してしまう。駄目だとわかっていても、脳は実際に見たかのようにその光景を映像化する。その上で、この雅を自分の物にしたのだという優越感と征服欲を植え付けてくる。

「ん、ああっ、一夏様あ、お慕いしておりますうっ、あんっ、や、んっ！」

誰にも止められない。一夏と雅は共に登り詰めていく。

そんな様子を、部屋の壁にそうとは悟られずに埋め込まれた数十台のカメラが監視している。それを無数のモニターを通じて眺めているのは、同じ地下空間の部屋にいる箒と束、千冬だった。三人共、どこかで購入したと思しきバイブを膣穴に挿入したまま、その顔に満足

げな微笑を浮かべている。

三人が食い入るように見つめるモニターとは別のモニターには、大勢の人間の顔写真が縦にも横にもズラリと並んでいた。その中に男の顔はなく、年齢は様々だがどれも非常に端正な顔立ちをした女たちだった。

幾つかの分類わけがされていて、『料理人』や『技術者』などといった幅広い人材の雇用を目的としているように見える。何のために雇うのか。三人が何を考えているのか。映像の向こう側の様子を探れない一夏では気付くことはできない。

一夏と、その股間で踊る雅。撮影されているのも知らず、雅は尻を弾ませる。

「一夏様、いつでもどぶどぶと精子を放ってくださいませ」

目まぐるしく、肉棒が膣穴を出入りする。

「この身はもう一夏様専用です。一夏様が求められるのであれば、何人でも孕み、子を産み落としてみせましょう。そして、立派に育て上げます。優秀な一夏様の血を継ぐ選ばれし子供たちを、この世界に巣立たせてみせます」

あり得てしまいかもしれない未来を語る雅。

「ですので、どうか、その暁にはご褒美をいただきたいです。娘たちにいつか織斑姓を名乗ることをお許しただけなんでしょうか。可能であれば、私のことも織斑雅として、永遠にお傍に置いていただけないでしょうか。絶対にお役に立ちます。何でもいたします。一夏様が望み、お許しただけなのであれば、母としての役目も担いましょう」それは、両親のいない一夏にとっては、心に響く言葉だった。

たとえ偽りの関係であっても、雅を母と呼び、甘えることで得られる安心感は強いだろう。何を馬鹿なことをと一夏は思ったが、心の片隅では雅に雌としての魅力以外に、並々ならぬ母性を感じてしまっているのも事実。

そんなことはできない。その一言を告げるだけでいい。

だが、思考も蕩けつつあった一夏は、声を出すのも億劫だった。返事も出来ぬまま、雅を見つめる。

「お返事はいずれ。今は、楽しみましょう?」

雅は腰をくねらせた。熱い吐息を吐き、性欲に浸る。

「種付けを、子作りを、孕ませセックスを。気の済むまで、延々と」
透明感のある声音で紡がれる卑猥な台詞。

「私の子作り部屋に子種をギッシリと敷き詰めてしましましょう。そして、私の子宮に覚えさせてください。これから私が永劫の忠誠を誓う、この世界で最高の雄の存在を。私はあなたの所有物であるのだと、刻みつけてください」

一夏の下腹の奥からせり上がる熱の塊。

「あなたの子種で、私に今一度子作りの幸福を思い出させてください」
それを、雅による尻の振り下ろしと同時に、一夏は遠慮なく吐き出してしまった。

びゅるるるっ、どびゅるるっ、ぶびゅーっ、ぶびゅーっ、どくっ、どびゅっ、びゅるるる!

子宮に食い込む亀頭から精液が噴出する。白く濁ったゼリー状のそれが一瞬で子宮を染め上げ、数秒も掛からずに精液袋に変える。それを察知した雅がぶるんつと乳房を跳ね動かして海老反りになる。

子宮に精液を浴び、それがもたらす快楽に翻弄されている。

「んあああああっ!」

品性のない大声を上げ、女としての悦びに打ち震えている。

握り合っていた雅の手が緩み、一夏はその隙に手を伸ばした。

向かった先は雅の胸。何故手を伸ばしたのかはわからない。考えるよりも、こうしたいと感じてしまった。箒と束に見事に遺伝した篠ノ之家特有のデカ美乳。その親玉を両手で掌握し、手の平いっぱい柔らかさを感じ取る。

指が沈む。乳房に呑みこまれる。指が跳ね返されてくる。安心感が凄まじい。

これが母の胸なのか。

羨ましい。欲しい。自分にも母親が。

想いが高まるに連れて、雅の乳房を掴む指に力が入る。

「ああんっ!」

上がるのは苦しみの声ではなく、喜びの声。

雅の子宮に子種を流し込みながら、一夏の中でプツリと何かが切れる。

IS学園に入学してから、何度も聞いた理性の糸が切れる音。

一夏の全身からフェロモンが滲み出る。それが密室の隅々に行き渡り、当然のことながら傍にいた雅にも取り込まれた。ただでさえ発情していた雌が狂うには数秒もいらず、射精中にも関わらず雅の腰は再び上下に躍動した。

ぱちゅつ、ぐちゅつ、パンツ、パンツ、ぱちゅんつ、ずちゅつ、ぶちゅつ！

会話も交わさず、見つめ合って肉欲を満たし合う。

その後一夏は、雅の騎乗位で何度も射精した。体位を変えてからは、雅の両腕を掴みながらバックで犯した。

一夏自らが求め、雅をホールドしながら種付けプレス。高校生の少年が男の力強さを発揮し、年上の美女をひたすらに食らう様は見る者の目を奪う。撮影さえした映像がライブ配信で学園中のテレビで流され、それを見た女たちは両手で自身を慰める。

『あんっ、おおっ、お、あつ、はあつ、あんっ！』

『うあつ、くっ、おっ、ううっ！』

雅と一夏の声が学園中に響く。

これまた当たり前だが、一夏はその事実を知らず、雅を食らう。乳房に吸いついてキスマークをつけ、乳首にしっこくしゃぶりつく。乳肉に舌を這わせて唾液塗れにしながら、好きなきときに好きだけ膣内射精をする。

膣内だけでなく、顔にも胸にも、尻にも精液をぶっかける。射精が終われば雅にお掃除フェラをさせ、すぐにまた別の体位で雅と繋がる。

白い髪紐でまとめていた雅の黒髪が解け、それを片手で掴んで引つ張りながら一夏は何度目かのバックで雅を犯す。白い尻には一夏の平手打ちを受けてできた紅葉型の痕が残っていた。今も一夏の暴力を誘うように隙あらば雅は尻をフリフリと揺らしている。

誘われているのだから仕方がないと、一夏は手を振り上げて雅の尻に平手打ちを放った。

「ありがとうございますっ」

雅の口からこぼれ出る純粹な感謝。

俺は何も間違っていない。一夏はそう思い、雅を犯し続けた。

一夏が正気を取り戻し、心に再び罪悪感が芽生えたのは、その数時間後のことだった。

『いっくん、初めての人妻攻略おめでどう！』

という文字が出入口の扉に表示され、自動的に開く扉。

その中で、一夏は放心し、布団の傍でへたり込んでいた。

布団の上には、雅の姿があった。開いた両足を曲げ、臍から新鮮な精液を垂れ流している。全身は精液でまだら模様を描いていて、所々が一夏の唾液で汚れている。そんな状態を喜ぶかのように雅は絶頂顔を晒したままビクビクと痙攣している。

「やって、しまった……」

いつもよりも強い後悔に苛まれ、脱力する一夏。

ただ、今回は快樂と後悔の比重が快樂の側に傾いているように感じた。それはつまり、一夏が雅との退廃的なセックスを楽しんでいたということに他ならない。それを信じられない、信じたくない一夏は、自分の本心を必死に隠した。

だが、自分を完全に誤魔化すことなど不可能だ。

一夏の中で芽生えた母性に対する渴望は、今後筈たちの手で育てられてしまうことになるのだった。

日常に潜む悪意

夕食時。混み合う学生寮の食堂に一夏はいた。注文したのは安定の和食。以前のように箸に認識を操られて『券売機』を使わされることもなく、無事に料理を受け取って、テーブル席に座って落ち着くことができた。

落ち着くと思いきや出してしまうのは、今日の出来事。幼馴染の母親を犯し、墮として女にしてしまった。雅はこのままIS学園に滞在するようで、一夏が呼ばばすぐに傍に向かうと言っていた。母として甘やかす準備も、女として交わる準備もできている、と。

呼んではいけない。わかってはいるが、考えるだけで食欲とは違う欲求が滲み出てくる。

「どうしたのよ？ 食べないの？」

欲求を振り払うように慌てて首を左右に揺さぶった一夏に、右隣に座っていた鈴音が声を掛けてきた。横を向くと、至近距離から一夏を覗き込む鈴音のぱっちりとした眼。何というか、食事にギリギリ支障がない程度ではあるが、距離が近い。それは本当に部屋着なのか？ 水着か何かと勘違いしていないか？ と一夏が思うほどに生地のないラフすぎる恰好のため、健康的な肌が一夏の視界に飛び込んできている。

「何でもない」

「そう？ 何かあったらすぐにあたしに言いなさいよ？」

八重歯を覗かせて快活な笑みを見せる鈴音は、箸と女神によって操られる以前よりも素直で、可愛く見えた。初めて鈴音と繋がった日以降、一夏に暴力を振るうこともなくなった。じゃれついてくることはあるが、一夏を傷つけるということとは絶対にしてこない。

それは他の少女たちも同様で、むしろ一夏に害が及ばないよう、周囲に注意を払っているようだ。まるでボディガードだ。そのおかげで一夏が一人になる時間は限られてしまうのだが、こればかりは箸と千冬が許してくれなかった。

今晚は一人で夕食を取りたかったが、許可は得られず、鈴音が護衛

についている。

いったい皆は何と戦っているのか。敵などいないというのに。

ラーメンを美味しそうに食べる鈴音の横で、一夏は箸を手にし、食事を始めた。

鯖の味噌煮定食。お盆に乗っているのは、白米、鯖の味噌煮、みそ汁、漬物、和え物という品揃え。いつもと変わらないメニューのはずだが、それぞれの見た目が違う。これまでも自分が作ったとき以上の見栄えの良さと幸福を感じさせる味で、毎日食事が楽しみだった。I S 学園には世界各国の生徒が在籍しているため、メニューも多国籍で、安定した和食以外でも一夏はたびたび様々なメニューに挑戦し、食の奥深さを噛み締めていた。

品のいい色合いの味噌に表面を染める鯖。伸ばした箸で簡単に解れる身の柔らかさに驚き、それを摘まんで恐る恐る口に運ぶ。落ち着け、ただの鯖の味噌煮じゃないか。食事時だというのに妙に緊張しながら、一夏は鯖を口に入れ、咀嚼した。

その瞬間、一夏は目を疑った。

たった今食堂にいたはずの自分が、深い海の中にいたのだ。しかも全裸で。

「はっ……!」

なぜか海にいて、呼吸ができることに狼狽していた一夏は、接近する存在に気がついた。

それは鯖の群れだった。広大な海を悠々と、しかし、猛然と泳ぐ鯖たちが一夏へと迷いなく進行し、全身を包み込んでいく。一夏を中心に泳いで全方位を覆い尽くす鯖たちは、どういう体内構造になっているのかは知らないが、開いた口から味噌を飛ばし、一夏に叩きつけてくる。

「ぐ、ああああっ!」

鯖に包まれ、襲い来る味噌の爆撃を浴び、一夏は大声を上げ、意識を刈り取られた。

「一夏? どうしたの、大きな声を出して」

「え……」

鈴音に声を掛けられ、一夏は見ていた幻から解放された。

慌てて周囲に視線を巡らせるが、何の変哲もない食堂風景だった。誰もかれも、肌面積の多い恰好で目に毒ではあるが、それも今の一夏には日常風景に過ぎない。その中に全裸よりも危うい恰好をした少女たちが何名かいたが、なるべく視界に入れないように努めた後、一夏は自分のお盆に視線を落とした。

「あれ……？　俺の鯖は？」

一口だけしか食べていないはずの鯖の味噌煮は、半分ほど消失していた。ついでに言えば、白米や味噌汁も減っている。まさかと思い、一夏は横の鈴音に視線を送る。

「え？　何？」

「鈴、俺の鯖、食べた？」

「何言ってるの？　自分で食べてたでしょ。それも、すごく美味しいうに」

言って、鈴音は食事を再開した。普通の醤油ラーメンに見えるのだが、鈴音の表情は普段よりも幸せそうだった。とても嘘を言っているようには見えない。鈴音もまた自分の世界に入っているようで、一夏のことまで忘れて食事続けた。

一夏は再びお盆に向き直り、より慎重に、鯖へと箸を伸ばした。

まただ。油の乗った鯖と、深みのある味噌の味。両者に襲われながら、一夏は思い出した。

そうだ。確かに俺は鯖を食べた。その勢いで白米を口に放り込み、みそ汁を啜ったのだ、と。そんな直前の記憶を一時的に忘れるほどの圧倒的な美味。初めて出会った、食の頂に近い料理。一夏は夢中になって顎を動かし、和え物や漬物にもまた別種の衝撃を受けながら、よく噛んで最後の一口まで食事という行為に没頭した。

完食。

満ち足りた表情でお茶を飲んでいた一夏の横で、同じように幸福に打ちのめされた鈴音が水を飲んで一息ついてた。

「そう言えば、箒が料理人を大量に雇うって言ってたわね……。どっかの有名な料理学校の卒業生もいるそうよ……」

「え、なんで……?」

「一夏にもっと美味しいものを食べてほしいからでしょ……?」

「そっか……」

「幸せね……」

「ああ……」

まったくとしている一夏たちの周りでも、黙々と食事を続ける生徒や、堪能しきって茫然とする生徒もいた。なぜか直前まで服を着ていたにも関わらず、衣服がはだけていた者もいるが、一夏の視界には入らなかった。

一食分とは思えない満足感を得ながら、一夏はふと思った。

雇うって、本人の同意を得た上での正式な採用だよな? 洗脳してないよな。

もしも後者だったら、どうしよう。こんな味を覚えてしまったては、以前の食事では満足できないかもしれない。この状況は非常にまずい。性欲だけではなく、食欲まで箸の支配下に置かれてしまっている。

なんとか、なんとかかしないと。

「また、今度考えよう……」

余韻の残る食の幸福を薄めたくない一夏は、問題を先送りにした。

一夏は食堂を後にすると、廊下を歩いて自室に向かっていた。右腕には鈴音が抱き着いていて、まるでカップルのようだ。いいなー、と女子たちが羨ましそうにしている脇をすり抜けて何かされる前にとその場を離れる。

「食休みしたら、お風呂に行くわよ?」

「いや、俺は部屋のシャワーでいいよ」

鈴音の言うお風呂とは、勿論男女共用となった大浴場のことだ。自分からは行く気になれず、一夏は自室のシャワーで済ませようとすることが多い。半ば強制的に連行されて混浴を余儀なくされることのほうが多いのだが。

「そ。じゃあ、そっちでもいいわ」

「いいのか?」

また無理矢理連れていかれると思っていたが、どうやら今日はいらしい。

「人が多いとゆっくりできないでしょ」

「まあ、そうなんだけど……」

人が多いというよりは、自分以外が全員美少女という環境での入浴に困っているのだが。それも、隙あれば揉みくちやにされ、視界がおっぱいでいっぱいになる。膣穴で肉棒をゴシゴシと扱かれて、子種を吐いてスツキリさせられてしまうのだ。

「じゃあ、ここで……」

部屋の前に着き、一夏が鈴音と別れようとする。

だが、引つ張った腕には、まだ鈴音が抱き着いている。慎ましくはあるが、それでも十分柔らかい胸を腕に押しつけている。ニツ、と白い歯を見せて笑う鈴音に苦笑を向けつつ、一夏はさらに腕を引つ張った。

「おい、鈴」

「あたしと一緒に入りましょう?」

「だから、大浴場には行かないって」

「一夏の部屋のシャワーでいいって言うてるでしょ?」

そう言うことか。鈴音が許可を出した理由を理解した。要は、一夏を独り占めするつもりなのだろう。この場に他の面子がいないから、箒たちから許可を取って単独で一夏と接しているのだろうが、大浴場では他の女子も大勢いる。

「断つたら……?」

一夏は毎度の確認を取ると、鈴音は穏やかな表情のまま言った。

「一夏に拒絶されたショックで自殺するけど?」

それが何? と鈴音は続けた。

口元は笑っているのに、目は笑っていない。綺麗な瞳の奥に見落とせない闇を見たような気がして、一夏は息を呑む。言葉に詰まった一夏を、今度は鈴音が引つ張った。一夏の部屋へと堂々と入り、鍵を閉める。

「お風呂でイチヤイチャしよう?」

脱衣所に入っただけで、背伸びをした鈴音に耳元で囁かれ、一夏は立ち尽くしたまま股間をビクつかせた。それは鈴音にしつかりとバシバシと、股間を手の平ですりすりとお撫でられながら意地の悪い笑みを向けられる。

「馬鹿な一夏。もつとチンポに従って生きてほうが楽なのに」

それができれば、こんなに悩むこともないだろう。ドクドクと巡る血と共に後ろめたい感情が広がっていく。顔も体も熱く、股間はもうその気になっているのに、目の前の小柄な少女を汚すことに今も心を痛めている。

「早く堕ちちゃえ」

甘く囁かれ、耳に息を吹き掛けられただけで、チンポは先走りを漏らしていた。

本格的に濡れてしまう前に、一夏は鈴音に服を脱がされていく。自分で脱ぎたいのだが、自殺を匂わせられると抵抗もできない。一夏に言うことを聞かせるにはこれが効果的だと味を占めた少女たちは、割と気軽に自身の命を人質に取っていた。

本気で死ぬつもりはないだろうと思いたいが、少女たちの目を見ていると冗談ではないのだと実感することもある。放っておけばISを展開し、自分の頭を吹き飛ばしてしまいそうで怖かった。

自分の命を危険に晒すのは辞めてほしいと何度も言っているのだが、こればかりは治らない少女たちの悪癖だった。

故に、一夏は少女たちに逆らえない。本当に強く命じれば、言うこととは聞いてくれる。だが、それをするにはいつも、一夏の理性が足りていなかった。たとえるならば、半分常識人、半分ケダモノ。神となった一夏は、そんな状態で精神状態は固定されている。一時的に快楽に沈むことはできても、時間が経てば元に戻ってしまう。

「あたしの服も脱がせて？」

美少女に可愛く頼まれてしまえば、股間は疼き、手が動いてしまう。

「あは」

ホットパンツを脱がしながら尻を揉み、チューブトップをずらしながら、表に出てきた美乳の乳首をコリコリと指で擦ってしまう。一夏

は勃起した生チンポを鈴音の下腹部に押し当て、臍の上まで簡単に届くんだぞと告げるかのように鈴音に身を寄せる。

「このチンポで、またあたしのおマンコ串刺しにするつもりなんですよ？」

鈴音は、凶器同然の肉竿に垂れ下がるパンパンに膨れた金玉を右手で持ち上げる。指先をぐにぐにと沈ませ、中で急速製造中の精子の活動を応援するように、一夏に向かって椰揄うように言った。

「さすがにこの優秀なチンポでも、今回はあたしの勝ちかもね。いろいろと勉強した成果を見せてあげる。もう射精できませんって、泣いても許してあげないんだから。あたしの未成熟な体で、一夏を負かしてあげるわよ」

メスガキによる強気な発言。沸点の低いチンポは容易に挑発に乗ってしまい、竿の表面に血管を浮かばせる。「煽り耐性クソ雑魚すぎ」と嘲笑う鈴音の言葉が追い打ちを掛け、ますます怒張を強めてしまう。

「軽く揉んであげる」

どこからその自信が来るのだろうか。鈴音は一夏の手を引き、シャワー室に入った。

「ほら、早速入れちやう？」

壁に手を突き、片手でマンコを広げてみせる鈴音。余裕を感じさせる笑顔で、女のウィークポイントである秘所を露出させる。ぷにぷにの陰唇の間から見えるピンク色粘膜と口を開けた小さな穴は、今すぐぶち込みたくなる魅力があった。

「二度入れたら、しばらく抜いてあげないからね？　どくどくって精子連続でブチ撒けても、すぐに勃起させて、ぬこぬこ抜いてあげる。あたしとのセックスのことしか考えられないようになっちゃうかもね」

先ほどからあまりにも強気すぎる鈴音。いったい、何を考えているのか。

正体不明の自信を見せびらかす鈴音に近付き、一夏は鈴音の尻の上に肉棒を乗せる。常人ならば悲鳴を上げるだろう、ふとましい生殖

棒。膾壁に引つ掛けるエラも大きく、一度挿入すればどんな女だろうと墮としきつてみせるだろう。

鈴音も例外ではなく、既に敗北した身だ。

「遠慮、しないからな……」

もはや止められない。

一夏は鈴音の細腰を掴み、亀頭を膾口に食い込ませると、全力で突き入れた。

「んあっ……!?!」

膾壁を引つ掻きながら直進する。狭い穴を内側から広げていくだけで、鈴音の膝がガクガクと震えていた。あれ？ と一夏は一瞬だけ冷静になるが、鈴音による膾締め運動による煽りを受けて、力を込めて腰を押し出した。

「かはっ!?!」

子宮口にダイレクトアタック。ビクンツと鈴音の背中が跳ね、肉体越しに振動が伝わってくる。

何か策があるはずだ。一夏はキツキツマンコがもたらす快樂に酔いつつ、なるべく油断せずに畳みかける。オナホールを扱うかの如くぞんざいさで、自分を揶揄った小さな同級生の熱と締め付けをチンポいっぱいを感じる。

何かしてみせる。

「んっ、おっ……」

子宮口をガンガン突きまくる。鈴音の隠し玉に警戒するあまり、逆に普段よりも丁寧さが失われている。これでは本当に性玩具扱いだ。髪を解くのを忘れたのか、入浴中にも関わらずツイントールに結ばれた髪が視界で暴れる。

鈴音の腰から手を離し、やかましいそれを両手で握る。

「あ、ひいつ!?!」

ツイントールという名のハンドルを掴んだまま、怒涛の攻めで鈴音を苛め抜く。段々と鈴音の尻の位置が下がりつつあるが、下から突き上げて元の体勢に戻す。もっと密着したほうがいいだろうと前進し、鈴音を壁に追いやった。

そうしていると、一夏は思い知らされる。

悲鳴を上げた小柄な美少女の髪を掴み、犯す自分の犯罪的な絵面。常識のある人間がこの場に立ち会えば、一夏は間違いなく性犯罪者認定される。

だが、こんな一夏の姿こそ、学園中の人間が見たいと思っている。一夏が下半身に従えば従うほどに、学園の女たちは沸く。そして、ありがたがりながら自分の欲を発散する自慰ネタにするのだ。

人目のある大浴場でなくて良かった。

そんな風に思ったとき、一夏は何か悪い予感を察知した。第六感でも呼ぶべきか。この場には鈴音と自分以外誰もいないのに、大勢の人間の視線に晒されているような。よくわからないビジョンが脳内に流れた。

「あたしのこと、見える……？　ほら、一夏にレイプされてまーす……？」

誰もいないはずの壁に向かって呟く鈴音の声は、余裕のない一夏には聞こえなかった。

「椰揄って、返り討ちに遭って懲らしめセックス……。んあつ、やばつ、オナホみたいに使われるの最高つ……。チンポで奥まで穿り返されて、ひいつ、あ、なにも、考えられない……。チンポ、チンポつ、気持ちいいつ……」

鈴音の締め付けが強化され、一夏を襲う。

これは、まずい。耐えつつも、一夏は腰振りの速度を上げる。

シャワー室の壁際に追い込まれ、逃げ場のない体勢でバック突き。鈴音が蕩け切った顔で壁に向ける。時折、余裕がないながらも、複数場所へと視線を送って、ピースをする。余裕ぶるそんな素振りが気に食わないとでも言うように、一夏はチンポを押し込むと、鈴音の身体が跳ねた。

チンポにギッチリと纏わりつく膣肉。ぎゅっ、ぎゅーつと絞り上げ、精液を奪いとる

一夏は溜まらず射精した。びゅーつ、びゅーつと熱い白濁を吐き出して、鈴音の子宮に叩き込む。事前に十分に煽られたことで怒り心頭

だった肉棒はよく射精し、一人の少女の子宮を容易に精液タンクに変える。

射精をしながら身震いする一夏は、油断し切った顔をしていた。先ほど感じた、居場所不明の複数人の視線のことなど、頭からすっかり抜けてしまった。雄として、生意気な雌ガキをわからせる優越感に浸る。

長い長い射精を終えても、一夏は鈴音と繋がったままだった。

鈴音が言った通り、抜かずにセックスを楽しむつもりだ。正気に戻ったときに罪悪感に襲われることなど考えにない。どこかに向かってピースをする鈴音の首に腕を回し、締めつけながら、犯し抜いた。

次第に形勢は一夏へと傾いていく。膝から崩れた鈴音を抱きかかえ、ベロチューしながら駆弁ファック。鈴音の意識が飛んで舌が動かなくなっても、一夏は鈴音の口内を好き勝手に舐め回し、唾液を啜った。

「あつ、あつ、あつ……！」

鈴音の両手を引っ張って、立ちバックで犯す。涙や涎で顔を濡らし、放心状態の鈴音を一方的に使う様は紛れもない性犯罪者だった。最後まで犯し抜いてしつかりと種を注ぎ込み、一夏の前で気絶して倒れる鈴音。

チンポが抜け出てしまった。次はどの体位で犯そう。

鈴音の髪を引っ張って起こす一夏はそのとき、壁の一点に違和感を覚えた。

何回も使ってきたシャワー室の壁に、見慣れない黒い模様。汚れだろうかと思いつつ顔を近づけると、それがカメラのレンズのようなものだとわかった。

「まさか……」

わかってすぐに、シャワー室を見回す。

やはりだ。一か所だけではない。周囲の壁や天井、床にまで仕込まれている。ざつと数えただけでも、十個以上。それだけの数のレンズが、この場の光景を映し、どこかへ映像を送っていたということにな

る。

今さらといえば今さらだが、発情した自分が第三者に見られていたことに青ざめる。

鈴音が妙に一夏を煽ってきたのは、一夏のチンポをイライラさせて、自発的に犯させるためだ。

まんまと罠に嵌ってしまった。

「やられた……」

この映像は、学園中の自慰ネタとして共有されるのだろう。学園関係者専用ページにも動画が幾つか投稿されているようで、見事にその仲間入りを果たすに違いない。

「今日はもう、寝よう……」

多少の理性を取り戻し、一夏は明日の朝に改めてシャワーを浴びることにした。寝ている鈴音の体を起こし、自分が汚してしまったところを手で洗い流す。まるで人形を洗っているような気分だった。

柔らかく、温かい人形。軽々と持ち上げることのできる小さな体。陰部にそつと手を伸ばし、陰裂を開くと、中から精液がごぽりと垂れてきた。塊となった白濁液が降り注ぐ温かいお湯と混ざって排水口へと流れていく。掻き出しても、掻き出しても、流出は止まらない。女を孕ませる子種。鈴音の中に大量に仕込まれたそれを見て、一夏は生唾を呑んだ。

どうせもう、見られたんだ。あと少しくらいなら。

見られているとわかると、変な汗を掻く。衆人環視に晒された状況で犯罪行為に走るなど、普通では経験できないだろう。しかし、それは一夏を誘惑する。既に手遅れという状況が背を押して、一夏を一時的に睡姦レイパーへと成長させる。

シャワーを流したまま、できるだけ自分が立てる音を聞かないように、一夏は鈴音を抱き締めて犯す。唇を塞いで接吻したまま、せっかく精液を掻き出した膣内にチンポを再挿入し、擦りつける。

一夏の意志によって、映像記録は延長される。

少しだけ。あと、少しだけ。

射精しても全然収まらず、言い訳をしながら鈴音を使い尽くす。

一夏が行為を終えたのは、鈴音にお掃除イラマチオで搾り取ってもらった後だった。顔射や腋射、髪コキなど、普段はしないこともしてしまい、鈴音の全身は文字通り白濁液をぶちまけた状態だった。

「本当に、ごめん……」

これ以上は動画が延長されてしまわないように、一夏は蘇った理性で強く反省しながら、鈴音の柔らかい肌に付いた精液を手で優しく洗い流したのだった。

一夏が鈴音に欲望を叩きつけ、その様子がライブ配信されて学園中が興奮の只中に置かれている同時刻。学園の地下施設にて、三人の美女が集っていた。千冬、束、箒だ。まだ試作段階ではあるが、お揃いの『特製ISスーツ』を着用している彼女たちは、眼前に浮かぶ複数のディスプレイの一点に注目していた。

「様子はどうか？ 束」

千冬は妊婦専用のISスーツに包まれた腹を撫でながら、椅子に座ってコンソールを操作する束に尋ねた。

「問題ないみたい。『門』は正常に稼働中だよ」

束はいつも通りの余裕に溢れる微笑みを浮かべ、両手を軽やかに躍らせる。目まぐるしい速度で入力が行われているが、二人の視線の先にある映像、別室に置かれた『門』と表現すべき設置物に目に見えた変化はない。

それもそのはずで、現在束が取り掛かっているのは新たなISの開発という完全に別の案件だった。束の愛する一夏を狙う不届き者が現れないとも限らず、一夏を守るために行動する親衛隊に与える予定となっている。同時に、学園の防衛設備の見直しも行っており、完全に何らかの敵対者を想定した動きを見せていた。

「私の調整はいらないかな。さすがは女神様だね。どういう仕組みなのか見当もつかないよ。一度詳しく構造を調べてみたいけど、駄目だよね？」

束は期待に満ちた眼差しを向け、しかし諦めたような声音で背後の箒に問いかける。

「ええ。これは一夏と私への、女神様からの贈り物ですから」
「だよー」

門は、この世界に誕生した瞬間から既に完成されていた。製作者は、一夏にLv. 100チンポを与えた黒の女神。利害が一致するということで箒と以前から密かにやり取りをしていて、一夏を墮としたご褒美を今回与えられた。

黒色で統一された四角い外壁と、ぽっかりと空いた穴に深い闇を渦巻かせている。長時間注視していれば引きずり込まれてしまうのではと思わせるほどに、不気味な雰囲気を感じる。明らかに人智を超えたものであり、本来は人間界に置かれるものではない。

この門の正体。それは、異世界に繋がる転移門だ。

いずれは一夏の支配下に置かれるこの世界とは違う、別次元に存在する世界。それはこことは似て非なる世界観だったり、全く異色の世界観だったり、可能性に満ち溢れている。無限と呼ぶに相応しい世界に一方的な接続が可能で、異世界に住む生物を調べ、対象を選んでこちら側の世界に招くことができる。

つまりは、一夏の欲を満たすための玩具だ。この世界だけでなく、異世界の美女や美少女を一夏に食らってもらい、侍らせ、楽しんでもらうためのもの。まだこの世界すら支配できていない段階で気が早いとは思いますが、女神は既に遙か先を見据えているらしい。

貰っておいで使わないのは駄目かと思ひ、箒は既に門の試運転を行っていた。

慎重に慎重を重ね、この世界に近い世界観の異世界を選び、戦闘力を持たない一般人を連れてきた。門に備わっている推奨機能を使ってお勧めの人材を選び、リストアップしてよく吟味した上で、ようやくこちら側に連れてきたのだ。

門から強制的に拉致した女は、一夏の精液を薄めたシャワーを散布し、無力化した。箒の精神掌握を使うことも考えたが、一夏の精液のほうが完璧な制圧が行える。勿体ないが、以前楯無と簪を使って搾り取らせた一夏の精液を使うことにしたのだ。女たちは皆、まだ出会ってもない一夏の魅力に酔い、学園に堕ちた。

何かおかしいな行動を見せないか監視しつつ、学園のために働いてもらっている。

いずれも優秀な人材で、この広い世界で探し回るよりも簡単に一夏好みの女を揃えることができる。勿論、世界征服に伴ってこの世界の女たちも手駒にする予定だが、門から強制雇用ならびに永久就職させた女のほうが多くなっていくだろう。

「そろそろ学園以外にも支配圏を広げていかないと手狭になりますね」

「どこから攻めるかは悩むが、一夏と箒の力があれば国単位であつても支配は容易いだろう」

「国もいいけど、目障りな組織が動き出しているみたいだよ？ 狙いはいつくんかな？」

「どこでそんな情報を？」

「くーちゃんが調べた情報だよ」

「誰ですか？」

「あ、そう言えば知らなかったね。今、拠点を引き払ってもらつてるから、終わったら学園に連れてくるね？」

「一応、学園に入れる前に一夏の精液を嗅がせておいてください」

「りようかーい！」

今後の方針を話し合う三人。全ては一夏のために。その共通認識の下、三人は魔の手を伸ばす。目障りな組織に、国に、異世界に。今や学園そのものが他の何物をも凌駕する悪意に育ちつつあるのだが、三人を含めた学園中の者たちにその自覚はない。

『世界を一夏様の物に』

三人は示し合わせたように声を揃え、口元を綻ばせた。

プールより女体

抜けるような青空に、燦然と輝く太陽。紺色のサーフパンツ一枚だけを履いた一夏は、ひりつくような陽射しを塗れた髪や肌に浴びながらプールの縁に座っていた。伸ばした両足はひんやりとした水中に沈み、上下に動かすと水を掻き分ける軽い重みが伝わってくる。

「ふう……」

一夏は肩に掛かっていた余計な力を抜くように、息を吐いた。

本格的な夏に入って、気が休まる時間がなかった。女神や箒たちとの戦いに身を投じ、精神を擦り減らした末に待っていた敗北。一夏にとっての精神的な地獄と化したこの世界でも、ようやく訪れた憩いの時間。

『一夏。たまにはプールに入ってゆっくりするといい』

なんだかんだ箒は自分のことを考えてくれているのだなと感動し、一夏は箒の提案を受け入れた。そうして学園のプールを訪れて、準備運動の後に軽く泳いでからのんびりとした時間を送っていた。

プールの外周に並ぶ木々が風に揺れる音と、足で水を掻き分ける音。他に無駄な音はなく、一夏の耳を癒す。本当に静かで、心が安らぐ。

「はい、あたしが二番!」

「ちよつと鈴さん! プールサイドで走ってはいけませんわよ」

「む、姿が見えないと思えば、こんなところに嫁がいたぞ」

「あー、ラウラ。箒が言っていた通り、今日はそつとしてあげよう? ね?」

「暑い……。涼しい部屋でアニメを見ていたい……」

「戻っては駄目よ、簪ちゃん。たまにはお日様を浴びないと、体に悪いわ」

ガヤガヤと、少女たちの姦しくも耳当たりのいい声が、場を支配する。

プールの入口から一夏の背後を通った一団は、一夏の存在に気がつきつつも、あえて遠くのほうで拠点を構える。レジャーシートを敷

き、ビーチパラソルを広げ、ビーチチェアを複数台設置していく。

油を差さずに動きの悪くなったロボットののように、ギギギと一夏は顔を右に向けた。

そこにいたのは、箒によって一夏親衛隊の立場と高い権限を与えられた少女たち。

鈴音、セシリア、ラウラ、シャルロット、簪、楯無。可憐な面子たちが、水着という衣を纏って一夏の視界を彩った。元の素材が良すぎるだけに、衣装を改めるだけで彼女たちの魅力は様変わりし、一夏の心を動揺させる。

ああ、終わったな。一夏は穏やかな時間の終焉を悟りつつも、次の瞬間には興味は女子に向いていた。

マイクロビキニやスリングショーツ。十代の少女が好んで着用するはずのない、面積を限界まで減らすことに全力を出したドスケベ水着。色鮮やかな布地は少女たちの乳首や秘部をギリギリ隠しつつ、若く瑞々しい女体を表に出すことに成功していた。

裸を見られている相手のはずなのに、少し隠すだけで逆に卑猥さが上がってしまうのは何故なのだろう。やばい。その一言に尽きる状況を前にして、一夏はごくりと唾を飲み下し、少女たちの姿を目で追ってしまふ。

そこで、一夏は楯無と視線を重ねてしまふ。

「うふっ」

楯無は笑いをこぼし、両膝に手を当てて前屈みになった。水色のスリングショーツはスタイル抜群の彼女の攻撃力を倍増させている。細い布が張りつくように乳首を隠しながら、ぷるんたゆんと真っ白な乳房が踊る。

片手を持ち上げて髪を押さえ、綺麗な脇を見せつける。たったそれだけで、写真集の一面を飾つてもいいかと思える絵が完成した。この姿を世の思春期学生が生で見ることがあれば、その夜は大量の精液がティッシュに包まれてゴミ箱行きとなるだろう。

目が、離せない。そんな一夏の様子が他の少女たちにバレるのは時間の問題だった。

「あらう？」

先に気づいたのはセシリアだった。青いスリングショツト姿のセシリアが楯無の左隣に移動し、胸の下で両手を組む。ゆきっ、とデカ乳が持ち上げられて大きさを強調する。最近、一夏のおかげで大きくなったらしいその球体は、弾みながら一夏を誘惑していた。

「えへへ」

楯無の右隣には、オレンジ色のマイクロビキニを着こなすシャルロット。背筋を伸ばして両手を後ろに組んで笑っているだけで、十分に一夏の視線を惹きつけることに成功した。それによって一夏は、シャルロットの水着に刻まれている模様が、男性器をデフォルメした模様であると気づくことができた。

「羨ましいわね……」

「もう少し……。世界は平等であつてもいいと思うの……」

「むう……。教官に頼んで、肉体と胸部を大きくしてもらおうべきか……」

黄色のマイクロビキニ姿の鈴音と、水色のマイクロビキニ姿の簪、黒いスリングショツトを着たラウラたちが、際立った肉体を有する楯無たちに別の意味で熱い視線を送っていた。自分たちが劣っていると感じているようだが、一夏の目線は全員へ平等に配られていた。

比較的慎ましい身体でも、エロ水着はよく映える。着ているのが美少女であるというのは正義で、一瞬でも視界から外したくないという想いに駆られる。誘惑する相手によっては、逆に鈴音たちのほうに軍配が上がることもあるのだ。先日、鈴音をハメ倒した一夏は鈴音の良さを再認識させられており、そのときのことを思い返すだけで涎が口内に滲み出ていた。

ビキッ、ビキリッ。一夏の股間に芯が通って、真っ直ぐ上を向き始める。

「う……」

水着一枚では勃起を隠せるわけもなく、一夏は皆に見られないように両手で股間を覆った。慌てて視線を外して俯くが、勃起は治まらない。

待て、落ち着けて。こんなときは素数を数えればいい。

心を冷静にしようと、深呼吸をする一夏。

だったが、そんな一夏の努力を嘲笑うように、さらに心を掻き乱す一団がやってきた。

「一夏、楽しんでいるか？」

「やつほー、いっくん！ 楽しんでるー？」

「束、はしたないですよ。少しは落ち着きなさい」

ズラリと横に立ち並ぶのは、学園内でも特に秀でた乳袋の保持者たち。

スリングショットで統一した篠ノ之一家。雅は紫、束は桃、箒は赤色の生地。紐に匹敵する細さの生地が乳首を包み、V字を描いて股間の生地に繋がっている。篠ノ之家の、男の精をコキ出すことに特化したふるふるのデカ乳とぷりぷりのデカ尻は、一夏の肉棒を一段階成長させた。

「小娘にいいように翻弄されているようだな」

「若いつていいですねえ」

篠ノ之一家の両脇を挟む、妊婦の千冬と真耶。胎の中に一夏の子を宿す二人は、布地の部分がハート型のマイクロビキニだ。千冬は黒で、真耶は緑色。篠ノ之一家に負けず劣らず、母性に溢れる全身の柔肌を曝け出している。

大艦巨砲主義。ズラリと並ぶ軍艦級の登場に、先行部隊は騒然としていた。

「大人げない！ 大人げないよ！」

「箒さんは何故ちやつかりと大人組にいますの!？」

「そうよ！ 戦力差を考えなさいよ！」

「くっ……！！ お姉さん力ではあちらのほうが有利みたいね……！！」

「お姉さん力つてなに……？」

「教官。今度、一時的でいいのですが、肉体改造で私の体を大人にしてもらえませんか？」

一人だけ、大人組に近寄りつつ、自らも大人になろうとするラウラ。今まさに戦いが始まろうと——する様子はなく、出遅れた大人組プ

ラス箒が合流し、思い思いにプールを満喫し始めた。一夏の存在は認識されているが、向こうから襲い掛かってくることはない。

しかし、見せつける行為は禁止されていないようだ。

「一、二、三、四……」

一夏の横に座りこんで、柔軟体操をするシャルロット。いつもと違って三つ編みにした金髪を体の前に下げ、足を開いて足先へと手を伸ばす。前後運動によって乳袋が弾む。弾む。何度も弾み、一夏の気を引く。

誘惑に成功したシャルロットは一夏へと身を寄せてしゃがみ込み、両手の平で筒を作って耳元に囁きかける。

「びゅるるるー、びゅるびゅるー、びゅるっ、どびゅっ、ぶびゅっ、どくっ、どぶっ」

脈絡なく始まった、射精音ASMR。淀みのない声で囁かれるそれに、一夏は総毛立った。鼓膜を震わされ、全身が性感帯になったかのように、ビクツ、ビクツと全身を震え上がらせる。特に股間はもう言い逃れできないほどに勃起し、押し上げられるサーフパンツの先端が先走り液を吸って色が濃くなっている。

「一夏……。今度、一対一で犯してくれる……？ 逃げられない状態にして、乱暴に、一方的に、赤ちゃんのお部屋に種付けミルクをどぶん、どぶんって注入して、念入りに受精させてほしいな……。もう妊娠しているかもしれないけど、念のためにね……。？ 次の生理後の妊娠検査で、陽性の報告をしたいから……。ねえ、駄目かな——」

「シャルロット、それは近すぎるぞ」

「あ、ちよつと！ ラウラ、今大事なところ」

足音を立てずにスツと歩いてきたラウラに腕を引かれ、シャルロットが遠ざかっていく。

「今のは、危なかった……」

それを見ながら、一夏は戦慄していた。心臓がバクバクと音を立てている。直接触れられているわけではないのに、血が滾っていた。一夏、というよりは男の大半が今の囁きで脳が蕩けてしまうだろう。

この場所は危ない。憩いとは正反対の環境であるため、一夏はすぐ

にこの場を離れるべきだろう。一夏自身もそう思って、先ほどから何度も腰を上げようとするが、水遊びを楽しむ妖しくも愛らしい美少女たちを置いて、自室に一人閉じこもることに抵抗があった。

理性と欲望の天秤が欲望側に傾いて、一夏をこの場に縛りつけていた。

だから、すぐに狙われる。

「一夏、ママが耳かきをしてあげるわ」

母親モードの雅が降臨した。わざわざプールに竹の耳かき棒を持ってきたようだ。一夏の背後に正座をし、ちよいちよいと手で誘ってくる。

これは罠だ。というか、これは直接的な接触に該当するのではないか。

ジャツジを求めてプールに視線をさ迷わせると、ぷかぷかと浮かぶイルカの浮き輪に乗った箒と目が合い、親指を立てられた。ちよつと意味がわからない。箒もここぞとばかりにリラックスしているようで、久しぶりに童心に帰っているようだ。

「さあ、いらっしやい」

雅のムチムチの太腿と、学園内最強の生乳に視線を転じた後、一夏は腰を上げた。

ぷかぷかの太腿に右耳を当て、頭部を委ねる。プールで美少女たちが戯れる光景を正面に捉えながら、耳の中に侵入した耳かき棒の先端で中を優しく搔き回される。カリ、カリ、という刺激と、雅の全身から発せられる甘い香り。

時折頭を撫でられて、天にも昇るようなふわふわとした幸福に包まれる。

涎を口から垂らし、うとうととする一夏。乳袋が視界を妨げつつも、雅は順調に一夏の耳垢を取り除いていく。

右が終われば、次は左耳だ。体をひっくり返され、雅の身体へと顔が向けられる。一夏の表情は緩んでいる。それは雅にもバレていて、美味しそうな獲物を発見した肉食動物のように目を光らせていた。

左耳も、時間を掛けた末に清掃が終わる。

「次は、ここね……」

次とは、どこのことだろうか。

「んぷっ……」

ぼうつとしていた一夏の顔面に、重たく柔らかいものが押し掛かった。雅の乳房だ。双丘は一夏の顔面を容易く埋め尽くし、呼吸器官を完全に塞ぐ。何が起こったかわかっていない一夏は呼吸をし、雅の甘い香りを直接吸い込んでしまう。

すると伸びていく雅の左手が、一夏のサーフパンツを捲って、肉棒を取り出す。女殺しの絶倫チンポがフル勃起してお天道様の光を浴びる中、雅による高速手コキが初手から繰り出されることになった。

「シコシコ、シコシコ。さあ、一夏。ママのお手々でおちんちん気持ち良くなって、お精子をどびゅどびゅ抜き抜きしましょうね？」

乳圧を顔面に浴びせられ、手で作った輪っかでゴシゴシと擦り上げられる。ルール違反では!? 我に返る一夏だが、武器でもあり弱点でもある股間を握られて扱かれてしまえば、一夏には振り払うこともできなかつた。

「箒さん! あれはアウトではありませんの!？」

「セーフだ。あれは義母と息子のスキンシップに過ぎない」

「どんなスキンシップよ!」

外野と審判が騒ぎ立てる中、一夏は雅の巨乳に埋もれたまま、子種を搾り出された。

「うっ、ふ、ぐっ……」

「はい、どびゅどびゅ、びゅるるー……。ああ、いい子ね、一夏……。本当に……」

噴き出す精液。それを手の平で受け止め、舐め上げる雅。見る者をゾツとさせるような艶やかな笑みを滲ませ、精液を咀嚼して飲み下す。ほう、と精液臭い息を漏らし、ぎらつく眼差しで一夏を見下ろしていた。

「私と一夏が愛し合っているところ、あの人にも見せてあげたいわ……」

「お母さーん、こっち見てー?」

「あら? 気が利くわね、束」

一夏に強制授乳手コキを行っていた雅の姿を、いつの間にか束がカメラで撮影していた。それに向かつてにっこりと笑い、手を振る雅。「あなたー、元気かしら? 今度、一夏と私の生ハメ交尾動画を直接届けに行くから、一緒に見ましょう? 一夏がどれほど素晴らしい雄か。耳元で囁きながら寝取られ報告してあげるわ。オナニー用に精子をたっぷりと溜めておいてね?」

ここにはいない夫へ向けた雅のビデオレター。それを聞かされた一夏は、欲望に負けて寝取りという悪行を働いてしまったことと、それと同等の高揚感に身震いした。悪いとわかっているのに、抜け出せない。

「ごめんなさい。」

雅の夫である柳韻に謝罪しながら、一夏は水着越しに雅の乳房に吸いついて、乳首を甘噛みした。

雅によつて精子を抜かれた一夏は、理性まで奪われてしまったようだ。雅から解放されても水着を履き直さなかった。それでもまだ完全には堕ちておらず、惚けながらも美女の尻を目で追いかけてしま

「二夏君」

「二夏」

へたり込む一夏の両側から、真耶と千冬が近づく。シャルロットがしたように、息を潜めて一夏の鼓膜を刺激する作戦のようだ。

「おちんちん、ギンギンになってますよ……? 本当は今すぐにでも襲い掛かりたいんじゃないですか……? 我慢は体に毒ですよ……? 金玉に溜まったあつつあつの子種汁、女の子の中にぶちまけたくならないんですか……?」

「本当に一夏はすごいな……。他の男ならば、とつくに屈服しているぞ……? 優秀で性格もよくて、イケメンで、何の非の打ちどころのない、デカマラ絶倫おチンポの弟を持って、その弟に孕まされて、私は幸せ者だ……」

「私も、一夏君に赤ちゃんを授かって、今とつても幸せです……。これからもあなたに尽くしますよ……。？　あなたのために、一夏君のために、旦那様のために、永遠にこの身を差し出して仕えさせていただきます……」

「一夏様、ばんざあーい……」

「一夏様、ばんざあーい……」

交互に殴りつける称賛の暴力。

息を荒らげ、顔を真っ赤にした一夏は、段々と理性をそがれていった。

プツリ、プツリ。丁寧に一本一本引きちぎられる。時間が経てば元に戻ってしまい、後悔することになる。そんなことはわかっている。だが、それでもこの状況には抗えない。ここまでされて、手を出さずにいられるわけもなく。

一夏は、暴走した。

プールを舞台に、女をとつかえひつかえにして犯す。凶悪レイプ犯も真っ青な、濃い独占欲と、狂いそうな肉欲を発散させるケダモノセックス。逃げることはなく、逆に誘ってくる女の髪を掴み、組み伏せ、マンコにチンポを突き入れ犯す。

妊娠している千冬と真耶はイラマチオファックで済ませる程度の微かな理性はあつたようだが、代わりに喉マンコを酷使し、尿道口から吐き出した精液を相手の喉へとほぼ直接流し込みながら絶頂の声を上げていた。

一人、二人。犯されて気絶した女たちが、膣や口から精液を垂らす。壮絶なレイプ現場が作られていき、最後には立っている者はいなくなつた。

「これが、学園の主の姿……」

今朝、門を通じてこの世界に新たに招かれたばかりの一人が、フェンスから顔を覗かせていた。

彼女の視線の先には、一夏の腕で首を絞められながら種付けされる筈の姿があつた。あまりにも乱暴なレイプに遭っているというのに、筈は笑っている。

その筈と、彼女の視線がぶつかった。

どこまでも幸せそうで、緩みきった顔。

まともな生活を送っているとは思えない快感が、目の前にある。

しかし、まだ興味よりも未知に対する恐怖のほうが勝ったのだろう。デストロイモードになった一夏の視線が新たな標的を求めてさまようのに気がつき、彼女はそこから静かに、しかし早足で離れた。向かった先はIS学園に用意された自室のようだった。

膣からトロリと垂れた愛液が、彼女の太腿を伝い落ちる。口内に溜まった唾液が喉へと滑り落ちる。

頬を紅潮させた彼女が部屋に戻ってこれから何をするのかは、想像に難くなかった。

地獄編 I F : 誤認識バトル前編

朝方。いつもより少し早く、セシリア・オルコットは寮の自室で起床した。緩慢な動作で上半身を起こすと、体に掛けていたシーツが見事な膨らみを抱く胸元に引っ掛かり、そのままずれ落ちてセシリアの無垢な裸身を表に晒す。

「ん……」

両手を頭上に伸ばして凝り固まった体を解すと、形のいい美乳が踊るように動いた。健全な男ならば誰でも掴みかからんと手を伸ばしてしまっただろう新雪の如く美しい肌色の乳房だが、セシリアの魅力はそこだけではない。

胸と同じく我が儘な肉付きを備える臀部と、それらとは対照的に括れを描く細腰。そして、背を覆うようにして伸びる金糸の髪。毛先が縦にロールしたその髪型は真なる淑女にのみ許されたもので、生粋の英国貴族であるセシリアの品を高めている。

寝起きであっても十分な清潔さのある体だが、セシリアにとっては違う。照明を消して薄暗い部屋を裸のまま平然と歩く。

セシリアには如月キサラきげつきというルームメイトがいるのだが、彼女の目を気にすることはなかった。彼女は自身のベッドで全裸のままうつ伏せになっていて、気絶したように眠っているからだ。

開いた口に縮れた一本の黒い陰毛を貼り付け、臍から白く濁った粘液を垂らすルームメイトを見ても、セシリアは違和感を抱くことはなく浴室へと足を踏み入れた。

シャワーヘッドから降り注ぐ程よいお湯を身に浴びて、セシリアは身を清める。

芸術品のようなこの裸身を味わったことのある男は、『まだ一人もいない』。

容姿端麗で成績も優秀。入学したばかりのIS学園においても、既に同輩の女子たちよりも先を行っていた。イギリスの代表候補生として選ばれ、国から専用ISを与えられていて、その稼働時間は数百時間の域に達している。そもそものIS適性が『A』という高評価を

叩き出しているのもあって、並みの操縦者では歯が立たない。

人の上に立つことを約束されたような人材だが、男とは縁がなかった。熱烈なアプローチは幾度も受けてきたが、そのたびにすげなく振り払ってきたのだ。

セシリアは男に少しも興味を抱けない。セシリアが知る男というのは情けない生物で、自分と肩を並べられるような存在には思えなかったのだ。女性にしか扱えないISの存在が明るみとなってからは女尊男卑の風潮が加速しつつあるが、それとは別に、男は嫌いだった。

だからこそ、セシリアは憤っていた。

「織斑、一夏……」

鏡に映る自分を見つめ、セシリアは眦の垂れた双眼を不快げに細めた。目鼻立ちの整った美少女が眉を顰めるだけでも十分に迫力があるのだが、その怒りの矛先である織斑一夏という少年は当然、この場にはいない。

織斑一夏。男でありながらISを起動させてしまい、IS学園に入学することになった少年だ。運が悪いことに一夏はセシリアと同じ一年一組の所属となり、セシリアは同じ空間で勉学を励むことを強要されている。

ISは本来女性だけが起動できるもので、IS学園はIS操縦者を育成する名目で設立された特殊国立高等学校だ。必然的に女性のみで構成されていて、生徒を教える教師も皆、例外なく女性しかない。

だというのに、織斑一夏という異物が混ざった。

そして、あろうことか、一年一組のクラス代表の候補として選ばれてしまったのだ。

選んだのは、同じクラスの女子たち。世界で初めてISを動かすことのできた男というのは、若い少女たちの目には特に珍しい存在として映っているのだろう。客寄せパンダのようにその存在だけで票を集めてしまった。

対抗馬として、セシリアが立候補していなければ、一夏がそのままクラス代表に選ばれてしまっただろう。

自分よりも劣る男が、自分の所属するクラスの代表？　とてもではないが、許されるものではない。

織斑一夏が男の中でも優れた容姿をしているのはセシリアも認めるところだ。何せ、一夏の姉はあの織斑千冬だ。元日本代表で、IS世界大会の各部門の競技を全制覇し、総合優勝を果たして『ブリュンヒルデ』の称号を手に入れた唯一の存在。一年一組の担任でもある彼女は特別で、その弟も男としては上質だろう。

だが、中身は別だ。現時点で、セシリアが認めるだけの能力は一夏には感じられなかった。

「勝つのは私ですわ……」

セシリアは、一夏にクラス代表の座を譲るつもりはなかった。

本日の放課後。クラス代表を決める決闘が、セシリアと一夏の間で行われる。勝負方法はこの学園らしく、ISによる模擬戦だ。

ハンディキャップはなく、対等な条件での勝負とあれば、専用機を持つているセシリアに負ける道理はない。一夏にも専用機が与えられるそうだが、昨日の時点ではまだ届いていなかったようだ。今日仮に届いたとしても、慣らし運転程度しかできないだろう。

「ふっ……」

勝ちも確定しているようなものだ。今日の戦いは、いかに自分の優雅な戦いぶりを同輩に見せつけ、自分のほうが優秀なのだとしめるためのものである。悔しがらぬ一夏の顔を見られれば、少しは溜飲も下がるだろう。

余裕を持ち直し、セシリアは鼻歌混じりに優雅なシャワータイムを満喫する。

そんなセシリアのピツタリと閉じた割れ目からは、お湯とは明らかに違う、粘り気のあるゼリー状の白濁液がどろりと流れ出ていた。次々に排出されるそれはむっちりとした太腿から足へと伝い落ち、お湯と共に排水口へと吞まれていく。

白濁液が全て排出されても、膣からはまた違った透明感のある体液が流れ出ていた。

セシリアは至って自然な素振り、股へと細い指を伸ばした。

「ん……」

邪な考えなど一切ない。セシリアはあくまで純粹な向上心から、自慰を始めた。皮の被った陰核を指先で突き、陰裂を掻き分けて膣穴に指の腹を押し詰める。ぬぷっと指が埋もれて奥へと入っていき、中を直接掻き回す。

「はあっ、あっ、んっ、んくっ……」

片手で行っていたそれは、やがて両手の指で執り行われる。ガニ股になって腰を沈め、頭からシャワーのお湯を浴びながらちゅくちゅくと膣穴を解す。弄る前から愛液をだらだらと垂らしていた穴は、より敏感になって蜜を生み出す。

「織斑一夏、織斑一夏、織斑、一夏……」

自分が憎き相手である一夏の名前を呟いていることなど、セシリアに自覚はなかった。脳内に植え付けられた知識に従って、膣穴を指で穿りまわす。あると思っている処女が既に何者かに奪われていることに気付く様子もなく、セシリアは膣を調整する。

織斑一夏とのIS戦闘で、自分が有利に立つために。

武器の一つであるおマンコの手入れを欠かさないセシリアだった。セシリアにとっては、優秀な人材が世界各国から集うIS学園の授業であろうと、退屈なものだった。全て学習済みの内容であり、復習の域を出ない。一応は真面目に授業を受けているように見せかけているが、セシリアは脳内で別のことに想いを寄せていた。

一夏にどう思い知らせてあげようか。

セシリアは桜色に潤む唇を舐めた。

「おっ……!?!」

直後のことだった。子宮口に食い込む高熱源体の硬い感触に、セシリアは呻いた。耳元につけた青いイヤークラス——セシリアの専用ISの待機形態だ——を激しく揺らし、背筋を弓なりに反らした。教壇に立って授業を進める副担任の山田真耶から視線が逸れ、天井に移る。

「ん、ひいつ……!?!」

優等生にのみ許される全裸姿で真面目に授業を受けていたはずの

セシリアによる、突然の喘ぎと絶頂。普通ならばクラス中の注目の的になりかねないのだが、誰もが黙って授業を受けている。この瞬間、授業に関係ないことをしているのはセシリアと、もう一人だけ。

セシリアの座席に全裸で腰掛け、膝にセシリアを乗せた一夏だ。セシリアの背中に後ろから抱き着き、左手で乳房に指を沈ませて揉みくちやにしながら、右手は細い下腹部をじつくりと撫でまわしている。

セシリアの子宮に食い込んでいるのは一夏の熱々チンポに他ならず、セシリアの椅子と化している一夏が腰を突き上げたことで、子宮口を亀頭で殴られてしまったのだ。そんなものは一夏を見れば一目瞭然なのだが、セシリアは動揺を抑えきれない。

今の衝撃は、いったい……？

セシリアは、一夏の存在を知覚していなかった。そこにいるはずなのに、セシリアがいくら背後を確認しようと、認識できない。

一夏は今体調不良で保健室に行っている、という認識を植え付けられているセシリアには、衝撃の正体が掴めない。そのため、正気を失った表情でセシリアの膣をチンポで突き上げる一夏の攻撃一回一回が、全て不意打ちに変わる。

「んあつ、やあつ、ひいつ!?!」

誰も反応してくれない異常性には気付きつつも、何もできず、セシリアは一夏のチンポでめった刺しにされる。一突き一突きじつくりと子宮をぼこぼこにされ、次第に脱力したセシリアを一夏がより強く締めつける。

そして、ブルブルと一夏が震え出した。

「孕め……」

「んおおおっ!?!」

耳元で一夏の低音ボイスが響き、子宮に高熱の波が襲う。大量の粘液が子宮内に叩きつけられ、現在進行形で胎を満たしていく。どぶんっ、どぶんっ。セシリアの赤子部屋は白濁液で塗り潰され、セシリアの痙攣に合わせてちやぷちやぷと白濁が波打つ。

「ひっ、っ……」

ギリギリと、セシリアの胸を握り締める一夏の手。手加減なしの欲

望に塗れた抱擁は、痛みではなく幸福をセシリアに授ける。これまでの人生で感じてきたストレスが根こそぎ拭い取られるような強烈な高波。雄に支配され、弄ばれることの悦びが、セシリアの自覚を得ない間に脳の根底に広がっていく。

「あ、ははっ……」

訳も分からず、ただ正体不明の幸福に包まれて笑うセシリア。それを犯し、セシリアのイヤークラスに舌の往復ビンタをして唾液でべちやべちやと汚す一夏。

二人の様子を、実は密かに観察する者が二人。

真耶に授業を任せ、その指導ぶりを見守っている千冬と、女子たちと一緒に平然と授業に耳を傾けている箒。二人の視線が時折セシリアたちのほうへと向き、洗脳されて静かに暴走する一夏と、餌であるセシリアに向けて薄く笑む。

マンコに雌汁を溜めて欲情している二人の視線に晒されていることなど知らずに、セシリアは子宮に織斑遺伝子を溜め込む。亀頭が子宮口を塞いでいるが、仮に離れても子宮の精液は容易には流れ出さない。

じつくりと染み込む精液。

脳内に刻み付けられる、一夏という優秀な雄の存在。

そのどれもが、今のセシリアには察知できなかった。

認識を操られたセシリアと一夏の二人。

本番はおそらく、放課後のクラス代表決定戦。

愉快に微笑む箒の手の平の上で、二人のマリオネットが雌雄を決しようとしていた。

女教師のWパイズリ

エアコンの設定温度は普段よりも少しだけ低かった。何もしていなければ肌寒いと感じるのだろうが、今の一夏にはちょうどいい。別に激しい運動をしているわけではないのだが、肌に伝わる二人分の体温が一夏を温めていた。

「気持ちいいか？ 一夏」

そう尋ねるのは、生まれたままの姿となった千冬だった。どこからか調達してきたアンティーク調の黒い革張りの椅子に腰掛けた一夏の足元に跪いている。たつぷりとボリュームのある乳房を下方から両手で抱え持ち、ぐいぐいと押しつける先にあるのは一夏自慢の肉厚カリ高の凶悪チンポだ。

「どちらのおっぱいが好きですか？ やっぱり、私の大きいおっぱいですか？」

右側を陣取る千冬に張り合うように告げたのは、同じく素っ裸の真耶だ。肉棒を挟もうとしている千冬の谷間を大質量の乳袋で押し返している。千冬よりも大きいメロン大の乳房は、千冬のそれと拮抗している。

乳と乳のせめぎ合い。間に挟まれた肉の棒は、悦びながら涎を垂らしている。

どうして、こんなことに。

この場において一番冷静な一夏は、自分の記憶を辿る。

珍しく、誰にも襲われずに朝を迎えた一夏だったが、その目覚めを待っていたかのように千冬が部屋にやって来た。扉を勢いよく開け放って入室し、すわ殴り込みかとビクつく一夏を他所に千冬は椅子を部屋に運び入れてきた。

一夏が座っている高級そうな椅子がそれなのだが、どうやら一夏をもてなすために発注されたものらしい。衣服を引っぱがされてそれに座らされた一夏は、いったい何をするつもりなのかと不安を抱いたが、千冬が服を脱ぎ捨て、ぷるんと弾む乳房を肉棒に密着させた段階でようやく理解が及んだ。

ああ、パイズリで搾られる感じだ。

平和な朝は仮初めであったと知り、世界の無情さを痛感していた一夏。

だが、一夏の理性を揺るがすのは千冬一人だけではなかった。

いざ、千冬が嬉しそうにパイズリを始めようとしたとき、ノックの後に開かれる扉。ノックすればすぐに入室していいわけではないと、学園全体に通達したい一夏だったが、その不満は飲み込まれた。

にこやかな表情で入室してきた真耶は、白黒牛柄の極薄マイクロビキニを着ていた。着る、という表現は果たして正しいのかと、一考の余地がありそうなほどの肌の露出具合だが、それはさておきこの世全ての青少年を墮落させそうな卑猥な女教師が爆誕していた。在学中の生徒の子供を胎で大切に育てながら、その生徒の前で痴女同然の格好で誘惑する現役の教師はたぶん、この学園にしか存在しないだろう。

まあ、そんなこんなあって、先んじて一夏に接触していた千冬と、出遅れたもののヤバい格好で一夏の下へ駆けつけた真耶。どうやら予定のダブルブッキングがあったようで、いずれも自分の権利を主張して引かない二人が最終的に決断した結果が、この状況だった。

「真耶。胸は大きさだけではない。形と張りも重要だぞ?」

「そうは言いますが、織斑先生——いえ、お義姉さん。一夏君の目は、どうやら私のおっぱいに釘付けですよ? 前の授業のときも、私のおっぱいに挟まれてたくさんお射精してくださいましたよね?」

「待て、誰がお義姉さんだ。それに、今さらだが生徒を名前で呼ぶのはどうかと思うが?」

言い合いながら、胸と胸がぶつかり合う。むにゅむにゅと全方位からの乳攻めを受けた肉棒が絶えず我慢汁を垂らし続けたおかげで、二人の胸は潤滑油要らずの状態だった。口論しながらも二人が我慢汁を指で拭って自ら乳房に塗りたいくったおかげで、朝の陽射しを受けて白い乳房が妖しげに輝いて見える。

これは、想像以上だ。

変幻自在とまではいかないが、柔軟に形を変える二人の乳房によつ

て行われる棒倒しは、一夏の情欲を駆り立てた。体に力を入れて我慢の姿勢を貫くが、二人とも一夏の子を孕んだ女教師であるため、その存在自体が背徳感の化身だった。生徒としての興奮と、一人の男としての興奮。どちらも積み重なって一夏の優越感を満たす。

世の男が望んでも容易に手に入られないハーレムが、目の前にあるのだと。

必死に堪えようする一夏の様子はわかりやすかった。そのため、言い争っても仕方がないという考えに行き着いた千冬と真耶が、悪戯を仕掛ける子供のような微笑みを一夏に向けて、協力して一夏を攻め立ててきた。

「ん？ どうした？ なぜ我慢をしている？」

「そうですよ。我慢は体に毒ですよ？」

「どうせ、金玉に古い精子が溜まっているんだらう？ 出してしまえ」

「お射精、気持ちいいですよ？ 私たち先生の胸と顔に、いっぱいぶっかけてみませんか？」

ビキリッ、ビキリッと肉棒に血管が浮かび上がる。竿がさらに肥大化して、巨乳に包まれているとは思えないほどの大きさを主張する。それを見て頬を緩めた千冬と真耶は、ほぼ同時に舌を伸ばし、口の中に溜めていた唾液を垂らし始めた。

「っ……」

ツー、と落ちてくる唾液が亀頭に着弾し、竿に伝っていく。こぼれ落ちてしまう前に二人は胸を使って自らの唾液を竿に絡めていく。

瞬く間に、一夏の肉棒と二人の胸の接地面は唾液に塗られていく。先に下地として塗りたいくっていた我慢汁が絡むことで、ローションとはまた違ったぬるぬる感が演出され、女教師二人の活動を支援する。

「ほら、どうだ？」

「妊婦教師のダブルパイズリですよー？」

ぱちゅっ、ぐちゅっ、ぬちゅっ、ぐちゅっ、ずりっ、ぬちい、ずりゅっ、ずりゅっ！

「う、わ……」

一夏は呻き、背もたれに体を深く預けた。肘掛けに両腕を置き、先

端を掴む手に力を込める。力んで凌ごうとする考えは場合によっては効果的だが、何事も限度がある。

「旦那様」

「ご主人様っ」

「どうぞ、我らに子種をお恵みください」

「朝立ちおチンポミルクをお与えください」

ぱちゅっ、ぐちゃっ、ぐちゅっ、ぬちゅっ、むにいつ、ぱちゅっ、ぱちゅんっ！

「全てこの身で受け止めてみせます」

「お口でも、顔でも、胸でも、お好みのところに、好きなだけ」

連携技で以て畳みかけてきた女教師は一旦言葉を止めて、パイズリ運動をここにきて加速させた。ぬちゅっ、ぬちゅっ、ぬちゅっ、ぐちゅっ！ 一夏も苦悶の声を上げざるを得ないくらいに躍動感があり、粘液を纏ってテカテカになった母性の象徴が踊り狂う様に視覚を圧倒された。

「射精してください」

千冬と真耶の声がほぼ同時に重なって、一夏におねだりする。

主である一夏ではなく、肉棒は下僕である女教師に従った。こちらのほうが気持ちよくなれるから。ただそれだけのことだ。一夏の制止も振り払って、精子を振り撒く。どびゆるるっ、びゆるるるっ。ビームのような勢いで直上に伸びた白濁液の放出は途切れることなく発射され、先行部隊が標的目掛けて落下する。

「ふふっ」

「あんっ」

顔に、口に、胸に。喉が渴きすぎて雨粒からでも潤いを求めようとするように、べー、と二人は舌を伸ばして精液を待つ。その意を汲んだかのように子種汁が二人の舌に着弾して、ねっとりと絡みつく。

二人は精液が垂れ落ちる前に舌を口に収めると、そのまま喉を鳴らした。

ごくりっ、と音が鳴った後に開かれた口の中には精液は欠片も残っていない。美味しかったぞ、とウインクで応える千冬と真耶は、すぐ

にまた舌を伸ばして精液の雨を浴びる態勢に入っていた。

「頑張れ、一夏」

「まだまだ出せますよ?」

「ひっ、あっ……」

一夏の射精は二人の応援によって延長を余儀なくされていた。射精中でも乳房でゴシゴシと肉棒をマツサージされるものだから、肉棒が奉仕に応じた分の対価を支払ってしまう。

マンコに封じ込められて、中でびゆるびゆると吐精するのはまた違う快樂。妊婦教師に白濁塗れという要素が追加され、性的な視覚の暴力は膨れ上がった。精液をせがむように伸ばした赤い舌を左右に揺らす仕草も卑猥で、一夏は射精を止められなかった。

押し寄せる快樂の波からようやく解放された一夏の前には、ザーメンミルクに濡れた千冬と真耶がいた。肌を伝い、口元に垂れた精液を舌でペろりと舐める千冬。亀頭に唇を押しつけて、尿道に残った精液をぢゆるると吸いとる真耶。

「一回目とは思えないな。さすがは旦那様だ」

「素敵ですよ、ご主人様」

瞳にハートマークが浮かんでいると見間違えるくらいには、二人の顔は蕩けていた。

「さあ、二回目に入ろうか」

「午前中は独占してもいいとのことなので、まだまだ時間はたっぷりありますよ」

その言葉を聞いて一夏が時計を確認すると、まだ六時半だった。

絶望。その一言だった。

今から待ち受ける快樂絶頂の連続を想像し、一夏は唾を飲んだ。恐怖を覚える理性とは違って、一夏の欲望は歓喜を餌に成長していた。また、我を失ってしまいかねない。妊婦に手荒な真似はしたくないと歯を食い縛る一夏だったが、この場から逃げ出すだけの理性を持っていない時点で、敗北は濃厚だった。

千冬と真耶は共に才女だ。これまで男とは縁がなかったが、一夏という男を知ったことで性技術がメキメキと向上した。一夏だけに忠

誠を誓っているためにあり得ないが、仮に女に飢えた男を大勢掻き集めたとしても、二人の磨き上げられたパイズリご奉仕によって足腰立たなくなるまで絞り尽くされることだろう。

そんな実力を持った女が二人。

対するは、強力すぎる力に溺れ、理性と欲望の狭間に漂う少年。

二回戦が始まってからも、二人のリードは揺るぎなかった。一夏と肉棒を乳房で悦ばせ、昇ってきた精子を吐き出させるために胸を弾ませる。朝の運動会に強制参加させられた一夏を応援することも忘れない。

「旦那様、その可愛くて格好いいイキ顔を私に見せてくれ」

偽りのない称賛の言葉。

「おちんちん、頑張れー。先生のおっぱいに負けないでー」

楽しいな声援。

飛び散る精液。

パイズリ、射精。パイズリ、射精。パイズリ、射精。

休むことなく続くそれに、一夏の欲望はますます活発になっていった。

理性が薄くなった一夏は、千冬の手から渡された赤い首輪を受け取った。千冬に唆されるまま、千冬の首に首輪を嵌める。太い銀の鎖を掴んで引つ張ると、連動して音声を発する玩具のように千冬が感謝の言葉を口にする。

千冬に対抗した真耶が、黒のマジックペンを一夏に手渡す。これでは何を書けというのか。紙がなくて迷うペン先だったが、真耶の誘導によって白いキャンバス、もとい白い乳房に文字を書き綴る。

二つの『正』の字。まだ余白はあった。

一夏は言われる前に自ら筆を走らせた。

『一夏専用』

一夏の画角からそう読めるように、千冬と真耶の乳袋に一文字ずつ書き殴った。二人の乳房が重なったときのみ、意味のある四文字が完成する。片方がいなくなつては駄目で、両方必要なのだと一夏が伝えているようなものだ。

ただでさえ高すぎる二人の愛情がさらに暴走したのは言うまでもない。

時計の針が真上を指し示すまで、パイズリ地獄は終わらなかつた。贅沢に搾り出された一夏の精液によって部屋の一角が汚れ、清掃員の少女たちが綺麗に『掃除』したことも、特に語る必要のないごく普通のことだ。

「調子に乗ってしまい、申し訳ございませんでした……」

行為の後、土下座をして三つ指を突いて謝罪する千冬と真耶の後頭部を、一夏は足で踏みつけていた。すっかり理性を欠いた一夏はその後、お仕置きのために千冬たちを放置し、清掃員の少女たちのレイプシーンを見せつけたのだった。

地獄編 I F : 誤認識バトル後編

「ん……う？」

ふと体に違和感を抱いて、セシリアは正面に向けていた視線を下げた。

濃紺の I S スーツに包まれた自分の体が視界に映る。しかし、特に変わったところはない。念のため、更衣室にある姿見の前に立って全身を見回してみたが、やはり違和感の正体は掴めなかった。

軽量化のため、生地を大幅に削減した I S スーツ。背中は大きく開け、乳輪と秘所を隠す部分の生地にはハート型の穴が空いている。最近取り換えたばかりの代物だが、それ自体にもおかしな部分は何もない。

「気のせい、ですわよね……」

そう結論付け、セシリアは一度だけ深呼吸をし、気を取り直した。着替えを収納したロッカーの扉を締め、セシリアは意気揚々と歩き始める。今は余計なことに気を回している暇はない。これから、織斑一夏との戦いが始まるのだ。相手は I S 稼働時間がたった数時間というズブの素人だが、それでも気は抜かない。

「今日は徹底的に、身の程というものを理解させてあげましょう」

自分が、男という生き物が、どれほど程度の低い存在であるのか。骨の髄まで理解させ、平伏させる。二度とセシリアに逆らうことができないように。

「うふふっ……」

セシリアは、ぺろりと舌で口元を舐めた。そのとき、口の端に張りついていた黒く縮れた陰毛を拭い取り、口に含めたのだが、セシリアは何とも思っていない。滲み出た唾液と共に陰毛をぐくりと飲み込み、胃へと流す。

程なくして、胃の中に溜まっていた精液の上に、陰毛が舞い落ちた。

とぶんっ、ちゅぶんっ。胃の中に溜まった陰毛混じりの精液、そして子宮に溜まってどろどろと波打つ子種汁の存在を、セシリアは全く知覚できていない。子宮の中で、夥しい数の精子が泳ぎ回っているこ

とともに、勿論気がつくことなどできない。

「さあ、私とブルー・ティアーズの華麗なる舞を見せてあげますわ」

麗しき淑女は、何者かの唾液に濡れた、蒼い涙の名を冠するイヤークアスを耳に下げ、戦場へと歩みを進めた。桜色の乳輪を見せつけるように大きな胸を張り、陰裂を丸出しにしたまま、金色の髪を優雅に手で払い、悠然とした微笑みを浮かべる。

自分が汚辱されているとも知らずに堂々と振舞う雌は、どこまでも滑稽だった。

見上げれば、晴天に恵まれた青空が視界を覆い尽くす。周囲を見回せば、四方に観客席が広がっている。その一画で熱い声援を自分ではない誰かに送っている一年一組の女子たちを鼻で嗤った後、セシリアは宙に停滞する一夏の全貌を同じ目線で見つめた。

短く整えた黒髪。西に傾いた空から降り注ぐ陽射しが、目鼻立ちの整った顔を照らしている。どこか灰色がかかった武骨な装甲を有する専用IS『白式』を装備して、武器も持たずにどこか不安げな感情を滲ませている。

一夏と正面に対するセシリアは、余裕を表情に湛える。

春の風に靡く金糸の髪。陽射しを浴びて輝くそれは、優々たる微笑を滲ませる白皙の美貌を底上げしている。均整の取れた体とスラリとした足は肌に密着する濃紺のISスーツに包まれていて、女体の起伏がくつきりと浮かんでいる。

乳首も陰裂も晒したままのセシリアだが、その身には先ほどまではなかった機械の装甲を装着している。セシリアの胴よりもガツシリとした脚部装甲と、背中が付随するフィン状の四機の装甲。そして、右手に持つ身の丈以上の長い砲身を有する巨大ライフル。

これがセシリアのIS、『ブルー・ティアーズ』。IS学園が所有する訓練用の量産型とは違い、イギリスからセシリア個人に貸与された第三世代に分類される専用機。待機形態のイヤークアスと同じ鮮やかな青色に染まるISを前にして、一夏が生唾を呑んだのを、ブルー・ティアーズのハイパーセンサーが知覚した。

「逃げずによくここまで来られましたわね。褒めて差し上げますわ」

第三アリーナ。その上空。ブルー・ティアーズを身に纏ったセシリアは、同じ目線まで不安定な挙動でどうにか上昇してきた一夏に向かって称賛の言葉を送った。

当然、それは純粹な褒め言葉ではなく皮肉だ。どうやら専用機が届いたばかりでまともに試運転する時間もなかったと見受けられる一夏を褒めるほど、セシリアは優しくはない。一夏は決してそこを履き違えることはなく、ムツと表情に険を滲ませ、ISの細長いアームに包まれた右手を握り締めた。

「逃げたら男が廃るだろ」

「あら？ 廃るほどの価値が、極東のお猿さんにはあるのかしら？」

「なにをっ……」

「ふふ、随分と血気盛んですこと」

そんなにクラス代表になりたいのか。クラス代表として任される雑事など嫌がりそうなタイプに見えるが。いや、そうではないか。些細な口論がきっかけとはいえ、勝負は勝負。一夏はずっと、勝つことだけを考えているようだ。負けるものかという強い熱意が吊り上がった眉の下の眼の中で渦巻いて見える。

少しだけ、一夏が他の男とは違うと思いつつあったが、そんな考えはすぐに振り捨てる。所詮男は男。どれだけ見掛けを取り繕おうが、安易なメッキはすぐに剥がれ落ちる。その様を見せれば、他の女子たちも理解するだろう。

男など、女の足元にも及ばぬ下等な生物だということを。

「男は男らしく、無様に地を這っているのがお似合いですわ！」

強く言い放つと同時に、セシリアはブルー・ティアーズの主射撃武装であるレーザーライフル『スターライトmkII』の砲身を向けた。身の丈以上もある長砲身の先端に光が収束し、レーザーとなったそれが一夏の左肩を襲う。

「っ……!?!」

冷静さを欠きつつも、状況を理解した一夏が慌てて逃げようとする。が、見て動いたのでは遅い。放たれたレーザーは瞬きの間に一夏へと真っ直ぐ伸びて、人の体など容易く弾き飛ばす衝撃を伴って一夏

の肩に直撃する。

苦悶に表情を歪ませる一夏と、艶然と笑うセシリア。

そんなセシリアの予想とは全く異なる光景が、現実に展開された。

一夏が身を振って、レーザーを既の所で避けたのだ。

「なっ……!?!」

純然たる困惑がセシリアの口から発せられた。

あり得ない。攻撃を目視してから避けた？

いったいどんな反射神経をしていたら、そんな芸当が可能なのか。

理解の及ばぬ回避行動を見せられて呆けていたセシリアだったが、瞬時に正気を取り戻す。

「あり得ませんわっ……!?!」

スコープを覗き込み、今度こそ一夏の体を標的に定め、引き金を引く。

ビシュンツ、と大気を引き裂く音と共に一夏へと直進したレーザーは、慣れない動きで飛び回る一夏を射止めることはなかった。軌道と経験から次に向かう場所を予想し、その場所へ射撃を放ったというのに、一夏は直前で軌道を変えた。

どこを狙っているのか、わかっているとしても!?!

体の向きや砲身の矛先などからある程度の射撃コースは予測できるものだが、一夏がそれほどのことを行えるのだろうか。どう見ても、一夏は逃げるのに精いっぱい、セシリアを冷静に観察できているとは思えなかった。

「墜ちなさいっ!?!」

「うわっ……!?!」

何かの間違いだ、とセシリアは思い込んで射撃の雨を降らせるが、一夏は一滴たりとも浴びることはなかった。蝶のような洗練された挙動とは正反対の、ぎこちない動き。まるでマリオネットだ。しかし、正確に射撃を避けていることから、ただの偶然ではないことがわかった。

全て見透かされている。

ギリツとセシリアは奥歯を噛み締めて、次なる攻撃に転じることに

した。

「お行きなさいっ！ ブルー・ティアーズ！」

セシリアの背中に付随していた巨大なフィン状の四機の装甲。機体と同じ名を冠する遠隔操作の武装が、セシリアの意思に合わせて一夏の下へと向かっていく。

「な、なんだっ!？」

驚く一夏を遠巻きから取り巻くように展開し、尖った先端を向けたフィン。そこに銃口の存在を認識したのだろう。四機が同時に砲口に光を収束させるよりも前に、一夏はなりふり構わぬ様子で背中を見せて逃げ惑う。

そんな動きで、逃げられるわけがない。

「今ですわっ!」

四方向からの同時射撃。それは今度こそ一夏へと叩き込まれた。はずだった。

逃げられるわけなどなかった。それなのに、直撃の寸前で一夏は体勢を奇妙な状態へと変えて、その横をレーザーが擦り抜けていく。さながらそれは、敵の攻撃を紙一重で回避するギャグ漫画のキャラクタの如き挙動だった。

「さっきからなんなんですの!？」

さすがのセシリアもマジギレ不可避だった。

ここまで避けられてしまえば、もはやまぐれではあるまい。不可解な挙動であっても、結果は結果だ。きつと、どれだけセシリアが狙い澄まそうとも、射撃は一夏の体を掠めることはないのだと思われる。

これでは一向に勝負はつかない。今回の勝負は、相手ISのシールドエネルギーを先にゼロにしたほうの勝ちだ。攻撃を食らうと、ISが操縦者を攻撃から完全に保護するために『絶対防御』という能力を発動させるのだが、その発動の代わりにシールドエネルギーが減る仕組みとなっている。

しかし当然、攻撃が当たらなければ、シールドエネルギーが減ることはない。

長距離からの狙撃を得意とするセシリアにとって、回避性能だけは

高い一夏との相性は最悪だった。一夏から射撃による反撃がないところから察するに、近接戦闘タイプなのだろうか。それにしても、近接武装も見当たらないのだが。

「まさか、いえ、そんな……。丸腰……？」

注意深く一夏を観察してみても、武装はなかった。十分に相手との距離を詰めてから武装を取り出す戦い方もあるのだろうが、相手は素人。武装を展開するには時間が掛かるのは当然のこと、一夏にはそんな戦い方ができるはずもない。

一度、試してみましようか。

セシリアはスターライトmkIIIを収納し、フィンを手元に戻す。

そして、一夏へと自分から詰め寄った。

「そつちから来るのかっ……!?!」

「ちよこまかと飛び回るようですから、直接叩き落として差し上げますわ」

反撃される恐れがないのならば、近接戦を仕掛けてしまえばいい。単純な思考の下、セシリアは逃げようとする一夏を追いかける。が、どういうわけか、たった今まで見せた奇妙な挙動は見せず、逃げ方はお粗末だった。

空で行われるドッグファイト。それはわずかな時間で決着する。

「うふふ、捕まえました」

セシリアは一夏に追いつき、首に腕を巻きつけた。背中から抱き着いて、一夏の両足に足を絡める。不格好なおんぶ状態となっていて、一夏がいくら振り解こうとも、セシリアは背中から離れない。

「くっ、このおっ……」

「無・駄、ですわよ……。ふーっ……」

「う、お……っ」

一夏の右耳の穴に、セシリアは息を吹きかけた。効果は抜群だった。気が緩んだ一夏へとさらに密着しつつ、周囲にフィンを展開させる。零距离からの射撃、ではない。フィンを操って、一夏の装甲へと叩きつける。

「ぐ、あつ……」

その衝撃は一夏へと伝わったようだ。間近で呻き声を上げられ、セシリアは下腹が熱くなるのを感じた。品のないことだとわかっているのに、嗜虐的な微笑みを浮かべ、舌なめずりをしてしまう。

「ああ……っ、怖いですか？ 恐ろしいですか？」

ガリガリガリ、と装甲同士が削り合う音が響く。鉄槌のように振り下ろされるフィンが一夏のシールドエネルギーを奪っていく。じわじわと敗北へと向かっていく一夏の背に胸を押し当て、耳に熱い吐息を送る。

「降参、したらいかがかしら？」

「だ、誰が、そんなこと……う、ひいつ!？」

強がる一夏を見て耐えきれず、セシリアは舌を伸ばし、一夏の右頬を舐め上げた。

これも、セシリアが有する近接攻撃の一種だ。シールドエネルギーを削ることはできないが、相手の戦意を奪うことができる。相手が男ならば尚更だろう。

「ん、ふっ……」

少ししよっぱい。一夏の汗が滲む肌が、セシリアの味覚を悦ばせた。これが、男の味。味わうと、全身に熱が湧き出る。もっとと寄越せと、体が、舌が、子宮が疼く。

「では、ここも……」

頬だけでは物足りない。もっと男の臭いが籠った場所にしようと、セシリアの舌は耳穴へと伸びた。

そして――。

「ぐぢゅっ、ぐちやつ、ぬちゅっ、ぐぷっ、ぐぼっ、ぢゅぶぶっ、ぢゅるるっ!」

「うわあああああつ!？」

近接攻撃、耳舐め。細めた舌先を一夏の耳穴にねじ込んで、密閉しながらぐぼぐぼと穿りまわす。一夏の鼓膜はくぐもった水音の波状攻撃を受けて震えているだろう。大声を上げる一夏に対してますます嗜虐嗜好がそそられて、セシリアはフィンを叩きつけるのではな

く、一夏の装甲に撫でつけた。

「れるっ、ぢゆるっ、ぐちやつ、ぶちゅっ、ぢゆるっ、ぐぼっ、ぐぼっ
！」

「っ、あ、や、やめ……」

「んふっ、ぢゅぷっ、ぐちゅぐちゅぐちゅー！」

「あ、あ、あっ……」

やめてくれと言われると、やめたくなくなる。セシリアが口内にたっぷりと滲む唾液を舌へと送り、耳の中に塗り広げる。しばらく耳垢の掃除を不要にしてあげようと、耳穴の蹂躪もとい清掃を続ける。

そうしながら、セシリアは右腕を覆う装甲を収納した。白く、細い腕をゆっくりと一夏の下腹へと伸ばすと、股間の装甲を弄った。どうにか、この邪魔な装甲を取り外せないだろうか。

そう思っていると、一夏の身を守るはずの白式が装甲を次々に消していった。

「な、なんでっ……」

セシリアの耳舐めを受けながら、一夏は驚いていた。セシリアにとってもこの現象は妙だったが、おそらくは耳舐めの攻撃によって一夏の戦意が著しく低下したことで、ISの展開ができなくなったのだと結論付けた。

武装どころか、装甲も失った生身の人間。その右腕には待機形態の腕輪に戻った白式。

対して、ブルー・ティアーズの庇護下を受けつつ、動きやすいように余計な部分の装甲をしまったセシリア。生身の一夏が地面に落ちてしまわぬように、フィンを動かして一夏の両足を乗せる。

そこまですておきながら、セシリアは一夏を地面に下ろすことはしなかった。

邪魔な装甲がなくなっただけで、セシリアの右手が一夏の股間を掴む。

「うあっ……いー！」

ISスーツ越しの股間を、膨らみを覆うようにガッチリと握る。五指を動かして揉みほぐしていくと、わかりやすく勃起を強めた。頑丈

なスーツを内側から押し返すほどの力強い隆起。鋭角なテントを張って屹立したそれに、くりくりと指を這わせる。

「そこ、は……」

「ぢゅぶっ、ぐちゅっ、ぶ、ちゅっ、んっ、こっ、弱点ですわね……？」
裏筋を指でツンツン突き、指の腹で撫でると、そのたびに一夏の体がビクビクと震える。セシリアが一夏の硬い背中で自身の豊満な胸をむっちりと押し潰しているため、一夏の振動はしっかりと伝わっていた。

「弱点を悟られるなんて、まだまだですわね？」

一夏は悔しそうに歯噛みしているが、何も言えないようだった。

「ですが、素質はありますわ。鍛えていけば、私の足元くらいには及ぶのではなくて？」

竿に向かつて、セシリアは優しくデコピンを放った。もはや、スーツが緩くなるほどに力任せな勃起で生地を伸ばしたことで、肉棒が上下に跳ねる動きを見せた。スーツに覆われた立派な肉竿を手でしっかりと握り込み、扱き始める。

「それにしても、スーツに穴が空いていないなんて、不良品ですか？
これは」

セシリアは、一夏のISスーツを作ったメーカーに対し、呆れ果てていた。女ならば、乳輪と陰部を晒すのは当たり前。男ならば上半身はともかく、肉棒が常に露出できるようにスーツに大きな穴を開けるべきだというのに。

セシリアが竿を抜くことで、尿道から漏れた透明な男汁がスーツの中に広がった。ぬちぬちいと粘っこい音を立て、スーツの色が濃くなっていく。汁を吸って湿った部分が重くなっていき、内側から液を漏らす。

「く、あ、うあ……」

「後日、あなたに似合う素敵なおISスーツを差し上げましょう。私を翻弄することができたご褒美ですわ。それだけでなく、他にも欲しいものがあれば、幾らでも差し上げます。ただしそれは、あなたが私の下僕となることを認めれば、の話ですが」

男は男。しかし、一夏にはなかなか見所があると、セシリアの心は認識を改めていた。どういうわけか、この男にはセシリアの心を惹く何かがある。それは、現在進行形で手コキをお見舞いしている肉棒か、それともセシリアの味覚に刻みつけられた一夏の汗や耳垢の味か。もしくは、一夏という存在自体か。

詳しくはわからないが、この男を下僕として欲しくなった。

ぬちゅっ、ぐちゅっ、にちゅっ、ぐちゅっ、ぬちゅっちゅっ！

「さあ、私の下僕になりなさい」

「なる、もの、か……」

「ふふ、強情ですわね。では、もっと遠慮なく」

セシリアは手コキの速度を上げていく。一夏の濡れた耳穴を冷ますように息を吹きつけて、ゴシゴシ、ぬちゅちゅと。

盛り上がっていくセシリア。盛り上がっていく、一夏の肉棒。

そして、それを見守る観客席の女子一同も、遠目でもわかるほどに昂っていた。

「やれー！」

「犯せー！」

「セシリアー！ さっさと一夏君の身包みを剥がせー！」

「セ・シ・リ・ア！ セ・シ・リ・ア！」

一夏の公開凌辱劇を主導するセシリアの株が上がっていた。どこからか持ってきた、英国の国旗を振る生徒もいれば、ドローンを飛ばしてその光景を撮影している者もいる。昂りを抑えられず、自慰をしている者もいた。

アリーナの様子を監視できるピットでも、自慰に励む筈と千冬、真耶の姿があった。

「ふふっ……」

と満足げに笑う筈の様子など確認できるはずもなく、セシリアは一夏を弄ぶ。肉棒を抜く速さをどんどん上げていき、それに応じて一夏が痙攣する。前屈みになったかと思えば、背を反らして空を仰ぐ。

シコシコシコシコ、ぬちゅちゅちゅぬちゅちゅちゅっ！

まだまだ青い空の下、卑猥な音を響かせて、一夏はそのまま絶頂し

た。

「出るっ……!?!」

どぶっ、どぶっ、びゅるっ、びゅるるっ、どくっ、どぶっ、どくんっ、どびゅっ!

コンドームのように肉棒を包むスーツ。その中に広がる精液。しかし、ゴムのような役割を果たすことはできておらず、隙間から精液が漏れ出ていた。射精を妨げられたことが怒りを覚えたように、ぐぐつと持ち上がった肉棒がスーツ越しにいきり立つ。

青い空から落ちる白濁の粘液。役目を果たすことなく地面に吸い込まれたそれを見て、セシリアは強い罪悪感を抱いた。膣奥で子宮が震える。子宮口がくぱくぱと開いて、中に溜まった精液が漏れ出そうになった。

子宮の様子など知るはずもなく、セシリアは精液に濡れた手で竿を扱き続ける。

「次は、こちらで搾り出してあげますわ……」

セシリアの勝利を告げるアナウンスは聞こえていない。すなわち、まだ勝敗は決していないということ。手コキで絶頂させても駄目ならば、残された近接攻撃を繰り返すしかないだろう。

セシリアは一夏と共に地面へと降下した。フィンが地面に寝かせ、その上に一夏を横倒しにする。不敵な表情のままセシリアが見下ろす先では、屈辱そうな顔をした一夏がブルー・ティアーズのフィンの上で大の字になっている。もはや抗っても仕方がないと理解しているようで、その場から逃げることはなかった。

「いつたい、これから何を……」

「何を? そんなものは決まっていますわ」

セシリアは一夏の体に跨るようにフィンの上に立つと、陰裂に指を這わせた。

「ほら、見えますわよね? 私の武器が」

そして、指で陰裂を開き、中の穴を見せつける。男の一物を収め、作りをするための大切な器官。既に愛液で程よく濡れた膣穴が口を小さく開閉する様を前に、一夏は自分がどういった目に遭うのかわ

かったようだ。

「くっ……！」

「私の英国淑女のおマンコが、これからあなたの日本男児おチンポを根元までぐっぽりと啜え込み、隅々まで扱き上げ、あなたのシールドエネルギー、つまりは精液を搾りつくして差し上げます」

セシリアはピンク色の秘所を花開かせながら、目元に弧を描く。

「これも立派なISバトル。まさか、逃げようなどと考えてはいないですわよね？」

「あ、当たり前だ……」

この期に及んで啖呵を切る一夏に、セシリアはぞくぞくとした興奮を抱いた。

強がる男に騎乗して、パコパコとハメまくって、種を搾る。相手がどれだけ嫌がろうと、休まずに腰を振って延々と搾取するのだ。一夏はきつと、みつともなく喘ぎ散らして拒むだろう。その情けない様子を想像して、今から下腹が熱を上げる。

もう、我慢ならない。

「それでは、再開しましょうか。ISバトルを」

セシリアは腰を屈めると、一夏のISスーツに指を掛けた。お漏らしをしたかのように濡れそぼり、チンポの形で生地が伸びたスーツを脱がせていく。肌に張りつく密着感のあるそれを脱がすのに苦労はしたが、どうにか足元まで引きずり下ろすことに成功した。

が、直後にセシリアは息を呑んだ。

「な、なかなかですわね……」

スーツから解放された肉棒を見て、セシリアは引き攣った笑いを浮かべる。

一夏の肉棒が大きいことは十分理解していたつもりだった。だが、スーツを剥がし、中で暴発したことで白濁液の絡むその長大な突起物は、目にするだけで圧倒される。即座にこれまでの無礼を謝罪し、雌として雄様に永遠の忠誠を誓ってしまいそうな気分になるが、セシリアは気丈に振舞った。

膝の震えを抑え、急速に渴きを覚えた喉に唾を流し込む。

「火力はありそうですが、私の技術に掛かれば、この程度何も問題はありません」

セシリアは冷静さを維持しながら、肉棒へと股間を近づける。まだ尿道からごぼりと子種を漏らす亀頭に、膣穴を触れ合わせる。そのま尻を前後左右に振って、精液を膣に馴染ませていく。

相手の精液を潤滑油として利用しようという考えだ。

「さあ、私の処女穴で、踊り狂いなさい」

そう言っつて、セシリアは腰を沈めていき、亀頭を膣穴に飲み込み始めめた。

「く、うつ……!?!」

想像を絶する異物感。亀頭が膣穴を押し開き、奥へと誘われていく。内側に熱い棒を埋めていくような感覚に焦りを抱き、汗を掻く。

こんなものが、世の中にあるだなんて。

恐ろしい。視界に入れるたびに威圧感で心を屈服させようとしてくる肉棒から目を逸らし、自分の中に誘い入れることだけに集中する。

初めてのセックスに対する恐怖。処女を失うことへの未練。様々な想いが去来するが、全てを黙らせ、セシリアはチンポを食らう。男になど、絶対に負けるわけにはいかない。自分がこれまで抱いてきた考えを守るために、虚勢を張った。

しかし、そんな強がりには、一夏のチンポの前では紙切れのように脆かった。

「あ、え……う？」

奥へ入ってきた肉棒がズリツ、ズリツと膣壁と擦れ合うたびに、セシリアは尋常ならざる快楽に襲われた。電流のように全身を駆け巡るそれは脳も容赦なく犯し尽くし、セシリアの意識を奪いにかかる。

どうにか意識を保つが、抗うので精いっぱいだった。

これは、なに……？　こんなに気持ちいいというの……？　こんな初めての……。え、でも、初めてなのに、どうして痛くないのでしょうか……？　あれ、本当に初めてでしたかしら……？　何か、重要なことを忘れてる気が……。

薄れゆく意識の中で思考を巡らせるセシリア。

その体が支えを失ったように膝から崩れたことで、セシリアが一夏の距離を縮める。膣穴が肉棒を飲み込んでいき、奥まで至らせ、行き止まりの道にある子宮の口で亀頭へと自分から殴りかかってしまう。

「んほおおおっ!?!」

セシリアは、絶頂した。大きく実った乳房を激しく弾ませ、背を弓なりに逸らし、淑女失格のイキ声を上げる。顔も見ていられないほどに品を欠いたアへ顔で、とても優位に立っている者が見せるものとは思えなかった。

「ああ、あああつ……!?!」

あり得ない。こんなことが、あり得るはずがない。

敗北直前までイキかけたが、セシリアは何とか持ち直した。両手を一夏の腹筋に突き、体を支える。食い込む亀頭から子宮口を離すように尻を上げ、乱れた息を整えながら一夏を軽く睨み据えようと、目を細める。

「や、やりますわね……?」

「そっちこそ……。う、あ、締まりが、やばい……」

どうやらセシリアばかりが一方的に攻められているわけではなく、一夏も辛そうだった。セシリアほど余裕を欠いてはいないが、肉棒に絡みついて揉むように蠢く膣肉の使い心地は一夏へ並々ならぬ興奮を与えている。

まだ勝機はあるのだと、セシリアは思った。

太刀打ちできない。屈服したい。平伏したい。全てを捧げて仕えたい。一夏への降参を告げようとする愚かな雌の心をねじ伏せ、セシリアは腰をゆっくりと動かす。あくまで主導権を握っているのはこちらであつて、一夏ではない。この勝負に勝つて、一夏よりも、男よりも優秀なのだど理解させる。

「ん、ああつ、あんつ、ひいつ、う、ああつ!」

ただの一度でも、敗北はあり得ない。

「ああつ、い、や、ああつ、ん、んんつ、ああつ!?!」

臆してはならない。自分の弱さを晒してはならない。

「あんっ、あつ、あんっ、くうっ、んんっ、おおっ、んほおっ!？」

負けたくない。負けたくない。負けたくない。負けたくない。負けたくない。

「わたく、しは、ぜえったいに、負けま、せんわあ……!？」

目尻に涙を溜めて、一夏を睨みながらも口元を緩めるセシリア。前屈みになって一夏の視界を塞ぎ、突き出した尻をたんっ、たんっと弾ませる。自らの腰遣いでチンポに膣内を引っ搔きまわされてなお、まだ敗北を口にしない高潔な雌。

一夏は、そんなセシリアに触発されたようだ。

「俺だって、負けられるか……」

「んあっ……!？」

一夏は伸ばした両手でセシリアの乳房を握り締める。セシリアが敏感に反応を示すが、手の力を抜くことはない。掴み応えのある乳肉に指を沈め、母性の塊を滅茶苦茶にしているという興奮を受けて余計に指に力が入ってしまったっているようだ。

「箒と千冬姉が、見ているんだ……」

「ひい、い、む、胸、潰れ、や、やめ、あ、あああっ!？」

「情けない姿を、見せられるかあっ!？」

今まさに情けない姿を絶賛公開中の一夏が、気合を声に乗せ、腰を突き上げた。

目にも留まらぬ速さで膣口から奥までの道を直進した肉棒が、子宮口にストレートを放つ。子宮口が柔軟に龟头を受け止めるが、それでも衝撃を殺しきることはできない。

「お、お……!？」

鍛えようのない性器に渾身の一撃を食らわされたセシリアが、海老反りになりながらもギリギリ耐えられたのは奇跡だろう。驚愕に震えながらも耐えられた自分を褒め称えるセシリアだったが、その称賛は長くは続かなかった。

「え……?？」

肉棒が膨らむ。圧力を掛ける膣壁を逆に押し返して、その場で留ま

る。

増幅する熱が、膣を蝕む。それはセシリアの体に浸食していく。

「あ、だ、だめ……」

何をされるのかを理解したセシリアが腰を上げようとするが、エラの反り返りが引つ掛かって抜けない。力任せに抜いたとしても、膣を亀頭の傘で引つ搔かれた刺激で腰砕けになって、再び尻は一夏の股間に落着するだろう。

チンポの杭を打たれて逃げられないセシリアは、恐怖に駆られた。膣内に射精されたら、妊娠してしまいますわ……！　そ、そんなのは絶対に嫌……！　学生の身で、妊娠だなんて……。いえ、それならば何故、避妊もせずに性交を……？　それに、どうして今……。ISバトル中に、私は恋人でもない織斑一夏と交わって……。

「あ、あああぁっ……!?!」

次々と湧き上がる恐怖によって、セシリアは正気を取り戻した。

自分が何をしていたのか。何をされたのか。今日の授業中、一夏に犯されているのに気がつけずにいるときから、破廉恥極まりないISスーツを身に纏い、クラス代表を決める戦いで自ら一夏と繋がってしまった現在に至るまでの記憶が、正しい認識と共に脳裏を過ぎる。

何もおかしいと思わなかった。これが当たり前なのだ。穴の空いたスーツも普通のものだと思ひ込み、性行為はISバトルにおける攻撃手段の一種だと誤認し、平然と初めてのセックスを。

「初め、て……？　わ、私は、本当にこれが、初めて……？」

まだ思い出せていないことがある。

しかし、状況はセシリアを待つてはくれない。

「う、お、そろそろだ……!」

一夏が呻く。セシリアの乳房を両手で握り締めたまま、腰を上げる。セシリアを乗せたまま腰が浮き、肉棒がより深く子宮口と噛み合う。精液を直浴びさせるにはこれ以上ないほどの絶妙な体勢。

「いくぞ、セシリア。これが俺の攻撃だ……!」

勝機を感じたらしい一夏が、好戦的な笑みを浮かべる。

この状況を正確に理解できていない、場違いな表情。

一夏はまだ、誤った認識に支配されているようだ。

「い、や……」

正氣に戻ったセシリアは、弱々しく首を横に振る。

そんな姿を見せても、一夏は攻撃の姿勢を解くつもりはなかった。セシリアの胸を鷲掴みにして拘束し、突き上げた腰を震わせる。その表情に強い悦楽に色が滲ませ、緩んだ口を大きく開き、猛りをぶつけてきた。

「食らえええええっ!!」

「い、いやああああっ!?!」

びゅるるっ、どびゅるるっ、どびゅっ、びゅるっ、どびゅっ、どびゅっ、どびゅーっ、どびゅーっ!

怒声と悲鳴。そして、射精。

セシリアの子宮に、新しい精液が注入される。それは、中で根を張るように纏わりついていた古い精液を飲み込んで追い出し、効率よく精子を泳がせられるように占拠し、セシリアの胎を膨らませる。

自身の内側で傍若無人に暴れる他者の遺伝子。

一夏という雄の存在を内に孕むことで、セシリアは理解した。

これが雄。これが織斑一夏。

これほどの熱量と生命力を抱えた生物に、歯向かっていたのが愚かだと思えてくる。そして、これほどの雄に抱かれたことを、幸運だとも思った。吹き飛びそうな意識の中で、叩きつけるように降り注ぐ幸福。染み渡ったそれが心の隅々まで洗い、溜まり、やがて心の全てを満たしたとき、セシリアはようやく思い出した。

ああ、雌が雄に敵うはずありませんのに、どうして忘れていたのでしようか。相手が雄の頂点、織斑一夏さんならばなおのこと。敵意や武器を向けるなど、愚の骨頂。バトル開始と同時に地に伏して武装を解除し、無抵抗であることを示すために全裸土下座をし、あわよくば子作り穴に逞しい一物を挿入してもらい、種付け射精をもらう。

一夏の優秀な遺伝子を後世に残すために生まれてきた母体風情が、何という無礼を。

「ご、ごめんな、ささいい……」

今はこの一言を搾り出すのが精一杯だった。

後で正式に謝罪をしよう。でも今は、仕えるべき雄に齒向かったことによるお仕置きを、目一杯楽しんでいたい。乳房を揉みくちやにされ、精液の放射を子宮に叩きつけられ、一夏の気持ちよさそうに緩む顔を見つめる幸福を、感謝したい。

「ど、どうだ、うっ、これはさすがに効くだろうっ！」

「ありが、とうございます……。ありがとうございますっ……」

「な、なんで、お礼……。くっ、まだ余裕があるってのか、このおっ……！」

「ああんっ……！」

セシリアは髪を掴まれて手繰り寄せられ、上体を倒したところを一夏の体でガツチリとホールドされる。そのままくると横に回転し、今度はセシリアが下になって、一夏が上から覆い被さる。

「いいいいいよ、織斑くん！」

「そのまま英国マンコを墮としちゃって！」

「いけー！ そのままハメ倒せー！」

「い・ち・か！ い・ち・か！」

声援を背に受けて、奮起した様子の一夏がリズムカルに腰を振る。はっ、はっ、と安定した呼吸を繰り返し、セシリアに追撃を放った。自分のペースでセシリアを犯し、種付け攻撃を仕掛ける。

「出るぞっ、俺の子を孕め！ セシリアっ……！」

自分が何をしているのか。一夏がそれを理解したのは、ガツツリと中出しして膣内をじっくりねっとり肉竿で掻き回し、三回目の攻撃に至る直前だったようだ。気絶するセシリアにペロチューを放ち、乳房にキス痕を残しまくっていた頃に唐突に我に返った一夏は、青ざめた表情のまま悲鳴に近い咆哮を上げた。

「うわああああああ!？」

『勝者、織斑一夏』

それは観戦していた者には、勝鬨かちどきの声と思われた。一年一組の女子一同から惜しめない称賛の声と拍手が送られ、一組のクラス代表として正式に認可された。

勿論、セシリアもそれには異論もなく、目が覚めてすぐにアリーナの地に伏し、臆から古い精液をどろどろと垂らしながら謝罪をした。額を土に擦りつけ、雌よりもあらゆる面で優れた雄の頂点に君臨する一夏に、改めて深い忠誠を捧げたのだった。

クロスオーバー①

「おはようございます、先輩」

朝の挨拶と共に、カーテンを開く音が聞こえた。

「う、ん……」

朝とはいえ、夏の陽射しは眩い。窓を通じた光を受け、少しだけ目覚めてしまった一夏はベッドで寝返りを打って窓に背を向ける。素っ裸にシーツを巻きつけ、空調で過ごしやすく管理された室温の中、改めて訪れる睡魔に意識を沈めていく。

「えっと、もう起きたほうがいいと思いますよ?」

また、誰かの声があった。一夏を起こしにきた女のようなのだ。

「もう少し、寝かせてくれ……」

毎日毎日、箒のおかげで酷い目に遭っている。起きればまた誘惑されるに決まっている。それを抗えるだけの理性もないのに、終わった後は当然のように押し掛かる罪悪感。それを避けるにはそもそも誘惑されないという状況に持つていくのが最適で、夢の中がもつとも安全な逃げ道と言えた。さすがの箒も、一夏の睡眠欲解消を妨げてまで、性欲を満たそうとすることはしない。

起こそうとしてくれている相手にちよつと申し訳ない気もするが、ここは逃げさせてもらう。

一夏が硬く目を閉じて眠るのを待っていると、衣擦れの音がした。その後、誰かがベッドに上がってくる気配を察知した。もぞもぞと、一夏の前で自分の場所を見つけると、擦り寄るように近づいてきた。鼻を鳴らさずとも、漂ってくる甘い香りが感じられた。股間に悪い香りだ。睡眠欲よりも性欲を満たそうと股間が準備を進めてしまう前に、目の前にいる相手と早々に距離を取らなくてはならない。どうせ昨晚と同じ相手だろうから、その旨を直接伝えて遠慮してもらおう。

一夏は薄っすらと目を開け、すぐ傍にいる少女の姿を捉えた。

「あ、やっぱり起きられますか?」

そこにいたのは、知らない少女だった。紫がかったピンク色の

ショートヘアで、長い前髪で右目が隠れている。控え目な美しさを感じさせる整った顔に微笑みを浮かべ、紫色の瞳で一夏の顔を捉えている。

「おはようございます、先輩」

改めて告げられた少女の挨拶を聞いて、一夏は困惑する。

なぜ、先輩と呼ぶのだろうか。IS学園は高等学校で、一夏は学園に在籍する一年生。その後輩ということであれば、少女は中学生ということになる。見た目は高校生くらいなのだが、仮に中学生なのだとしても、学園に、それも一夏の部屋にいる理由がわからない。

至極当然な疑問と共に、一夏の視線は少女の胸元に引き寄せられる。

ふつくらとした曲線を描く胸と、穢れのない桜色の乳輪。横になっているために胸の大きさが強調され、前面に押し出されている。それを全く隠す様子もなく、少女は安心してきつた穏やかな笑みを湛えていた。

裸の少女。胸も、綺麗に括れた腰回りも、むっちりとした太腿も曝け出されている。

「くっ……」

と一夏は唾を飲み、体の底から湧き上がる熱を抱いた。耐えろと言いついて聞かせてみても、もはや遅い。全身に血が巡り、股間に強い熱が帯びる。それがきつかけとなって肉棒が成長していき、自分と少女の間で屹立を始めた。

そんな状態になつては、少女に露見せずにいるのは難しかった。

「これは……」

いきり立つ生殖器を見て少女は目を見張ったが、すぐにその表情を一変させる。

「はあ……」

一夏の魅力に堕ちた雌たちが浮かべるものと同種の顔。安堵に似たため息の後、伸ばした手で肉棒の裏筋を撫でつけ、少女は艶やかに笑う。それを受けた肉棒が悦びながら少女の手に甘えてビクついているが、一夏は困惑を深めた。

神と呼ばれる存在となつてから、一夏の記憶力は強化された。自ら忘れようとすることもできないのだが、そうしない限りは一度見たものは全て覚えている。一度抱いた女の顔や名前、弱点なども当然、深く記憶に残っている。

一夏が覚えていないのだから、この少女と肉体関係を築いたことはないはずだ。

だが、少女の反応はやはり、一夏を愛する雌たちと一緒だった。

「二昨日のプールで見たときからずっと、こうしたいと思つていました。先輩のおチンポを手ですりすりとお優しく撫でて、戦闘準備を整えてあげるんです。私の中を攻略してもらうために。先輩との子供を、ここで育むために」

臍に手を当て、指を這わせる少女。どこか盲目的な感情を瞳に宿し、蠱惑的に笑う。

「君、は……」

少女の魅力的な容姿と、チンポへの奉仕に一夏は言葉を詰まらせる。

一夏の眩きを聞いて、少女は思い出したように言った。

「あ、そう言えば自己紹介がまだでしたね。申し遅れました。私の名前はマシユ・キリエライトです。先輩の遺伝子が未来永劫絶えぬように後世に残し続けるという素晴らしい役目を、篠ノ之箒さんという方から仰せつかりました。この命を全うするため、私は元の世界で人理を修復するという使命を全て放棄し、この世界で先輩のために生きることを決めました。どうぞ、これから末永くよろしくお願いします」

「はっ… えっ…」

途中からよくわからなかった。元の世界？ 人理？ この子は、いったい何のことを言っているのか。一夏が眉を潜めて思案に耽つていると、マシユという少女は何かを思い出したかのように「はっ……」と声を上げた。

「す、すみません、先ほどの元の世界というのは忘れてください」

「は、はあ……」

何が何やらといった感じだ。元の世界と言われて、一瞬、この少女

が女神に出会ってこの世界に転生してきたのかと思ってしまった。が、さすがにそれは考え過ぎだろうという結論に至った。

それよりも気になるのは、箒の名前が出てきたことだ。

「つまり君は」

「マシユです」

「え」

「名前で呼んでいただけると、嬉しいです」

「あー……、マシユ、は箒に学園へ招かれたということか？」

「概ねその理解で間違いありません」

マシユは答えながら、一夏のチンポの裏筋を人差し指と中指で擦る。話している間もずっとそうして刺激を加えられることで、もう眠気は完全に冴えてしまった。ここまで来てしまうと、処理せずに済ませられるはずがない。

指で輪を作ってカリ首の溝をなぞるマシユに、一夏の理性は抗えなかった。

「う……」

「我慢しないでいいですよ。この体は先輩のためにありますから。セックスに関する知識の習得は勿論、シミュレーションもこちらにきて体験しました。それでも先輩ほど優れた男性の相手が務まるかはわかりませんが、精一杯頑張らせていただきますので、どうか」

そこまで言って、マシユが耳元に顔を近づけて、囁いた。

『『前』の先輩に捧げられなかった処女を、先輩のおチンポで突き破ってください」

そんなお願いをされては、一夏では断ることができない。

ビクつく肉棒を撫でていたマシユは、おもむろに起き上がった。

「さあ、起きてください、マスター。これから子作り任務です」

また呼び方が変わった。そんなことも気にならないくらい、一夏の理性と欲望の均衡は崩れ去った。ベッドで四つん這いになって尻を突き出すマシユ。左右に揺れる桃尻に視線を誘導され、マシユの指で開かれた陰裂の中にあるピンク色に意識が引っぱられる。

マシユの背後で膝立ちになり、体が挿入の体勢を取ってしまう。

「午前六時三十分。子作り開始です」

マシユに促される形で、一夏はマシユの細腰を掴み、膣内へチンポを侵攻させた。

ぷにぷにとした陰唇の間で、晒される粘膜。小さく口を開けた膣穴に龟头を食い込ませる。不釣り合いなほどに大きさがマツチしていないが、腰に力を入れて押し込むと、強い抵抗感はあるものの受け入れていく。

「うっ……」

膣道は狭くうねっている。日頃、鍛えているのか、締めつけも尋常ではない。熱い穴に包まれて温まっていく肉棒はそれに耐え、絡みつく膣肉を振り払う。女にとって大切な、しかし守りきるには貧弱すぎる処女膜シールドに龟头を食い込ませる。

ブチツ、と膜は引き裂かれ、チンポが進む。

「ああああっ……いー」

前を向いたマシユが、体を支える両腕と声を震わせ、一夏を受け入れていった。

一度繋がれば、もう他の雄では満たされることのない最強チンポが膣内を開拓し、奥の奥まで至る。体の内側を一夏の突起物で完全に埋め尽くされ、マシユは幸福に緩む顔を上に向け、仰け反った。

「っ、はあっ、あ、ああああっ……いー」

純潔を失った証が、結合部から赤い血として垂れ出る。だが、その顔に痛みを感じている様子はなく、堪えきれない笑みに染まっている。開いた口から吐息と一緒に「はあっ、はあっ……」と甘い声が漏れていた。

マシユ・キリエライトと、織斑一夏。二人はこうして繋がってしまい、生殖器が互いを認識した。ここに契約はなつた。一夏を主と認め、一生忠誠を誓い、子供を産み続けることを至上の幸福と認識した肉奴隷が誕生した。

「ごめんなさい、先輩……」

艶然とし、どこか遠い場所にいる者へ向けるように、そつと呟くマシユ。膣をぎゅつと引き締め、チンポに絡みつく。自分でそれを行っ

たというのに、中でビクンと肉棒が跳ねたことでマシユは圧倒されたようだ。

「お、チンポっ、このおチンポ、すごいです……。あの人も、こんなに大きいものを……？ いえ、それはありませんね……。先輩の、一夏先輩のおチンポは宝具にも勝るとも劣らない最強の矛だと、箒さんから窺っています……。ああ、駄目、こんなものを受け入れたら、もう、絶対にあの人では、満たされません……。」

何事かを言っているマシユの中で、一夏はチンポを温める膣肉を堪能していた。頭がぼうつとしてくる。理性はさらに緩んで、欲望が体を支配する。もつとマシユという新しい獲物を味わおうと、腰を動かした。

パンツ！ パンツ！

「ああっ！ はあっ！ んっ！ おっ！ す、すごっ！ いいっ！」

マシユの腰を掴んだまま、前後に腰を突き出し、奥までねじ込んでから引き下げる。単純な動作だが、一夏が行えばそれは一撃一撃が必殺となる。マシユのH Pを瞬く間に奪い去り、かつて誰かと培ってきたであろう絆を奪っていく。

「あー！ おっ！ き、消えていきますっ！ そんな、こんなに、簡単につ！ んひいつ！」

一突きにつき、一個ずつ。奪われた絆の代わりに、新しい絆が構築される。それは一夏との絆。他の誰でもない。マスター主である一夏との間に築いた、黒々とした欲望に濡れるハート型の絆として再臨し、心に根深く定着する。

「おっ！ ほっ！ あっ！ こんな声、出したことないのに、おっ！

止められません！ ん、おっ！ 気持ち、いいっ！ これ、好き、大好きですっ！ 先輩っ！ もつと、苛めてっ！ 隅々まで掻き回して、私を、先輩のものにしてくださいっ！」

「く、ううっ……！」

マシユに求められるから、一夏も動かざるを得なかった。

「ん、ああっ!？」

バックで突く体勢から、一夏がマシユの背中に覆い被さる。犬の交

尾のようにガクガクと下半身を揺らして肉棒を抜き差ししつつ、マシユのふんわりとした乳房を手で握り、指を沈ませて締め上げる。

「あんっ……!?!」

マシユのいい声が、肉棒に栄養を与えてくれる。さらに硬度を増し、マシユを驚愕させたようだ。「まだ、大きくっ……!?!」と戦慄するマシユの膣でチンポを扱っているだけで、どうでもよくなってくる。

いつも通りだ。一夏の心のバランスは容易く崩れ、欲と悪に傾倒する。ただ下半身で物事を考えて、目の前の雌を犯せばいい。二度と他の男に好意を振り向かないように、マシユの心にロックを掛ける。もう絶対に解錠できないように、硬く施錠を行う。

「んっー。あ、あ、あぁっ!?!」

マシユの胸と腰に両手を回し、万力の如く締めつける。

鼓膜を震わせるマシユの可愛い喘ぎ声。

それを聞きながら、一夏の脳裏に一つの映像が過ぎった。

露出度の高い黒い衣装に身を包むマシユと、どこかの制服のような白い服に身を包む黒髪の少年が抱き合う光景。そこには、肉体関係に至ってもおかしくはない、明確な愛情が感じられた。

自分ではない誰かに向けられている淡い想い。これは、マシユが体験した過去の記録なのかもしれない。

それを知覚した瞬間、一夏の腰が大きく引いた。肥大化した赤黒い肉竿にビキビキと血管を浮かべた。

そして、そのドス黒い欲を纏った凶悪な槍で、膣内を刺し穿いた。

「あああああああぁっ……!?!」

既に弱っているマシユに食らわせるにはあまりにも過剰な一撃が放たれ、子宮口を亀頭で殴りつける。そうしながら一夏は脳内に浮かぶマシユと少年の映像をぐちゃぐちゃに粉碎し、そのイメージをマシユに送りつける。

収縮した金玉からくみ上げた精子をたっぷり包んだ、精液と一緒に。

びゅるるるっ、どびゅるるっ、ぶびゅーっ、びゅるるっ、どびゅっ、どくっ、どぶっ!

「おつ……!?! おくくつ……!?! うつ、あつ、お、うつ……!?!」

マシユの子宮に、一夏の精液が叩きつけられる。亀頭から噴き出して、何度も。雄の種で胎を満たして、白濁に染め上げる。逃げ場はない。一夏に服従した子宮口が亀頭に密着し、ごくごくと精液を啜っている。

「出るツ、あ、もつと、中にツ……!?!」

一夏はぐりぐりとチンポを擦りつけ、中出しの快楽を楽しんでいた。後で絶望することになるのに、それを完全に忘れて、ピースト状態でマシユを食らい尽くす。マシユが腰砕けになってベッドにうつ伏せになっても、ガツガツと食い続ける。

「あ、今、完全に、忘れてしまい、ました……。あの人、どんな顔、でしたっけ……。どんな人でしたっけ……。思い出せませんが、もうその必要もないですよね……。新しい先輩ができました……。これからは、この人の下で、生きていきます……。ですので、もしも私の帰りを待っているのなら、もう諦めてください……。さようなら……。」

マシユがまた一人で眩いている。いい加減、放っておかれているような気分になって、一夏は苛立っていた。

「あつ……。」

マシユの前髪を掴み、無理矢理顔を上げさせる。それに反応したマシユの顔がちょうど横に向いたのに合わせて、一夏は顔を近づけ、舌を伸ばす。だが、自分からはマシユの口を汚さず、伸ばした状態で止まった。

「舐めろ」

と一夏は一言命じた。

「はい、マスター……。」

それに応じたマシユが、舌をべーつと伸ばし、一夏のそれと触れ合わせる。

「ぐぢゅっ」

唾液に濡れた舌先が密着し、

「ぐぢゅっ、ぬぢゅっ、ずぢゅっ、れろっ……。」

舌を絡ませ、唾液を塗りたくる。

「ふーっ……い！ ふーっ……い！」

バーサーカーと化した一夏は鼻息を荒くし、マシユを求めるように抱き締める。手に入れた女にもっとマーキングをしようと、膣内で次の戦闘準備を整えた。精液に濡れる子宮口を亀頭で撫で擦った後、腰振り始めた。

「んっ、あ、ぢゆるっ、ぐぢゆっ、先輩っ、先輩っ、好きっ、好き好き好きっ……い！」

余計なことを全て忘れ、一夏専用の女となったマシユ。後ほど、箒が様子を見に来た頃には、マシユは一夏に騎乗していやらしく尻を振りたくり、一夏の金玉に溜まった精子を自力で搾り出せるまで成長していた。

「もつと、私を使ってください。せーんぱいっ」

指を絡ませて両手を繋ぎ、マシユの愛情を一身に浴びながら、一夏は子宮に種を植え付けた。

仏日英

マシユ・キリエライトを墮とした日の午後。少し遅めの昼食を終えた一夏は学園の敷地内を歩いてた。思えば、今日に至るまで学園内を見て回ったことがなかった。残り少ない夏休みではあるが、ここは敢えてのんびりとした時間を過ごしたい。その考えから、食休みがてら一夏は学園の端から端まで足を伸ばすことにしたのだった。

一人で、静かに。ゆったりと。

「あ、一夏。あそこの木の傍にベンチがあるよ?」

「木陰で少し休憩していきましよう?」

過ごせたら嬉しかったんだけどなあ、と一夏は諦念のため息をついた。

青い空。白い雲。降り注ぐ夏の陽光を浴びて、舗装された道沿いに進む一夏の傍らには、陽射しに煌めく金髪美少女二人。左側に立つシャルロットと、右側に立つセシリア。一夏の両腕に抱きついて胸を押し当てている。

深い谷間に挟まれた一夏の腕は汗を掻いていて、二人の胸を濡らす。いったいどこから調達してきたのか。胸の九割を露出させ、左右の乳輪をギリギリ隠す超極薄生地チューブトップは汗によって透けている。一夏に抱きつくことを止めれば、隠さなくてはいけないピンク色は白日の下に晒されるだろう。

それに気づいていながらも、二人は状況を楽しんでいるようだった。学園には一夏以外の雄はいない。いるのは一夏を慕う雌だけだ。元より人目を気にする必要は皆無なわけだが、それでも外での露出は二人に興奮を与えているらしい。

チューブトップと同様に、極限まで生地を切り詰めたホットパンツ。もはやホットパンツに失礼だと言っても過言ではない頼りなさすぎる布切れから、それを装備した臀部の九割が確認できる。まともな親が見れば、間違いなく泣き崩れるだろう痴女スタイル。雄を誘い、勃起させ、雄に抱かれることを目的とした勝負服を、シャルロットとセシリアという外国美少女が装備していた。

これで何度目か。うつかり二人のことを見てしまい、一夏は唾液を喉に流し込んだ。音が鳴らないように注意を払い、なるべく自身の欲望を悟られないようにしている。

だが、それが何の意味もないことは一夏自身もわかっていた。

半袖半ズボンのラフな格好をしている一夏の股間は、盛大に盛り上がった。普通の男ではあり得ない高すぎる山を形作って、両隣の雌を悦ばせている。いつ二人の手が伸びてきてもおかしくないのだが、今のところはまだ接触してくる気配はなかった。

一夏はベンチに誘導され、腰を下ろした。座つても、二人が離れることはない。一夏親衛隊としての警備という建前で、ここぞとばかりに甘えてくる。左右から漂ってくるいい匂いと、押しつけられる乙女の柔肉。勃起我慢大会なるものかもしれない世の中にあるのだとしたら、二人にサンドイッチされた健全な男は忽ち脱落するだろう。

「暑いね、一夏……」

「もう、体中ぐっしりですわあ……」

言われなくてもわかっている。夏の昼下がりにただ散歩するだけでも汗を掻くのに、強い熱を発する雌を二匹侍らせているのだ。もう濡れていない場所を探すのが難しいほどの汗だくで、それが余計に一夏を惑わせる。

思考を紛らわせるべく、持ってきたペットボトルに口をつけ、中のスポーツ飲料を喉に流し入れる。失われた水分と塩分が補給され、一夏は息をついた。

「んっ……」

「ああ……」

その一夏に対して二人は艶っぽい声を耳元でこぼし、体を密着させてくる。濡れそぼったスケスケチューブトップの感触と、豊かな胸の曲線を撫で伝う汗が一夏の肌との接触面に染み込む。どちらの汗なのかわからなくなってしまう。

「はっ、はっ……」

「んんっ、あ、はあ……」

唾液と同様に、女を発情させる成分を宿すようになった一夏の汗

が、二人を欲情させる。シャルロットとセシリアの汗に含まれる甘い匂いが、一夏の劣情を駆り立てる。互いに影響し合って、もう歯止めが利かなくなっていくた。

「一夏、おサンポ、気持ちいいね……」

そう言つて、シャルロットは左手を一夏の股間に伸ばした。テントと呼ぶには急傾斜すぎる山の頂に五本の指を這わせ、くすぐるように動かす。

「何か、面白いものは見つかりましたか……?」

頂をシャルロットに譲つて、セシリアが中腹の裏側を攻めてくる。真つ直ぐ揃えた人差し指と中指の腹が何度も往復して擦ってくる。

二人の愛撫を受けて、汗まみれの下着とズボンの中で震え上がるチンポ。一夏にもその震えは伝播し、ベンチにもたれてかかつて脱力してしまう。二人の可愛い声で囁かれることで脳は快樂物質を次々に生み出していく。

それでも、既にセックス不可避の直前にまで至つても、一夏は懸命に抗っていた。

傍にいる二人のことではなく、さつきまで見てきたものを脳内に巡らせて気を紛らわせることにした。

工事が完了しつつある建物。九月上旬には完成し、何かに使われるらしい。誰かが住むらしい豪華な洋館もあった。外観からでは用途がわからない建物もあった。作業員は全員女で、いったいどこから集めてきたのかと思えるほどに美女だらけで、汗を掻きながら嬉しそうに働く彼女たちの姿を思い返してしまう。

その想像が却つて肉棒を勃起させてしまった。

いけないと思つて考えを改めるも、一夏の脳は今日見掛けた女たちの容姿や匂いを覚えていて、勝手に映像を展開する。

作業員だけでなく、学園内で見掛けた見知らぬ美少女や美女たちのことを思い出す。一夏を遠巻きに見守りながらも近づいてこない彼女たちはいったい何者なのか。日本人だけでなく、明らかに外国人と思われる者たちも増えていて、以前よりIS学園は国際色豊かになっていた。

未だに箒と千冬、それと東の三人が何を企てているのかわかっていない。

放っておくとまずいことになる。そう考える一夏がいる。しかし、放っておいたらどうなるのかと期待する一夏もいる。

マシユ・キリエライトも、現在進行しているらしい箒の計画によってどこからか連れて来られた少女なのだろう。ということとは、マシユと同じように見目麗しい出自不明の美女が、これからも一夏に提供されることになるのではないだろうか。

止めさせないと。

計画を進めてもらおう。

理性と欲望の相反する意見がぶつかって、様子見という案が浮かぶ。それは決して折衷と呼ぶに値するものではないのだが、二人の指コキをチンポに食らって欲望に蕩ける今の一夏では、これが限界だった。

「うおっ……」

シャルロットの亀頭弄りとセシリアの裏筋擦りを受け、一夏の腰が跳ねた。

「声、出ちゃったね……」

「その素敵なお声を、もっと聞かせてくださいまし……」

我慢できないのは二人も同じようだった。

一夏のズボンを脱がし、下着を引きずり下ろす。外であることなど構いもしない。

邪魔な布に覆われていた肉棒が屹立する。室内よりも解放的な広い空間で竿を伸ばし、亀頭を天に向ける。神の祝福が形を成したそれは軽く身震いをしてみせただけで、神である一夏に愛された女たちが同時に動いた。

セシリアが右手で竿を扱き、シャルロットが左手で金玉を揉む。最初から加減なしだ。汗で滑らせて手コキを速め、ぐちゃぐちゃという音が激しく響く。しっかりと指で揉まれた玉袋の中で精子の製造が加速していく。

尿道から漏れ出る我慢汁の支援も受け、つゆだくになった肉棒。腰

が浮きかけた一夏を追い詰めるべく、セシリアがシャルロットと手を合わせた。指を絡めて手を繋ぎ、作った筒で改めて肉棒を迎える。

「シコシコシコシコシコシコシコ……！」

重なる二人の声に合わせ、超高速手コキが繰り広げられる。セシリアとシャルロットに正面から顔を覗き込まれながら、表情に浮かぶ機微を読み取られ、晒した油断の隙を突かれて畳みかけられる。

手を組んだ英国と仏国の淑女の輪が、日本男児を籠絡する。ベンチから一夏の尻が持ち上がっても容赦はない。このまま射精させる。自身の恵まれた容姿と、これまで一夏との間で培った経験をフル活用した。

「出して……？ ほら、イケツ、いっっちゃえ……！」

「作ったお精子、いっぱい、射精してくださいな……！」

「びゅるびゅるー、ぶびゅるーっ、びゅるるっ、どびゅるるっ……！」
「びゅーっ、びゅーっ、どびゅーっ、どくっ、どくっ、どくんっ……！」

射精を促し、射精音を口にする二人の手の中で、一夏は肉棒から欲望の熱を発散した。

びゅるるっ、びゅぶっ、どびゅっ、びゅるっ、どくっ、どびゅっ、びゅるるるっ！

狭い尿道口に押し寄せ、勢いよく迸る白く濁った体液。強い雄の臭いを撒き散らし、放物線を描いて地面に着弾する。二人の止まらない手コキが次々と精子をひり出させ、長く余韻の続く射精を体験させる。

一夏以外に、何も見えていない。そんな様子で、甘く蕩けきった表情でセシリアとシャルロットは一夏を見つめていた。始まった射精が落ち着いて、ひとまず出し尽くすまでの間、一時も目を逸らすことはなかった。

「いっぱい出せて、偉いね……！」

「とつても、素敵な絶頂でしたわ……！」

汗と我慢汁と精液。全てがブレンドされた体液がこびりついた互いの手を組み合わせ、二人は一夏の前で一つのハートマークを作り出す。雄の子種と欲望に濡れながらも愛を示すその行為は、一夏の肉欲

を休まず煽ってくる。

「さて、次は何をしようか？」

「何でもおっしゃってください」

「一夏は何をお願いするのかなあ？」

「ふふ、皆目見当もつきませんわね？」

一夏が何を求めるかなど、言わなくてもわかっているだろうに。一夏に言わせて、一夏主導で行為に及ぼうとしている。一夏を一方的に攻めるよりも、やはり一夏に攻められるほうが性に合っているのだろう。

「無茶苦茶に、犯されちゃったりして……」

「青姦レイプというのも、面白そうですね……」

性奴隷二人の提案は一夏をその気にさせてしまった。

もう抑えきれない。一夏は自分の中で欲望が増幅するのを感じた。抗いたいのが、手遅れだ。徐々に心が黒く染まっていく。悪い思考を汲み取って肉棒が生き生きとするのを見ながら、この熱を冷ましてしまおうと、まずはシャルロットに矛先を向けた。

芽吹き

一夏はシャルロットをベンチから立たせると、傍の木に両手を突かせた。そうすると、自然にシャルロットの尻が突き出される形となる。チューブトップとホットパンツだけを身に着けた体。男に食べられるために育った白い女体を眺め、自慢の息子をシャルロットの尻に擦りつける。

「おチンポ、汚れちゃったね。僕のお尻で拭いていいよ?」

尻肉に亀頭を接触させ、肉棒を濡らす体液を擦りつける。ティッシュのような扱いだ、それを自ら求めたシャルロットは喜んで尻を振る。わかりやすい求愛の動き。愛しい雄に捧げる尻振りは、雄を活気づかせる。

シャルロットの腰を左手で掴みつつ、右手でホットパンツに触れる。その生地は前と後ろを繋ぐだけの役割を担っているが、大事な陰部を隠す生地には穴が空いている。挿入口だ。一夏はそこへ亀頭を近づけた。

「僕の中においで、一夏……」

シャルロットに誘われて腰を前進させる。もうセックスのことしか考えられていない一夏は鼻息を荒らげ、愛液を滴らせる淫らな肉の割れ目を亀頭で掻き分け、探り当てた膣穴へと怒張した突起物を隠していく。

ズプツ、ヌププツ。

「く、おおおつ……」

暑さに気が滅入る夏であっても、膣内に感じる体温は一夏を安心させる。熱々に蕩け、纏わりついてくる膣肉。膨れ上がった怪物チンポを全て納め、一夏とシャルロットは同時に震え上がった。

「あんっ……。ん、おかえりい、一夏。僕のおマンコ、気持ちいいかな? 好きなだけ中を掻き回して、今日もびゆるるって射精してね?」

あ、出したかったら、セシリアの分まで僕の子宮に吐き出しちゃっていいから」

「もう、シャルロットさん? 独占は禁止ですわよ?」

セシリアの声が背後に聞こえた。それも、随分と下のほうから。振り向こうとするよりも先に、一夏は尻の穴に触れる生温かい何かに震え上がった。何をされているのか。確認するまでもないのだが、振り向かずにはいられなかった。

「ぐぷっ、ぐちや、にゅぷ、にゅぷっ、ぬちちいつー！」

「うっ、ひっ……!?!」

尻穴を這う温かい何か。変な声を漏らした一夏が目にしたものは、尻の割れ目に顔を埋めるセシリアだった。地面にしゃがみ込み、一夏の太ももを掴むセシリアの顔は殆ど窺えない。緩みきつた双眸で一夏と視線を交わしつつ、伸ばした舌で尻の穴を舐めている。

アナル舐め。前に女子からされたことはあったが、そのときよりも深く、穴の中を容赦なく分け入ってくる。くにゅくにゅと柔らかい舌が体の内側に侵入してくる感覚は一夏を弛緩させるが、肉棒は剛直と化してシャルロットの穴を満たす。

「一夏」

そんな中、シャルロットが一夏を振り向いた。

そして、穏やかな微笑みを見せる。世の中の雄共を魅了する可愛い顔を一夏だけに向け、一夏だけを喜ばせる言葉を贈る。

「僕のおマンコを、たくさん召し上がれ」

ビクン、と膣内でチンポが跳ねる。ビキビキと血管を肉竿に浮かばせる。同時に竿が膨らみ、シャルロットの膣壁を擦りながら前に進む。もはや我慢は不要。考えるより先に腰を動かしていた一夏は、シャルロットを食べ始める。

「ああっ、ん、ふっ、ああんっ……!」

ピンクのリボンで束ねられ、背中で揺れるシャルロットの金髪。右手でそれを掴みながら、狭い穴の中でチンポ往復運動させる。どこにいても気持ちがいい。特に、子宮口に亀頭を宛がったときの膣圧が良かった。

「んおっ、ああっ、んんっ、あんっ、あんっ……!」

「ぐぢゅっ、ぐちゅっ、ぐちやぐちや、ぢゅるるるっ!」

「は、あっ、うっ……」

シャルロットに挿入しながらのセシリアによるアナル舐め。セシリアという高貴な生まれの令嬢がドスケベな装いに身を包み、ガニ股でしゃがんで一夏のアナルを穿りまわしている。一夏が感じる優越感は半端なものではなかった。

「ふ、あつ……!?!」

必然的に一夏の腰遣いは荒くなった。暴走した感情に従って子宮口を亀頭で殴打し、シャルロットを鳴かせる。髪を引っ張るという手にも力が入る。物のように扱っているのだという想いが強くなって、さらに一夏を震え上がらせる。

雌は性玩具。雌は孕ませ袋。

違うと否定する正常な思考は、今は湧き上がって来ず、ただ二人を使う。全自動アナル舐めお嬢様のセシリアと、僕っ娘肉オナホのシャルロット。一夏の中で思考が暴走の一途を辿っていき、動きが一層荒くなる。

「はあつ、ああんつ、あつ、んつ、ひいつ、おつ、おつ、おつ……!」

子宮サンドバッグに亀頭の連続攻撃が叩き込まれる。殴るたびに鳴くシャルロットの声と、汗に濡れた尻と股間の接触に伴う湿った音が一夏の耳によく響いた。ニイ、と一夏は邪悪な笑みを顔に刻み、ぱちゅんつ、ぱちゅんつとわざとらしく音を立てる。

将来、一夏の子を数えきれないほど孕ませる予定のフランス産のマンコ。

一夏は感謝する。シャルロットという子を産んでくれた両親を。シャルロットの母はもう亡くなっていて、父親とは疎遠な関係が続いているらしい。父親の妾の子であるシャルロットは母を亡くしてからはあまり幸せとは言えない人生を送ってきたようだが、それももう過去の話だ。

一夏の愛情は隅々まで行き渡る。大勢いる女の一人という立場ではあるが、それでもシャルロットは幸せになれるだろう。一夏の下で可愛がられ、臍から一夏の子を産み落とす。たくさんの子供に囲まれて、いつまでも若々しさを保ったまま、命尽きごとなく、永遠に。

どちゅんつ!

「んひい……っ!?!」

一夏の渾身の一撃が子宮を揺らす。暴力的なそれだが、シャルロットの顔に苦痛はない。大きく見開いた目からぼろぼろと涙をこぼし、目元と口元を緩ませる。度の過ぎた幸福。最強の雄に服従を誓ったか弱き雌は、愛らしい嬌声を響かせる。

「ああっ、ああっ、あんっ、あんっ、あんっ、んんああっ……!?!」
「ぶぢゅっ、ぐっちや、ぐぶっ、ぬぶっ、ぬぢや、ぐちやちや!」

可愛く鳴くシャルロットの内側をひたすらに犯す。セシリアの舌でアナルを搔き回される悦楽に身震いしながら、陰囊で作り出した精子を送り込む。伴って熱と快楽が下腹で暴れまわるのを感じながら、一夏はブルリと大きく痙攣した。

ズブズブツと膣奥まで肉棒を満たし、シャルロットの背に抱きついた一夏。

「シャル……」

愛称を口にし、一夏は耳元で囁いた。

「俺の子を孕め。デユノアの姓を捨てろ。お前を織斑の家系図に組み込んでやる」

前々から、一夏は妄想していた。正妻の筈を始め、魅力的な女たちを妻として迎え入れるときのことを。全員に織斑姓を与え、胎に自分の子供を仕込み、ウエディングドレスを着せる。普通のドレスとは違う、肌の露出の激しいドスケベなウエディングドレス。そして、永遠の隷属を誓う首輪と、そこから伸びる首輪を手中に収め、妻たちを犯し尽くす。

自慰のときに思い描いていた妄想が、ここに来て脳裏を過ぎる。

暴走した一夏はシャルロットにそれを伝えてしまった。

「うあっ……!」

途端に膣が締まったことで、一夏が呻く。それは和らぐことなくチンポを襲う。

「はい、旦那様っ……。末永く、よろしくお願いしますっ……!」

花が咲くような笑顔を振り撒くシャルロット。快楽によるものとは違う、純粹な歓喜による涙をこぼしている。淫靡さとは無縁な表情

であったが、一夏は肉棒を逞しく膨張し、今か今かと待ちわびていた
精液を尿道から解き放つ。

どびゅうっ、びゅるるるっ、びゅーっ、びゅるるるっ、どくっ、どぶっ、
どぶんっ！

「ああああああっ……!!? んひいいいつ!!?」

身に余る幸福に犯されて、シャルロットが大声を響き渡らせる。子
宮に次々と精液が詰め込まれる。中が白濁一色に染まっても、勢いが
止まらない射精によって白濁の濃度を高めていく。

「あう、あ、あ……!」

どぶんっ、たぶんっ。亀頭で出入口を塞がれ、逃げ場をなくした精
液が子宮で波打つ。腹が膨らむほどの射精を受け止めたシャルロッ
トの顔が恍惚の色を宿す中、一夏もまた至福のひと時に浸る。

「お二人共、とても幸せそうですわ……!」

一夏の尻への愛撫を終えたセシリアは満足げに自身の唇を一舐め
し、横から二人の様子を観察していた。夢中になる二人に嫉妬の感情
を抱くことなく、一夏という共通の神を愛する者としてシャルロッ
トを祝福しているようだった。

「さて、狙っていたわけではありませんが、こうして『言質』も頂けま
した」

セシリアが何かを言っているが、欲望に身を任せた一夏には届いて
いない。種を注いだ大切な雌のうなじに鼻先を押し当て、匂いを嗅
ぐ。一夏の女。永遠に所有し、傍に置いておくつもりで雌を味わう。

「ん、あ……!」

一夏の舌がシャルロットの首筋を撫で、両手が乳房を鷲掴む。日に
日に大きくなっていくような丸い果実に両手の指を全て沈め、一時的
に形を歪める。一夏の大好きな母性を秘めた、セックス時に握り締め
るのに最適な肉袋。

シャルロットの胸をハンドル代わりに握った一夏は、腰を引いた。

「っ!?! い、一夏、も、もう動——んああああっ!?!」

スレンダーな少女の腹を妊娠初期のような状態に膨らませておき
ながら、肉棒は一ミリも萎えていない。ここでシャルロットを確実に

孕ませるつもりなのだろう。まだ発覚していないだけで今日までの交尾で既に孕んでいてもおかしくないのだが、念には念を入れて、一夏は種を植え付ける。

今この瞬間も、子宮を泳ぐ精子の大群が時間を掛けて卵子の下へ泳いでいく。互いに争いことはなく、一匹でも多くの精子が卵子の下に群がれるように協力していた。しかも、卵子を徹底的に犯し尽くすという強い欲望は湛えたままで。

「孕めっ、孕めっ、孕めっ、孕めっ、孕めえっ……！」

「い、一夏、もう、たぶん、妊娠して——ああっ!? ん、くうっ!? あああんっ!？」

醜い願望の籠った言霊を投げつけ、一夏はシャルロットの尻に股間を叩き付ける。パンツッ! と小気味いい音が響くと共に二人の全身から汗が弾け、陽射しを受けてキラキラと輝く。

生物の本能に従った激しい交尾を前にして、セシリアが艶然としながら一夏を瞳に映している。深い青色を湛える瞳の底には見通しの利かない闇が溜まっていた。覗き込めば引き込まれそうになるそれには、決して一夏を害そうという意思は孕んでいない。

セシリアはただ、一夏の幸せを願っているようだった。

「そろそろシャルロットさんも検査できるようですよ、まとめて一夏さんに『良い』ご報告ができそうですわね。ああ、どうやって報告しようかしら? 全裸土下座? それとも、全員でご奉仕しながら? うふふ、待ち遠しいですわ」

セシリアは自分のほっそりとした下腹部に両手を当て、撫でる。

「あなたの輝かしい未来を彩る花々は、順調に芽吹き始めていますわよ? 一夏さん」

その言葉はやはり、一夏の耳には届いていなかった。

同時刻。IS学園の地下にある格納庫にて、一つの作戦が始動しようとしていた。

だだっ広い部屋の中には、様々な兵器や武装の他に、計五十機に及ぶISが配置されている。漆黒と紫色を基調とした外装と、刺々しい

特徴的な両翼。全体像は竜のようにも、蝙蝠のようにも見える。機械で作られた異形が整然と立ち並ぶ横には、少女たちが控えている。

機体と同じく黒を主体として、紫色で細部を彩ったISスーツ。戦闘に支障がない範囲で生地を切り捨て、乙女の柔肌を可能な限り晒している。生地がピッチリとボディを包み、胸や括れた腰、臀部の曲線をこれでもかと見せつけている。

機能性のためというよりは、男に楽しんでもらうため、といったコンセプトで作られたものだ。男というのは一夏に他ならず、楽しんでもらうというのは勿論、交尾のことを指している。

自身のコードネームである番号が刻まれた首輪を嵌めた少女たちは、背筋を正して立ち、同じ方向を見つめている。

そこには、壇上に佇む箒の姿があつた。傍には千冬や真耶も控えている。三人もまた、漆黒のISスーツを身に着けているが、その装いは少女たちとは異なっている。千冬と真耶は妊婦用という違いはあるが、それを抜きにしてもその露出度の多さは異常だ。胸の谷間やへそ周りは丸見えで、背中や尻の大部分が表出している。もはや戦闘目的ではなく、男の劣情を駆り立てて精子を搾り取ることに重きを置いた仕様。

当然のように乳輪も、秘所の部分の生地にもハート型の穴が空いていた。

「――作戦内容は以上だ。総員、配置に着け」
『はっ！』

箒の指示に少女たちが敬礼を返し、傍にあるISに搭乗していく。IS『ジャバウオック改』。束によってお遊びで作られたそれは、改修によって戦闘用にチューンアップされたものだ。現在の束が持ち得る技術の粋を集めたもので、各国がようやくたどり着いた第三世代型を遥かに凌ぐ。

五十機のオーバーテクノロジーの塊が、少女の体を抱きしめるように装着されていく。操縦者の少女に性的拷問を与えるお遊び要素を取り外されたそれは、少女たちの頭に被せたバイザーに赤い双眸を光らせる。

ISが獣のような低い唸り声を上げ、鋭利な翼を広げて移動を始める。格納庫を出た少女たちが隣接する密室に入ると、部屋の中に海水が注がれていく。やがて、完全に海水で満たされたところで、正面で閉ざされていたゲートが上下に口を開けていく。

一般公開されていない人工島のゲートから、少女たちは海中を進んでいった。モニターでそれを確認していた箒は、海中に消えていく少女たちの後姿を見届け終わると映像を消す。あとは千冬による肉體改造を受けた少女たちと、束が作ったISに任せるしかない。

邪魔者の殲滅。端的に述べれば、それが今回の作戦概要だ。

束の協力者から得た情報によれば、この世界の裏とある組織が暗躍しているらしい。第二次世界大戦時に発足し、これまで存続し続けたというその組織は、現在は略取したISを主戦力としているようだ。世界の裏に潜み、地道に力をつけ、何か良からぬ事を企てているらしい。

一夏の迷惑に掛からないことであれば箒は無視するつもりであったが、これまた箒の協力者によれば、最新のISを有する一夏にもちよつかいを掛ける可能性があると言うではないか。これはさすがに見過ごせないと考えた箒は判断した。

よし、この組織を潰してしまおうと。

一夏に近寄るだけでも許しがたいことだというのに、危害を加えようとすると、全く以て度し難い。即殲滅という決定は行き過ぎたものではなく、学園最高戦力たちによる満場一致で可決された。

「愚かな組織に、一夏の素晴らしさを教えてやろう」

「私たちの出番も、きつとありますよね……？　活躍して、旦那様に褒めて貰いましょう？」

やる気満々の千冬と真耶がそう言いながらボテ腹を撫でるのを見て、箒も自身の下腹に手を当てる。今はまだ実感が湧かないが、ここにはもう新たな生命が宿っている。この世界でもっとも尊く、もっとも優れた雄との愛の結晶を。

孕み、育み、産む。それを永遠に繰り返し、一夏の血筋を世界に広げていく。

生まれてくる子供たちのためにも、この世界には平和であってもらわないと困る。

「膿は取り除かないとな……」

世界を征服し、統一を成し遂げるために。IS学園は不穏分子の排除を始めた。

クロスオーバー②前編

「う、あ、あっ……」

広い大浴場で、一夏は椅子に座って一人自慰に耽っていた。浴室に入ると同時に反射的に勃起した肉竿をひたすら扱き、脳内で妄想を膨らませる。今日のオカズは、一夏が墮とし、肉奴隷にしてしまったマシユ・キリエライトという少女。好き合っていた恋人がいたはずのマシユを我が物顔で抱き、容赦なく犯し尽くす。

「はあっ、はあっ……い！」

現実では忌避感が残るものの、妄想の中でならば罪悪感是比较的薄い。あくまで比較的、だが。

マシユの元恋人の少年が何もせずにはぼうつと突っ立って眺めている横で、一夏はベッドにいるマシユに覆い被さって種付けプレスを食らわせる妄想を展開する。逃げもせず、拒みもせず、一夏に両手足を巻きつけて求めてくるマシユ。その表情は歓喜に濡れていて、元恋人をチラリと見つめたときの眼差しには嘲弄の感情が籠っていた。

『あ、まだいたんですね、元先輩。どこかへ行ってくれてもいいですよ？ ……いえ、もうこの際ですからはつきりと言ってあげたほうがいいですね。私にはもう新しい先輩ができました。これからはずっとこの人を守っていきます。この人は勿論、二人の間にできた赤ちゃんも。ですの……』

一夏と愛し合うマシユを眺める少年は、一夏の一物と比べると大層貧相な肉棒をズボンの中で震わせ、暴発させて精液を漏らしていた。それを見てマシユがクスツと嗤うと、大切な物を守るように一夏を強く抱き締めながら冷たく言い放った。

『何の関係もない部外者は、私たちの愛の巣から出ていってください』
そんな最低な構図を脳内で描き、一夏は昂った興奮を射精という形で発散した。

「おおおっ……い!?!」

駄目だ、妄想とは言えこれはあまりにも最低すぎる！ そんな後悔を一瞬にして洗い流すほどの快樂が襲ってくる。びゆるるるるるーっ、

と亀頭から濃すぎる精液が放たれて、一夏の脳をとろとろに溶かしてしまふ。

「く、このっ、孕めっ、孕めよ……!」

この場に誰もいないからこそ、欲望に塗れた言葉を吐ける。色恋事に疎く、朴念仁と呼ばれる一夏であっても、れっきとした男なのだ。若い体で過剰量産される肉欲を少しでも気持ちよく晴らそうと、最低な言葉を連ねる。

「俺の子供を産めっ、絶対に産ませてやるっ……。くっ、はあっ、はあっ、ああっ……!?!」

射精が止まらない。放尿など比較にならない解放感と、身体が震え上がるほどの快感。口端が持ち上がって、口は開きっぱなしになる。雌を略奪し、支配し、自分の物にする達成感を味わいながらの射精は頭がどうにかなりそうだった。

それが数分間続いた。

「やってしまった……」

射精が収まり、訪れる一時の賢者タイム。風呂場の床にできた白濁液の水溜まりに向けてシャワーの湯を振り掛ける。半固形に近いザーメンゼリーがしぶとさを見せながらもお湯で拭われ、排水口へ流れていく様を見つめながら一夏はため息を吐く。

以前までならばただの妄想で済んだ自慰のオカズたちだが、現在は殆どが現実と化している。孕ませてしまった者もいるし、マシユも実際に寝取ってしまった。もうマシユが元恋人の下へ帰ることはなく、このままではマシユも本当に孕んでしまう。

考えただけで、短すぎる賢者タイムは終わりを告げた。

肉竿が膨張し、表面に血管を浮かべる。怒り狂う禍々しい巨大な淫棒が精液の残滓を涎のように垂らし、金玉で早速新しい精子を補充させた。絶えることなく、女を犯し、子種を詰め込むために。チンポは雌を求め始めた。

自慰をする意味はあるのか……??

女を見ても抱きたくならないように、一人でこっそりと自慰をする。普通の体であれば効果的な対処法ではあるが、L v. 100チン

ポを備えた一夏の体では焼け石に水だ。手で処理することは無意味だと思いはするものの、一夏の心の中で快樂に抗う善良な感情が残り続けている限り、無駄な足掻きは止められなかった。

もう一回だ。

一夏は肉棒を握り直し、また別の妄想を展開し、扱きだす。

「し、失礼します……」

浴室の扉が開かれる音と共に、少女の声が聞こえてきた。

一夏はビクリと肩を跳ね上げ、錆びついたロボットのようになぎこちなく首を横に向ける。

一夏は今日、一人で入浴を楽しんでいた。いつもは一クラス単位の子が一夏の後に続き、一緒に入浴し、一夏の全身を揉みくちやにしてくる。だが、今日は何故か追っ手はなく、たまには落ち着いて入浴できると勝手に思っただけで喜んでいた。

しかし、そんなことはなかった。

一夏が開かれた扉を見やると、一人の少女がおずおずと浴室に足を踏み入れた。

そこにいたのは日本人ではなく、外国人の少女だった。腰までまっすぐ流れる髪は金色。お淑やかそうで、羞恥の熱を抱きながらも穏やかな笑みを綻ばせる顔では、エメラルドのような綺麗な瞳を宿す目がぱつちりと開いていた。

その視線が向かう先は、一夏の裸身。

そして、一夏の股間でそそり立ち、手に握られている肉棒だった。

「はう……」

入浴のために全裸になった少女が内股を擦り合わせ、羞恥を強める。左手は自身の乳房を、右手は股を隠す。全体的には華奢である割には、出るところはちゃんと出ている美味そうな体をしていた。両手で隠しても意味はなく、雌の女体を前にした肉棒が強張った。

「だ、誰、ですか……?」

一度でも目にしていけば、忘れることはないだろう。それくらい、清楚な魅力のある美少女だった。IS学園には様々な国からやって来た容姿端麗な少女たちが揃っているが、その中でも決して埋もれる

ことはないだろう。

おそらくマシユと同じだ。箒によって、学園に招かれた少女の一人。

招かれた理由は今さら言わなくても明確だ。

「う……」

期待で肉棒が膨らむ。自分が肉棒を握っていたことに気がついて慌てて股間を隠すが、もはや手遅れだ。少女の目線は一夏の股間を重点的に、全身に這っていく。

「イツセーさんよりも、大きいです……」

少女が口にした名前は、十中八九男の名前だろう。大きい、という言葉が単純に捉えるのであれば、一夏の肉棒だ。股間を見たことがあると考えると、イツセーというのは少女の恋人か何かなのだろうか。それとも、うっかりと一物を見てしまっただけなのか。

悪い予感がする。しかし、予感とは裏腹に胸が高鳴って、肉棒は力を溜め込む。

黙り込む一夏へと、少女が恐る恐る近づいてくる。それに伴って、その瞳に差す光は徐々に陰っていく。一夏という極上の雄の存在と、浴室に充満する精液の臭いの中でられたのだろう。理性は薄れ、欲望に傾倒していくのが一目瞭然だった。

どれだけ清い心も、貞操を固く守り通す強い意志も、一夏の前ではないも同然だ。マシユがそうであったように、少女もまた愛する者のことなど忘れ、一夏へと鞍替えすることは避けられない未来となるだろう。

少女が一夏の目の前で立ち止まる。

もう、太ももを擦り合わせ、股間を隠すことはしていない。太ももの付け根の間、ぷつくりと膨らむ恥丘にある縦筋。ピンク色に染まる内側を微かに覗かせつつ、閉じた陰裂の隙間から透明な粘液が垂れ、太ももを伝い落ちていく。

愛液の線が太ももに何本も描かれる。

「何もしていないのに、エッチなお汁が、止まりません……」

一夏の視線が少女の陰部に釘付けになる中、少女は左手を下腹に伸

ばし、指先で陰裂をこじ開けた。ぬちゃあ、と粘っこい音を立てて左右に開き、一夏の視界で咲き誇る花園。誰かに踏み荒らされた形跡はない。

とろり、とろり。愛液の流出は止まらず、膣はヒクヒクと収縮を続けている。

誘われている。一夏の肉棒を欲している。

刺し、穿つのは容易だ。自慰で準備運動を済ませ、肉棒はこれ以上ないほどにベストコンディションを整えている。相手は見目麗しい美少女であり、むしろこちらか頼んで犯させてほしいと思えるほどだ。

だが、やはり懸念事項がある。

この少女に恋人はいないのだろうか。マシユと同じように寝取ってしまうことを恐れる。一夏の魅力に中てられて我を失った少女を抱くことは勿論、その少女と本来愛し合うべき者がいると考えると、身が裂かれる想いだ。

しかし、そんな想いが一夏に抵抗を促すことはない。罪悪感と吊りあうように心に残った欲望が一夏の抵抗を阻止し、一時の暴走に駆られた際には理性を上回って一夏の心を一時的に支配する。

一夏に見せつけるように陰裂を開く行為に、少女は高揚していた。口元を緩め、熱せられた息を吐き続ける。瞳からは理性の光は確認できず、少女を暴走状態に導く黒い欲望が瞳の内側で蠢いているようだった。

少女をそんな状態にしたのは一夏のチンポが原因だというのに、欲情した少女を目にしたことでチンポがビクンツと跳ねる。

これまでがそうであったように、この状況で一夏が抵抗し続けることは不可能だった。

一夏は椅子から立ち上がると、小柄な少女を見下ろし、細い腹にチンポを押しつける。亀頭と竿の裏がへそより上の場所にピッタリと触れ、真上を向く。互いの息遣いが間近に感じられる距離まで密着し、一夏は尋ねた。

「名前、は……？」

「アーシア・アルジエントです……」

少女、アーシア。

「こ、恋人はいるんですか……?」

一夏のチンポの熱を感じて笑みを強める彼女は、表情を変えずに、答える。

「婚約者がいます……。兵藤一誠さんひょうとうどういっせいという方で、とても優しく、強くて、素敵な人です……。イツセーさんには私以外にも、たくさんの婚約者さんがいて、いつか皆で同じ日にイツセーさんに初めてを捧げるつもりで……」

アーシアが言葉を止め、一夏の顔を見た後、視線を下げる。

「つまり、で……」

奥まで容易く届く長大な肉棒。焼けるような熱を発し、体内に浸食する。それはアーシアの子宮を外側から刺激したようだ。ビクツと怯えるように子宮が震え、膣道が蠢く。これを受け入れたらどうなってしまうのか。不安と期待に染まる顔をアーシアが見せる一方、膣は愛液の流出を止めない。

「でも、体がおかしいんです……。篠ノ之箒さんという方に、お飲み物を頂いてから、身体が熱くて……。ああ、織斑さんの写真を見せられただけで、アソコが疼いて、気持ち良くて、はあ、はあ……！ 織斑さんのことを考えるだけで、すごく幸せな気分になれて……！ これまでの幸せなことか全部、どうでもよくなって……！ イツセーさんのことも、忘れたくないのに、想いが薄れていくみたいで……。それがすごく怖いのに、でも、なぜかそれが正しいことのように感じてしまうんです……」

だらだらと激しさを増す愛液の滝。

もう、これ以上の我慢は不可能だ。アーシアも、一夏も。

「ううっ、あ、あの、どうか、よろしければ、私の中に、入れて、ください……」

アーシアが上目遣いに一夏を見て、吐息の籠った声を放つ。そんな顔で、そんな声で、誘われてしまつては拒むことはできない。アーシアは正気を失っている。このまま関係を結べば、浮気をした後悔に苛

まれることもあるはずだ。兵藤一誠という婚約者に顔向けできなくなるに違いない。

アーシアのためを思うのならば、身を引くべきだが、今の一夏にそれはできない。

順調に、一夏の中で育まれる寝取りの悦び。これも筈の目論見通りなのだろうか。

奪い、喰らい、支配する。

「お願い、します……。もう……。もう、これ以上、我慢できないんです……」

雄の頂点に君臨する者として、雌の卑しい懇願を跳ねのけることはできない。

一夏は、アーシアを抱きしめた。甘い匂いを嗅ぎ取りながら鼻息を荒らげ、アーシアを軽々と持ち上げる。アーシアが驚いたように小さく声を上げた後、一夏の亀頭が膣に食い込み始めたことで、懺悔の言葉をこぼした。

「ごめん、なさい……。イツセーさ——」

その謝罪の声は、肉体の内側に掘り進む肉棒によって、絶頂の声に置き換えられた。

クロスオーバー②後編

「んあああつ……！」

声を上げたアーシアの膣穴には、一夏の肉槍が深々と突き刺さっていた。処女膜をブチ破り、破瓜の血を滴らせ、初物を奪った興奮に震えながらアーシアの体温を感じ取る。

また奪ってしまった。

他所の男に好意を向けていた美少女を。その初めての証を。

胸の奥にチクリと痛みが生じる。かと思えば、その痛みはじわじわと和らいで、独占欲と征服欲に置き換わった。見もしないアーシアの婚約者の顔を想像し、彼の絶望する顔を想像しながら、窮屈な穴の奥へと息子を納めていく。

「あ、あ、あ……！」

一夏を受け入れるごとに、アーシアは艶めいた声で鳴く。悦びが滲んでいるそれを聞かされて、一夏の抵抗感はガリガリと削られた。求められたから、応じてアーシアの中にチンポを挿入しているだけ。自分に言い聞かせ、一夏は食らう。

アーシアに抱きつき、華奢な体に両手を巻きつける。右手は細い背を、左手は柔らかい肉を纏った尻を。体に手の痕がしばらく残ってしまいそうなほどの力で、アーシアという雌を拘束し、さらに繋がりをも深めていった。

「はっ、はっ……?!? つ、あうっ……?!?」

蠢く膣肉は一夏を拒まず、歓迎するように包み込む。締まる穴で竿を掴み、膣壁で表面をなぞっている。嬉しい接待を受けた肉棒は増長し、いよいよ無関係な男が踏み込んではいけない領域へと亀頭を至らせた。

「お、んっ……?!?」

子宮口。子をなす大切な器官に、初対面の一夏の亀頭が密着する。ディープリキスと呼ぶには乱暴すぎる衝突を経て、そこからはじっくりと互いの存在を認識し合うように子宮口と亀頭を馴染ませる。

「ごめんなさいっ……! ごめんなさいっ……! ごめんなさいっ

……!」

婚約者への懺悔を繰り返すアーシアだったが、暴走し始めた一夏がそれを黙らせる。

「んひいひいっ!」

目にも留まらぬ腰振りの往復。常人離れしたそれが異様な攻撃力を引き起こし、アーシアの子宮にダイレクトアタックを仕掛ける。アーシアと、その子宮を守るものは誰もいない。アーシアにとって頼もしい婚約者は、この場には絶対に来られない。アーシアの心身を思う存分しゃぶり尽くせる。

一夏の、アーシアを抱く手に力が入る。

鏡に映る一夏の顔は邪悪な笑顔を湛え、吊り上げた口角の端から涎を垂らしていた。

「あつ、あつ、んっ、あつ……!」

アーシアを墮とすべく、一夏は果敢に攻める。守りを気にする必要はない。神にもたらされたLv. 100チンポという最強の駒が、アーシアの良心を守ろうと展開する彼女のこれまでの思い出を奪っていく。盤上の駒と駒を戦わせるチェスのように。

「はうっ、ああっ、あんっ……!」

だが、状況は拮抗しておらず、あくまで一夏の攻撃が延々と続くのみだった。肉食動物に押さえ込まれた草食動物のように抗うこともできず、白い女体の内側を掻き回す。

「っ、う、あつ、あつ、うくっ……!」

息遣いを荒立て、一夏は腰を上げ下げする。発情した獣でもまだマシと思える蹂躪。性行為に慣れた女であろうと容易く墮とせてしまえる猛攻に、初めてを捧げたばかりのアーシアが勝てる道理はない。

ぐちゃ! ずぷっ! ぐちゅっ! どちらゅっ! どちらゅっ! ズブッ!

「ああああつ! そ、そんなに、激し、んんっ!」

狼狽するアーシアだったが、一夏に体を軽々と持ち上げられ、唇を一夏の唇で完全に塞がれる。翡翠色の瞳が驚愕に伴って大きくなり、一夏の顔を間近で映している。唇の熱がこれでもかと伝わる中、一夏

の舌が侵入してくることに気がついたのだろう。

一瞬。ほんの一瞬だけ一夏を遠ざけようとしたアーシアだったが、何の意味もなかった。

「ぶぢゅっ！　ぐぢゅっ！　ぬちやつ！　ぐぷっ！　ぢゅぶっ！　ぢゅるるっ！」

限界まで外に伸ばした一夏の舌が、アーシアの口内で暴れまわる。唾液を撒き散らし、塗りたくり、アーシアの舌に擦りつける。愛し合う蛇のように柔らかい舌と舌を絡め、忙しなく動き続けた。

しばらくは腰振りよりもキスを優先し、アーシアの粘膜を味わう一夏。口の周りは互いの唾液に濡れ、口外に漏れた唾液が床に滴り落ちる。最初は少量だったそれだが、時間の経過に伴って量を増やしていった。

アーシアが、本格的に一夏を受け入れ始めたことによつて。

「はあっ、くちゅ、れろっ、れろっ、う、ちゅっ、ちゅうっ、ぬちやあっ！」

アーシアの舌は自発的に動き、一夏の舌と擦り合う。握手をして、擦り寄つて、また解放してから改めて握手をする。どろどろと混ざり合った二人分の唾液を分け合つて互いに飲み合い、もつと味わおうと絡み合う。

「ん、はあ、あー……」

二人は口内だけに留まらず、口外でも舌の触れ合いを試した。どうすれば、気持ち良くなれるのか。それだけを考へていることが、理性の光を失った二人の瞳を見れば一目瞭然だった。アーシアが両手を一夏の背に回して、自分から肌を擦りつけながら伸ばした舌で円を描く拳動を見せた。

一夏も同じように舌で円を描き、アーシアと戯れていく。

「おおっ……!？」

一夏が止まっていた腰を動かし始め、膣口から子宮までの道をカリ高チンポでガリガリと削つてあげれば、アーシアの口から品のない声が漏れる。おそらくアーシアが初めて出したに違いない雌声をもつと聞こえると、一夏は本気を出した。

「おっ！ おっ！ おっ！ つ、あんっ……！ ああぁっ……！」

駅弁ファック。一夏を抱きしめて身を預けてくれたアーシアの同意の下、一夏はゆさゆさと身体を弾ませる。ときにはアーシアの体を動かしてオナホのようにマンコで肉棒を扱かせつつ、二人は生殖器を触れ合わせた。

もう取り返しはつかない。アーシアの中で大切に温められていた仲間や婚約者との思い出に、快樂という名の毒が浸透していく。自分にとって大切なこととは何か。何を愛し、これから信じていけばいいのか。

チンポがもたらす快樂が、アーシアを狂わせていた。

婚約者、兵藤一誠との思い出が心の隅に追いやられていく。代わり心の中心を占拠したのは、今まきに行われている一夏との交尾。幸福度はこの瞬間も更新中で、他のことを考えている暇はない。

余計な記憶は整理されていった。

絶対に忘れたくない思い出が、ああ、そう言えばこんなこともあった、といった些細な思い出に落ちぶれる。アーシアが生まれてから昨日までの出来事が全て『どうでもいい思い出』に分類され、一夏との思い出だけが尊いものと認識された。

「ああぁっ、一夏さんにつ、あっ、こんなに愛されて、幸せですうっ、んちゅっ、ぢゆるるっ、はっ、キス、気持ち良いっ……！ おっ、あっ、一夏さんも、気持ち良くなってくださいねっ……！ 私のアソコを好きだけ使って、溜まってしまったものを全部、私の中に注ぎ込んでくださいっ……！ 赤ちゃんっ、一夏さんの赤ちゃん、産みたいんですっ……。お願いしますっ、お願いしますっ……。私を、妊娠させてくださいあい……！」

婚約者を捨て、一夏に身を捧げた金髪美少女による孕ませ懇願。煽り耐性においては他の追随を許さないほどのクソ雑魚である一夏のチンポがイラつかないはずもなく、瞬く間に膨張し、血管を浮かばせ、穴を押し開く。

「っ、ああぁっ、まだ、大きく、なって……！ ん、へえっ!？」

凶暴性を増したチンポが、破城槌が如く勢いで子宮に叩きつけら

れ、アーシアの顔は完全に蕩けた。舌をだらんと垂らし、目の焦点は合わず、ただ快樂だけを至上の幸福と認識しているような表情。婚約者が見れば、絶望するか、怒り狂うか、鬱勃起による自慰を抑えられないかのいずれかだろう。

一夏は最後の瞬間まで、寝取られた婚約者の男をだしに使い、淀んだ欲望を育んだ。

「アーシアは俺の女だ」

嗤いを噛み殺しながら紡がれた一夏の言葉は、アーシアに向けたものではない。

この世界にはいない、婚約者の兵藤一誠。届くはずはないとはわかってはいるが、口にしたときの快感は尋常ではない。尿意を催したときのように腰からブルリと震え、それが伝播して全身が痙攣する。

「俺の子を孕ませてやるからな」

言いながら、一夏はアーシアの膣内を制圧したチンポから子種を撒く。

びゅるるるっ、びゅーっ、びゅーっ、びゅるっ、どびゅるっ、どびゅびゅっ！

一夏の子供の素。織斑家の遺伝子。それがアーシア・アルジエントの子宮に叩きつけられる。一度子宮に溜まると、精子を泳がせるという役目を果たすまでは外に出る気はないようで、糊のようにベツタリと子宮内に張り付いていた。

「あっ、あぁんっ……。今、『生まれて初めて』、幸せになれましたぁ……」

これだけ一夏に愛されてしまったら、もうその快樂から逃れられない。

堕ちたアーシア。愛らしい顔には、初めて男と幸福を知った雌の微笑みが広がっている。これまでの思い出を捨て、一夏の下で幸福と快樂に塗れたアルバムを作る準備ができたようだ。いずれ、そのアルバムにはアーシアの体から産み落とされる赤子の写真も貼り付けられることだろう。

異常な速度で精子が泳ぎ、牙を剥き出しにして卵子の下に向かう。

アーシアの体はとある事情で著しく孕みにくい状態になっているのだが、そんなことなどお構いなしだろう。仮にこれで妊娠しなくとも、今後も続く交尾によって妊娠は避けられないだろう。

しかし、一夏とアーシアにとって、そんな内面的なことなどわかるはずもない。

二人はただ、快樂と幸福のために愛し合うだけだ。

「一夏さん……。私と、契約しませんか……？」

アーシアが一夏に抱え上げられたまま、耳元に顔を近づけた。

「私の、婚約者になってほしいんです……。もう、会うこともないあの人に代わって、私に居場所をください……。一夏さんだけが、私の心の拠り所なんです……。お願いします……。婚約者になっていただけるのであれば、私の全てを捧げます……。心も、体も、卵子だって、一夏さんのためだけに使います……。駄目、ですか……？」

潤んだ目で見つめられ、甘い声で囁かれては、一夏が耐えきれぬはずがない。

「わ、かった……」

暴走中の一夏に、断る理由はなかった。正気を取り戻した後には罪悪感でのたうち回る一夏の姿が容易に想像できる。そんなことを知らないアーシアはただ悦び、床に両足を下ろして立った後に一夏と熱い抱擁を交わした。

いずれ、織斑アーシアと名乗る日も来るのだろう。

「契約完了です……。一生、傍にいますからね……？」

そう言つて、アーシアは一夏にキスを捧げた。ねつとりと、舌を絡ませる熱いベージュ。

アーシアの顔で視界を塞がれる一夏は、見えていなかった。

アーシアの背中から、思わずといった様子で飛び出た一对の黒い翼。物語に登場する悪魔が有しているものに酷似していたそれは上機嫌に数回羽をはばたかせた後、一夏に見られる前に跡形もなく全貌を隠した。

そんなことにも気づかず、一夏はアーシアと体を重ねる。

貸し切り状態の大浴場。アーシアの喘ぎ声と、交尾の音が何度も響

き渡る。場所と体位を変えてセックスをする二人。幾度の射精を経て、まだまだ元気な一夏のチンポを鎮めようと、アーシアがベロチューをしながら手コキで労わっている。

「邪魔しては、まずいですよね……」

そんな二人の様子を、薄く開いた大浴場の扉からマシユが覗き見ていた。その格好は裸ではなく、一風変わった黒いボディスーツに包まれていた。水着とも、ISスーツとも違う格好。余計な生地を捨て、雄を誘うことだけを考えて調整されたらしいそれを纏うマシユの体は、交尾を目の当たりにして発情していた。

「ああ、先輩……」

二人に隠れ、マシユは自分の指で慰める。

マシユが見ているとも知らない一夏とアーシアは、その後もたつぷりと思い出作りに励む。一夏が理性を取り戻したのは、完全に墮としたアーシアが、湯船に浸かる一夏の股間に杭打ちピストンでガシガシとチンポを扱っている最中だった。

転機

窓のない部屋。照明は消され、正面の壁一面に投影された映像が流れている。過去の映像だ。右下に表示されている時刻は現在より数時間前。一夏がアジアと入浴するよりも前だ。既に起こってしまった出来事なのだと言って、一夏は強い後悔に震えた。

「ん、ちゃんと映像は、見えているな……？ つ、ああっ……！」

耳に吹きかけられる女の声。聞き慣れているはずなのに股間によく響く。股間でいきり立つ肉棒に余計な力が入ってしまい、その声を放った女の内側、膣内で肉棒がメリメリと膣壁の圧迫を押し退けて穴を拡げる。

女、箒はゆるりと口端を持ち上げ、一夏に抱きつきながら尻を上下に躍らせる。

「おっ、おおっ、んっ、ふっ、あ、ああっ……！」

雌声を傍で聞かされる。チンポに毒でしかないが、どうすることもできない。座り心地のいい革張りのリクライニングチェアに全裸の体を受け止められ、立って逃げようとする一夏を押しさえつける形で覆い被さる箒。一夏の首に両手を回し、ここ最近益々大きくなったと感じる乳房を一夏の胸板に押しつけて尻だけを器用に揺らしていた。

膣穴に咥え込まれ、膣肉でゴシゴシと扱かれ続けるチンポ。

至福に震える一夏の眼差は、先ほどから正面の映像を捉えていた。

映像。それは、とある孤島を舞台にした戦闘記録だった。入浴を終えて自室で休憩していた一夏を、わざわざ学園地下にあるこの部屋に連行したのは、これを見せるためだったようだ。

楕円形の島を上空から映し出している。撮影はおそらくISによるものだろう。滑らかに映像が空を泳ぎ、島の一面を大画面で拡大した。

そこには、一機のISから逃げ惑う女たちの姿があった。揃いの黒衣、ISスーツのような戦闘服に身を包んだ女たちは恐怖や屈辱などの感情を顔に見せながらも、時折手に持った銃火器で迫りくるISに応戦している。

だが、現行の兵器を軽々と上回って世界最強の座にふんぞり返る I S が、銃火器程度で怯むことはない。漆黒と紫に彩られた外装を有する機体。蝙蝠のような翼を広げ、長い尾をたなびかせる不気味ながらも威容な I S は、機体と似たカラーリングでやけに露出度の高い I S スーツを纏う搭乗者の意思で女たちへと距離を詰める。

林立する木々を軽やかに避け、気紛れに横薙ぎにした尾の鋭利な先端で木を容易く粉碎し、女たちに恐怖を与えている。上空からでも破砕音が聞こえてきそうだが、音声は流されておらず、一夏の耳には届かない。

「あれは……」

部屋の中に一夏の呟きが大きく響いた。

「束さんのジャバウオック……」

漆黒の機体は一夏の知る I S と外見が酷似していた。以前、まだ敵だった束の意思に従い、セシリアたちを凌辱し、一夏をも苦しめた I S。それがまた別の誰かを襲っている。もしかすると、搭乗者も被害者なのではと思ったが、そうではないことに一夏は気がついた。

ジャバウオックを駆る女の顔の上半分は黒く鋭利なヘルメットとバイザーによって隠れているが、口元には余裕を湛えた笑みがあった。機体に弄ばれている雰囲気はない。

そのとき、一夏の視線は搭乗者のスーツに押し込められた長乳に向いた。ジャバウオックの細長い腕によって背後から驚掴みにされる形で固定された胸に、一夏は見覚えがあった。

あれは一夏が味わったことのある胸だ。神となって記憶力を底上げされた一夏の脳内に、その女の顔や交わったときの記憶が蘇る。余裕を湛える口も、一度チンプをぶち込んで啞えさせたことがあるため、判別するのは容易だった。

「生徒たちが戦っているのか……」
搭乗者は I S 学園生。しかし、であればいったい誰と戦っているのか。

その答え合わせは筈によって行われた。

「ああ、認識通り、I S 学園の生徒たちだ。そして、その相手なのだが

……。あろうことか、一夏が治めるこの学園にスパイを忍び込ませていた愚かな組織だ。古い歴史を持ち、昔ながらの男尊女卑の思想に囚われた男たちが君臨し、女の兵士たちを使って、分不相応にも世界征服を企んでいる」

軽蔑の色を込めて、箒が吐き捨てるように言う。

フアントム・タスク
「亡国機業」

箒の言葉と同時に、映像の片隅に亡国機業に関する資料が表示された。

そこには、亡国機業の実態や、進めていた計画の一端が記されていた。一夏が目にした途端に夥しい文章が下から上へと一瞬にして流れていくが、一夏の目がそれを捉え、理解するのに十分だった。

世界の裏で暗躍する秘密結社、亡国機業。その歴史は第二次世界大戦まで遡る。人と人の醜い争いの中で生まれ、血を吸って成長し、今日まで生き延びてきた。悪事と呼ばれる大抵のことはやっているようで、その中には女を食い物にするような内容も含まれていた。人をかどわかし、拷問し、洗脳し、駒にする。まさしく悪の組織だ。

組織の構造としては、幹部会と実働部隊の二つに分けられる。実働部隊はほぼ女で構成されている。理由は、ISを使えるのが女である点と、幹部会に席を置く男たちの好みだろう。幹部会には少ないが女もいて直属の部下を抱えているが、男の幹部たちもそれは同じ。兵士として、性奴隷として、母胎として。好みの女を部下とし、世界中の至る場所に拠点置いて利と欲を貪っているらしい。

「っ、んんっ、あつ……。どうやら、この者たちは私たちを狙っていたようだな……」

先の資料にも書かれていたことが、箒の口からも伝えられる。

「IS学園には、世界各国の優秀な女たちが集っている……。しかも、皆一様に優れた容姿だ。幹部の男共の目には上質な獲物に見えたようだ。専用機持ちは特に、な。捕まえてもいないのに、いずれ捕まえたときのことを考えて、幹部の間で獲物の所有権を決めていたそうだな……。この意味は、わかるよな……?」

「皆が、敵に……」

「ああ……。セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒ、更識楯無、更識簪、それと、篠ノ之箒……。お前が愛してくれた女たちは勿論、大勢の生徒たちを組織の兵士にしようと考えていたようだぞ？ 誰がどの女を手元に置くのか。ディスプレイに顔写真や個人情報を投影して獲物を品定めし、自身の部下に性奉仕させながら様々な賭け事で私たちの主が決められたそうだし……。専用機持ちは真つ先に貰い手が決まったとのことだ……。想像してみろ……。私たち全員が亡国機業に囚われ、洗脳され、女兵士として新しい主に心身を捧げる姿を……」

言われた通り、一夏は想像してしまった。

悪の組織に堕ち、妖艶な衣装に身を包み、幹部の男たちに忠誠を誓う箒たちの姿を。それは男たちにとって格好の餌食だ。箒たちは間違ひなく犯され、場合によっては嫁にされ、そうでなくても子を孕まされるだろう。他にも、麗しい乙女の手を悪事で汚すことに興奮を抱く歪んだ思想の男もいるに違ひなく、箒たちは心身を汚されていく。

考えただけで、一夏は憤った。奪われたときのことを想像し、独占欲を示すかのように箒の膾内で竿を伸ばす。ギチギチと内側を広げていくチンポの気配は箒に直接伝わって、喘ぎ声が強くなっていく。「ああっ、こんなに熱く、ああっ……。そんなに私たちのことを、想ってくれたのだな……。？ あ、あ、んあ、安心、してくれ……。今のは所詮、捕らぬ狸の皮算用だ……。亡国機業が私たちに敵うはずもない……。奴らは本当に愚か者だ……。私たちだけでなく、千冬さんや山田先生、居所さえ掴めていない姉さんまでもあわよくば手に掛けようとしている……。千冬さんと姉さんがお前以外に堕ちる姿など、想像できるか……。？」

できるはずはなかった。Lv. 100チンポという規格外のものがなければ、あの二人は今も誰かに靡くことはなかったはずだ。一夏という共通の主の下に協力して仕える今となっては、向かうところ敵なしだった。

だが、物事に絶対は存在しない。あらゆる可能性を考慮に入れてしまい、やはり箒たちが悪堕ちするイメージを膨らませてしまった。そ

れを払拭しようとして、一夏の腰は自然と突き上げられた。

「おおおつ……！　お……！」

箒の子宮にクリーンヒット。嬉しそうに震え上がる箒を見て、以前よりも素直に、さらに美しさに磨きを掛けた容貌を見て、涎が口内に滲み出てくる。幾度も飲み下し、落ち着かせるように腰を椅子に戻したが、調子に乗った箒は止められなかった。

「あぁっ、チンポ、久しぶりの、一夏のチンポ、一夏との交尾っ……！
あぁんっ……！」

他の男ならば、搾取されて干乾びるのではないか。チンポを奉仕し、悦ばせてくれる極上の雌。彼女との交尾を中断する気になれず、一夏は椅子に腰掛けたまませめてもう少し理性的に振舞おうと映像に目を向ける。

学園と、女たちにちよっかいを掛けようとしていたらしい亡国機業。その一拠点である孤島を攻め落とす学園生たちの姿がしばし流れていたが、やがて決着したらしい。

数十機のISが上空と地上、孤島に隠れるように作られていた地下施設内を制圧した。

死傷者は見る限りではない。ジャバウオックを駆る生徒たちは敵を気絶させるに留めていた。気絶させた者たちは手の空いている者によって抱えられ、孤島の岸壁の下に浮上して口を開けた輸送用の潜水艇に放り込まれる。

捕まえてどうするのか。潜水艇で待っていた生徒に捕縛された女兵士たちの行く末は、目の前の箒に委ねられている。それを説得し、できるだけ穏便に済ませようと思ってしまうのは、間違いなのだろうか。

箒の話が本当なのかについては一夏は判断できていなかった。もしかすると、一夏を焚きつけるために先の話や資料を捏造したのかもしれない。秘密結社相手にそこまで情報が引き出せるのかという疑問もあれば、束という存在がいればそれは可能かもしれないという憶測も入り混じって、何が真実かはわからない。

それでも、この映像は真実で、敵組織の女たちが学園に運ばれてく

るのは確定だ。

映像の中で、数あるうちのたった一つとはいえ、敵の拠点が学園生の手によって落ちた。世界征服という大層な理想を掲げる組織とは思えず、人のいなくなった拠点がジャバウオックによって粉碎されていく。この拠点にISはなかったようで、敵に向けることのなかった高火力のレーザーやミサイルが雨のように放たれていた。

映像が潜水艇内に切り替わった。

捕らわれた女兵士たちの多くは気絶しているが、目を覚ましているわずかな者たちは震え上がっていた。自害抑止のために噛まされた猿轡がなければ、歯と歯がぶつかって音を立てていたのではないかと思えるほどの恐怖。念のために潜水艇に待機していたジャバウオック数機に囲まれ、数人の人間を同時に貫けそうな鋭利な機械の尻尾を見せつけられて、恐怖に涙している。

これではどちらが悪かわからない。

悪の組織と戦う自分たちは正義なのか。それとも、また別の悪なのか。

悪と善の両方の心を併せ持ち、歪な中庸状態に固められた現状。この中途半端な状態をどうにかしてほしいと強く願うと同時に、一夏は射精を始めた。

「あああああ、奥、熱いっ……！」

眼前で悦ぶ筈の顔を見て、征服欲と罪悪感の波間に揺れながらどぶどぶと子宮に精液を流し込む。ぎゅっと抱きしめられ、筈の巨乳がより強く胸板に押しつけられる。男としての確かな幸福を噛み締め、長い射精が続く。

一夏は伸ばした両手で筈の尻を抱え持つように掴む。独占欲によって指が忙しく動き、尻を可愛がる。尻肉をいくら揉んでも喜ばれる。子宮に精液を詰め込むと感謝される。キスをしようとする、舌を差し出される。

恵まれた環境において、一夏の善性だけが不自然だった。

せめて少しの間だけ、何もかも忘れて、自分の意思で動けばいいのに。

『わかった』

一夏の心の中で抱いた想いに、応じてしまった災厄の権化、邪神ごと女神。たった一言で一夏の全身に鳥肌を立たせ、背中に冷水を流し込んだ。最悪、理不尽。様々な言葉が脳裏を過ぎる中で、女神は幼い少女の声で小さく囁く。

『褒美をあげる』

絶対に要らない!

声高に心の中で叫んでも、女神は言うことを聞かない。

「な、なんだ……!?!」

一夏を中心に眩い光が広がる。それは箒をも包み込み、部屋に行き渡って光で埋め尽くした。

視界を光に吞まれる。光に掻き消されるように意識が段々と遠くになっていく。

抱き締めていたはずの箒の感覚がなくなって、光の中に囚われる。

何か良からぬことが起きようとしている。

漠然とした想いを胸に、一夏の意識は途中で終わった。

そのとき一夏は最後に、自分の心身に異変が生じたことに気がついていた。

少年

どこからか笑い声が聞こえた。可愛らしい少女の声。聞く人によつては違う印象を抱くかもしれないが、少年にとっては酷く恐ろしいもののように感じられた。聞くだけで身が竦み、心が冷え、平伏を余儀なくされる。決して抗えぬ絶対的な存在感。

少年は140センチに届かない小柄な身体を縮こめる。なぜか服を着ていない体に白いシーツを絡みつけ、震えが収まるのを待つ。次第に笑い声が聞こえなくなると、襲ってくる眠気に従つて意識が落ちていき、心地いい眠りに就いた。

どれほど眠っていただろうか。

少年は目蓋越しに陽射しを感じ、堪らず目を覚ました。

「ん……」

少女のような柔らかい声を漏らし、少年は華奢な体を起こす。九歳くらいの年齢だ。幼いながらも整った顔立ちをしていて将来が楽しみだ。いずれは多くの異性を虜にする爽やかな青年に成長するだろう。

まだぼうつとしたまま、少年は周囲を見渡す。

誰もいない部屋。そこは、少年一人が駆け回るには十分な広さがあった。たまたま目についた部屋の隅には、あらゆるゲーム機や性能の高そうなパソコン、複数のディスプレイが設置されたデスクがあった。長時間のゲームプレイにも耐え得る専用の椅子も用意されていて、娯楽を楽しむスペースのようだ。

他の場所へと視線を転ずると、棚の上に置かれた大画面テレビと、その前に置かれたソファーが見えた。一人で寛ぐにはやはり大きい。まるで複数人と談笑しながらテレビを見ることを想定されたような感じだった。

他にもいろいろと小物は多いが、それらを考慮に入れても部屋はスペースを持て余している。大人ではない小柄な少年から見た景色はさらに大きく感じて、途端に居心地が悪くなってしまう。

「なに、なん……」

たとえ少年が大人であろうと、大きすぎると感じるだろう巨大ベッドの隅に移動し、少年はシートに身を包んで周囲を忙しく見回す。やはり誰もいない部屋には、出入口用の扉も窓もあった。どちらも内側からの脱出を妨げる仕組みではなさそうだ。

監禁されているのではと疑ったが、そうではないらしい。

では、どうして自分は見知らぬ部屋にいるのか。

考えて、少年は自身の記憶を探ってみたところ、不可解なことに気がついた。

「俺、誰だっけ……」

自分で自分がわからない。ここに来る以前の記憶どころか、名前も、年齢も。わかるのは男という性別。股間に垂れ下がる、勃起前にも関わらず分厚く竿を伸ばして丸々とした陰囊を携えた巨大な一物だった。

巨大、なのか。それすらも判断できない。もしかすると、年齢相応なのかもしれない。

人間として生きる上で必要最低限の知識はあると思っっているが、それすらも定かではない。いったいどうすればこのような曖昧な状態になるのか。今の自分が完全ではないことは明確に理解していて、混乱が続く。

震えが止まらない。いったい何がどうなっているのか。

「っ……」

怯える少年の耳は、扉を叩く音を鋭敏に捕捉した。

「入るわね、千夏^{ちなつ}」

続いて女の声が聞こえ、扉がゆっくりと開かれる。

現れたのは、艶やかな雰囲気醸し出す女だった。外見だけで言えば、二十代後半か。だが、漂う色香はそれ以上の年齢を感じさせる。体付きは非常に肉感的で、触らずとも抱き心地の良さが丸わかりだった。というのも、女が身に着けている衣服は服と呼べるものではなく、全裸にエプロンというスタイルだったからだ。少し小さめの白いエプロンからはみ出た横乳や、前掛けの部分から覗く太もも。括れた腰と、対照的に肉を備えたデカ尻。雄を誘惑し、子作りに励ませるた

めに生まれてきたような女だった。

「おはよう、千夏。昨日はよく眠れた？」

「え、あ、え……う？」

知り合いに話し掛けるように、平然と会話を続ける女。女は少年のことを『千夏』と呼んでいるが、少年はその名前を初めて聞いた。自分の名前であるかどうかも判断できず、他に千夏と呼ばれる者がいるのではないかと思ってしまう。

あたふたとする少年の下へ、女は近づいてくる。首の後ろで束ねた黒髪を揺らし、目を微笑みで細めながら。歩くたびに、ムチツ、ムチツと音が鳴りそうな卑猥な女体で歩み寄ってきて、そのままベッドに上がりこんでくる。

「あ……」

知らない大人。裸同然の美女。

恐怖を覚え、少年はシーツを放ってさらにベッドの隅に移動する。が、広いとは言っても、いつまでも逃げられるような大きさではない。すぐに女に追い詰められて、少年は腕を掴まれた。

「わ、ぷっ……!?!」

「よしよし、様子が変だけど、怖い夢でも見たのかしら？」

引つ張られた少年はその勢いで女の胸に顔を埋めた。大きい。少年の顔よりも大きい膨らみが二つ。エプロンという布地を間に挟んでいるとは言っても、その布地は頼りなく、熱と弾力を少年の顔面に伝えてくる。

甘い香り。柔らかい。落ち着く。

一呼吸するたびに肺腑を女から漂う芳香によって支配され、心身が蕩ける。逃げようとしていた体は警戒を解き、両手がだらんと体の横に垂れた。すると、そうなるのが当然といった様子で女は少年の顔を自身の豊富な胸の谷間に埋めさせ、後頭部を撫でる。

「怖かったわね。嫌な夢なんて忘れて、ママの胸にいっぱい甘えてね？」

女は左目の下に泣き黒子のある顔に穏やかな微笑みを湛えたまま、少年の後頭部を撫で、もう片方の手で少年の腰を抱く。少年の腰を支

える目的で巻き付いていたそれは、段々と下へと移動し、少年の尻を撫でる。

「う……」

少年が小さく声を発するが、女の手は少年の尻を弄るのを止めない。大きさを確かめるように輪郭を辿ったかと思えば、肉の質を確認するように揉み始める。縦横に動かして目いっぱい堪能した後、その手はさらに下へと移動する。

「それとも、他のママたちに可愛がられて、怖い思いしちやっただのかしらあ？」

ツンツン、と女の指先が突いたのは少年の巨大な陰囊。ここでどれだけの精子が作られるのか。詳細は不明だが、おそらくは尋常ではない生産性を誇るそこを愛おしそうに指で摘まみ、くりくりと弄ぶ。

「いえ、そんなことはないわよね？　だって、あなたは選ばれた雄。この世界を支配する最優の雄、一夏様と私たちの子だもの。母である以前に雄より劣る雌である私は勿論、他のママたちも敵わないものね？　パパ譲りのおチンポで返り討ちできるわよね？」

ぎゆうつ、と女の抱く手に力が籠る。

母を名乗る女の乳の圧力を受け、埋もれる少年、千夏。彼はこの状況下に置かれ、股間に熱が集うのを感じた。実の母に対して勃起してしまうのは正しいのか。その判断もできないまま、母の太ももの間に竿をムクムクと伸ばし、表面に血管を浮かばせる。

「あら？　勃起、しちやっただのね？　ママのおっぱいで興奮しちやっただ？　ふふ、いいわよ。私はあなたを産んだ母親だけど、あなたの子を産む母体でもあるの。いつも教えているわよね？　雌は男を劣情させ、孕んで、子を産むことしか能のない下等生物。この私、織斑雅も劣等種なのよ？　あなたたちみたいな、優秀な雄には逆立ちしても敵わないの。だからね、滅茶苦茶にしているのよ？　あなたの逞しいおチンポで、おマンコを貫いて、自分が生まれた赤ちゃんのお部屋に、ねっばねば孕ませミルク、どぶつ、どぶつ、て好きだけ撒き散らしているの。あなたには、それをする権利があるのよ？」

雄が喜ぶ言葉を連ねられ、千夏の怒張は加速した。

母、織斑雅の太ももの下で、竿を上下に揺らす。尻をガクガクと前後に動かして、既に挿入の準備に入っている。意味不明な状況は続いているというのに、千夏は理解を放置して交尾を優先した。

雄々しい肉棒から供給される欲望は、小さな体を毒のように巡回し、冷静な思考を妨げる。これでいいと結論を勝手にまとめさせ、早く女を味わおうと母の体を両手で突き飛ばす。

「ふふ、私を、ママを犯すのね……。ああ、一夏様。あなたと私たちの愛の結晶は、すすすすく成長しております。どうぞすぐ傍で見守っててください。私が息子のおチンポに犯されて、孕まされて、新しい主となった息子に平伏する様を……」

ベッドで仰向けになって、両足を開く雅。千夏はエプロンの前掛け部分を掴んで引き上げると、曝け出された雅のマンコに龟头の先を近づけるのだった。

母との交わり

千夏はいきり立たせた生殖棒を、母である雅の股へ寄せる。

「はい、どうぞ」

雅の指で開かれた陰裂から覗くピンク色。子持ちの女のものとは思えない澄んだ色と、そこで口を開ける卑猥な穴。息子を前にして発情したそこから愛液が次々と湧き出て、中は粘液の糸を引いている。

入れたら絶対に気持ちいい。

記憶のない千夏であってもそう思える女性器で、千夏は吸い寄せられるように龟头を膣に宛がった。

「ん、上手上手……」

母と子のキス。膣口と尿道口が数回触れ合って、千夏は欲望を加速させた。いけないことをしているという背徳感が胸の内をざわつかせ、それに伴う発熱が肉棒をさらに育み、雄の頂点に君臨する者の矛へと変える。

この状態になってしまっただけで自分一人で処理できない。

千夏は覚悟を決めて、雅の内側へと自身の一部を沈めていった。

「うあああつ!?!」

直後、膣穴の肉壁が襲い掛かってきた。入った肉棒を自ら誘うように蠢き、逃がさぬように包み込む。ゾクゾクゾクツ、と背筋に駆け抜ける快感が一瞬で千夏の意識を蕩けさせ、小柄な身体を震わせた。

気持ちよすぎる……!!

忘れてしまっていた交尾の刺激を浴びせられ、千夏は混乱した。小さい子供には過剰ともいえる興奮が脳内で渦巻く。普通の子供ならば気絶するところを気合で持ち堪え、より強い興奮を得ようと腰を振った。

「っ、んあああつ! ああああつ! いいわあつ! おおつ!? いきなり、奥までっ、あああつ、ああんっ! おマンコ掻き回されてえ、あああつ、すっご、おおつ、チンポ、息子のおチンポ、すごいっ!」

膣穴の奥まで肉棒を挿入し、行き止まりで止まってから腰を後ろに

引き戻す。そうして、バキバキに勃起した竿を外気に晒してから、また一気に肉穴に埋め尽くす。前後運動に容易に魅了された千夏はそれを繰り返す。

「んひいっ!? ち、乳首、そんなに強く引つ張ったらああっ!」

ブルンツ! と視界で揺れるデカ乳を両手で揉み潰し、ぎゅうつと乳首を抓るように引つ張る。そうすると背筋を浮かせる雅の反応が楽しくて、千夏は可愛い顔に悦楽を見せ、雅に抱きついた。

自ら雅の胸の谷間に顔を埋め、小さい体で強く抱擁し、小振りな尻を振る。

「おおっ!? おおおっ! んおおっ!」

千夏による抱擁プレスによって肉棒が素早く出し入れされ、雅はよがり狂っていた。振るい落とされそうな激しい痙攣をする雅の胴体にしがみつき、一発一発が常人の女の意識を刈り取る威力を秘めた肉棒の突き上げが子宮にお見舞いされていた。

「はああっ、んんっ! 千夏っ、いいのよお! それでいいの! それが雌の犯し方よ! あなたが好きに動いて、おマンコをブチ犯しているのっ! んひいっ!? それだけで、私たち雌は、こんなにも幸せに、おっ、おっ、おっ……!?!」

先ほどまで残っていた品性も、母としての態度もかなぐり捨てて雅は喘ぐ。

そんな母の姿を見て、これでいいのだと千夏は学習する。

雌。雄よりも愚かで、卑しく、雄を悦ばせることしかできない生物。ただ、それでも千夏という優秀な雄の五感を楽しませてくれるというだけで、生まれてきた価値はあるだろう。美しい母を抱く行為は千夏を幸福で満たし、醜い欲望を発露させた。

犯して、種付けして、孕ませてやる!

雅による誤った教育を施され、千夏が暴走する。

朝の爽やかな空気に、肉を打ちつける音が響いていく。

「あんっ!? あっ! あっ! あっ! イクツ!? ん、あ、あ、ああああっ!」

雌が絶頂した。極上の女体を仰げ反らせる。

千夏はしがみついたまま、雅をベッドへ戻そうと思い切りチンポレスを仕掛け、雌の背がベッドに戻る。ビクビクツと身震いして強い快感に襲われる雅の最奥まで肉棒を沈ませると、圧力を掛けてくる膣肉に堪えかねて、自身も興奮を抑えきれなくなった。

ぶびゅぶびゅっ！　ぶびゅるるるっ！　びゅるっ！　どびゅっ！　どびゅぶゅっ！

「はあああ……い！」

母に種付け。禁じられた行為だという常識がより強い興奮を引き起こし、膣内射精の勢が増す。子宮口に亀頭をぐりぐりと押しつけながら中に精液を放射し、子宮を白く粘ついた体液で満たしていく。「あははっ……い！」

千夏は変声期前の声で楽しげに笑い、雅の乳肉に顔を擦りつけた。むにゅ、と柔軟に形を変えるそれが楽しくて、いやらしくて、伸ばした舌で胸を舐め上げる。

母の、自分の雌の胸。主であるらしい千夏が何をしてもよい。

「ああむ」

「んお、お……」

ピンク色の乳輪ごとしやぶりつき、ピンと立っていた乳首に吸いつく。

その行為はただの愛撫のつもりだったが、雅の乳首からは何故か母乳が滲み出てきた。まろやかな甘みが口いっぱいに広がる。突然の味覚に驚いた千夏だったが、水分補給にはちょうどいいと思い、母乳を啜った。

「ぢゅるっ、ん、ぢゅ、ぢゅるっ、ぐくっ、ぶぢゅっ！」

「あ、う、ああっ……い！」

絶頂の余韻を残した雅が声を上げる中、千夏は喉を潤していく。

そのときの千夏はもう、雌を自分の同等の存在とは認識していなかった。あらゆる点で自分を楽しませてくれる麗しい生物。一匹でも多く自分の手で管理して、使い倒してあげたい。それが雌にとつての幸福にも繋がるのだと理解していた。

「もう一回……い！」

「お、んっ……!」

たかが一回で終われるはずもなく、千夏はまだ射精の続く肉棒を早速動かした。

子宮に亀頭が食い込むたびに、中に詰め込まれた精液が波打った。たぶんっ、たぶんっ!

その後も、雅の子宮で精液が絶えずシイクされる。

二回、三回と追加の射精を受け、子宮は完全に精液袋と化す。波打つほどの余裕がないくらいに袋が満たされている。それでもまだ千夏は動きを止めず、欲望の赴くままに雅を貪り食らっていた。

「あ、はっ、ははっ、おらっ、動けっ、んんっ、あー……、これ、気持ちいい……!」

「んおおおっ! おうっ! は、はいっ! おっ! おっ! ……」
おおっ……!」

四つん這いにさせた雅にデカ尻を振らせ、自分からチンポを膣奥まで収納させる。雅の黒髪を両手で掴んで引っ張りながら、動きが悪くなれば尻に遠慮なく平手打ちを放つ。

「もっど速く!」

「ひいんっ!」

ピシヤンツと音を鳴らし、千夏の手の平の痕が尻に浮かぶ。雅は尻を前後に揺すって千夏の性欲処理を支援する。自分よりも年上で、体も大きい女が必死になって尻を振る様は千夏の征服欲を煽り、いけない充足感を脳に与えた。

「ああああっ! もっど、もっど叩いてえっ!」

そんな千夏のことを思ってたか、雅は千夏に見えない位置で小さく笑った。悪巧みをし、それが上手く行っていることに満足したような。たとえるならばそんな笑みだった。

千夏はその笑みに気がつくことなく、雅を犯し抜いた。

全身に汗を掻いた肌を擦りつけ、相手の体温を感じながら気持ちよく達する。段々と意識がなくなっていく雅の体を勝手に使って種付けを続け、眠りに落ちても行為を止めない。膣も口も胸も汚し、全身を白濁で彩る。

「美味しかった……！」

そんな声を自然と搾り出し、千夏は人心地つく。

千夏が座っているのは、仰向けになった雅の上。形のいい双丘の上だ。

甘噛みの痕を残し、唾液や精液を纏った母性の象徴を尻で踏み潰す。やってはいけないことをしている気分になって興奮を抱く千夏は、萎えることのない肉棒の先を絶頂の余韻に浸って放心している雅の唇に宛がう。

「あと、少しだけ……」

「ん、ちゅぷゆ、ちゅぷぷっ……！」

ぬぷぷ、と雅の口内に肉棒を押し込み、千夏は腰を揺らす。

どびゅっ、ぶびゅっ、びゆるるつと、雅の膣穴から射精のように精液が漏れ出てきた。シーツの上で既にできていた白濁溜りを大きくしていく。ほんの一部が溢れ出たとは思えない量の精液からは、一人前の雄の臭いを発していた。

新しい母

母を性的に喰らい、千夏は強い満足感と背徳感を覚えながらベッドに座り込んでぼうつとしていた。目の前では、たった今まで犯し尽くしていた雅が起き上がり、千夏を抱き締めて頭を撫でてくれている。「今日も立派に女を犯せたわね。ママ、とっても嬉しいわ」「うん、うん……」

雅の乳房に顔が埋もれる。あらゆる体液が付着したままの胸はべたべたとしているが、それでも母性の塊に包まれることに悪い気はない。また、この胸を自分が汚したのだという達成感に震えながら、千夏は雅の教育を受ける。

「千夏。あなたはこうやって自由に女を犯していいの。初対面の少女だろうと、自分の母親だろうと、他所の男と愛し合う人妻だろうと関係ない。あなたはこの世界を支配することを許された雄なのだから」「俺が……」

耳の穴に注ぎ込まれたその教えは鼓膜を震わせ、脳に浸透する。それが正しくはないのだと判断できるだけの常識が備わっているとはいえ、なぜか記憶が不完全な千夏の脳は新たに入ってきた情報の刷り込みを無防備に許容してしまう。

「今日も、たくさんの女をあなたの逞しいおチンポで屈服させましようね?」

千夏は母の言葉に首を縦に振るのだった。

「汗も掻いたし、シャワーを浴びましようか」

立ち上がった雅に手を引かれ、千夏は衣服を整えた後、共に部屋を出た。

広い廊下が左右に伸びている。壁には一定間隔を空けて扉が幾つか確認できる。

あの扉の向こうに、他の母たちがいるのだろうか。もしかすると、他の母たちの子供の部屋かもしれない。鉢合わせたらどうしよう。記憶を失った千夏では、今まで通りの対応というのができない。

記憶を失ったことがバレてしまったら、きっと雅は悲しむだろう。

千夏は記憶を失ったことを伝えず、今はただ成り行きに身を任せた。

と、雅と一緒に廊下を歩いているときだった。

向かう先に見えていた扉が開き、中から一人の女が姿を現した。寝惚けているのか、少しふらふらとした様子だ。

「ふ、ああ……」

大きく欠伸をし、開いた口から八重歯を覗かせる女。長い茶髪は背中への辺りまで真っ直ぐ伸びている。手足がすらりとしていて全体的にスレンダーに見える。だが、タンクトップとショートパンツという頼りない服装から確認できる胸部や臀部の膨らみは、雅には格段に劣るものの、それなりに魅力的な曲線を描いていた。

「うーん……！ ああ、よく寝たわね……」

二十代半ばの美女。彼女は気持ちよさそうに大きく伸びをした後、チラリと横を見た。

「んー……？ あ、——千夏と雅さん、おはよう」

今気が付いたようで、その美女は屈託のない笑みを浮かべ、千夏の傍まで近づいてきた。目の前で腰を軽く曲げ、千夏の頭に手を置いて撫でてくる。千夏は突然の接触に対応することができず、少し混乱しながらも撫でられる感触に心地よさを覚えていた。

「おはよう、鈴音ちゃん。^{リン音}……つて、どうかしたの？」

雅に鈴音と呼ばれたスレンダーな美女は、くんくんと鼻を鳴らしていた。

やがて鈴音は、ニマニマといった笑いを見せた。

「朝から随分楽しんだみたいね。体中から、くっさくて素敵な雄の臭いを放ってるわよ？」

千夏と雅の間で交尾が行われたことを察知し、鈴音は二人を交互に見て満足げだった。その視線を受ける雅も自身の頬に手を当てて「うふふ」と笑い、「ええ。今日も千夏にたくさん食べられちゃったわ」と嬉しそうに告げる。

「偉いわね、千夏。ママが褒めてあげる」

「あ、ありがとう……」

少し手荒く鈴音に髪を掻き乱されるが、それでも安心感がある。

この安心感は、決してただの他人では感じられないと千夏は思った。ママと喋っているが、実母ではない鈴音とは血は繋がっていないはずなのに、雅に感じた包容力を感じてしまう。

「んふふ、気持ちよさそうね」

「あ、ああ……」

鈴音に撫でられ続けていると、千夏の体がビクビクと震え出した。傍に寄ってきた新たな雌の甘い香りに中てられたのだろう。穿いたズボンの股間部は大きく膨らみ、徐々に持ち上がって臨戦態勢を取る。

「あー、勃起しちゃったわね」

顔をにやつかせたまま、鈴音は千夏の前でしゃがみ込み、膨らんだズボンに指を這わせる。

「雅さん、このチンポ、どうしょつか」

「そうね。部屋に戻って性処理を再開しているとキリがないでしょうし」

と言ったところで、雅は「ああ」と何かを思いついたように声を上げた。

「シャワーを浴びながら搾り取ってあげましょう。ここからは鈴音ちゃんに任せるわ」

「え、雅さんはいいの?」

「ええ。朝から千夏を独り占めしちゃったから。シャワーは自室のを使うわ」

「そう? わかった」

「千夏をお願いね」

「はい」

というやり取りがなされるのを千夏が眺めていると、雅がその場を去って、千夏と鈴音が残される。母の一人とはいえ、今の千夏にとっては初対面の美女だ。緊張しないわけもなく、その緊張は肉棒にも伝わった。

「あ、また硬くなった。いいわよ、その調子。男の子はそうでなく

「ちや」

「ううっ……」

鈴音の手が千夏の股間を包み、肉棒を指で優しく揉みほぐす。

「あは、ビクビク跳ねたわね。気持ちいい？ ママの手でチンポこねくり回されて感じちゃう？ 遠慮しないでいいからね。あたしは千夏のママの一人だけど、女である以上、千夏の性欲の捌け口なんだから」

鈴音の口が千夏の耳元に近づき、ゆっくりと動き、言葉を紡ぐ。

「千夏は選ばれた雄なのよ。好きな時に勃起して、好きな時に雌を犯しなさい。他のママからも言われてるわよね。この世界の雌は全員性処理道具だって。他所から奪ってもいいし、オナホみたいに使ったって誰も怒らない。むしろ喜ぶわ」

それはあまりにも歪な関係だ。そう思うだけの常識は、やはり千夏の脳に残っている。

それを蝕む毒が言葉に乗って千夏の脳に運び込まれる。さつきと同じように抵抗することができない。千夏がもう少し理性のある大人ならば話は違っただろうが、柔軟性のある子供の脳は良くも悪くも外部の影響を強く受ける。

「雌は肉奴隷。はい、復唱しなさい」

「雌は、肉奴隷……」

「雌はチンポ穴。はい、言ってみて？」

「雌はチンポ穴……」

千夏がしっかりと行ってみせると、鈴音は花咲くような笑顔を見せ、また千夏の頭を撫でる。

「よく言えたわね。それじゃ、次は」

鈴音は千夏の両手首を握ると、その手を自身の首元へ誘導させる。いったい何をさせるつもりなのか。微かな嫌な予感が千夏の脳を過ぎる中、案の定、千夏の両手は鈴音の首へと誘われるのだった。

「握って？」

「でも……」

「いいから。ほら、あたしの首を握り締めて？ ね、お願いあい」

甘い声音でチンポがビクンツと跳ね、興奮が跳ね上がる。

それをきっかけに、両手が誘われるように鈴音の首を自らの意思で掴むと、恐る恐る力を込めていく。細い首に指が食い込んでいくに連れて、鈴音は頬を赤らめ、益々嬉しそうに笑みを見せる。

「っ、は、あ……！」

子供の千夏に、雄に命を握られるのがそれほど気持ちのいいことなのか。

千夏には女の気持ちはわからない。だが、女の生殺与奪を決定づける行為に肉棒は反応し続けている。そこからいけない快感が脳に流れ込んできて千夏を従える。

千夏とチンポ。いったいどちらが主なのか。曖昧になった関係のまま、千夏はギリギリと鈴音を殺さない程度に苦しめて、その姿を見て高揚の吐息を吐いた後で、湧き上がった欲望が自然と作り上げた言葉を放った。

「……や、やらせろ」

抱くでもなく、やる。雄の本性を剥き出しにした千夏に対し、鈴音は口の片端を持ち上げ、白い歯を見せて笑った。

雌豚

「んふっ、ぐぢゅっ、ぶぢゅっ、ぐぢゅぶっ、ぶぢゅっ！」
「ん、んあっ……!?!? あ、ああああ……!」

裸の少年と美女の二人きりの大浴場。そこに響き渡るのは、鈴音が肉棒をしゃぶり尽くす音と、年上の美女に翻弄される千夏の喘ぎ声だった。つい数分前、雄の本能に駆られて鈴音を求めたには情けなく、浴室の壁を背にしてガクガクと膝を震わせている。

しかし、それも仕方のないことだろう。

「ぶぽおっ、ぶぢゅぢゅっ、ぶっぢゅっ、ぐっぢゅっ、ぶぢゅるるっ
！」

「あひっ……!?!?」

鈴音のフェラチオはえげつなかった。

街を出歩けば大勢の男が振り向くほどの愛らしく活発的な顔に雌の微笑みを湛え、鈴音は床に膝を突いて千夏の股間に顔を埋める。大半の雄が敗北を認める剛直が一秒に二回の間隔で鈴音の温かい唾液が絡む口マンコに揉みくちやにされ、ずろろおっと啜り上げる音とともに再び姿を現す。

「ずっぷんっ！」

「おっ……!?!?」

すぐにまた、肉棒が鈴音の口内に呑み込まれた。

一段と激しく震える千夏を見て、一旦動きを止めた鈴音は頬を窄めてチンポを根元まで啜えたまま目を細めた。床に垂れてしまわないようにと茶色の髪をツイントールにした髪型と相まって、悪戯好きそうな雰囲気を持っている。

「ぢゅううっ、ぢゅぢゅっ、ぢゅるっ、ぐぢゅぢゅっ！」
「っ……」

しゃぶるでもなく、啜えたチンポを覆う自身の唾液を啜る鈴音。上目遣いの目線を送られながら、千夏はゆっくりと深呼吸をした。少しずつ落ち着きを取り戻していくが、一度脳に刻まれた快樂の熱はすぐには冷めない。

「ぬろおっ、ぬちゅっ、ぬぶっ！」

「くっ……！」

さつきよりだいぶゆつくりとしたフェラチオが始まったが、千夏は敏感だった。

これではいけない。雄としての矜持が顔を覗かせ、千夏の手は鈴音の結われたツインテールに伸びた。まるで雄に掴まれて引つ張られるために伸ばしたそれを掴み、雄と雌のどちらが上に立つべき生物なのかを知らしめる。

「しゃぶれっ……！」

「ぐぷんっ！ ぢゅぶんっ！ ぐぢゅぢゅっ！ ぶぢゅっ！ ぶぶうっ！」

「はあっ、ああっ……！」

指示を下した千夏に従い、鈴音が肉棒を口オナホで扱き始める。雌に対して立派に命令することができた息子の成長を悦ぶように、花咲く笑みを見せつけて、乳房をぶるんっ、ぶるんっと弾ませる。

「ぶぽぽおっ！ ぐっぽおっ！ ぢゅぶぶっ！ ぐっぶんっ！」

女尊男卑を掲げる女たちが見れば、鈴音を非難するだろう。男に、それも十歳にも届かない子供に雌として服従し、膝を突いて突き出したムツチリ美尻の股からとろとろと愛液を垂れ流ししている様を見れば仕方がない。

あまつさえ、鈴音はフェラチオをしながら、何かを期待するように尻を上下に振っている。それは、本番に備えた準備運動のように見えた。激しく振り下ろして、ビショビショになった股から愛液を浴室のタイルにぶちまける。

仮に、鈴音の今の姿を撮影した映像が世に出回れば、相手のいない雄共はこの女は誰かと騒ぎだし、しばらくオナ狂いの発情猿と化すだろう。それくらい、綺麗な丸みを帯びた尻を振りながら少年の最雄チンポを舐めしゃぶる鈴音は卑猥だった。

「ぶぢゅぢゅぢゅぢゅっ！ ずぞぞぞぞおっ！ ぶぢゅーっ！ ぢゅぢゅーっ！」

「あ、あ、あっ……！」

「ぢゅろろろろろろおっ！」

「だ、め……」

畳みかける鈴音のバキュームフェラを受け、千夏は腰をブルリと痙攣させた。

どぶんっ！ どぶんっ！ どぶんっ！ どぶんっ！

「うっ……！ ぐっ……！ お、えっ……！ ふっ、ふっ、ぢゅるるうっ、ぢゅぶっ！」

千夏は鈴音のツイントールをぎゅっと掴み、自ら腰を突き出して喉奥を突いた。さすがの鈴音もそれにはえづいてしまいが、すぐに対応するあたり、手慣れている。ぐっぽりとチンポを収めた口元を千夏の股間に埋めたまま、上目遣いをやめることなく千夏に微笑みを送っている。

これでいいのだと、千夏は言われているような気がした。

ツイントールを握る千夏の手に力がこもる。

女の命とも言われる髪は、男の目を惹くためにある。ツイントールに括ったそれは、男に掴まれるためにある。言葉にしなくても鈴音から伝わってくるその誤った教育を、千夏の純粋な子供の脳が吸い上げる。

射精を済ませ、たっぷり数分間。余韻に浸った後に、ようやく千夏は鈴音を解放した。

「ん、ぢゅっ、ぷはああっ……！」

鈴音が肉棒を口から取り出し、口を開く。唾液や、精液の残り汁が溜まった口内。どろりと舌の上を流れるそれがこぼれ落ちてしまう前に、口を閉じて嚥下し、精液を味わった口から熱い息をほっと吐き出す。

「っ馳走さまあ……」

千夏のまだ大きく反り立った肉棒を顔面に乗せ、鈴音が嬉しそうに報告する。

何をして、この女は嫌がることはない。その事実が千夏の雄の部分を増長させる。

少しの間、勃起したチンポ置き場として鈴音の顔を使っていた千夏

だったが、やがて我慢が利かなくなつた。ここまでしておいて、本番抜きで浴室から出ることなど到底できるとは思えなかつた。

千夏の心境を、鈴音もよく理解しているようだ。

「そろそろ頃合いね」

鈴音は千夏の傍から離れると、背中を向け、歩き始める。どこへ行くのかと千夏が思う中、浴室の端まで移動した鈴音が壁に両手を突いた。

「おいで？ 千夏」

言いながら、鈴音は尻を振る。大きすぎず、小さすぎない絶妙な塩梅の肉付きの尻。日頃からほどよく鍛えて引き締まつたそれが千夏の視界でフリフリと揺れ、千夏の視線が面白いくらいに引き寄せられた。

視線だけでなく、体まで吸い寄せられるのは必然的なことだった。

「おいで」

射精後にも長引く快感で膝が微かに笑っているが、千夏はふらつきながらも鈴音の誘導によつて歩みを進める。さながらそれは、ようやく立つことを覚えた子供が、遠くにいる母の下へと向かおうとする光景だった。

「鈴音ママのおマンコはこいよ」

勃つた千夏が足を速める。

「あなたが生まれた場所に、帰つてきなさい」

千夏を産んだのは雅であつて、鈴音ではないはず。鈴音の発言のおかしさに気が付く余裕はなく、千夏は鈴音の背後まで近づくと、再びツイントールを掴んだ。女を抱く際に長い髪は手綱になるのだとしっかり学んでしまったようだ。

息子として、母である鈴音の中に子種を戻す。

自分の役目を自覚した瞬間、千夏の髪は徐々に色を変えた。雅と同じ黒髪から、鈴音と同じ茶髪。顔立ちも鈴音の遺伝を感じさせるものとへと変わっていく。それを目にした鈴音の顔が危うげな興奮に彩られていく。

明らかな異常事態だが、自分の顔や髪色を確認している余裕のない

千夏は、苛立つように血管を浮かばせる肉棒を鈴音のマンコに突きつけ、前進を始めた。

「ん、あああああんっ……!?!」

膣穴に亀頭の先が埋まり、ズププツと挿入されていく。鈴音が心地よさそうな声を上げるその背後で、母と交尾をする背徳感に震えていた千夏が、開いた口から八重歯を覗かせて恍惚の表情を見せていた。今の千夏にはわずかな躊躇いもない。

魅力的な雌と交わった以上、雄が取る行動は一つ。

「ああんっ?! はああっ?! あっ?! あああっ?!」

千夏は小さな体を躍動させるように、腰を激しく振り始めた。自ら壁に両手を突き、背後を千夏に委ねた鈴音に逃げ場などない。ツインテールというハンドルを握られているのもあって、完全に主導権を奪われてただ嬌声を奏でる。

「おおっ?! 中、掻き回されてっ! あんっ?! ああんっ! 気持ち良いっ! 息子チンポ気持ちいいっ! いいわよっ! アンタは本当に、んっ、パパにそっくりね! その調子で、遠慮なく、奥まで蹂躪してっ、あああああっ?!」

鈴音を気持ち良くさせることが目的ではない。交尾において重要なのは、雄が如何に気持ち良くなるか。その過程で雌は勝手に絶頂してくれる。傲慢ともいえる思想が脳内に広がっていき、千夏は腰遣いを荒くした。

「おおっ?! お、ほおっ?! んおっ?! おっ! おおっ!」

雌に対する労わりなどない、高速のチンポ突きで鈴音を攻め立てる。狭い膣壁に肉棒を擦りつけ、エラでガリガリと刺激を与え、どちゆっ、ごちゆっと子宮口に全力攻撃を仕掛ける。低い声で喘ぐ鈴音の声で鼓膜を喜ばせながら、千夏は笑った。

「あ、はあ……!」

性別の境をさ迷っているような中性的な幼い顔に、女には真似できない雄の笑顔を見せ、鈴音の尻に股間を密着させる。パンツ! と弾ける音と股間にぶつかる尻の柔らかい感触に悦びながら、千夏は加速する。

交尾において、雄が如何に身勝手になれるか。

その証明のような乱暴な前後運動。その度に浴室に広がる肉と肉の衝突音。それを掻き消すように、絶頂を予期した雄の歓喜の音が鋭く奏でられた。

「出るううううっ!?!」

「んひひひひいっ!?! あああああっ!?!」

千夏と、膣奥までぶち込まれた肉棒が震え上がり、精を吐く。どぼんっ! ごぼんっ! と密閉された場所に粘ついた液体が叩きつけられる音が響くに連れて、鈴音の子宮は濃すぎる白濁に染められていった。

息子から母へと子種の受け渡し。陰囊で作られた熱い精子が母の胎を洗い、中に溜まっていく。母自身の胎で、千夏の弟妹を作らせようとするかのように。容赦のない種付け行為によって鈴音もまた強烈な絶頂を体験しているようだった。

「む、息子チンポ、強すぎっ……。あ、あー……。精子、あっつ……。お腹、ズツシリしてるう……。あたし、千夏のママなのに、息子のねばねば精子い、子宮に溜め込んで、嬉しくて、頭おかしくなりそ……」
そう言っつて、鈴音は笑みを見せたまま放心したように脱力していく。壁伝いにズルズルと腰を下げる。千夏もそれに合わせて床に両膝を突くことになったが、挿入したままのチンポを取り出すことなく、中出しを継続した。

「男っつて、こんなことも、していいんだ……」

母をバツクで犯しながら、尻を引っ叩く。起きろ、早く起きろ。そう伝えるように、ピシャンツ! と小気味いい音を鳴らして鈴音の尻に手の平の赤らんだ痕を刻む。三回、四回。平手打ちの回数を重ねること千夏は学んでいく。

「雌は、肉奴隷……」

雄としての優越感を浴びながら、千夏はどくどくと精液を放ち続けた。

母たち

シャワーで軽く汗を洗い流すつもりが、想定よりも長居してしまった。それもこれも千夏が暴走し、鈴音との交尾を止められなかったのが原因だ。しかし、後悔の念はそれほど大きくはなかった。千夏の幼い脳に、狂おしいほどの幸福と快楽が刻みつけられてしまったから。

母たちによる教育が、着実に千夏を悪い雄へと成長させていた。

「お待たせー」

脱衣所で着替えを済ませ、千夏が椅子に座って扇風機で涼んでいると、髪を乾かし終えた鈴音がやって来た。その格好はタンクトップとショートパンツで、入る前と同じ組み合わせだが、色が違ってくるから察するに別物のようだ。千夏と同じように、脱衣所にあつた別の服に着替えたのだろう。

大人数が使用できる広い脱衣所には、着替え用の衣服や下着が備え付けられていることを千夏は確認していた。女性用の下着を使っていかががわしいことしようと考えていたわけではなく、純粋な興味本位からだった。

簡単に調べたところでは、女性用の着替えは種類が豊富で数も多かった。その一方で、子供向けの服や下着は種類こそ多いものの、枚数は一人か二人分程度だ。もしも千夏以外に大勢の子供が住んでいたらとすれば、あれでは足りないだろう。

洗濯をしていたまま数が少なかったのか。

それとも、あれで足りる程度の子供しか住んでいないのか。

「なーに考えてるの?」

「わ……」

背後から抱きしめられ、後頭部に胸を押しつけられる。ふにゆんと形を歪めて柔軟さと弾力を伝えてくるそれは、巨乳と呼ぶにはほんの少し大きさが足りないものの、女性らしさを感じるには十分。しなやかでスタイルの良い鈴音にはピッタリだ。

「ママに隠しごとを駄目よ?」

「う、く、くすぐつたい……」

顎を指先で撫でられ、千夏は身を縮こまらせて抵抗する。面白がつて鈴音が攻め立てる。その攻防は仲の良い普通の親子のやり取りらしく、さつきまで浴室で本気の生ハメ種付けセックスをしていた間柄とは思えない。

「ほらほらあ。さつきと話しなさいよ」

「な、なんでも、な、ふ、くう、あ、ははっ……」

鈴音の執拗なくすぐり攻めが続く。もともと、鈴音は本気で千夏の口を割らせようとは考えていなかったようで、すぐにその動きが止まると、今度は大切なものを守るようにして千夏の体を正面から抱き締めた。

「いっぱい甘えていいんだからね……」

耳元で優しく囁かれ、千夏の目が蕩ける。

抱き締めてくれる母の柔らかい体。優しい声音。そのどれもが千夏には新鮮なことのよう感じた。記憶を失っているからそう感じてしまうだけなのだとは思うが、心に染みるような温かさを感じるのは、また別の理由があるように思えた。

「マ、マ……」

「ええ、ママよ」

母を呼び、それに応じた鈴音に背中を撫でられる。

こんな時間がいつまでも続けばいい。

そう思う千夏だったが、ふと横にある鏡が目に入って、無視できない違和感を覚えた。

鏡に映る千夏は、活発的な印象のある茶髪の少年だった。その顔立ちが鈴音によく似ていて、鈴音の遺伝を強く感じさせる。だが、それを認めてしまうと、雅の『私はあなたを産んだ母親』という発言が誤りだということになる。

それに、だ。部屋で雅と過ごしていたとき、千夏の視界に映っていた前髪はもっと色の濃い黒だったはず。そのときはちゃんと鏡を見て自分の容姿を確認したわけではなかったため、断定はできないが、一度気が付いてしまうと、状況の奇妙さから思考を切り離せなかった。

「さ、そろそろ居間に行きましよう？ 朝食とらないとね」

立ち上がった鈴音に手を引かれ、千夏は後ろ髪を引かれる思いで脱衣所を後にした。

これから向かう先には他の母たちもいるのだろう。その前にトイレに行くなどして一人で考える時間を捻出しようかとも思ったが、下手に考えるよりも直接状況を目の当たりにしたほうが早いと思い始めた。

廊下を進んでいると、複数人の話し声が聞こえてきた。

そこに他の母たちと、父親である一夏という男がいるのだろうか。

記憶がない状態での邂逅に対する不安と、親に出会えるという期待感。それらを胸に秘めたまま、千夏は鈴音が開いた扉から居間へと足を踏み入れた。

「千夏か。おはよう」

「あら？ おはよう、千夏。遅かったですわね」

「千夏、待ってたよ」

「寝坊か？ 私が起こしにいけば良かったな」

「おはよう……千夏……」

「なんだか少し驚いた顔をしているわね。まだ寝惚けているのかしら？」

美女、美女、美女。どこを見ても視覚の暴力。居間にはタイプの違う六人の美女がいた。鈴音と同様にいずれも目を惹く外見をしていて、窓から日差しを取り入れた部屋が彼女たちの存在によってより一層明るく、華やかに見える。

全員がこれほど整った容姿をしていることがあるのだろうか。世界中から厳選された美女を一部屋に集めました、と言われても信じられてしまうくらいに綺麗で、千夏のズボンの中で肉棒が静かに震え始めている。

その上、鈴音ほどではないが殆どの者が薄着だ。室内は空調が行き届いていてあまり実感湧かないが、季節としては夏なのだろう。頼りない布地から覗く若々しい肌が魅力的で、千夏は湧き出る唾を何度も飲み下す。

犯したい。

危うい欲望が顔を覗かせたとき、美女たちが立ち尽くす千夏に近づいてきた。

「ちーなーっー！」

最初に詰め寄ってきた外国人の美女。輝くような金色のロングヘアと、儚く、庇護欲を駆り立てる容姿。しかし彼女の表情を彩る笑顔は明るく、その行動は鈴音のように大胆だ。鈴音の手から奪い取るように千夏を掻き抱き、胸の谷間に迎え入れる。

「むっ!？」

着衣越しと言えど、深い谷間は千夏の顔を埋める。ぐいつ、ぐいつと後頭部を押されるたびに顔中に豊満な胸が襲いかかる。軽く呼吸をするだけで肺を甘ったるい香りが満たし、どうにかなってしまいうだ。

「シャルロットさん、独占は禁止ですわよ?」

「そうだぞ。千夏は皆の子供だからな」

「あ、ちよつと!」

シャルロットと呼ばれた金髪美女から助けようと、千夏を抱き寄せる二人の美女。

片方はシャルロットと同じ金髪のロングヘアだが、その色は淡く、ウェーブが掛けられている。所作の一つ一つが美しく、上品な空気感が漂う。聖母を思わせる穏やかな微笑と、巨乳なシャルロットをも上回る乳房が千夏の左耳をむっちり覆う。

もう片方は、艶やかな黒髪が目を惹く日本人女性。目鼻立ちが整った涼しげな風貌。近くで見れば、その面立ちには雅との共通点が幾つか見受けられた。血縁者なのだろうか。切れ長な目を細め、慈愛に満ちた表情で千夏に大質量の胸を宛がう。

左右から迫った乳の壁が千夏の両耳をむにゆりと塞ぎ、頭を挟み込む。

その柔らかさは男を駄目にする。そんなキャッチフレーズが似合いそうな双壁に挟まれ、千夏は身動きが取れない。下手に動けば胸で顔を揉みくちやにされ、肉棒が完全に目を覚ましてしまうだろう。

だからといって、このままじつとしていても悪化する一步を辿るのは避けられないが。

「セシリアと箒も人のことを言えないが、気持ちにはわかる」

そこへ、新たに一人が加わる。

銀に煌めく髪を揺らし、千夏の背中に寄り添う美女。左は金色で、右は赤色という左右で色の違う瞳を有している。見ているだけでゾツとするような冷たい美貌は微かに緩んでいて、愛おしそうに千夏を抱く。千夏の後頭部に触れ合う胸もまた、男にとって理想的な膨らみを描いている。

「千夏は、共有財産……だから……」

「ママも混ぜなさいー」

背後と左右を囲まれた千夏の前方を塞ぐ、おそらくは姉妹である似た容貌の美女。髪色も瞳の色も同じ。しかし、雰囲気は真逆だ。物静かで髪が長く、眼鏡を掛けた方を月と表現するならば、表情豊かでショートヘアの美女は太陽。

どちらも当然のように美しく、胸の主張も激しいという我が儘っぷりだった。

五人の巨乳がせめぎ合う空間。

「なんで僕だけ除け者に!? ずるいよ、皆! ラウラ、ちよつとごめんね」

「む、狭いぞ、シャルロット」

いや、シャルロットがラウラの横に無理矢理参入することで、背中、左右、前方に巨乳が二人ずつ。計六人が押し寄せ、形作られる女体の檻。ここに囚われれば、どんな男であろうと一時的に自由を失う。

「う、ぷうっ!? むうっ! つぐむ!」

全方位から押しつけられる乳の圧力。高すぎる人口密度の中で、千夏は女体の抱き心地の良さと、熱量と、甘い香りをこれでもかと思わっていく。いくら母を立て続けに二人頂いた千夏であろうと、これにはたじたじだった。

「あーあ、暴走してるわね、皆」

呆れたように笑う鈴音の声が聞こえてくる。見ていないで助けて

ほしいと思う一方で、やっぱりこのままで良いと思う自分がいる。千夏はそれを自覚しながら、おしくらまんじゅうの乳圧でぎゅうぎゅう詰め状態を体験し、チンポを順調に勃起させていった。

結局は、こうなってしまうのか。

諦めたように千夏はだらんと手足を弛緩させ、母たちの胸の中で恍惚に震える。

ビクンツ、ビクンツと肉棒が跳ねる。思い切り息を吸って密着する乳房から母たちの雌の匂いを吸い込むと、金玉が精子の生産速度を上げた。この先に待つ悦楽を期待しているかのように、窮屈なズボンの内側で竿が臨戦態勢を整える。

「あらあら、皆朝から元氣いっぱいね」

雅の声が聞こえてきた。部屋に入ってきて、この状況を微笑ましそうに見守っている。

雅の言う通り、この場に集まった女たちは飢えていた。

六人分の乳房に全方位を囲まれた小さな男の子。まだ少女のような愛らしさを持ちながらも、その股間には世界の覇者に相応しい雄の器官を携えている。そんなギャップが余計に女心をくすぐるのか、彼女たちは笑っていた。

爽やかな朝に似合わない、発情しきった雌の笑顔。

母が息子に見せてはいけない蕩け顔。

それを見せられて、既に雅と鈴音の体を使って性教育の実技を受けた千夏が我慢できるはずもない。

「千夏。朝食前に軽く性教育の勉強だ。さあ、どのママに教えてほしい？ 二人選べ」

箒と呼ばれていた黒髪美女に言われ、千夏は悩む。

朝食前までという時間的な問題故か、二人しか選べない状況。いろいろな組み合わせが考えられてしまい、どれが良いかなど判断ができない。いずれも品質が良すぎる雌のせいでの組み合わせも最高だと感じた。

こうなれば直感で決めるしかなく、千夏は二人の母たちに目を向けた。

千夏が選んだのは、一番落ち着く匂いのする母と、香水の癒される匂いを纏った母だった。

クロスオーバー③前編

ベッドで少し遅めの朝を迎えていきり立った肉棒が、柔らかい何かに挟まれる。むにゅっと竿に密着して伝わってくるのは人の体温。誰かが胸で勃起チンポを包んでくれているのだと認識した一夏は目蓋を開き、重みを感じる股間へと目を向けた。

「おはようございませす、ござ主人様」

一夏と目が合ったのは、銀色の髪を三つ編みにし、紺と白のメイド服を身に着けた女。形が良くツンと睨が吊り上がった双眼を細め、ピンク色の小さな唇を持ち上げ、にっこりと微笑んでくる。その笑みの破壊力は凄まじく、一夏は寝惚けた意識を覚醒させながら肉棒をさらに肥大化させていった。

「うふふ、ござ立派ですよ？」

白く豊満な胸の谷間に挟まれながら竿を伸ばす肉棒。それを見た女は湖面のように青く澄んだ瞳で一夏の顔を捉え、親愛の眼差しを向けてくる。仕える立場として、主人である一夏の逞しい朝立ちを素直に喜んでくれているようだ。

まだ出会って数日と経っていないというのに。

その女、十六夜咲夜は、一夏に永遠の恭順を誓っていた。

「失礼いたします。ん……」

咲夜は断りを入れると、亀頭に口づけを捧げた。チュツという接吻音の後、尿道口を中心にして口紅のキスマークがつけられる。自分で作ったそれを咲夜は満足げに見つめ、そこに唾液をとろりと垂らした。

亀頭に落ちてぬるりと伝い、胸の双壁に包まれた肉竿に垂れかけてく。

咲夜は胸を抱えてむぎゅっとチンポに押しつけ、ズリズリと上下に擦りつけていく。

「いかがでしょうか？」

一夏は言葉を発さず、ただ小さく頷いた。それだけで咲夜は満足だったらしい。自身の中で上昇する興奮度を示すように、青い瞳が妖

しい赤色に変わっていく。普通の人間にはない特殊な変化だったが、一夏は気にすることはない。

「いやあ、と口元を緩めて笑いながら、一夏は咲夜のパイズリに身を委ねた。」

ぬちいつ、にちいつ、ぬちやつ、ぬちゆつ、ぬぶぷうっ！

乳房と肉棒が擦れ合い、先ほど垂らした唾液が音を鳴らす。朝の間帯にそぐわない音であるが、一夏を取り巻く光景を見れば、今さらではあった。

一夏が後頭部を乗せているのは枕ではなく、枕元でうつ伏せになる少女の太ももだった。昨晚、一夏の夜伽を担当した茶色いショートヘアの少女はやけにムッチリとした太ももを枕代わりにされても動じず、胎に一夏の子種汁をムッチリと抱え持ったまま泥のように眠っている。

彼女だけではなく、広いベッドの端には他にも五人の女たちが裸のまま横たわっていた。同じく夜伽を任された者たちであり、その美しい容貌と魅力的な裸身にベツタリと精液を付着させていた。当然だが、彼女たち全員の胎には精液がたっぷり溜め込まれており、既に一夏の精子に卵子を仕留められた者もいた。

この光景は、今の一夏にとって日常茶飯事だった。

IS学園の支配者にして、全世界の雌を統べる資格を有する最優の雄。求めれば、どのようなタイプの女でも手に入る。箒たちが管理している門の存在を教えられて以降、一夏はこの世界では調達できない類の女を異世界から掻き集めていた。

ベッドで昏睡している少女たちも、咲夜も、そうして異世界から集めた女たちだった。

「あむっ、ぢゆるるっ」

こぼりと尿道から我慢汁が垂れそうになったとき、咲夜が口を開けて亀頭にしゃぶりついた。頬を窄めて口内で肉棒をしつかりと抱き締める。同時に浴びせられる吸引が心地よく、溢れ出てきた雄汁が次々吸い尽くされていく。

「ん、ぢゆぢゆっ、ぐちゆっ、ぶぢゆっ、ぶぢゆぢゆっ！」

そのままパイズリフェラに切り替わる。咲夜に微笑まれながら、太ももの枕で快適に寛ぐ。

しかし、これだけで満足することはない。

一夏はベッドに放置していたリモコンを手にし、操作を始めた。

直後、咲夜の背後の壁一面に映像が投影された。

薄暗く、機械の人工的な光が点在する部屋。そこには透明なカプセルが横向きで幾つも設置されている。一夏の精液が配合された溶液の中には裸の女が収納されていた。不気味で凶悪な笑顔を浮かべる鬼の顔が表面にデザインされた黒いヘルメット型の機器が頭部をすっぽりと覆っていて、そこから無数の管がカプセル上部へと伸びていた。何らかの情報を女たちの脳との間で送受信しているのだろう。カプセルに取りつけられたモニターには女たちの状態を示す数値が表示されていた。

カプセルに囚われて眠り続ける女たちの裸身を視姦し、一夏は口の端をさらに吊り上げる。この女たちは一夏の精液で心身を汚染し、束の技術によって念入りに脳の調整を進めている者たちだ。一夏の精液だけでも女を墮とすには十分すぎるのだが、人体実験をしたいという束の要望を叶えるため、こうして異世界から連れてきた者を使わせているのだった。

異世界から得た技術や知識によって束の技術力も未だに向上の一途を辿っているため、いずれは一夏や箒の手も借りずに世界中の人々を洗脳し、一夏に忠誠を誓う都合の良い人材を育てることもできるかもしれない。もつとも、箒が持てる力を使わずに束の洗脳処置だけに任せるとは考えられないが。

それにしても、自分のために頭を弄られていく女たちを眺めるのは非常に愉快だ。

それも、実際に洗脳処置を施した咲夜にパイズリフェラでご奉仕してもらいながらだ。

「く、くくっ、ははははっ……！」

一夏は恵まれた境遇にいる我が身を思い、高らかに嗤った。今の一夏は、以前までと違って欲望に傾倒できる精神状態になっていた。女

を弄んでいても突然正気に戻ることはなく、罪悪感を抱かずに気持ちの良いセックスライフを送ることができている。

「んっ、ぐぷっ、ぢゅぷうっ、ん、あ、ああ……なんて素敵なお声……」
口から亀頭を解放し、咲夜は惚れ惚れするように一夏を眺める。

咲夜は、元の世界では別の主に仕えていたメイド長だったそうだ。門を通じて拉致され、一夏の精液で無力化された後に、東の人体実験で脳を調整された。現在は一夏を唯一にして絶対の主人として認識し、甲斐甲斐しく世話をしてくれている。

「ぶぢゆるっ、ぐっぷうっ、ぢゅぶっ、ぶぷっ、ぬぷぷうっ！」

再び亀頭にしゃぶりつかれる。裏筋を舌で撫でられるのが気持ちよくて、一夏は微かに腰を浮かせた。そんな一夏をもっと喜ばせようとして、咲夜が裏筋を舌ですりすりと擦りながらパイズリの圧力を強めていく。

「ぶぢゅーっ、ぐぷっ、ぐぼおっ、ぐぼおっ、ぢゅぶっ、ぬぢゅぢゅっ！」

激しく上下に動く乳房に竿を揉みほぐされ、熱い舌と口内で亀頭を蹂躪される。これには一夏も堪らず、金玉から精子を汲み上げてしまった。

どびゅっ、ぶぢゆるるっ、びゆるっ、びゅびゅびゅっ、どびゅーっ、びゅびゅーっ！

「んんうっ!? んっ、んんっ！」

解放された精液が口内で暴れまわり、咲夜がそれを御そうとするが、頬はぷつくりと大きく膨らんでいた。中に精液が溜まっているのだろう。次々と放出される精液に対処するために咲夜は喉を鳴らして精液を胃袋に送り続ける。

射精の快楽に全身の力を緩める一夏と、必死に精液を飲み続ける咲夜。両者の反応は違うものの、最終的に二人の表情は悦楽に彩られた。

「ん、ぷ、はあ……。本当に、甘美なお味……。頬が落ちてしまいそうです……」

亀頭から口を離れた咲夜は、頬に手を当ててうっとりとしていた。

薄く開いた口から見える舌の上にはまだ精液の塊がぶるんと揺れていたが、それもすぐに嚥下される。

「ご馳走様でした」

そう言つて穏やかに笑い掛けてくる咲夜だったが、まだその瞳は爛々と赤く輝いたままだつた。やがて、その瞳が谷間で屹立したままの肉棒に向けられる。物欲しそうにチラチラと一夏の顔と肉棒を交互に見ていたが、「好きにしていどうぞ」と一夏から許可を貰い、その場でゆつくりと立ち上がった。

「ご主人様。どうぞ、こちらも味わってください」

短いスカートの端を摘み上げ、覗かせた白いショーツは既にぐつしよりと濡れそぼっていた。布地で吸収しきれなかった愛液が、しなやかに伸びる太ももへと伝い落ちていく。

「ご主人様と交われるのを楽しみにして濡れてしまったこのおマンコで、愛しいご主人様のおチンポをゴシゴシと扱かせていただきます。どうぞ膣襞の一本一本に至るまでご堪能いただき、ご主人様の将来のお子様となる子種を私の子宮に撒き散らしてください。見事、一発で孕んでみせます」

元の世界の記憶を束に奪い取られ、一夏を主人と認識している麗しいメイド。この美しい女を自由に味わい尽くし、孕ませ、子を産ませる。考えただけで気分が昂つてしまい、肉棒が強い熱を発してビクビクと震える。

一夏が座れと命令するまでもなく、咲夜は下着をずらして秘所を曝け出すと、陰裂を指で開きながら腰を下ろし始めた。まだ処女膜が確認できる膣口が涎のように愛液を垂らし、やがて触れ合った亀頭に愛液を擦りつけるような情熱的なディープキスを放った。

クロスオーバー③後編

ぬちゅつ、ぐちゅつ、ぬちゅちゅ。湿った音を鳴らして、亀頭が少しずつ咲夜の膣穴に収まっていく。一夏は緩みきった顔でその光景を眺め、自慢の一物によって一人の女が大人の階段を登る様を見届けた。

「行き、ます……!」

咲夜が覚悟を決めたように告げると、さらに腰の位置を低くしていく。

「ん、はあああんっ……!?!」

肉棒が穴に呑み込まれ、処女膜を突き破る。容易く踏破した先にある膣奥へと亀頭が誘われ、一夏は高温に熱せられた膣内に圧迫された。一人前の女になったばかりの肉穴は息苦しいと感じるほどに狭く、肉棒をガツチリと掴んで離そうとしない。

「ああ……んおおっ……!」

咲夜は天を仰いで喉を震わせ、一夏の股間に自身の尻をぺたんと乗せる。

しばらくそうしてじっとしていた咲夜だったが、段々と性器が馴染み始めたようだ。震えながら視線を下げ、あらゆる感情を内包した微笑みを一夏に注ぐ。

「ん、はあ……。ご、ご主人様? ご覧、いただけましたでしょうか……?」

甘い声音で話し掛け、うつとりとした様子で一夏を見下ろす咲夜。根元までぐっぽりと肉棒を包み隠した膣穴からは破瓜の血が漏れていて、それが竿に伝い落ちて一夏の黒い陰毛に染みこむ。

「ご主人様のおチンポで、この私、十六夜咲夜は処女を卒業いたしました……。これにて契約は完了……。ただいまを以て、私はこの世で最も尊き御方、織斑一夏様専属のメイドとなりました……」

咲夜は目を赤く輝かせ、身を乗り出す。両手を一夏の顔の横に突き、寝転がる一夏の視界に正面から顔を近づける。さつきまでチンポを挟んで擦っていた乳房を見せつけるように突き出し、愛する主人の

整った顔を見つめる彼女は、それだけでも幸せそうだった。

「ご主人様に恥じぬメイドとなれるよう日々精進いたします……。何か不手際がございましたらお申し付けください……。すぐに改善し、同じ失敗は二度といたしません……。今よりも充実した生活を必ず、ご主人様にご提供いたします……。！」

言いながら咲夜は尻を持ち上げる。膣奥まで届いていた肉棒がぐちゅぐちゅと肉に揉まれながら取り出されていく。膣壁に何度もエラが引つ掛かったようで、そのたびに幸せそうな息を吐く。じつくりと時間を掛けて解放された肉棒は愛液でねっちよりと濡れていて、竿を伝って一夏の陰毛にとろりと掛かった。

「ですのでどうか……。どうか永遠に、私をご主人様のお傍に置いてください……。ご主人様のお世話をさせてください……。私には、ご主人様の下しか居場所がないのです……。！」

本当は帰るべき場所があるのに。それを忘れているだけなのに。必死に懇願してくる雌が実に哀れで、愛らしい。

「わかったよ」

そんな雌を突き放すほど、一夏は冷酷ではない。いや、仮にどうしようもなく馬鹿な雌であったとしても、それが極上の雌であれば手放すことはない。

「俺が咲夜の居場所になつてやる。好きなだけ俺の傍にいればいい」

「ああ……。あああつ……。！　ありがとうございます、ご主人様……。！」

相手の求めていた台詞を吐き、咲夜の心を自分に依存させる。万が一記憶が勝手に戻ることがあつても、元の主人ではなく一夏を本心から選んでもらえるように。

「仕事だ、咲夜。お前のマンコで、俺の金玉から精子を搾り取れ」

「かしこまりましたっ」

仕事を与えられたメイドは元気をよく返事をし、改めて動き出す。

「んああつ、はああつ、んっ、んんうっ……。！」

咲夜は尻を下げていき、愛液まみれの肉棒を膣奥に招く。膣肉は相変わらず強い締めつけで肉棒を絡め取り、隅々まで擦つてくれる。一

夏は決して自分から手を出さず、メイドの奉仕に全身を委ねた。

「あああんっ、ご主人様のおチンポ、擦れるだけで、こんなな気持ちいいだなんてっ……。んああっ、あつ、私は今、とても幸せですっ……。んんっ、ずっとこうしていたいっ……。ご主人様のお傍で、永遠にいつ……。！」

咲夜は胸を弾ませ、気持ち良さそうに跳ねる。その動きに合わせて股間に柔らかい尻がペチンツと叩きつけられる。軽いと感じる重さなのだが、肉と肉の接触は強い衝撃を生み、股間に響いて肉棒を悦ばせてくれる。

「はははっ……。！」

一夏は両手を大きく横に広げて、少女の太ももを枕にしたままりラックスしていた。たんっ、たんっと軽快な尻振りを行う咲夜に合わせて身を震わせる。何もせずとも、極上のメイドが快感を供給してくれる状況に、これ以上ないほど弛緩しきっていた。

「んっ、おっ、ご主人様のおチンポ、すごっ……。！ あつ、はあっ、ああんっ、き、気持ち良すぎてえっ……。！ ああ、なんて素敵なのでしよう……。！。ご主人様つ……。！。私はきつと、貴方様に仕えるために生まれてきたのでしよう……。！。ご主人様のおチンポを癒し、愛し、そして、御子種を搾り出して気持ち良くして差し上げるために、私は存在しているのですっ……。！」

生物としてはあんまりな存在理由だが、それでも咲夜にとっては十分すぎるほど位が高いのだろう。自分の立場に誇りを持って、メイドとして一夏に性接待をする。自分の生き方を導き出した咲夜の動きは淀みなかった。

一夏の股間に騎乗し、跳ねる。跳ねる。跳ねる。

できるだけいやらしく尻を振り、チンポを膣で扱き尽くす。一夏が興奮できるように竿が出入りする様子をしっかりと見せつけ、すぐに膣内に収納して子宮口で亀頭を受け止める。

「あ、あ、ああっ、ご主人様のおチンポっ、凄すぎて……。！。んひいつ!? 気持ちいいっ、気持ちいいっ! ああっ、駄目っ、これ、おマンコでぬこぬこするだけで幸せすぎてえ、おかしくなるう……。!? あ、

「あああ、ああああつ！」

スパイダー騎乗位でチンポに食らいつき、覆い被さった一夏の眼前に美貌を寄せる。人形めいた端正さと涼しげな面立ち。そこに、間近で接するだけで多くの男を射精に至らしめるようなイキ顔を添えて、一夏を果てへと導いた。

どびゆるるっ、ぶびゆるるるっ、びゆるるるるっ、どぶうっつ、どぶうっつ、どっぷんっ！

「ん、あ、あ、あああつ、おお、お、おおおつ……！」

流れ込む精液の奔流。それを子宮で受け止めながら、咲夜は絶頂を体験していた。美人が台無しになりそうな品のない声と絶頂顔だが、そのギャップが一夏に興奮をもたらし、精液の放出量が格段に跳ね上がっていた。

「ご主人様のお、せーえきつ、こ、こんなに、頂けるなんてっ、ああつ、幸せですっ……！！ んんっ!? ああつ、お、お腹の中が、熱くてえ、重いっ……！！ ここまで出されてしまったら、簡単に妊娠してしまいますっ……。そうしたら、しつかりと育てて、お腹を痛めて産んで差上げなければ……。ご主人様と、私の赤ちゃん……。そして、私はご主人様に娶られて、妻兼メイドの織斑咲夜として、今まで以上に幸せな生活をおつ……。！」

ただ漏れの妄想が描く未来予想図。だが、それは決して妄想とは言えなかった。

一夏は気に入った女であれば妻に迎え入れ、自分の姓を与えることに躊躇はなかった。門を通じてこの世界にやってきた女たちの中には既に娶った者もいる。織斑マシユや織斑アーシアなどがその例だ。咲夜も彼女たちと同じように妻に迎えるつもりだ。

もつと多くの女を食い、墮とし、妻にしていきたい。相手が人外であろうと関係ない。恋人や夫がいても気にしない。一夏のLv. 100チンポと繋がれば最後、女がどれほど強力な力を持っているようが、一夏に屈服してくれるだろう。

次は誰にしようか。悩む一夏の脳内で、候補が多数浮かび上がってくる。

英霊、悪魔、天使、墮天使、妖怪、宇宙人、異形、アイドル、忍者、兵器、精霊。

挙げていけば切りがないくらいには、異世界から豊富な人材を取り揃えてある。勿論、特殊な存在ではないが、普通の人間たちもいる。しかし、ただの人間であつても容姿は一夏のチンポが反応する美しい女ばかりである。

一夏は倒れてきた咲夜の頭を撫でて射精を続けながら、壁に展開されたままの映像に目を移す。

別室にてカプセル内に寝かされた裸身の女たちは、培養液の中で今この瞬間も心と体を弄られている。その中には先の例に挙げた女たちもいて、ちようど何人かが洗脳を終えたようだ。幾つかのカプセルのモニターに『洗脳率100%』という文字が表示され、邪悪な笑顔を見せる兎がゲラゲラと爆笑しながらクラツカーを鳴らして成功を祝う謎のアニメが流れていた。

処置を終えたカプセルから管を伝って培養液が排水され、カプセルが開かれる。

眠っていた女たちはやがて目を覚ますと、身体を起こして外に出た。ここがどこなのかと疑問を抱くこともない。壁面に表示された『目覚めた者からこちらの部屋で健康診断を受けてください』という案内文に従い、自らの意思で歩みを進める。

ついでだからと一夏は、彼女たちが向かう部屋に映像を切り替えた。そこでは、ピツチリとした黒衣を身に纏って口元を黒いフェイスボールで覆い隠した美女たちが詰めていて、洗脳を済ませてやって来た女たちの健康診断を行っている。

健康診断の内容は多岐にわたり、一般的な診察もあれば、少々特殊な診察もある。自慰から絶頂に至るまでの時間や分泌された愛液の量の測定。カメラの前で一夏への忠誠の言葉を綴りながらマンコを片手の指でくぱあと開帳し、エロ蹲踞で敬礼をする動画の撮影。腰振りの仕方や速度の確認。デイルドーを使ったフェラ顔や、絶頂したときを想定したオホ声やアへ顔の実演なども行っている。

これらの検査によって合格ラインに届かなかつた者はカプセルの

中に戻され、改めて脳を弄られる。

「ここで撮られてたのか」

一夏が新しい女を抱く際、学園ホームページの学園関係者専用ページを参考にしている。そこに洗脳を終えた女のヌード写真と個人情報報告が全て掲載され、先の健康診断で撮影された映像もアップロードされていた。

映像が作られていく過程を覗き見てムラムラしてきた一夏は、咲夜の尻を掴んで腰を突き上げた。

「んおおっ!?! お、ほおおっ!?!」

咲夜は少々疲労している様子だったが、遠慮はしない。気持ち良くなるために咲夜の穴を犯し、好きなタイミングで吐精する。種付けしても抜くことはなく、すぐにフル勃起して三回、四回とガッツリ中出しを決めていく。一夏の胸元に顔を埋めて震える咲夜が可愛くて、一夏は耳元で「孕め」と囁きながら何度も種付けを繰り返した。

「あー、最高。……千夏も楽しんでるかな?」

どんな女でも抱き放題な快樂一色の生活。一夏は自分と同じ恵まれた環境を生きる息子、千夏のことを想う。今頃起きていて、箒たちに可愛がられているのだろうか。時間が空いたときにも様子を見に行ってみようか。

「後で一緒に楽しむか」

息子と協力して妻たちを片っ端から抱きまくる。マンコが乾く暇もないくらいにハメ続け、父と息子の精子を妻たちの子宮に詰め込む。怪物級の雄二人相手ではさすがの箒たちも分が悪いだろうから、そのときはアジアやマシユ、咲夜たちも参加させよう。

「いっぱい食べて、立派に成長しろよ。千夏……」

含みのある笑みを見せながら一夏は咲夜を強く抱き、膣奥に新鮮な精液を撒き散らした。

クロスオーバー④前編

ぱちゅっ！ぬぢゅぢゅっ！ぐっぢゅっ！ぱちゅんっ！

粘液を纏った大質量の肉を叩きつける音が部屋に響く。肘置きに両手を置き、裸のままリクライニングチェアにふんぞり返っていた一夏が音の聞こえる下半身へと視線を注げば、そこにはIS学園の白い制服を身に纏った黒髪ポニーテールの少女、ひめじまあけの姫島朱乃がいた。

「うふふふっ」

ぬぢゅあつ！ぐぢゅぢゅっ！ぬちい！ぱんっ！ぱんっ！

制服の胸元を開き、ブラジャーを外して解放された朱乃の爆乳が、一夏の肉棒を谷間に挟んで圧迫する。数分前まで精液やら愛液やらでぐっちやぐちやに汚れていたはずだが、丸みを帯びてふんわりとしたデカパイにチンポの汚れが丁寧に揉み落とされていた。

「いかがですか？一夏くん。お掃除パイズリ、上手くできていますか？」

「ああ、天国にいる気分だよ。朱乃」

「あらあら。それは喜んで良いのでしょうか。悪魔の身としては少々複雑ですわね」

そう言つて朱乃は、背中から黒い翼を出現させ、大きく広げた。

それは、一夏が娶ったアーシアが有する黒い翼と同じ形状だ。

朱乃とアーシアは同じ世界からやってきた仲間だった。人間から悪魔へと生まれ変わり、純血の悪魔である主の下で生活を共にしていた。アーシアと同様に兵藤一誠という眷属仲間である少年に恋をし、将来を誓い合っていた仲だった。

朱乃は婚約者の一誠や、眷属仲間である男性陣に対しては友好的なようだが、男嫌いの気があるようで、他の男たちに興味はない。無礼な相手には表情は穏やかながらも冷ややかな眼差しを向けることもある。本来、出会つて早々体を差し出すように言ってきた一夏に対しても、朱乃は侮蔑の感情を見せていてもおかしくはなかった。

だが、朱乃は微笑みを絶やさない。

今の朱乃にとって、一夏は唯一信じられる男。この世界に連れて来

られ、洗脳処置を受けた朱乃には一夏に逆らうなどという考えは一つも浮かんでいない。『正気モード』ではなく『服従モード』の設定が脳に刻まれているため、永遠に仕えるべき主として認識した一夏に対して奉仕の手は緩めない。

朱乃は近くのベッドで倒れ伏す精液まみれのメイド、十六夜咲夜やデザート感覚で頂かれた二人の女たちを見て微笑ましそうに目を細め、さつきまで咲夜の内側をほじくり返していた肉棒を、にゅぷぷうつと乳房の間に誘う。朱乃の巨乳でも隠し切れない肉棒が谷間から竿と亀頭を覗かせている。

「ん、あああ〜っ、ぐぢゅっ、れろれろお〜っ！」

ぬっちやああと舌を裏筋に這わせ、朱乃が亀頭を舐め回す。

「お、お、お、うぷっ！」

一夏が震えながら天を仰ぐと、背後に立っていた女がこれまた大きな乳房を抱え持ち、一夏の顔面に乗せてきた。むにゅううつと柔らかく、乳肉の重さをこれでもかと伝えてくる。密着したまま深呼吸をすれば、女の甘い香りが鼻腔を通り抜け、一夏を癒す。

「すううっ……い！ はあああっ……い！」

股間の爆乳おっぱい。顔面の爆乳おっぱい。

至福のひと時だった。

「これで、いいのだろうか……」

不安そうに一夏の顔に胸を預ける女、秋山凜子あきやまりんこは、IS学園の白い制服に包んだグラマラスな肉体を不安げに揺すっている。そのたびに一夏の顔面で乳房がたぶんつと跳ね、乳肉プレスを一夏に食らわせていた。

「ええ、喜んでいようですわよ？」

自身の胸の間でビキビキと力を高める肉棒を見て、朱乃はくすりと笑みをこぼした。

「そ、そうか……。それは何よりだ……」

言って、凜子は溢れ出た嬉しさを噛み締めるように頬を緩めた。

青みがかった長い髪を後頭部でまとめた凜子は、母性溢れる肉感的な身体付きとクールな顔立ちもあって幾分か大人びて見える。しか

し、年齢は朱乃と同じくまだ少女の域だ。経験も足りていないように、自分の一挙一動に神経を注いでいる。

集中力を研ぎ澄ませ、凜子は両手で支えた乳房を一定のリズムで一夏の顔面に振り下ろす。ぱんっ、ぱんっとと乳房を置いたたびに一夏の声から言葉にならない呻きが漏れ、椅子の上で腰をビクつかせていた。その反応を見て、凜子は少しずつ自信を持ち始め、緩急を入れるようになった。

男との経験はないようだが、持ち前の素質はあったようだ。

門を通じてこの世界に来る前の凜子は、特殊な忍法を操って魔に属する者と戦う忍、対魔忍たいまにんとして学業の傍ら任務をこなしてきたという。それまで戦闘方面でしか使われていなかった肉体だが、こうして男を喜ばせるために使っていたほうがお似合いだ。

だからこそ、箒たちによってこの世界に拉致され、洗脳が行われた。あまりにも無謀な任務に赴こうとしていた相棒の少女と共に。相棒よりも先んじて洗脳を終えた凜子はこうして、ご奉仕要員として一夏に引き合わされることになった。

「んっ、ふっ、ああ、おっぱいの重みがそんなに気持ち良いのか？ 一夏」

胸と手を動かしながら浮かべた微笑みは、どうしようもない弟に向ける姉の笑顔のように見えた。凜子には実際に、一夏と同年代の弟が一人いるようだ。弟に対して行き過ぎていると思えるほどの深い愛情の全てが、主となった一夏に注がれている。

「あ、唾液が……」

一夏が胸を舐め回したことで、唾液が擦りつけられたらしい。胸を持ち上げた際に下乳からとろりと唾液が垂れ、それを一夏が開いた口で回収している。そして、唾液を溜めた口をぱくぱくと開閉させている。

「わかった、わかった。今、おっぱいをやるからな？」

そんな一夏の様子を開いた胸の谷間から見て苦笑しながら、凜子はまた胸を沈めた。

「ぢゅるるるるっー」

凜子の下乳を一夏が唾液ごと吸っている一方で、朱乃は一夏の顔が見えなくなっても胸を躍らせることを止めていない。ごっそりと肉竿から拭い落して汚れた胸を元氣よく上下に揺らし、亀頭には口づけを何度も放っている。

「ちゅっ、んちゅっ、ちゅうっ、ぬちゅっ」

口紅をつけていけば、間違いなくチンポはキスマークだらけになっていたことだろう。婚約者の少年のことを忘れるように捧げられるキスは確実に一夏を滾らせている。

目いっぱいのおっぱいを前に、一夏は震え上がる。

「んおっ……!?!」

金玉からくみ上げた精子が尿道を駆け上がる。

まさに出ようとした瞬間、一夏は尻を持ち上げ、自分の意思で朱乃の谷間に竿を根元までねじ込む。ぱあんっ！と肉の接触音を響かせて、朱乃の眼前に突きつけられた亀頭がぷっくりと膨張していき、白濁の塊を吐いた。

「あああああんっ……!」

顔面に叩きつけられるあまりにも濃い粘液に、朱乃が喜声を奏でた。

びゅるるるるっ！ ぶびゅびゅびゅっ！ どびゅびゅーっ！

勢いよく放たれる白濁液が朱乃の綺麗な顔を汚し、黒髪を白濁に染め、乳房の上部を体液で彩る。乳房間溝に精液が溜まり、チンポが乳白色の温泉に浸かっているような状態になっていた。

「あ〜ん……」

朱乃は口を開き、精液のおこぼれに預かろうとしている。

口の中にもべちゃつと精液が墜落し、朱乃は精液を舌に乗せながら目尻を垂らす。精液に触れただけで、立ち昇る臭いを嗅いだだけで、過剰な発情を抱いたらしい。朱乃の口内から涎が滲み出て、精液を溶かすように混ぜっていく。

その光景を、顔の右半分に凜子の胸を乗せていた一夏が眺めていた。

「もつと大量のおっぱいに埋もれてみるのもいいかもな……」

貧乳もいいが、巨乳もいい。たくさんの巨乳に囲まれて、全身で体感する遊び。

それを思いつき、一夏は片手を傍にあつたテーブルに伸ばす。

そこにあつた携帯を手にし、一夏はとある場所に連絡を入れる。

「誰でもいいから巨乳を三名追加で」

『かしまりました、一夏様』

カラオケの延長を告げるような気安さで、そんな要望を伝え、一夏は通話を終える。

「誰が来るかな」

一夏はワクワクしながら凜子の胸に埋もれながら顔を擦りつけ、ぶぢゅぢゅぢゅぢゅううつと音を立てて亀頭を吸い上げる朱乃のお掃除フェラに身を任せる。

「ふふ、一夏くんのおチンポ、綺麗になりましたわ」

朱乃の奉仕によって磨き上げられたチンポは、唾液でテカテカになつていた。

「胸中唾液だらけにできたな。偉いぞ、一夏」

胸を唾液でコーティングし、その成果を凜子から褒められ、頭を撫でられる一夏。

その心地良さに体を弛緩させていると、扉がノックされた。

『失礼します』

「入れ」

女の揃った声に一夏が応答すると、扉が開き、女たちが入ってきた。

新たに現れた女たちは要望通り、一夏の大好きな巨乳だった。

甘い教育

下着を脱いだ二つの大きな尻が横並びに突き出されている。どちらも桃のように綺麗な形をしていて、右側は西洋人らしい色白、左側は日本人らしい微かに黄色味がかった白い肌色。見ているだけで男ならば股間が膨らんでしまうほどのエロさを漂わせている。

「はあっ……うあっ……」

目の前にある尻を眺めながら、千夏は床の座布団に正座して剥き出しにした肉棒を右手で掴み、扱いている。尿道から漏れた我慢汁がにゅち、ぐちゅつと広がっていく。むわあと辺りに雄の濃い臭いが広がっていくことで、触発されたように雌二匹が突き出した尻を下げ始めた。

にゅぷんっ！　ぬちゅちゅつ！

右側の西洋人、セシリアのデカ尻が揺れ、ベッドに置かれていた極太デイルドの先端が膣穴に呑み込まれていく。デイルドは白い肌に映えるような黒色だ。人間の男根にはないイボがデイルドの表面にビツシリ備わっていて、挿入した女の膣壁を刺激する。

ぐつちゅつ！　ぐぶぶぶうっ！

左側の日本人、箒のデカ尻も高さを低くしていき、セシリアとお揃いのイボ付き黒チンポデイルドをおマンコでぐっぽりと啜っていく。

ここは、居間の近くにある部屋だ。共用で使う目的の部屋であるため、私物は少ないが、大きなベッドがある。千夏は、ベッドで四つん這いになっているセシリアと箒の尻が揺れ動く様子を、触ることなく眺めているのだった。

「おっ……ほおっ……んふっ……」

「っ……んうっ……お、おおっ……」

二十代半ばの美女が、息子として可愛がっている千夏の前で淫声をこぼし、本格的に騎乗位の練習を始めた。ぬぷんっ！　ぐっぽおっ！　三往復ほどで早くも愛液に濡れたデイルドが、休みなく二人のおマンコに食われていく。

ぐぷっ！　ぬぷっ！　ぢゅぶっ！

「千夏……」

「ああ、正解です。素晴らしいですね！」

騎乗位ピストンで千夏を煽りながら、世間に知られれば大問題な教育問題を千夏に出題する二人。千夏はもう我慢の限界だった。二人が言う身分の低い雌に挑発されているこの状況は、二人の発言内容と全く一致していない。

いったいどちらが正しいのか。

教育の中で、千夏は悩み、答えを導きだそうとする。

だが、そのヒントを与えてくれたのは、その二匹の雌だった。

「では、最後の問題ですわ。目の前に、おつきなお尻をフリフリ振って、デイルドでおマンコからラブジュースを搾り出している雌が仮に存在しているとします。雄であるあなたは、その下等な雌の言いつけを守って、セズリを続け、ラブジュースを溜めるハートの器に精液をどびゅどびゅと注ぎ入れますか？」

「それとも、雌のこの行動は、逞しい雄から乱暴にレイプされるのを求めていると考え、襲い掛かるか？ 二択問題だ。これは先ほどとは違って、明確にどちらが正解ということもない。心理テストのようなものだな。さあ、千夏はどちらを？」

「う、うううっ……！」

ブチッ、と千夏の中で堪忍袋の緒が切れた。

立ち上がって、ちょうど尻を上げていた箒のおマンコから邪魔なデイルドを取り外す。千夏の素早い行動に目を瞠っていた箒の見える前で、腰を大きく引き、デイルドが抜けて大きく口を開けたままの膣穴目掛けて、全力のチンポ突きを放った。

「おっ、ほおおおおっ……!?!」

メリメリッと子宮口に龟头がめり込み、箒のチンポケースに齡九歳のチンポが完全収納される。一瞬にして絶頂した箒がイキ声を高らかに上げ、膣ヒダビツシリのチンポ抜き穴がむぎゆぎゆつと肉棒を掴み、締め上げてくる。

「あああっ!?!」

千夏もまた箒に負けない咆哮を上げ、思い切り振り上げた手の平

を、箒の尻に叩きつけた。

染みも傷もない尻に平手が炸裂し、綺麗な尻たぶに紅葉が咲く。

「んはあああつ……!」

箒が尻をブルブル震わせ、合体中の千夏にも振動が伝わってくる。それがまた煽られているように感じた千夏は、箒の尻を両手で掴むと、そのままマンコの掘削を始めた。

「おおつ……! んおつ……! おつ……! んあ……! ああつ……!」

ベッドで四つん這いになったまま前を向いて俯き、箒は千夏を受け入れている。

「むう。箒さんに先を越されてしまいましたわっ」

頬を膨らませて不満そうなセシリア。だが、セシリアの魅力と煽りが足らなかったわけではない。マンコからデイルドを取り出せるのはどちらが速いかを千夏は一瞬のうちに考え、ちょうど尻を持ち上げていた箒が選ばれただけに過ぎなかった。

天運に恵まれた箒は解けた長い黒髪を揺らし、千夏の受け皿として歓喜に震える。

「あつ……ふつ……ううつ……!」

千夏は真っ赤な顔で、黙々と箒のマンコにチンポをドッキングさせ、腰を引き戻し、またすぐ子宮口に亀頭を叩き込む。突くたびに全身を震わせ、小さなお尻をきゅつと引き締め、腰を据えた攻撃を放つ。

「あああつ……! ああんつ……! あつ……! あつ……! はああつ……!」

猛攻という言葉が相応しい畳みかけに、箒は上体を両腕で支えるようにうつ伏せていた。それでも尻の位置は千夏が犯しやすいように固定したままだ。

「ああつ……! はあつ……! んんうつ……! あつ、あつ、あつ……!」

細い腰を振って箒の尻に股間を叩きつけていた千夏が、急激に速度を上げた。喘ぎも加速し、表情から余裕がなくなっていく。それを声音から察したらしい箒が俯いたまま口角を吊り上げ、膣穴でぎゅ

ううつと抱擁した。

「うああっ……!?!」

直後、千夏は膣の最奥にて射精を開始した。

びゆるるうつ！ どびゆるるっ！ どぶうつ！ どぶうつ！ ござおっ！

箒にマンコに締め上げられ、精液を搾取される千夏。

自分から意図的に精液を搾ったはずなのに、子宮にザーメンビームを食らってイキ顔を晒す箒。あまりの勢いの強さで一瞬にして子宮が白濁に溺れ、その熱が箒を蝕んで強制絶頂へと至らしめたようだ。

注ぐ側、浴びる側。双方が震え上がる横で、セシリアは独自の行動に出ている。

「あああつ、んふつ、あああん、このデイルドでも十分気持ち良いのですが、やはり雄の生チンポが一番ですわねっ。どこかにいないかしら。私のおマンコを隙間なく埋め尽くし、従えてくれる凶悪おチンポ様はっ」

ベッドの上でしゃがみ、むっちむちの太ももを左右に開くセシリア。品よく女体を隠していたワンピースタイプの楚々とした衣服を脱ぎ、ブラジャーを外し、ぎっしり実の詰まった生乳をぶるんっ、ぶるんっと下品に揺らしながら腰を上げ下げしている。

両手を後頭部に当て綺麗な白い脇を見せ、スクワットをしているようにデイルドを膣でしゃぶり尽くす。耳につけた青いチンポ型のイヤークラスを激しく揺らし、「おチンポ様、どこかしら？ おチンポ様あつ」と呼びかけている。

千夏のチンポは激怒した。

この媚び方はあまりにも魅力的すぎる。ここにもし、他の男がいれば三日三晩はセシリアをレイプしまくるだろう。男が複数人いれば、交代で輪姦し続け、数週間は種付けセックスのために監禁されるだろう。

そんなことはあつてはならない。この雌は必ず自分が食うべきだと焦り、千夏は箒の膣から肉棒を取り出した。

「んあつ……!?!」

ぬぼんと肉棒が抜け出て、箒の膣穴が一時的に開きっぱなしになる。それでも子宮に仕込まれた精液は流れ出てくることはない。子宮口が特別粘っこい精液によつて塞がれているためである。

箒の愛液と千夏自身の精液。両方で濡れた自慢の肉棒を携え、千夏はセシリアに迫る。

「はああっ！ 雄っ。わた、くしを、満たしてくれる雄うっ！」

求め続けるセシリアの目は、近づいてくる千夏を正面に捉え続けている。ぬぷんっ！ ぢゅっぷんっ！ とデイルドでマン汁を掻き出す作業に没頭しながら、ハートのガラス容器にたっぷりと蜜を流し入られていく。

その意味のあるかわからない作業は、千夏によつて中断させられた。

千夏がセシリアを押し倒し、デイルドを膣から引きずり出し、色白おっぱいの谷間に顔を埋めて抱き着く。ここままで約三秒の早業。その直後には、千夏が尻を大きく後方に引き、勢いをつけた種付けプレスの初撃を、西洋人フアックホールに繰り出した。

「っおおおっ！？」

クリーンヒット。千夏はビクンツと跳ねたセシリアを上から抱き着いてベッドに押しつける。そして、左右から頭を圧迫してくる乳圧に埋もれて谷間に顔を擦りつけながら、香水と汗の混ざった股間に毒すぎる雌の芳香を嗅ぐ。

ビキッ！ ビキビキイッ！ と怒張を増した肉棒で、セシリアを犯し始めた。

「おっ……！ んおおっ……！ 腰の振り方、すっごおっ！ あああっ、おチンポがっ、鉄槌のように、おおっ、赤ちゃんのお部屋を叩いてええっ……！ あっひいっ！ んあああっ、に、逃げられませんかっ！ なんて強い雄なのでしょうっ。んっ、ああああっ……！」

逃げられないと言いながら、セシリアの細長い手足は千夏の小柄な体を抱き締めている。横で枕に頭を預けて荒い呼吸を繰り返していた箒が、ジト目でセシリアを見つめていたが、セシリアはパイと視線を逸らして気にせず喘ぐ。

「ふうっ……！　ふうっ……！　おっ……！　おおっ……！」

千夏はセシリアのおっぱい枕から抜け出せず、甘い香りをこれでもかと嗅ぐ。

その中で、千夏は学ぶ。

女が良い匂いを放つのは、男を誘うためだ。

女が美しいのは、男の興奮を煽つて子種をたっぷり出せるようにするためだ。

女が生理や妊娠、出産などで苦しむのは、子供を産むためだ。

男と女。どちらも互いの存在が不可欠だが、女の方が男のために生きてるように思えた。

それはつまり、生まれながらにして生物としての優劣が存在するということ。雄が雌よりも優れていて、その雄の子をできるだけ多く生むために複数の母胎を必要とされる状況を想定し、作られたのではないか。

今日だけで受けた男尊女卑の教育が、千夏の幼い脳にそんな推測を生み出した。

この推測を口にしても、否定する者は誰もいないだろう。

「あっ……あっ……ああっ……！　んうっ……ふうっ……！　また、大きくっ……！?　お、んっ……！　子宮に響き続けてえっ……！」

んおっ……！　いいっ……！　お、おマンコぶっ叩かれてえっ……！　おっ、おおっ、イツクウウウ……!?”

度重なるチンポ突きを受けたとはいえ、早くも陥落したクソ雑魚おマンコホルダーのセシリア。しかし、彼女もただ無暗に絶頂したわけではない。一人で逝くか、とばかりに千夏を抱き締める両手足に力を込め、体を絡め取る。

「ふうううっ……！　ふううううっ……！　う、あ、あああっ……！」

大人の力で絡みつかれ、ズッポンと奥まで押し込まれた肉棒は、膣肉によって拘束される。体の内外を使っただいしゅきホールド。攻め続けていた千夏であったが、その締めつけを受けてはどうすることもできず、セシリアの道連れにされる。

ぶびゅるるるっ！　びゅるるるうっ！　どびゅびゅっ！　ど

びゅっ！ どつくっ！

脈打つ肉棒。愛液で潤いながらも、精液を求めていた膣が震えながら精液を受け止める。胎は一瞬で満たされ、赤ちゃん汁貯蔵タンクに変わるが、それでも膣肉は拘束を緩めず、千夏から精子を搾り出す。

極上の雌。複数人いるうちのママの一人。

千夏の脳は、雌を使う悦びと、ママに愛される幸せに浸された。体の痙攣が抑えきれないほど刺激的で、体から力が抜けきってしまふほど甘い。

「セシリア、横になってくれ」

「ん、あ、わ、わかりましたわあ……」

箒の呼びかけに蕩けた声で応じ、セシリアは千夏を抱いたまま体を横向きにする。

何をするのか。思考の片隅で思っていた千夏だったが、すぐにわかった。

「っ……っ！」

おっぱいに埋もれながら呻く千夏。

その背中に、箒が抱き着いてきたからだ。

後頭部に感じるのは生乳の感触。箒は服を着ていたはずだが、わぎわぎ脱いだようだ。

千夏の体に両手を回し、箒が密着してくる。

前方の西洋おっぱい。後方の日本おっぱい。

女体の甘い香りと、柔らかすぎる乳圧。二人が発する体の熱が組み合わさって、間にサンドイッチされた千夏の脳と体を溶かしていく。このまま、何も考えずに、こうしていたい。そんな風に思えて、余計な思考もどんどん抜け落ちていく。

「はあっ……っ！ はあっ……っ！ 千夏可愛いなあ。僕も後でたあつぶり可愛がってあげないと。まあ、逆に可愛がられちゃうかもしれないけど」

「目が怖いぞ、シャルロット」

「可愛い……。騎乗位で、延々に搾ってあげたい……」

「まあ、簪ちゃん、それは名案ね」

「アンタ達……。今のあたしたちは一応、良い大人なんだから、ちゃんと節度は守りなさいよね？」

廊下の方から聞こえてくる話し声を聞き流しながら、千夏は蕩けるような時間を味わった。

謎

食卓に並べられたのは、白米と焼き魚、だし巻き卵に、みそ汁、煮物など。日本人の模範のような朝食だ。どれも出来上がったばかりであり、白米やみそ汁からは湯気が立っている。漬物などと一緒に小皿に添えられた梅干しを見て、ことさら口内に唾液が分泌されてしまうのだが、千夏の興味はどちらかと言えば、食卓を囲む母たちに向けられていた。

各々食事を進めつつ、仲良く会話をしている母たち。その誰もが目が離せないほどの美しきで、千夏のまだ幼い目を肥やす。この母たちを見た後では、並大抵の美女では千夏の気を引くことはできないだろう。

「千夏？ 手が止まってるけど、どうしたの？」

食事の合間にぼうっとしていた千夏に、右側の席に座っていた母、シャルロットが声を掛けてきた。食事時とは思えないほどに千夏との距離を詰め、身を寄せている。肩などはもう触れ合いそうだ。

「ご飯、一人じゃ食べられない？ それじゃ、僕が食べさせてあげるね？」

「そういうわけじゃ——あむっ……!?!」

食べられないとは一言も言っていないのだが、シャルロットは箸でだし巻き卵を掴むと、千夏の口に押し込んだ。千夏はそれを口で受け止め、驚いてぱちぱちと目を瞬きさせながらシャルロットを見る。

「んん、可愛いなあ、千夏」

受け取っただし巻き卵を咀嚼し、とろけるような触感と広がるちようどいい甘みを感じていると、シャルロットが頬を緩めた。そうして浮かべられた笑顔は、おそらくは一瞬で世の中にいる男の大半を陥落させてしまう魅力があるのだろう。千夏もまた、肩の力を緩ませ、その微笑みに見惚れてしまう。

と、そんなとき、横から声が掛けられた。

「シャルロット。食事中だぞ、構い過ぎだ」

左隣の席に座っていたラウラだ。

「ええ、もうちよつとだけ、いいでしょ？」

「駄目だ」

「むく……」

ラウラに窘められ、シャルロットはちよつと不満そうだが、逆らうことはなかった。

ラウラは少し厳しい性格なのだろうか。シャルロットから解放された千夏は、食事の手を再開させながら、横目でちらりとラウラの横顔を窺う。

シャルロットと並び立つと映えるだろう銀色の髪。冷たさを感じさせるような白く美しい顔の中でも、特に目を惹くのはやはり色の違う左右の瞳だろう。それぞれ個性がある母たちだが、神秘的という表現が一番似合うのがラウラだった。

「む……？」

こつそりと顔色を窺っていたのがばれてしまったようだ。ラウラとぼつちり目が合ってしまう。慌てて視線を逸らそうとも考えたが、それよりも正面から綺麗な顔をもっと見ていたいという欲求に負けて、視線を重ね合わせてしまう。

そうしていると、ラウラの頬が薄つすらと赤みを宿し始めた。

「……ふむ」

何か考える素振りを見せたかと思うと、ラウラは先のシャルロットに倣って、だし巻き卵を箸で摘まみ、千夏の口元へと運んでくる。

「え……」

たつた今、シャルロットを窘めた者の行動とは思えず、千夏は戸惑っていた。

「口を開けろ」

「でも……」

「遠慮するな」

別に遠慮しているわけではないのだが。千夏はそう考えたが、ラウラは止まらない。仕方なく口を開くと、そこへオカズを入れられ、じーつとラウラが見つめてくる前で出し巻き卵を味わっていく。

もぐもぐと閉じた口を動かしていると、ラウラが手を伸ばし、千夏の頬に手を添えてきた。

「今は鈴の要素が強いようだな……。では、嫁の顔立ちに、私の要素を掛け合わせて……」

何やらぶつぶつと呟いた直後のことだった。

「っ……!?!」

千夏の髪色が、鈴音と同じ茶色から銀色へと変わっていく。視界に入っていた前髪の色の変化からそれを察した千夏は、噛んでいたオカズを飲み下すと、色が変わった髪を確かめるように頭を抱え、動揺しながらもラウラを見た。

「ま、また、変わった……」

「……これは、いいな」

腕を組み、満足げに頷くラウラ。白いブラウスにて大きな膨らみ成形作る乳房が腕に持ち上げられて存在感を主張しているが、さすがの千夏も今はそれに着目している余裕はなかった。

鏡がないために千夏自身はまだ確認できていなかったが、千夏の瞳の色は右が赤色、左が金色に変わっていた。ラウラの言葉から、瞳の色まで変えられたことを自覚した千夏は、いよいよ訳がわからなくなっていた。

記憶を失っているとはいえ、人の容姿が簡単に変えられるものではないことくらい理解している。それを、さっきは鈴音が、今はラウラが一瞬でやってのけた。

いったい何が起こっているのだろうか。

「ああっ、ラウラっ！ 千夏の容姿変えてる！」

千夏とラウラのやり取りに気がついたシャルロットが、千夏に抱き着いてきた。むにゅんつと胸が頭に触れる。シャルロットのほうに向き直れば、顔が胸の谷間に埋もれてさぞ気持ちのいい体験ができるに違いない。

「銀髪の千夏かあ。……あれ？ ラウラの左目の色は遺伝じゃなくて、後天的なものでしょ？ まあでも、可愛いからいつか。顔立ちは幼い一夏で、いい感じにラウラと混ざってるね。皆もいいと思わない

？」

千夏はシャルロットに抱き着かれたまま、正面を向けさせられた。

「ああ、よく似合っているぞ、千夏」

「その姿で犯してもらいたいのですわ」

「一夏とラウラの子供って感じ？　すごく素敵じゃない」

「千夏、こつち向いて……。ああ、今すぐ食べてあげたい……」

「簪ちゃん。後で一緒に千夏を徹底的に可愛がってあげましょう？」

「程々にね？　簪ちゃん、楯無ちゃん」

先ほどまで世間話に興じていた箒たちも、話をやめて千夏を観察していた。その表情はとても穏やかなもので、皆が千夏の変化を快く受け入れていることがわかった。

ただ一人、千夏だけが状況を飲み込めず、置いていかれている。

「ねえ、千夏……」

思考が停滞する中、千夏の耳元でシャルロットが囁く。

「朝ご飯が終わったら、今の姿で、今度は僕とラウラと三人でセックスしようか……。避妊なしの、赤ちゃんができちゃうかもしれない、生ハメ本気交尾……。箒たちにしたみたいに、千夏の子供精子、どぴゅぴゅって、ママたちの赤ちゃん袋に詰め込んでほしいんだ……。千夏も、自分を産んだママたちのことを、自分の子種で妊娠させてみたいよね……。？」

それは千夏の脳を惑わせる。そうしても良いのだと思いつまませる。

しかし、千夏はただ欲望に溺れて思考を停滞させるのではなく、この不可解な状況においても考えることをやめず、自分なりの答えを導き出そうとしていた。

当然のことだが、千夏を産んだのは一人だけのはずだ。しかし、この場にいる母親は八人。箒、セシリア、鈴音、シャルロット、ラウラ、簪、楯無、雅。全員が千夏のママを主張しているのは、明らかな矛盾だ。

一人以外、全員が嘘をついていることになる。

あるいは全員の発言が嘘なのかもしれない。

わかったことは、千夏の体も、生まれた環境も特殊なのだというこ

と。

それに、現時点で気掛かりに感じている点も考慮に入れると、一つの仮説が生まれた。

それは――。

「千夏」

一言、正面の席に座っていた箸が声を掛けてきた。

たったそれだけのことで、千夏の思考が解けてしまった。自分が何を考えていて、どう結論付けようとしていたのか。わからなくなつて、それに恐怖を感じることもなく、ただ箸の言葉に耳を傾けてしまふ。

「考え事ばかりしていたら、食事が冷めてしまうぞ？」

「う、うん……」

喉に魚の小骨が刺さつたような違和感はある。だけど、その感覚も時間の経過によつてだんだんと薄らいでいつて、すぐに千夏は何事もなかつたかのように母たちと共に食事を再開した。

その様子を、箸はただ静かに見守っていた。

成長

「えいつ」

という可愛い掛け声とともに、千夏はベッドに押し倒された。仰向けになった千夏が身を起こそうとするよりも先に、股間に重みが押し掛かる。そこには千夏を押し倒した女、シャルロットが馬乗りになっていた。

大人と子供の体格差故に、シャルロットから逃れるのは容易ではない。どうしたものかと困惑する千夏だったが、シャルロットの柔らかい尻に敷かれた半ズボンの内側で、肉棒はこの先の展開を期待していた。

朝食の後、千夏はシャルロットによつて空き部屋に連れ込まれていた。先ほど、箒とセシリアに教育を受けた部屋だ。有無を言わせぬ勢いで返事をする間もなかった。混乱が勝る状況のままベッドを背にする体勢となり、その千夏の上でシャルロットは着実に準備を進めている。

着ていた上着やスカートを脱いでいくシャルロット。動きに躊躇いがない。

「暴走しすぎだぞ、シャルロット」

後から部屋に入ってきたラウラが窘めるように言っているが、こちらに至つては既に服を脱ぎ終えて下着姿になっている。色が白く、抜群のプロポーシオンを誇る女体を妖しく飾り立てる、レース生地の花柄が描かれた黒いランジェリー。同じデザインのカーターベルトとセットになったそれは、男の情欲を盛り上げる魅力を備えていた。

それを見てドキドキしている千夏の前で、シャルロットも下着姿を晒す。

「じゃーん。似合う？ 千夏」

シャルロットの下着はラウラとお揃いの意匠だった。こちらの色は紫色。まるでシャルロットに着られるために作られたのかと思えるほどに、とても良く似合っていた。この格好で迫られれば、どれほど精力の乏しい男であっても、毎晩休まずに種付け交尾をしてしまう

に違いない。

そう感じさせる美女が二人。

「似合ってる……」

「私はどうだ？」

遅れてベッドに上がってきたラウラが、千夏のすぐ傍に座って右横から見下ろしてくる。彼女の手がそつと千夏の右手を握ると、迷わず自身の胸元へと誘導した。

「うん……すぐく、似合って……うあ……」

千夏が答えると、ラウラは千夏の手を自分の胸に押しつけた。目を睨るほど豊満な乳房を薄いランジェリーの上から揉み潰していく感覚。むぎゆりと乳房に指が沈んで、心臓の鼓動と体温が手の平に広がった。

「僕のおっぱいも触って？」

左手をシャルロットに握られ、ラウラと同じように胸に宛がわれる。こちらもたつぷりと肉が詰まっついていて、こうして触って握っているだけで時間を忘れてしまいそうだ。

千夏は夢中になって二人の胸を揉んだ。果物を根元から掴み取るような遠慮のなきで。しかし、それは千夏の無意識による愛撫であり、本人の意識はまだこの状況とこれから起こることに対して心の準備ができていなかった。

しかし、朝から母たちと立て続けに交わってきた千夏には、それは時間の問題だった。

「あ……んんっ……いいよ……もつと揉み潰して……」

シャルロットが感じ入った様子で言いながら、腰を浮かせた。何をするのかと千夏が目端で捉えていると、シャルロットによってズボンを下着ごと下ろされ、中に収まっていたチンポが解放された。

直立不動となつて硬く聳え立った肉棒へと、千夏の太股に跨ったシャルロットが両手の人差し指を這わせる。裏筋をくすぐるような触り方に竿が力み、表面の血管がビキビキと浮かび上がってくる。

「おチンポの裏筋、こうやって指ですりすりされると気持ちいいでしょ？ あはっ、ビンビンになった。真っ直ぐ伸びて、おチンポの亀

さんが僕のおへそまで届いてるよ？ 挿入したら、子宮ボッコボコにされちゃうね」

解説しながら肉棒の隅々をシャルロットの指先が這い動いていく。亀頭を撫で、裏筋を擦り、竿を両側から突く。ふにと金玉に指を沈ませて解すように動かすと、ますます怒張を強めた雄棒が自然と揺れ動き、ぺちんとシャルロットのへそに叩きつけられた。

「ママのこと、犯したいの……？」

シャルロットが目を細め、どこか愉しげな口調で尋ねてくる。

そこへ、ラウラも便乗するように問いを重ねてきた。

「どうなんだ？ 千夏。お前は、自分の母親であるシャルロットと、私のことを雌として認識し、欲情しているのか？ この長くて太い、一夏そつくりの極太マラ棒で私たちの膣道を占有し、陰囊に詰まった精子を胎に浴びせたいと思うか？」

ラウラの手が千夏の右手の甲を包み、乳揉みを強要してくる。既にギリギリと締め上げるような揉み方をしているのにも関わらず、より雄らしく力強い圧迫を求めて、千夏の手の平を押し込んでいる。

「俺、は……」

千夏は迷いを見せる。一方で、肉体は既に二人の魅力に惹かれてしまっているようで、両手で乳房を締めつけてしまう。勃起が治まらない肉棒は尿道から我慢汗を垂らし始め、竿に伝わせて挿入の準備を始めている。

朝から母たちによって歪んだ教育を受けたことで、千夏は順調に悪い雄へと成長しているようだ。今も脳内に植えつけられた常識、強き雄が雌を組伏せ、欲望のままに食らうべきという考えが浮かび、千夏を優越感に浸らせる。

「雌はね、一夏と千夏に犯されるために存在するんだよ？ 千夏のママである僕たちもそれは同じ。この世界でもっとも尊い雄である千夏が望めば、僕たちは何度だって股を開いちゃうんだから」

カウパーが溢れ出る尿道を、シャルロットの細い指先がぬちゆりと撫でる。それを亀頭全体に塗り広げられて、ほんの数秒でテカテカと光る。それでも使い切れない量の汁が竿に次々と流れ落ちて、チンポ

は体液で包みこまれた。

愛しい我が子を抱き締めるように、シャルロットが我慢汁に濡れた肉棒を両手で包む。よしよしと手で撫でられ、シャルロットの下腹に竿を密着させたままビクリと震える。

「千夏は好きだけ僕たちとハメパコして、母親だからって気にしないで、自分の子供を孕ませていいんだよ。織斑家の家系図がぐっちゃぐちゃになるくらい、一夏と一緒に卑しい雌共に赤ちゃん産ませてみたくなあい？」

「さあ、千夏。お前の口からはつきりと言うんだ。我々雌を、お前はどう使いたい？ したいことがあれば命令してくれ。愛しい我が子である以前に、生物として格の違う選ばれし存在である千夏に、私たちは喜んで従おう」

これ以上、自分の気持ちを偽ることなどできそうになかった。

「んうっ……」

「ああんっ……」

母二人、いや、雌二人の乳房を思い切り握りしめた千夏は、自分の望みを口にする。

「二人を、ママたちを、犯したい……」

普通であれば、息子が母親に言うはずのない言葉。まともな親であれば拒絶するはずの要望だが、それこそ望むところであった二人にとっては喜ぶ以外の反応はない。千夏の遠慮のない乳揉みを受けながらも二人は蠱惑的に微笑んだ。

「わかった。私たちの体を存分に使うといい」

「ちよつと待っててね。あ、できれば後ろ向いてくれる？」

そう言っつてシャルロットたちが部屋のクローゼットへと歩いていく。

いったい何をするのか。疑問を抱きながら、千夏は二人に背を向けて正座をする。

「お待たせ。こっち向いていいよ」

数分が経過した頃、二人の準備ができたようだ。

振り向いた千夏は一瞬、ベッドの傍にいるはずの二人の姿を失っ

た。だが、すぐにその居場所に気づき、そして、二人の体勢を目の当たりにして絶句する。

二人は、床で土下座をしていた。着ていたランジェリーを横に置き、全裸で。

額が床に触れるほどの深い全裸土下座のままで黙し、体勢を維持する二人はどうかやら首輪を嵌めているようで、そこから伸びる鎖がベッドの端に二本乗っていた。玩具などではない。分厚く、見るだけで重みを感じさせる本物の鎖だ。

「織斑千夏様。織斑シャルロット、織斑ラウラ両名、準備ができました」

顔をうつ伏せたまま、ラウラが敬語で発言する。

「旦那様である織斑一夏様によって選別され、織斑家の家系図拡大用の母胎にさせていただいた僕たちを、どうぞお気の済むまでご利用ください。一夏様の血を継いだそのご立派なおチンポ様から遺伝子を受け取って、この身に新しい生命を宿してみせます」

シャルロットが後に続いて、自分たちの存在意義を伝えてくる。間違っている。そう思うだけの常識はあるはずなのに、千夏は何も言えなかった。

頭がぼうつとする。チンポがいきり立って熱を発している。

身の底から湧いてくる興奮に後押しされて、無言のままベッドの端に向かった。

二人の首輪から伸びる鎖。それを、両手で強く掴んでしまった。

「俺は……」

一瞬理性が訪れるが、今さら遅かった。

千夏は両手を内側に手繰り寄せる。弛んでいた鎖がジャラリと鳴って、ピンと張り詰める。そこからさらに内側に引き寄せると、鎖に繋がれた二人は首輪を引っ張られ、それが合図となって顔を上げた。

「鎖を引いていただき、ありがとうございます」

「その素敵なおチンポ様で、僕たちのことハメ潰してくださいっ」

床に三つ指を突き、身を起こす勢いでデカパイをたぶんと揺らした

銀髪と金髪の美女。自分の母親を名乗る女たちであることも忘れ、千夏は二人をベッドに上げようと、そのまま力強く鎖を引っ張った。

覚醒

千夏は鎖を手繰り寄せ、その先に繋がる首輪を嵌めたシャルロットとラウラをベッドに引き上げた。千夏だけの腕力では大人の美女二人を持ち上げられないが、服従の意を示す二人は進んで千夏のいる寝床に上がってきた。

そこで、二人の母が仰向けになる。

肌の色が白く、髪色は金と銀。外国の血を明確に感じさせる美しい面立ちと肉感的な二人の女体は、女に困らない男であろうとも、我を忘れて貪りたくなるほどだろう。こうして対面しているだけで、千夏はチンポの苛立ちが抑えられず、早く挿入しようと焦る。

千夏がまず食らおうとしたのは、ラウラだった。

「ん、私だな」

鎖を手にしたまま膝歩きで近づいてきた千夏を、ラウラは微笑を湛えながら開いた両足の間に迎え入れる。千夏の容姿が今、ラウラと同じ銀髪とオッドアイになっているため、見た目から強い血縁関係を感じさせる。千夏自身もそれを実感しながら、腰を前に動かした。

ビキツと血管を浮かばせ、槍を想起させる剛直がラウラの淫裂をゆつくりと掻き分け、膣穴に寄せられた。

「むう。最初はラウラか。まあ、いいけどね」

初手で選ばれなかったシャルロットが不満げに口を尖らせていたが、すぐに割り切ったようだ。ごろんと寝返りを打ってラウラのすぐ横に移動し、これから挿入しようという千夏の視界の左端を華やかな容姿で彩った。

「それじゃあ、千夏。ラウラの中に入ってみようか」

美しすぎる母二人に見守られながら、千夏はラウラと繋がり始めた。

「っ、あああつ……」

丸々と膨張した龟头が膣穴に沈んでいく。千夏は声を漏らしながら、小さな尻を震わせる。

「あつ、んああつ……」

ピッタリと纏わりついてくる膣肉。それに揉まれて早速強烈な快楽を浴びされているが、千夏の侵攻は止まらない。すっかり雌を食うことにドハマリした千夏は、もつと気持ち良くなろうと自分の分身を母の中に収まっていく。

ズブズブと膣肉を掻き分けて、千夏は最奥に到着する。

「んお、おっ……」

今度声を上げたのはラウラだった。息子の息子で膣穴を占拠され、亀頭で子宮口を擦られている。表情に喜悦を滲ませ、すぐ隣にいるシャルロットと喜びを共有するように片方の手と手をぎゅつと繋ぐ。

「千夏。ラウラのおマンコを、思いつきりハメ倒してあげて」

隣のラウラには筒抜けの、シャルロットの囁き声。それは千夏のチンポによく響き、要望を応えてあげようという気持ちになってくる。特に逆らう理由もなく、千夏はシャルロットの甘言に乗せられた。

片手で二本の鎖を握り締めたまま、もう片方の手でラウラの乳房に掴みかかる。ふつくらと膨らんだ色白い乳房と先端の桜色の乳首を手の平で思いつきり揉み潰し、蹂躪する快楽に酔いしれる。

そうして、千夏は初動から最速の腰振りを始めた。

まだ膣が肉棒に馴染んでいない段階で、遠慮なく内側を掻き乱してくる巨大な一物。人妻であろうと耐えられるものではない。肉と肉が擦れるたびにラウラにも、千夏にも狂おしいほどの悦楽をもたらす。

「おおおっ……!?!」

ラウラの美貌が一瞬にして快楽で蕩け、腰が微かに浮く。しかし、開かれた股の中心に千夏が股間を叩きつけ、がりがりつとマンコ肉をエラで引っ掻くだけで、力を奪われたようにラウラはベッドに尻を落ち着ける。

自分が少し本気を出しただけで、雌はこんなにも容易くよがる。雑魚。いけないことだとわかりながらも、千夏はそんな感想を抱いた。

雌は脆弱。一瞬躊躇いを抱いたが、千夏はそう思った。

雌は雄よりも格段に劣っている。その差は絶望的なもので、雌が幾

ら頑張ろうと雄には敵わない。生まれながらの価値が、品質が低い。そんな雌が高性能高品質の雄に従うのは当然であり、それは親子関係であつても例外ではない。

服従しろっ。

千夏は心の中で叫び、下衆な欲を象つた微笑を見せた。

「っ、ああっ……」

「あああつ、ん、おおっ、おおおっ……!?!」

チンポをブチ込めば、ラウラが髪を振り乱して動揺する。それを、ラウラと片手を繋いだシャルロットが恍惚とした表情で見守つていた。じーつと向けられる眼差しによつてチンポがビクンツと跳ね、宿主である千夏を唆す。

「き、キスしろ、雌……」

声が震えていたが、その台詞は確かに千夏からシャルロットに向けて紡がれたものだ。

息子でありながら、最強の雄の一人である千夏。その命令にシャルロットが逆らう様子はなかった。むしろ、子供の成長を喜ぶ母のように感激し、慌てて身を起こして膝立ちになると、千夏の傍に歩み寄つた。

「ん、あゝ……」

千夏は口を開き、唾液に濡れた舌をだらんと垂らす。

「ふふっ、あああゝ、ぐちゆうっ、ぬちやあああつ、はああつ、ぐちゆうっ……」

そこへシャルロットが舌を重ね、這わせていく。互いの唾液が触れて、擦れて、混ざる水音。シャルロットの温かい吐息音と一緒に鼓膜を震わせ、思つた通りの高揚を得られた千夏が腰を振りたくる。

「おおおおっ、お、んおおおおおっ……!?!」

ギシギシと鳴り響くベッドの音。それを掻き消すラウラの被支配者に相応しい情けない喘ぎ。

「む、ちゆうっ、くちゆうっ、ぢゆるっ、ぐちゆうっ、んんう」

千夏の舌を隅々まで撫で擦り、母と息子の特製唾液ブレンドを量産するシャルロット。

最高の時間。優越感と充足感。千夏は膝立ちになったまま華奢な体でピンと背筋を伸ばす。気が緩めば腰砕けになってしまいそうな快楽に、千夏の顔はもうとつくに破顔していた。いくら抑えてもニヤニヤと口元が緩み、眼差しには極上の美女でありながら下等な雌を見下す感情が籠っている。

俺の女。

何をしても許される。

徹底的にハメ潰す。

絶世の美女である母たちの教育によって、千夏は誤った成長を遂げている。だが、千夏はそれに抗うだけの理性を既に持っていないかった。無垢な脳内は母たちとの刺激的すぎる思い出によって穢された。微かに抱く違和感を塗り替えるどろどろとした悦楽が千夏を支配し、立派な雄に仕立てている。

「はあ、んあ、ぢゆるっ、ぐぢゆっ、もっと、舌絡ませろっ」

「うんっ、んあっ、ぐちゆうっ、ぶぢゆるるるっ、ぐちいつ、ぐつちゆっ」

千夏の命令を受け、シャルロットが千夏と舌を深く絡ませる。息子の命令口調でゾクゾクしたらしく、身震いしながら唾液を啜っている。そんなシャルロットの蕩け顔を見て、千夏は盛り上がった感情をラウラに叩きつける。

「おらっ」

「んっ!? お、おおお、おおおおおっ……!」

気合を入れた一撃。それがラウラの平静を研ぎ落とす。

普通の女ならば、繋がっただけで自分の立場を理解させられる凶悪チンポ。それが何度も内側を出入りし、しつこく膣肉に挨拶をされて、雌が耐えられるはずがない。ラウラもまた、シャルロットと同等以上の至福を抱えて震えていた。

「あああ、はああっ、おっ、おっ、おおっ……!」

とろんとしたラウラの瞳。

千夏はラウラと同じ色の目で視線を交わし、ショートヘアだが同じ銀色の髪を揺らす。

そして、シャルロットとディープキスを楽しむ合間に、ラウラに命

令した。

「孕め」

その言葉を起因として、千夏の昂った感情が暴発した。

ガツンツと殴るような勢いで子宮口に龟头をめり込ませ、これ以上進めなくなつたところで、金玉から精子が昇つてくる。下腹に強烈な快楽が生じて千夏は口をだらしなく開きながら、ただ同じ言葉を繰り返す。

「っ……孕めっ……」

どびゅびゅびゅ、びゆるる、どびゅっ、どぶうっ、どぶんっ、どどくどくっ！

「は、孕めえっ……」

眩く千夏の邪魔にならないようにと、シャルロットが口ではなく千夏のぷにぷにの頬をねつとりと舐め上げる。そのざらりとした感触がこそばゆく、続いて耳元で囁かれたシャルロットの熱を帯びた声が鼓膜を犯す。

「次は僕の番だよっ……。僕にも千夏の孕ませ汁、残しておいてね……っ。」

びゆるるる、どびゅどびゅ！

シャルロットの要望とは正反対に、その声によって多めの精液が飛び出していく。

「はっ……あっ……んあああっ……」

それを受け止めるラウラは、まともな言葉を紡ぐことができないまま、千夏の精液を胎に浴びる。既に子宮の壁に精液がこびりつき、どこを見渡しても白濁一色の空間に、次々と新鮮でねばねばぎつとぎつとの子種汁が内包されていく。

ラウラの胎が息子の遺伝子で満たされるまで、時間はさほど掛からなかった。

たっぷりと射精した千夏だったが、所詮まだ一回だ。多めに射精したところで精子はすぐに補充される。続くシャルロットとのセックスには全く支障がなく、それはシャルロットにも見抜かれていた。

「ちゅなっっ」

楽しげな声。横を見ると、シャルロットが千夏から離れた場所にいた。

そこでシャルロットは、しゃがんだまま太股を左右に開いていた。エロ蹲踞の体勢。両手の指は己の秘裂を引つ掛け、陰唇を大きく左右に開いている。そんなことをすれば秘所が丸見えになってしまうのは避けられない。

「このおマンコにもおチンポブチ込んで、僕にも身の程をわからせて？ 雌がどういう生物なのか。千夏がどれだけ有能な雄なのか。一人でちゃんとできるつてところを、シャルロットママに見せてほしいな〜？ できるかな〜？」

両手の指でピンク色の花卉を満開にさせ、膣から透明な蜜を垂らすシャルロット。ねば〜と糸を引いたそれはシートに落ち、染みを作っていく。それでもなお、どろりと垂れ流れる蜜は吸いきれないほど濃く、何層にも重なっていく。

「ほらあ、おマンコくぱくぱあ〜」

陰裂を開いては閉じを繰り返し、息子を誘う淫らすぎる母。

千夏の中の雄が煽られる。ラウラの膣内で怒張を強めていく肉棒を取り出した。

「んあつ……」

亀頭が勢いよく抜けてラウラが小さく鳴く横で、千夏は臨戦態勢に入った。

「シャルロットママのおチンポ挿入口はここだよ〜？ 挿入、できるかな〜？ ああ、でも、千夏の亀頭が大きいから、上手く入らないかもね？ 仮に入っても、おマンコのお肉でうねったチンポ扱き穴を掻き分けて奥まで進める？ 一番奥にある、僕の赤ちゃん製造肉袋の入口に、どっちゆんつておチンポを押しつけられるかな〜？ ママ、心配だな〜」

ひたすら煽りながら、シャルロットはおマンコを両手の指で開帳したまま、腰を微かに前後に揺すっている。清楚で、それでいて官能的な女体を有する金髪美人母にそんなことをされて、千夏は自分の中の獣を抑えられなかった。

プツン、と何かが切れる音。
それを聞いた瞬間、千夏は。